兵庫県文化財調査報告　第284冊

南あわじ市

珉平焼窯跡

広域営農団地農道整備事業南淡路地区に伴う発掘調査報告書Ⅰ

2005年3月
兵庫県教育委員会

兵庫県文化財調査報告　第284冊

珉平焼窯跡

――広域営農団地農道整備事業南淡路地区に伴う発掘調査報告書Ⅰ――

珉平焼　伝世品　色絵花鳥図外黄南京台鉢（個人蔵）

珉平焼　伝世品　色絵金彩秋草図茶碗（個人蔵）

珉平焼　伝世品　柿南京酒瓶・柿南京金彩草花文盃（個人蔵）

珉平焼　伝世品　染付南蛮船図皿（洲本市立淡路文化史料館蔵）

珉平焼　伝世品（淡陶社製）　煎茶器セット（個人蔵）

珉平焼　伝世品（淡陶社製）　ティーカップセット（個人蔵）

珉平焼　伝世品　小判形龍文皿

珉平焼　伝世品　多角形幾何学文襞皿

出土遺物　陶磁器類・タイル類

出土遺物　元型・土型・製品

出土遺物　土型（銘文）

出土遺物　元型・土型・製品

出土遺物　土型（銘文）

出土遺物　タイル・タイル型

出土遺物　タイル・タイル型

出土遺物　タイル・タイル型

例　言

1．本書は、淡路島の南あわじ市北阿万伊賀野（旧、三原郡南淡町伊賀野）に所在する珉平焼窯跡の発掘調査報告書である。旧南淡町は、平成17年１月11日より、三原郡４町（緑町・西淡町・三原町・南淡町）が合併し、新市「南あわじ市」となったが、本文中は旧地名（三原郡南淡町あるいは三原町等）で記載している。但し、報告書抄録の所在地および市町村コードは、南あわじ市に訂正・変更している。

2．発掘調査は、広域営農団地農道整備事業（通称　オニオンロード）南淡路地区に伴うもので、兵庫県淡路県民局地域振興部洲本土地改良事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成15年度に実施したものである。

3．遺跡の測量図の座標値は、平成14年４月１日の測量法改正に伴い、新たな世界測地系に基づく平面直角座標系の数値に補正している。なお、平面直角座標系は第Ⅴ系を使用し、方位は座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海水面（T．P）を基準としている。

4．第１図　広域営農団地農道整備事業南淡路地区　道路路線図は、兵庫県洲本土地改良事務所発行（平成12年３月作成）のパンフレットを、第３図　四国北東部―近畿西部の地形及び活断層は、『洲本地域の地質』を、第５図　淡路島およびその周辺は、国土地理院発行の地勢図「京都及大阪」・「和歌山」・「姫路」・「徳島」をそれぞれ一部改良し使用した。

5．本書に使用した遺跡に関係する写真のうち、航空写真は、注釈したもの（撮影年月日を記入）についてはダントー株式会社より借用したものであるが、その他の写真については、空中写真測量を委託したアジア航測株式会社が撮影したものである。

6．遺物の写真は、挿図中に実測図と併せた遺物写真（第40図～第84図）および第６章の陶器あるいはタイルの各写真（写真13～17・19）、出土タイルカタログ（第89図～第103図）は株式会社文化財サービスが、その他の遺物写真については、株式会社タニグチ・フォトが撮影したものである。
　また、写真11　『陶器指南』のコウカシ窯解説図は、小野賢一郎編　『陶器全集』　陶器全集刊行會（昭和８年）の「カウカシ窰圖」を、写真12　湖東焼の窯場絵図は、安政２（1885）年の「御陶器場所地面並諸建物御絵図」（個人蔵）をそれぞれ関係機関の了解を得て掲載した。その他の写真については、キャプション等に関係者あるいは出典名を明記した。

7．土層の色調については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版　標準土色帖』2000年版を使用し、遺物の色調については、大日本インキ化学発行のDICカラーガイド『日本の伝統色』第７版およびDICカラーガイド『中国の伝統色』第２版を使用した。

8．本書に掲載した遺物には、通し番号―土型にはK、タイルにはT、金属製品にはMをそれぞれ頭に付して分類―をつけており、遺物番号は、本文・挿図・写真図版ともに統一している。

9．本書の執筆は、本文目次に記した通り、森内秀造・岡田章一・深井明比古・仁尾一人が分担し、編集は池田悦子の補助を得て、仁尾が行った。

10. 出土遺物の胎土および釉薬の分析は、胎土分析についてはダントー株式会社技術研究所の池田健氏に、釉薬の分析については、くらしき作陽大学の北野信彦氏にそれぞれ依頼し、玉稿をいただいた。

11. 本報告にかかる遺物・写真・図面等の資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管している。

12. 発掘調査および整理作業に際して下記の方々にご教示・ご指導をいただきました。記して感謝いたします。(敬称略・順不同)

賀集義治・菊川兼男・能勢敏樹・田中幹也・高津信子・新見紘一・金山重夫・野口早苗・松本典浩
浦上雅史・深田英夫・坂口弘貢・楢崎彰一・仲野泰裕・日下正剛・石神由貴・森村健一・千葉　豊
堀内秀樹・岡　泰正・小谷義男・加村周平・藤原　学・木立雅朗・石井　啓・吉崎一弘・山下峰司
福本浩子・尾崎葉子・宮本　博・谷口　徹・神村光男・高向司郎・古山敏幸・竹多　格・両角まり
加藤英二・高木典利・酒井一光・篠永昌幸・堀込憲二・末石浩志・西村徳二郎・ダントー株式会社

本文目次

第１章　調査の経緯と体制

第１節　調査に至る経緯……（仁尾一人）　1
第２節　確認調査の経過と体制……（仁尾）　1
第３節　本発掘調査の経過と体制……（仁尾）　3
第４節　整理作業の経過と体制……（仁尾）　5

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境……（仁尾）　7
第２節　歴史的環境……（仁尾）　9

第３章　珉平焼について

第１節　珉平焼創業から淡陶社設立……（仁尾）　12
第２節　淡陶社から現在のダントー株式会社……（仁尾）　16

第４章　調査の成果

第１節　調査の概要……（仁尾）　19
第２節　遺構　１．遺構の概要……（仁尾）　21
　２．作業場跡……（仁尾）　21
　３．コウカシ窯……（森内秀造）　28
　４．その他の遺構……（仁尾）　36
第３節　遺物　１．遺物の概要……（仁尾）　37
　２．土型……（仁尾）　41
　３．陶磁器類……（岡田章一・仁尾）　70
　４．タイル……（深井明比古）　109
　出土遺物観察表
　５．窯道具……（仁尾）　173
　６．刻印・文字資料……（深井・仁尾）　176
　７．その他の遺物……（岡田・仁尾）　181

第５章　自然科学分析の成果

第１節　出土遺物の胎土分析……（ダントー株式会社技術研究所　池田　健）　185
第２節　陶器およびタイルの釉薬材料に関する文化財科学的調査
……（くらしき作陽大学　北野信彦）　193

第６章　遺構・遺物の検討
第１節　コウカシ窯について……（森内）　205
第２節　出土遺物について　１．土型……（仁尾）　211
２．陶磁器類……（岡田・仁尾）　219
３．タイル……（深井）　225
第３節　さいごに……（仁尾）　258

珉平焼（淡路焼）に関する文献等一覧……　261
報告書抄録……　264

巻首図版目次

巻首図版１　珉平焼　伝世品　色絵花鳥図外黄南京台鉢（個人蔵）
珉平焼　伝世品　色絵金彩秋草図茶碗（個人蔵）
巻首図版２　珉平焼　伝世品　柿南京酒瓶・柿南京金彩草花文盃（個人蔵）
珉平焼　伝世品　染付南蛮船図皿（洲本市立淡路文化史料館蔵）
巻首図版３　珉平焼　伝世品（淡陶社製）　煎茶器セット（個人蔵）
珉平焼　伝世品（淡陶社製）　ティーカップセット（個人蔵）
巻首図版４　珉平焼　伝世品　小判形龍文皿
珉平焼　伝世品　多角形幾何学文襞皿
巻首図版５　出土遺物　陶磁器類・タイル類
巻首図版６　出土遺物　元型・土型・製品
出土遺物　土型（銘文）
巻首図版７　出土遺物　元型・土型・製品
出土遺物　土型（銘文）
巻首図版８　出土遺物　タイル・タイル型
出土遺物　タイル・タイル型
出土遺物　タイル・タイル型

挿図・写真目次

第１図　広域営農団地農道整備事業南淡路地区　道路路線図……　2
第２図　珉平焼窯跡　本発掘調査地点位置図……　4
第３図　四国北東部－近畿西部の地形及び活断層……　7
第４図　珉平焼窯跡の位置と周辺の遺跡……　8
第５図　淡路島およびその周辺……　11
第６図　珉平焼窯跡　調査区全域図……　20
第７図　石垣および調査区南斜面裾石積み見通し図
第7-1図　石垣北半部見通し図　第7-2図　石垣北半部裏込め最下部見通し図……　22
第7-3図　石垣南半部見通し図　第7-4図　南斜面裾石積み見通し図……　23
第８図　作業場跡および平坦地縦断土層断面図……　24
第９図　平坦地横断土層断面図(1)・(2)……　25
第10図　石垣背後土層断面図……　27

第11図　コウカシ窯上面および外壁図…… 30・31
第12図　コウカシ窯断ち割り断面図および土層断面図…… 32
第13図　コウカシ窯床面および内壁図　床面断ち割り断面図および焚口見通し図…… 33
第14図　コウカシ窯焚口使用火格子…… 35
第15図　調査区完掘後地形図 中世土壙および土壙出土遺物…… 36
第16図　出土遺物　土型(1)…… 43　第17図　出土遺物　土型(2)…… 44
第18図　出土遺物　土型(3)…… 45　第19図　出土遺物　土型(4)…… 46
第20図　出土遺物　土型(5)…… 47　第21図　出土遺物　土型(6)…… 48
第22図　出土遺物　土型(7)…… 49　第23図　出土遺物　土型(8)…… 50
第24図　出土遺物　土型(9)…… 51　第25図　出土遺物　土型(10)…… 52
第26図　出土遺物　土型(11)…… 54　第27図　出土遺物　土型(12)…… 55
第28図　出土遺物　土型(13)…… 56　第29図　出土遺物　土型(14)…… 58
第30図　出土遺物　土型(15)…… 59　第31図　出土遺物　土型(16)…… 60
第32図　出土遺物　土型(17)…… 61　第33図　出土遺物　土型(18)…… 62
第34図　出土遺物　土型(19)…… 63　第35図　出土遺物　土型(20)…… 65
第36図　出土遺物　土型(21)…… 66　第37図　出土遺物　土型(22)…… 67
第38図　出土遺物　土型(23)…… 68　第39図　出土遺物　土型(24)…… 69
第40図　出土遺物　染付(1)…… 71　第41図　出土遺物　染付(2)…… 73
第42図　出土遺物　染付(3)…… 75　第43図　出土遺物　陶器類(1)…… 77
第44図　出土遺物　陶器類(2)…… 78　第45図　出土遺物　陶器類(3)…… 79
第46図　出土遺物　陶器類(4)…… 81　第47図　出土遺物　陶器類(5)…… 82
第48図　出土遺物　陶器類(6)…… 83　第49図　出土遺物　陶器類(7)…… 84
第50図　出土遺物　陶器類(8)…… 85　第51図　出土遺物　陶器類(9)…… 87
第52図　出土遺物　陶器類(10)…… 88　第53図　出土遺物　陶器類(11)…… 89
第54図　出土遺物　陶器類(12)…… 90　第55図　出土遺物　陶器類(13)…… 92
第56図　出土遺物　陶器類(14)…… 93　第57図　出土遺物　陶器類(15)…… 95
第58図　出土遺物　陶器類(16)…… 96　第59図　出土遺物　陶器類(17)…… 98
第60図　出土遺物　陶器類(18)…… 99　第61図　出土遺物　陶器類(19)…… 100
第62図　出土遺物　陶器類(20)…… 101　第63図　出土遺物　陶器類(21)…… 103
第64図　出土遺物　陶器類(22)…… 104　第65図　出土遺物　陶器類(23)…… 106
第66図　出土遺物　陶器類(24)・その他の産地… 107　第67図　出土遺物　産地不明…… 108
第68図　出土遺物　タイル類(1)…… 113　第69図　出土遺物　タイル類(2)…… 114
第70図　出土遺物　タイル類(3)…… 115　第71図　出土遺物　タイル類(4)…… 116
第72図　出土遺物　タイル類(5)…… 117　第73図　出土遺物　タイル類(6)…… 118
第74図　出土遺物　タイル類(7)…… 119　第75図　出土遺物　タイル類(8)…… 120
第76図　出土遺物　タイル類(9)…… 121　第77図　出土遺物　タイル類(10)…… 122
第78図　出土遺物　タイル類(11)…… 123　第79図　出土遺物　タイル類(12)…… 124
第80図　出土遺物　タイル類(13)…… 125　第81図　出土遺物　タイル類(14)…… 126
第82図　出土遺物　タイル類(15)…… 127　第83図　出土遺物　タイル類(16)…… 128

第 84図　出土遺物　タイル類(17)…… 129
第 85図　土型の各部名称…… 130
第 86図　出土遺物　色見本…… 131
第 87図　土型　文様構成（龍文）…… 214
第 88図　土型　文様構成（幾何学文）…… 216
第 89図　出土タイルカタログ(1)…… 238
第 90図　出土タイルカタログ(2)…… 239
第 91図　出土タイルカタログ(3)…… 240
第 92図　出土タイルカタログ(4)…… 241
第 93図　出土タイルカタログ(5)…… 242
第 94図　出土タイルカタログ(6)…… 243
第 95図　出土タイルカタログ(7)…… 244
第 96図　出土タイルカタログ(8)…… 245
第 97図　出土タイルカタログ(9)…… 246
第 98図　出土タイルカタログ(10)…… 247
第 99図　出土タイルカタログ(11)…… 248
第100図　出土タイルカタログ(12)…… 249
第101図　出土タイルカタログ(13)…… 250
第102図　出土タイルカタログ(14)…… 251
第103図　出土タイルカタログ(15)…… 252
第104図　出土湿式タイル　裏面調整…… 253
第105図　出土乾式タイル　裏型分類(1) … 254
第106図　出土乾式タイル　裏型分類(2)…… 255
第107図　出土乾式タイル　裏型分類(3) … 256
第108図　出土乾式タイル　裏型分類(4)…… 257
第109図　調査地周辺の地形図…… 258

写真 1　『珉平傳』収納袋（表紙）…… 13
写真 2　『珉平傳』収納袋（裏表紙）…… 13
写真 3　『釉薬沿革報告書』（表紙）…… 15
写真 4　コウカシ窯断ち割り位置…… 32
写真 5　試験設備写真 蛍光X線分析装置… 191
写真 6　同　振動ミル…… 191
写真 7　同　ビードサンプラー…… 191
写真 8　同　マッフル炉…… 191
写真 9　同　X線回析装置…… 191
写真10　同　電気炉…… 191
写真11　『陶器指南』のコウカシ窯解説図…… 205
写真12　湖東焼の窯場絵図『御陶器場所地面並諸建物御絵図』より…… 206
写真13　小判形龍文皿（245）…… 221
写真14　多角形幾何学文襞皿（角皿変形　274）…… 221
写真15　煎茶用急須（337）…… 222
写真16　ミルクピッチャー(349)…… 222
写真17　桃実形の蓋物（515）…… 222
写真18　手描き淡路焼敷瓦『日本のタイル文化』より…… 225
写真19　湿式製法と乾式製法によるタイルの違い…… 226
写真20　レリーフタイルとチューブライニングタイルの違い…… 227
写真21　淡陶タイルカタログ…… 230
写真22　「臺湾與荷蘭老磁磚展」図録…… 232

表目次

第 1 表　土型観察表(1)～…… 132
第 2 表　染付観察表(1)～…… 146
第 3 表　陶器観察表(1)～…… 149
第 4 表　タイル観察表(1)～…… 170
第 5 表　出土遺物の刻印点数…… 177

第６表　珉平焼窯跡出土遺物の化学分析およびX線回析測定結果　淡陶社タイル…… 186
第７表　珉平焼窯跡出土遺物の化学分析およびX線回析測定結果　珉平焼（陶器類）…… 187
第８表　珉平焼窯跡出土粘土の化学分析およびX線回析測定結果…… 188
第９表　釉薬および呈色材料の蛍光X線分析結果(A)　陶器類…… 197
第10表　釉薬および呈色材料の蛍光X線分析結果(A)　淡陶社タイル…… 198
第11表　釉薬および呈色材料の蛍光X線分析結果(B)　陶器類…… 199
第12表　釉薬および呈色材料の蛍光X線分析結果(B)　淡陶社タイル…… 201
第13表　釉薬および呈色材料の蛍光X線分析結果(C)　陶器類…… 202
第14表　釉薬および呈色材料の蛍光X線分析結果(C)　淡陶社タイル…… 203
第15表　『釉薬沿革報告書』からみた釉薬および呈色材料一覧…… 203
第16表　『釉薬沿革報告書』からみた釉薬および呈色材料一覧（推定される元素）…… 204
第17表　出土刻印総点数の各種刻印の割合…… 222
第18表　石垣背後の各種刻印の割合…… 223
第19表　表層および石垣背後（１区）各層のタイル分析表…… 233
第20表　タイル消長表(1)・(2)…… 234・235

写真図版目次

写真図版１　調査地遠景（北から）
調査地遠景（北西から）
平成９年６月撮影
写真図版２　調査地遠景（北西から）
平成９年６月撮影
調査地遠景（北西から）
写真図版３　調査区全景（北西から）
調査区全景（北西から）
写真図版４　コウカシ窯全景（南西から）
コウカシ窯西壁外面（北西から）　コウカシ窯南壁外面（南西から）
コウカシ窯南壁外面（南東から）　コウカシ窯内部（北から）
写真図版５　調査前状況（西から）
調査前状況（北西から）
調査前状況（南東から）
写真図版６　コウカシ窯発見前の状況（西から）
コウカシ窯発見時の状況（西から）
コウカシ窯検出状況（西から）
写真図版７　作業場跡全景（北西から）
作業場跡全景（南西から）
作業場跡全景（南から）　作業場跡全景（北東から）
写真図版８　石垣全景（北西から）　石垣全景（北から）
石垣北半部（西から）　石垣南半部（北から）
石垣裾排水路（南西から）　南斜面裾排水路（北西から）
南斜面裾排水路（北東から）
写真図版９　平坦地掘り下げ土層断面（北西から）
平坦地掘り下げ土層断面（西から）
同　縦断土層断面（南西から）　調査区西端進入路跡検出状況（東から）

写真図版10　平坦地掘り下げ横断土層(1)断面（南東から）
同　横断土層(1)断面（南東から）　同　横断土層(1)断面（南東から）
平坦地掘り下げ横断土層(2)断面（南から）
同　横断土層(2)断面（南東から）　同　横断土層(2)断面（南東から）
写真図版11　コウカシ窯全景（北から）
コウカシ窯全景（西から）
コウカシ窯全景（南西から）
写真図版12　コウカシ窯西壁外面（西から）　コウカシ窯西壁外面（南西から）
コウカシ窯南壁外面（南から）　コウカシ窯東壁外面（東から）
コウカシ窯東壁外面（北東から）　コウカシ窯　上方部（南西から）
コウカシ窯北斜面　石積み状況（南西から）
コウカシ窯北斜面　調査区外石積み状況（南西から）
写真図版13　コウカシ窯西壁外面　出し入れ口（西から）　同　出し入れ口（南西から）
コウカシ窯西壁外面　焚口（西から）　同　焚口（南西から）
コウカシ窯南壁外面　下方部（南から）　同　覗き孔（南から）
コウカシ窯東壁外面　北東角部（東から）　同　北壁外面　東半部（北西から）
写真図版14　コウカシ窯西壁内面（北東から）　コウカシ窯南壁内面（北から）
コウカシ窯東壁内面（北西から）　コウカシ窯床面（北西から）
コウカシ窯西壁内面　北西角部（南東から）　同　南壁内面　南東角部（北西から）
コウカシ窯西壁内面　出し入れ口（南東から）　同　南壁内面　覗き孔（北から）
写真図版15　コウカシ窯内部　土層断面（西から）　同　床面火格子（北から）
コウカシ窯解体過程　東壁（北東から）　同解体過程　西壁（北東から）
コウカシ窯解体過程　南壁（北東から）　同解体過程　東壁（北から）
コウカシ窯解体過程　下方部（北から）　同解体過程　西壁焚口部（北西から）
写真図版16　コウカシ窯解体過程　南壁（北西から）　同解体過程　南東角部（北西から）
コウカシ窯解体過程　北壁（南から）　同解体過程　煉瓦除去後（北東から）
コウカシ窯解体過程　煉瓦除去後（南東から）　同解体過程　焚口部火格子除去後（北西から）
コウカシ窯解体過程　焚口部火格子除去後（西から）
コウカシ窯床面断ち割り土層断面（西から）
写真図版17　石垣背後土層断面（南西から）
調査区東壁土層断面（北西から）
調査区東壁土層断面（西から）　同土層断面　接写（西から）
写真図版18　調査区完掘状況（東から）
調査区完掘状況（南から）
中世土壙検出状況（南西から）
写真図版19　機械掘削状況　人力掘削状況
人力掘削状況　人力掘削状況
土層断面精査状況　学識経験者による現地指導状況
コウカシ窯実測状況　現地説明会状況

写真図版20　コウカシ窯精査状況　コウカシ窯写真撮影
コウカシ窯解体状況　コウカシ窯解体状況
調査区東壁土層断面精査状況　調査区東壁土層断面剥ぎ取り状況
調査区東壁土層断面剥ぎ取り状況　剥ぎ取り断面水洗い状況
写真図版21　遺物水洗い作業状況　遺物乾燥状況
遺物ネーミング作業状況　遺物分類作業状況
珉平焼窯跡出土遺物検討（見学）会状況
遺物実測状況　遺物実測状況
写真図版22　トレース状況　レイアウト状況
遺物写真撮影状況　遺物写真撮影状況
原稿執筆状況
デジタルトレース状況　デジタル写真撮影状況
写真図版23　出土遺物　土型（製品型）
写真図版24　出土遺物　土型（製品型）
写真図版25　出土遺物　土型（製品型・元型）・石膏型
写真図版26　出土遺物　染付（外面）
写真図版27　出土遺物　染付（内面）
写真図版28　出土遺物　陶器（特殊・絵付）
写真図版29　出土遺物　陶器（碗類）
写真図版30　出土遺物　陶器（碗類）
写真図版31　出土遺物　陶器（鉢類）
写真図版32　出土遺物　陶器（鉢類）
写真図版33　出土遺物　陶器（鉢類）
写真図版34　出土遺物　陶器（鉢類）
写真図版35　出土遺物　陶器（鉢類）
写真図版36　出土遺物　陶器（鉢類）
写真図版37　出土遺物　陶器（皿類）
写真図版38　出土遺物　陶器（皿類）
写真図版39　出土遺物　陶器（皿類）
写真図版40　出土遺物　陶器（皿類）
写真図版41　出土遺物　陶器（皿類）
写真図版42　出土遺物　陶器（皿類）
写真図版43　出土遺物　陶器（皿類）
写真図版44　出土遺物　陶器（皿類）
写真図版45　出土遺物　陶器（皿類）
写真図版46　出土遺物　陶器（皿類）
写真図版47　出土遺物　陶器（皿類）
写真図版48　出土遺物　陶器（皿類）
写真図版49　出土遺物　陶器（壺類）
写真図版50　出土遺物　陶器（壺類）
写真図版51　出土遺物　陶器（壺類）
写真図版52　出土遺物　陶器（壺類）
写真図版53　出土遺物　陶器（壺類）
写真図版54　出土遺物　陶器（壺類）
写真図版55　出土遺物　陶器（壺類）
写真図版56　出土遺物　陶器（蓋類）
写真図版57　出土遺物　陶器（蓋類）
写真図版58　出土遺物　陶器（蓋類）
写真図版59　出土遺物　陶器（蓋類）
写真図版60　出土遺物　陶器（蓋類）
写真図版61　出土遺物　陶器（蓋類）
写真図版62　出土遺物　陶器（蓋類）
写真図版63　出土遺物　陶器（蓋類）
写真図版64　出土遺物　陶器（蓋類）
写真図版65　出土遺物　陶器（蓋類）
写真図版66　出土遺物　陶器（蓋物類）
写真図版67　出土遺物　陶器（蓋物類）
写真図版68　出土遺物　陶器（蓋物類）
写真図版69　出土遺物　陶器（その他）
写真図版70　出土遺物　陶器（その他）
写真図版71　出土遺物　陶器（その他）
写真図版72　出土遺物　陶器（その他）
写真図版73　出土遺物　陶器（貼付文様）
写真図版74　出土遺物　陶器（貼付文様）
写真図版75　出土遺物　陶器（削り込み文様）

写真図版76　出土遺物　熔着遺物・磁器製品・ガラス瓶
写真図版77　出土遺物　タイルと窯道具
写真図版78　出土遺物　湿式タイル
写真図版79　出土遺物　乾式タイル
写真図版80　出土遺物　湿式・乾式タイル
写真図版81　出土遺物　窯道具（色見本・乳鉢他）
写真図版82　出土遺物　他産地の遺物
写真図版83　出土遺物　土型（製品型）
写真図版84　出土遺物　土型（製品型）
写真図版85　出土遺物　土型（製品型）
写真図版86　出土遺物　土型（製品型）
写真図版87　出土遺物　土型（製品型）
写真図版88　出土遺物　土型（製品型）
写真図版89　出土遺物　土型（製品型）
写真図版90　出土遺物　土型（製品型）
写真図版91　出土遺物　土型（製品型）
写真図版92　出土遺物　土型（製品型）
写真図版93　出土遺物　土型（製品型）
写真図版94　出土遺物　土型（製品型）
写真図版95　出土遺物　土型（製品型）
写真図版96　出土遺物　土型（製品型）
写真図版97　出土遺物　土型（製品型）
写真図版98　出土遺物　土型（製品型）
写真図版99　出土遺物　土型（元型）
写真図版100　出土遺物　土型（元型）
写真図版101　出土遺物　土型（元型）
写真図版102　出土遺物　土型（元型）
写真図版103　出土遺物　土型（元型）
写真図版104　出土遺物　土型（元型）
写真図版105　出土遺物　土型（貼付型）
写真図版106　出土遺物　土型（高台型）
写真図版107　出土遺物　土型（タイル型）
写真図版108　出土遺物　土型（タイル型）
写真図版109　出土遺物　土型（タイル型）
写真図版110　出土遺物　土型（タイル型）
写真図版111　出土遺物　土型（ピンハマ型）
写真図版112　出土遺物　石膏型・土師器
写真図版113　出土遺物　コウカシ窯構築材（煉瓦・火格子）
写真図版114　出土遺物　窯道具（湿台・乾燥台）
写真図版115　出土遺物　窯道具（ヌケ他・匣鉢）
写真図版116　出土遺物　窯道具（ピンハマ他・焼成台）
写真図版117　出土遺物　窯道具（焼成台・用途不明）
写真図版118　出土遺物　産地不明・瓦
写真図版119　出土遺物　陶器刻印集成
写真図版120　出土遺物　陶器小印集成
写真図版121　出土遺物　タイル金型印影等(1)
写真図版122　出土遺物　タイル金型印影等(2)
写真図版123　出土遺物　タイル金型印影等(3)
写真図版124　出土遺物　タイル記号
写真図版125　出土遺物　陶器文字資料(1)
写真図版126　出土遺物　陶器文字資料(2)
写真図版127　出土遺物　タイル文字資料(1)
写真図版128　出土遺物　タイル文字資料(2)
写真図版129　出土遺物　タイル文字資料(3)
写真図版130　出土遺物　タイル文字資料(4)
写真図版131　淡陶タイルカタログ
写真図版132　ダントー株式会社所蔵タイル
写真図版133　タイル使用例等(1)
写真図版134　タイル使用例等(2)

第１章　調査の経緯と体制

第１節　調査に至る経緯

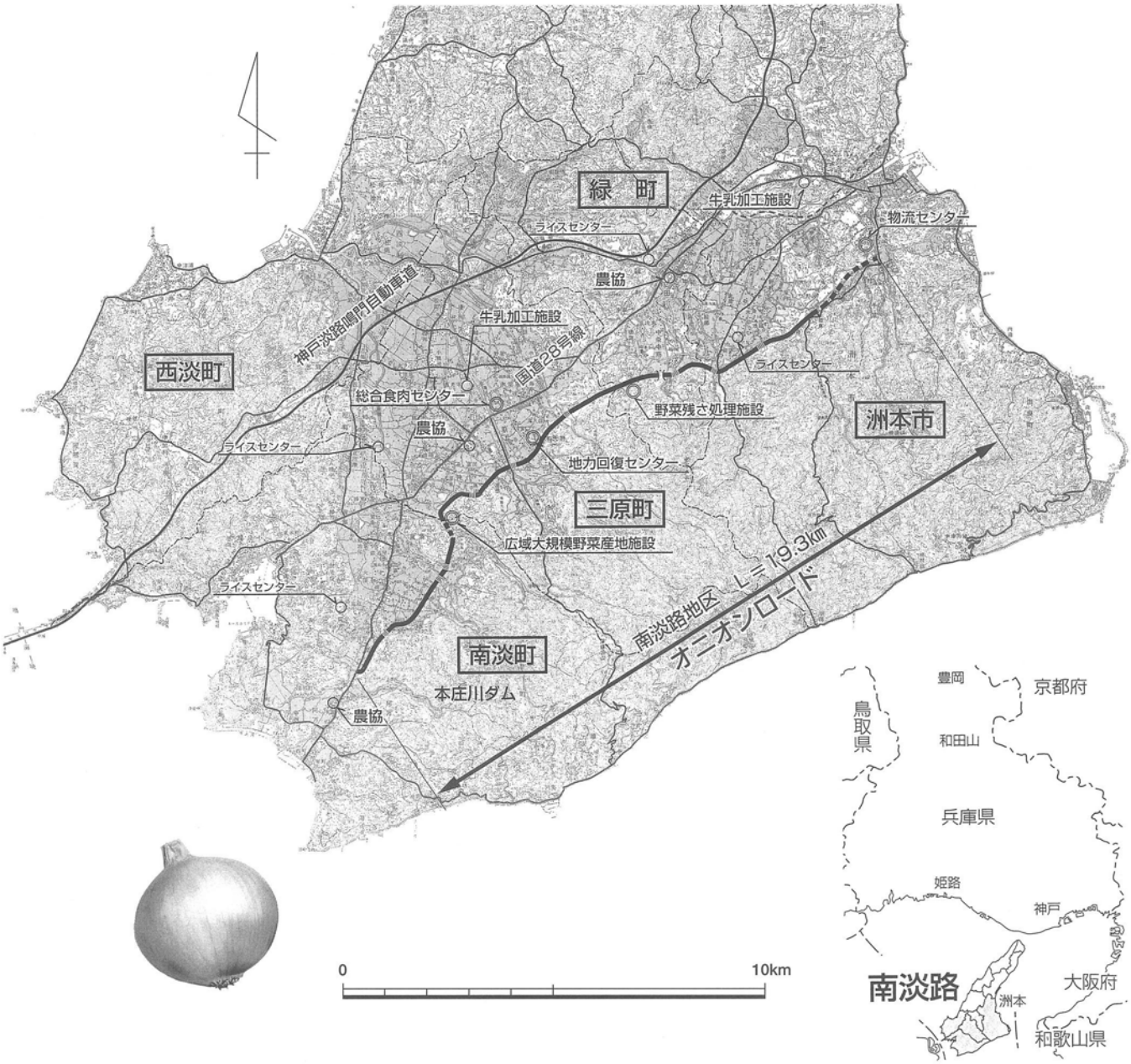
兵庫県の南、瀬戸内海に浮かぶ淡路島は、年間の平均気温・降雨量・日照時間など農作物の生育に適しており、淡路島南部の洲本平野および三原平野を中心とした地域では、酪農を基幹とした水稲・野菜・たまねぎ等の多毛作が行われている。淡路島では、北端の淡路町岩屋から西海岸を走行し、洲本市から南淡町福良に至る国道28号線や東の海岸線を走行する県道31号福良江井岩屋線など主要な道路は比較的交通量が多く、主要道路から山間部に入ると道幅の狭い煩雑に入り組んだ生活道路へと続いている。このため、農産物の輸送に支障をきたさないように流通ルートを確保し、併せて農村の生活環境を一体的に整備する目的で兵庫県淡路県民局洲本土地改良事務所による「広域営農団地農道整備事業」が計画された。

兵庫県教育委員会では、洲本市と南淡町を結ぶ19.3kmにおよぶ、上記の農道整備事業南淡路地区（通称「オニオンロード」）にともなう埋蔵文化財について、平成８年度に事業地内全域を対象とした遺跡の分布調査を実施し、86ヶ所において遺物を採集した。平成12年度からは遺物を採集した地点の確認調査を順次実施し、平成15年度には、本書に所収している珉平焼窯跡の本発掘調査を行った。また、今年（平成16年）度も三原郡三原町に所在する淡路島最古の須恵器の窯跡である汁谷窯跡およびその工房跡の本発掘調査を引き続いて実施した。

第２節　確認調査の経過と体制

珉平焼窯跡は三原郡南淡町伊賀野に所在し、平成８年度に実施した分布調査ではその存在が確認されなかった遺跡である。平成14年11月、工事用道路の造成中、周辺の土砂を採取したことにより、陶磁器類が散乱しているとの情報が地元の研究者から兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に寄せられた。これを受け、洲本土地改良事務所に対し、工事の一時中止を要請し、11月28日に現地において協議を行った。現地の谷部では、近世の陶磁器を含む大量の遺物が散乱しており、これまで南淡町伊賀野に所在することが知られていたが、その詳細な地点が不明であった「珉平焼」（みんぺいやき）に関係する物原（窯の失敗品の捨て場）であると考えられた。このため、淡路県民局長から平成14年11月28日付　淡路（洲改）第1430号に基づく遺跡の発見通知が提出され、珉平焼窯跡として周知されることとなった。平成14年12月２日付　淡路（洲改）第1451号に基づく確認調査依頼があり、12月５日～12月10日の実働４日間にわたって遺跡の確認調査を実施した。

調査は、谷部中央に谷に平行あるいは直交する方向にトレンチ３本（24×３m、９×３m、12×１m 111㎡）を設定し、遺物を採集するとともに窯跡の範囲や掘削深度およびその性格等について記録を行った。調査の結果、当該地の谷部には灰や焼土とともに素焼きあるいは本焼きの失敗品、窯道具などが大量に廃棄されており、その遺物の堆積状況から谷の奥部（事業地外の東側）に窯本体が存在する可能性が考えられた。また、併せて周辺の谷部を改めて踏査したが、遺構および遺物は確認されなかった。



第１図　広域営農団地農道整備事業南淡路地区　道路路線図

兵庫県洲本土地改良事務所発行（平成12年３月作成）パンフレットを一部改変

確認調査における調査事務は、下記の体制によって行われた。

調査事務　兵庫県教育委員会　埋蔵文化財調査事務所

所　長　　藤本　修三

主　幹　　苦瓜　一成（業務調整担当）・輔老　拓治（発掘調査担当）

　　泉　　吉嘉（土木技術担当）

企画調整班　主　査　　深井明比古（調査担当）

調査第３班　主　査　　岡田　章一（調査担当）

第３節　本発掘調査の経過と体制

平成14年12月に行われた確認調査の結果をふまえ、兵庫県淡路県民局地域振興部洲本土地改良事務所と兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所は、遺跡の取り扱いについて協議を行った。協議の結果、明確な窯跡等の遺構は発見されなかったが、近世後半から概ね19世紀（明治時代末までを含む）の時期の遺物を大量に廃棄した遺物投棄層（物原）が確認されたことにより、淡路地域における近世～近代窯業に関する特に重要な生産遺跡であることを考慮し、本発掘調査を実施することで合意した。

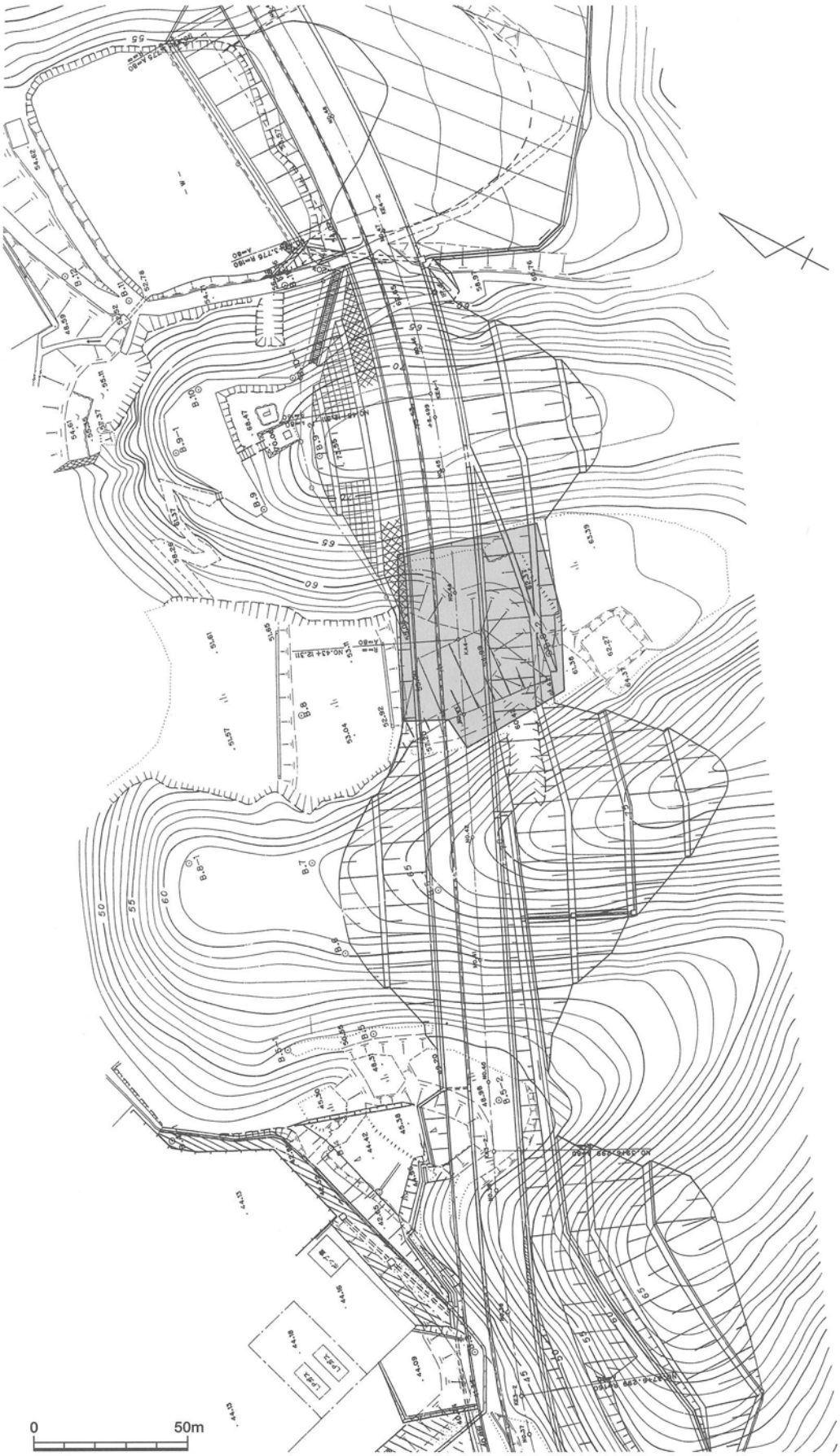
珉平焼窯跡の調査にあたっては、兵庫県教育委員会が主体となり、発掘調査については株式会社森長組、空中写真測量についてはアジア航測株式会社とそれぞれ委託契約を締結して実施した。

兵庫県教育委員会の調査事務等は、下記の体制によって行われた。

審査指導	兵庫県教育委員会	文化財室	審査指導係
		係　長	岡崎　正雄
		主　査	山本　　誠
調査事務	兵庫県教育委員会	埋蔵文化財調査事務所	
		所　長	平岡　憲昭
		主　幹	苦瓜　一成（業務調整担当）・輔老　拓治（発掘調査担当）
			泉　　吉嘉（土木技術担当）
	総務課	課　長	織田　正博
		主　査	若狭　健利
	企画調整班	主　査	深井明比古
	整理保存班	主任調査専門員	池田　正男
		主　査	村上　泰樹
	調査第３班	調査専門員	西口　和彦
		主　査	森内　秀造（調査担当）
		主　任	仁尾　一人（調査担当）

現場での調査は、平成15年５月20日より開始し、８月15日にすべての作業を終了、撤収した。調査では当初、今回の事業地内には遺物投棄層（物原）のみが存在するものと考えられたが、６月９日に煉瓦積みの方形の窯が発見され、それをとりまく作業場跡が検出された。窯は発見当初、その形状から石炭窯と考えられたが、内部に障壁や煙突等がなく、やきものを焼くための基本的な窯構造を有していないため、窯構造および窯業全般に詳しい吹田市立博物館の藤原学（平成15年７月１日・８日）および立命館大学の木立雅朗（同　７月７日）両氏に現地での実見をお願いした。窯は、現場での状況あるいは文献資料等を検討した結果、「江戸時代後期ごろにはその存在が文献等に確認されている、薪を乾燥されるためのコウカシ窯ではないか」との結論に達した。

７月24日には記者発表、７月27日には現地説明会を実施し、広く一般に調査の成果を公開した。また、調査終了間際にも、調査区東壁に約７ｍにおよぶ遺物投棄層の堆積状況を示す土層断面の剥ぎ取り作業の公開を行った。これら一連の調査経過については、調査開始時から終了時までの期間中、埋蔵文化財調査事務所が開設するホームページ上において、「週刊珉平」と題して、毎週更新し、その状況を報告した。



第２図　珉平焼窯跡　本発掘調査地点位置図

なお、発見されたコウカシ窯は、日本に唯一現存する可能性の高い、近代の産業遺産と考えられたため、調査期間中、地元南淡町から移築・復元の要望が寄せられた。このため、窯の解体作業については、積み上げられたひとつひとつの煉瓦に番号を付し、復元することを考慮し、調査を進めた。解体されたコウカシ窯は平成17年１月以降、三原郡４町（三原町・西淡町・南淡町・緑町）が合併してできる「南あわじ市」によって、南淡町賀集八幡に所在する歴史民俗資料館の敷地内に窯の周囲の石積みと併せ、移築・復元される予定である。

また、発掘期間中、下記の方々に現場事務員および室内作業員・現場補助員として調査に協力していただきました。

阿部由香子・藤原妙美・森西真琴・榎本康孝

第４節　整理作業の経過と体制

珉平焼窯跡の出土品整理事業については、現場での調査と並行して、平成15年６月18日および７月２日・７月31日の３度にわたって洲本土地改良事務所と協議を重ねた。協議では、整理事業については単年度実施を要望する洲本土地改良事務所に対し、埋蔵文化財調査事務所では遺物の出土量が最終的に遺物収納箱（セキスイTS28コンテナ）約1,000箱におよぶことから、単年度（平成15年度）での整理作業は実質的に不可能であるとの見解を示した。このため、両者の間で平成15・16年度の２ヵ年（平成15年度：遺物の水洗い・ネーミング・接合補強、平成16年度：遺物の実測～報告書刊行）で整理事業を実施する方向で調整し、合意に至った。

また、これらの経緯とは別に、発掘現場では調査期間中、監督員詰所において遺物の水洗いとネーミングを行ったが、3／4にあたる約750箱におよぶ遺物については水洗い等の作業は行えなかった。このため、平成15年９月30日付で洲本土地改良事務所と出土品整理事業に関わる契約を締結し、10月以降、下記の日程で本格的な整理作業を進めた。

平成15年10月より明石市魚住町に所在する兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の魚住分館において、遺物の水洗い・ネーミング作業を順次実施し、平成16年２月からは、遺物の分類（接合補強を含む）作業および実測すべき遺物のピックアップ作業を行った。これらの作業は平成16年５月末にはほぼ終了したため、５月30日には珉平焼窯跡出土遺物検討（見学）会を実施した。当日は、県内外の珉平焼あるいは近世・近代陶磁器の研究者や陶芸家など幅広い分野の方々約50名の参加を得て、貴重な意見を伺った。

平成16年６月からは、神戸市兵庫区に所在する兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において、ピックアップした遺物の実測・写真撮影および遺構図の補正、遺構・遺物図版のトレース・レイアウト（土型を除く遺物については、株式会社文化財サービスに委託し、デジタル画像合成処理によるレイアウトを実施）、原稿執筆から報告書刊行までの作業を行った。また、発掘調査期間中と同様、整理作業の進行過程をホームページにおいて「珉平Ｒ」と改題し、月に一度更新し、その状況を報告した。

整理担当職員　整理保存班

主　査　　菱田　淳子

主　任　　仁尾　一人

調査第１班

主　査　　岡田　章一

調査第３班

主　査　　森内　秀造

企画調整班

主　査　　深井明比古

普及活用班

技術職員　小川　弦太

整理嘱託員　　池田　悦子・村上　京子　前川　悦子・高瀬　敬子・津田　友子

溝上　くみ・西村　美緒・荒木由美子

眞子ふさ恵・島村　順子・木村　淑子・前田千栄子・小野　潤子

宮野　正子・三好　綾子・奥野　政子・早川　有紀

魚住分館　木村　愛子・村上　令子・前中　正子・早川　陽子・西村　美緒

参考資料

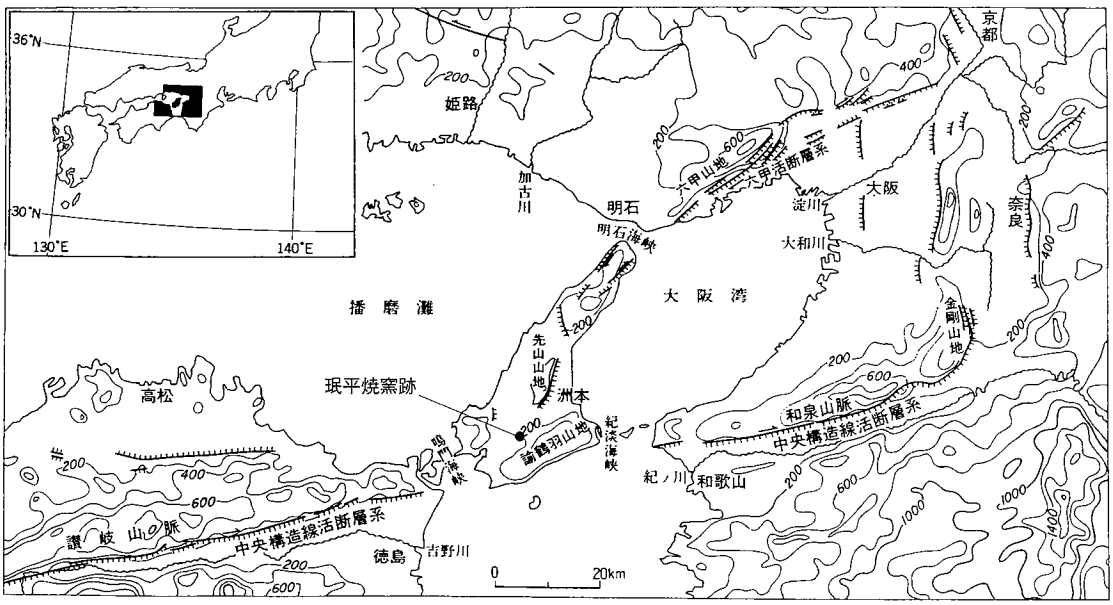
「広域営農団地農道整備事業　南淡路地区概要書」　兵庫県洲本土地改良事務所　平成12年

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

兵庫県の南に位置し、播磨灘・大阪湾および紀伊水道に囲まれた瀬戸内海上に浮かぶ最大の島、淡路島は周囲約174km、面積約596㎢を測り、兵庫県土の約７％を占めている。地形的には、北部の北淡山地、中央部の先山山地とその周辺の丘陵部、西部の西淡山地、南部の和泉層群より形成される諭鶴羽山地および三原地溝低地の５つに大別される。先山山地・諭鶴羽山地・西淡山地に囲まれた不整形な三角形を呈する島南部の三原低地は、淡路島唯一のまとまった平野部であり、酪農を基幹とした水稲・野菜・たまねぎ等の多毛作が行われる兵庫県内有数の農業地域である。

珉平焼窯跡の所在する淡路島の最南端、三原郡南淡町は隣接する三原町との町境に標高608.3mを測る島内最高峰の諭鶴羽山が聳え、南東方向へは急峻な斜面を下って海岸線（太平洋）へと至っている。これは、淡路島と紀伊水道に浮かぶ『古事記』にみえる国生み神話の最初の島「おのころ島」と考えられる沼島との間を中央構造線が走り、その断層崖を形成していることによるものと考えられる。諭鶴羽山地の北および西方向には、山体に平行する４列の傾斜変換線を境にして階段状に標高は下り、三原平野へと続いている。これらの山塊は町域のほぼ西半部を占めており、平野部は町の中央部から北部の限られた地域に広がっている。町内には、前述の諭鶴羽山地を水系に大日川や本庄川あるいは塩屋川などの河川が流れており、前者は三原平野を北流し、西淡町松帆付近で三原川に合流、播磨灘へと注ぎ、後者は南流して太平洋へ注いでいる。また、南西から東の海岸線には吹上浜や海峡が深く湾入した天然の良港福良港があり、鳴門の渦潮を有する鳴門海峡を隔てて四国徳島を眺望することができる。



第３図　四国北東部―近畿西部の地形及び活断層

（『洲本地域の地質』より　一部改変）

1. 淳仁天皇陵　2. 白石遺跡　3. 下中原遺跡　4. 北佐野遺跡　5. 池の尻遺跡
6. 郷殿城跡　7. 正福寺遺跡　8. 佐古谷遺跡　9. 奥河内遺跡　10. 初田遺跡
11. 古城跡　12. 北田遺跡　13. 丸田遺跡　14. 二本木遺跡　15. 有塚遺跡
16. 曽根遺跡　17. 高萩遺跡　18. 細田遺跡　19. 八斗一遺跡　20. 古城山城跡
21. 東本町遺跡　22. 東谷遺跡　23. 玉造遺跡　24. 北納屋町原田遺跡　25. 岩谷遺跡
26. 鶴島城遺跡　27. 賀集城の腰城跡　28. 城の土居城跡　29. 野田山古墳　30. 野田遺跡
31. 上久保遺跡　32. 楠谷遺跡　33. 小山古墳　34. 丹生山城跡　35. 戸川池遺跡
36. 戸川池窯跡　37. 平松遺跡　38. 城が丸城跡　39. 護国寺東遺跡　40. 西山中遺跡
41. 西山南古墳　42. 佐々木土居城跡　43. 南辺寺古堂跡　44. 西山遺跡　45. 西山南殿土居館跡
46. 西山北古墳　47. 石ヶ坪遺跡　48. 嫁ヶ渕遺跡　49. 国衙廃寺跡　50. 里見山遺跡
51. 堂ノ上遺跡　52. 北池遺跡　53. 地頭方殿の土井館跡　54. 鐘原遺跡

第4図　珉平焼窯跡の位置と周辺の遺跡

第２節　歴史的環境

三原郡南淡町では近年、さまざまな開発にともなう遺跡の発掘調査が兵庫県教育委員会あるいは三原郡埋蔵文化財調査事務所によって行われており、考古学的な資料に基づく歴史的な環境が復元されつつある。これらは、三原郡埋蔵文化財調査事務所によって調査・編集されている報告書等に旧石器時代から時代を追って中世に至る時期まで、詳細に報告されている。このため、本節では珉平焼窯跡の調査成果と重なる近世以降、幕末・明治に至る時期の淡路島の歴史的な環境を取り上げてみたい。

近世徳川幕府における淡路島は、徳川家康が関ヶ原の合戦に勝利した慶長５（1600）年、池田輝政が播磨・備前・淡路の三国、約94万石を賜ったことから始まる。輝政の死後、その遺領は分割され、淡路一国は三男忠雄が賜り、由良成山（洲本市）に築城して淡路を治めた。元和元（1615）年５月、大坂夏の陣により、忠雄は備前国32万石に封ぜられ、代わって蜂須賀至鎮が夏の陣での功を以って、淡路国７万石を加増された。これにより、淡路は蜂須賀家が阿波国18万6,000石と併せ、徳島藩25万6,000石として領有することとなった。その後代々、蜂須賀家は徳島藩主として幕末までその任にあたり、第14代茂韶の時代に明治維新をむかえることとなる。このうち、淡路の統治については、城代・仕置・諸奉行・大庄屋・小庄屋・年寄・組頭等に分かれ、城代は蜂須賀家の附家老（徳川将軍家より抜擢して特に家老として諸藩主に附けたもの）稲田氏の世襲によって行われていた。稲田氏は寛永９（1632）年の示植（しげたね）の時代、阿波分4,740石、淡路分5,346石の併せて１万80余石を阿波・淡路両国に跨って領有し、明和３（1766）年の植久（たねひさ）の時代には、１万4,000石を超える石高になり、大名格洲本城代の命を受けている。但し、淡路における政治の実権は、仕置あるいは諸奉行にあり、これらについては稲田氏の世襲はなく、常に洲本城に在って藩主蜂須賀家の支配を代行する立場であった。

江戸時代も後期になり、安永末頃から天明初年（1779～1781）にかけての飢饉あるいは洪水等により、島民は疲弊し、併せて財政の窮乏した藩からは淡路で増米法と木綿会所法というふたつの新法が実施された。米価の高騰を招いた増米法と木綿を専売制とする木綿会所法は農民の生活を圧迫し、加えて藩は縄を供出させ大坂で販売するという縄趣法も実施しようとした。縄趣法による縄の綯い方の注文は厳しく、負担が重かったため、天明２（1782）年５月３日夜、３ヶ村の百姓が縄の代わりに筵で納めることや、13日の夜には６ヶ村の百姓が新法の廃止を領主に願い出る陳情を行った。さらに15日夜には膨れ上がった百姓が再度押しかけるにおよび、藩は洲本藩庁の責任者を閉門、増米法の担当者を永牢禁獄、縄供出などの新法を廃止した。この淡路島内最大の百姓一揆は「縄騒動」と呼ばれ、首謀者として広田宮村の才蔵は牢内で処刑された。

珉平焼の創業者賀集珉平は寛政８（1796）年、三原郡伊賀野村の庄屋職の家に生まれ、天保年間（1830～1843）以降、それまでの醤油醸造業や近海漁業を廃し、製陶業に関わっていくが、常に淡路島の産業の乏しさ、島民の生活の貧窮を憂いていたといわれている。なお、珉平が製陶業に従事した時期は、蜂須賀家第12代藩主斉昌および第13代斉裕の藩政時代と重なっており、両藩主と徳島城内あるいは江戸藩邸、さらには淡路の自邸においてお目見えの栄誉を担っている（珉平焼および賀集珉平の事績については次章において詳述）。

藩制末期の藩内では、丈七焼（阿波焼）、大谷焼についで大久保焼が開窯されたといわれており、このうち、淡路島の大久保焼は珉平焼以前、文政年間（1818～1829）まで遡るとされており、大久保村（三原郡三原町八木）の庄屋第11代武田善太夫によって創業された。しかし、その作品は極めて少なく、「幻

のやきもの」といわれており、窯跡と伝えられている地点（三原町八木鳥ヶ池山）も確認されていない。また、淡路では、阿波領内であまり発展しなかった製瓦業が栄え、瓦職の株仲間が全島で31戸あったと伝えられている。徳島に近い島南部の津井および阿万（ともに三原郡南淡町）では、現在もその伝統は引き継がれ、淡路瓦として生産が続けられている。

幕末から明治維新に至る激動の時代を経た明治３（1870）年、淡路島では「稲田騒動」（庚午事変）と呼ばれる蜂須賀家臣による稲田襲撃事件が起こっている。この騒動は、明治の禄制改革で１万4,000石の稲田家がわずか1,000石の支給となり、また稲田家臣団も藩士の家士（蜂須賀家の家臣稲田家の家来）すなわち陪臣ということで士族に列せられず、卒族に編入されることとなった。このため、稲田家臣団は士族編入を蜂須賀茂韶知事（旧阿波藩第14代藩主）に嘆願するとともに、直接政府に分藩独立運動を行うこととなり、本藩蜂須賀側との対立が激しくなっていった。また、江戸時代を通じて、稲田氏が常に洲本城に在るため、稲田家家臣が在淡徳島藩の直臣を凌駕する勢いを得ていたことや、一方では、直臣からは稲田家家臣は陪臣と蔑まれてきたことなどが両者の間に長年にわたって鬱積していたことから、同年５月13日に洲本在住の蜂須賀家臣過激派が決起し、洲本下屋敷の稲田別邸や益習館（稲田家学問所）、稲田家臣の屋敷を襲撃したものである。稲田側は、無抵抗で死傷者および焼失家屋は多数におよんだため、明治政府は蜂須賀家側の主謀者に対し切腹、その他を流罪あるいは禁固や謹慎とした。この時に行われた切腹は、刑罪として最後の切腹であり、この騒動により、淡路島が明治９（1876）年に兵庫県に編入される要因となったともいわれている。

参考文献

片山滴園編纂『淡路之誇』上巻　實業之淡路社　昭和４年

『洲本市史』　洲本市史編さん委員会　昭和49年

『三原郡史』　三原郡史編纂委員会　昭和54年

『兵庫県大百科事典』　神戸新聞出版センター　昭和58年

高橋　浩・寒川　旭・水野清秀・服部　仁『洲本地域の地質』　地質調査所　平成４年

『河内遺跡』　南淡町教育委員会　平成６年

『岩谷遺跡』　南淡町教育委員会　平成８年

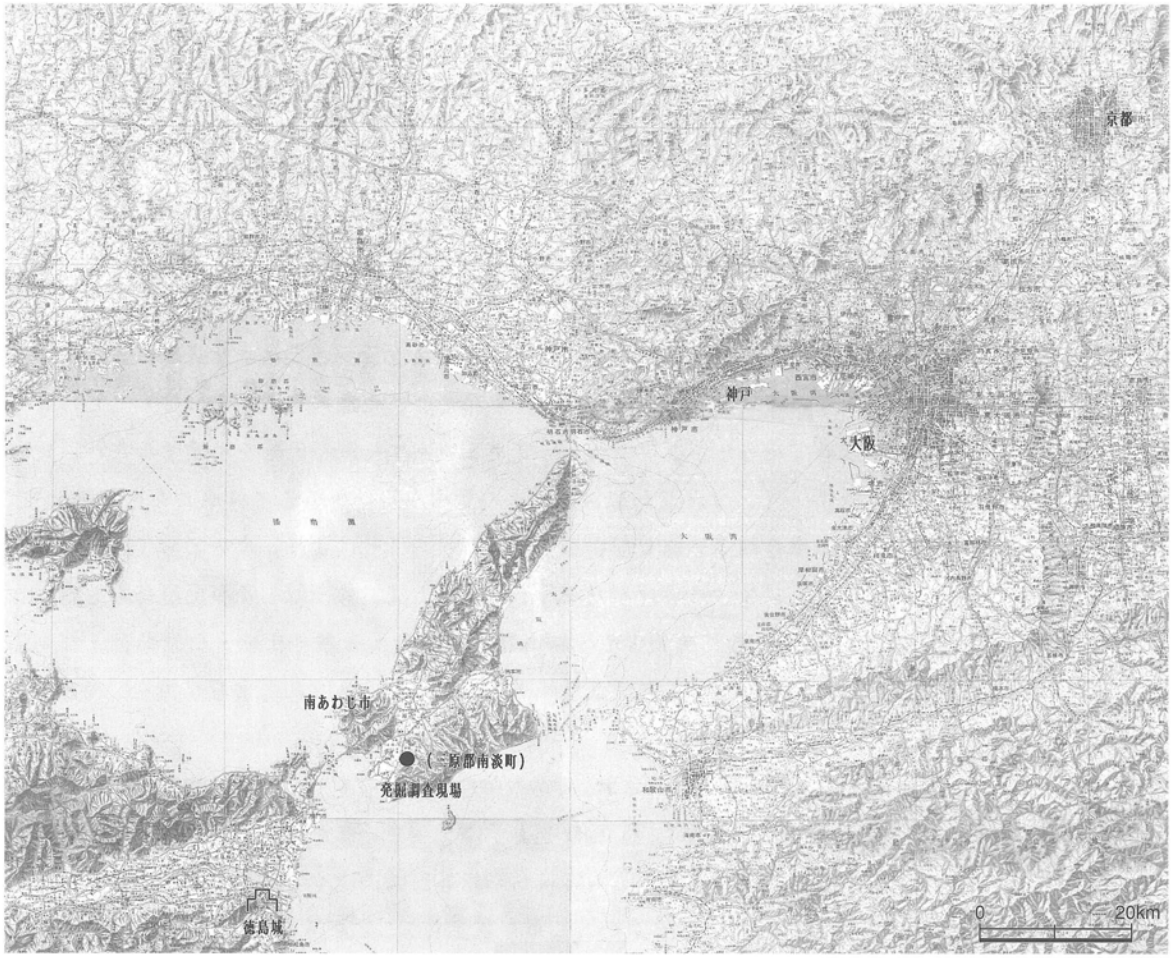
『三原郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』1995～1999年度　埋蔵文化財発掘調査　三原郡広域事務組合　平成13年

『兵庫県遺跡地図』　兵庫県教育委員会　平成16年

第３章　珉平焼について

珉平焼は、江戸時代後期の文政年間（1818～1829）、淡路島の南端、三原郡伊賀野村（三原郡南淡町伊賀野）において賀集珉平が創業した京風の流れを汲むやきものである。発掘調査および整理作業では、「珉平焼」と呼称し報告しているが、創業当初は「淡路焼」の名称で広く一般に出回り、その後、「淡路焼あるいは珉平焼」として流通するようになったといわれている。珉平焼という名称については、これまでにも窯の所在地の地名による「淡路焼」に戻すべきであるという意見や、賀集珉平が製陶に携わった時期のものを「珉平焼」とし、その技術を受け継いだ淡陶社（淡陶株式会社）が生産したものは「淡陶製珉平焼」と区別すべきであるなど、名称の統一が図られていないのが現状である。今回の調査で出土した大半の遺物は、明治時代中頃から大正時代を中心としたもので、いわゆる「淡陶製珉平焼」であるが、本書では、江戸時代後期から幕末期の遺物がわずかながらも出土していることや、近年世間一般に珉平焼の名称が周知されつつあると考えられることから、「珉平焼」の名称を使用している。

本章　第１節では、珉平焼の創業から淡陶社設立について、明治・大正年間の文献を中心に、第２節では、淡陶社から現在のダントー株式会社について、昭和から現在に至る文献を中心に、それぞれ記載していきたい。なお、参考文献については、本書末に「珉平焼（淡路焼）に関する文献等一覧」として一括して掲載している。



第５図　淡路島およびその周辺

第１節　珉平焼の創業から淡陶社設立

珉平焼は、明治時代初期から多数の文献等に淡路焼あるいは珉平焼の名称で記載されており、その存在を確認することができる。そのうち、珉平の嫡孫、賀集輝吉の手記による『淡路焼創業者賀集珉平傳附陶窯沿革之梗概』（以下、『珉平傳』）は、和綴じ約30枚にわたり、「賀集珉平傳」「附録　珉平歿後陶器業沿革ノ概略」と題して、珉平焼（淡路焼）およびその後について詳細に記録されている。この『珉平傳』は和紙の袋に収められており、その表紙には「賀集珉平傳　附陶窯沿革」、裏表紙には「明治三十九年十二月　為淡陶株式会社委嘱　賀集輝吉筆記」と記され（写真１・２）、珉平焼の製陶技術を受け継いだ淡陶株式会社から委託された輝吉が珉平の遺墨および文書類を整理してまとめたものといわれている。この『珉平傳』は、翌年正月、謄写本にして淡陶社員に配布されたが、現在では数冊が残っているのみである[1]。ここでは、『珉平傳』から、珉平の業績および珉平焼の創業から淡陶社の設立までを時代を追ってみていきたい。

珉平焼の創業者、賀集珉平は、寛政八（1796）年正月、三原郡伊賀野村に生まれる。幼名は豊七または三輪蔵といい、成人して三郎右衛門と改め、そののち再び、豊七郎とし、珉平と名乗ったのは三十五、六歳の頃といわれている。諱は惟一、字は子精蟻巣また容膝窠主人と号した。父は伊賀野村の庄屋職三郎兵衛、母は同村欅田善九郎（五代）の長女美津子で、珉平はその嫡子である。幼少の頃から才学に優れ、長じて漢籍、国典、医術、和歌、香道、茶技（煎茶道）、さらに俳諧、挿花、絃曲歌舞を学び、とくに香茶は奥義を極めた。

庄屋職を末弟の恒左右衛門に継がせ、自身は醤油醸造あるいは漁業を興したが、和泉国において偶々京焼の陶工尾形周平と出会い、醤油醸造場に陶窯を築き製陶を始めるようになる。その後、池之内村（現、洲本市木戸）において白土を発見し、陶器に適することがわかり、邸内に大規模な陶窯数基を築き、各地の職工を雇い入れ、さまざまな古陶を模造した。

天保三（1832）年、珉平三十七歳の時、漁業を廃し、京都の尾形周平を訪ね、数ヶ月製陶を学んでいる。帰島に際し、周平を淡路に招き、約一年半の間、ともに製陶業を行い、これより以降、土石釉薬の性質・製作焼成の工術を極めている。そして、自らも多くを発見し、生産の規模を拡張することによって、淡路の陶工珉平の名を広めていった。さらに自ら所有する黄南京花瓶の色艶を模造するため、研究を重ね、ついに池之内白土をもって、寸分違わない黄南京の器物を製作することに成功した。併せて、緑・紫・白・浅黄・柿色・玉黒等の釉薬を施した製品も完成させたことにより、珍奇として広く一般に出回り、淡路焼の名声を高めた。以後、淡路焼または珉平焼といえば、黄・緑・その他の釉薬を施した器物を指すこととなった。さらに、青花磁・安南・絵高麗・白高麗・青磁・赤絵・仁清彩色・紅毛彩色・石白彩色・紫泥・白泥・象眼焼・錆焼・朝鮮模製・交趾模製等、それぞれに土石を探り、釉薬を究め、ことごとく成功を収めている。

これにより、藩主蜂須賀公から徳島城内へ召され、「御用御陶器師」の称と「勝瑞」の称号を与えられた。この後、陶器に関する名義は「勝瑞珉平」と名乗るようになった。藩主は、珉平の邸外近くに別の陶窯を築かせ、それを珉平に監督させ、幕府を始め諸侯への贈答用に調達するよう命じた。また、珉平からは藩主に対し、年初に大服茶碗、中元に煮取壺各二対を献上することが恒例となった。

珉平焼の営業の発展にともない、珉平自ら大阪西横堀に店舗を開き、淡路屋伊兵衛という名で珉平焼の専売店を開いた。しかし、数年後にはその販売業を近州日野の商人辻惣之助に譲り、別に親戚の欅田

善九郎の弟益蔵に小売店舗を開かせ、自身は製造業に専念した。その後、藩の陶窯の営業は珉平に委託されたため、自己の陶窯と合わせ営業を行うこととなった。珉平の家産は、陶業による研究・改善を重ねることにより、すべてを使い果たし、負債を背負うようになったが、外戚の欅田勇左右衛門から資金援助をうけ、さらに販路を広めていった。安政四（1857）年、陶業の会計を担当していた弟の恒左右衛門が珉平に先立って亡くなった。

安政六（1859）年十一月、藩主蜂須賀公（第13代　斉裕）は珉平の邸宅を訪れ、陶器製造を実見され、二日間滞在された。また、文久二（1862）年、珉平は横浜開港の状況と江戸藩邸における世間の形成を知るため、東行し約一年間藩邸に滞在した。その時、外国産の陶器標本および図案を蒐集し、持ち帰った。

慶応二（1866）年三月、藩主蜂須賀公（斉裕）は、再び珉平の邸宅を訪れ、前回にも増して親しくされ、二日間滞在された。慶応三（1867）年、欅田勇左右衛門が陶業の会計を止め、さらに幕末の時期、藩からの保護もなくなり、財政的にも経営は苦しくなった。この時、三原郡福井村の土井忠四郎という者が営業全般を引き受けることを願い、珉平はやむを得ず年限を定め、これを託した。土井は珉平の甥、賀集三平（恒左右衛門の次男）と提携し、これまでの営業を管理継続した。

これより後、珉平は自ら数名の職工とともに別製と呼ばれる高等の器物を製作するようになった。これらは、特に高雅で精良にして、珉平を激賞するものの多くは、この別製ものといわれている。

明治四（1873）年六月、珉平は病に罹り、同年七月十二日、享年七十六歳で郷里の白石山の元で永眠した。珉平の妻、屋津子は欅田勇左右衛門（初代）の三女で、数十人の職工等に慕われていたが、慶応二（1866）年、八月八日、珉平に先立って亡くなった。珉平には長男力太と次男房次郎の二子がいたが、房次郎は夭逝し、家名を継いだ力太も病気がちであった。明治二十七（1894）年二月十七日、力太は亡くなり、その長男輝吉が家名を引き継ぎ、現在に至っている。　　「賀集珉平傳」より

珉平の没後は、甥の三平が官庁に願い出て、藩立の陶窯および付属の工場、器具を払い下げられた。珉平の陶窯に属するものは力太に返還したため、この時期、力太・三平のふたつの陶窯が並んで営まれていた。明治十二（1879）年以降、力太に属していたものは、欅田幸吉が資金を投じて協力したが、明治十六（1883）年になり、これを止めようとした。このため、力太の長男輝吉は、珉平の親族、欅田善九郎の分家で大阪の陶器商人、欅田倉蔵・欅田栄次郎・松本益蔵らに出資を求めた。三人は共同出資し、欅田幸吉に属するものを購入し、力太に属するものは受託して製陶業を継続した。さらに、会社組織として、これを「淡陶社」と称し、欅田善次郎が管理することとなった。しかし、しばらくして欅田

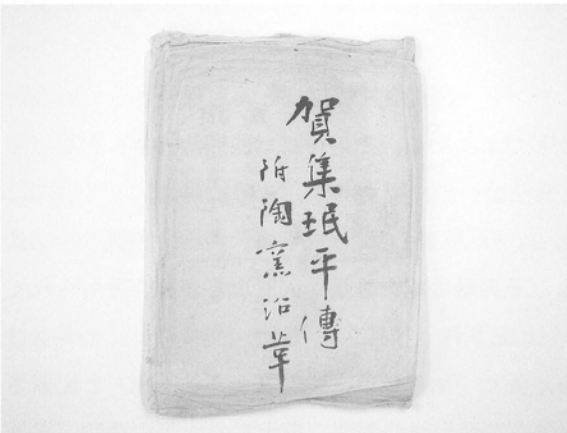


写真１『淡路焼創業者　賀集珉平傳』収納袋（表紙）

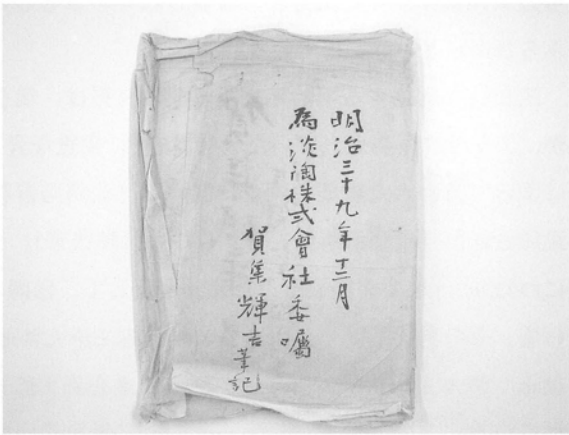


写真２　同　（裏表紙）

善九郎（八代）が代わってこれを管理することになった。

明治十九（1886）年、三平に事故があり、製陶業を止めることとなり、その所有していたものはすべて淡陶社が購入することになった。また、販売店を大阪市西阿波座下通壱丁目に定め、販売額は以前の数倍に増加した。さらに、力太が所有していたものも会社へ譲ることにしたため、珉平の遺業はすべて淡陶社が所有することとなった。

明治二十六（1893）年、商法の実施により、「淡陶株式会社」と改称し、製造事業を欅田善九郎、販売を欅田倉蔵・善作等が担当した。その前後、博覧会・共進会のたびに、数々の受賞を受け、特に明治十八（1885）年六月五日、農商務大臣より、故人賀集珉平に追賞の便りと金弐拾円を与えられた。これによって淡路焼の名声は内外に広まり、珉平が志していた郷里の人々の多くが製陶業によって生計を立てることができるようになった。　　「附録　珉平歿後陶器業沿革ノ概略」より

以上が、『珉平傳』による珉平焼の創業から淡陶社の設立までをまとめた概略であるが、続いて、この『珉平傳』以前（明治39年）に淡路焼あるいは珉平焼について記載された文献をみてみると、製陶産業として農商務省などが記録した文献や、世界各国で開催された万国博覧会の出品目録、外国人の日本コレクションなどに淡路焼としてその名が散見される。さらに、『珉平傳』同様、淡陶社に関係する文献の中にも貴重な資料を確認することできる。これらのうち、万国博覧会および淡陶社に関係する資料の中から、『珉平傳』を補うかたちで珉平焼について説明を加えたい。

幕末から明治・大正にかけての時代、日本政府は世界各国で開催された万国博覧会に日本美術、特に工芸品を数多く出品しており、それらの中に淡路焼も含まれている。明治６（1873）年、新政府は澳国（オーストリア）のウィーン万国博覧会に国家として始めて公式に参加したが、このウィーン万国博覧会および、続く明治９（1876）年、米国（アメリカの独立100周年を記念して開催）のフィラデルフィア万国博覧会の出品目録に淡路焼の名が確認される。ともに出品主は「淡州伊賀野村　賀集三平」「淡路伊賀野村　加集三平」であり、このうち、ウィーン万博では陶器硝子器の有功賞牌の受賞目録にも「土器及茶碗　淡路工人　加集三平」の名がみられる。しかし、『米國博覧会報告書』（明治９年）の日本出品部第三　淡路陶では「（前略）審査官ノ評論ハ遙ニ粟田陶ノ上ニ出デ有功ノ賞牌ヲ得タリシナリ因テ今回米國出品ニハ一層進歩シタル所モアルベシト見做シ官ヨリ特ニ注文ヲ下シタリシニ数品上納シタル器ニハ毫モ澳國博覧会ノ時ヨリ進歩シタル所ヲ見ズ且ツ前ニ記シタル澳國出品ノ太鼓形蓋物ノ同品ヲ送レリ而シテ其品位ハ前ノモノニ比スレバ甚タ劣リ（中略）今出品スルトコロノ物モ粟田ノ平凡ナルニハ下ルベキモノニ非ザルヲ以テ審査ノ報告書ニハ之ヲ賞賛シタリト雖ドモ賞牌ハ得ザリシナリ今ヨリシテ後其レ努力スル所アレ」と記され、賞賛されているものの、前回（ウィーン万博）の出品作品に比べ、進歩がみられないとの評を得ている。

淡陶社に関係する明治・大正年間の資料は、現在のダントー株式会社にはほとんど保管されていないが、淡陶社に勤務されていた元社員宅[(2)]に貴重な資料が残されている。その中には、明治19年、賀集三平によって書かれた釉薬の調合に関する『淡路陶器彩色薬法記』や、明治39年、能勢敏雄によって詳細に記録された『釉薬沿革報告書』（以下、『釉薬書』）がある。『釉薬書』は、『珉平傳』同様、和綴じ約50枚にわたり、「釉薬調和製造沿革書」と題して、色調およびその釉の配合分量、火度などが書き連ねられている。その表紙には「自明治廿四年至仝三拾九年七月」と記され（写真３）、また、文中にも「右報告仕候也　明治三十九年七月十日　淡陶株式会社支配人釉薬係り　能勢敏雄　淡陶株式會社御中」と記載されている。この『釉薬書』は、その成立年あるいは記述内容が今回の調査で出土した大半の遺物（陶器

類およびタイル）と重なるものであり、非常に興味深い資料と考えられた。このため、第５章（第２節　出土遺物の釉薬分析）では、遺物の釉薬分析に加え、『釉薬書』の文中に記載されている色調および配合と遺物の釉薬との比較等について若干の分析を実施した。

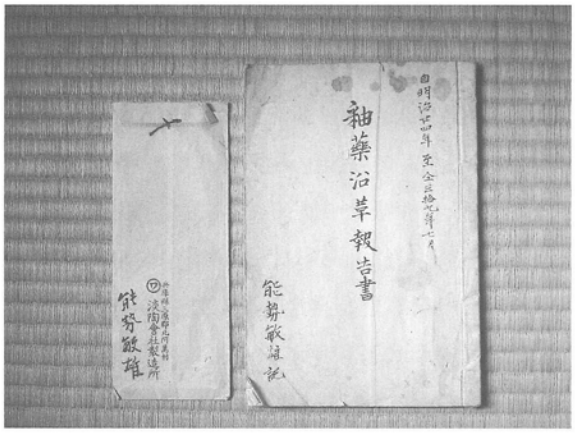


写真３　『釉薬沿革報告書』（表紙）

『珉平傳』以後の明治・大正年間に珉平焼について記載されたその他の資料としては、大西林五郎編纂『日本陶器全書』（大正２年）や大西林五郎・藤井理伯編纂『陶器全書續編　日本陶工傳』（大正９年）、妹背尚古による『淡陶畫工沿革』（大正13年）などがみられる。また、大日本窯業協会が『大日本窯業協会雑誌』に連載発表し、のち全４編、５冊にまとめられた『日本近世窯業史』（大正12年）の第３編　陶磁器工業の第４章（発展期　「（巳）淡路國」）には、淡路焼の史傳および技術についてそれぞれ複数の説が報告されている。そこには、『珉平傳』の記述と若干異なる部分もみられるため、その部分を抽出し、比較していきたい。なお、淡路焼の史傳の冒頭には、「淡路焼は晩出の陶窯なるも、多数の傳記中には既に不一致を示せるものあり。而も其始め雅趣ある小製作に起り、為政者の愛護を受け、遂に普通の産業に進めるは、一般陶業の進路と正に相符号せり。（中略）（編者鹽田力蔵は、明治二十九年を以て當地を訪問せしが、茲には委細を記するの餘地を有せず。）當地の陶業は、其系統より見て、京窯式に起れるを認知さるゝも、明治以来は幾次の進歩擴張を經て、東國の原料或は西國の窯式等を加味せるものあり。（後略）」と記載されており、陶磁研究家の鹽田力蔵は珉平没後約25年、淡陶社の設立から約10年後に淡路を訪れ、その製陶業の状況を実見している。

（前略）文政十二年（1829）年、醸醤の本業を廃して、専ら製陶に従事し、黄色、青色の釉を發明した。天保五（1834）年、京師に赴き、周平（尾形）を伴って帰り、共に陶事を研究し、二年後、周平は離島した。（中略）天保九（1838）年、茶褐釉、欝白釉を創製し、同十三（1842）年、藩主蜂須賀氏は資を出して官窯を築き、珉平に監督させた。同十四（1843）年には、支那青華陶、畫高麗、および艶黒の諸釉を発明し、この時期、収入の価格が近隣十一村の収穫米価と同等になった。文久二（1862）年、珉平病を得、業を恒左右衛門の子三平に託し、慶応三（1867）年に三平は官窯を監督するようにもなった。明治三（1870）年、珉平は没した。家に資産はなく、陶業上の負債も数千円もあったといわれるが、珉平焼は我が国の一大物産となった。加集三平（元は賀集の字を用い、加集に改姓）と欅田善次郎が製陶業を継続したが、同五（1872）年三平は、官窯を購入、独立し、善次郎は珉平の子力太が病によって廃業することを惜しみ、同十六（1883）年、本窯を購入し、之を回復した。また、同じ年の五月、津名郡洲本に珉平窯の工人、田村久平が一窯を創築して、珉平焼を業とした。　『府縣陶器沿革陶工傳統誌』より

珉平が京師に出て某公卿に仕えたのは文政年間（1818～1829）の事で、伊賀野村の築窯は天保五（1834）年である。尾形周平は一年間、淡路に留まり、また、珉平の製出する青磁は七貫青磁といった。（中略）安政年間（1854～1859）には、藩主より勝瑞の姓（後ち本姓の賀集に復す）および資金を賜い、手窯および御窯の二種を設けた。手窯は珉平が随意に製造し、販売するのを任され、御窯は藩候の用品を製造することとして、吏員を派して監督させた。明治六（1873）年、珉平は六十七歳で没した。同十二（1879）年、親族の欅田幸吉が業を担当し、始めて外国輸出の途を開き、事業は漸く盛んになった。

同十五（1882）年、田村久平も居を津名郡洲本町に移し、陶器製造場を設けた。また、同十八（1885）年五月、賀集の窯は親族が相謀って之を購入し、大いに改善し、その後、益々海外の輸出に努めた。鴻白色、浅黄、水色浅黄、三島、紫、紺青等の各色を発明し、産額の八分は外国に輸出していった。田村の窯はその後、砂金焼を発明し、専売特許を得た。　横井時冬の記述より

以上ふたつの説と『珉平傳』では、珉平の没年はいずれも異なり、築窯の時期（天保５年）や釉薬開発の時期（天保９・14年）、外国輸出の時期（明治12年）など『珉平傳』ではみられない記載が確認される。また、『日本近世窯業史』には「能勢敬三の調査によれば」とした詳細な記載がみられるが、その内容および年代は、『珉平傳』とほぼ同一であり、『珉平傳』を参照した可能性が考えられる。さらに、淡路焼の史傳と併せ、淡路焼の技術として、粘土の精製から釉薬の配合、轆轤および型による製品の成形、締焼窯と釉焼窯あるいは乾燥窯（コーカシ窯）などの窯やその火度についても記載されている。この『日本近世窯業史』は、遺構および出土遺物と対照できる同時期の資料として、『釉薬書』と同様、非常に興味深い文献であり、第６章　遺構・遺物の検討において、改めて触れてみたい。

第２節　淡陶社から現在のダントー株式会社

珉平の没後、その子力太と甥の三平が引き継いだ製陶業は、明治16（1883）年、「淡陶社」として会社組織となり、さらに発展を遂げていくことになる。淡陶社は、明治26（1893）年、日本郵船に次いで日本で２番目の株式会社「淡陶株式会社」と改め、創業100周年[3]の昭和60（1985）年には「ダントー株式会社」に社名を変更し、現在に至っている。第１節では、明治・大正年間の文献を中心に珉平焼の創業から淡陶社の設立までを中心にみてきたが、ここでは、会社組織となった淡陶社（以下、淡陶株式会社を含む）における製陶産業および、のちに生産の主体となるタイル[4]について、昭和・平成年間の文献を中心にその変遷をみていきたい。

まず、淡陶社の変遷を『日本のタイル文化』（昭和51年）あるいは『三原郡史』（昭和54年）から社史的に概観すると、明治16年の会社設立時の資本金は１万円であったが、同26年には３万円に増資し、タイル生産も開始している。製陶業は、池ノ内土を原料とする食器・花器・茶器などの軟質陶器を生産し、販売は海外へも広がっている。また、同23（1890）年から大阪阿波座に妹背尚古ら専属の絵付画工数人を雇い入れ、淡路から送られてくる生地に絵付を行う淡陶画工場を設置している。同35（1902）年には資本金は５万円となり、このころ硬質陶器を生産していた製陶業と併行して、輸入タイルと同レベルの国産タイルを完成させ、日本のタイル製造の先駆けとなっている。さらに同41（1908）年には乾式成形によるタイル生産を成功させ、成形機による本格的なタイル製造を開始、以後、動力設備や倒焔式窯の採用など技術革新を行い、順調に拡張を続けている。同42（1909）年の内国生産品共進会、同43（1910）年の内国勧業博覧会、同44（1911）年の貿易品生産共進会などで淡陶社のタイルは次々に受賞し、その技術の高さを示している。

大正３（1914）年には資本金は10万円となり、同７（1918）年には内装用壁タイル専門の製造工場として福良工場（南淡町福良）が操業を開始し、資本金は50万円に増資している。同10（1921）年の淡陶社の経営規模を示す資料には、工員数436人、生産価額は86万円を超えたといわれ、同12（1923）年には東京支店を開設している。同年９月１日、相模湾を震源とするマグニチュード7.9の大地震が南関東地域に甚大な被害をもたらした（関東大震災）が、その震災復興では建築用材としてのタイルの需要が一気

に高まった。しかし、珉平焼を継承した製陶業は、タイルの生産高の増加と反比例するように大正末から昭和初期に生産は廃され、淡陶社の経営はタイル製造の専門会社へと替わっていった。

昭和の時代に入ると、9（1934）年には大連・天津に出張所を開設、同12（1937）年にはドレスラー型のトンネル窯を採用し、タイル製造は近代化、大量生産の工業製品時代へと進んでいった。しかし、同14（1939）年をピークに生産量は急下降し、時勢も日中戦争から大東亜戦争へと続き、石炭など物資の配給は規制された。また、同15（1940）年、タイルは非国策品となり、高率の物品税が掛けられ、さらに戦時中、淡陶福良工場は航空機用品製造研究と耐火煉瓦製造の重点工場となり、ドレスラー型トンネル窯も解体、海軍の軍需工場に供出されている。戦後、進駐軍によるタイル需要により、戦後まもない同23（1948）年には、進駐軍需要の額が2億円に達し、タイル業界は復興を果たしている。淡陶社も内外特需や高度経済成長期を経て、同37（1962）年には栃木県宇都宮に工場を建設、同41（1966）年に資本金は10億円となった。その後も技術革新を進め、タイルの多様化に対応し、世界でも有数のタイル専門の製造会社として、現在に至っている。

以上のように、淡陶社の経営状況をみてみると、大正時代の終わりとともに陶器生産は終焉し、タイル製造へと大きく変換している[5]。珉平焼の技術を継承し、内外で高い評価を得ていた淡陶社の製陶業については、『工學博士　北村彌一郎窯業全集　第三巻』（昭和4年　以下、『窯業全集』）に明治45年3月の状況として、原料・坏土の種類・成形・焼成火度・釉・窯・職工賃金などが項目毎に記載されている。前述した『日本近世窯業史』には「（前略）編者鹽田力蔵は、明治二十九年を以て當地を訪問せしが（後略）」とあるように明治中期の珉平焼（淡路焼）の史傳と技術が記載されているが、さらにその後の状況を知る資料として、『窯業全集』をみてみたい。原料は「（前略）池ノ内土の發見ありて初めて淡路焼確立せり其以前の製品は青華寫ありしのみ發見者は尾形周平とす（中略）淡陶社の蝋石使用は明治三十年頃にして（後略）」と尾形周平によって池ノ内土は発見されたとし、坏土の種類は「（前略）珉平翁の晩年には窯内火度により之を3分し最強なる上部に天草7分に池ノ内土3分を加へしものを、中部には池ノ内土單味のものを、下部の最も火度低き所には柿土なる赤粘土の製品を窯詰せりと云へり（後略）」、釉は「石灰分に柞灰を用ふ」とそれぞれ記載されている。また、窯は「登窯と松村窯とを使用す　登窯は2筋にして1は素地焼用、1は釉焼用とし松村窯は2とす（後略）」と記載された後に、素地焼用窯の9室の室名・焼成時間・所要薪材束数、釉用登窯の7室の焼成時間・消費燃料、松村窯の焼成時間（32時間）などが詳細に綴られている。続いて、珉平の高弟であった田村福平が洲本市に興した淡路製陶株式會社（当初、田村製陶所）について、より詳細に項目立てられた記載があり、両社の製陶状況が比較できる。その文末に販路として「大阪の辻惣を本社の一手販賣店とす　最近5年間の平均は外國行60％、内地向40％にして外國行は米國を主とし英國にも行けり（淡陶社は内地向の方多からんと田村氏云へり）」と記載され、当時の販売状況の一端を知ることができる。

昭和以降、珉平焼に関する文献に目を通してみると、前述した『珉平傳』を元に書かれた概説的なものが多く、その他、地元淡路の先覚者として珉平を顕彰する展示会やその講演記録などがみられる。昭和50年代後半から平成初頭には、洲本市の淡路文化史料館で開催された『珉平焼展』を始め、高津全雄および野口早苗によって珉平焼の新たな調査・研究が行われている。

高津全雄による『珉平焼に就いて考察』（平成6年）は、賀集家に伝わる古文書3冊、『陶器竈建物諸道具取調帳』（明治三庚午年　八月十二日　以下、『取調帳』）・『陶器用諸機械調査記録』（明治十二年酉旧七月　以下、『調査記録』）・『陶器製造用建物諸機械調査簿』（明治十六年八月　以下、『調査簿』）

を活字化し、珉平焼の製作について私見を述べたものである。それらを参照すると、『取調帳』は、「窯拭建物之分」と「諸道具分」に分かれ、珉平晩年の明治３年頃の窯場と窯道具の数量が記されており、合計16棟の建物が立ち並ぶ大規模な陶器製作所であったことが窺える。続く『調査記録』には、「南京焼鞘ノ部　一　小判鞘　五百九十七　一　大判鞘　四百八十弐（中略）一　大丼丸鞘　百貳十四（後略）」、「陶器形ノ部　（前略）色画鳳花縁　一　六寸皿　貳ツ　一　花縁丼中　五ツ（中略）一　小判　百七十三　一　豆判　四十三（後略）」、「同種形ノ部　（前略）龍彫（中略）一　小判　弐ツ　一　豆判　三ツ　一　角中皿　貳ツ（後略）」など膨大な量の窯道具や形（型）がひとつひとつ記されているとともに、「焦窯　弐ツ」[6]の記載がみられる。さらに『調査記録』から４年後の『調査簿』にも、より詳細に陶器製造に係る建物および諸機械（道具類）が記され、末尾には「営業人　欅田善次郎　竈元　賀集力太　証人　欅田幸吉　証人　松本益蔵」ら淡陶社設立に関与した人物の名前がみえる。また、野口早苗も珉平に関係する古文書類を読解し、珉平焼の調査を進めているが、加えて、昭和40～50年代を中心に淡陶社の社長であった欅田氏や元社員からの聞き取り調査を行っている。それらの中に今回の調査地について、触れているものがあり、最後に紹介したい。『コーカシ窯出現』（平成16年）[7]は、発掘調査が行われた後に発表されたものであるが、その文中に昭和50年前後、淡陶株式会社の社長をされていた欅田均氏とともに、珉平が製陶事業の繁栄を願って建立した淡陶工場の裏山にある陶器神社の案内の途中、「今歩いているこの辺一体は山と山との谷間であったのが百年も前から不良品（天保期に開窯の珉平焼の陶磁器）の捨場所になっていて、破片だらけの隙間から木が生え落葉が積って埋ってしまい谷だったところがこんな状態になっとる。ここには江戸時代から明治大正昭和にかけてのダントー製品の歴史が埋まっている」と伝え聞いている。調査が行われる前の平成９年６月に撮影された調査地周辺の写真（写真図版１・２）や調査区の状況は、その言葉を裏付けるような状態であった。

注(1)　今回、珉平焼に関する資料を明治・大正年間に淡陶社の社長を務められた田中家より多数借用させていただいたが、その中に良好に保存された『珉平傳』が含まれており、写真掲載の許可をいただいた。

注(2)　能勢家は、『釉薬書』を記録した能勢敏雄やその子息でタイルの乾式製法を完成させた能勢敬三が淡陶に勤務、のち役員となられたが、その時期の資料等が保存されており、『釉薬書』についても写真掲載の許可をいただいた。

注(3)　『珉平傳』では、明治16年に会社組織として淡陶社が設立した記載がみられるが、ダントー株式会社の広報誌には、明治18（1885）年、「淡路島、（現）南淡町で欅田善九郎他が、資本金１万円で「淡陶社」を設立」とする記載がみられる。

注(4)　タイルの名称は、それまで敷瓦・模様付瓦・腰張瓦・化粧煉瓦・テラコッタなど25通りの呼び方があったが、大正11（1922）年、全国タイル業者大会が開かれ、「タイル」の名称に統一することが決められた。

注(5)　明治・大正期の大量の陶器生産は、大正末頃に終わったが、記念品等の限られた陶器類の生産は昭和30年代まで続けられていたといわれている。

注(6)　今回の発掘調査で発見されたコウカシ窯と同種の窯を指すものと考えられる。

注(7)　野口早苗　「コーカシ窯出現」『淡友会誌』　社団法人大阪淡友会　平成16年

第４章　調査の成果

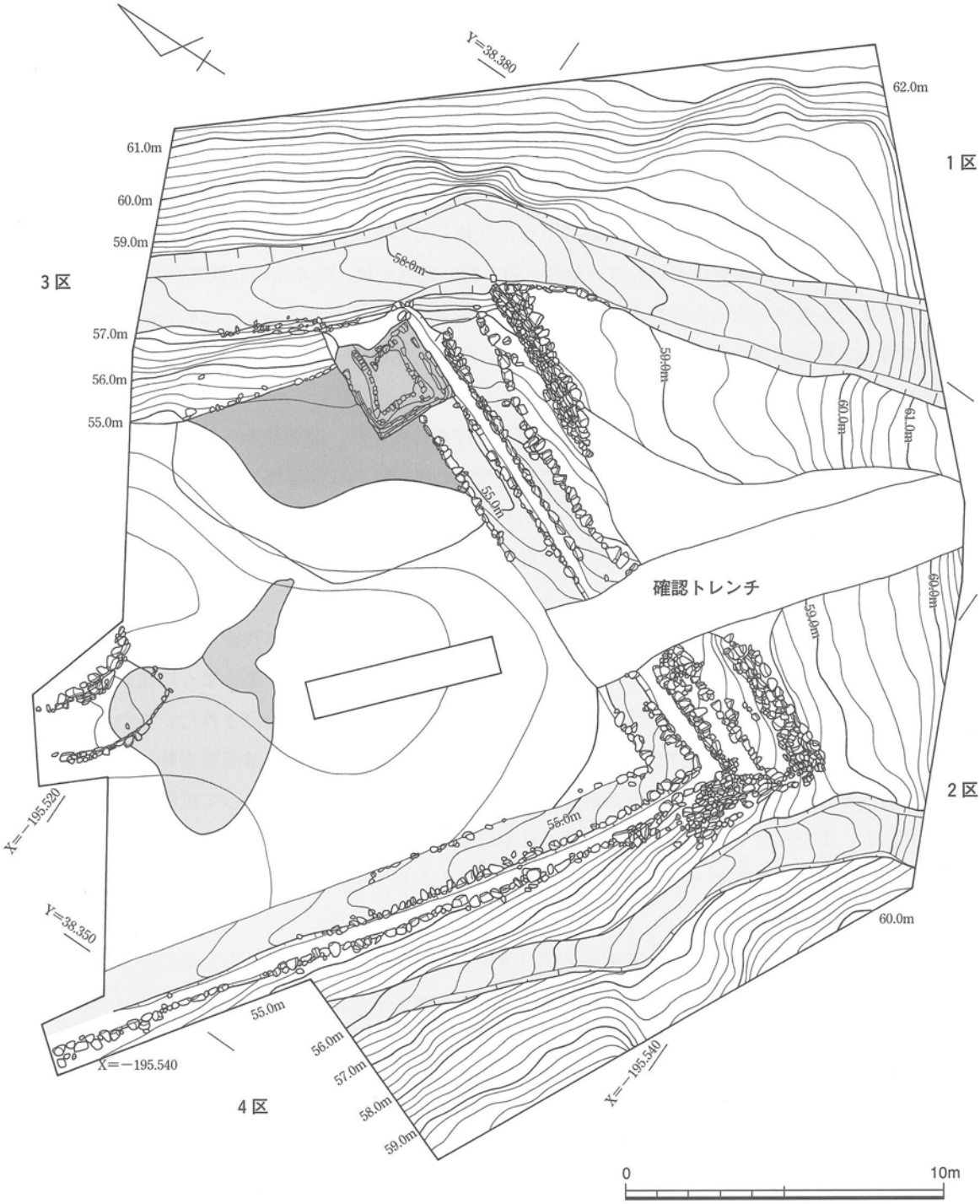
第１節　調査の概要

調査地点は、西方向に∧字状に尾根が張り出した狭い谷間の口部に位置しており、事業路線は両側の尾根をほぼ南北方向に横断するように計画されている。地形的には西側のみが開けているが、西側についてもダントー株式会社淡路島工場が谷を塞ぐように立地しており、調査地は四方を囲まれた舟底のような状況であった。また、調査区の最も高い地点と最も低い地点では、約６ｍの高低差があり、さらに、発掘によって生じる遺物を含めた掘削土量が約1,600㎥におよぶと考えられていた。このため、調査にあたり、事業者および発掘請負業者を交えて協議を行い、南側の尾根の一部を事前に削平し、資材の搬入および掘削残土の搬出路とすることで合意した。

調査は、機械による掘削ののち、人力によって掘り下げを行ったが、調査前から現場にはすでに遺物が散乱している状態であった。確認調査の結果では、今回の調査区内に窯跡等はなく、遺物が廃棄された物原のみであると考えられており、遺物については現場での選択的取り上げを行うこととした。また、選択的取り上げ時の不要品については、当初の設計通り、指定場所に運搬し、掘削土とは分別し集積することとなった。

調査を進めていくに従い、調査区のほぼ中央、北側の斜面裾から、明治40年代から大正時代に操業していたと考えられる煉瓦積みの方形窯（コウカシ窯）が発見され、それをとりまくように造成された石垣・排水路・通路跡・平坦地など、近代窯業の作業場跡と考えられる遺構が確認された。このうち、作業場跡の東側に谷に直交し、遺物投棄層の崩落を防ぐために造られた石垣は、確認調査時にその背後の掘削深度を調べるために、ほぼ中央部分が破壊されていたため、広い範囲にわたって撹乱を受けた状態で検出している。また、コウカシ窯については、日本に唯一現存する可能性が高いもので、淡路地域の貴重な近代の産業遺産であることから、地元南淡町の要望もあり、窯の解体は移築・復元を前提に調査を実施した。

遺物は、窯前面に広がる作業場跡の下層および石垣背後を中心に調査区全域から大量に出土した。このうち、石垣背後の掘り下げについては、安全管理の面から約１割の勾配をつけて掘削を行い、調査終了時には調査区の東壁には、谷を埋め尽くすように高さ約７ｍにおよぶ遺物の堆積層が認められた。この遺物堆積層は、陶磁器類やタイルなどの製品の失敗品だけでなく、窯道具なども含まれ、操業期間中の製品の種類（器種・商品構成）や製陶技術・生産状況など、日本の近世末から近代にかけての窯業の歩みを示す一級の資料と考えられたため、幅約１ｍ、高さ約７ｍにおよぶ範囲の土層断面の剥ぎ取り作業を行った。また、事業者側からも土層断面の保存および活用について申し入れがあり、協議を行ったが、最終的には安全管理の面等の理由から、調査終了後には周囲の法面と同様の工法が行われた。



第６図　珉平焼窯跡　調査区全域図

第２節　遺構

１．遺構の概要

今回の調査では、コウカシ窯が操業していた時期の作業場跡が検出され、それ以前に投棄された遺物堆積層の掘り下げおよび遺物の取り上げ作業を行った。

作業場跡は、調査区のほぼ中央以西に平坦地を造成し、その東側には石垣が積み上げられている。南北両側の斜面では削平あるいは造成が行われ、斜面の裾には２～３石を積み上げた石積みがみられる。また、石垣および南側斜面裾の石積みに沿って排水路が逆Ｌ字状に設けられており、調査区外の西側へと続いている。排水路の内側には、平行して石で区画された通路跡が巡っている。これらの施設は、平坦地の北東隅に構築されたコウカシ窯にともなって造成され、コウカシ窯の操業時には、一帯が作業場として利用されていたものと考えられる。

２．作業場跡

(1)　平坦地（第６・８・９図）

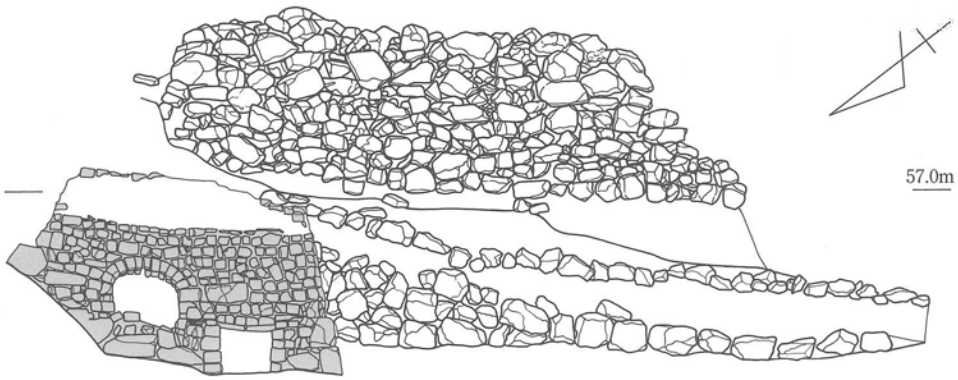
調査区の中央以西からは、東西約18m、南北約15mの範囲に整地された平坦地が広く検出された。調査では北側斜面裾で約８m、南側では約18mを測る台形状に確認されたが、南側斜面裾の石積みおよび排水路の状況から、調査区外の西側へさらに広がっていたものと考えられる。この平坦地は、調査開始時より約0.5mの遺物投棄層を掘り下げた標高約55.0～54.4mの範囲に、周囲の斜面から削り取った土を敷いて造成、整地されたものである。平坦地上面では、コウカシ窯を中心として一辺約５mの扇形に炭を多量に含んだ層が広がり、その南西、調査区中央の西端では被熱を受けた複数の煉瓦の塊が投棄された状態で検出された。これらコウカシ窯から掻き出された炭や窯の構築資材に用いられた煉瓦は、窯の最終操業時にともなって廃棄されたものと考えられる。また、煉瓦塊に西隣した約５m四方の範囲には、厚さ約0.1～0.3mの焼土層が広がり、その下層では両側に４～５石を積み上げた長さ約４m、幅約1.5m、高さ約0.6mを測るコウカシ窯へと向かう「ノ」の字状の進入路跡が検出された。

平坦地の下層全面には、遺物および炭・焼土などが大量に堆積しており、掘り下げを進めていくと最も深い中央北側の地点では約1.8mの掘削深土を測る。谷に平行して設定した土層断面（第８図　縦断土層）および直交する土層断面（第９図　横断土層(1)・(2)）では、炭層・焼土層・素焼きの陶磁器類あるいは窯道具等を含む遺物包含層が何層にも複雑に堆積していることが観察される。谷の底地を埋め尽くしたこれらの層は、下記に記述する石垣背後の遺物堆積層と同様に、コウカシ窯の操業以前に谷の上方（奥）部から廃棄され、堆積したものと考えられ、コウカシ窯の構築時に整地されたものと推定される。

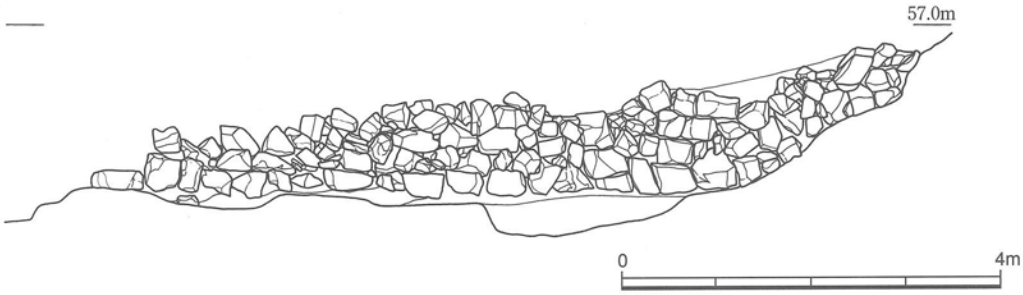
(2)　通路跡・排水路（第６図）

平坦地の東および南側では、逆Ｌ字状に通路跡と排水路が平行して検出された。通路跡は、平坦地側および排水路側に区画のための石が並べられており、東西22m以上、南北約14m、幅約1.2mを測る。平坦地側の石の並びは、南側については一部しか確認されなかったが、わずかに段差を設けるなど平坦地との区画を意図してつくられている。南側斜面裾に沿って東西方向に伸びる通路跡は、90°北に屈曲し、石垣に沿ってコウカシ窯南壁の東半部に至って終了している。

第7-1図



第7-2図

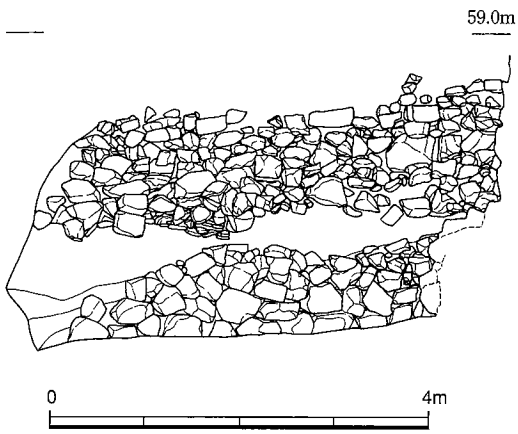


排水路は幅約0.2m、深さ約0.2～0.5mを測り、通路跡に沿って巡っている。排水路の両側は、通路跡および南側斜面裾と石垣下段に積み上げられた石によって明確に区画されている。排水路の下場は、コウカシ窯の東付近では標高約56.3mを測り、石垣の中央部では約55.4mに下がり、角部では約56.0mとわずかに上がるが、調査区西端へは約54.8mと下がっていくことから、排水施設は谷の口部へ向けて造られていたと考えられる。

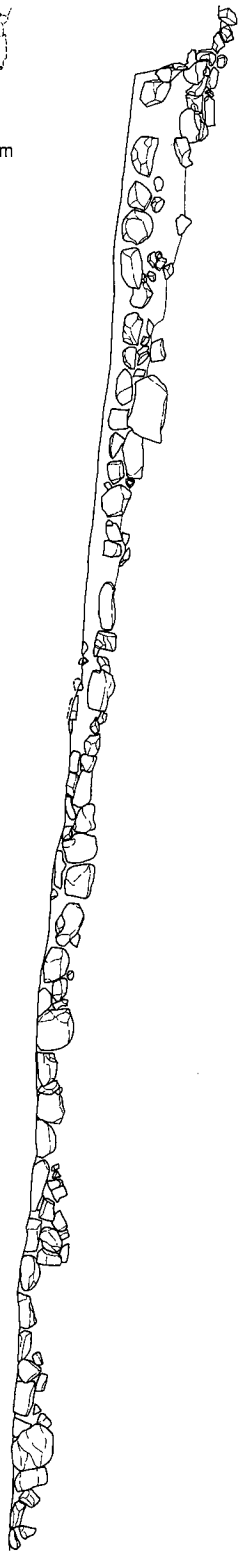
(3) 石垣（第6・7-1～7-3図）

平坦地の東側に谷に直交するように積み上げられた石垣は、ほぼ中央部の約9mにおよぶ範囲とその背後の遺物投棄層が、確認調査時のトレンチ設定によって掘削され、破壊された状態で検出された。調査前には石垣の一部が確認されるのみで、その他は完全に廃棄された大量の遺物によって覆われた状態であり、約2mの遺物投棄層を掘り下げて検出された。残存している石垣の南北両側の状態から、石垣は南北約18.2mにわたり三段に分かれて構築されていたと考えられる。石垣の下段は、中央部で排水路の下場から1石、南北両側へ向けては2～5石を積み上げ、幅約0.6～1.2mの通路を設けている。通路跡は、北側では排水路を挟んでコウカシ窯の東側を通って石垣の上方、谷の口部（ダントー株式会社）から谷の奥部へと上っていく道跡に合流しているが、南側についてはその痕跡は確認されなかった。石垣の中段は、通路の西（谷の奥）側に区画のための石を並べた他は、幅約0.4～0.8m、高低差約0.6mの範囲には明らかに石の積み上げは行われておらず、背後の遺物投棄層が剥きだしになった状態であった。石垣の上段は、標高約57.0mのラインに合わせるように積み上げが始まり、最も高いところで約1.8mを測る。このため、石垣は排水路の下場から三段に分けて約3.6mの高さに積み上げられており、遺物投棄層の崩落を防ぐために階段状に段差を設け、構築したものと考えられる。また、北側の石垣上面では、最上段の石列から南東方向に約45°の角度で屈曲し、長さ約3.8mの石の並びが続いている。これは、谷の奥へと続く道の区画としていたものと考えられる。

第７-４図



第７-３図



第7-1図　石垣北半部見通し図
第7-2図　石垣北半部裏込め最下部見通し図
第7-3図　石垣南半部見通し図
第7-4図　南斜面裾石積み見通し図
第７図　石垣および調査区南斜面裾石積み見通し図

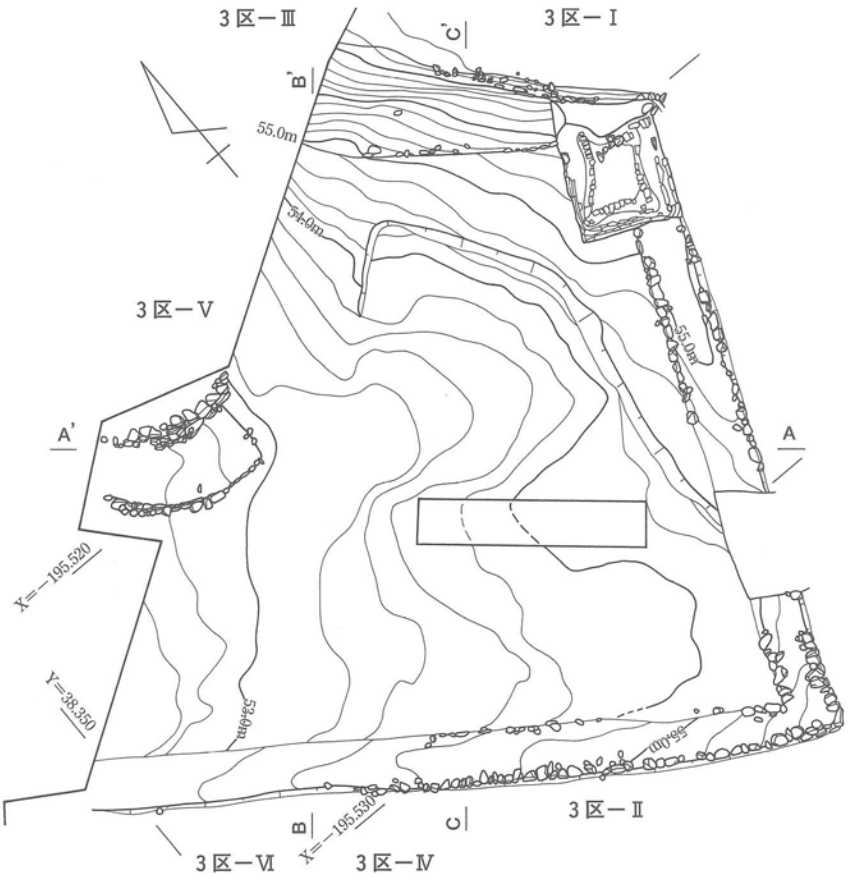
石垣の背後は、遺物が全面を埋め尽くしており、それらを掘り下げ、順次石材を取り上げていくと、石垣の中段より下の部分では、裏側に比較的大形の石材２～４石が裏込めとして積み上げられていた（第7-2図）。これらは、最下部の強度を図るために構築されたものと考えられるが、石垣を含め使用されているすべての石材は周囲の山石を削り出したもので、非常に脆く割れやすいものであった。

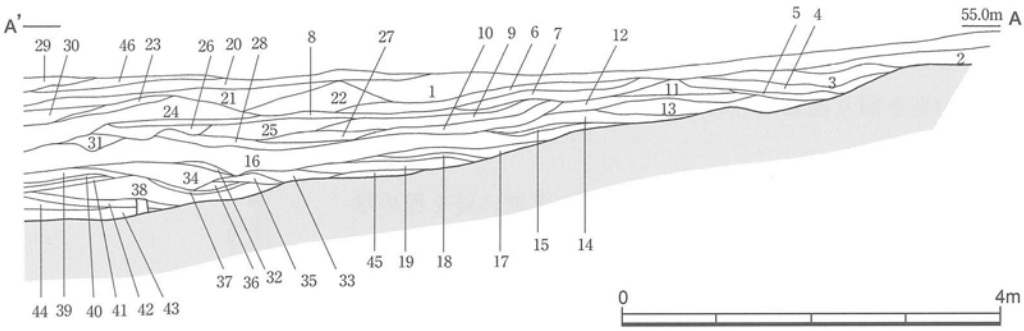
なお、調査終了時には、石垣背後の調査区の東壁に谷を埋め尽くすように投棄され続けた高さ約７ｍにおよぶ遺物の堆積層が認められ、近代窯業における大量生産の状況が窺われる。

(4)　南北斜面

南側斜面の西端は調査にあたり、資材あるいは残土等の搬出入路として一部削平を行ったが、斜面の裾には２～３石を積み上げた石積みが調査区外の西側へも続いているのが検出された。また、斜面東側の石垣と接する角部付近では、幅約５ｍ、高さ約２ｍの範囲にやや煩雑に石が積まれている他、斜面中程には幅１～２ｍの道跡が検出された。

北側斜面の裾には２～４石を積み上げた石積みが検出されたが、排水路は付属しておらず、東端にコウカシ窯が構築されていた。斜面中程では、上方をほぼ垂直に削り込み、幅約1.6～約2.4ｍを測る斜面に平行した道跡を造成している。道跡は、石垣上面の屈曲部で南東方向に曲がり、谷の奥部へと続いている。

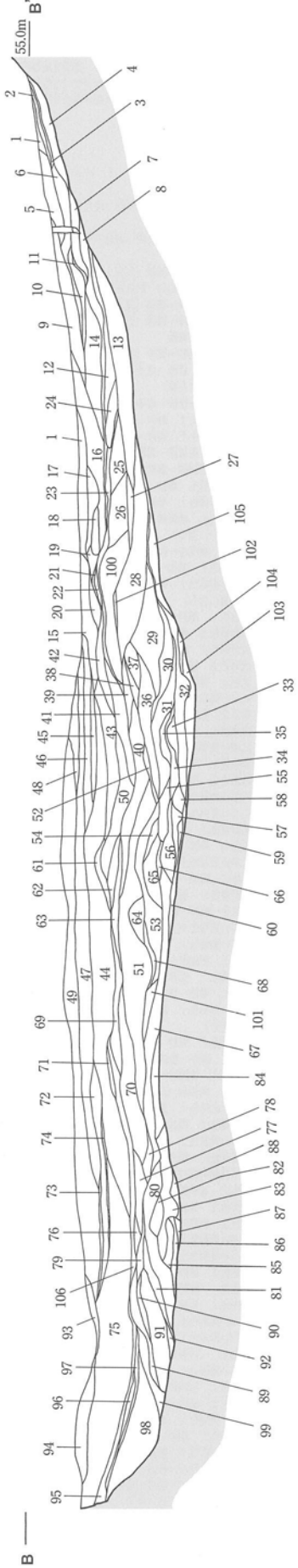




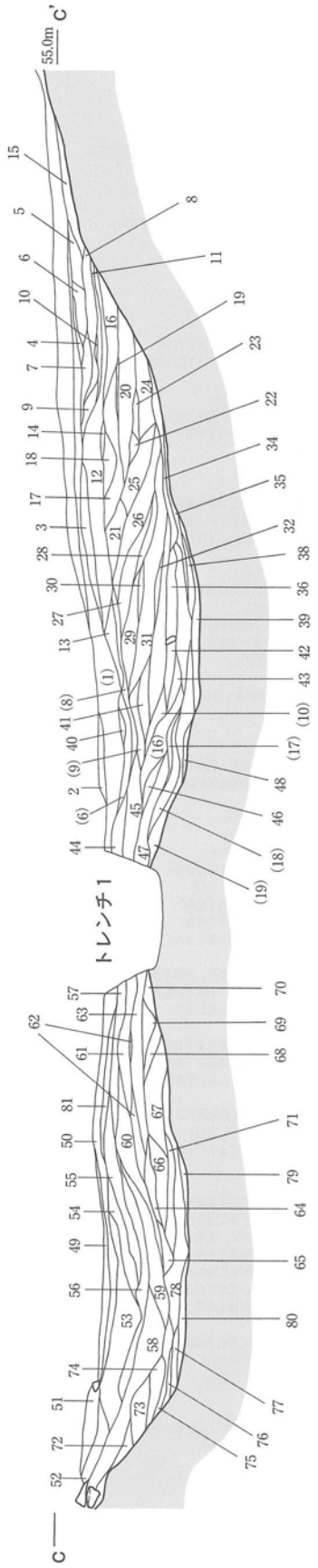
1．10YR 3／2　黒褐色土　細砂（焼土および炭を多く含む）
2．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂
3．10YR 3／2　黒褐色土　極細砂～細砂（炭を多量に含む）
4．10YR 3／1　黒褐色土　細砂～粗砂（炭層）
5．5YR 4／4　にぶい赤褐色土　細砂～粗砂（焼土層）
6．10YR 2／2　黒褐色土　細砂（炭および焼土を多く含む）
7．5YR 4／4　にぶい赤褐色土　細砂（焼土層）
8．10YR 2／1　黒色土　極細砂～細砂（炭層）
9．5YR 4／2　灰褐色土　細砂（焼土を多く含む）
10．5YR 4／8　赤褐色土　細砂（焼土層）
11．10YR 3／2　黒褐色土　細砂（焼土および炭をわずかに含む）
12．10YR 5／3　にぶい黄褐色土　細砂～粗砂（焼土および素焼き陶器片を多量に含む）
13．5YR 5／4　にぶい赤褐色土　細砂～粗砂
14．10YR 4／3　にぶい黄褐色土　細砂～粗砂（焼土および素焼き陶器片を多量に含む）
15．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭化層）
16．10YR 5／3　にぶい黄褐色土　粗砂（砂層）
17．10YR 2／1　黒色土　極細砂～細砂（炭層）
18．10YR 5／3　にぶい黄褐色土　粗砂（砂層）
19．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭化層）
20．10YR 6／6　明黄褐色土　細砂～粗砂（3～10cmの礫を多く含む）
21．10YR 2／1　黒色土　極細砂～細砂（炭層）
22．10YR 4／1　褐灰色土　細砂（素焼き陶器片を多量に含む）
23．7.5YR 4／4　褐色土　細砂～粗砂（焼土粒を多く含む）
24．10YR 3／2　暗褐色土　粗砂（素焼き陶器片を多量に含む）
25．10YR 4／2　灰黄褐色土　粗砂（素焼き陶器片および匣鉢を多量に含む）
26．5YR 4／8　赤褐色土　細砂（焼土層）
27．5YR 4／4　にぶい赤褐色土　細砂～粗砂（焼土層　匣鉢を多量に含む）
28．10YR 1.7／1　黒色土　細砂（炭化層）
29．2.5YR 5／8　明赤褐色土　細砂～粗砂（焼土層　煉瓦を多く含む）
30．2.5YR 5／4　黄褐色土　細砂（3～10cmの礫を多く含む）
31．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂～細砂（炭層　素焼き陶器片および匣鉢をわずかに含む）
32．10YR 2／1　黒色土　細砂（炭層）
33．5YR 4／6　赤褐色土　細砂～粗砂（焼土層）
34．10YR 5／4　にぶい黄褐色土　細砂～粗砂（素焼き陶器片および匣鉢をわずかに含む）
35．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭化層）
36．10YR 4／3　にぶい黄褐色土　細砂～粗砂（素焼き陶器片および匣鉢をわずかに含む）
37．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭化層）
38．10YR 5／3　にぶい黄褐色土　極細砂～細砂（10YR 6／6　明黄褐色塊および焼土・炭を多く含む）
39．10YR 6／3　にぶい黄橙色土　極細砂（粘土層）
40．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂～細砂（炭層）
41．7.5YR 5／6　明褐色土　極細砂（粘土層）
42．10YR 7／6　明黄褐色土　極細砂（粘土層）
43．10YR 5／2　灰黄褐色土　極細砂～細砂（炭および3～5cmの礫・匣鉢などを多量に含む）
44．10YR 2／1　黒色土　極細砂（炭層）
45．2.5YR 5／4　黄褐色土　細砂（炭を多く含む）
46．10YR 3／2　黒褐色土　細砂～粗砂（炭および焼土・3～5cmの礫を多く含む）

第8図　作業場跡および平坦地縦断土層断面図

横断土層(1)



横断土層(2)



（横断土層(1)・(2)のキャプションは、次頁に表記。）

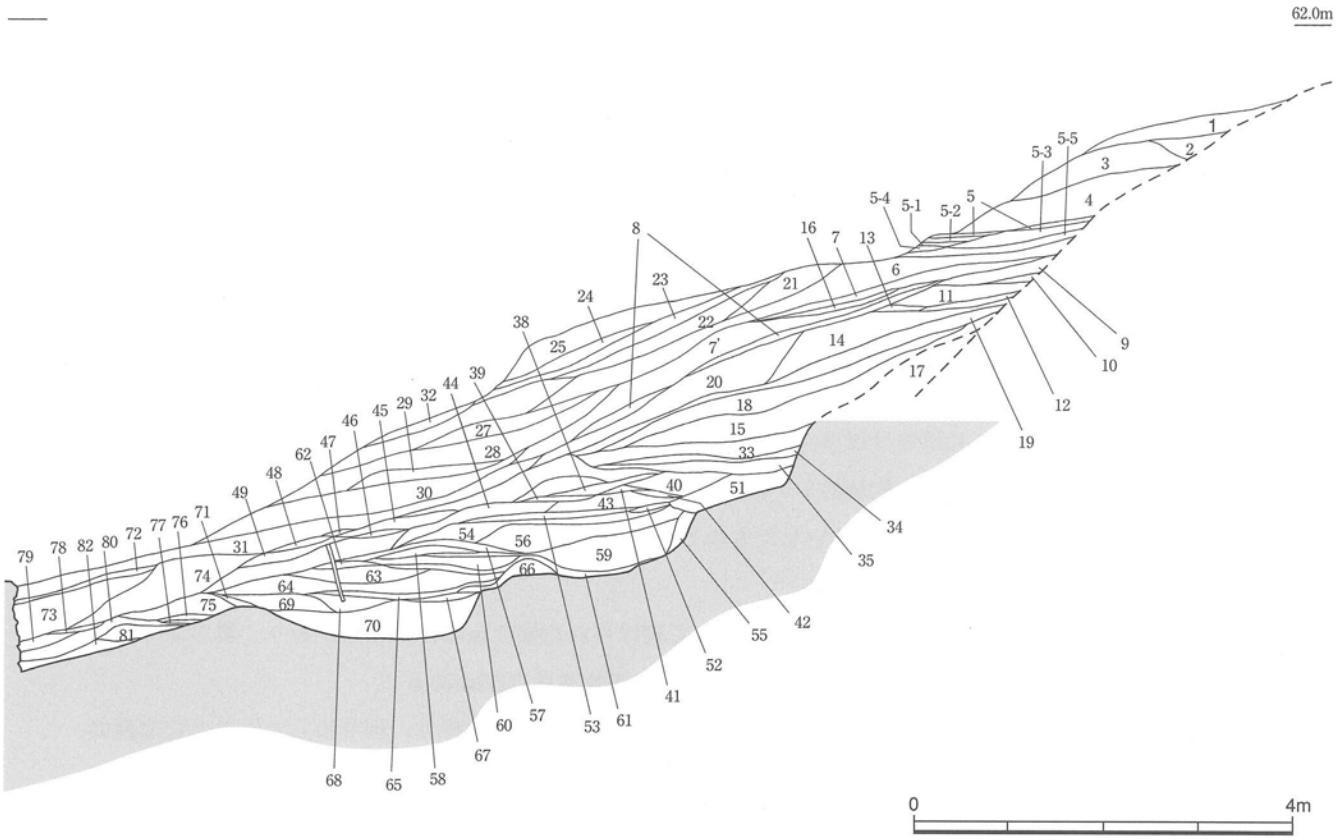
第９図　平坦地横断土層断面図(1)・(2)

横断土層(1)

1．10YR 4／4　褐色土　細砂（焼土粒および施釉陶磁器片を多く含む）
2．10YR 6／4　にぶい黄橙色土　細砂～粗砂
3．10YR 2／1　黒色土　極細砂～細砂（炭層　炭化物を多く含む）
4．10YR 5／4　にぶい黄褐色土　極細砂～細砂
5．10YR 7／4　にぶい黄橙色土　細砂～粗砂（炭および礫を多く含む）
6．10YR 3／2　黒褐色土　細砂（炭および焼土をわずかに含む）
7．10YR 6／4　にぶい黄橙色土　細砂～粗砂
8．10YR 6／4　にぶい黄橙色土　細砂～粗砂（炭をわずかに含む）
9．10YR 6／6　明黄褐色土　細砂（炭および礫・施釉陶磁器片を多く含む）
10．5YR 3／4　暗赤褐色土　極細砂～細砂（焼土層　炭および9層の粒子を多く含む）
11．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層　焼土粒をわずかに含む）
12．10YR 3／3　暗褐色土　細砂（炭および焼土粒を多く含む）
13．10YR 6／4　にぶい黄褐色土　極細砂～細砂
14．10YR 2／2　黒褐色土　極細砂（素焼き陶器片および炭を多く含む）
15．10YR 7／4　にぶい黄褐色土　極細砂～細砂（礫を多く含む）
16．10YR 2／2　黒褐色土　極細砂～細砂
17．10YR 3／3　暗褐色土　極細砂～細砂（素焼き陶器片を多量に、焼土粒をわずかに含む）
18．5YR 6／6　橙色土　細砂（焼土粒を多く含む）
19．5YR 5／6　明赤褐色土　細砂～粗砂（焼土層　素焼き陶器片をわずかに含む）
20．10YR 4／4　褐色土　細砂（炭および素焼き陶器片を多く含む）
21．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層　焼土粒および素焼き陶器片をわずかに含む）
22．5YR 5／6　明赤褐色土　細砂～粗砂（焼土層）
23．10YR 2／2　黒褐色土　極細砂～細砂（炭を多く含む）
24．5YR 4／4　にぶい赤褐色土　細砂（焼土層　匣鉢をわずかに含む）
25．7.5YR 4／4　褐色土　極細砂（炭および焼土塊・匣鉢をわずかに含む）
26．10YR 3／4　暗褐色土　極細砂（焼土塊および匣鉢を多く含む）
27．10YR 1.7／4　黒色土　極細砂（炭層）
28．7.5YR 6／4　にぶい橙色土　粗砂（素焼き陶器片および匣鉢を多量に含む）
29．10YR 5／3　にぶい黄褐色土　極細砂～細砂（10YR 8／2　灰白色粘土および瓦・煉瓦・匣鉢・素焼き陶器片・炭・粘土を多く含む）
30．10YR 5／4　にぶい黄褐色土　細砂（炭および匣鉢を多く含む）
31．10YR 4／2　灰黄褐色土　極細砂～細砂（10YR 8／1　灰白色粘土および灰・匣鉢を多く含む）
32．10YR 5／2　灰黄褐色土　極細砂～細砂（灰および焼土・素焼き陶器片・匣鉢などを多く含む）
33．7.5YR 3／3　暗褐色土　粗砂（砂層　匣鉢をわずかに含む）
34．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂
35．7.5YR 6／8　橙色土　極細砂（粘土層）
36．5YR 4／8　赤褐色土　細砂～粗砂（焼土層　匣鉢および素焼き陶器片をわずかに含む）
37．5YR 4／6　赤褐色土　細砂～粗砂（焼土層　炭および匣鉢をわずかに含む）
38．10YR 2／1　黒色土　極細砂～細砂（炭層　素焼き陶器片および匣鉢を多く含む）
39．7.5YR 4／4　褐色土　粗砂（砂層　匣鉢を多く含む）
40．10YR 4／2　灰黄褐色土　細砂～粗砂（炭を多量に含む）
41．10YR 4／2　灰黄褐色土　細砂～粗砂（素焼き陶器片を多量に含む）
42．10YR 5／4　にぶい黄褐色土　細砂（炭をわずかに含む）
43．10YR 3／3　暗褐色土　極細砂～細砂（炭および焼土・42層の粒子を多く含む）
44．10YR 4／2　灰黄褐色土　細砂（炭および素焼き陶器片・匣鉢を多量に含む）
45．2.5YR 5／4　黄褐色土　細砂（5～10㎝の礫を多く含む）
46．10YR 2／1　黒色　極細砂～細砂
47．10YR 7／6　名黄褐色土　細砂～粗砂（5～10㎝の礫を多く含む）
48．10YR 2／1　黒色土　極細砂～細砂（炭層）
49．2.5YR 5／8　明赤褐色土　細砂～粗砂
50．10YR 2／1　黒色土　極細砂～細砂
51．10YR 2／2　黒褐色土　細砂～粗砂（炭および素焼き陶器片・匣鉢を多量に含む）
52．10YR 5／4　にぶい黄褐色土　細砂（10YR 8／2　灰白色粘土および炭をわずかに含む）
53．10YR 4／4　にぶい赤褐色土　極細砂～細砂（焼土層）
54．10YR 4／2　灰黄褐色土　極細砂～細砂（炭をわずかに含む）
55．5YR 4／6　赤褐色土　細砂（焼土層　匣鉢をわずかに含む）
56．2.5Y 5／4　黄褐色土　細砂（炭および灰白色粘土を多く含む）
57．10YR 4／1　褐灰色土　極細砂～細砂（炭および灰白色粘土を多く含む）
58．10YR 4／2　灰黄褐色土　極細砂～細砂（炭および匣鉢を多く含む）
59．10YR 5／4　にぶい黄褐色土　細砂～粗砂（炭および焼土を多く含む）
60．10YR 5／1　褐灰色土　極細砂～細砂（炭および焼土をわずかに含む）
61．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層　44層の粒子および焼土を多く含む）
62．10YR 6／6　明黄褐色土　極細砂～細砂（匣鉢を多く含む）
63．10YR 6／4　にぶい黄褐色土　粗砂（焼土塊および素焼き陶器片・匣鉢を多量に含む）
64．5YR 4／4　にぶい赤褐色土　細砂～粗砂（粘土層　炭および素焼き陶器片・匣鉢を多く含む）
65．10YR 3／2　黒褐色土　極細砂～細砂（焼土粒および匣鉢を多量に含む）
66．7.5YR 5／8　明褐色土　極細砂（粘土層）
67．10YR 2／1　黒色土　極細砂～細砂（炭層　焼土粒および木片を多く含む）
68．10YR 5／3　にぶい黄褐色土　細砂～粗砂（炭および素焼き陶器片・施釉陶器片・匣鉢を多く含む）
69．10YR 2／1　黒色土　極細砂～細砂（炭層　10YR 7／4　にぶい黄褐色粒および素焼き陶器片・匣鉢を多く含む）
70．5YR 5／8　明赤褐色土　細砂（焼土層　10YR 6／6　明褐色塊および炭・匣鉢をわずかに含む）
71．5YR 5／6　明赤褐色土　細砂（焼土層　素焼き陶器片を多く含む）
72．10YR 4／3　にぶい黄褐色土　極細砂～細砂（素焼き陶器片および47層の粒子を多く含む）
73．10YR 4／2　灰黄褐色土　極細砂～細砂
74．10YR 6／4　にぶい黄褐色土　細砂～粗砂
75．10YR 3／2　黒褐色土　細砂（炭および焼土・素焼き陶器片を多量に含む）
76．10YR 5／3　にぶい黄褐色土　細砂～粗砂（焼土粒をわずかに含む）
77．10YR 4／3　にぶい黄褐色土　細砂～粗砂（焼土をわずかに、素焼き陶器片を多量に含む）
78．7.5YR 4／3　褐色土　極細砂～細砂（焼土および素焼き陶器片を多く含む）
79．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層　素焼き陶器片をわずかに含む）
80．7.5YR 4／6　褐色土　細砂（焼土層　素焼き陶器片および匣鉢をわずかに含む）
81．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層　焼土塊および灰白色粘土を多く含む）
82．7.5YR 4／3　褐色土　細砂～粗砂（匣鉢を多量に含む）
83．10YR 2／2　黒褐色土　極細砂～細砂（炭層　焼土および素焼き陶器片・匣鉢を多く含む）
84．5YR 5／8　明褐色土　細砂（焼土層　67層の粒子を多量に含む）
85．10YR 3／2　黒褐色土　極細砂～細砂（素焼き陶器片を多く含む）
86．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層）
87．10YR 5／3　にぶい黄褐色土　細砂（炭を多く含む）
88．10YR 5／4　にぶい黄褐色土　極細砂（炭および素焼き陶器片・瓦を多く含む）
89．2.5Y 5／3　黄褐色土　細砂（素焼き陶器片および匣鉢を多く含む）
90．5YR 5／6　明赤褐色土　細砂（焼土層）
91．7.5YR 4／3　褐色土　細砂～粗砂（炭および焼土塊、匣鉢を多量に含む）
92．7.5YR 4／3　褐色土　細砂～粗砂（炭および匣鉢を多く含む）
93．10YR 2／1　黒色土　細砂～粗砂（焼土粒および素焼き陶器片・施釉陶器片をわずかに含む）
94．10YR 6／4　にぶい黄橙色土　極細砂～細砂（礫を多く含む）
95．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層　素焼き陶器片を多く含む）
96．10YR 6／4　にぶい黄橙色土　細砂（および素焼き陶器片をわずかに含む）
97．5YR 4／6　赤褐色土　極細砂～細砂（焼土層）
98．7.5YR 5／3　にぶい褐色土　粗砂（炭および素焼き陶器片をわずかに含む）
99．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層　10YR 8／1　灰白色粘土が帯状に堆積）
100．7.5YR 4／4　褐色土　細砂（焼土塊および煉瓦・匣鉢を多量に含む）
101．2.5Y 5／4　黄褐色土　細砂（炭をわずかに含む）
102．10YR 2／1　黒色土　極細砂（炭層　素焼き陶器片をわずかに含む）
103．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂～細砂（炭層　32層の粒子を多く含む）
104．10YR 4／2　灰黄褐色土　細砂（炭および焼土・素焼き陶器片をわずかに含む）
105．2.5Y 5／3　黄褐色土　極細砂～細砂（炭をわずかに含む）
106．10YR 6／2　灰黄褐色土　極細砂～細砂（素焼き陶器片を多く含む）

横断土層(2)

1．10YR 1.7／1　黒色土　炭化層（10YR 4／3　にぶい黄褐色粒を帯状に含む）
2．10YR 1.7／1　黒色土
3．5YR 4／4　にぶい赤褐色土　細砂～粗砂（焼土層）
4．10YR 3／2　黒褐色土　細砂
5．10YR 2／2　黒褐色土　極細砂～細砂（素焼き陶器片および焼土塊えを多く含む）
6．5YR 6／6　橙色土（砂層）
7．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂～細砂（炭層）
8．10YR 4／4　褐色土　細砂～粗砂（素焼き陶器層）
9．5YR 4／6　赤褐色土　細砂～粗砂（焼土層）
10．10YR 2／1　黒色土　極細砂～細砂（炭層）
11．10YR 6／6　明黄褐色土　細砂
12．10YR 1.7／6　黒色土　極細砂～細砂（炭層　匣鉢および煉瓦ブロックを多く含む）
13．5YR 5／6　明黄褐色土　粗砂（焼土層　素焼き陶器片をわずかに含む）
14．10YR 8／1　灰白色　（粘土層）
15．10YR 3／1　黒褐色土　極細砂～細砂（炭をわずかに含む）
16．5YR 4／4　にぶい赤褐色土　細砂～粗砂（焼土層　素焼き陶器片を多量に含む）
17．5YR 5／3　にぶい赤褐色土　細砂～粗砂（焼土層　礫および素焼き陶器片をわずかに含む）
18．7.5YR 4／2　灰褐色土　極細砂～細砂（焼土粒および炭を多く含む）
19．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂～細砂（炭層）
20．5YR 6／4　にぶい橙色土　粗砂（素焼き陶器片を多量に含む）
21．5YR 4／4　にぶい赤褐色土　粗砂（砂層　3～5㎝の白色塊を多く含む）
22．10YR 5／2　灰黄褐色土　極細砂～細砂（素焼き陶器片を多量に、炭および14層の粘土をわずかに含む）
23．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂～細砂（炭層）
24．10YR 4／2　灰黄褐色土　細砂～粗砂（素焼き陶器片および匣鉢を多量に含む）
25．5YR 4／4　にぶい赤褐色土　細砂～粗砂（焼土層　焼土ブロックおよび煉瓦ブロックを多量に含む）
26．5YR 5／2　灰褐色土　細砂～粗砂（砂層　素焼き陶器片を多く含む）
27．5YR 5／6　明赤褐色土　細砂～粗砂（焼土層　炭および素焼き陶器片をわずかに含む）
28．10YR 4／2　灰黄褐色土　粗砂（素焼き陶器片を多量に含む）
29．5YR 5／2　灰褐色土　細砂～粗砂（砂層　素焼き陶器片を多量に含む）
30．7.5YR 1.7／1　黒色土　極細砂～細砂（炭層）
31．10YR 5／4　にぶい褐色土　細砂～粗砂（素焼き陶器片および匣鉢を多量に含む）
32．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂～細砂（炭層）
33．10YR 3／2　黒褐色土　細砂（素焼き陶器片および炭・31層の砂を多量に含む）
34．10YR 6／4　にぶい黄褐色土　細砂～粗砂
35．7.5YR 3／2　黒褐色土　極細砂～細砂（炭を多く含む）
36．5G 2／1　緑黒色土　粗砂（砂層　素焼き陶器片をわずかに含む）
37．10YR 6／3　にぶい黄褐色土　極細砂（粘土層　炭および素焼き陶器片を多量に含む）
38．10YR 7／4　にぶい黄褐色土　粗砂（砂層）
39．10YR 6／6　明黄褐色土　粗砂
40．5YR 6／8　橙色土　細砂（焼土層）
41．10YR 5／3　にぶい黄褐色土　細砂～粗砂（炭および焼土塊を多く含む）
42．7.5YR 4／6　褐色土　細砂～粗砂（焼土および匣鉢を多量に含む）
43．10YR 6／6　明黄褐色土　極細砂～細砂（素焼き陶器片を多量に含む）
44．5YR 6／6　橙色土　細砂～粗砂（焼土塊をわずかに含む）
45．10YR 4／3　にぶい黄褐色土　粗砂（焼土および施釉陶器片を多量に含む）
46．5YR 4／4　にぶい赤褐色土　細砂（焼土層　素焼き陶器片をわずかに含む）
47．7.5YR 4／3　褐色土　極細砂～細砂（焼土塊および素焼き陶器片を多く含む）
48．10YR 4／2　灰黄褐色土　粗砂（素焼き陶器片を多量に含む）
49．5YR 6／8　橙色土　細砂～粗砂（焼土層　焼土塊を多く含む）
50．10YR 5／4　にぶい黄褐色土　細砂～粗砂（3～10の礫および10YR 3／2　黒褐色粒を多く含む）
51．10YR 6／6　明黄褐色土　細砂（整地層　通路）
52．7.5YR 4／4　褐色土　細砂～粗砂（焼土粒および素焼き陶器片を多量に、炭をわずかに含む）
53．10YR 3／3　暗褐色土　極細砂～細砂（焼土および炭をわずかに、素焼き陶器片を多量に含む）
54．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層　素焼き陶器片をわずかに含む）
55．5YR 4／3　にぶい赤褐色土　細砂～粗砂（砂層　素焼き陶器片を多量に含む）
56．10YR 6／6　明黄褐色土　細砂～粗砂（小礫をわずかに含む）
57．10YR 6／4　にぶい黄橙色土　細砂～粗砂
58．10YR 4／2　灰黄褐色土　細砂～粗砂（炭および素焼き陶器を多量に、焼土および57層の粒子施釉陶器片をわずかに含む）
59．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層　素焼き陶器片および瓦・匣鉢をわずかに含む）
60．10YR 3／2　黒褐色土　極細砂～細砂（焼土塊および炭・素焼き陶器片を・瓦・匣鉢を多く含む）
61．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層　焼土塊をわずかに含む）
62．10YR 6／4　にぶい黄橙色土　細砂（炭および焼土塊・素焼き陶器片をわずかに含む）
63．10YR 4／3　にぶい黄褐色土　極細砂～細砂（焼土ブロックおよび施釉陶器片をわずかに含む）
64．5YR 4／8　赤褐色土　細砂（焼土層）
65．7.5YR 4／3　褐色土　（砂層　素焼き陶器片を多く含む）
66．10YR 2／3　黒褐色土　極細砂（素焼き陶器片をわずかに、匣鉢を多量に含む）
67．10YR 5／4　にぶい黄褐色土　極細砂（素焼き陶器片を多量に含む）
68．5YR 4／4　にぶい赤褐色土　細砂～粗砂（焼土層）
69．10YR 1.7／1　黒色土　（炭層）
70．10YR 5／4　にぶい黄褐色土　細砂（匣鉢をわずかに含む）
71．10YR 2／3　黒褐色土　極細砂～細砂（炭および匣鉢を多量に含む）
72．10YR 3／2　黒褐色土　細砂～粗砂（炭を多量に、素焼き陶器片をわずかに含む）
73．10YR 4／3　にぶい黄褐色土　細砂（素焼き陶器片を多量に含む）
74．5YR 5／6　明赤褐色土　細砂（焼土層　素焼き陶器片をわずかに含む）
75．10YR 6／3　にぶい黄橙色土　細砂（素焼き陶器片を多量に含む）
76．10YR 5／4　にぶい黄褐色土　細砂～粗砂（素焼き陶器片および炭を多く含む）
77．10YR 5／4　にぶい黄褐色土　細砂～粗砂
78．7.5YR 5／3　にぶい褐色土　粗砂（砂層　素焼き陶器片を多量に含む）
79．2.5Y 5／4　黄褐色土　細砂～粗砂
80．10YR 2／1　黒色土　極細砂（炭層）
81．10YR 3／2　黒褐色土　細砂～粗砂



1．5YR 5／4　にぶい赤褐色土　細砂～粗砂（焼土塊および施釉陶磁器の小破片を多量に含む）
2．10YR 5／3　にぶい黄褐色土　極細砂～細砂（粘質土　素焼き陶器片を多く含む）
3．10YR 3／3　暗褐色土　細砂～粗砂（1層の粒子および素焼き陶器片・施釉陶器片を多く含む）
4．10YR 4／4　褐色土　細砂～粗砂（炭および素焼き陶器片・匣鉢を多く含む）
5-1．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂～細砂（炭層）
5-2．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭および炭化層）
5-3．10YR 8／1　灰白色土　極細砂～細砂（粘土層）
5-4．10YR 5／3　にぶい黄褐色土　極細砂～細砂（素焼き陶器片および匣鉢を多量に含む）
5-5．10YR 7／1　灰白色土　極細砂（粘土層）
6．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂～細砂
7．5YR 5／3　にぶい赤褐色土　粗砂（砂層　素焼き陶器片および匣鉢を多量に含む）
8．5YR 4／6　赤褐色土　細砂～粗砂（焼土層）
9．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層）
10．10YR 6／1　極細砂～細砂（素焼き陶器片を多量に含む）
11．5YR 5／6　明赤褐色土　粗砂（焼土ブロックを多量に含む）
12．10YR 5／2　灰黄褐色土　細砂～粗砂（匣鉢を多量に、素焼き陶器片をわずかに含む）
13．10YR 2／2　黒褐色土　極細砂～粗砂（炭層）
14．10YR 5／3　にぶい黄褐色土　細砂～粗砂（素焼き陶器片および匣鉢をわずかに含む）
15．7.5YR 5／3　にぶい褐色土　粗砂（匣鉢および素焼き陶器片を多量に含む）
16．10YR 5／4　にぶい黄褐色土　細砂～粗砂（素焼き陶器片および匣鉢・焼土を多く含む）
17．5YR 6／3　にぶい橙色土　細砂～粗砂（素焼き陶器片を多く含む）
18．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層）
19．7.5YR 5／3　にぶい褐色土　粗砂（素焼き陶器片を多量に含む）
20．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層）
21．5YR 5／6　明赤褐色土　細砂（焼土塊を多量に含む）
22．10YR 3／3　暗褐色土　極細砂～細砂（炭および焼土・匣鉢を多く含む）
23．10YR 2／2　黒褐色土　極細砂～細砂（素焼き陶器片を多量に含む）
24．7.5YR 4／6　褐色土　細砂～粗砂（素焼き陶器片をわずかに含む）
25．10YR 2／3　黒褐色土　極細砂
26．10YR 3／3　暗褐色土　細砂～粗砂（施釉陶器片をわずかに、素焼き陶器片を多量に含む）
27．5YR 4／6　赤褐色土　細砂～粗砂（焼土塊および白色粘土を多く含む）
28．7.5YR 5／6　明褐色土　極細砂～細砂（焼土粒を多く含む）
29．7.5YR 4／4　褐色土　極細砂～細砂（素焼き陶器片および施釉陶器片を多く、匣鉢を多量に含む）
30．7.5YR 4／4　褐色土　細砂～粗砂（焼土粒を多く含む）
31．10YR 4／3　にぶい黄褐色土　極細砂～細砂（焼土塊および素焼き陶器片を多量に含む）
32．10YR 4／2　灰黄褐色土　極細砂～細砂（素焼き陶器片および施釉陶器片を多量に含む）
33．10YR 3／3　暗褐色土　細砂～粗砂（素焼き陶器片および匣鉢を多量に含む）
34．10YR 4／3　にぶい黄褐色土　細砂～粗砂（素焼き陶器片および炭を多く含む）
35．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層　素焼き陶器片を多く含む）
36．10YR 5／3　にぶい黄褐色土　細砂～粗砂
37．5YR 5／4　にぶい赤褐色土　粗砂（煉瓦および匣鉢・焼土ブロックを多く含む）
38．7.5YR 4／3　褐色土　焼土および煉瓦塊
39．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層　素焼き陶器片を多く含む）
40．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層）
41．10YR 3／3　暗褐色土　粗砂
　10YR 4／4　褐色土　粗砂（施釉陶器小片をわずかに含む）
42．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層）
43．10YR 5／4　にぶい黄褐色土　極細砂（植物層）
44．10YR 3／4　暗褐色土　細砂～粗砂（匣鉢を多量に含む）
45．10YR 5／4　にぶい黄褐色土　粗砂（素焼き陶器片および焼土ブロックを多く含む）
46．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層　素焼き陶器片をわずかに含む）
47．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層　素焼き陶器片をわずかに含む）
48．10YR 4／2　灰黄褐色土　細砂～粗砂（素焼き陶器片を多量に含む）
49．7.5YR 6／4　にぶい橙色土　粗砂（素焼き陶器片を多量に含む）
50．10YR 3／3　暗褐色土　細砂～粗砂（素焼き陶器片を多く含む）
51．10YR 3／1　黒褐色土　極細砂～細砂（50層の粒子および瓦を多量に含む）
52．10YR 7／3　にぶい黄橙色土　粗砂（砂層）
53．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層）
54．10YR 5／3　にぶい黄褐色土　粗砂（素焼き陶器片を多量に含む）
55．10YR 6／6　明黄褐色土　細砂
56．10YR 4／3　にぶい黄褐色土　細砂～粗砂（素焼き陶器片をわずかに、匣鉢を多量に含む）
57．10YR 8／2　灰白色土　極細砂（粘土層）
58．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層）
59．7.5YR 4／3　褐色土　細砂～粗砂（焼土をわずかに、素焼き陶器片を多量に含む）
60．10YR 5／1　褐灰色土　極細砂
61．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層）
62．10YR 3／1　黒褐色土　細砂～粗砂（炭を多量に含む）
63．10YR 2／2　黒褐色土　細砂～粗砂（素焼き陶器片を多量に含む）
64．10YR 5／1　褐灰色土　細砂～粗砂（素焼き陶器片をわずかに、匣鉢を多量に含む）
65．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層）
66．10YR 5／4　にぶい黄褐色土　細砂～粗砂
67．10YR 8／2　灰白色土　極細砂（粘土層）
68．10YR 3／2　黒褐色土　極細砂～細砂（炭および焼土ブロックを多量に含む）
69．10YR 4／4　褐色土　極細砂～細砂（炭・焼土および灰白色粘土をわずかに含む）
70．7.5YR 4／1　灰色土　極細砂～細砂（69層の粒子をわずかに含む）
71．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層）
72．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層　10YR 6／1　褐灰色土、粘土を多く含む）
73．10YR 4／2　灰黄褐色土　極細砂～細砂（素焼き陶器片および施釉陶器小片を多く含む）
74．10YR 3／2　黒褐色土　極細砂～細砂（炭および施釉陶器小片を多く含む）
75．10YR 2／2　黒褐色土　極細砂～細砂（施釉陶器片および76層の粘土を多く含む）
76．5YR 4／4　にぶい赤褐色土　細砂～粗砂（焼土層）
77．10YR 8／2　灰白色土　極細砂（粘土層）
78．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂
79．10YR 9／1　灰白色土　極細砂（粘土層）
80．10YR 5／4　にぶい黄褐色土　細砂～粗砂（78・79層の粒子を多く含む）
81．7.5GY 6／1　緑灰色土　細砂（木片をわずかに含む）
82．10YR 6／6　明黄褐色土　細砂（81層の粒子を多く含む）

第10図　石垣背後土層断面図

3．コウカシ窯

(1)　位置と検出状況

作業場の北東隅に位置する。窯と作業場はともに陶磁器類を大量に包含した石炭殻層の下から検出されたもので、作業場の造成時に一体で造られた施設である。このことは後述の通り、窯の構築過程をみても明らかである。

検出時の窯の状態は天井部が失われ、また、北壁が崩落土の土圧によって内壁側に押され崩壊一歩手前の状態であったが、これ以外はほぼ完全な状態で残存していた。このような良好な状態で残されていたのは、窯全体が使用停止後の比較的早い段階で、作業通路から投棄された石灰殻に覆われ、この石灰殻が緩衝材の役割を果たしたことが幸いしたものと考えられる。

(2)　外観（第11図）

北壁　作業平坦地の北斜面には地山をカットして設けられた幅２ｍの作業通路があり、現ダントー社工場に至る斜面の切通し道に通じている。作業平坦地との比高差は2.5ｍある。

この通路下の斜面裾部を深い方で約0.6ｍ掘り下げてテラス状の段を作り、削り出した段の上に北壁の基底部を構築している。そして、この時に発生した土を前面に押し出し、段と同じ高さに整地して窯の床にしている。また、通路側の斜面上部には石を積んで擁壁状の壁を立ち上げているが、一部は崩落していた。崩落した石や土砂は、この壁と北壁との間の約0.4ｍの空間を約１ｍの高さまで埋めている。崩落土の土圧によって北壁は内側に押され、崩壊一歩手前の状態であり、東西南北４面の壁のうち最も残存状態が悪い。なお、外壁に煙突や排煙口などの構造物は認められなかった。

東壁　作業平坦地の東の背後は陶磁器投棄層が広がり、石積みの擁壁によって崩落を防いでいる。石積みの擁壁は３段に構築されており、最下段の石積み擁壁の下には幅1.2ｍの排水溝が設けられている。排水溝は東壁の中央付近を起点として南に延び、排水溝に沿って築地状の盛土帯が巡っている。

前述の通り、窯の床の北半分は斜面を段状に削り出した地山部であり、南半分はこの時発生した地山土を前面に押出し整地した盛土部である。このために東壁の南半分は盛土周囲に40㎝～50㎝の基底石を据え、盛土を保全している。基底石は排水溝の西石列に続いており、排水溝と窯が一体で構築されたことを示す。外壁には北壁と同じく煙突や排煙口などの構造物は認められなかった。

南壁　盛土部の上に作られている。排水溝に沿って巡る築地状の盛土帯はこの南壁を起点として南に延びて行くが、築地状の盛土帯と窯の床は同じ高さにあり、両者は一体で作られている（写真図版12参照）。基底部には石が据えられており、このうち東半の基底石は盛土帯の上に据えられている。南壁中央の基底面から1.4ｍの高さの箇所に長さ0.3ｍ、幅0.15ｍの方形の小孔が設けられている。

西壁　作業平坦部に面している。窯の北壁が斜面上の段の上に構築されているために、西壁の基底面の北半は斜面の勾配に沿って斜めに立ち上がる。

西壁の東半中央寄りにアーチ形の出入り口、南半に矩形の焚口が設けられている。出入り口は高さ0.4ｍ、底辺幅0.7ｍを測る。側壁に４個の方形煉瓦を横積みにし、天井部に楔形の煉瓦を11個架けている。天井部の煉瓦は内壁側に傾き、アーチの形状は半円形のアーチではないので、上方からの土圧によってひずみが生じているものと思われる。焚口は出入り口から南に0.45ｍの間隔をおいて設けられ、幅0.55ｍ、高さ0.45ｍで奥行きは1.25ｍを測る。煉瓦を４段積みにして箱形の形状を作り、上部に火格子を渡している。火格子の数は29本である。口の上端の高さと出入り口の底面の高さは同じである。西面前には焚口から掻き出された灰層が広がる。この灰層は南に約６ｍ、西に約５ｍに広がり、層圧は深いところで約

0.2mである。遺物の包含はほとんど認められなかった。

(3)　窯の内部構造

窯の埋土の堆積状況は第12図に示したとおりである。図示した堆積層の上には石炭殻が充満していた。埋土は約20層に分かれる。埋土は北壁側から南壁側に斜め堆積しており、北壁の一部崩壊に伴う流入土と考えてよい。また、埋土中からの煉瓦の出土点数はごくわずかである。このことは窯の使用停止後に天井部が取り除かれたことを示している。最下層に近い埋土中（第15・18・21層）には灰（炭）層が認められるので、天井部を取り除いた後に焼却炉として一時的に使用された可能性もある。

窯の埋土を除去したところ、以下のことが判明した。床面は平らで、若干の被熱はあるが、ごく弱い。西南隅に焚口が設けられており、焚口の上端と床面は同一平面上にある。焚口と窯を仕切る火だての痕跡は一切認められなかった。壁面は床付近から天井まで、表面が黒く煤けているが、窯内の煤化は煉瓦の表面のみで、瓦窯のように高温域に達してからの強還元焔焼成による炭素の吸着ではない。南壁には0.15m×0.3mの方形の小孔が設けられているが、窯の機能から考えるならば、焚口のそばに排煙口が存在することはあり得ないので、小孔は内部の状態をみるのぞき孔と考えてよい。残存する壁面にはこれ以外の孔はなく、また、床にも通煙孔が存在しないので、排煙口は残存しない北壁の上端部か天井部に設けられていたと思われる。

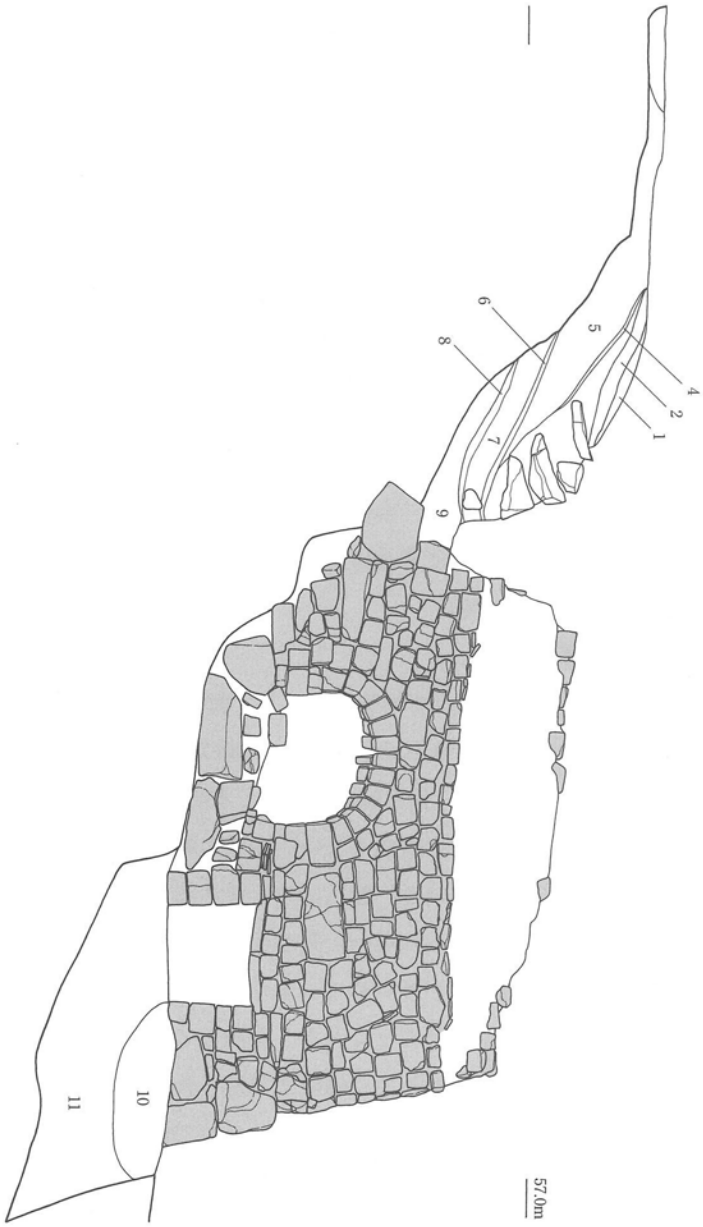
(4)　窯壁の構築方法

基底石の上に煉瓦を積んで構築しており、側壁部と天井部の上下２段に分かれる。

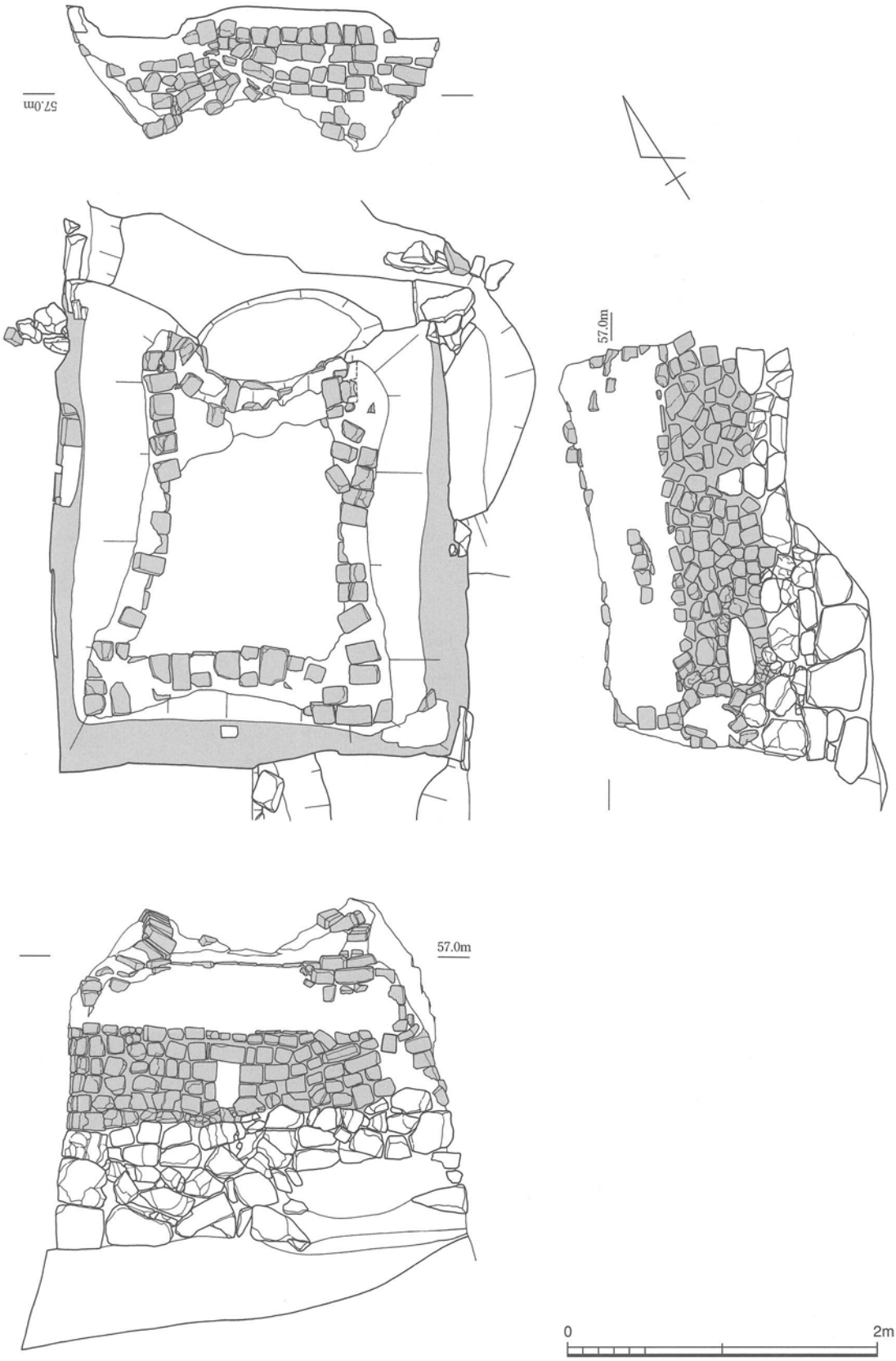
側壁は内壁と外壁に分かれる。内壁と外壁の間に土を挟んでおり、壁厚は0.5mを測る。床面からの側壁高は0.85～0.9mである。使用煉瓦はすべて本焼窯で使用された煉瓦の再利用品であり、灰が溶けて表面がガラス化しているものも少なくない。内壁に利用された煉瓦は形の整った比較的残りのよいものを使用し、面を揃えて積んでいる。煉瓦は長手積みにしているものと小口積みにしているものがあるが、特に積み方に規則性は認められない。長手積みにしているものは完存品が多いが、小口積みにしているものは背面が欠けた破損品が多いので、長手積みにできない破損品を小口積みにしたのであろう。また、使用煉瓦は大小あるが、段ごとに大きさを揃えており、横目地はほぼ一直線に通る。側壁の煉瓦の段数は12段を数える。これに対して、外壁に利用された煉瓦は屑のようなものが多く、形や大きさが揃っておらず、また、煉瓦の代わりに石が差し込まれている箇所もある。目地の通りは縦横ともになく、内壁のように煉瓦をすきまなく積み上げられていないので、内壁保護の役割の要素が高い。内壁、外壁ともにさまざまな大きさの煉瓦や破損品を使用しているために、両壁の煉瓦の背面同士をうまく組み合わせて側壁を立ち上げていくことはかなり困難な作業であり、内壁と外壁の煉瓦を別個に積み上げて、両壁の間に土をサンドイッチ状に詰めることによって、構築にかかる手間を省いている。

天井部は側壁を立ち上げた後に、別工程で煉瓦を積み上げて構築している。煉瓦は楔形のものではなく、通常の長方形のものを使用している。側壁と同じく煉瓦の大きさは大小あるが、煉瓦はすべて小口積にしてある。そして、内壁面を支点にして背面側を持ち上げ、間に土を詰めることによって煉瓦に傾きをつけ、さらにその上に同じように煉瓦を順に積み上げていくことによってアーチ形を作り出している。内壁側の煉瓦と外側の煉瓦の間は側壁部とはやや異なり、隙間が少なく煉瓦同士の密着性が高い。外側の煉瓦の上はさらに土で覆われている。天井部の頂部は残存していなかった。

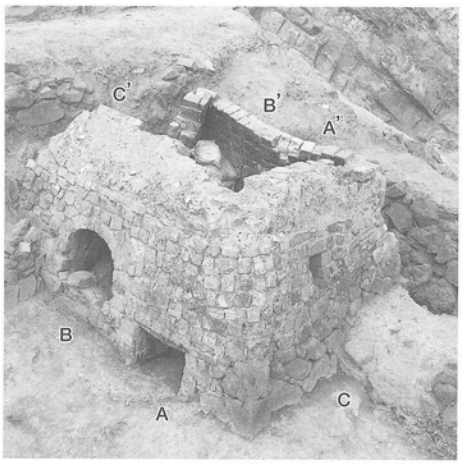
なお、窯は前項で述べた通り、窯は谷の北斜面を選地し、この北斜面の裾をカットしてテラス状の段を設け、発生した土を前面に押し出して平坦な窯の床を作っている。窯床は周囲よりも0.5m高く作られ、

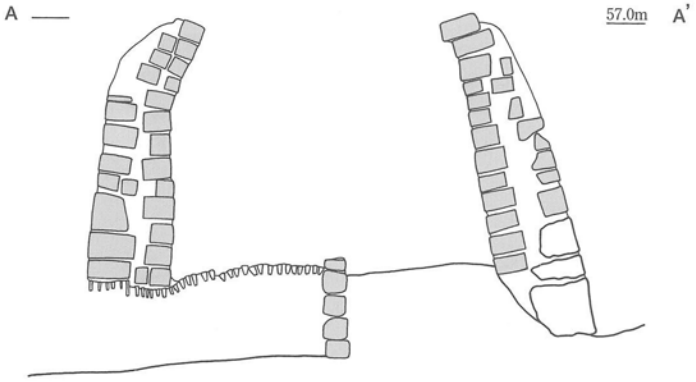


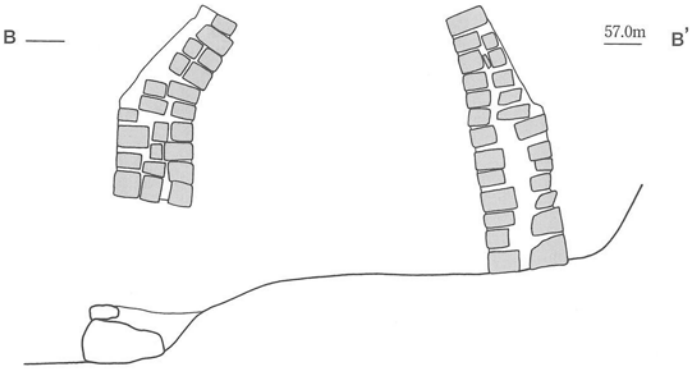
1．10YR 3／2　黒褐色土　細砂（炭および施釉陶器片を多く含む）
2．10YR 6／4　にぶい黄橙色土　細砂（2～5cm位の礫を多く含む）
3．10YR 4／2　灰黄褐色土　細砂（炭および素焼き陶器片・文様型・タイルなどを多く含む）
4．7.5YR 4／4　褐色土　細砂～粗砂
5．5YR 6／6　明黄褐色土　細砂（2～5cm位の礫を多く含む）
6．10YR 4／3　にぶい黄褐色土　極細砂～細砂
7．10YR 4／2　灰黄褐色土　極細砂～細砂（炭および素焼き陶器片をわずかに含む）
8．10YR 5／4　にぶい黄褐色土　極細砂～細砂
9．10YR 6／4　にぶい黄橙色土　細砂
10．10YR 5／3　にぶい黄褐色土　細砂～粗砂（1～5cm位の礫を多く含む）
11．10YR 7／6　明黄褐色土　細砂

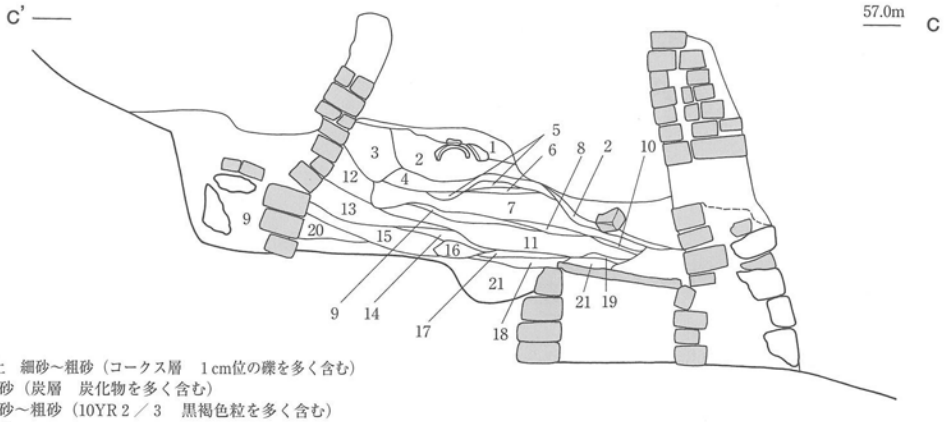


第11図　コウカシ窯上面および外壁図



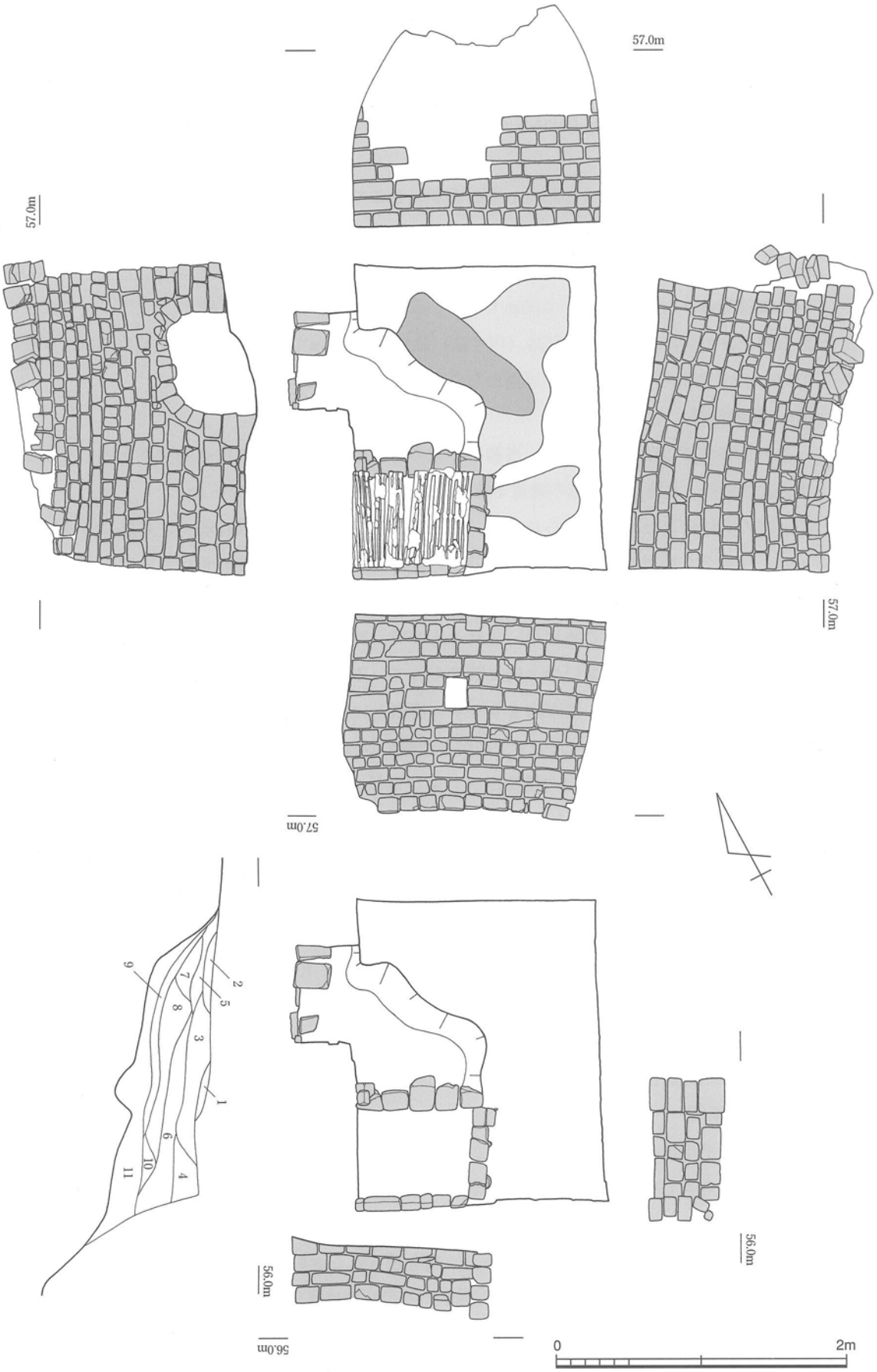






1．10YR 5／3　にぶい黄褐色土　細砂～粗砂（コークス層　1cm位の礫を多く含む）
2．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層　炭化物を多く含む）
3．10YR 2／2　黒褐色土　細砂～粗砂（10YR 2／3　黒褐色粒を多く含む）
4．7.5YR 5／6　明褐色土　粗砂
5．10YR 5／6　にぶい橙色土　細砂
6．7.5YR 5／6　明褐色土　細砂
7．7.5YR 6／4　にぶい橙色土　細砂～粗砂（7.5YR 5／6　明褐色粒をわずかに含む）
8．7.5YR 5／6　明褐色土　細砂
9．10YR 7／1　灰白色土　極細砂（炭をわずかに含む）
10．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層　炭化物を多く含む）
11．7.5YR 5／4　にぶい褐色土　極細砂～細砂（10YR 7／1　灰白色粒を多く含む）
12．10YR 2／2　黒褐色土　細砂～粗砂（7.5YR 6／4　にぶい橙色粒を多く含む）
13．10YR 3／2　黒褐色土　細砂～粗砂（10YR 2／2　黒褐色粒を多く含む）
14．10YR 5／4　にぶい黄褐色土　細砂～粗砂（10YR 3／2　黒褐色粒を多く含む）
15．10YR 1.7／1　黒色土　極細砂（炭層　炭化物を多く含む）
16．5 YR 5／4　にぶい赤褐色土　粗砂
17．10YR 5／4　にぶい黄褐色土　極細砂～細砂（10YR 7／1　灰白色粒をわずかに含む）
18．10YR 1.7／1　黒色土　粗砂（炭層　10YR 7／1　灰白色粒および5 YR 5／4　にぶい赤褐色粒をわずかに含む）
19．10YR 7／1　灰白色土　極細砂
20．10YR 3／2　黒褐色土　細砂～粗砂
21．10YR 2／1　黒色土　極細砂～細砂（炭化物を多く含む）
22．10YR 2／2　黒褐色土　極細砂～細砂（7.5YR 6／4　にぶい橙色粒および炭をわずかに含む）

第12図　コウカシ窯断ち割り断面図および土層断面図



1. 10YR 5／4 にぶい黄褐色土 細砂
2. 5YR 4／4 にぶい赤褐色土 細砂（焼土層）
3. 10YR 5／6 黄褐色土 極細砂～細砂（2cm位の礫および炭をわずかに含む）
4. 10YR 6／4 にぶい橙色土 細砂
5. 10YR 4／3 にぶい黄褐色土 細砂（炭および焼土粒を多く含む）
6. 10YR 5／3 にぶい黄褐色土 細砂～粗砂（1～5cm位の礫を多く含む）
7. 10YR 3／2 黒褐色土 細砂（10YR 7／1 灰白色粘土および炭を多く含む）
8. 10YR 5／4 黄褐色土 細砂
9. 10YR 5／3 にぶい黄褐色土 極細砂～細砂（炭を多く含む）
10. 10YR 8／3 淡黄橙色土 極細砂～細砂（粘土層 炭を多く含む）
11. 10YR 7／6 明黄褐色土 細砂

第13図　コウカシ窯床面および内壁図　床面断ち割り断面図および焚口見通し図

周囲には石を２～３個積んで基底部を形作っている。このように窯床を高くしてあるのは、焚口を床面よりも下に作るために取られた処置である。また、谷の北斜面を選地したのは地山を少し削るだけでステージ状の高まりの床が簡単に造成できるという簡便さを利用したものであろう。もちろん、窯を隅に寄せておけば、作業広場をより広く有効に使える配慮も伴ったと思われる。

(5)　窯の規模

窯の寸法については個々に記述しているが、ここで一括しておく。窯の基底部の寸法は北壁側と南壁側で高低差があるので計測できない。よってここでは床面部の寸法を記す。床面部は外寸法で東西長2.7m、南北長3.1m、内寸法で東西長1.7m、南北長2.1mを測り、側壁の厚みは0.5mある。天井の穹窿部を除いた側壁部のみの高さは0.85～0.90mである。天井の穹窿部の残存高（内寸法）は0.45～0.50mあり、床面からの天井の穹窿部までの残存高（内寸法）は1.30～1.35mである。復元高は明確にはできないが、内寸で1.5～1.8mであろうか。作業平坦面からの床までの高さは0.5mである。

(6)　窯の性格

この単室角窯はその形状から、当初は小型の石炭窯と想定して窯内部の掘り下げを行なった。その結果、次の通り、焼物を焼く窯の構造を有していないことが明らかになった。

①　床の焼けがほとんど認められない。焼けの痕跡はあるが、程度は弱く、高温による被熱痕跡ではない。目地土も同様で焼結は全くしていない。また、壁に残る炭素吸着は低火度の酸化焔焼成によるもので、瓦窯のように高温域に達してからの強還元焔焼成による炭素の吸着ではない。

②　火格子は灰落としのために用いられるもので、焚口の真下に設けられるのが、この種の窯の通常の構造である。火格子が焚口の上端に設けられているのは本来の使用形態とは違う使い方がなされており、当該窯の焚口では、澳が溜まりやすい構造ということになる。また、火楯や通煙孔および煙突の痕跡は一切認められなかったので火の引きや熱の対流、昇温を全く意識していない構造である。

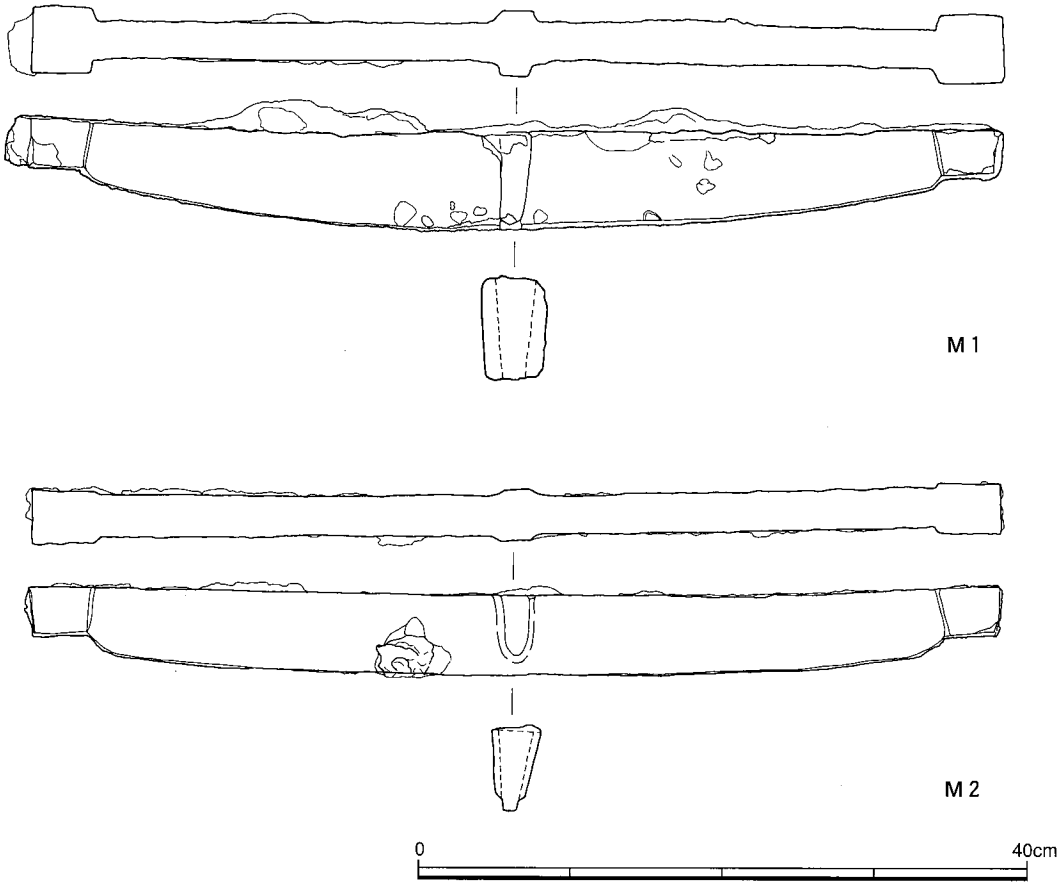
③　窯内には棚板やさやなどの他窯道具および製品の類は出土していない。窯の前面に広がる炭（灰）層にもそのような遺物はほとんど含まれていない。

以上の点からおよそ焼物を焼く窯構造を呈していないことと焼物を焼いた痕跡が認められないことが明らかである。窯の性格については、種々の検討を重ねていくうちに、鹽田力蔵と北村彌一郎の報告中[1]に薪を乾燥させる「コーカシ窯（コウカシ窯）」が明治中後期に当地で使用されていたことがあることがわかった。さらに元淡ダントー社員の金山重夫氏からダントー社（旧淡陶株式会社）においては、「焦窯（コウカシ窯）」が昭和33年前後まで部分的に使用されていたという御教示を頂いた。これらの事実と窯構造および窯の内部の状態から当窯はこの「コウカシ窯」に該当すると判断した。「コウカシ窯」については第６章で記述しているのでここでは割愛しておく。

(7)　窯の年代

窯は作業平坦地の造成と一体で構築されている。作業平坦地の造成時の整地層に含まれる製作年を記した型で最も新しい年代のものは明治44年であり、平坦地の造成は少なくともこの44年を遡りえない。窯および作業平坦地の直上には陶磁器層を含んだ石炭殻層が堆積している。北村彌一郎の報告では明治45年段階で石炭窯2基の操業が確認される。窯を覆った石炭殻層の年代については遺物からは昭和を中心とした年代が想定できるが、それ以上の細かい年代推定は現段階では難しい。

一方、窯に使用されていた煉瓦の中に製造会社の明らかな煉瓦が4点出土したが、いずれも破損品であり、製造年代を明らかにできる部分を欠いているために製造年の特定ができない。また、製造年が特定



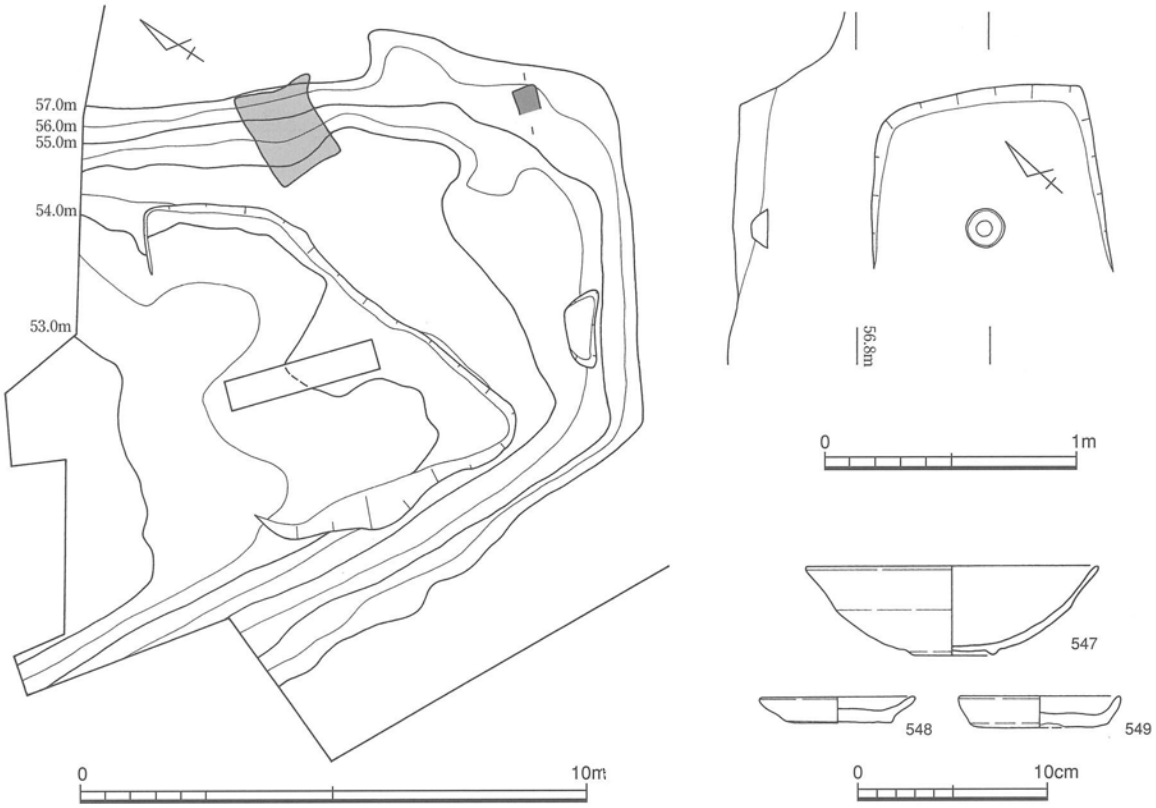
第14図　コウカシ窯焚口使用火格子

できたとしても本焼窯で使用されていた構築材の再利用品である可能性が高く、構築年代の絶対的な決め手とはならない。また、側壁の目地中に乾式タイルが挟み込まれていたが、深井明比古によれば明治末から大正初年の製造時の可能性が高いということであるが、これについても年代の上限の1点を示すのみである。

以上のように、遺構出土遺物・堆積層から窯の構築年代の特定は難しい。しかしながら、整地層およびその直上の石炭殻層との上下層の関係、使用煉瓦およびタイル型式はいずれも大正を中心とした年代を示しているので、当該窯の構築年代は大正期の可能性が高いといえる(2)。

注(1)　鹽田力蔵　「第3編　陶磁」『日本近世窯業史』(『日本近世窯業史総説』　平成３年　柏書房所収）および『工業博士　北村彌一郎窯業全集』第3巻　昭和4年　大日本窯業協會　参照。

注(2)　近隣の高齢の方々の聞き取りでは、昭和初期には谷はすでに陶磁器で埋まり、今回発見の窯の存在は記憶にないとのことである。



第15図　調査区完掘後地形図　中世土壙および土壙出土遺物

4．その他の遺構

今回の調査では、前述したコウカシ窯およびそれにともなう近代の窯業遺跡が発見されたが、その他にも、土壙１基が検出された。土壙はコウカシ窯の南東、石垣背後の遺物堆積層を掘り下げた北側斜面裾の最下層、標高約56.7mの地点より検出された（第15図）。北東－南西方向を主軸（N48°W）として、谷にほぼ直交するように掘り込まれているが、標高の低い南西側については大半が削平された状態であった。このため、幅約0.94m、深さ約0.4mを測るが、全長は不明である。埋土中より、土師器の碗１点（547）と皿２点（548・549）が出土している。

547は口径15.3cm、器高4.7cmを測るほぼ完存する土師器の碗である。全面的に摩滅が激しいため、調整は不明瞭であるが、底部には輪高台を貼り付けたのち、ナデ付けた痕跡が残っている。548は残存する部分は少ないが、口径7.9cm（復元径）、底径5.5cm、器高1.4cmを測る皿であり、549は口径8.3cm、底径6.0cm、器高1.7cmを測るほぼ完存する皿である。前者は、底部にヘラ切りの痕跡が残っているが、内外面とも摩滅により調整は不明瞭であり、後者は、全面的に剥離あるいは摩滅が激しいが底部には糸切りの痕跡が残り、内外面ともにナデの痕跡がわずかに認められる。

土壙は、出土した遺物より12世紀後半から13世紀初頭の中世の時期の遺構と考えられる。残存する土壙の平面の形状から、墓壙の可能性が考えられるが、大半は削平され、詳細は不明である。

第3節　遺物

1．遺物の概要

今回の調査では、調査区のほぼ全域から約1,000箱におよぶ遺物が出土している。確認調査の結果を踏まえた調査前の計画では、遺物を含む調査区内での掘削土量は1,575㎥と積算され、調査後の実質数量もほぼそれに近い約1,600㎥であった。確認調査あるいは調査前の状況からそのうちの約6割が遺物と想定すれば、調査区内の遺物総数量は約40,000箱におよぶと計算された。調査では、コウカシ窯や石垣などが検出されたものの、少なく見積もっても万単位の遺物量が調査区内には投棄されていたと考えられる。現場では、江戸時代後期の珉平焼創業期の遺物を含むものの、大半の遺物が明治時代以降の近代における大量生産時に廃棄されたものと判断し、遺物の選択的取り上げを行った。このため、現場から持ち帰った約1,000箱の遺物については、40,000箱分の1,000箱の遺物量と考えると全体の約2.5%に過ぎないということになる。しかし、これらの出土遺物の整理作業を通じて、当時の製品構成や生産状況など製陶の様相が垣間見られ、近代窯業の実体にせまる資料と考えられる。

(1)　遺物の出土層位

調査区全域から出土した遺物は、その出土層によって大きく3つに分類される。ひとつは調査開始からコウカシ窯や石垣などを中心とした作業場跡が検出される以前の層から出土した遺物の一群（以下、表層と呼称）であり、次に検出された作業場跡を掘り下げていく過程において、石垣の背後に堆積していた一群（以下、石垣背後）およびコウカシ窯前面の平坦地下層に堆積していた一群（以下、窯前面下層）である。

現場では、石垣を一部破壊した確認調査時のトレンチ跡を基準に石垣の上方（背後を含む）と下方、トレンチの北側と南側のそれぞれ4区画に分け、1～4区と呼称した（第6図）。しかし、石垣の下方、窯前面下層の掘り下げではすべてを3区とし、土層断面の観察用に設定した畦によって6つに区画された一画をそれぞれ3区－Ⅰ～3区－Ⅵとしている（第8図）。このため、4区として取り上げた遺物は、コウカシ窯検出以前の表層のみである。さらに、石垣背後および窯前面下層については、それぞれの区毎に適宜、何層かに分けて遺物の取り上げを行っており、設定した畦から出土した遺物についても層毎に取り上げている[1]。これらの遺物については、現場で出来うる限りの統一を図ったが、表層としている遺物については、平面的な位置はおさえたが、ほぼ一括して取り上げを行った。

表層　調査区の西側、ダントー株式会社との間の谷の口部には、約1,000㎡の範囲に二段の平坦地（上段約400㎡、下段約600㎡）が存在している（第2図）。この平坦地については、昭和27年に淡陶株式会社（当時）に入社された方から、戦後（昭和30年代）に会社の福利厚生にともないバレーボールコートが造成され、その痕跡であることを伺った。造成に際して、社員数名が周辺に投棄されていた陶磁器類やタイル、窯道具などを今回の調査区を中心とした谷の東（奥）側に背負子を担いで捨てに行ったということを聞いたそうである。今回の調査でわずかに確認されている江戸時代後期から幕末期の遺物については、表層からのみ出土し、その反面、コークスが多量に含まれていたことなどから、表層は二次的に堆積した撹乱層と考えられる。

調査の過程で作業場跡が検出されたことにより、それより以後は、石垣の背後に堆積していた遺物と窯の前面に広がる平坦地の下層の遺物に大別し、取り上げを行った。

石垣背後　検出された石垣の最上層は標高約59.5～58.9mを測り、石垣を取り除いた最下層の地点が約55.5mを測ることから、石垣背後は高さ約3.5～４mの範囲が遺物で埋め尽くされている状態であった。現場では、これらをトレンチの北側で８層、南側で５層に分けて遺物を取り上げていた[2]ため、整理作業中、相互に多少のずれが生じることとなった。このため、図面等から再考し、トレンチの南北両側を一括して、石垣背後上層(1)・(2)、中層(1)・(2)、下層の５層に再整理を行った。石垣の検出前は、約３mの二次的な堆積層である表層に覆われていたが、石垣背後の５層については、土層に大きな撹乱等は認められないものと考えられる。

窯前面下層　コウカシ窯の前面に広がる平坦地は標高約55.0～54.4mを測り、最も深く掘り下げた地点が約53.2mを測ることから、最大で約1.8mの厚さに堆積している。しかし、谷の底部を埋めているため、南北両側では約0.3～0.8mと比較的浅く、土層断面はレンズ状を呈している。また、東側は石垣背後にかかり、西側については調査区外へも堆積層は続いている。これらは、３区－Ⅰ～３区－Ⅵと６区画に分割し、それぞれ３～７層に分けて遺物を取り上げている[3]。このため、石垣背後の遺物と同様、整理作業中に再考し、窯前面下層として、検出面・上層・中層・下層の４層に再整理を行った。しかし、設定した土層断面を観察すると、炭層や焼土層、陶器類などを含む遺物包含層が何層にも複雑に堆積しており、さらに平坦地が広範囲におよんでいることから、相互の対応関係を考慮すれば、より細かく分層すべきであるが、現場での取り上げと図面上での操作では齟齬が生じ、さらに、より煩雑になるため、遺物の前後関係を理解することを目的に上記の４層とした。

(2)　遺物の種別

調査区内あるいはその周囲には、製品の失敗品から窯道具など製陶に関わるあらゆるものが一括して投棄されており、現場では出土地点および出土層などを記録し取り上げを行った。その後の水洗い・ネーミング作業を通じて整理された遺物は、大きく４つに分類される。ひとつは珉平焼創業期にあたる江戸時代後期の染付を含む陶磁器類である。陶磁器類の大半は、明治時代中頃から大正時代の輸出用を含む大量生産時の製品であり、轆轤成形によるものと型打ち（押し）成形によるものに分けられる。次に型打ち（押し）成形時に使用された土型類があり、製品を製作するための型の他、高台型・貼付け文の型などが確認されている。さらに、今回の調査で特徴的なタイル類があり、最後に匣鉢や色見本の他、用途不明なものを含む窯道具類の以上、４種類である。

これらの遺物は、明治20年代から大正年間、さらに昭和初期に至る約50年間に廃棄されたものと考えられ、出土量約1,000箱のうち、陶磁器類が約65%、土型類が約10%、タイル類が約10%、窯道具が約10%と約95%を占めている。残りの約５%の遺物は、ガラス瓶や煉瓦、瓦、珉平焼以外の生産地の製品などである。しかし、遺物の概要でも触れているが、出土遺物については、現場での選択的取りげによるものであり、上記の数値が正確に実情を現しているとは言い難いものである。例えば、窯道具における匣鉢などは全体の形状がわかるもの以外は取り上げておらず、タイルについても表層ではほぼ完形のものだけを取り上げている。その反面、土型については生産地からのみ出土する特殊な遺物であるため、出来る限りの取り上げを行った。これらのことから、ここでは４つに分類したそれぞれ（以下、記載は土型・陶磁器類・タイル・窯道具の順）について、現場での状況あるいは整理作業中の各種データ[4]などを中心にその概略を述べ、個々の遺物についての分類基準あるいは特徴などは、項を改めて記載していくことにする。

土型　土型は、板状の粘土を型に押しつけて製品を成形するための型（以下、製品型）およびその元となる型（以下、元型）、蓋のつまみあるいは文様を貼付けるための型（以下、貼付型）、高台を成形するための高台型、湿式タイルを成形するためのタイル型、窯道具の三角形のハマ（以下、ピンハマ）を成形するためのピンハマ型等に分類される。

製品型は、文様が彫り込まれた製品の形状を呈する部分（以下、型部と呼称）とその下方に取り付けられた台部から成り立っているものが多く、型部が無文のものや台部が取り付かないものも確認されている。製品型の台部内外面には、年（月）号および製作者名、屋号、器種名などがヘラ書きあるいは墨書で記されているものが多く、当時の生産形態や商品構成などを知る貴重な資料となっている。同様に、元型にも年号あるいは製作者名が書かれており、元型から製品型、さらにその製品と製作時期を限りなく限定することが可能と考えられる。また、高台型や貼付け型、ピンハマ型にもヘラあるいは墨書でどの製品に用いるものかを記す名称や記号などが書かれており、製品との照合は可能と考えられる。

出土層については、土型は表層、石垣背後、窯前面下層の全域から出土している。調査区内の遺物は、約50年の操業期間中に投棄されたものと考えられるが、ほぼ全域から出土している製品型は、小判形龍文皿の型（次項の分類基準および遺物№、以下同　製品型Ⅰ皿類龍文Ⅳ　K24）および多角形幾何学文襞皿の型（製品型Ⅰ皿類幾何学文Ⅲ-1～-3　K51～K53）であり、その他にも隅入四角形龍文皿の型（製品型Ⅰ皿類龍文Ⅳ　K39）や菱形薔薇文の型（製品型Ⅰ皿類薔薇文Ⅱ-1　K46）などがある。これら製品型とそれから生産される製品については、量的に比例傾向が認められる。

なお、土型にヘラあるいは墨書によって書かれている年号は、その型を製造した年号であり、投棄された時期を示すものではないが、遺構あるいは出土層の時期を考える上で非常に重要な資料と考えられる。第６章で詳しく述べるが、石垣背後の中層より下の層では20年代後半から30年代前半（明治）の年号が、窯前面下層の下層では20年代後半（明治）の年号がそれぞれ確認されている。

陶磁器類　陶磁器類は、磁器が比較的少なく、大半は陶器である。磁器については、染付が製品の中に占める割合は非常に少ないものの珉平焼創業期の江戸時代後期から、明治・大正時代を通じて確認されている。また、陶器については製作工程に従い、分類を進めていくと、まず、粘土によって白色粘土と柿色粘土[5]に分けられる。白色粘土が全体の約90%を占めるのに対し、柿色粘土はわずかに約９%の割合であり、さらに両者を混ぜ合わせた「練り込み」と呼ばれる表面がマーブル状のものが約１%確認されている。次に、轆轤あるいは土型による製品の構成比については、轆轤成形によるものが約35%、型打ち（押し）成形によるものが約60%の割合であるが、残る約５%の製品については、どちらとも判断しがたいものである。さらに、素焼きの段階で投棄されたものが約75%、施釉された本焼き後に投棄されたものが約25%の割合で、素焼きの焼成段階で割れやひびあるいは歪みなどによって非常に高い割合で投棄されている。また、本焼き後、釉薬の濃淡あるいは発色の加減によって、完成品でも投棄されているものが若干数認められる。

出土層については、土型同様、調査区の全域から出土しており、さらにほぼ全域から出土している遺物と限られた層からのみ出土している遺物に分類される。前者は、碗状の鉢（鉢類Ⅱ-A-3-a．b　128～132）や桶形状の鉢（鉢類Ⅲ-A-1-a．b　154～160）およびその蓋（蓋類Ⅰ-b-1．2　378～384）、小判形龍文の皿（皿類丸皿変形Ⅰ　245）や多角形幾何学文の皿（皿類角皿変形Ⅱ　274）などがあり、後者には、燭台（527～529）や花留の他、江戸時代後期から幕末期の染付（８～11他）も表層からのみ出土している。

器種については、器形によって碗類・鉢類・皿類・壺類・蓋類、その他に大別し、さらに底部・体部・口縁部などの形態の違いによって分類を行っているが、時間的な制約等の理由により、実測していない遺物も多数存在している。これらについては、出来る限り写真図版（写真図版28～75）に収め、出土陶磁器類の全容を掲載するように心がけた。

タイル　タイルは、粉砕した原石と粘土を調合し、水を加え、よく錬り混ぜて土型に押しつけて成形する「湿式タイル」と呼ばれるものと、機械によって、金型に圧縮して成形する「乾式タイル」と呼ばれる２種類に大別される。ダントー株式会社の広報誌では、湿式タイルは明治25（1892）年ごろから生産が開始され、明治34（1901）年には輸入タイルと同レベルの国産タイルを完成させており、その後、技術改良によって明治41（1909）年には自社による乾式タイル製法が開発され、生産が拡大している。なお、湿式タイルを成形するための型（タイル型）が出土しているが、次項では、型のひとつとして土型の中で記載している。

出土層については、湿式タイルおよび乾式タイルともに表層から出土したものが大半を占めているが、石垣背後および窯前面下層からの出土も確認されている。湿式タイルは、石垣背後の上層では多種類のタイルが出土しているが、下層からは点数も少なく、限られたタイル（Ｔ４・Ｔ５）のみが出土している。乾式タイルについても湿式タイルと同様の傾向がみられるが、一部（T66・T77など）は石垣南端の最下層からの出土も確認されている。乾式タイルの生産は明治41年以降であるため、石垣の最下層の年代はそれ以降ということになるが、近接した層から出土した土型には「元二（32）年十月」と年号が記されている。土型の年号は、投棄された時期を示すものではないものの、両者には約10年の時間的な隔たりがあるため、土型およびタイル個々の検討を通じ、章を改めて再度考えていくことにする。

窯道具　窯道具は、多種多様なものが調査区のほぼ全域から出土しているが、陶磁器類あるいはタイル類以上に現場での選択的取り上げを行っており、全体の遺物量に占める割合は低くなっている。このうち、近世・近代の京焼の解説図[6]に記載がみられるヌケ（抜）や匣鉢（サヤ）、湿台（シッタ）、ハマなど名称あるいは用途が分かるものの他、被熱を受け、明らかに窯の焼成時に使用されたと思われるものや被熱は受けていないものの窯道具と考えられる遺物が多数出土している。

今回の報告書では、窯道具に分類したすべての遺物について実測は行っておらず、写真のみの掲載である。しかし、名称および用途不明な窯道具についても、製品の成形時に使用されたものと窯の焼成時に使用されたものに分類し、写真図版（写真図版81・114～117）に収めている。

その他遺物　上記の４つに分類した他にも、水滴や花留、容器類など写真のみを掲載（写真図版76・113・118）した遺物が出土し、さらに土型に類似する石膏型、ガラス瓶、コウカシ窯の構築材である煉瓦および窯の焚口に使用されていた鉄製火格子、瓦、珉平焼以外の生産地（備前焼・大谷焼他）の甕や鉢などが出土している。また、戦時中（昭和16年～昭和20年頃）、淡陶株式会社が軍需工場として機能していた時に生産された碍子あるいは耐酸バルブなどの磁器製品も出土している。

さらに、石垣を取り除いた最下層から検出された土壙からは、中世の土師器碗１点と皿２点が出土している。

注は章末の182ページ以降に記載している。

2．土型

今回出土した土型は、ほぼすべて同じ胎土の粘土によって成形・焼成（素焼き）されたものである。ここでは、土型から制作される「もの」によって7種類（製品型・元型・貼付型・高台型・タイル型・ピンハマ型・その他）に大別し、さらにその全体の形状によって以下の6類（Ⅰ～Ⅵ）に分類（種別）を行った。

Ⅰ：型部裏面に台部がつくもの

Ⅱ：型部裏面に取っ手がつくもの

Ⅲ：型部裏面につまみがつくもの

Ⅳ：型部裏面に輪状あるいは方形状の高台がつくもの

Ⅴ：型部裏面になにもつかないもの

Ⅵ：その他

また、大別した各種土型についても完成時の製品の形状や文様構成などによって小分類（器種・形状・文様構成）を行っている。

なお、土型の各部名称については、第85図に明記している。

(1) 製品型

製品型は、鉢類・皿類・蓋類・蓮華類・置物類に分けられ、約100種が確認されたが、そのうち78点（K１～K78）を実測し、図化している。製品型の半数以上は皿類であり、その大半は台部がつく形状を呈している。

鉢類および皿類については、製作された器高の高いものを鉢類、器高の低いものを皿類としている。

鉢類　A：底面と立ち上がりに稜線がないもの

B：底面と立ち上がりに明確な稜線があるもの

に分けられ、型部表面はすべて無文であるが、中央に穿孔があるもの[7]が3点（K５～K７）確認されている。また、鉢類と分類したうち、口縁部が欠損しているため、鉢類と断定できないもの（K３・K５・K６）が含まれているが、全体の形状や穿孔などから鉢類とした。

皿類　平面の形状の違いによって、丸形、小判形・桃実形・五弁花形（次項　陶器類の皿類の分類ではともに皿B類　以下同）、隅入正方形・隅丸正方形（皿C類）、襞状菱形・隅入多角形（皿D類）、木の葉形（皿E類）など15種類に分けられる。さらに、口縁部および体部の形状によって、

A：口縁部が丸くおさまるもの

B：口縁部が玉縁状を呈するもの

C：口縁部が外反するもの

D：口縁部が横に開くもの

E：体部が屈曲するもの

F：体部が直線的に立ち上がるもの

の以上6つに分類し、この他、文様の有無、文様の彫刻表現、文様構成などによって細分される。

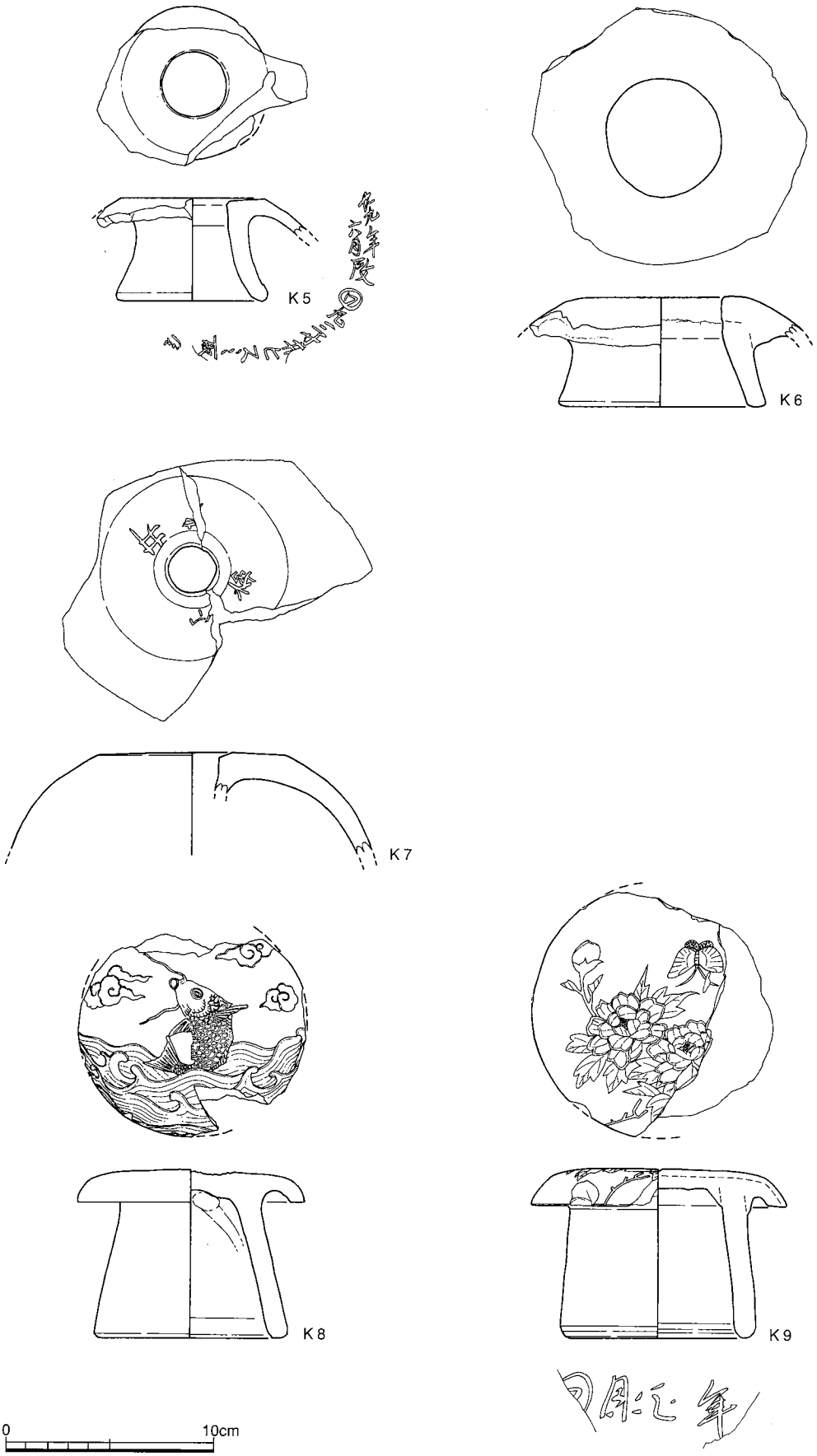
平面の形状が丸形のものは13点（K８～K20）を数え、口縁部および体部の形状は、口縁部が玉縁状を呈するものを除く、５つ（A・C～F）に分けられる。文様の彫刻は、陰刻（K８～K10・K17・K19）あるいは線刻[8]（K11・K18）されたものと無文のもの（K12～K16・K20）があり、文様の摩滅によって、

それを丁寧にナデ消し、無文に転用したと考えられるもの（K14）も確認された。文様構成は、龍文・草花文（薔薇・ボタン・菊花他）・魚文（鯉）などがあり、このうち龍文はいずれも線刻で躍動的に表現され、周囲に雲を配している。平面の形状が小判形のものは10点（K21～K30）を数え、口縁部および体部の形状は３つ（A・B・E）に分けられる。型部の裏面には、台部の代わりに取っ手あるいはつまみのつくもの（K21・K26・K28）や、なにもつかないもの（K23）が確認され、これらは出土した土型の中で非常に点数が少なく、特殊なものである。文様の彫刻は、陰刻（K26・K30）あるいは線刻（K21～25・K28・K29）されたものと無文（K27）のものがあり、文様構成は、龍文あるいは魚文（鯛）の他に、口縁部に文様を施したもの（K30）もみられる。珉平焼の代表的な小判形龍文皿の土型は、大・中・小と３種類が確認され、いずれも細かな線刻で躍動する龍が表現され、周囲に雲が配されている。この他、平面の形状が丸形の変形として、桃実形（K31）あるいは五弁花形のもの（K32～K35）や、楕円形のもの（K36・K37）など７点がある。前者は、文様は彫刻されているが、土型自体が桃の実や梅の花をかたどっており、口縁部および体部の形状はいずれも同じ（A）である。後者は、ともに欠損する部分が多く、全体の形状や細部については不明であるが、篆書された文字が陰刻されている。

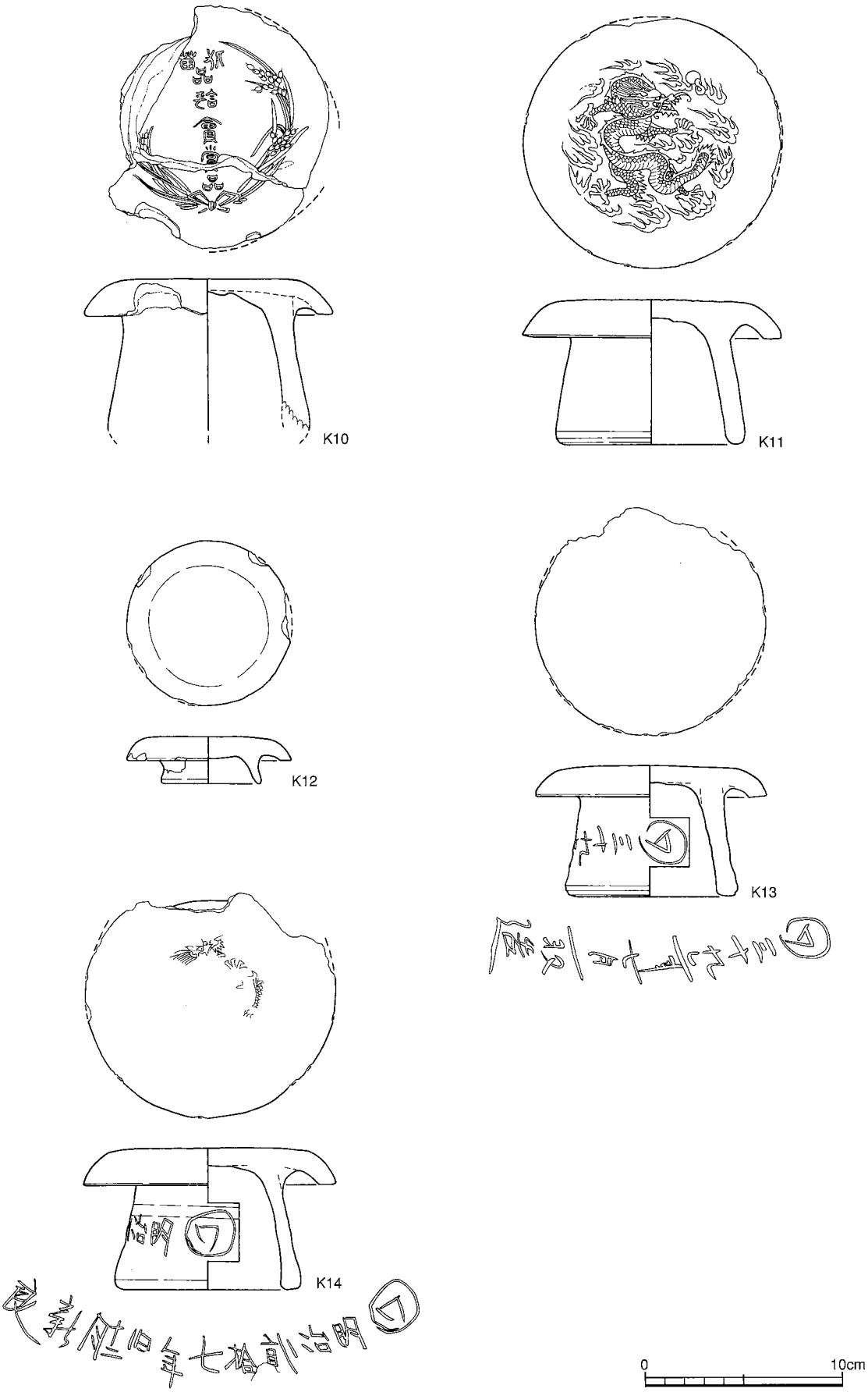
平面の形状が正方形のものは６点（K38～K43）を数え、隅入正方形および隅丸正方形に分けられる。このうち、台部の代わりに取っ手がつき、口縁部の形状が丸くおさまる（A）ものが１点（K43）確認されたが、その他は台部がつき、口縁部が玉縁状を呈するもの（B）である。文様の彫刻は、陰刻（K42）あるいは線刻されたもの（K38～K40）と無文のもの（K41・K43）がある。文様構成は、文字文・龍文であり、文字文は、篆書された４行11文字（右から「□□（不明）　問春最　□生□　□（是か）富発」が陰刻され、龍文は丸形あるいは小判形同様、細かな線刻で躍動する龍が表現され、周囲に雲が配されている。また、平面の形状が隅切菱形（K44）あるいは隅入六角形（K45）のものは、ともに１点のみの出土である。この他、角形の変形として、襞状菱形（次項　陶器類の皿類の分類では菱形状花弁形K46・K47）あるいは隅入多角形（同　多角形状花弁形　K51～K53）などがあり、ともに小判形龍文の型（K24）と同様、極めて多くの出土点数が認められる。いずれも台部がつくものであり、口縁部および体部の形状はいずれも同じ（A）である。また、襞状菱形の型は大・小と２種類が確認され、ともに薔薇の花と葉が陰刻されているが、花の向きなど文様構成は左右対称である。隅入多角形の型は、底部および口縁部への立ち上がりの器内全面が凹線で区画され、細い陰線で複雑な幾何学文が描かれている。しかし、実測し、図化している３点の文様構成は、方形に区画された中心部の四隅から広がる文様を除き、中心部の文様の向きや周囲に配された個々の陰線文様にいずれも微妙な違いがみられる。また、襞状丸形（同　丸形状花弁形　K49・K50）では、文様構成はともに龍文であるが、唯一、陰刻された龍文（K50）が確認された。陰刻された龍文型は、隅入多角形の型と同様、底部および口縁部への立ち上がりの器内全面に文様が彫刻されており、中心には正面を向いた陰刻された龍と雲が配され、その周囲は６種の花と草が複雑に巡っている。

平面の形状が変形のものは、木の葉形（K54）および千鳥形（K55）の２点を実測し、図化している。ともに台部がつき、口縁部は丸くおさまるもの（A）であるが、桃実形あるいは五弁花形の型と同様、土型自体が木の葉や千鳥をかたどっており、文様の彫刻は補助的なものである。

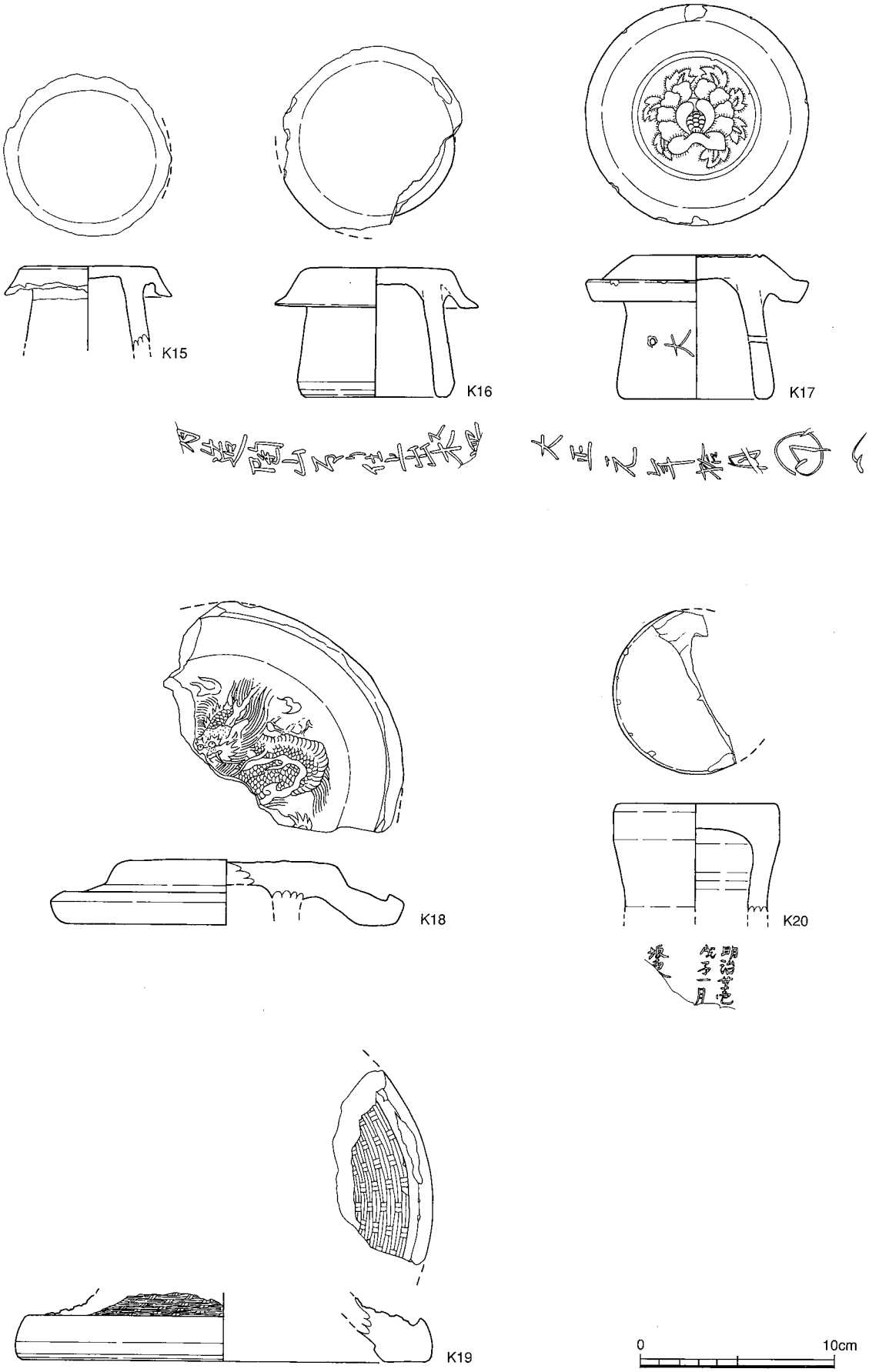
第16図　出土遺物　土型(1)



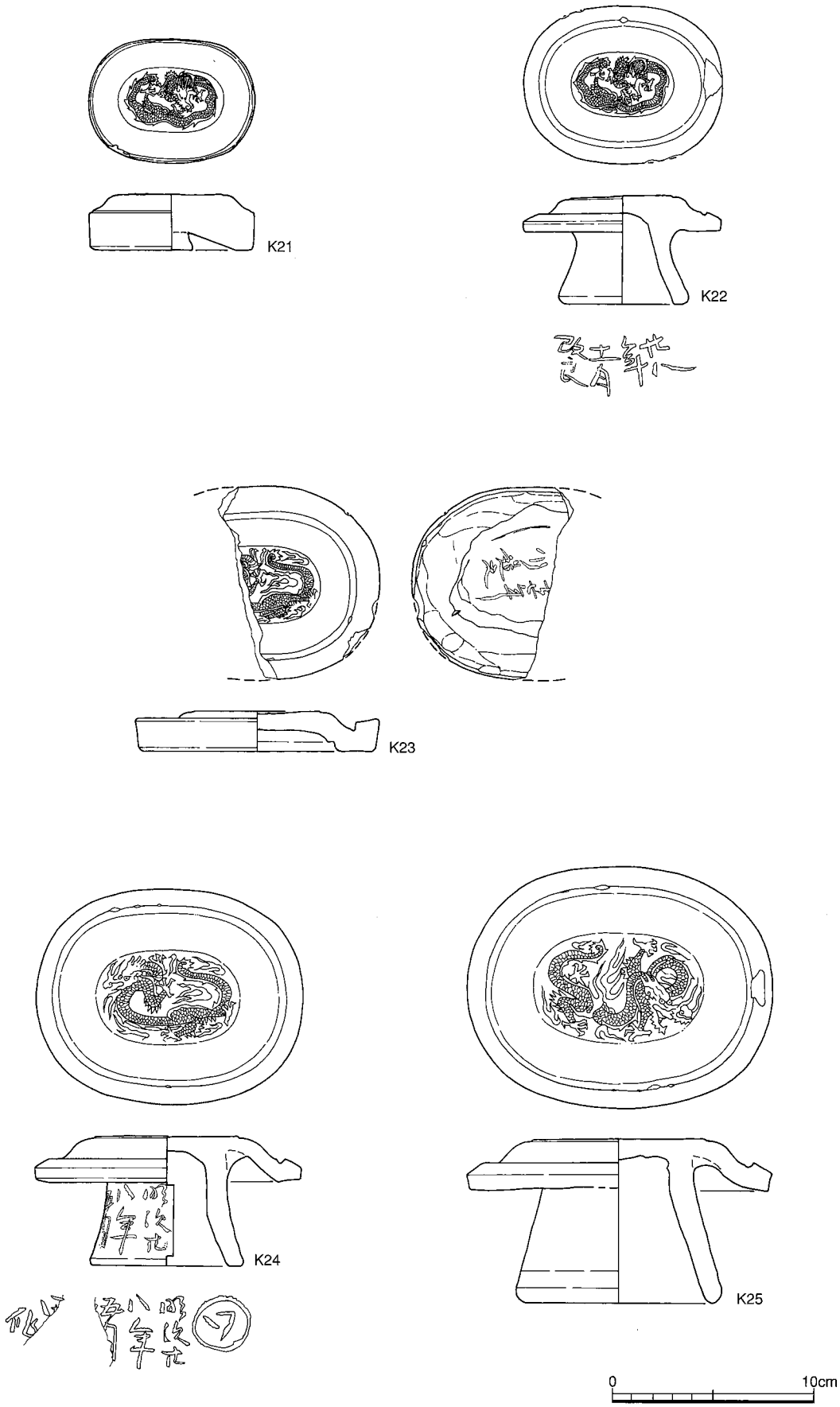
第17図　出土遺物　土型(2)



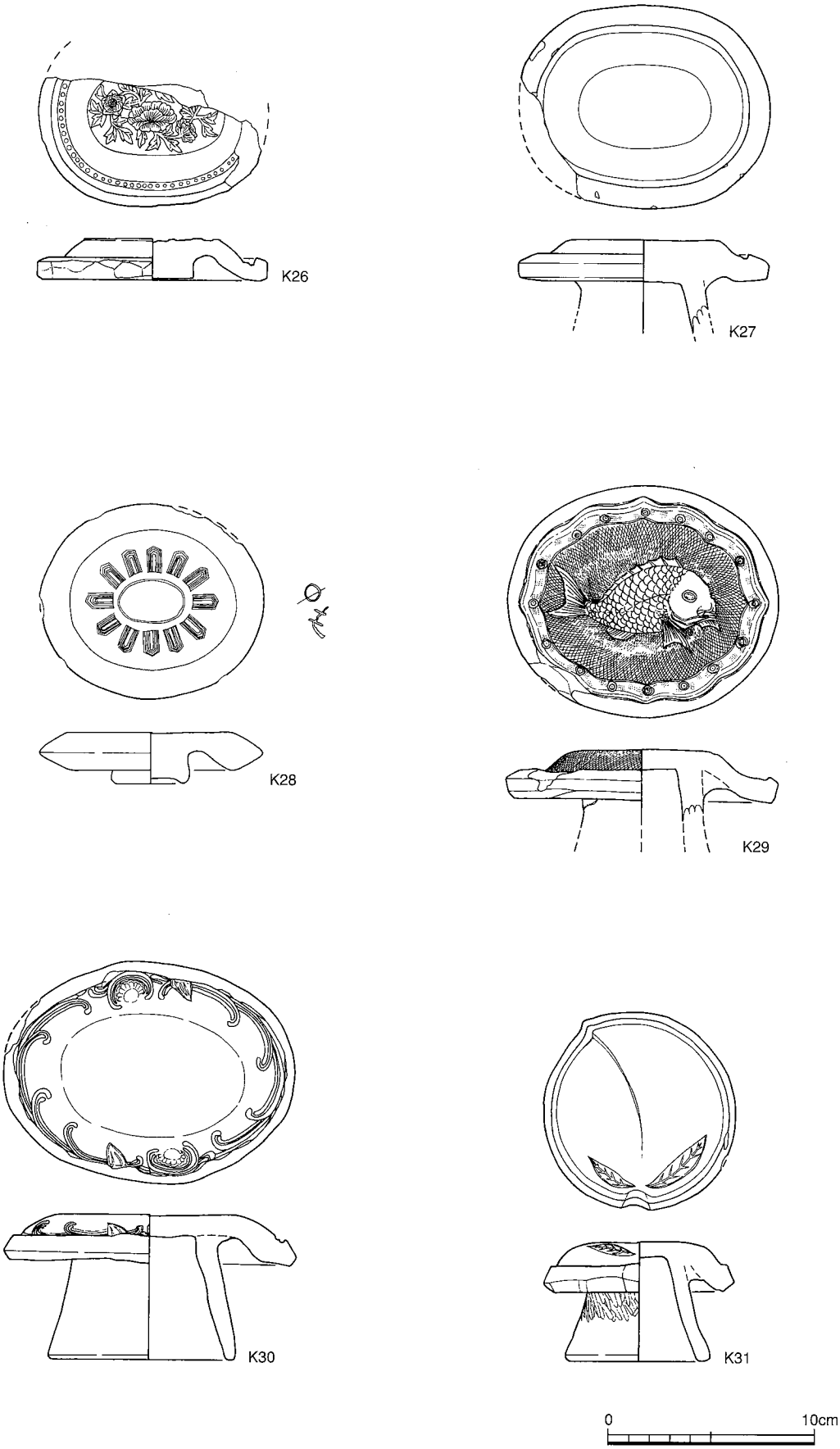
第18図　出土遺物　土型(3)



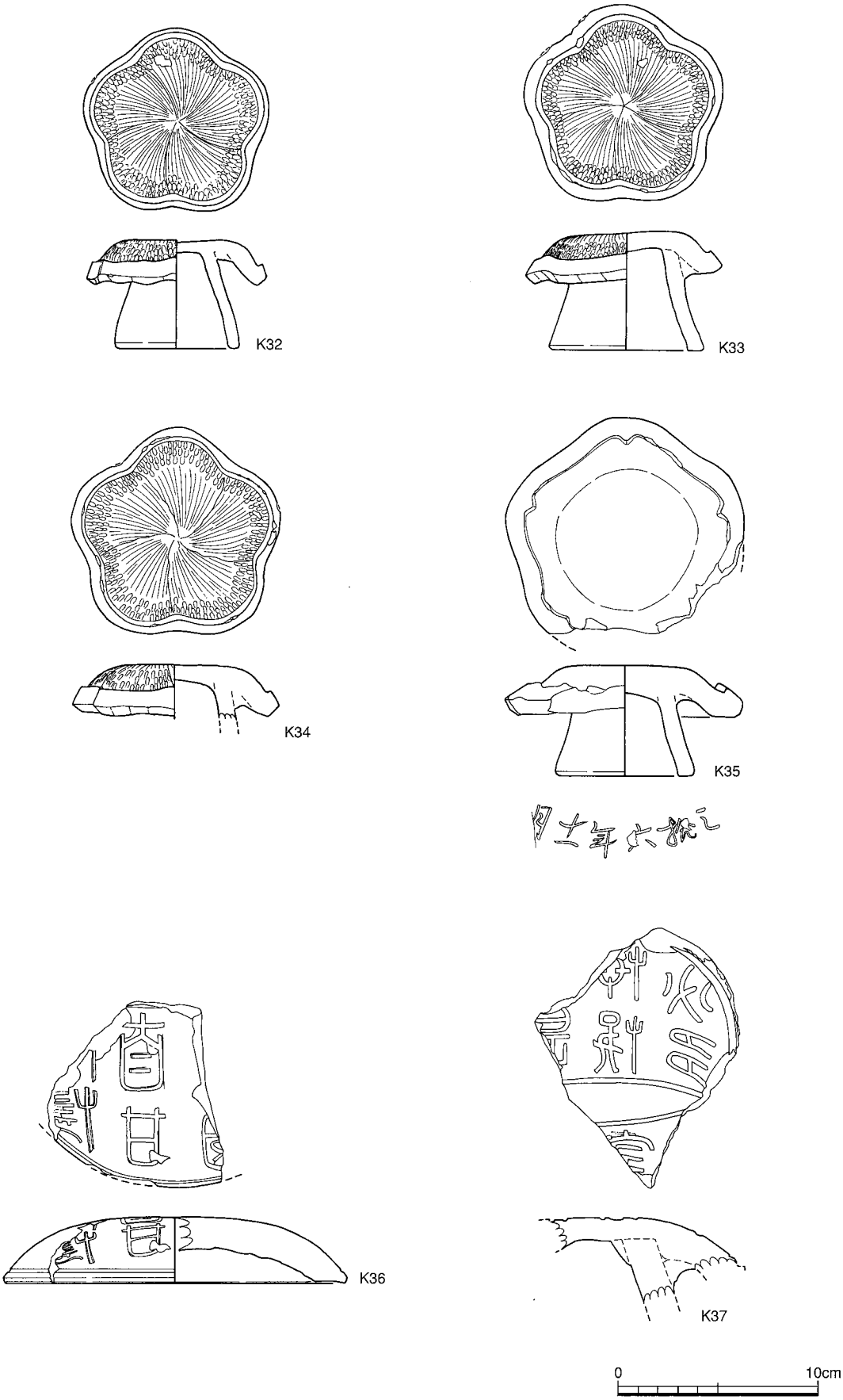
第19図　出土遺物　土型(4)



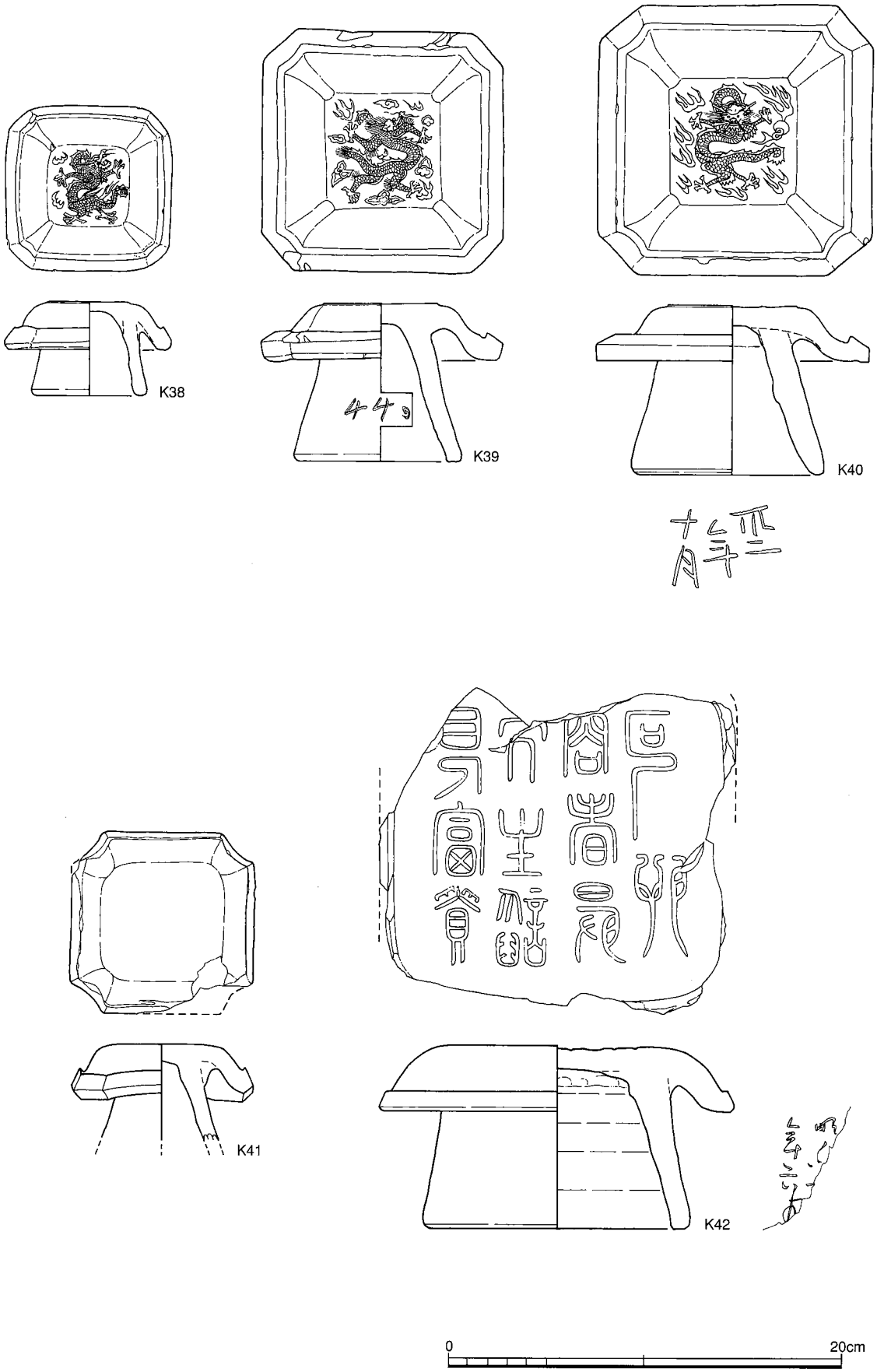
第20図　出土遺物　土型(5)



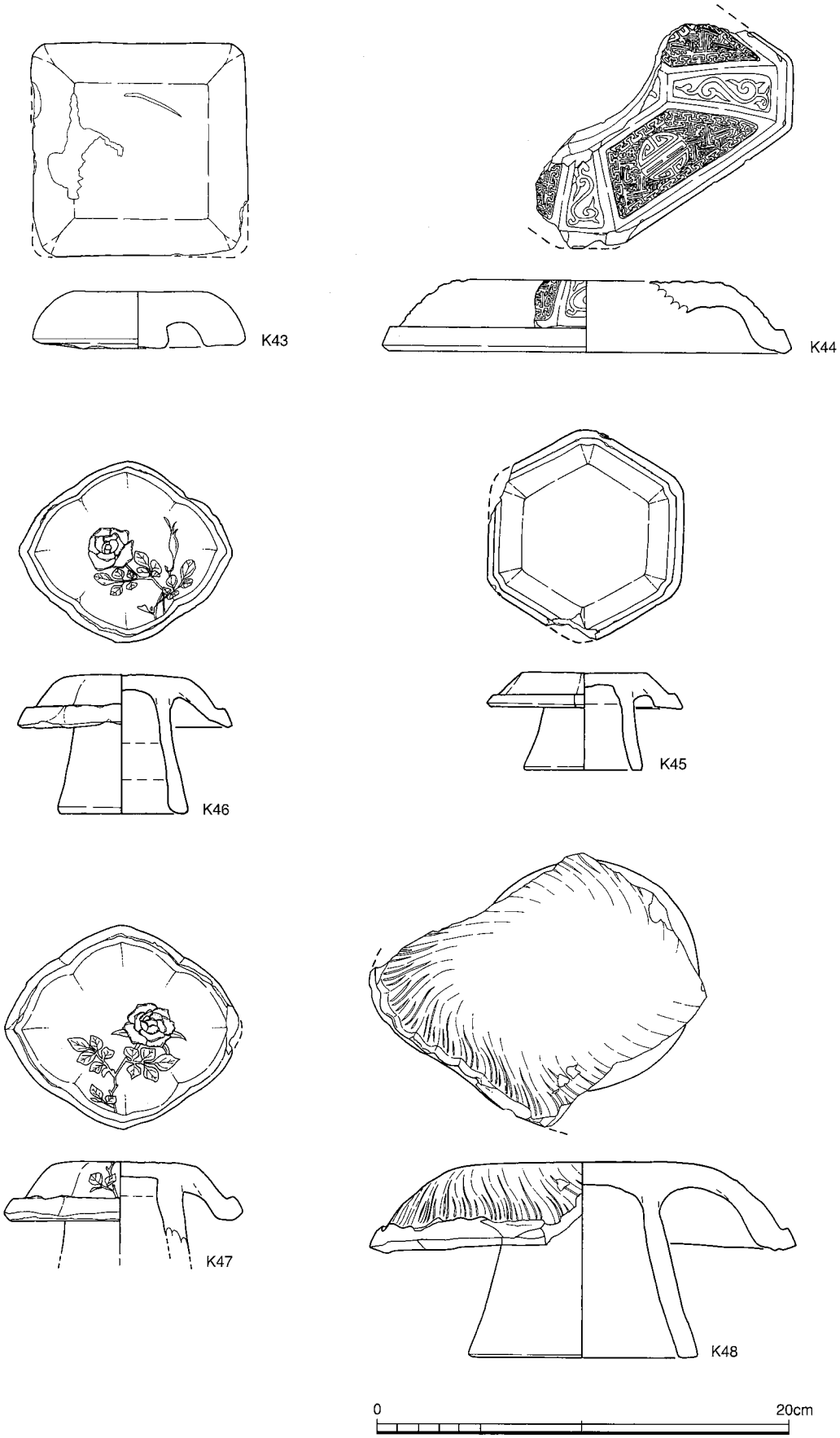
第21図　出土遺物　土型(6)



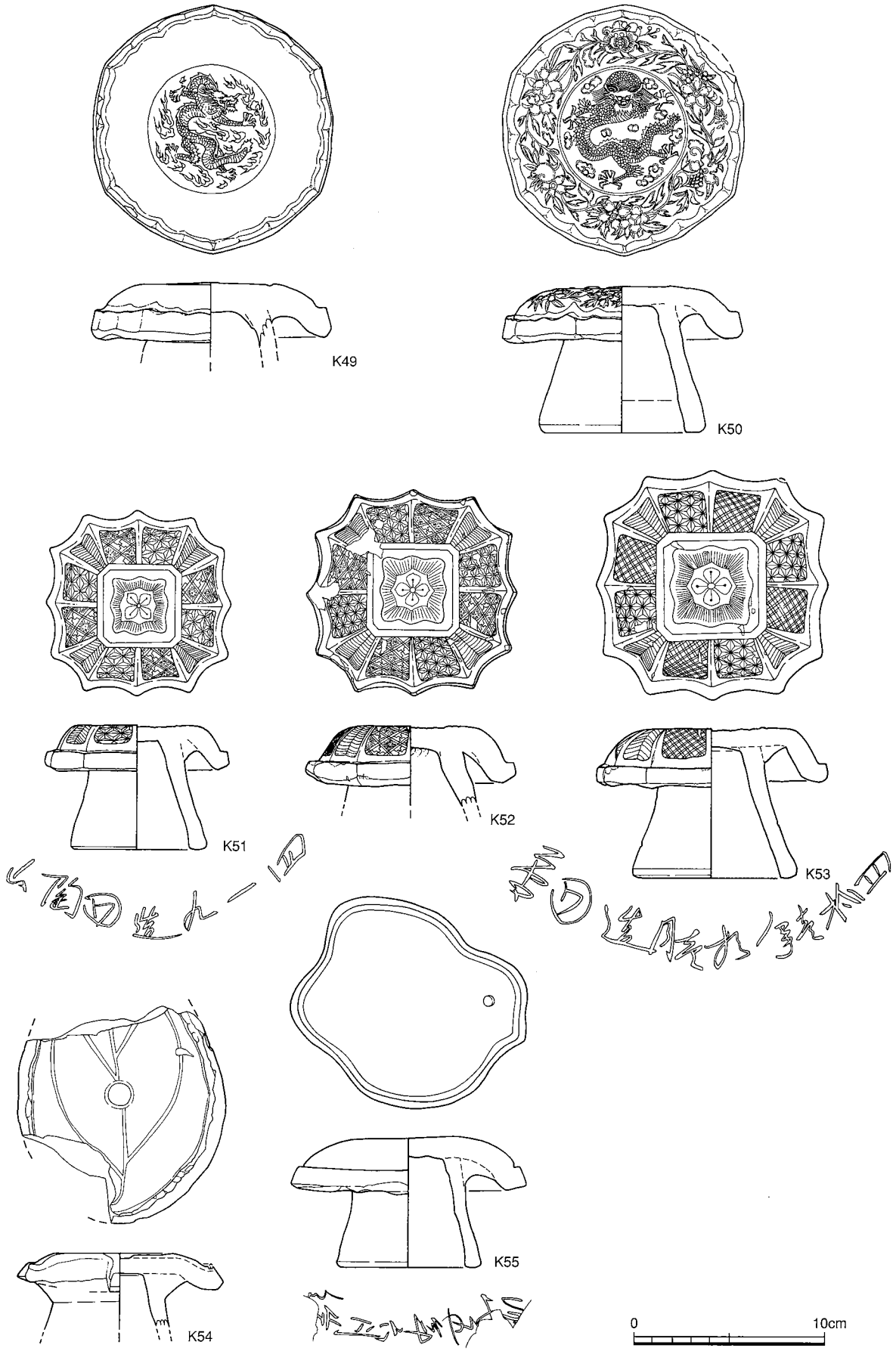
第22図　出土遺物　土型(7)



第23図　出土遺物　土型(8)



第24図　出土遺物　土型(9)



第25図　出土遺物　土型(10)

蓋類　製作された蓋の形状が、

A：山笠形を呈するもの

B：平形を呈するもの

C：その他

に分けられ、いずれも中心に摘みをつけるための直径0.5～1㎝の円形の凹面がある。

鉢あるいは皿を製作するための土型は、型部に台部がつく形態のものが大半を占めているが、蓋を製作するための土型は、皿状の型部に高台あるいはつまみがつく形態のものや円盤状の粘土板の片面に蓋の形状を彫り込んだものである。

蓋の形状が山笠形を呈するもの（A）は、3種類5点（K56～K60）を数え、型部の裏面につまみがつくもの（K57）と輪（状）高台がつくもの（K56・K58～K60）に分かれる。前者は、十六弁の菊花文をかたどっており、黄橙色の釉薬の痕跡が残っている。後者はいずれも丸形で、「福壽」の二文字が陰刻されたもの（K56）と八弁の蓮華文が陰刻されたもの（K58～K60）がある。八弁蓮華文の蓋型は、文様構成は同一であるが、大・小と2種類に分かれ、小はさらに数㎝の違い（直径8.3㎝、9.8㎝）があるものが確認されている。

蓋の形状が平形を呈するもの（B）は、1種2点（K61・K62）を数え、円盤状の粘土板の片（表）面に四枚の柿の葉が陰刻されている。このうち、一方（K62）の一箇所には、山形の切り込みが開けられており、スプーン等を置く開け口と考えられる。その他（C）に分類し、直角に立ち上がる形状を呈するK63は、円形凸面と陰線で全面に梅の花と考えられる文様が彫刻されている。型にともなう製品は確認されておらず、型取りしたのちの製品が蓋とは断定できないが、蓋類に分類した。

蓮華類　受部の形状によって、

A：受部が楕円形を呈するもの

B：受部が円形を呈するもの

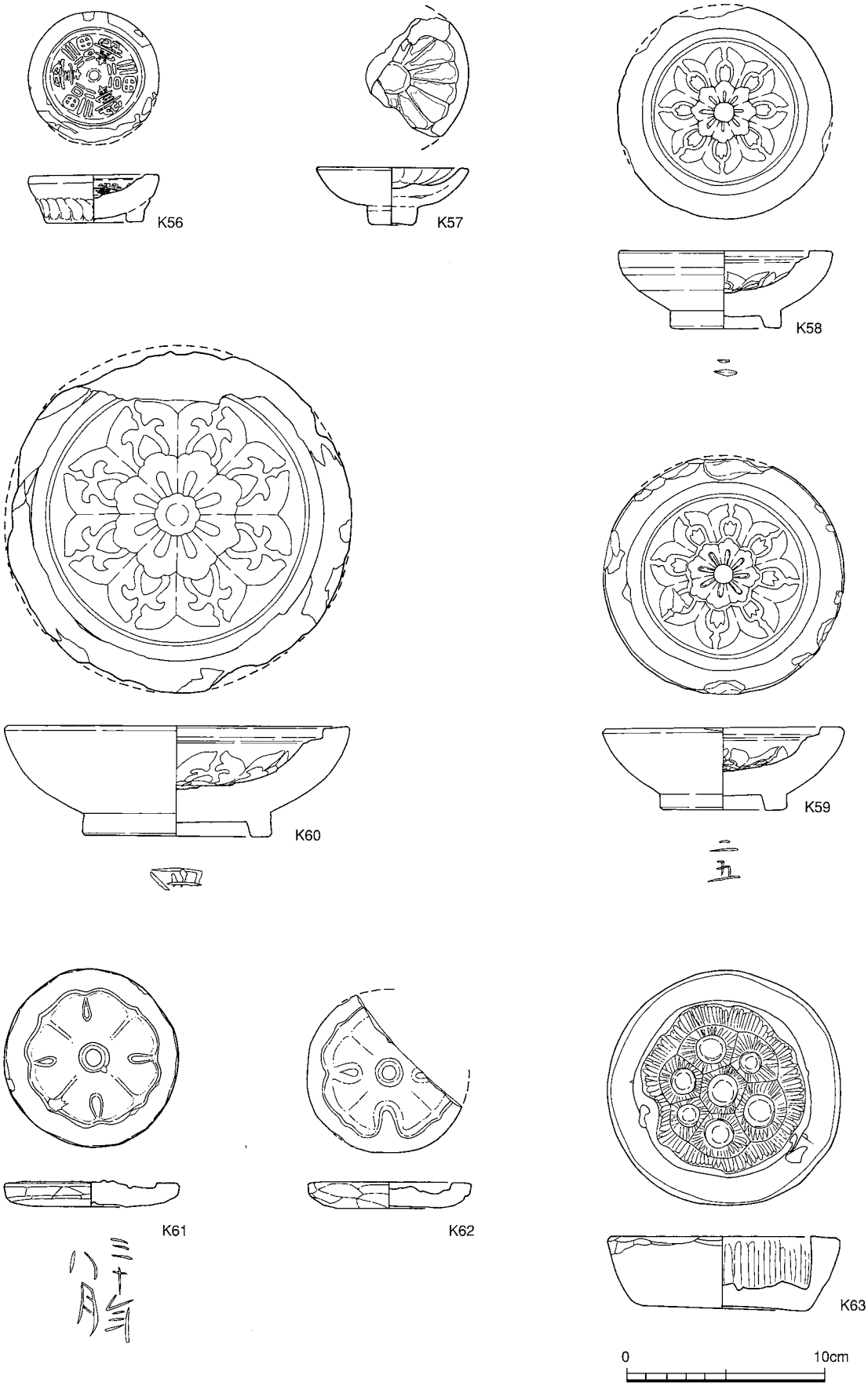
に分けられ、さらに文様の有無、文様構成などによって細分される。

蓮華を製作するための型は、蓮華を逆さに置いた状態の型部の受部および取っ手部の先端に台部がつく形状を呈している。但し、大半のものは型部あるいは台部が欠損し、全体の形状が分かるものは1点（K65）のみである。また、取っ手部が欠損するため、全体の形状は不明であるが、受部につまみがつくもの（K70）と蓮華の形状を呈するもの（K72）が確認される。このうち、後者は蓮華の型として分類しているが、元型の可能性が考えられる。

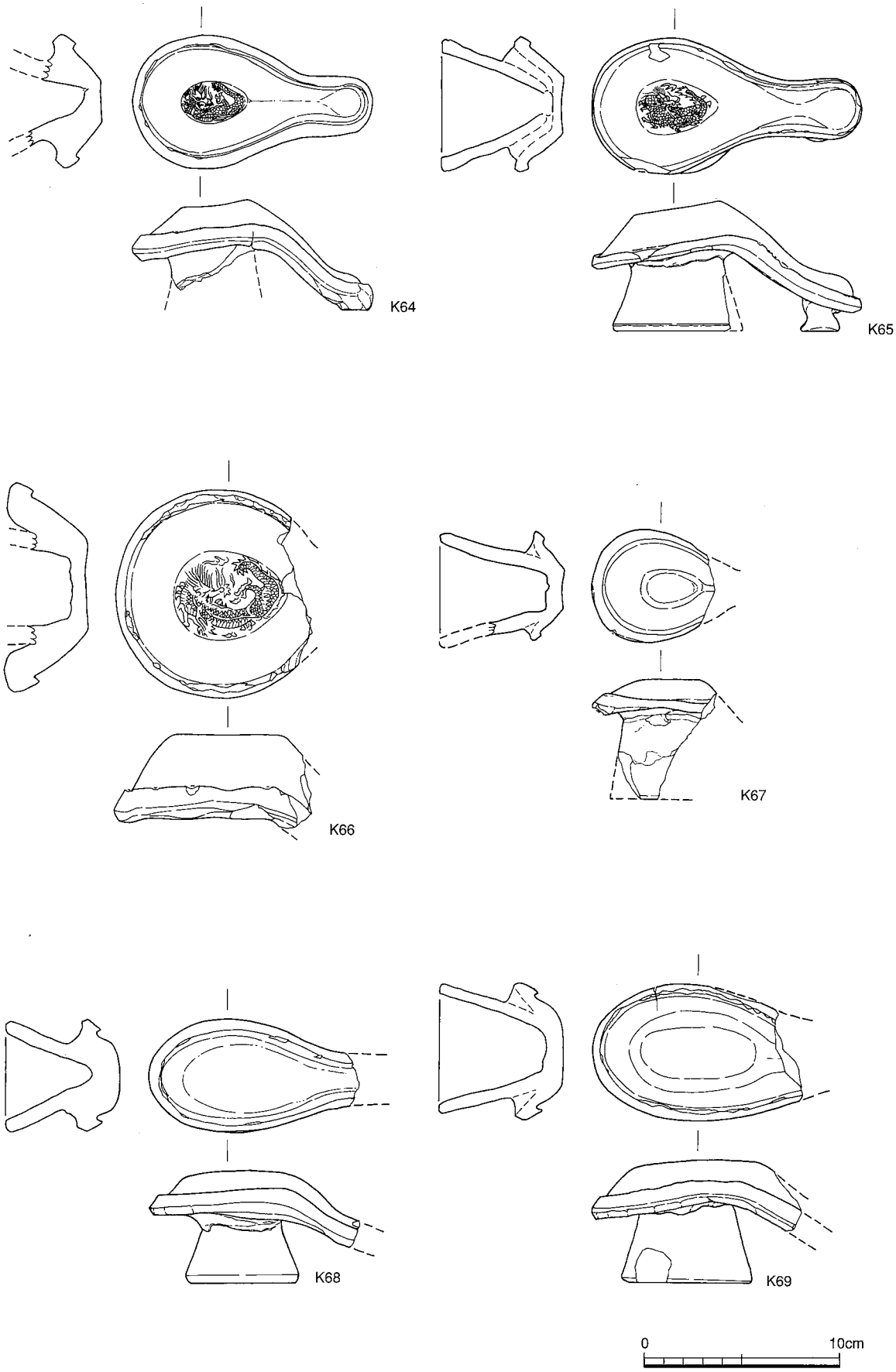
受部の形状が楕円形を呈するものは、6点（K64・K65・K67～K70）を数え、文様が線刻されたもの（K64・K65）と無文のもの（K67～K70）に分けられる。文様構成はすべて龍文で、狭い範囲に細かな線刻で龍が表現され、雲が配されたもの（K65）もみられる。

受部の形状が円形を呈するものは、2点（K66・K71）が確認され、型部がほぼ完存するK71の取っ手部の長さは、受部の大きさに対し短く思われる。

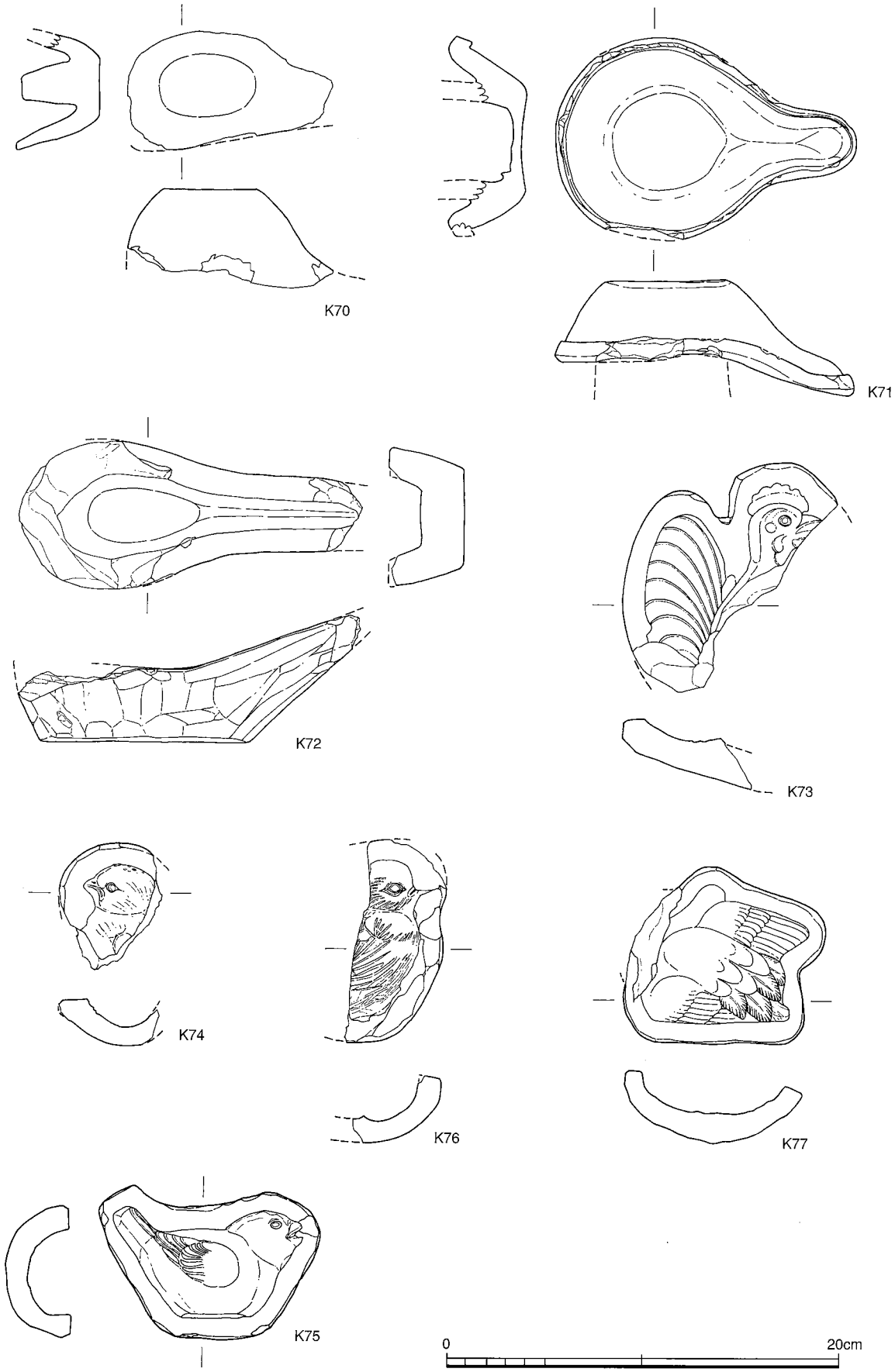
置物類　完成時の製品の形態によって鳥と亀に分けられ、2種類6点（K73～78）を数える。型部は鶏・雀・亀などをかたどり、陰刻あるいは細かな陰線でそれぞれを表現し、裏面は台部あるいは高台などなにもつかない形態のものである。また、そのうちの5点（K73～77）については片側の型のみが出土している。これは、製品を完成されるためには、今回出土しているものと真逆の対になる型が必要になるが、それらはいずれも確認されなかった。



第26図　出土遺物　土型(11)



第27図　出土遺物　土型(12)



第28図　出土遺物　土型(13)

(2) 元型

元型は、上述した製品型をつくるための原型となる型で、台部がつくものが多い製品型とは異なり、輪あるいは方形状の高台がつく形状のものが大半を占めている。元型については、出土したほぼすべてを実測し、図化しており、皿類10点、蓮華類3点、置物類1点、貼付類4点の以上18点（K79～K96）を数える。

皿類　皿類の元型の形状は、製品型の蓋類と類似し、すべてが皿状の型部に高台がつく形態のものである。文様については、製品型のものと反転する同じ文様構成をもつもので、小判形龍文（K24）の元型が3点（K80～K82）、隅入正方形龍文（K39）の元型が1点（K83）、隅入多角形幾何学文（K51～K53）の元型が2種4点（K85～K88）それぞれ確認されている。すべての元型と図化した製品型を比較してみると、文様構成は同一ではあるが、これらの元型から型取りされた製品型ではないことが分かる。また、蝙蝠と雲に円を多用した文様が線刻[9]された元型（K79）および無文の隅丸正方形の元型（K84）にともなう型と製品はいずれも確認されていない。

蓮華類　蓮華類の元型は3点（K89～K91）が確認され、いずれも受部が楕円形を呈し、龍が線刻されたものである。取っ手部はすべて欠損しており、全体の形状は不明であるが、型部（受部）の裏面は高台がつくもの（K89・K91）と裏面になにもつかないもの（K90）に分けられる。

置物類　置物類の元型は1点（K92）が確認され、亀をかたどった山形状を呈している。大半が欠損しており、全体の形状等は不明であるが、亀の甲羅が線刻されている。

貼付類　貼付類の元型は4点（K93～K96）が確認され、型部裏面に取っ手がつくもの（K93・K94）となにもつかないもの（K95・K96）に分けられる。いずれも花弁（菊花・桜花）を立体的にかたどっているため、元型と判断した。

(3) 貼付型

貼付型は、蓋の摘みと考えられる蓋摘み類、立体的な文様を形作る貼付類、急須あるいはティポットの注口と考えられる注口類に分けられ、11点（K97～K107）を実測し、図化している。すべての貼付型は比較的小さい、裏面になにもつかない形状のものである。

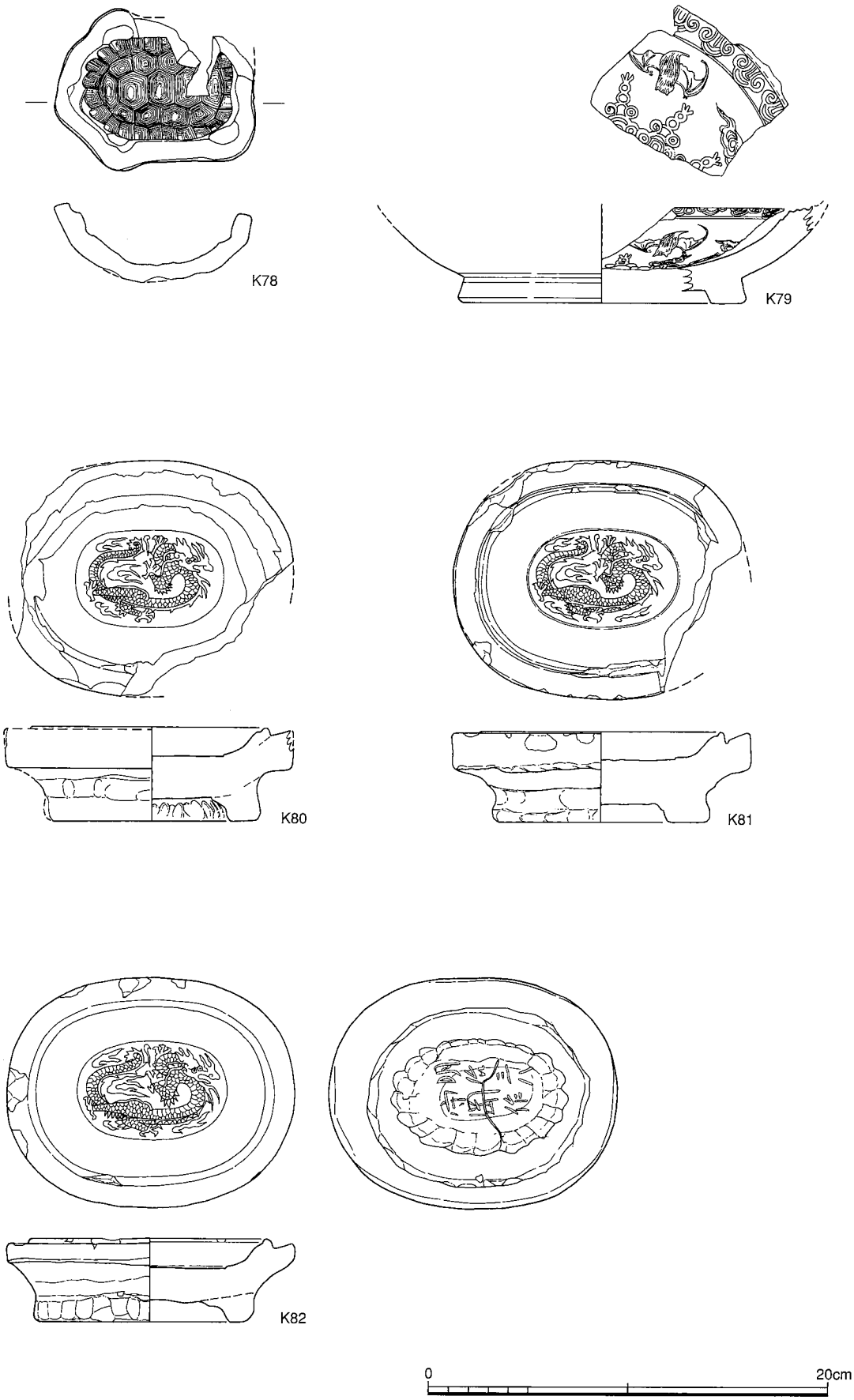
蓋摘み類　蓋摘み類は4点（K97～K100）が確認され、製品型の置物類と同様、片側の型のみが出土しており、真逆になる型については確認されなかった。桃の実をかたどったもの（K97）の他、楕円形を呈するもの（K98・K99）などがある。

貼付類　貼付類は5点（K101～K105）が確認され、松の葉・木の葉・鳥（鶴）・菊花がそれぞれ陰刻されている。このうち、ふたつの木の葉文型（K102・K103）は、桃の実をかたどった蓋摘み型（K97）の周囲にあわせて貼り付けられるもので、多くの製品の蓋（遺物№421～424・451～455）にみられる。その他のもの（K101・K104・K105）は、どの製品のどの部分に貼り付けられたかについては確認されなかった。

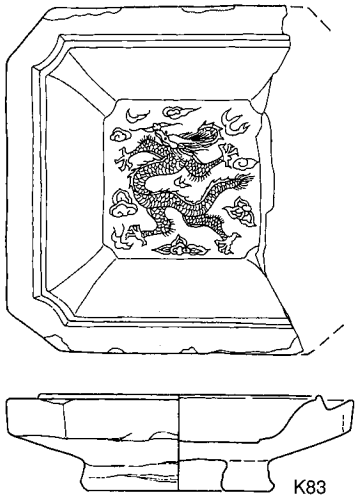
注口類　注口類は2点（K106・K107）が確認され、蓋摘み類と同様、片側の型のみが出土しており、真逆になる型については確認されなかった。

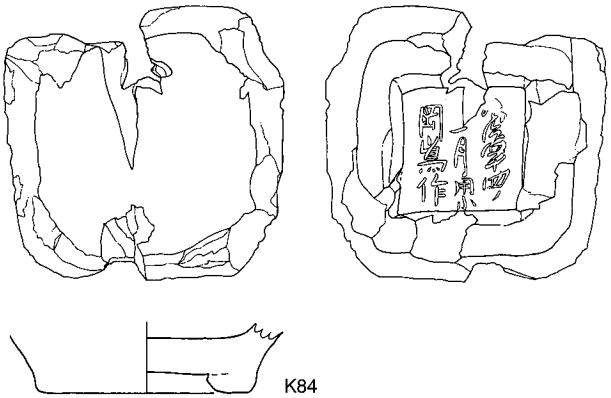
(4) 高台型

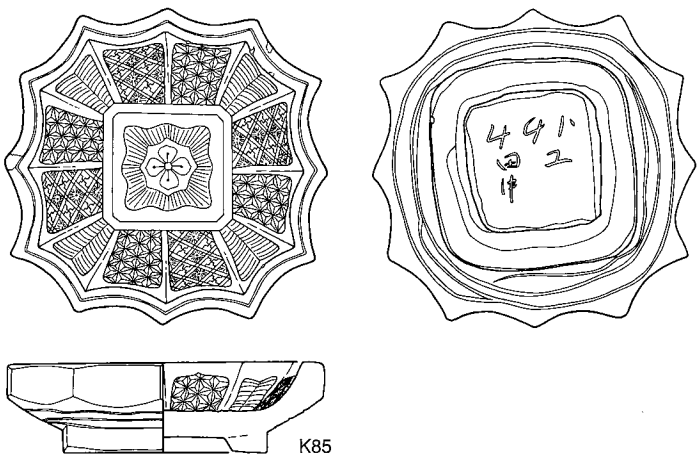
高台型は、いずれも中空のドーナツ状を呈しており、その形状によって丸形、四角形、襞状菱形、襞状丸形に分けられ、9点（K108～K116）を実測し、図化している。そのうち、丸形の高台は大・小に二分され、四角形の高台は大・中・小に三分される。また、図化していないものを含め計測（丸形は直径、四角形は一辺）すると、いずれも数mm単位で大きさにわずかな違い[10]がみられる。



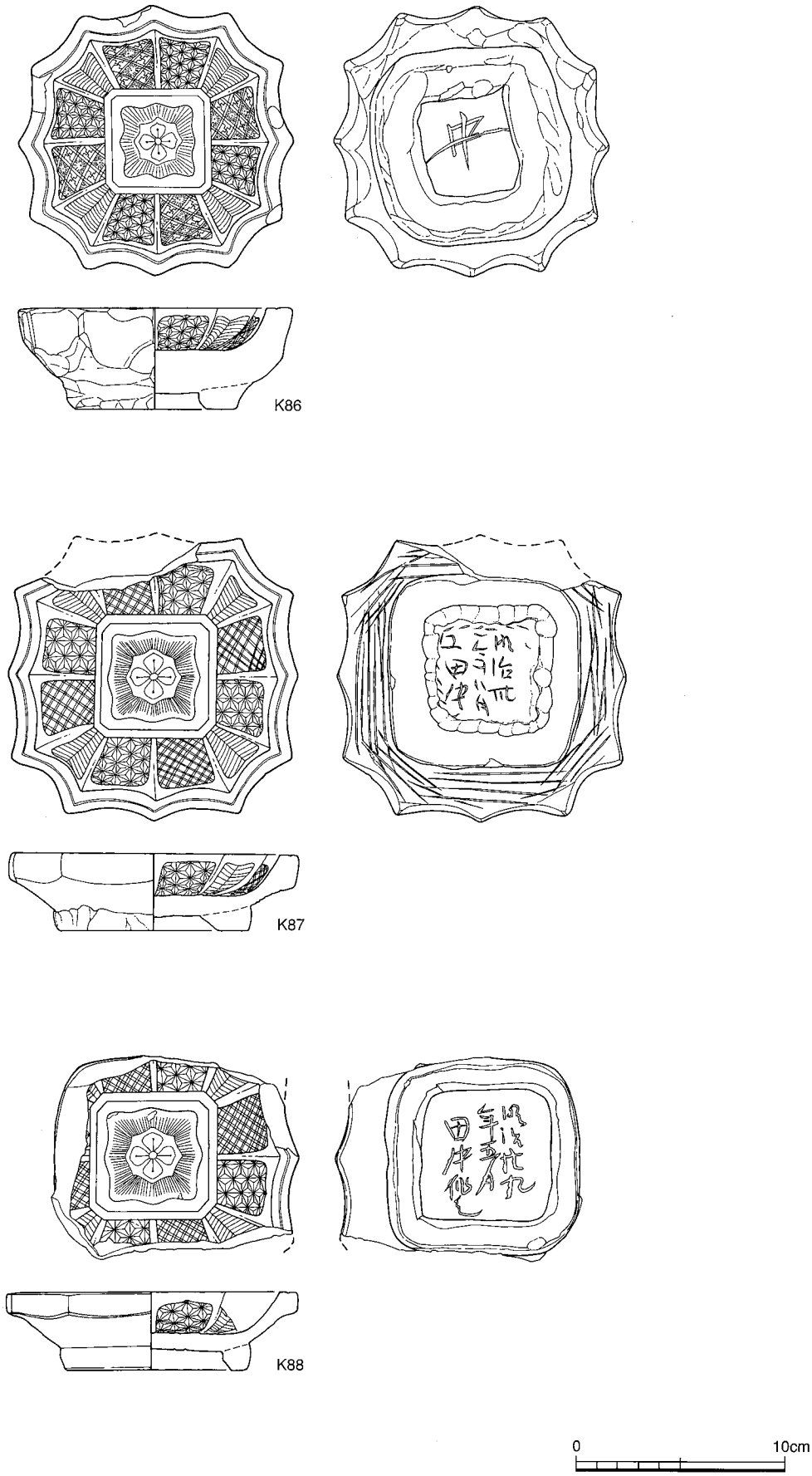
第29図　出土遺物　土型(14)



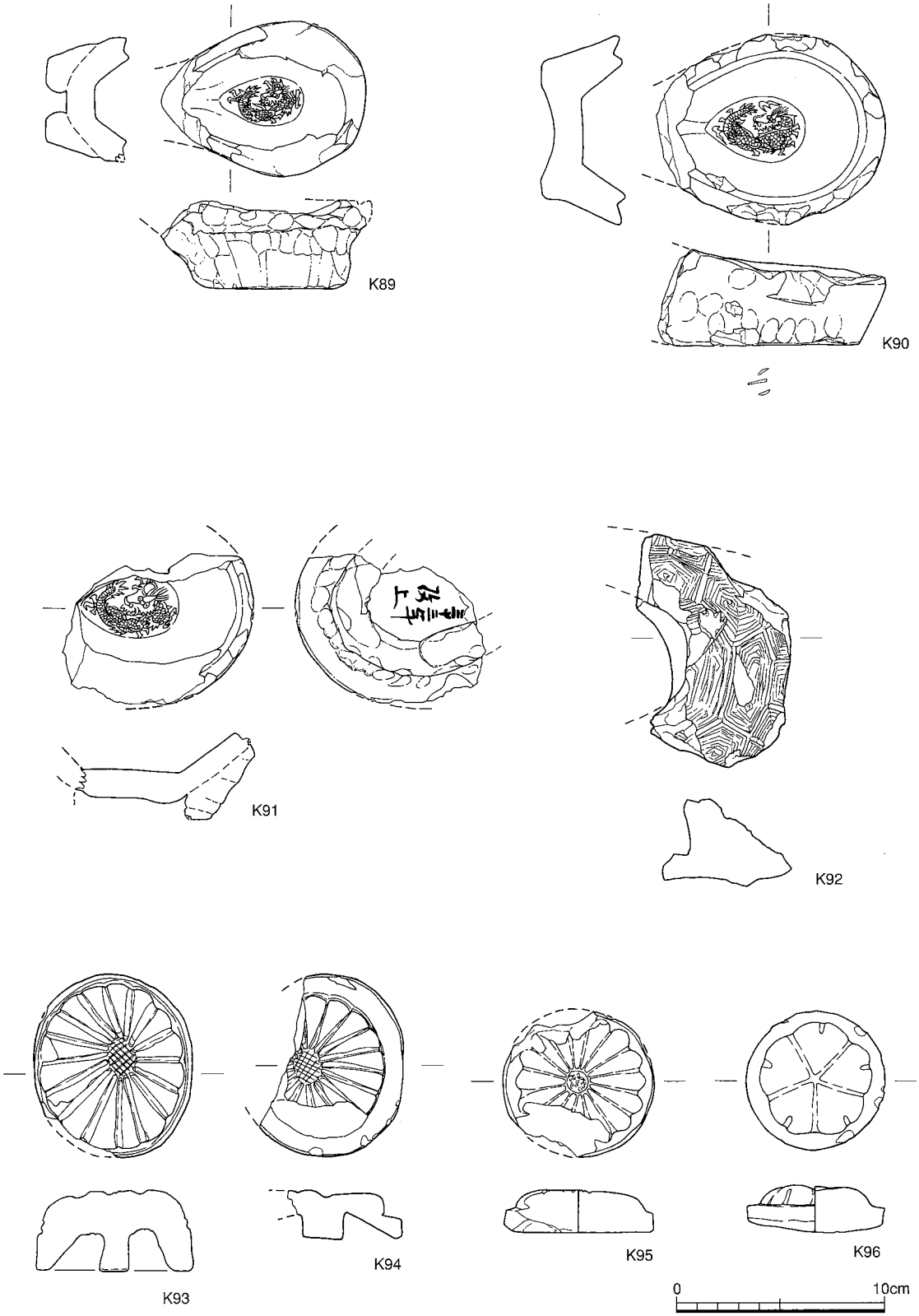




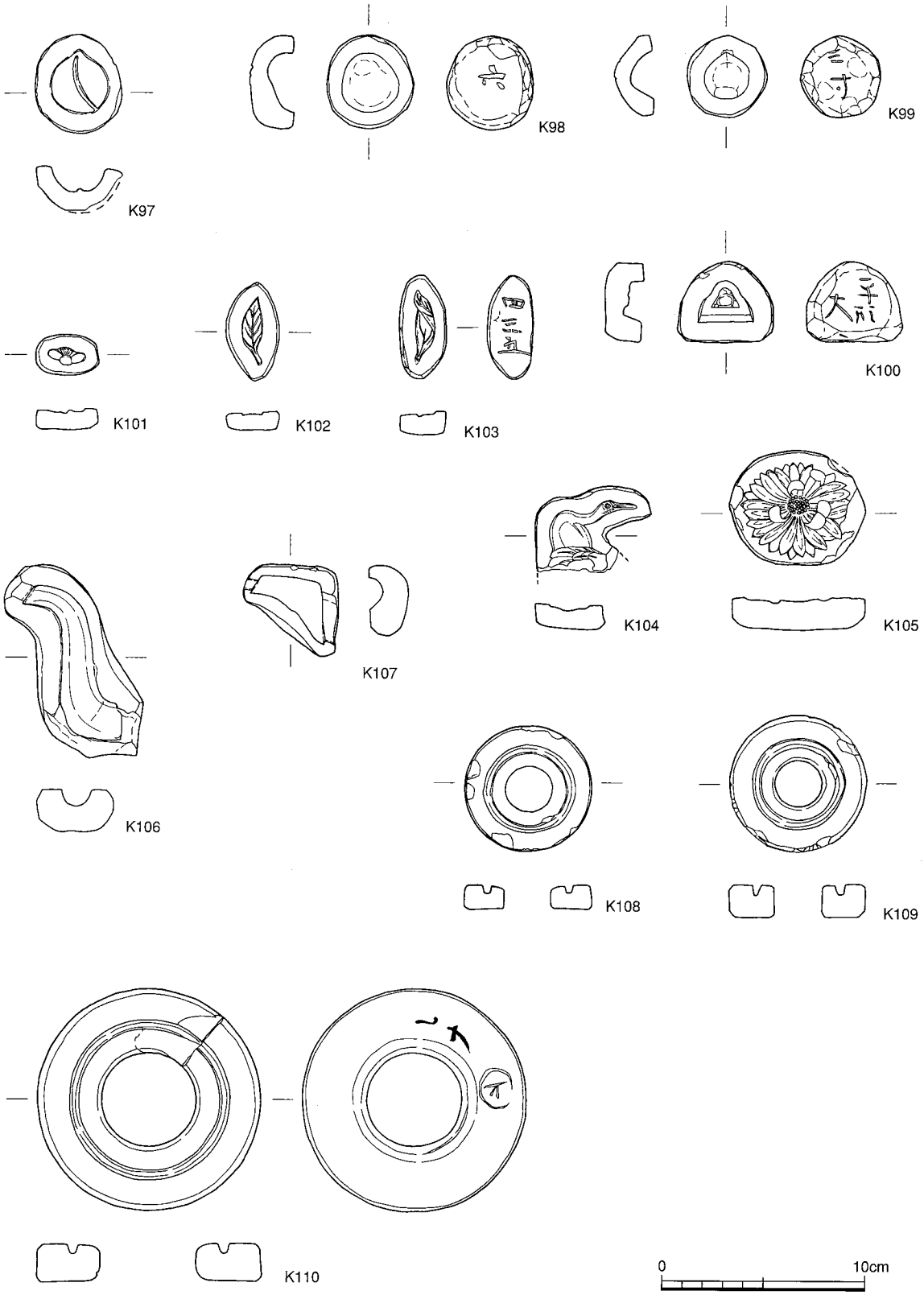
第30図　出土遺物　土型(15)



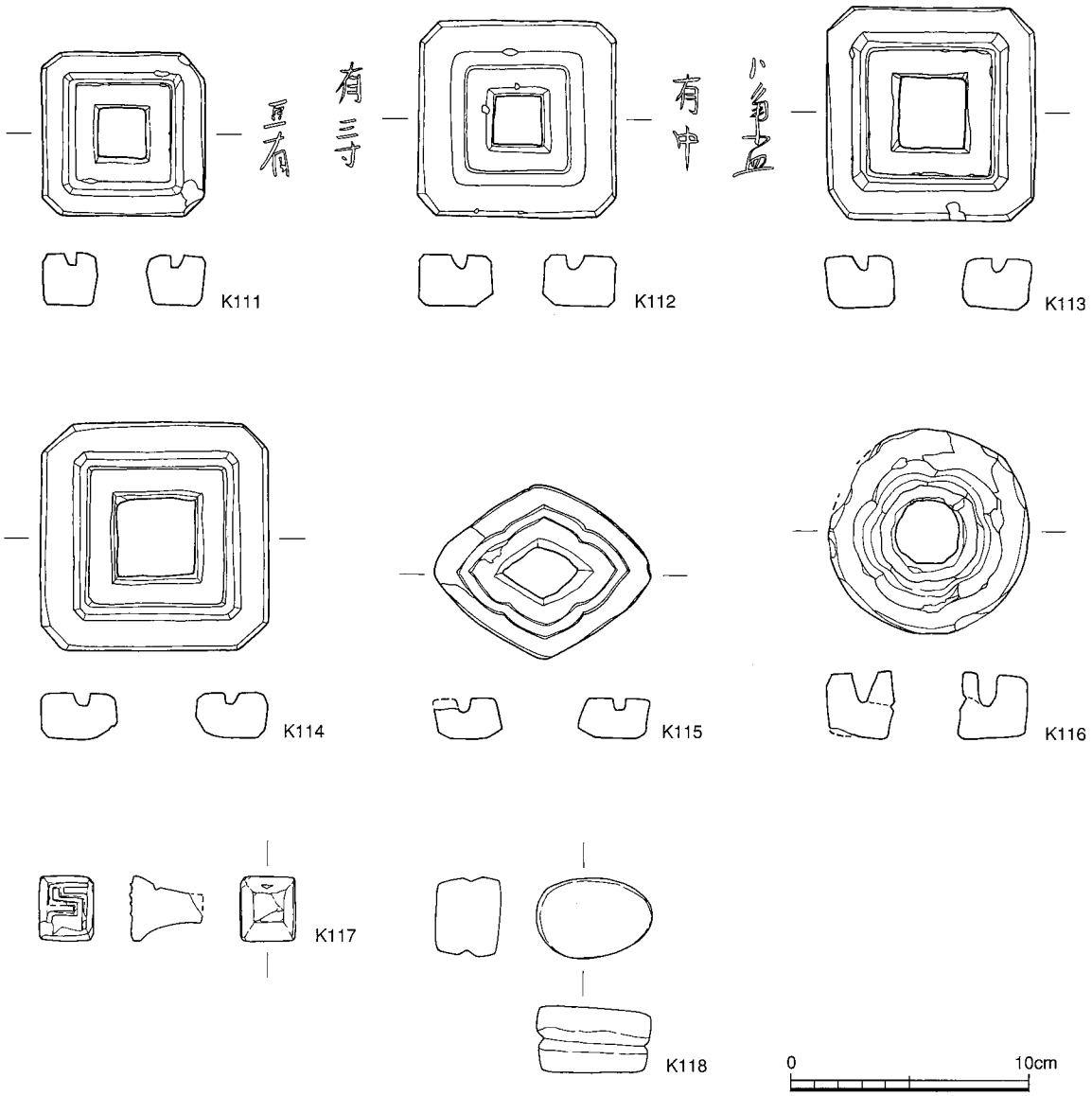
第31図　出土遺物　土型(16)



第32図　出土遺物　土型(17)



第33図　出土遺物　土型(18)



第34図　出土遺物　土型(19)

(5)　タイル型

タイル型は、陶器製作に関わるこれまでの型とは異なり、湿式タイルを成形するためのもので、11点（K119～K129）を実測し、図化している。全体の形状は、欠損しているものを含め、一辺約17.5cmの正方形のタイル成形面に文様が彫刻され、その周囲に幅約2cmの周縁部が巡るもの（K119～K126・K128）が多く、この他、四隅が切り込まれた隅切正方形を呈するものが1点（K127）、竹割形状を呈するものが1点（K129）確認されている。型部裏面は、台（脚）部がつくものが1点（K128）あるのみで、その他は、布目や指押さえによる凹面の痕跡が明瞭に残る、なにもつかない形態のもの（V）である。

文様は、花弁状のもの（K119・K122・K123他）や直線と円形を組み合わせたもの（K129）などが陰刻され、無文のもの（K127・K129）も確認される。また、K123は対角線に幅1cmの凹線で区切られており、三角タイルを製作するための土型である。

(6)　ピンハマ型

ピンハマ型は、陶器およびタイル製作に関わるこれまでの型とは異なり、窯道具のピンハマをつくるための型で、7点（K130～K137）を実測し、図化している。平面の形状によって、

A：正三角形を呈するもの

B：正三角形の各辺の中央が内湾する形状を呈するもの

B：二等辺三角形を呈するもの

に分けられる。また、ピンハマ型も図化していないものを含め計測（三角先端に円錐形に彫られた頂点の二点間を一辺）すると、丸形および四角形の高台型以上に、大きさにわずかな違い[11]がみられる。

(7)　不明型

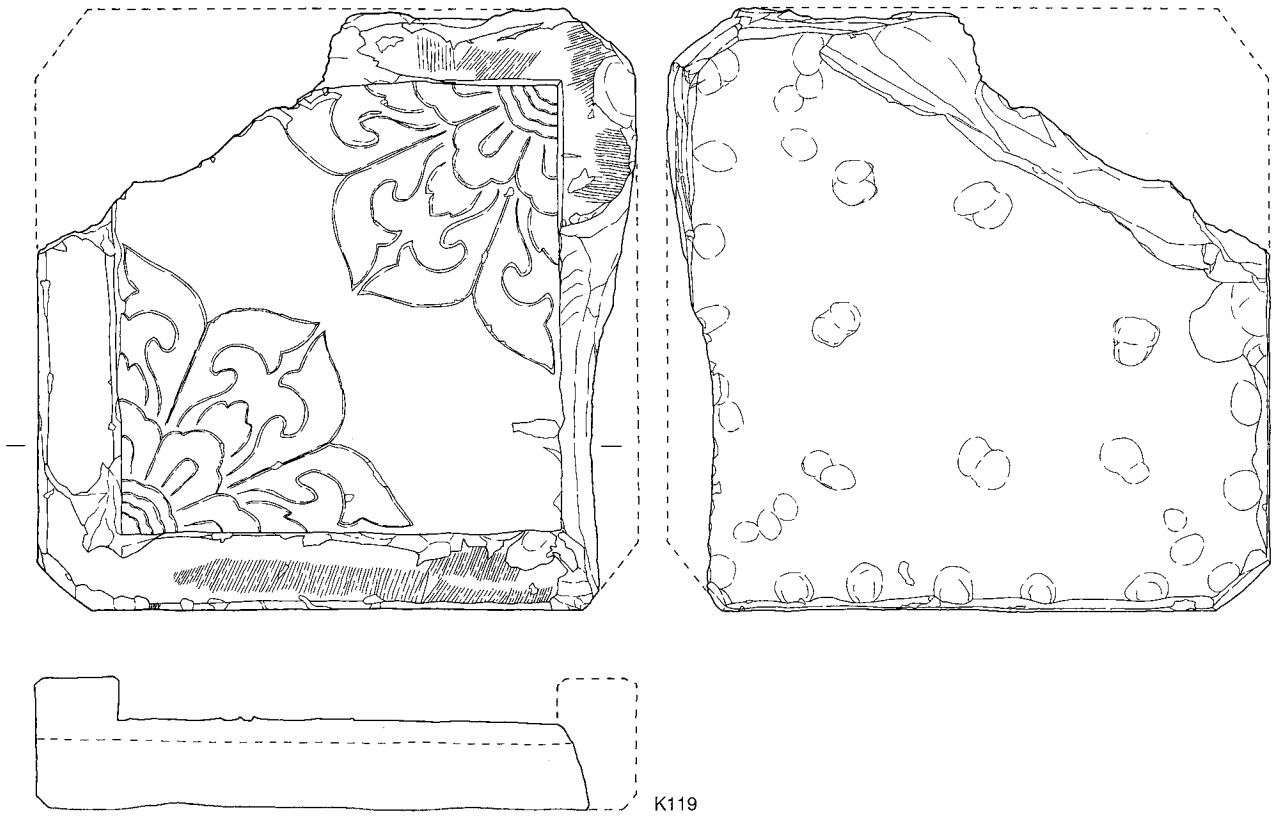
型として分類しているが、詳細が不明なもの2点（K117・K118）を実測し、図化している。K117は四角錐状を呈し、底面に凸線で文字が表現されており、印章と考えられる。K118は楕円柱形状を呈し、両面は滑らかな平坦面をもつが、その用途等は不明である。

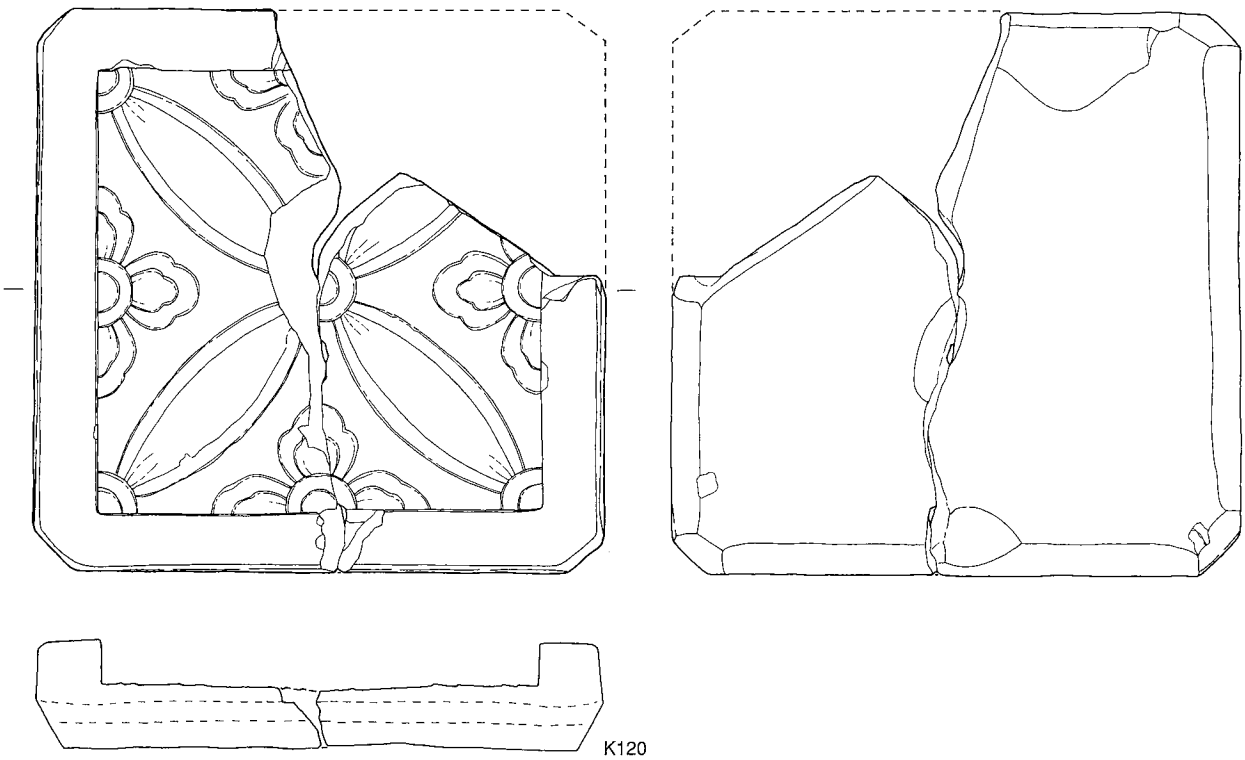
石膏型

良質な胎土の粘土によって成形・焼成された土型とは異なり、石膏によって成形された型である。実測し、図化したものは1点（K137）であるが、その他にも数点が出土しており、それらについては、写真図版（写真図版25下段）に収めている。K137はその形状から土型同様、製品（蓋）を製作するための型と考えられるが、その他のものについては、比較的大きなものもあり、また、皿や鉢、置物などどのようなものを製作する型であるかは明不である。しかし、淡陶株式会社が戦時中、軍需工場として機能していた時に生産された耐酸バルブ（写真図版76中段　磁器製品）は石膏型から製造されており[12]、その時代に使用されていた可能性も考えられる。

以上、各土型について、その形状あるいは文様等を基準に分類を進めたが、個々の特徴およびそれから製作された製品（遺物№）等は第1表(1)～(14)に記載している。また、第46図～第54図に掲載している製品（皿類）の型も出土しているが、小破片のため、実測・図化は行っておらず、それらについては写真図版（写真図版25上段）に収めている。

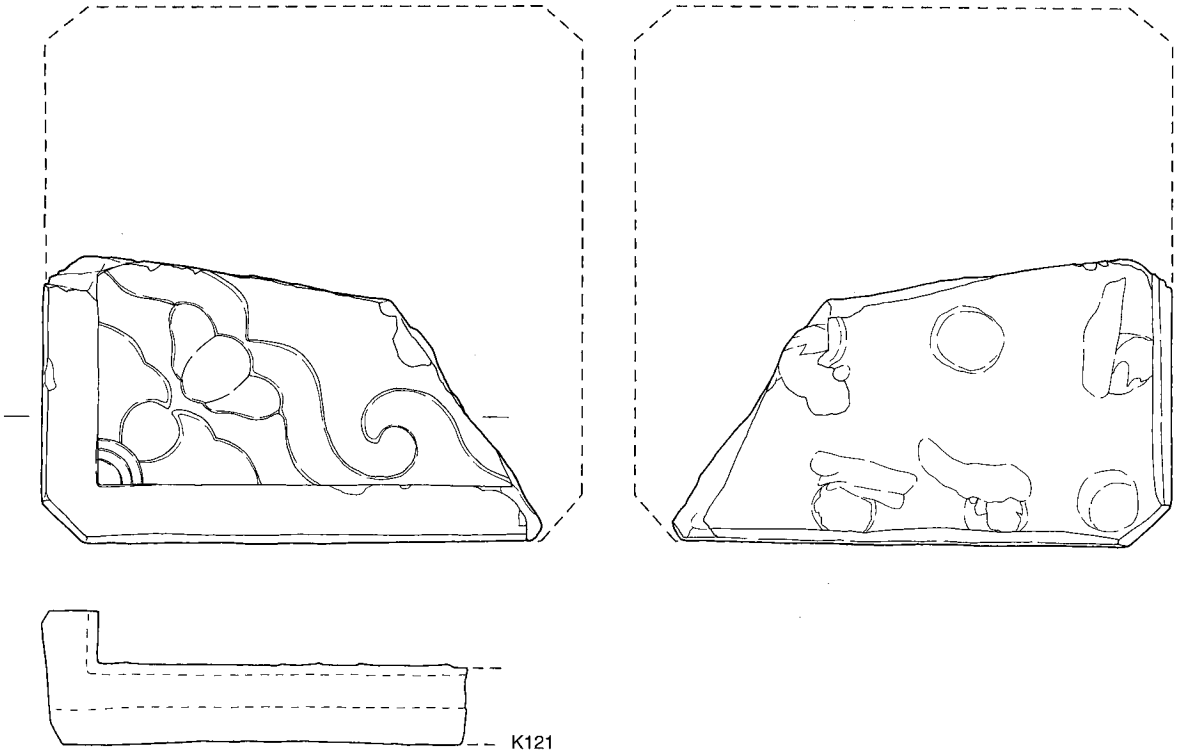
なお、実測し、図化した土型の台部あるいは型部裏面などに書かれた年（月）号・人名・屋号などの銘文（文字）については、実測図とともに掲載し、観察表にも明記しているが、それらについては土型のより詳細な検討とともに、章を改めて（第6章　第2節）記述することとしたい。

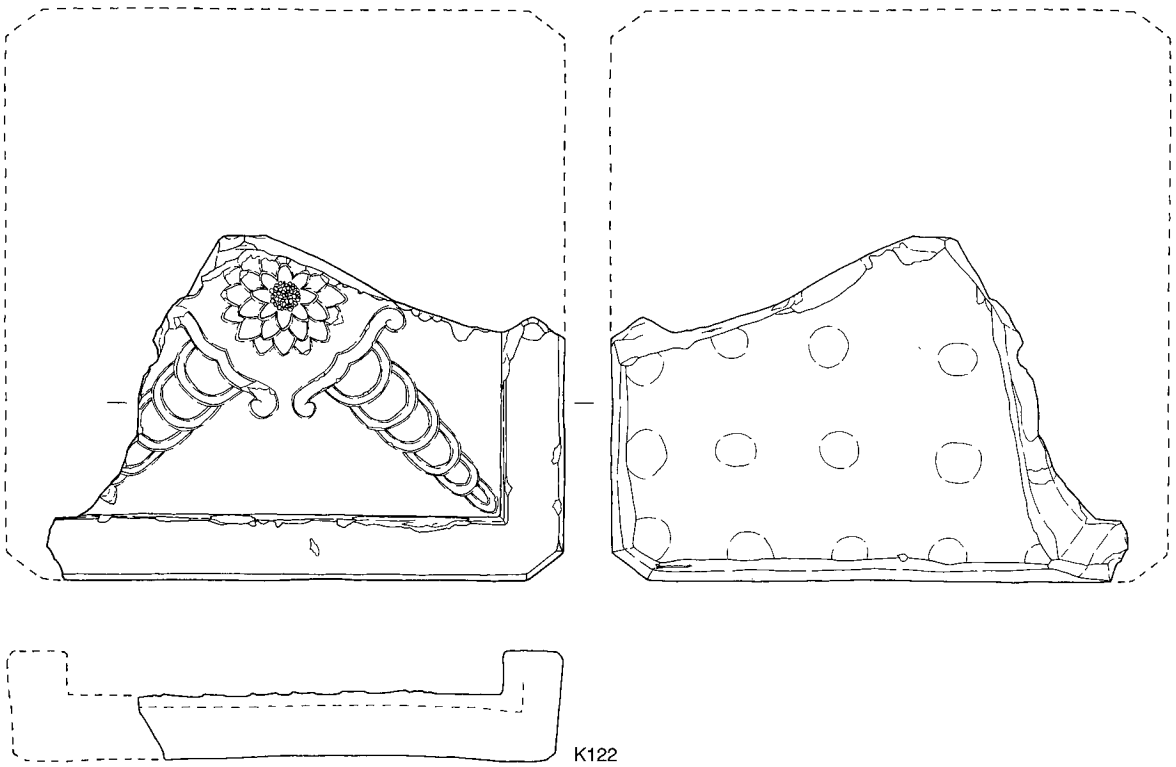




0 20cm

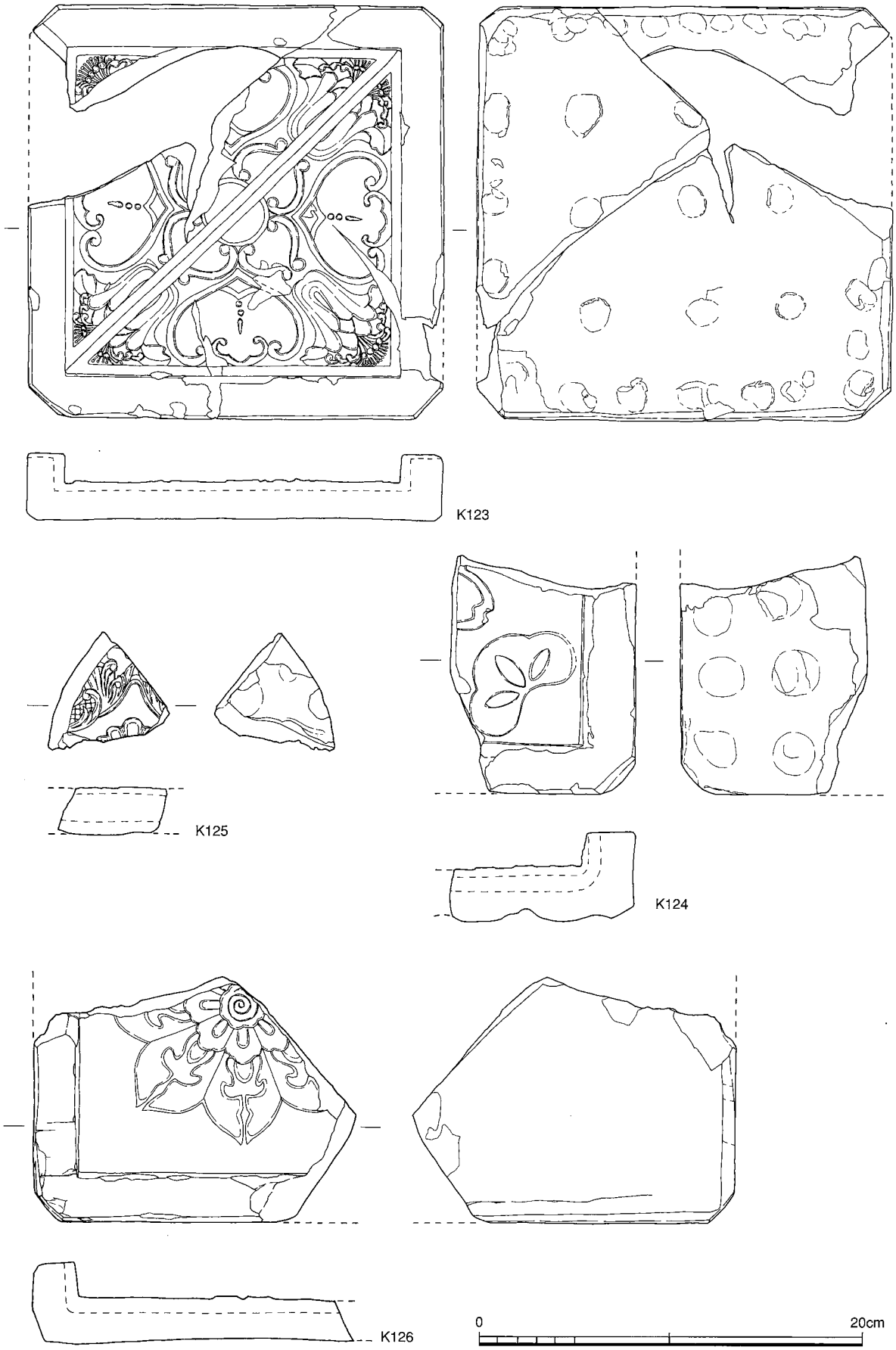
第35図　出土遺物　土型(20)



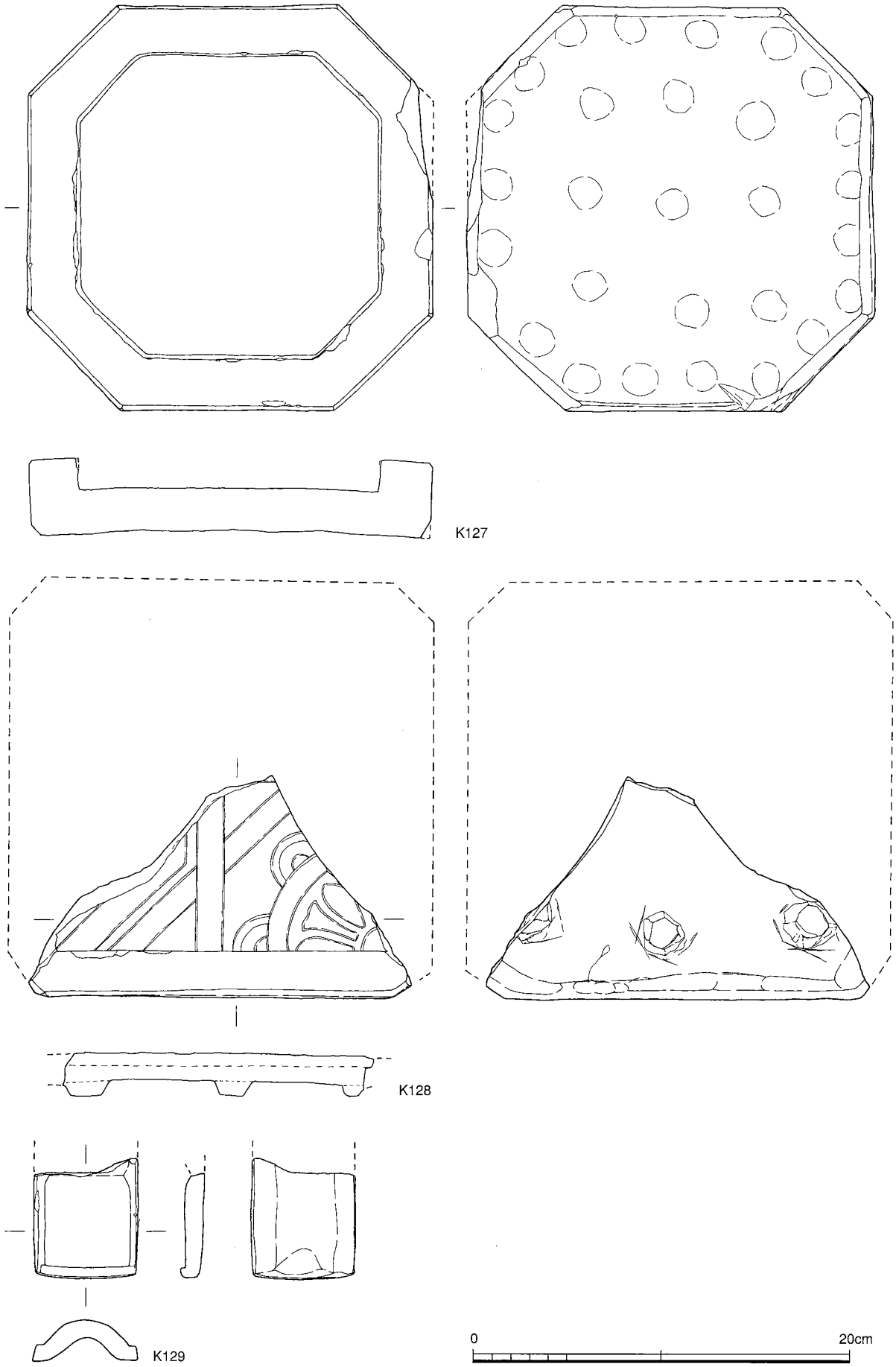


0 20cm

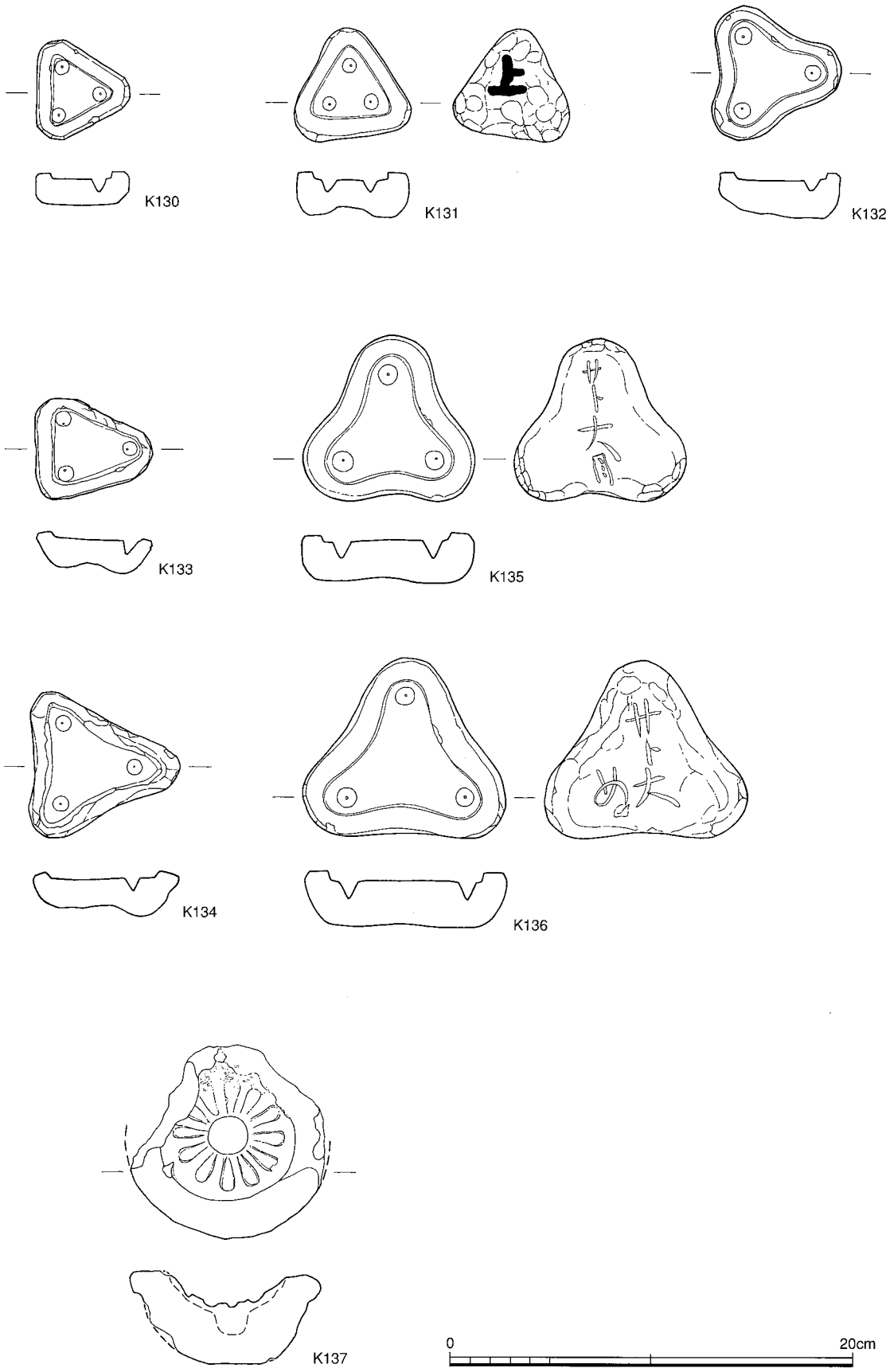
第36図　出土遺物　土型(21)



第37図　出土遺物　土型(22)



第38図　出土遺物　土型(23)



第39図　出土遺物　土型(24)

3．陶磁器類

(1) 磁器

染付磁器　珉平焼窯跡からは、一般に見られる交趾写しの小判形皿などに代表される施釉陶器・タイルのほか、少量ではあるが、染付磁器・色絵磁器などの磁器類の出土が見られる。

特に、染付磁器はその特徴から、明末～清初に焼成された、景徳鎮窯産青花の写し、わが国では呉洲手と称される漳州窯産青花の写し、肥前系磁器の写し、瀬戸・美濃系磁器の写し、清朝青花磁器の写し、千鳥マークを描くなど珉平焼の特徴をもつ染付などさまざまな特徴もった製品に分類できる。これらの染付磁器のすべてが珉平焼の製品とは断定できないが、窯跡から出土していること、未製品を含むこと、千鳥マークを描くなど、後述する他の陶器製品と同一の特徴をもつものを含むことなどから、ここでは珉平焼の製品として報告する。

1．景徳鎮窯産青花写し

景徳鎮窯産青花写しと考えられる染付磁器には碗・皿がある。碗（1～3）はいずれも細片で外面には宝相華文・草花文を描く。皿（4～7）のうち、4・5はいずれも薄手に成型され、内面に草花文を施文するが、6は器壁が比較的厚く、口縁部は輪花状に成形し、内面には窓絵風に草花文を施文する芙蓉手の皿である。いずれも明末～清初の青花磁器写しと考えられる。

2．漳州窯系青花写し

高台畳付あるいは底部内面に砂が多く附着する特徴をもつ漳州窯系青花写しには鉢（7）・皿（8）・盤（9・10）・壺（11）がある。鉢は内面に草花文を描き、高台畳付に砂が附着する。皿は内面に草花文を描き、底部内面には大粒の砂が附着している。盤は内面に山水楼閣図を描き、器壁は比較的厚い。壺は高台の側面に素朴な丸文を描き、畳付には砂が附着している。いずれも明末～清初の漳州窯製品の写しと考えられる。また、そのほかに、明末～清初の中国産磁器の写し考えられる色絵磁器鉢（12）がある。口縁部は水平に折り曲げ、内面に黄・緑・青・紫・白の五彩で細かい草花文を描く。

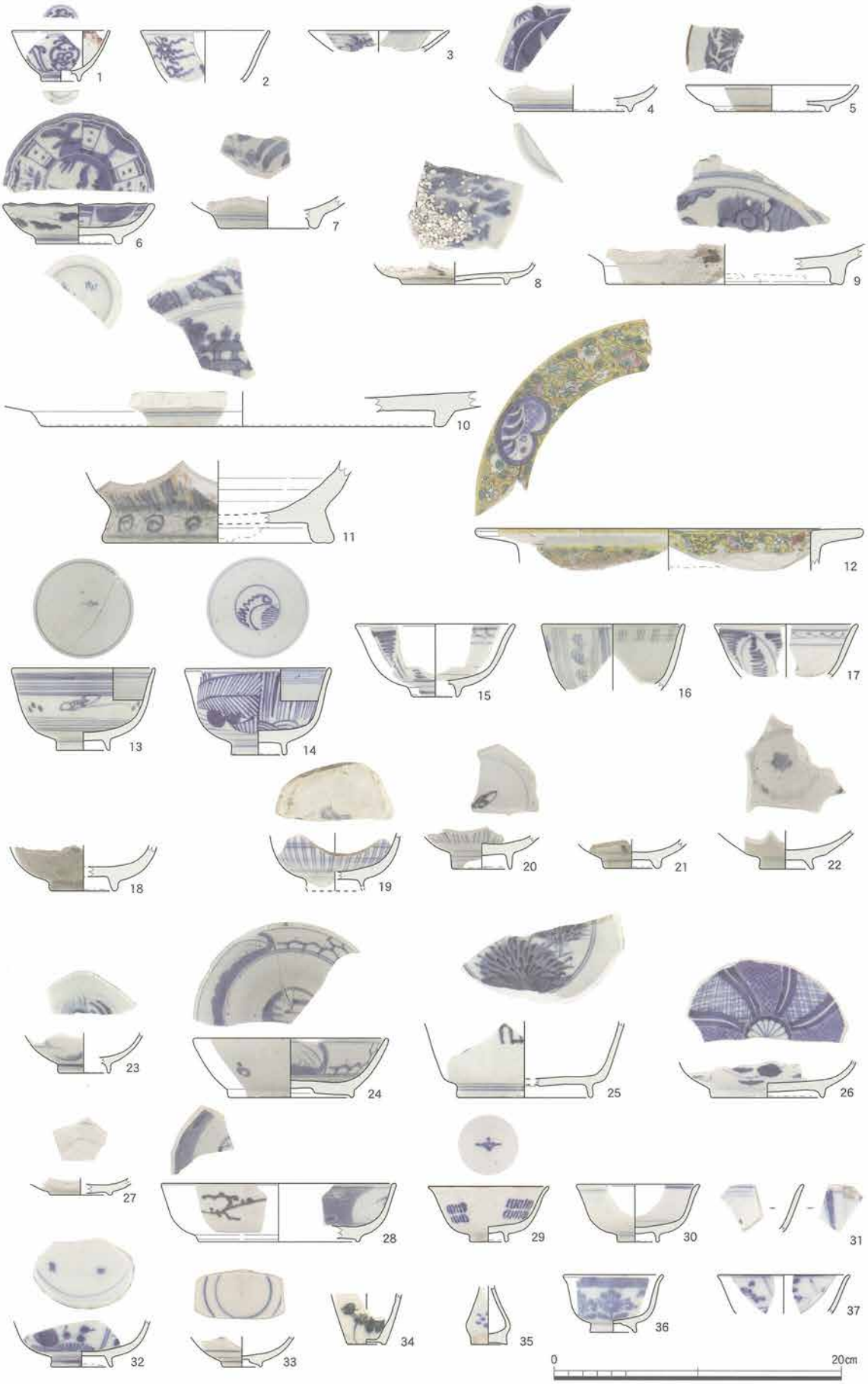
そのほか、漳州窯写しではないが、中国製の粗製の染付磁器を模倣したと考えられる製品には火舎（53・54）、手付き手焙（60）などがある。火舎は体部が僅かに内傾し、外面に幾何学文・人物文を描くもの（53）、体部が直立するもの（54）がある。手焙（60）は型作り成形で、4つの脚をもち、口縁部の2箇所に把手を貼り付ける。把手の外面は貼花で施文し、外面は呉須を流しがけしている。

3．肥前系染付磁器写し

肥前系染付磁器写しと考えられる製品には碗（13～23）・皿(24・26～28)・鉢（25）がある。碗はその形態から、高台が細く高い広東碗（20）、口縁部を僅かに外反させる端反碗（14）、体部が半球形を呈する京焼風碗などに分類できる。また、13・14は砥部焼の製品に類品が見られる。外面の文様には草花文を描くもの（13・26）、線描き文を描くもの（14）、よろけ文を描くもの（15・17）、斜格子状文を描くもの（16）、格子状文を描くもの（19）、花鳥文を描くもの（23）、コンニャク印判で五弁花文を施文するもの（22）などがある。皿には低い輪高台のもの（26・27）と蛇ノ目凹形高台のもの（24・28）とがある。26は内面に菊花文を描く。27は内面を蛇ノ目状に釉ハギする。

蛇ノ目凹形高台をもつ24は内面に亀甲文・網目文を描く。また、28は内面に墨弾きで草花文を描く。

鉢（25）は蛇ノ目凹形高台をもち、外面に源氏香を描く。これら肥前写しの製品は大橋編年Ⅴ期相当のもので、18世紀後半～19世紀前半代の肥前系磁器の写しと考えられる。



第40図　出土遺物　染付(1)

4. 瀬戸・美濃系染付磁器写し

瀬戸・美濃系染付の写しと考えられるものには、碗（29～33・39）、小壺（34）、花瓶（35）などがある。碗は形態からは、口縁部が僅かに外反するもの（29・30）、口縁部をそのまま上方にひきあげるもの（22）、高台が「ハ」の字状に外方にひらくもの（32）、蛇ノ目状凹形高台をもつもの（33）などに区分できる。文様には染色体状文を描くもの（29）界線を描くもの（30・33）、蓮弁状文を描くもの（31）、草花文を描くもの（32）などがある。小壺（34）は外面に呉須と鉄釉で流水文・水草文を描き、底部外面には砂が附着する。花瓶（35）は平底で底部には糸切痕が残る。体部外面には五曜星と草花文を描く。いずれも、19世紀前半以降に生産された瀬戸・美濃産染付の写しと考えられる。

5. 清朝青花写し

清朝青花磁器の写しと考えられる製品には杯（36）、碗（37～39）がある。36は蛇ノ目凹形高台をもち、外面に銅版転写で雷文帯・草花文などを描く。明治以降の製品と考えられる。碗はいずれも草花文を描き、38・39は底部内面に渦巻き文を描く。

6. 銅版転写

藍色の濃い酸化コバルトで細かい文様をプリントする銅版転写の製品は染付磁器の中でもっとも多く出土している。器種には、碗（44～46）、鉢（41・49）、蓋付き鉢（47）、杯（50）、香炉（51）、香炉もしくは植木鉢（52）などがある。

碗はいずれも口縁部が僅かに外反する端反碗で外面には草花文（44）、梅花文（45）、鳳凰・吉祥文（46）などを転写する。鉢はいずれも蛇ノ目凹形高台をもち、口縁部は大きく外方に開く形態である。文様は草花文・龍文を転写するもの（43）、細かい草花文・龍文・松竹梅文を転写するもの（49）などがある。蓋付き鉢（47）は口縁部の釉を掻き取り、外面に細かい草花文を転写している。杯（50）は器壁は全体に厚く、外面に菊花文・源氏香を転写している。香炉（51）は型作り成形で八角形を呈し、外面には山水図を転写している。52は香炉もしくは植木鉢と考えられ、外面には蓮弁文・牡丹唐草文を転写している。いずれも、近代以降の製品と考えられる。

7. 陶胎染付

陶胎染付には蓋（42）、湯呑み碗（58）、碗（61）、蓋付き碗（62）、火鉢あるいは火桶（63）、鍋（91）などがある。蓋（42）は上面に蝉状のつまみを貼り付ける。外面には濃い酸化コバルトで松葉文を描く。湯呑み碗（58）は外面に格子状文とよろけ文を描き、底部外面に千鳥マークをスタンプしている。碗（61）は碁笥底で外面によろけ文と蓮弁文を描く。蓋付き鉢（62）は口縁部がほぼ直立し、内面に蓋の受部をもつ。底部に「JAPAN」の刻印がある。火鉢もしくは火桶（63）は高台の端部は丸みをもち、外面に松葉状文を描く。鍋は口縁部がL字状に屈曲し、口縁部外面には環状の把手を貼り付ける。文様は外面にラフに施文している。いずれも近代後半～現代の製品と考えられる。

8. 近代後半～現代の京焼風染付磁器

外面に酸化コバルトで文様を手描きあるいはプリントするもので、いずれも近代後半から現代の製品と考えられる。器種には碗（68～72）、鉢（73）、角形重ね鉢（74）、蓋（75～77）、杯（78）などがある。碗には外面に呉須と緑釉・金彩で鶴文を描くもの（68）、帯状文と馬ノ目状文を手描きするもの（69）、ナマコ釉を施し、底部外面に「同臨出製」銘を朱印するもの（70）、薄手に成形され、外面に桜花文を転写するもの（71）、型紙摺りで菊花文を描くもの（72）などがある。角形重ね鉢（74）は型作り成形で外面には酸化コバルトで千鳥・波頭文を描く。蓋は比較的高いつまみをもち、体部が内彎するもの（76）

第41図　出土遺物　染付(2)

と体部が直線的に斜め上方に延び、口縁部が外反するもの（77）とがある。外面の文様には草花文を描き、「素陶園製」の銘をもつもの（75）、竹文を描き「□種園製」の銘をもつもの（76）、無文で「陶々園製」の銘をもつもの（77）などがある。杯（78）は体部が直立し、口縁部がわずかに外反する。外面には銅版転写で草花文を施文する。

9．不明染付磁器

そのほか、細片のため詳細は不明であるが、染付磁器の皿（88～90）、碗もしくは皿（88）がある。

10．染付磁器の未製品

本焼前の未製品と考えられるものには杯（55）・桶形注口（59）がある。杯（55）は外面に広形の蓮弁文を施文し、高台裏には千鳥マークをスタンプしている。桶形注口（59）は平底で体部は直立し、直線的な注口を貼り付ける。外面には呉須で格子とよろけ文を施す。

色絵磁器　色絵磁器には碗（64～66）、重ね鉢（67）がある。碗には赤絵で鯛文・緑釉で水草を施文するもの（64）、呉須・緑釉・鉄釉で水玉を施文するもの（65）、色絵で玩具を施文するもの（66）などがある。鉢（67）は呉須で窓絵を描き、赤絵で草花文を施文する。いずれも近代後半～現代の製品であろう。

白磁　白磁には酒杯（79）、植木鉢（80）、鉢（81）、把手（82）などがある。酒杯（79）は高台は細く高く、体部はわずかに内彎気味に斜め上方に延びる。植木鉢（80）は底部は小さく、体部は直線的に斜め上方に延び、口縁部は大きく外方にひらく。底部には穿孔が認められる。鉢（81）は器壁が厚く、平底で体部は直立する。82は木枝状に節をもつ。瓶などの把手と考えられる。

青磁　青磁には香炉（84）、盤（85）、碗（86）などがある。香炉（84）は高台裏を深く抉る。また、底部外面には三角形状の脚を貼り付ける。外面には青磁釉を施釉し暗黄緑色に発色する。三田青磁に酷似する。盤（85）は型作り成形で、断面台形状の高台を貼り付ける。内面には劃花で草花文を施文する。碗（86）は外面に青磁釉を施釉の後、緑釉と鉄釉で草花文を描く。内面および高台裏は白磁である。近代以降のクローム青磁と考えられる。

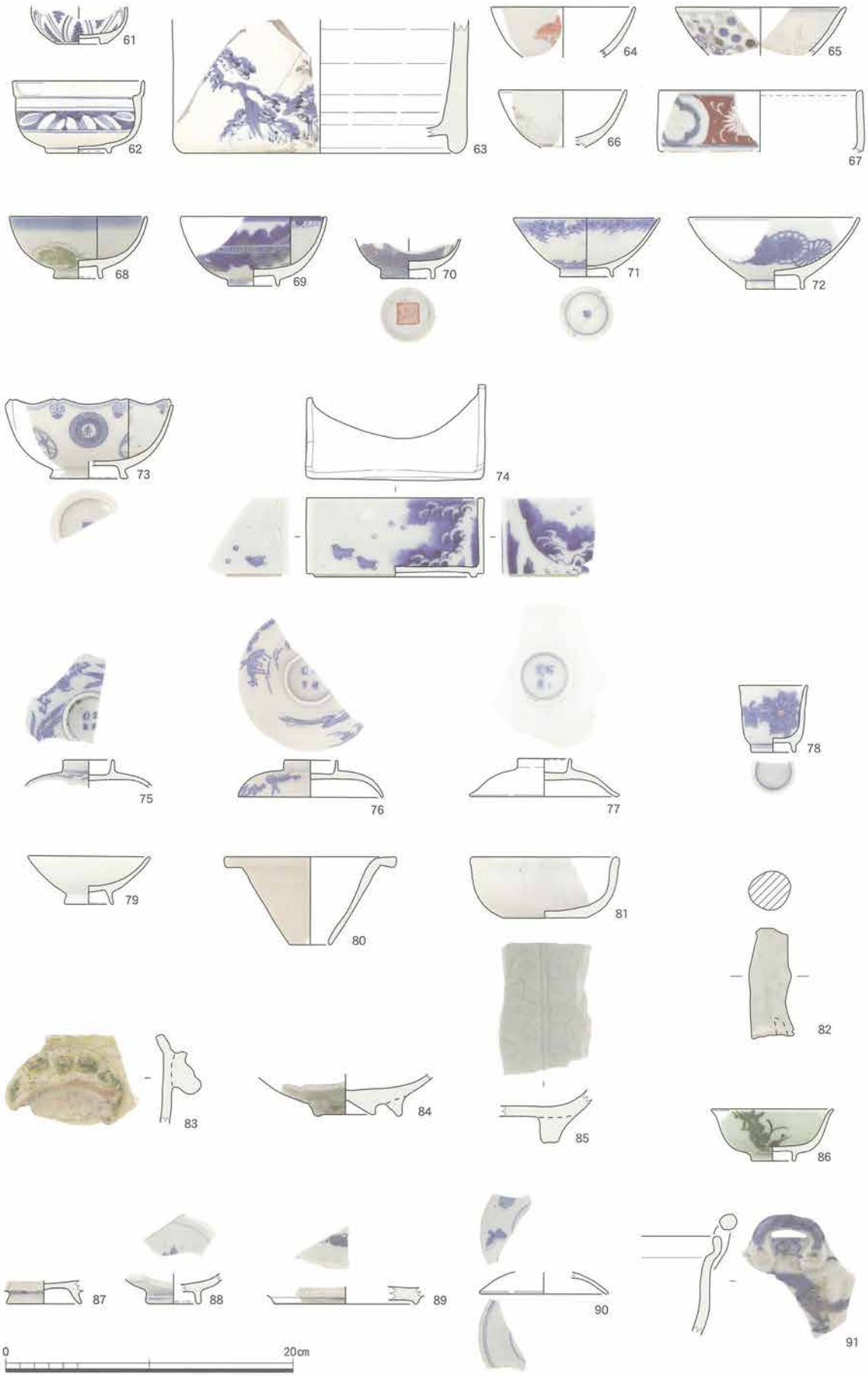
不明陶器　83は灰釉を施す灰釉陶器である。細片のため、器種などは不明である。

(2)　施釉陶器

珉平焼窯跡からは、染付磁器、施釉陶器、施釉陶器の未製品などの製品、大谷焼、備前焼など明らかに他産地から搬入されたと考えられる陶磁器類、製品の型、窯道具類、窯体の一部など様々な遺物が出土している。ここでは、珉平焼の製品の中で、その大部分を占める陶器類について概観する。

珉平焼で生産された陶器類は、各地の消費地遺跡で散見されるいわゆる小判形の龍文皿の他、碗・鉢・皿・壷・蓋など様々の器種が含まれている。ここでは、これらの製品を大きく碗類・鉢類・皿類・壺類・蓋類・その他の6器種に分類し、それぞれについて、以下のように細分した。

なお、分類した個々の製品の分類名については、煩雑を避けるため、本文中には記さず、観察表に記載している。参照されたい。



第42図　出土遺物　染付(3)

1.碗類

碗類は、茶碗、飯碗、汁碗と考えられるものの他に、体部に把手の付くティーカップ、酒器として用いられたと考えられる杯なども碗に含めて分類した。

分類基準には、大分類として、体部の形状を基準とし、中分類に高台の形状を、また、小分類には、口縁部の形状を基準として、以下のように分類した。

大分類　Ⅰ－体部が内湾するもの
　　Ⅱ－体部がわずかに内湾するもの
　　Ⅲ－体部が直立するもの
　　Ⅳ－体部が外反するもの
中分類　A－高台の形が輪高台のもの
　　B－高台の形が碁笥底状のもの
小分類　1－口縁部が直立するもの
　　2－口縁部が外反するもの
　　3－口縁部をそのまま上方へ引き上げるもの

2. 鉢類（丸鉢・角鉢・変形鉢）

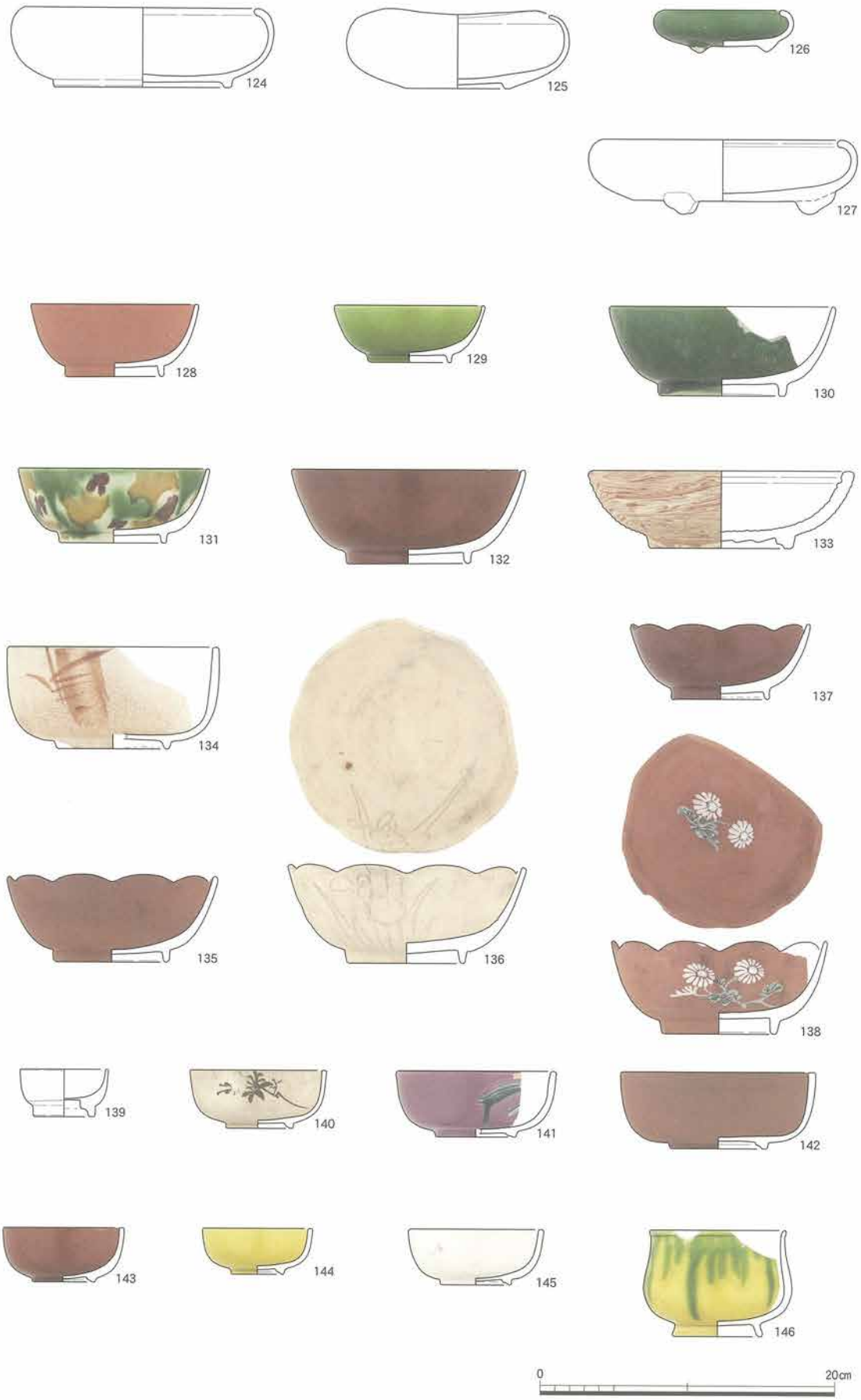
鉢類と分類したものには、丸鉢・角鉢などの一般的な鉢類（鉢A類）のほかに、重ね鉢（鉢B類）、香炉（鉢C類）が含まれる。

①鉢A類（丸鉢・角鉢・変形鉢）

鉢A類の分類基準には大分類として、体部の形状、中分類として高台の形状、小分類として口縁部の形状を用いた。更に、ものによっては、細分類としてタガの有無・底部の穿孔の有無などを基準として以下のように分類した。

大分類　Ⅰ—体部が大きく内湾するもの
　　Ⅱ－体部がわずかに内湾するもの
　　Ⅲ－体部が直立するもの
中分類　A－高台の形が輪高台のもの
　　B－高台の形が碁笥底状のもの
　　C－高台の代りに脚が付くのもの
　　D－高台の形が内面に段をもち凹形を呈するもの
小分類　1－口縁部が直立するもの　a－タガをもたないもの
　　b－タガをもつもの
　　2－口縁部が外反するもの　a－底部を穿孔しないもの
　　b－底部を穿孔するも
　　3－口縁部をそのまま上方へ引き上げるもの
　　a－口縁部が平縁のもの
　　b－口縁部を波形に成形するもの
　　4－口縁部が外方に開くもの
　　5－口縁部が屈曲するもの

第43図　出土遺物　陶器類(1)



第44図　出土遺物　陶器類(2)

第45図　出土遺物　陶器類(3)

②鉢Ｂ類（重ね鉢）

鉢Ｂ類は大分類に体部の形状、中分類に高台の形状、小分類に高台径の大きさを基準として以下のように分類した。

大分類　Ⅰ－体部が内湾するもの

Ⅱ－体部がわずかに内湾するもの

Ⅲ－体部が直立するもの

Ⅳ－体部が直立して凹線が巡るもの

中分類　Ａ－高台の形が輪高台のもの

Ｂ－高台の形が碁笥底状のもの

Ｃ－高台のない平底のもの

小分類　１－底径と高台径がほぼ一致するもの

２－高台径が小さいもの

③鉢Ｃ類（香炉）

鉢Ｃ類は大分類に高台の形、中分類に体部の形状、小分類に口縁部の形状をそれぞれ基準とし、以下のように分類した。

大分類　Ⅰ－高台の形が輪高台のもの

Ⅱ－高台の代りに団子状の脚が付くのもの

Ⅲ－高台の代りに脚を内部から押し出すもの

中分類　Ａ－体部が大きく内湾するもの

Ｂ－体部が内湾するもの

Ｃ－体部が直立するもの

小分類　１－口縁部が直立するもの

２－口縁部が外反するもの

３－口縁部が内傾するもの

3．皿類（丸皿・洋皿・角皿）

皿類は珉平焼の製品の中でも最も多く出土し、形態・用途も多種多様のものを含んでいる。ここでは、その形状、用途などを勘案し、皿類をＡ～Ｈに分類し、それぞれについて、以下のように分類した。

①皿Ａ類（丸皿・洋皿）

分類基準　大分類―体部の形状　中分類－高台の形状　小分類－口縁部の形状。

大分類　Ⅰ－体部が内湾するもの

Ⅱ－内面の体部と底部の境目が不明瞭なもの

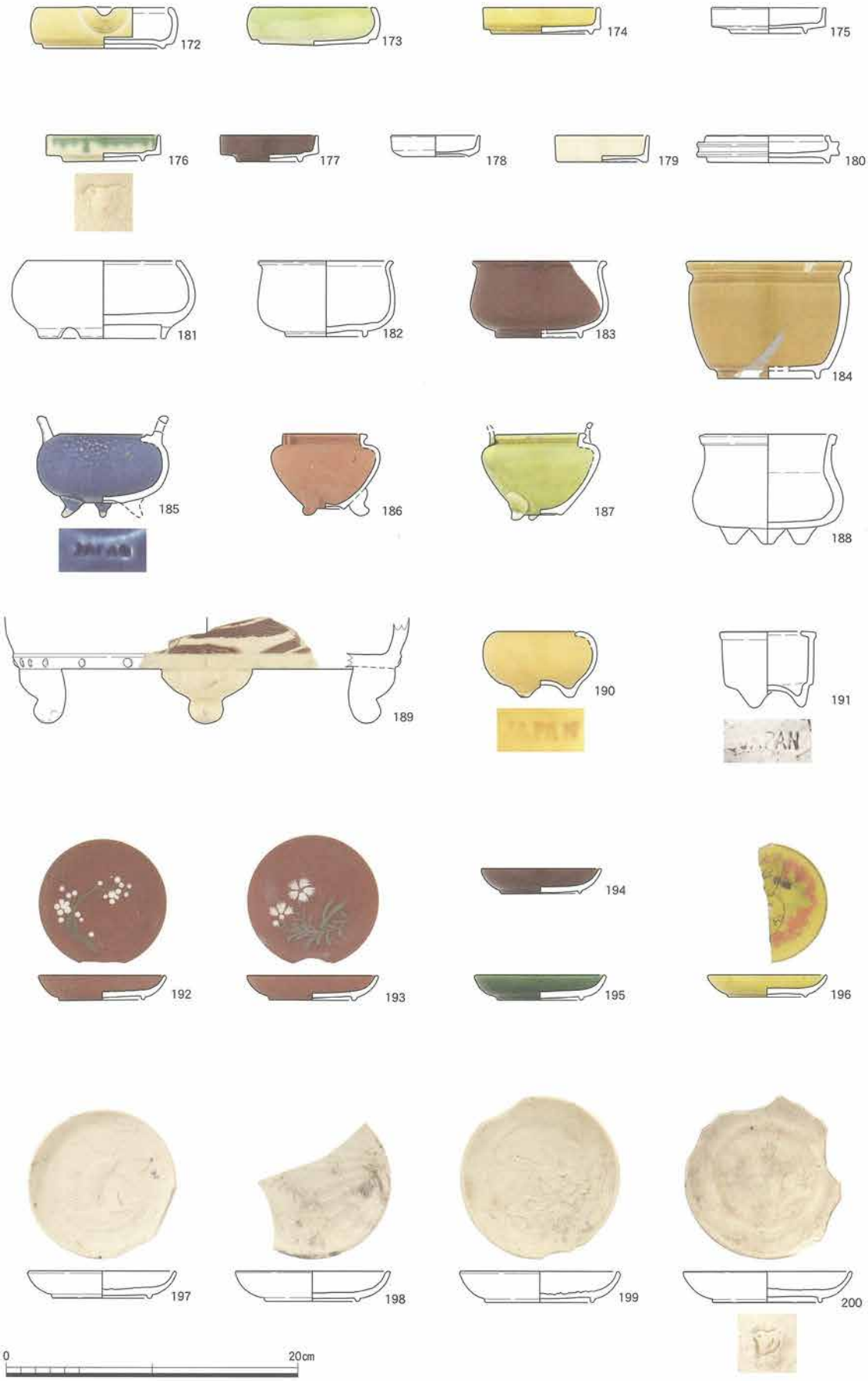
Ⅲ－体部が直線的に斜め上方に立ち上がるもの

Ⅳ－体部が外反するもの

中分類　Ａ－高台の形が輪高台のもの

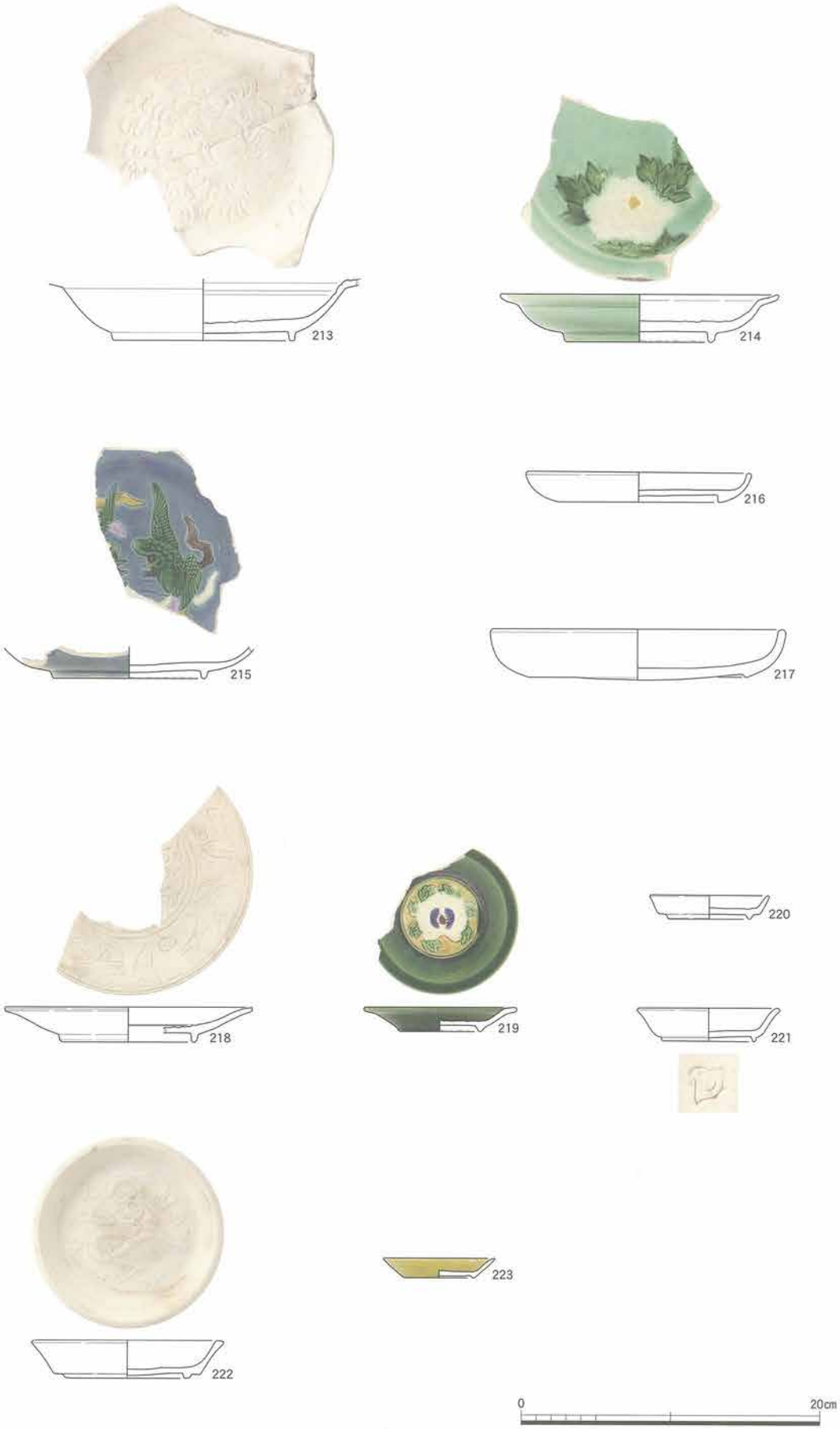
Ｂ－高台の形が碁笥底状のもの

Ｃ－外縁部を削り残して高台状に成形するもの。

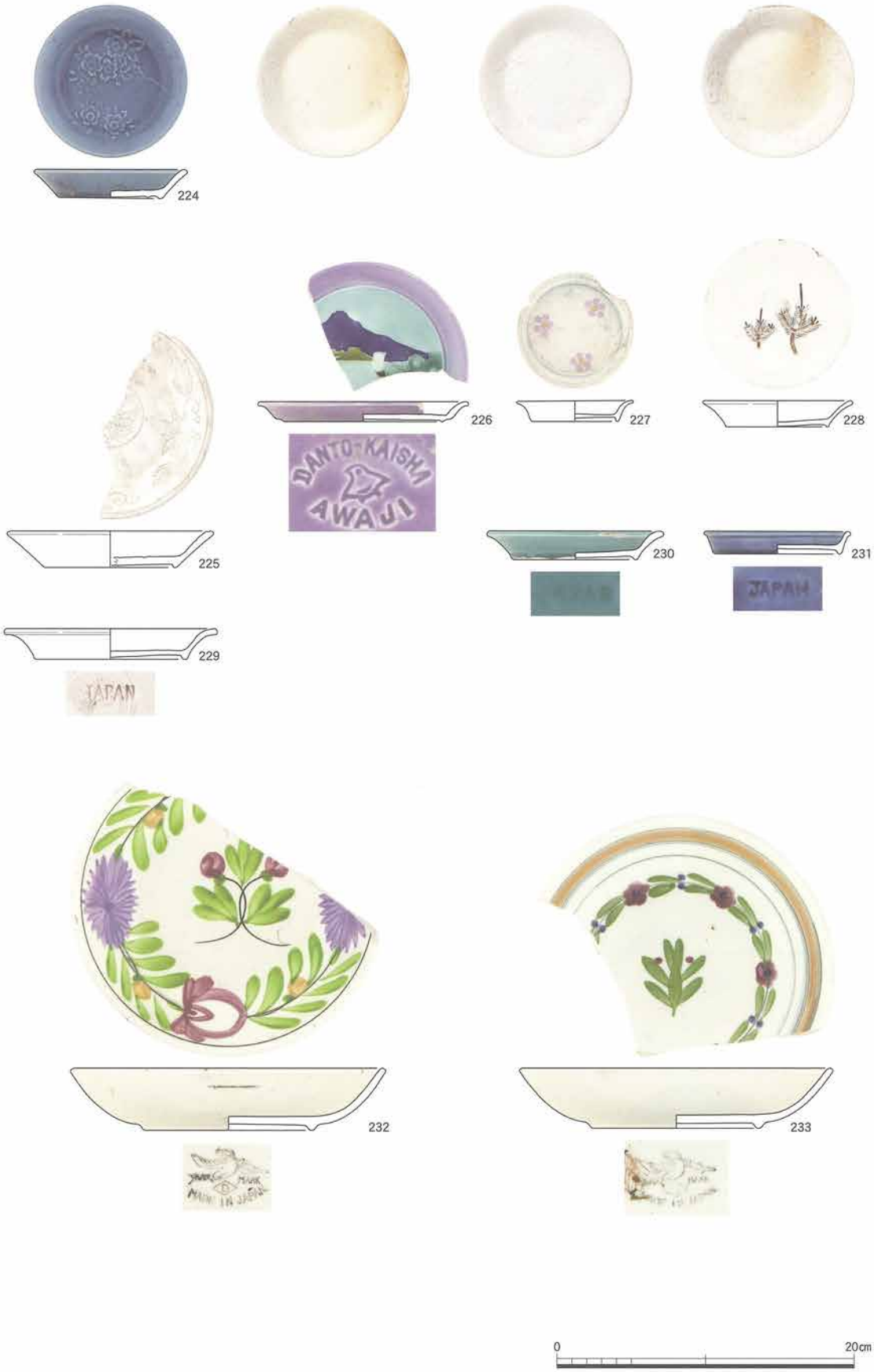


第46図　出土遺物　陶器類(4)

第47図　出土遺物　陶器類(5)



第48図　出土遺物　陶器類(6)



第49図　出土遺物　陶器類(7)

第50図　出土遺物　陶器類(8)

小分類　1－口縁部をそのまま上方に引き上げるもの。

2－口縁部が外反するもの

②皿B類（丸皿変形）

分類基準　大分類－平面の形状　中分類－Ⅳ類のみ草花の種類。

大分類　Ⅰ－小判形

Ⅱ－小判形変形

Ⅲ－扇形

Ⅳ－草花形　A－桃実形

B－梅花形

③皿C類（角皿）

分類基準　大分類－平面の形状　中分類－四隅の形状。

大分類　Ⅰ－正方形

Ⅱ－長方形

Ⅲ－菱形

中分類　A－四隅が角ばっているもの

B－四隅が切られているもの（＝隅切）

C－四隅が入り込んでいるもの（＝四隅入）

D－二隅が入り込んでいるもの（＝二隅入）

E－四隅が丸くなっているもの（＝隅丸）

④皿D類（角皿変形）

分類基準　大分類－平面の形状。

大分類　Ⅰ－菱形状の花弁形

Ⅱ－多角形状の花弁形

⑤皿E類（変形皿）

分類基準　大分類－平面の形状。

大分類　Ⅰ－貝殻形

Ⅱ－木葉形

Ⅲ－平面形状が不明のもの

⑥皿F類（托）

分類基準　大分類－底部内面の形状　中分類－体部の形状。

大分類　Ⅰ－底部内面に浅く段を付けるもの

Ⅱ－底部内面に突帯を付けるもの

中分類　A－体部が内湾するもの

B－体部が直線的に斜め上方に延びるもの

⑦皿G類（おろし皿）

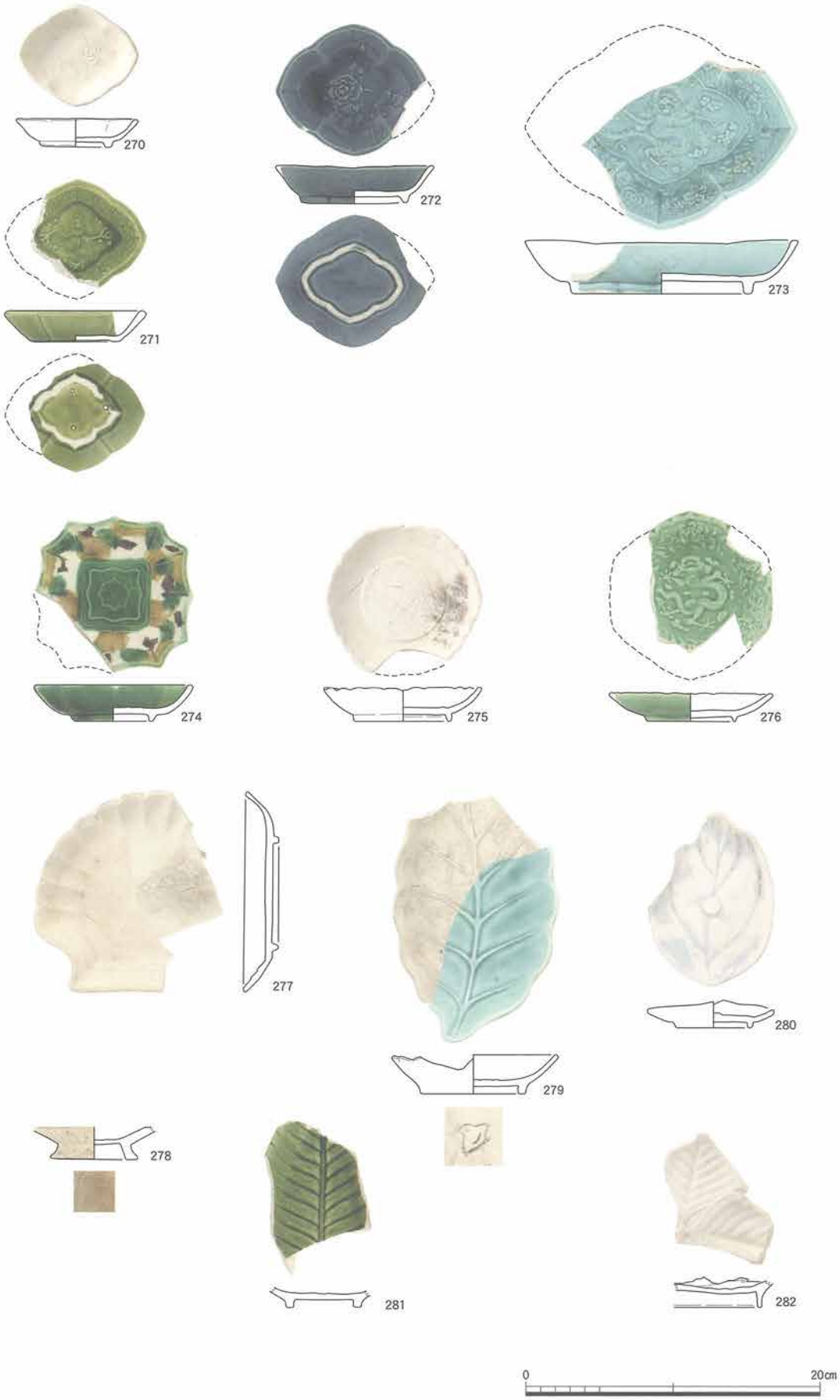
⑧皿H類（灰皿）

分類基準　大分類－体部の断面形状　中分類－体部の平面形状。

大分類　Ⅰ－皿状のもの

第51図　出土遺物　陶器類(9)

第52図　出土遺物　陶器類(10)



第53図　出土遺物　陶器類(11)

第54図　出土遺物　陶器類(12)

Ⅱ－鉢状のもの

中分類　A－丸形

B－角形

C－球形

4．壷類

壺類には狭義の壺類（壺A類）の他、壺に注口が付いた注口陶器（壺B類）、唾壺（壺C類）、花瓶（壺D類）、花生（壺E類）、掛花生（壺F類）などが含まれる。

①壺A類（無頸壺・短頸壺・長頸壺）

分類基準　大分類－体部の形状　中分類－体部の最大径の位置　小分類－把手の付け方。

大分類　Ⅰ－体部が内湾するもの

Ⅱ－体部がわずかに内湾するもの

Ⅲ－体部が「く」の字状に屈曲するもの

Ⅳ－体部が内傾するもの

Ⅴ－体部が直立するもの

中分類　A－最大径が上方（肩部）にあるもの

B－最大径が中央部にあるもの

小分類　1－把手のつかないもの

2－把手のつくもの

3－提げ手のつくもの

②壺B類（注口）

分類基準　大分類－注口のつけ方　中分類－体部の形状　小分類－高台の形状　細分類－注口の形状（把手・提手）。

大分類　Ⅰ－注口を貼付けるもの

Ⅱ－口縁部を引き出して注口をつけるもの

中分類　A－体部が内湾するもの

B－体部がわずかに内湾するもの

C－体部が「く」の字状に屈曲するもの

D－体部が直立するもの

E－体部が内傾するもの

F－体部が直線的に斜め上方に延びるもの

小分類　1－高台の形が輪高台のもの

2－高台の形が碁笥底状のもの

3－高台の代りに脚が付くのもの

4－高台のない平底のもの

細分類　a－上方に三角形状の注口をもつもの

b－上方に管状の注口をもつもの

c－中央に管状の注口をもつもの

第55図　出土遺物　陶器類(13)

第56図　出土遺物　陶器類(14)

d－下方に管状の注口をもつもの

②壷Ｃ類（唾壷）

分類基準　大分類－把手の有無。

大分類　Ⅰ－把手のつかないもの

Ⅱ－把手のつくもの

③壺Ｄ類（花瓶）

④壺Ｅ類（花生）

分類基準　大分類－体部の形状　中分類－底部の形状。

大分類　Ⅰ－体部が直立するもの

Ⅱ－体部が外反するもの

中分類　Ａ－高台が付くもの

Ｂ－脚が付くもの

Ｃ－竹を模したもの

⑤壺Ｆ類（懸花生）

分類基準　大分類－掛け方。

大分類　Ⅰ－柱にかけるもの

Ⅱ－つり下げるもの（フラワーポット）

5. 蓋類

蓋類は皿類と並んで、量、形態、用途など多種多様ものが含まれている。ここではつまみの有無、形態などからＡ～Ｅ類に分類して概要を述べる。

①蓋Ａ類（つまみ無し）

分類基準　大分類－断面の形状　中分類－かえりの有無　小分類－かえりの形状。

大分類　Ⅰ－断面形が平形のもの

Ⅱ－断面形が山笠形のもの

中分類　Ａ－かえりの付かないもの

Ｂ－かえりの付くもの

小分類　１－かえりの断面形が方形のもの

２－かえりの断面形が山形のもの

②蓋Ｂ類（つまみ有り）

分類基準　大分類－断面の形状　中分類－かえりの有無　小分類－口縁端部の形状　細分類－つまみの形状。

大分類　Ⅰ－断面形が平形のもの

Ⅱ－断面形が山笠形のもの

Ⅲ－断面形が編笠形（台形）のもの

中分類　Ａ－かえりの付かないもの

Ｂ－かえりの付くもの

小分類　１－口縁端部を折り曲げて直立させるもの

第57図　出土遺物　陶器類(15)

第58図　出土遺物　陶器類(16)

2－口縁端部を垂直に折り曲げないもの

細分類　a－つまみの形状が球形のもの

b－つまみの形状が扁平のもの

c－つまみの形状が環状のもの

d－つまみの形状が輪状のもの

e－つまみの形状が宝珠形のもの

f－つまみの形状が変形のもの

③蓋C類（変形）

分類基準　大分類－断面の形状　中分類－かえりの有無　小分類－口縁端部の形状　細分類－つまみの形状。

大分類　Ⅰ－断面形が螺旋状のもの

Ⅱ－断面形が菊花のすかしをもつもの

Ⅲ－断面形が花弁状のもの

中分類　A－かえりのつかないもの

B－かえりの付くもの

小分類　1－口縁端部を折り曲げて直立させるもの

2－口縁端部を垂直に折り曲げないもの

④蓋D類（落し蓋／口縁部より低い位置につまみが付くもの）

分類基準　大分類－断面の形状　中分類－かえりの有無　小分類－口縁端部の形状　細分類－つまみの形状。

大分類　Ⅰ－断面形が浅い皿状のもの

Ⅱ－断面形が「L」字状のもの

中分類　A－かえりのつかないもの

B－かえりの付くもの

小分類　1－口縁端部を折り曲げて直立させるもの

2－口縁端部を垂直に折り曲げないもの

細分類　a－つまみの形状が球形のもの

b－つまみの形状が扁平のもの

c－つまみの形状が環状のもの

d－つまみの形状が輪状のもの

e－つまみの形状が宝珠形のもの

f－つまみの形状が変形のもの

⑤蓋E類（栓／かえりの部分が口縁部より幅が狭く、つまみのないもの）

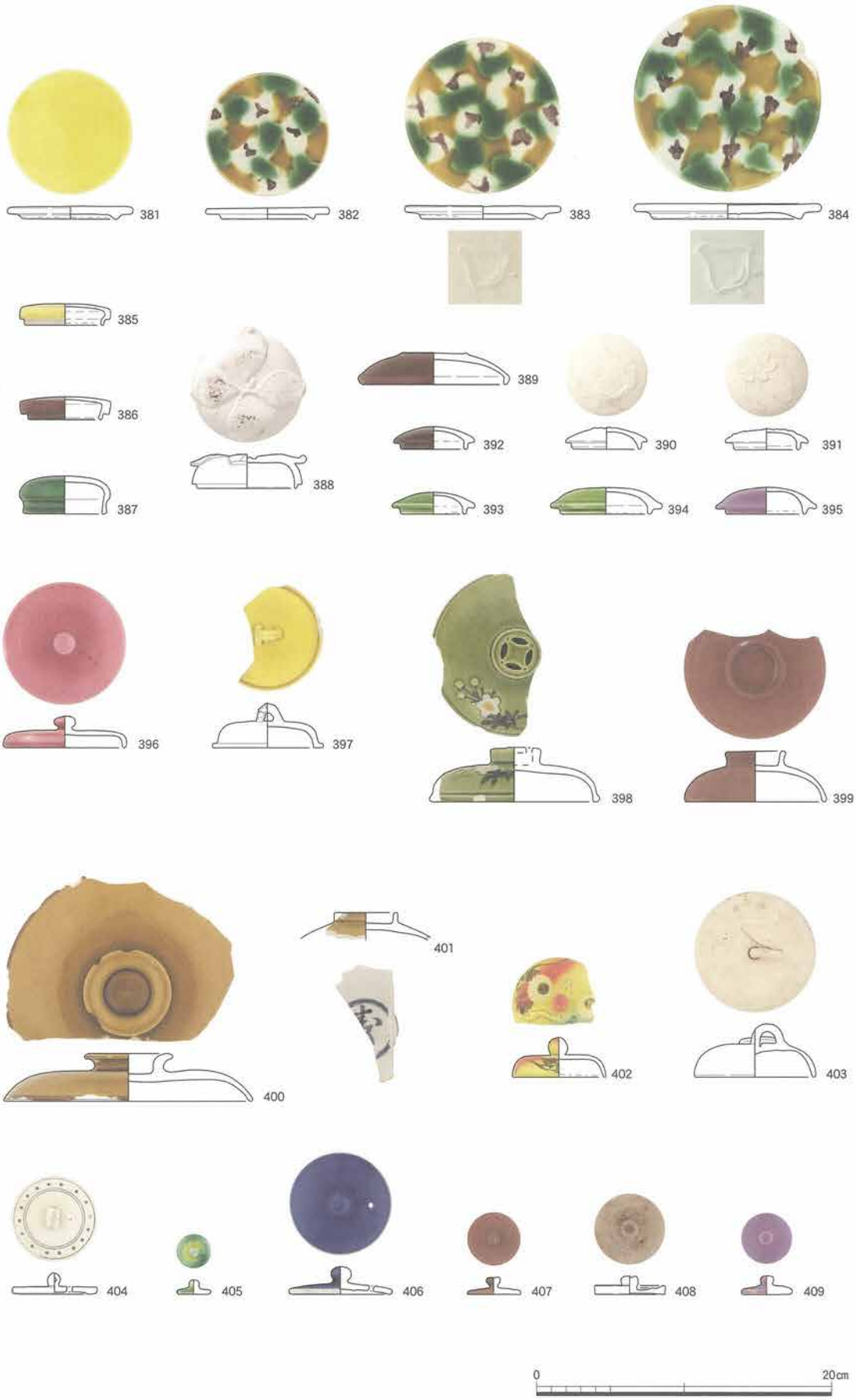
分類基準　大分類－頂部の形状　中分類－注口の有無。

大分類　Ⅰ－頂部が扁平なもの

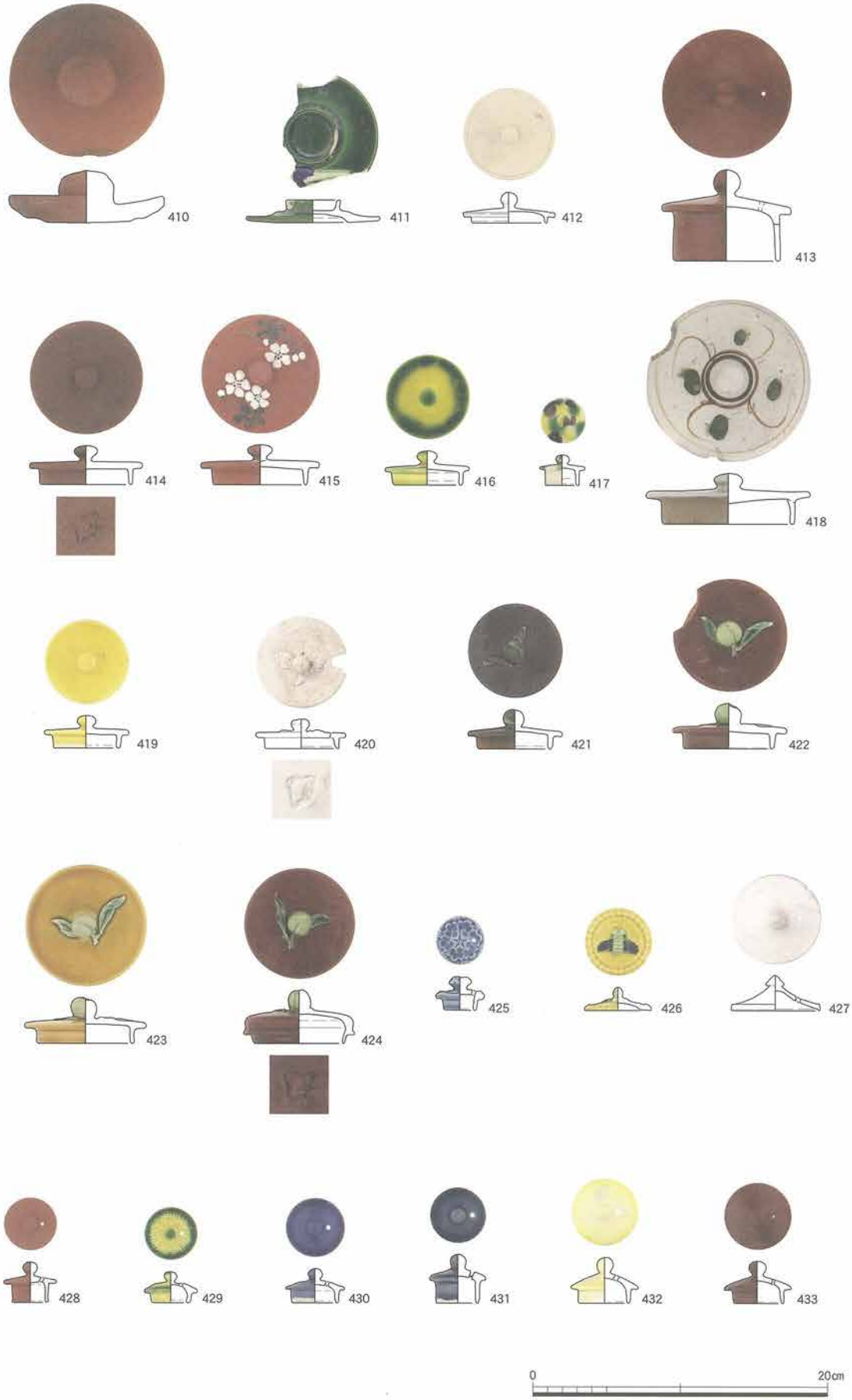
Ⅱ－頂部が山笠形のもの

中分類　A－注口がつかないもの

B－注口がつくもの

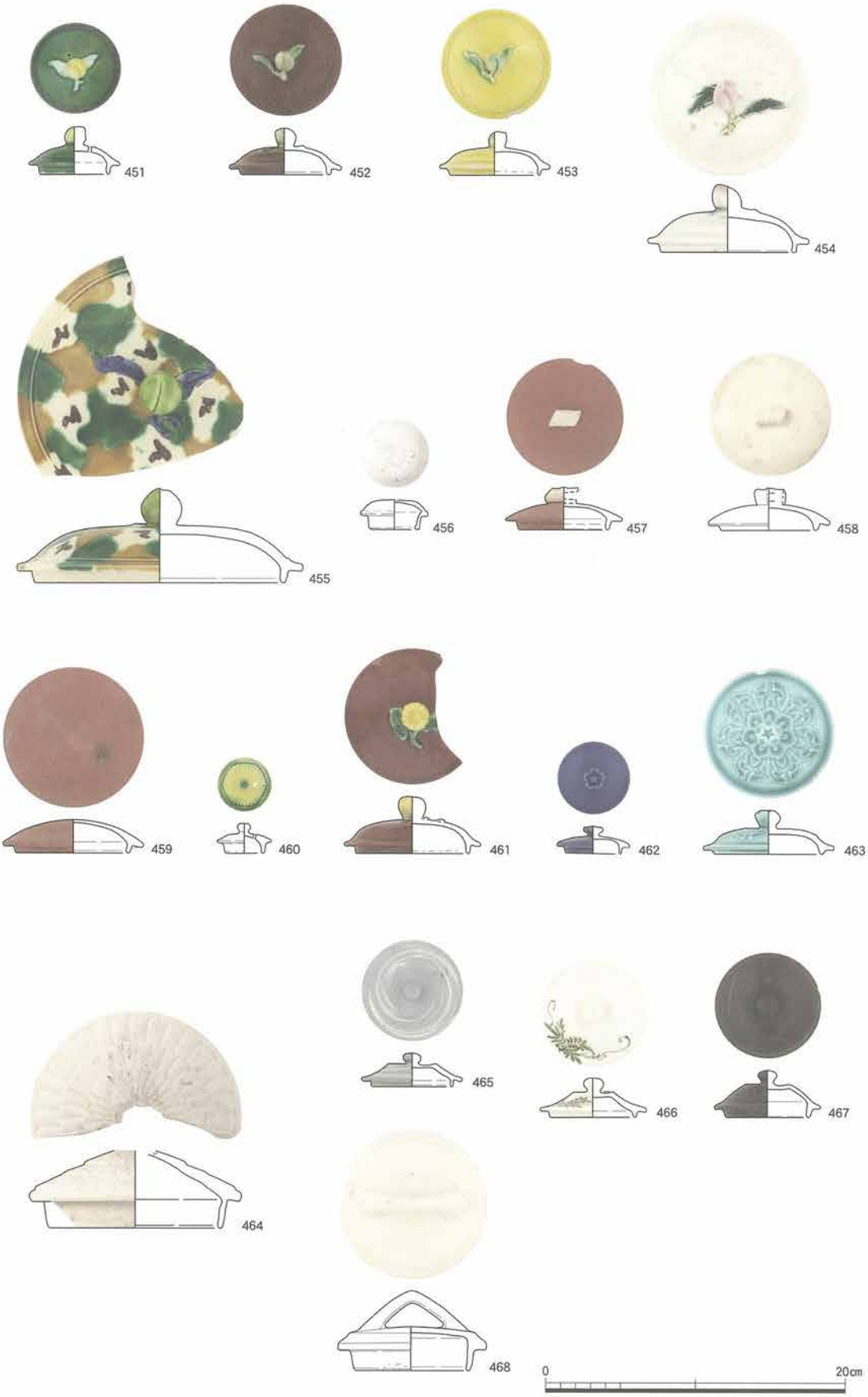


第59図　出土遺物　陶器類(17)



第60図　出土遺物　陶器類(18)

第61図　出土遺物　陶器類(19)



第62図　出土遺物　陶器類(20)

6. 蓋物

蓋の中で明らかに身とセットになるもの、あるいは鉢類の中で明らかに蓋を伴うと考えられるものを蓋物として分類した。蓋物は、平面形状から丸形・角形及び変形に分類した。

①蓋物A類（丸形）

分類基準　大分類－平面の形状　中分類－底部の形状。

大分類　Ⅰ－平面形状が丸形のもの

中分類　A－底部に輪高台をもつもの

B－底部の形が碁笥底状のもの

C－平底のもの

②蓋物B類（角形）

分類基準　大分類－平面の形状。

大分類　Ⅰ－平面形状が正方形のもの

Ⅱ－平面形状が長方形のもの

③蓋物C類（変形）

分類基準　大分類－平面の形状。

大分類　Ⅰ－平面形状が楕円（たまご）形のもの

Ⅱ－平面形状が桃実形のもの

Ⅲ－平面形状がうさぎ形のもの

Ⅳ－平面形状がへちま形のもの

7. ミニチュア陶器

ミニチュア陶器には内外面とも緑釉を施釉するティーカップ形碗（520）、瑠璃釉を施釉する片手鍋あるいは杓（521）、手桶形（522）、直立する頸部をもち、体部と頸部の外面に耳を貼り付け、全面に緑釉を施釉する瓶（523）などがある。

8. 器台

円盤状を呈するもので、体部の形態から以下の2種に分類した。

分類基準　大分類－体部の形状。

大分類　Ⅰ－体部の側面が玉縁状のもの

Ⅱ－体部の側面が直立するもの

9. 燭台

直立する長い脚部をもつもので、底部の形状から以下の2種に分類できる。

分類基準　大分類－底部の形状。

大分類　Ⅰ－底部が蓋状のもの

Ⅱ－底部が皿状のもの

第63図　出土遺物　陶器類(21)

第64図　出土遺物　陶器類(22)

10. 蓮華・さじ

蓮華は底部の形状から、以下の2種に分類できる。

分類基準　大分類－底部の形状。

大分類　Ⅰ－底部が平底のもの

　　Ⅱ－底部が丸底のもの

また、小型のさじ（531）も出土している。

11. 筆架・硯

533は口縁部の平面形状が楕円形を呈する容器を中央部で２つ貼り合わせた特異な形態を呈するもので、筆架あるいは筆筒と考えられる。また、硯には円形で浅い海をもち、底部外面に「大日本　アハシ三平」銘をスタンプする携帯用硯（534）と長方形の硯（535）とがある。536は蓋状の形態を呈し、内面に3箇所穿孔するもので、水滴を兼ねた硯の蓋の可能性が高い。外面には三彩釉が施されている。

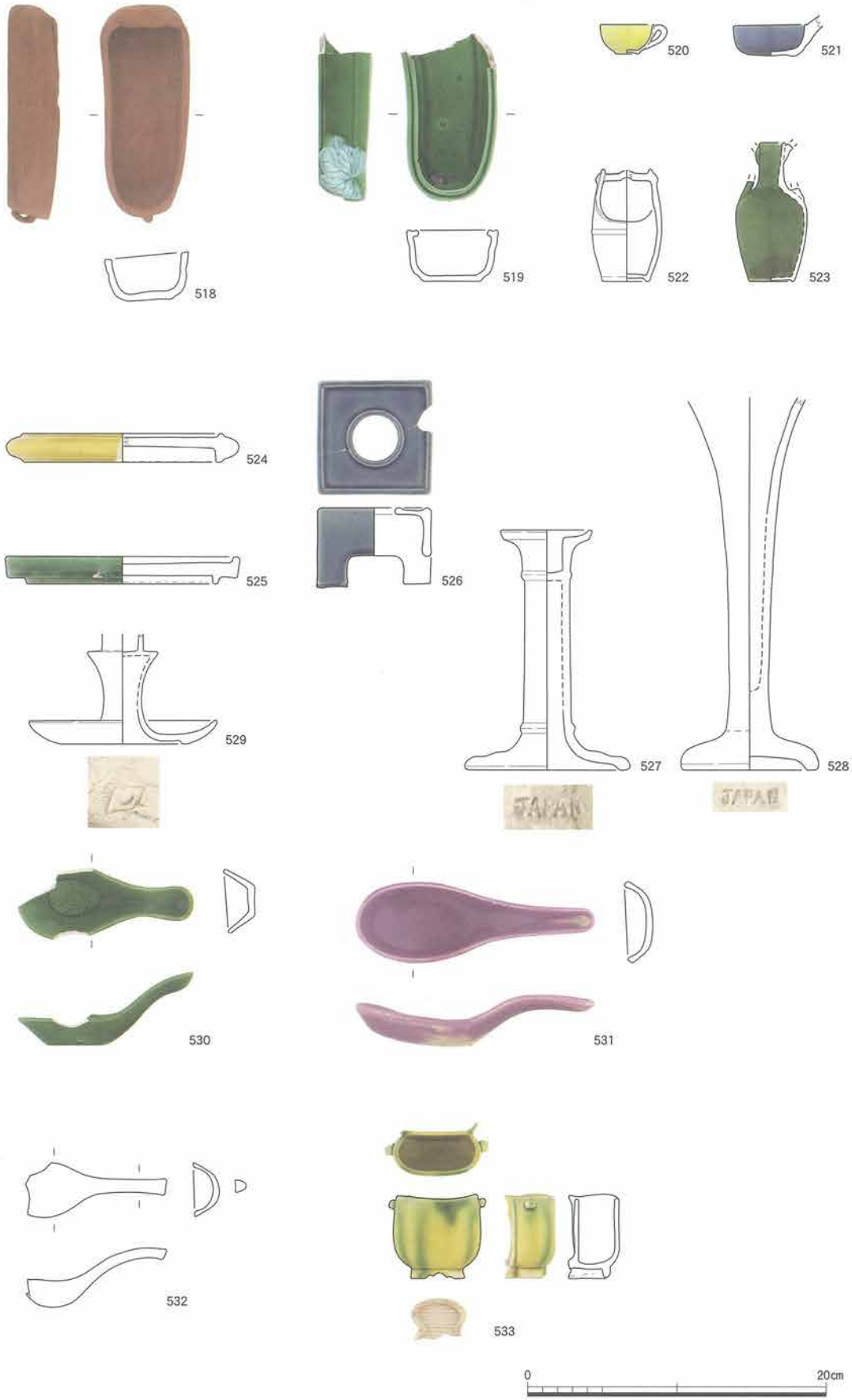
12. 器種不明陶器

537～540は器種の明確でないものである。537は漏斗状を呈する。538は平底で高台を浅く削りだし、体部は大きく内傾するもので、花生けの可能性が考えられる。539は碍子状の形態を呈し、体部外面に型押しで唐草文を施文し、全面に淡赤褐色釉が施される。540は口縁部を波状に成形し、口縁部上面に大小6箇所の円形の穿孔を行なうもので、形態的には灰皿に類似する。あるいは香炉の可能性も考えられる。

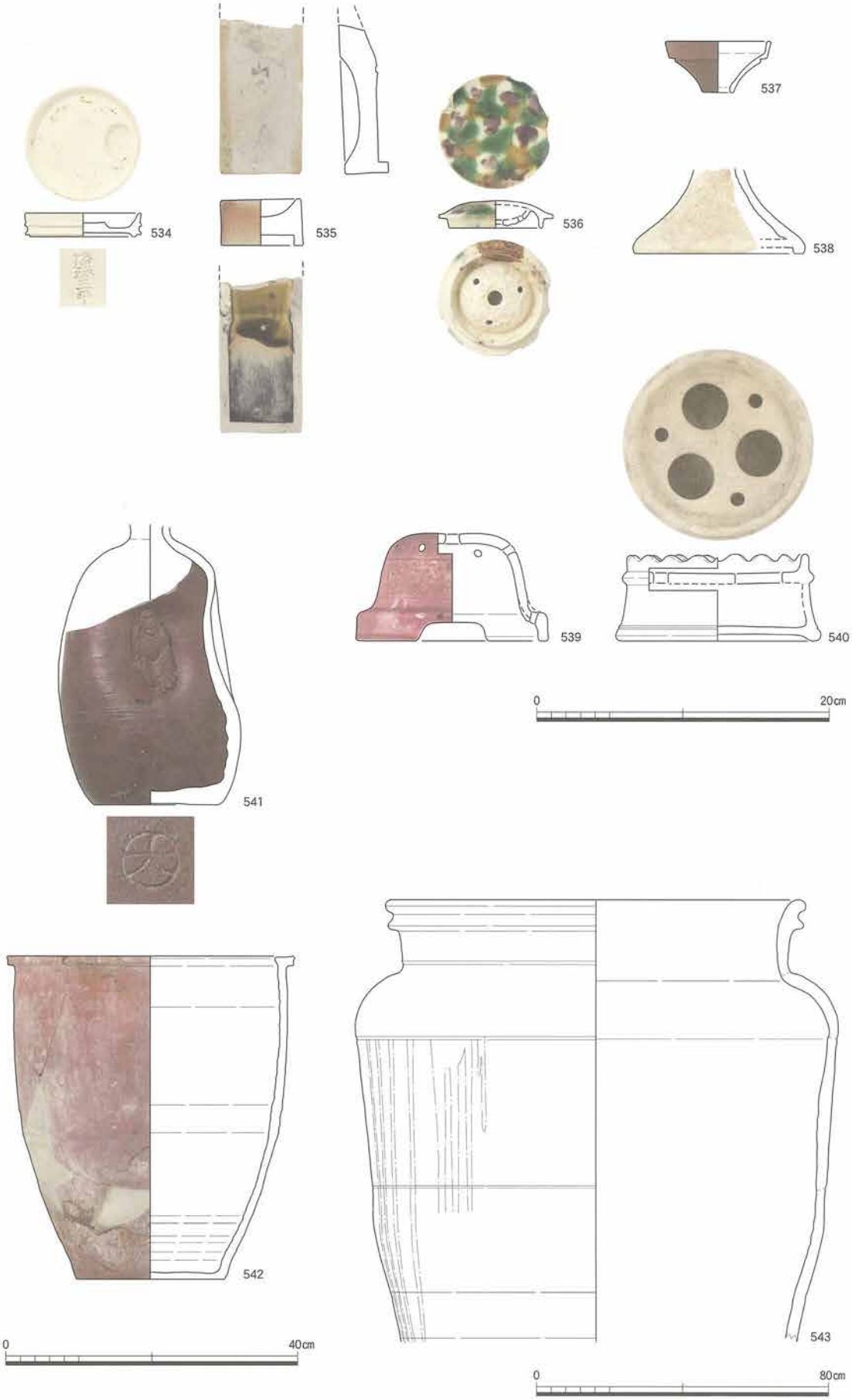
(3)　他産地の製品

珉平焼以外の他産地の製品と考えられる製品には、備前焼、大谷焼、丹波焼、明石焼、舞子焼、信楽焼の他、産地不明の製品がある。

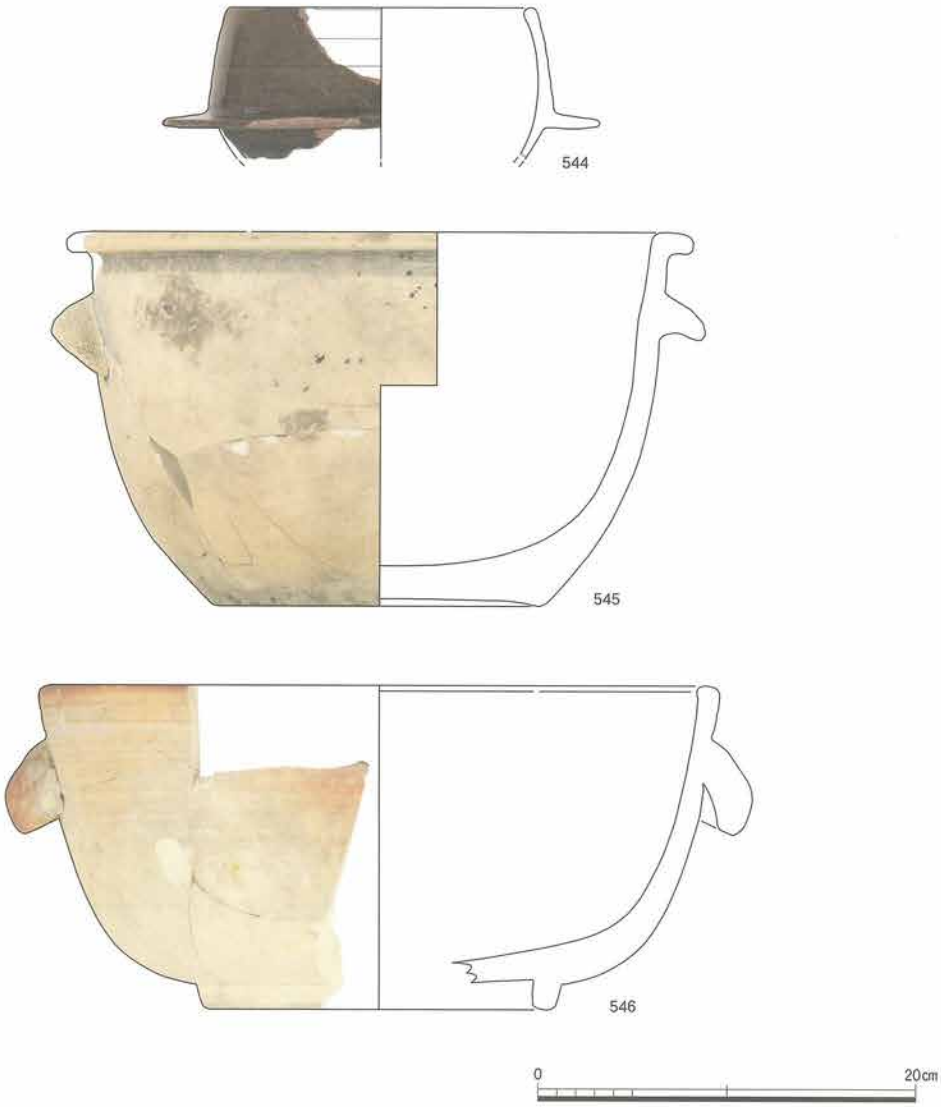
541は備前焼の布袋徳利である。平底で体部を大きく凹ませ、型作り成形の布袋像を貼り付ける。外面には赤土部を塗布する。19世紀前半代の製品と考えられる。542・543は大谷焼の甕である。542は平底で体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁部は水平に外方に折り曲げる。543の体部はほぼ直立し、肩部は僅かに外方に張る。口縁部はやや外方にひらき、口縁部外面には凸帯を1条巡らせる。内外面とも鉄釉を全面に施釉する。544は羽釜である。体部は内彎し、体部の中央に幅の広い鍔を貼り付ける。外面に灰釉を施釉する。産地は不明である。545・546は素焼きの鉢で外面に把手を貼り付ける。底部が平底で口縁部を水平に折り曲げるもの（545）と輪高台をもち、口縁部をそのまま上方に挽き上げるもの（546）とがある。いずれも産地は不明であるがあるいは珉平焼の製品を製作する際に用いられた吸甕などの広義の窯道具の可能性も考えられる。



第65図　出土遺物　陶器類(23)



第66図　出土遺物　陶器類(24)・その他の産地



第67図　出土遺物　産地不明

4．タイル

本窯跡の確認調査および本発掘調査において陶磁器や窯道具とともにタイル及び関連遺物が多数出土した。タイルは近世近代おいては敷瓦、陶板、化粧煉瓦、本業敷瓦など種々の名称があり、単体としての装飾品・装飾台、内外壁の装飾材、床材などとして使用されてきた。ここではこれらを「タイル」として総称する[13]。

また近代の淡陶タイルは製造初期段階において日本の伝統的な文様を使用し始め、やがてイギリス製タイルの文様に似ることになる。また当初から、海外輸出を視野に入れた製品であることから、サイズはインチが基本であるが、従来からの寸も用いられたと考えられる。文様は時代を経るにしたがいアールヌーボー調が多くなる。

珉平焼におけるタイルづくりは陶板や本業敷瓦として賀集珉民平以来製作されたとされ[14]、淡陶社設立以降、本格的に大量生産された[15]。

タイルおよびタイル製作関連遺物として湿式タイルの製作土製「型」、窯道具の「匣鉢」、匣鉢への収納棚としてセットする「階段状仕切り道具」が存在する。

タイルは、埋蔵文化財対象時期となる遺跡ではその出土は極めて稀で、タイルを本格的に発掘した例もなく、その内容は不明であり編年も確立されていない[16]。今回の資料は窯業跡から発掘された唯一のタイル資料であり、これらは我が国の近代窯業を語るうえで欠くことの出来ない資料であるため、調査対象としてここに報告する。

タイルは、陶磁器や窯業関連遺物が投棄された「物原」から混在した状態で出土した。出土層位の詳細は第4章第3節に詳しいが、湿式タイルがごく僅かに下層から出土したにとどまり、ほとんどが中層や上層および表層出土である。乾式タイルは一部が上層から出土したが、ほとんどが表層出土である。

タイルは他の遺物同様に多くは破片になっており、「素焼き」状態のものや釉薬が施された「本焼き」などで、ほぼ全容が把握できるものが取り上げられた。

これにより出土したタイルは28リッター入りコンテナに126箱を数える。このほか湿式タイルの土製素焼型の破片が10箱ある。

タイルの整理は各破片を接合した後、成形方法、表面文様、裏面調整情報をデータ化した。なお、実測図は釉薬焼成されたものを基本としたが、釉薬焼成品がない場合は素焼品や同種の釉薬焼成品を不足部分に補っている。

(1) タイルおよびタイル製作関連遺物の種類

タイルデータの要素は下記のように、「成形」「規格」「形態」「文様表現法」「文様種類」「釉薬」に分かれる。

これまでに湿式タイルは67種に細分される。その多くは6インチ（1インチ=2.54cmでインチの表現は漢字の「吋」や記号の「〝」を表記する）約15cm正方形であり、希に8インチの大型タイルもある。また6インチや8インチタイルを対角線に分割し、三角形に成形したタイルも多く存在する。希に長方形や3インチ正方形のタイルもある。

乾式タイルは164種に細分される。湿式タイルと同様に6インチ正方形タイルが主流であるが、小型の正方形や長方形、隅部分の屈曲タイルや階段の手摺部分のタイル（役物）もある。

成　形	規　格	形　態	文様表現法	文様種類	釉薬法
湿　式	8"×8"	正方形	レリーフ	瓔珞文	単彩
乾　式	8"×1/2	三角形	チューブライニング	草花文	多彩
	6"×6"	長方形	無文	幾何学文	三彩
	6"×1/2	八角形	無地（転写）	デザイン	透明釉
	6"×1/4	役物	無地（手書き）	絵画	
	6"×3"	形象		雷文	
	6"×2"	面取り		マーブル	
	5.5"×5.5"	曲がり		マット	
	4.3"×4.3"	階段タイル		無文	
	3"×3"				

(2)　成形

湿式製法　この製法は陶器作りと同種の、水分20%に近い粘土を素焼型に押し込むなどの成形をおこない、素焼の後、釉薬や手書きにて文様をつけるものである。その厚さは薄くても８～19mm程度で通常は14mm以上のものが多い。これにより生産されたものが「湿式タイル」である。

乾式製法　この製法は湿式タイルの粘土に相当する胎土は各種の土や粉砕した岩石などを調合し、水分7%程度にした「杯土」を材料とし金型を用いた機械圧縮により成形する。厚さは最大でも８～14mm程度で、10mm前後が多い。製法は明治41年に現在の東京工業大学の前身であった東京高等工業学校で窯業を学んだ不二見焼きの村瀬二郎麿、淡陶の能勢敬三が相次いで開発に成功した。この製法により生産されたものが「乾式タイル」である。

(3)　規格

8"タイプ　湿式タイルおよび乾式タイルに見られ、大形のものである。断面形は四角で、平面形は正方形および三角形がある。

6"タイプ　湿式タイルおよび乾式タイルに見られ、標準規格の製品である。断面形が四角であるが、昭和になればクッションタイルと呼ばれる壁面隅部分に使用されるものがある。平面形は正方形・三角形が多く、長方形（縦が３″および２″）やボーダー（縦が６″の1/4以下の細長いタイプ）もある。

5.5"タイプ　正方形の湿式タイルで龍文タイルのみに見られる。側面まで丁寧に仕上げられていることから、単体で敷瓦とされたと考えられる。

4.3"タイプ　三六角（3.6寸角）と呼ばれる平なもので、マーブル柄や無地タイルが主流である。

3"タイプ　正方形の湿式や乾式の平なもので、文様入りや無地タイルである。

形象タイプ　動植物をかたどった小型の湿式タイル。

その他　手摺、手摺曲隅、笠木、隅物、竹割、竹割足元隅など階段手摺等の部材は役物と呼ばれ、開口部や隅角部に使用されるものが多い。

(4)　形態

正方形、三角形、長方形、八角形、形象があり、平物（断面四角で表面が平面的なもの）主体であるが、平面形が正方形など平物に似ていても、面取りされている役物タイルもある。竹割、面取り、曲がり、階段手摺などの役物は屈曲などの曲がりタイルになる。

(5)　文様表現法

タイル表面につけられた文様は素焼き型や金型の凹凸により表現されるものと、平面に絵画や特殊技

法により描かれた文様がある。

レリーフタイル　浮き彫りにより表現された文様をもつもので、多彩釉薬の使用によっては色の混交がみられる。

チューブライニングタイル　釉薬の混合を防ぐために細い凸線により仕切られた文様をもつもので、釉薬の混合は少ない。

銅板転写タイル　銅板に文様を刻み、薬がけした転写紙を作成し、素焼きタイルに転写紙を貼り付け水を塗布した後、剥がして透明釉をかけて本焼きするタイル。

無地タイル　平面的な素焼きタイルに手書きしたものや、マーブル文様やマット調の文様を施し、透明釉をかけたもの。単色の釉薬をかけて焼成した色タイルも含まれる。

(6)　文様種類

文様には瓔珞文、草花文、幾何学文、デザイン文、マーブル文、雷文、絵画、文字などがある。湿式タイルの文様として日本的な瓔珞文、草花文やデザイン文が主流であるが、乾式タイルが生産される頃にはアールヌーボー調の文様も多用される。乾式タイルではアールヌーボー調のタイルや手書きによる釉下彩の絵画タイル、文字タイルも見られる。

(7)　釉薬法

単彩（単一色を施釉したもの）、多彩（二種以上の色釉薬を施釉したもの）、三彩（青・赤・黄・こげ茶などの釉薬に透明釉を施したもの）、透明釉などがある。

色調は陶器に使用された釉薬と同色が多く、釉薬が同じであるとの分析結果がでている。但し、タイルの素地の違いにもよるかも知れないが、湿式タイルでは全体的に色調が不均一になる。

(8)　タイル裏成形・裏型

湿式と乾式の二種類のタイルを見分けるには裏足（タイル裏の凹凸）を観察する。タイル裏面にクシによる「カキ目」や「ナデ」による調整がされているものは湿式タイル。格子や画一的な平行線や四角の突起があり、生産者を記すマークなどが記されているものは「金型」成形の乾式タイルである。

タイルの分類で特に重要な要素は裏型である。湿式タイルの裏はナデ調整かクシガキ6条～11条による調整がほとんどで見受けられる。一方、乾式タイルの裏には金型の痕跡が明確に残る。これも細分した結果、56種におよび、その分類は概ね次のようになる。（第105～108図参照）

Aタイプ　格子目文と中央に千鳥マークありと菱形のDKマークありとなし。

Bタイプ　平行線文の中心に菱形の中にDKマークありとなし。

Cタイプ　平行線と直角方向に縦長長方形の凹区画があり中央に菱形DKマーク上にTRADE　MARK有りが見られ、マーク上下に文字端部の拡張が見られる。

Dタイプ　平行線と直角方向に幅広凹区画があり中央に菱形DKマーク有りと無し。

Eタイプ　縦横区画されるが四周は凹んでいるもので、中央凹部にTRADE　MARK付き菱形DKマーク有りとなし。中央凹部に無文の円形凸部があるものに分かれる。

Fタイプ　正方形や長方形の突部が配置され中央にやや小さめの菱形DKがあるもの。

Gタイプ　細かい平行線が一面にあり小型の菱形DKがあるもの。

Hタイプ　細かい平行線が一面にあり縦横方向の凸帯により区画されるもの。

以上、大まかに分かれる。これらの金型の違いは出土相層位からＡタイプの千鳥印のある格子目文が古く、Ｆタイプの細かな平行線によるものが最も新しい。ただし、詳細は今後のデータ分析により明確にしたい。

形象タイルT188～T191は昭和初期のカタログに掲載されているが、湿式製法によるものである。カタログに登場しないT183～T187は概して素地は粗く形は大きい。

参考文献

日本のタイル文化編集委員会編　1976　『日本のタイル文化』　淡陶株式会社

柿田富蔵ほか　1991　『日本のタイル工業史』　株式会社INAX

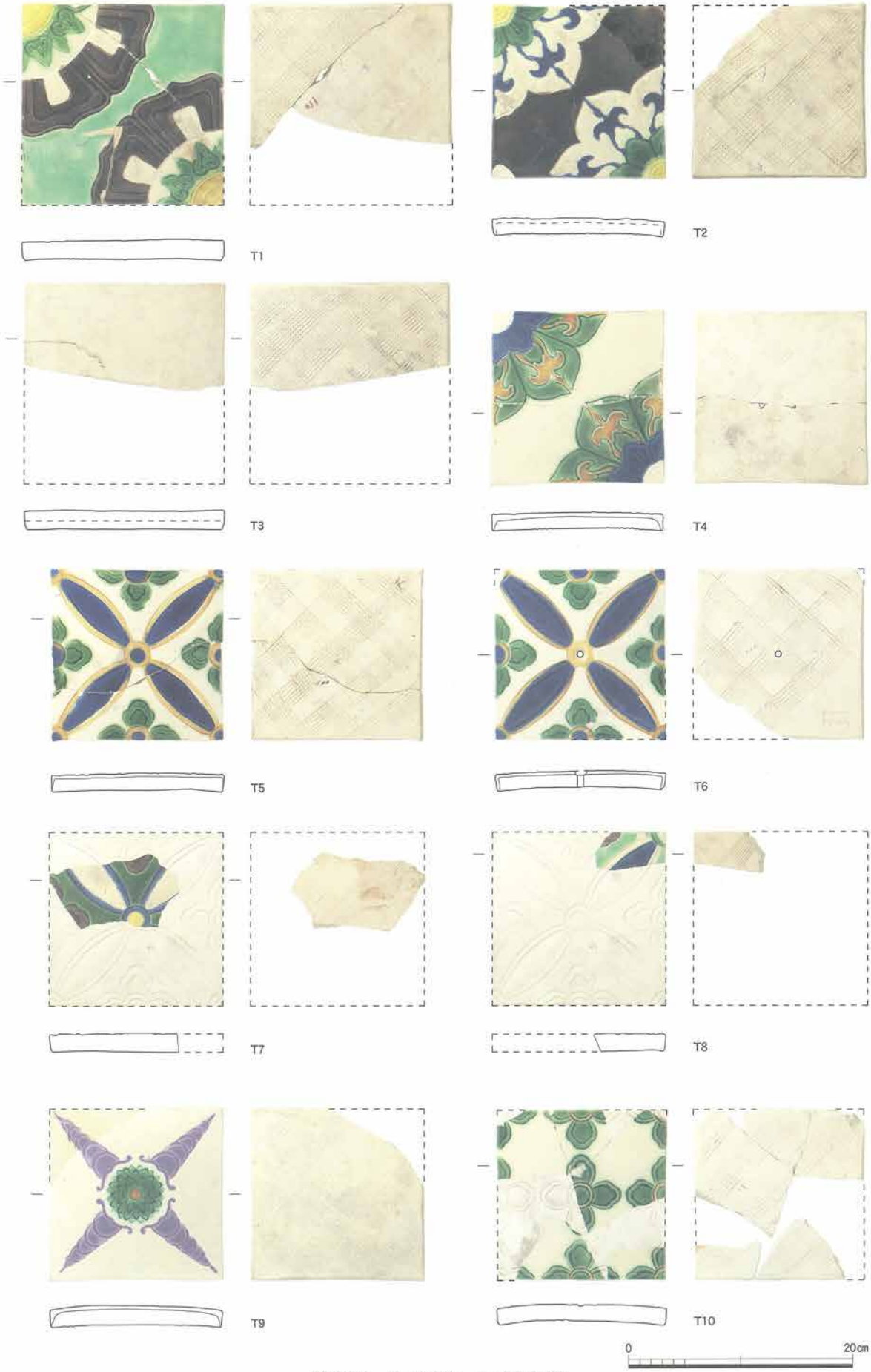
山本正之ほか　1983　『日本のタイル』　INAX出版

世界のタイル博物館編　2000　『世界のタイル・日本のタイル』　INAX出版

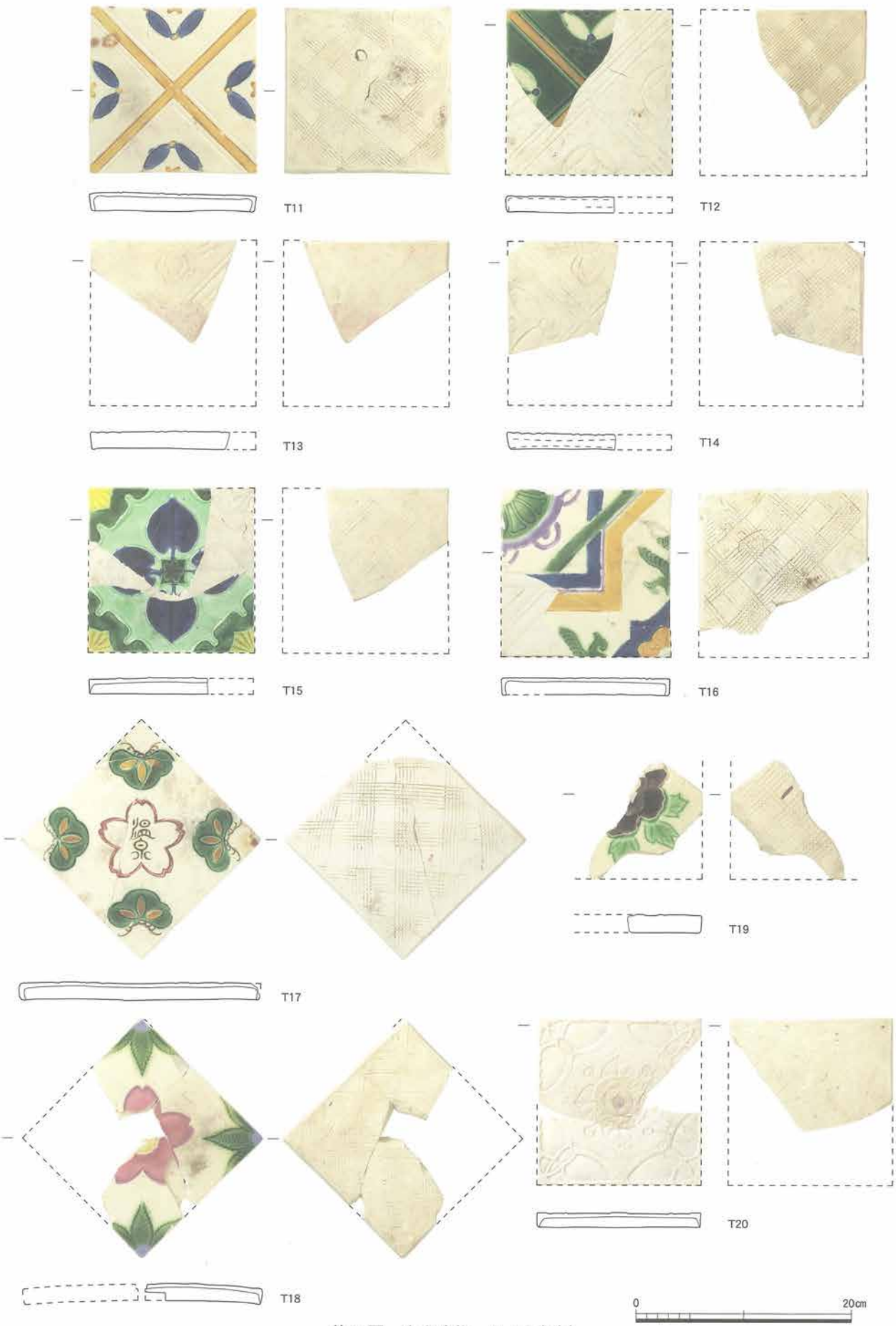
堀込憲二・糸蓼弘琪ほか　2003　『流光凝煉方寸間』臺湾與荷蘭老磁磚展　臺北縣鶯歌陶瓷博物館

菊川兼男ほか　1979　『三原郡史』兵庫県三原郡町村会

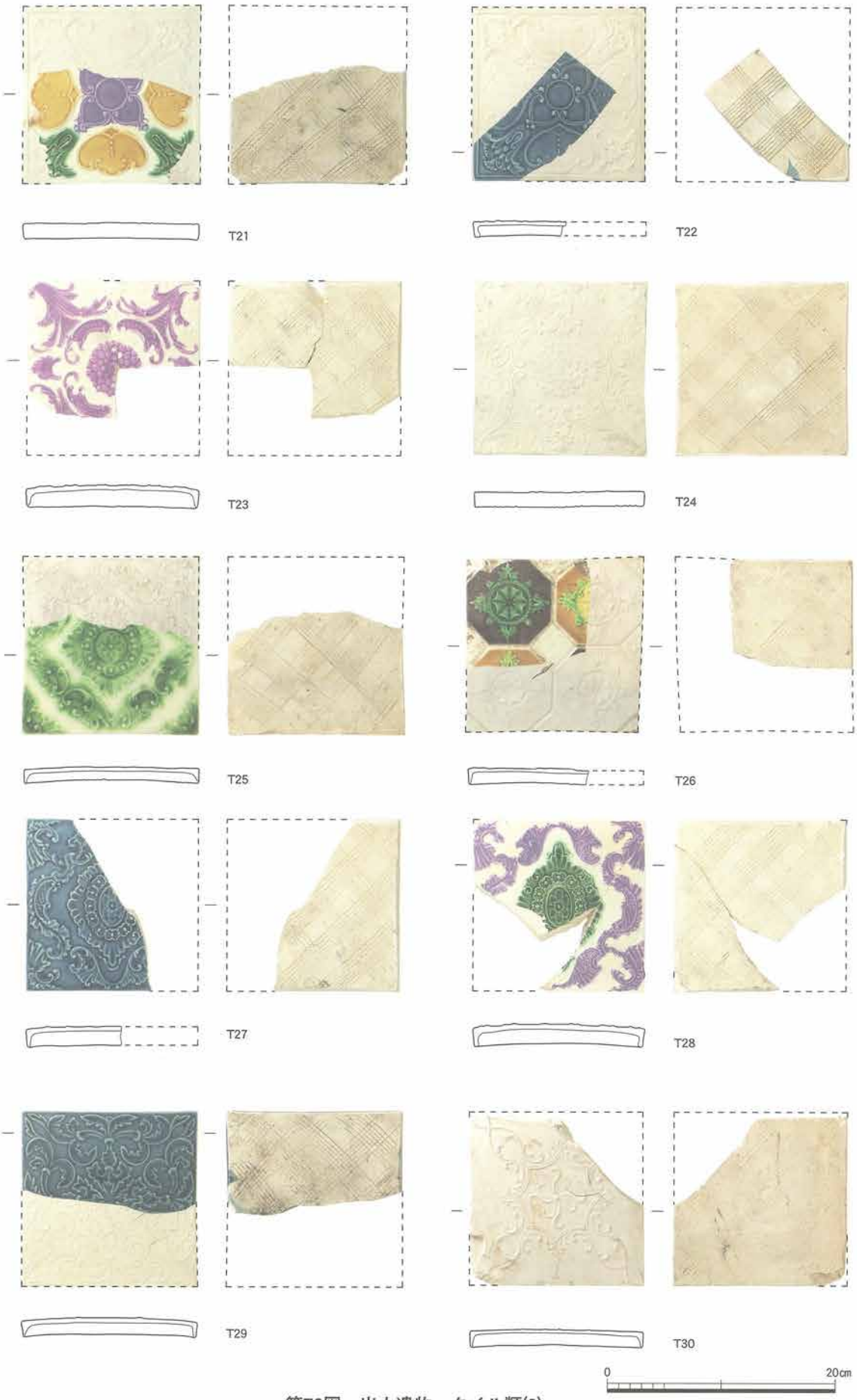
佐藤一信ほか　2004　『ゴッドフリート・ワグネルと万国博覧会』愛知県陶磁資料館



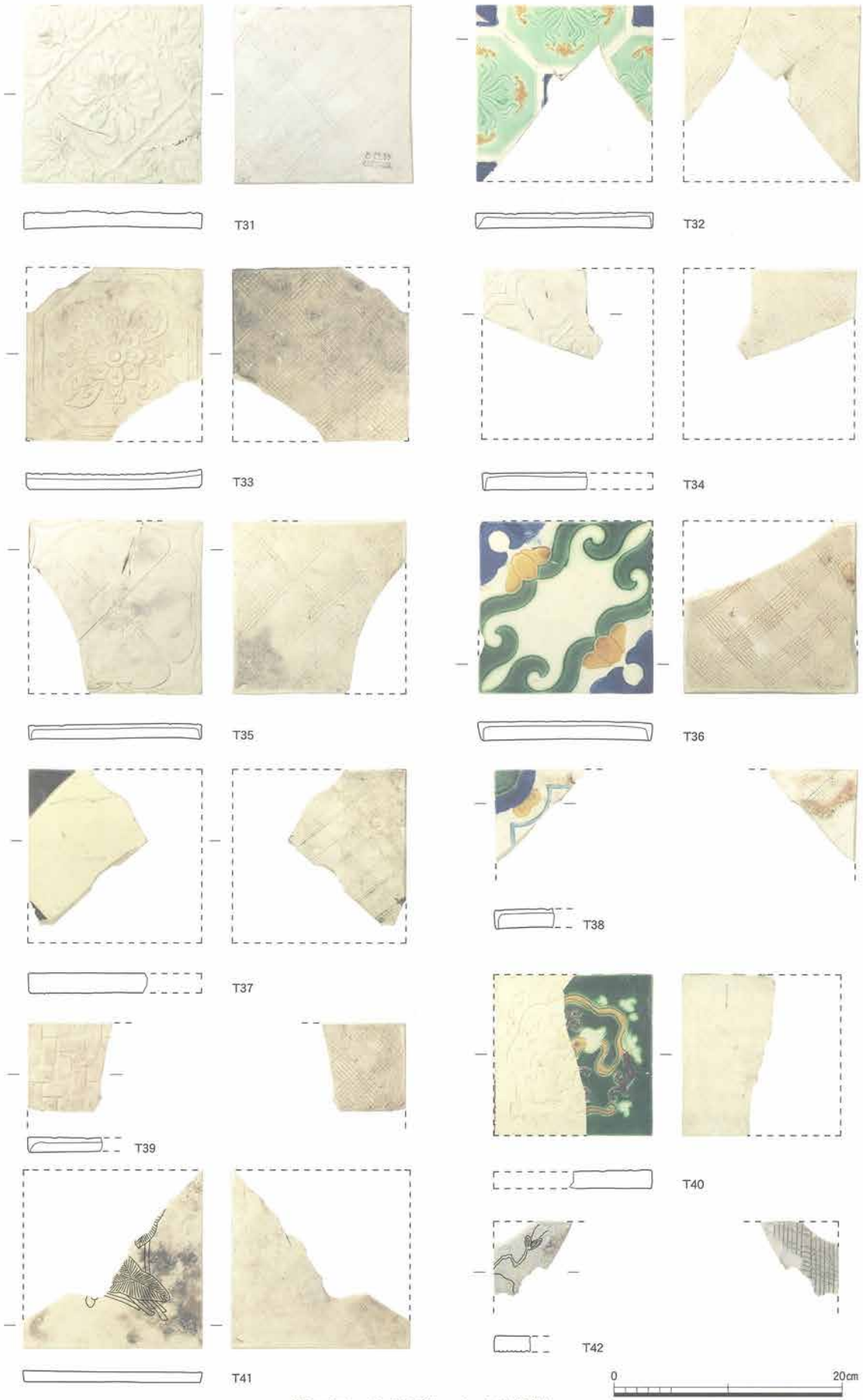
第68図　出土遺物　タイル類(1)



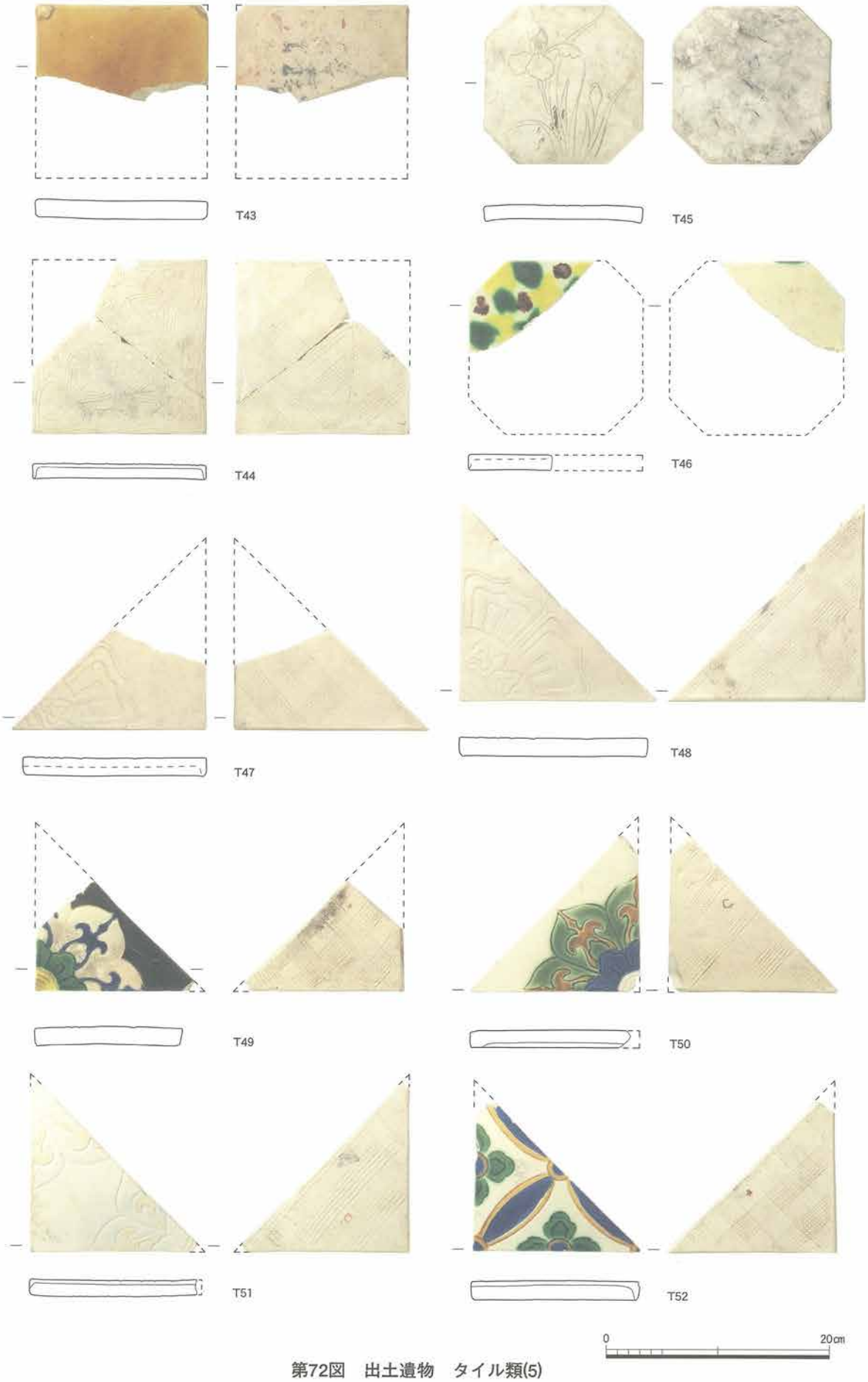
第69図　出土遺物　タイル類(2)



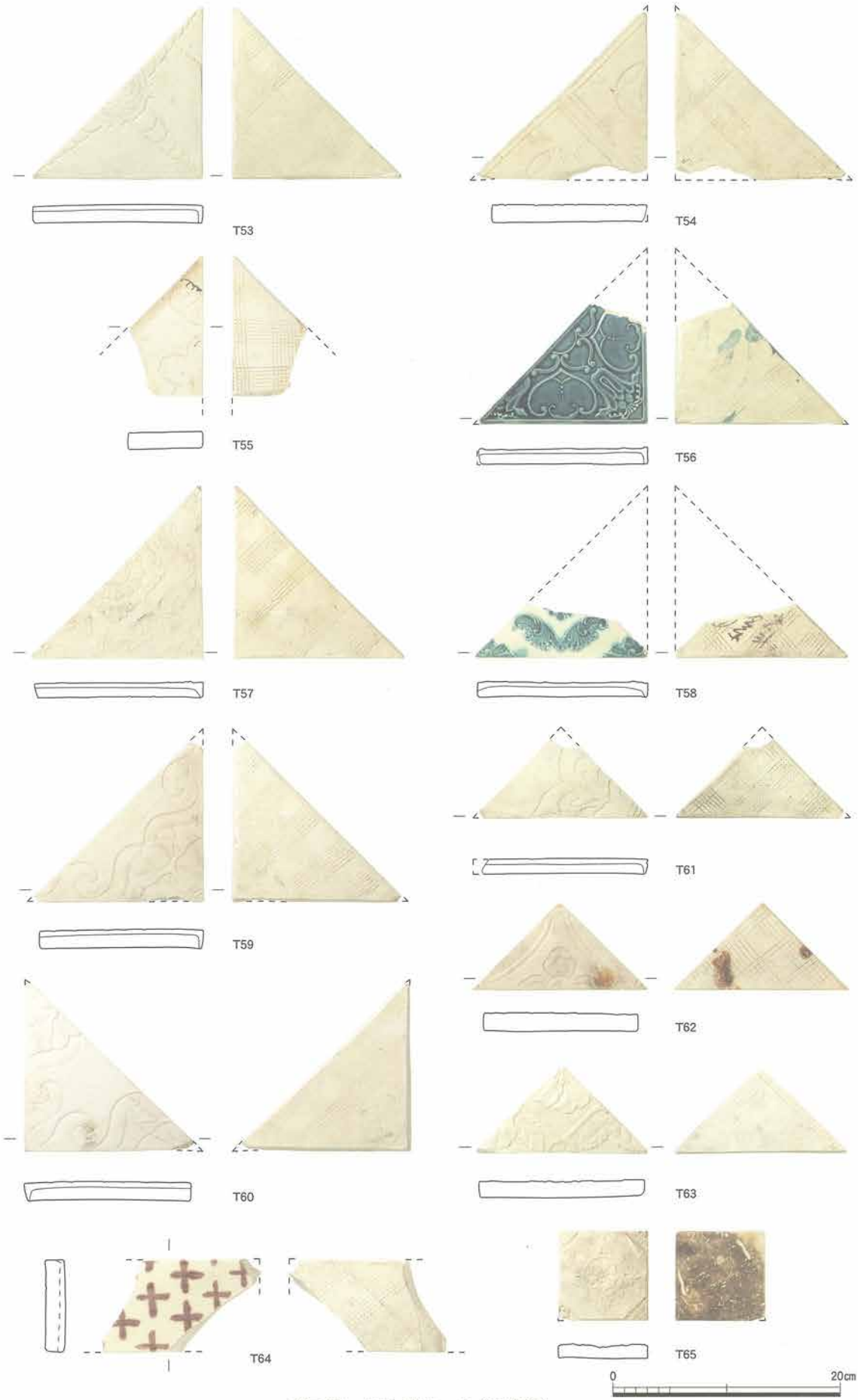
第70図　出土遺物　タイル類(3)



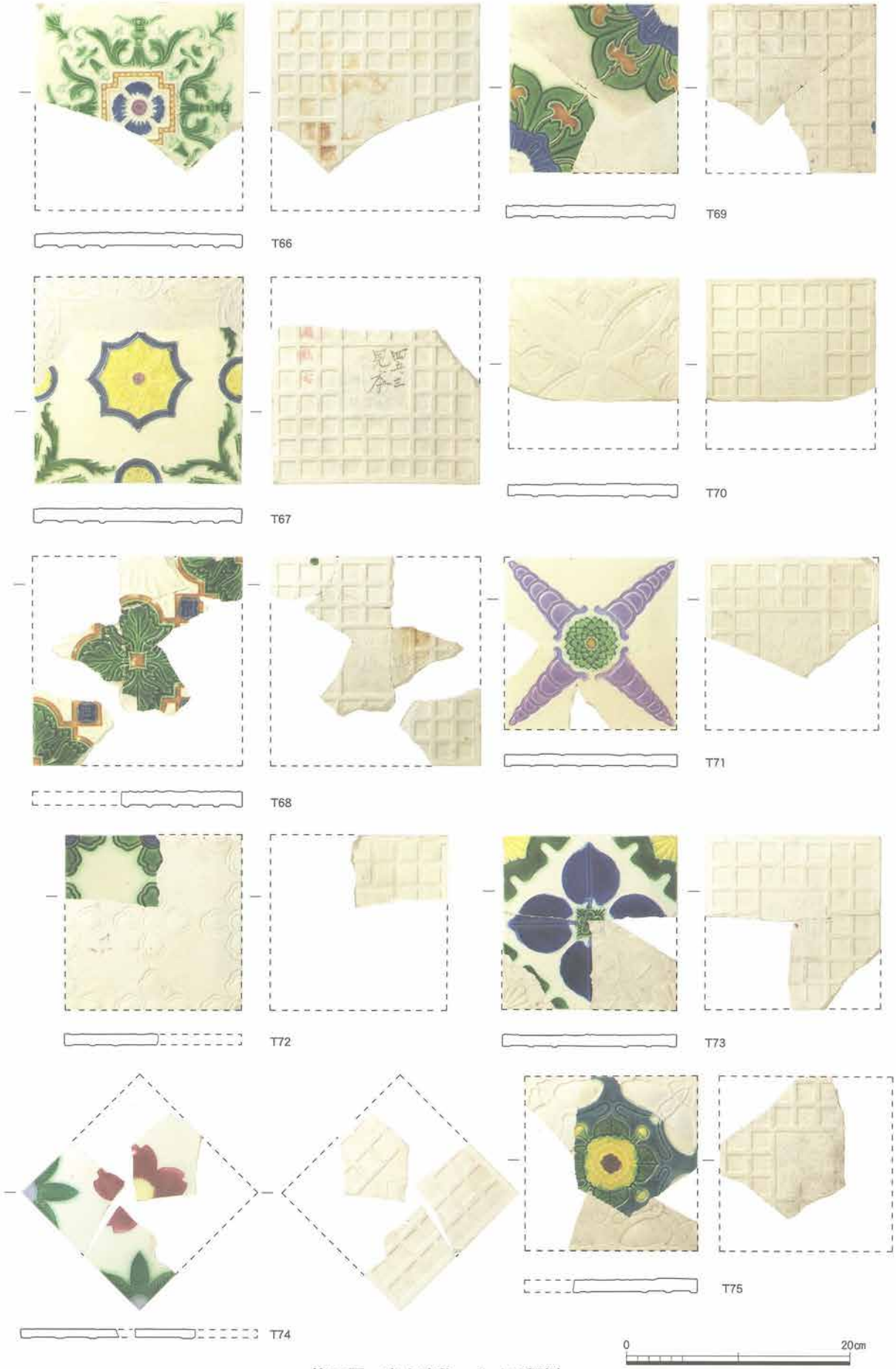
第71図　出土遺物　タイル類(4)



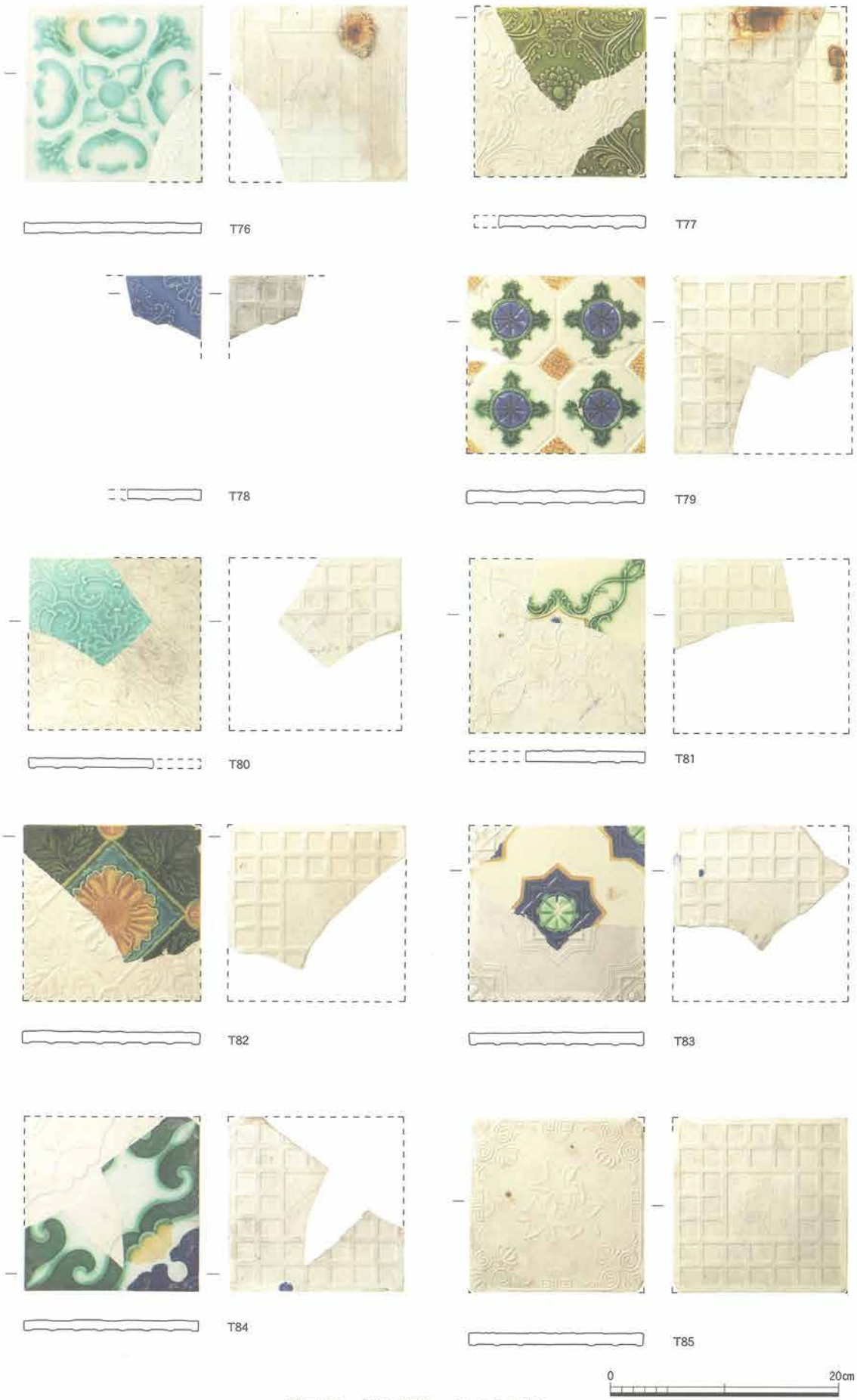
第72図　出土遺物　タイル類(5)



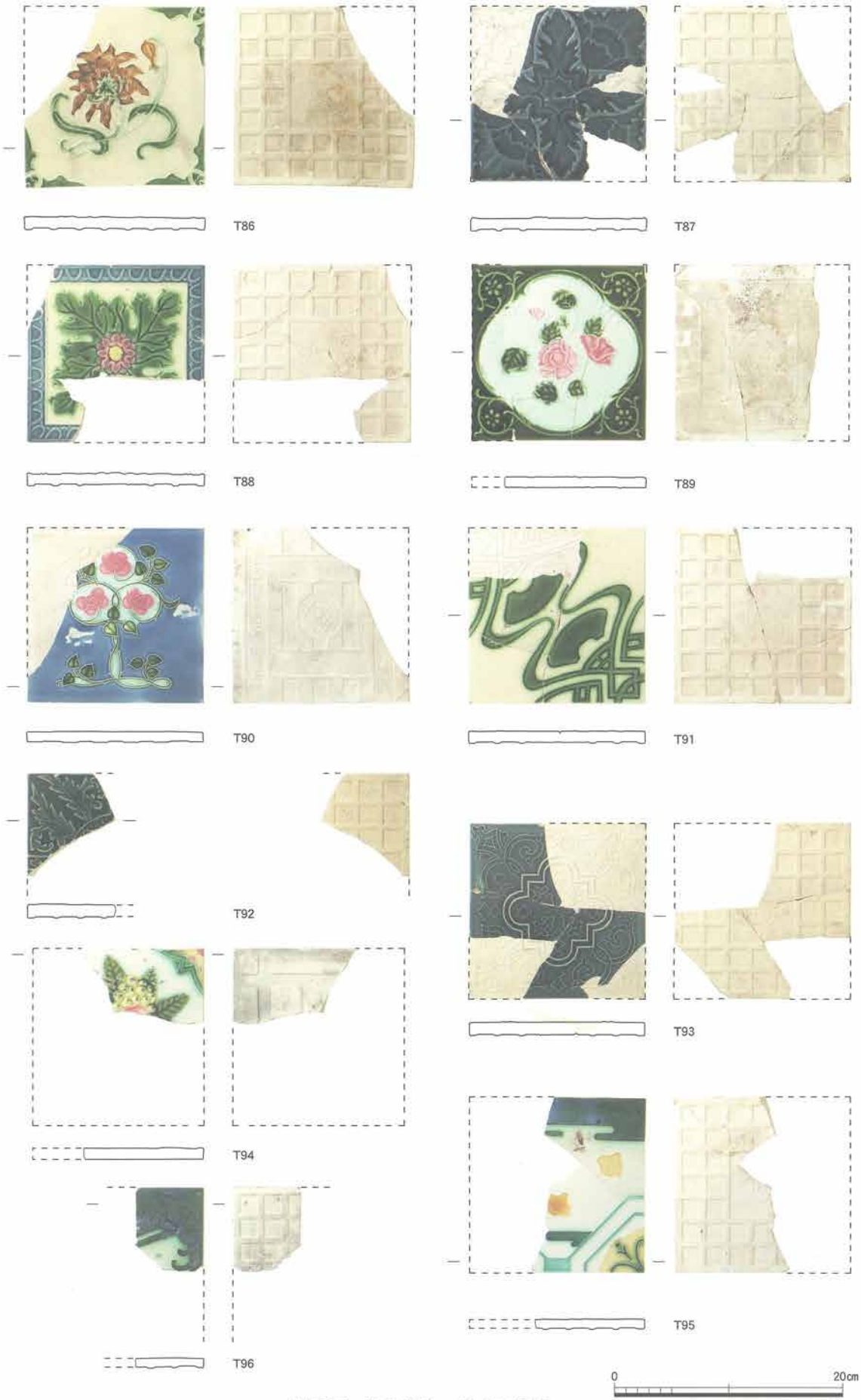
第73図　出土遺物　タイル類(6)



第74図　出土遺物　タイル類(7)

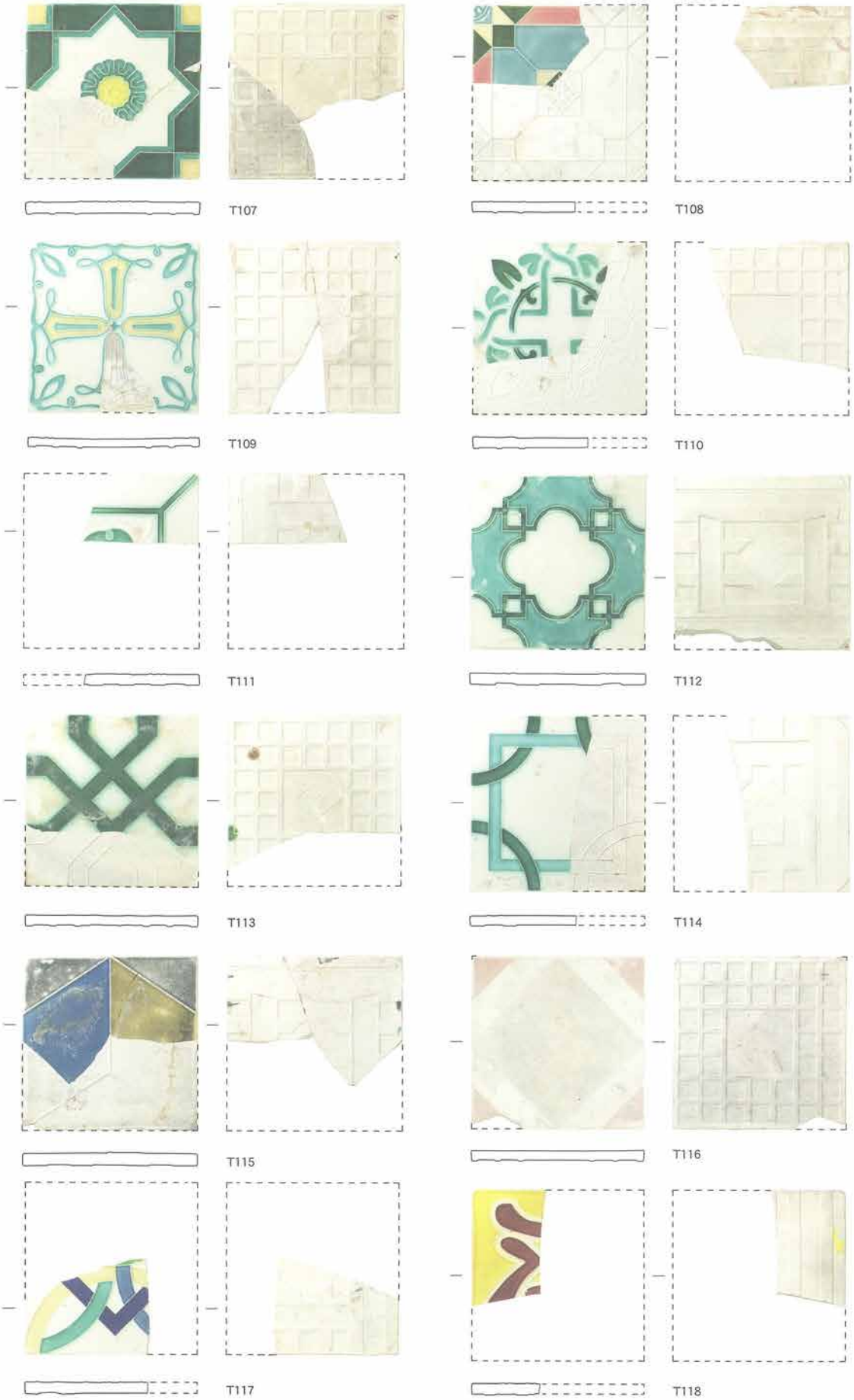


第75図　出土遺物　タイル類(8)



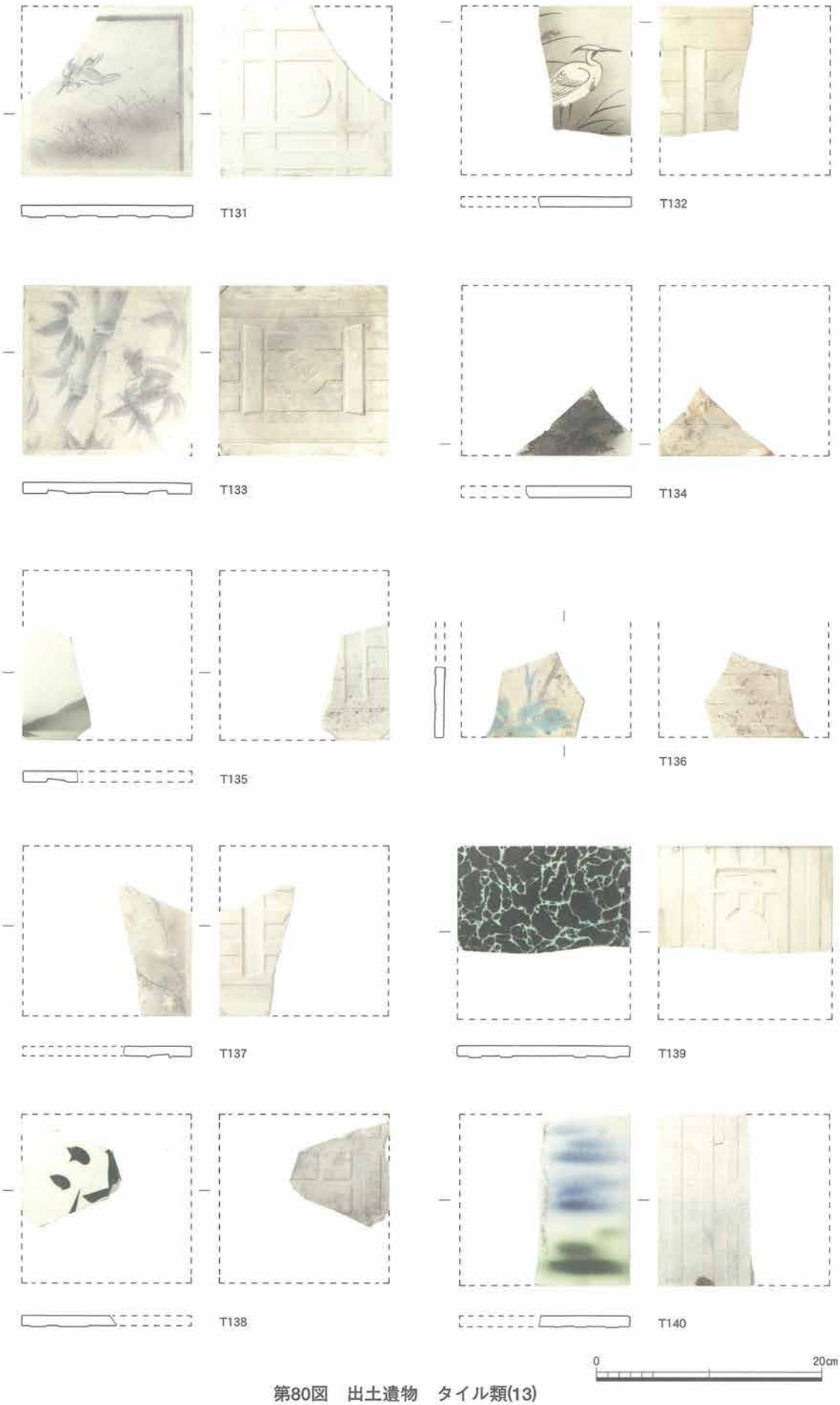
第76図　出土遺物　タイル類(9)

第77図　出土遺物　タイル類(10)

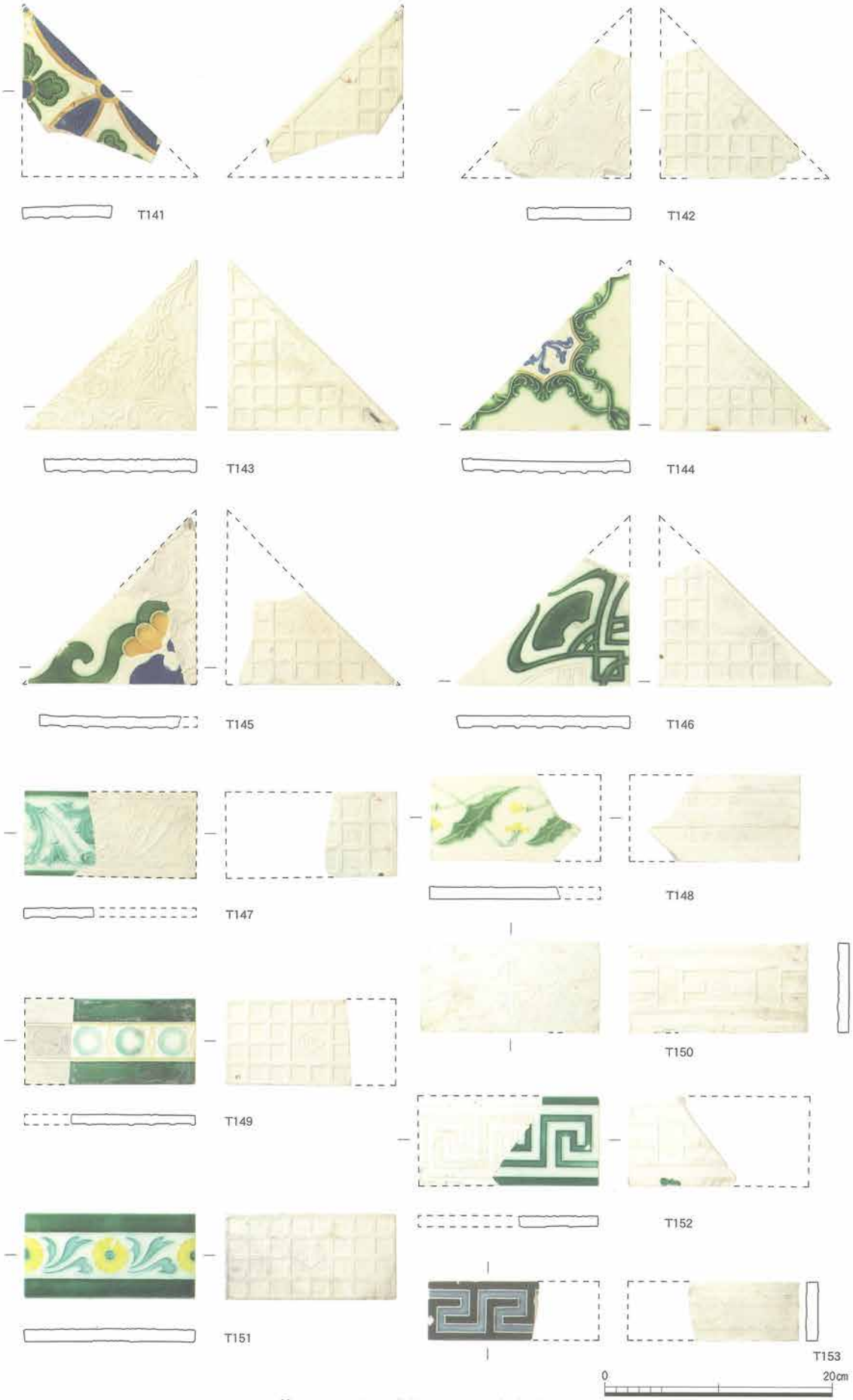


第78図　出土遺物　タイル類(11)

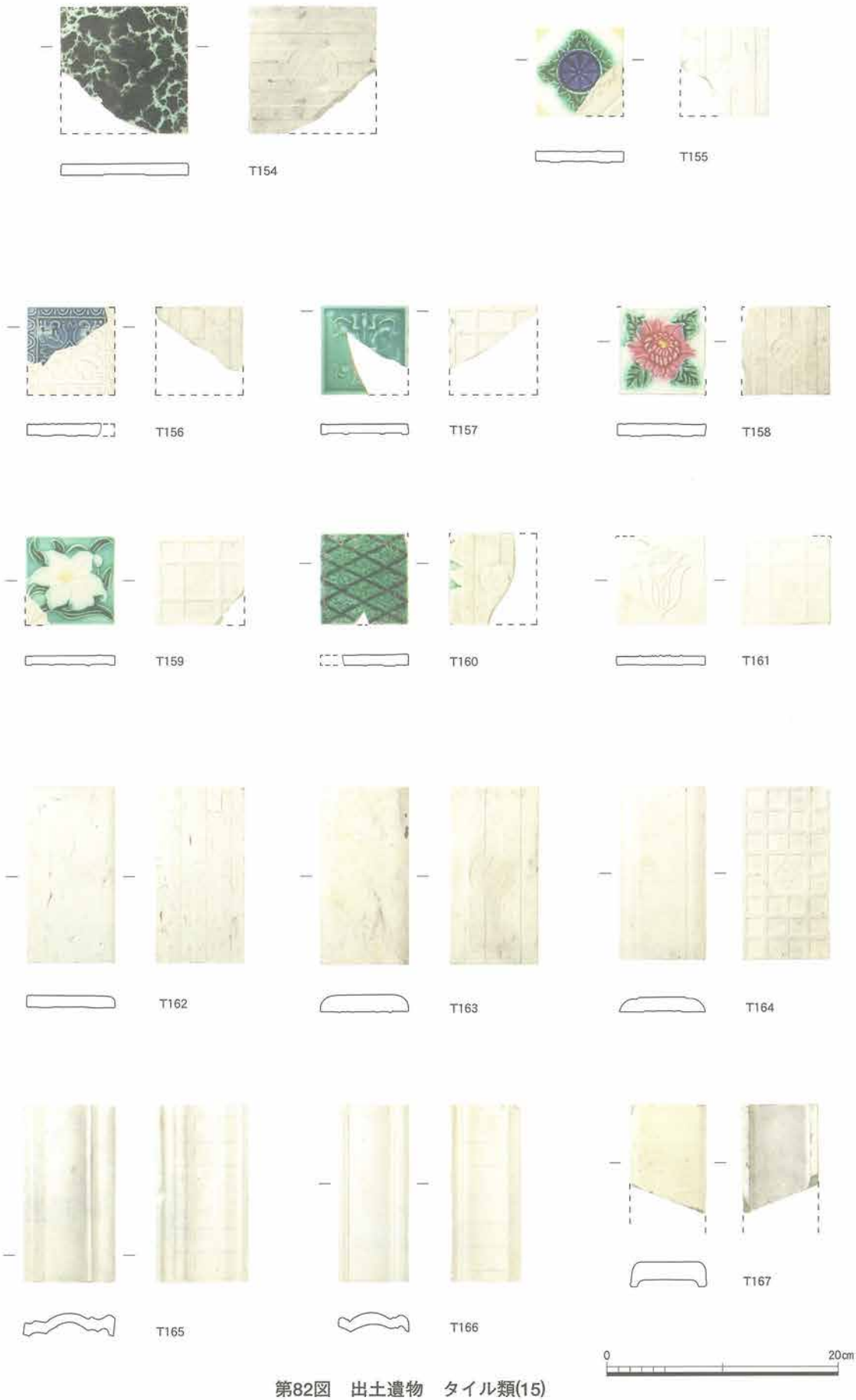
第79図　出土遺物　タイル類(12)



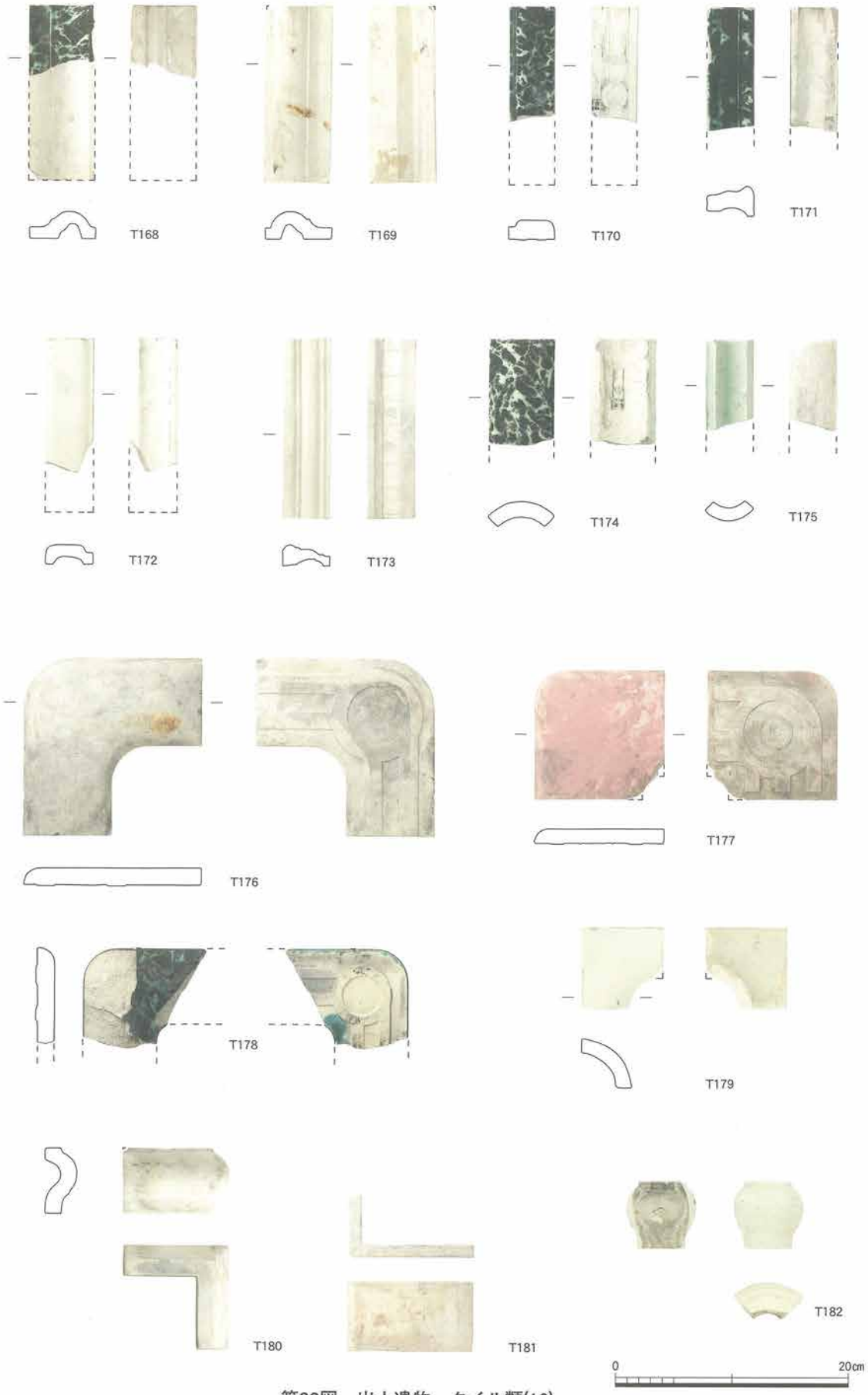
第80図　出土遺物　タイル類(13)



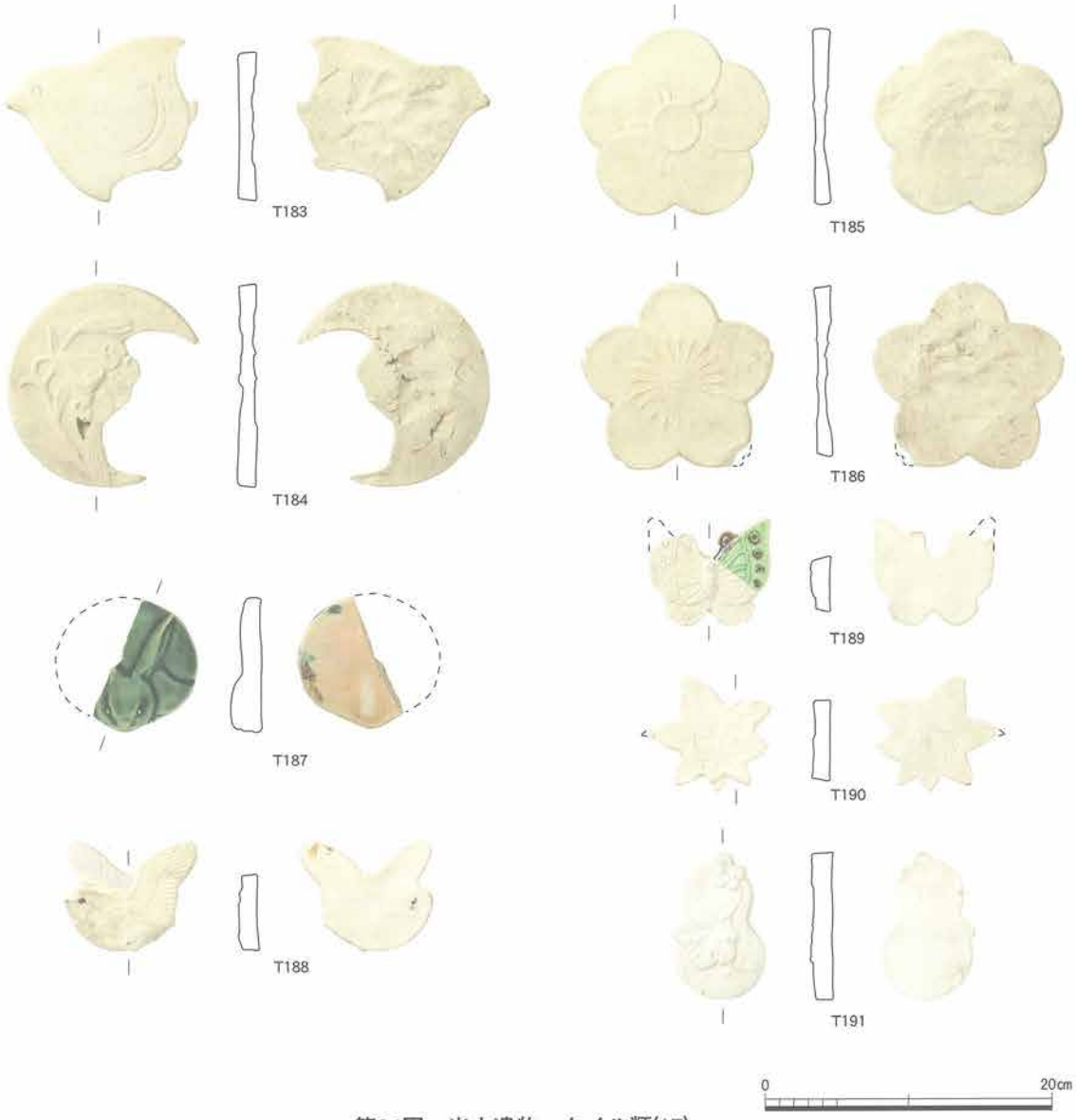
第81図　出土遺物　タイル類(14)



第82図　出土遺物　タイル類(15)



第83図　出土遺物　タイル類(16)



第84図　出土遺物　タイル類(17)

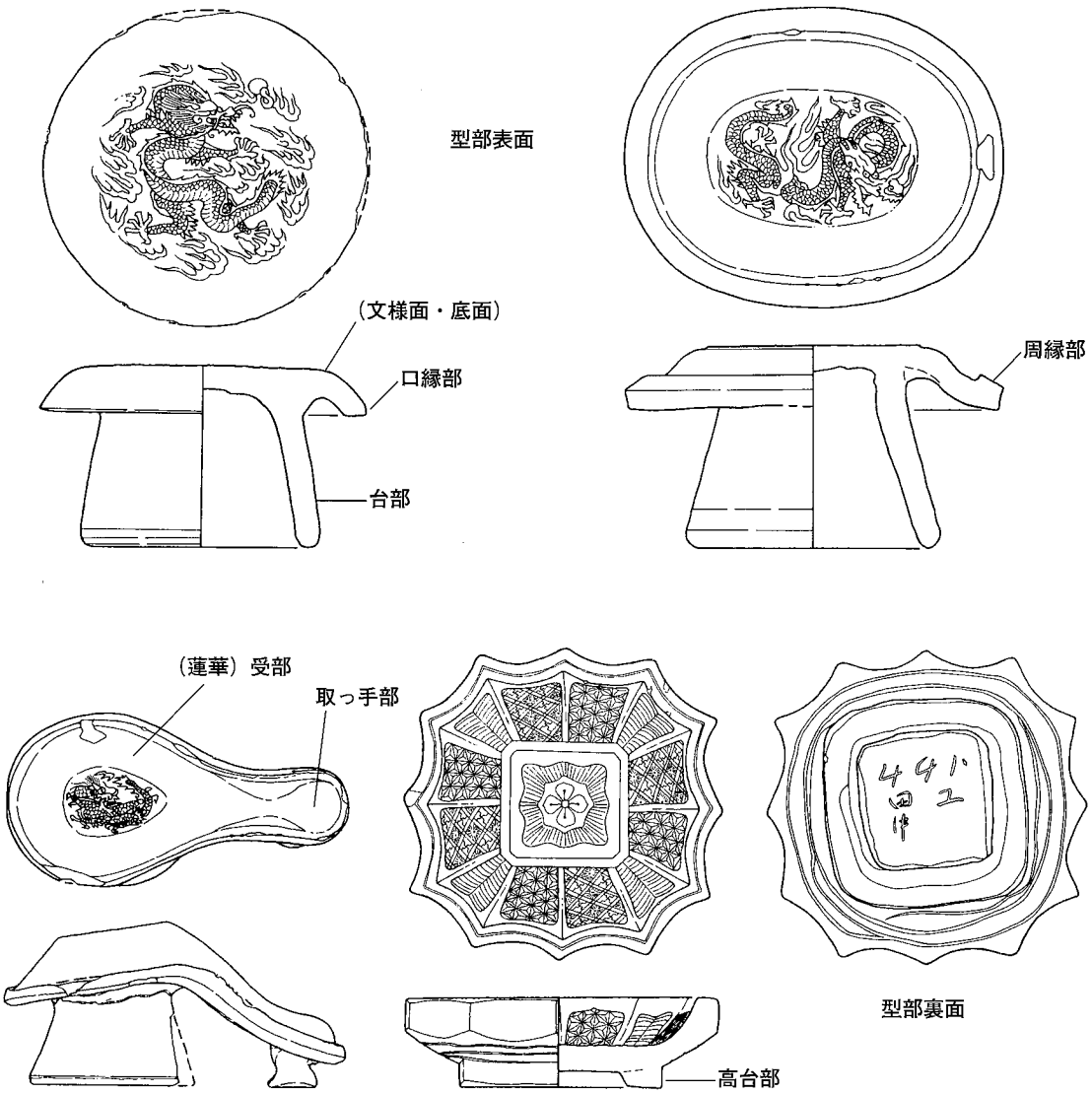
出土遺物観察表

土型・磁器（染付磁器他）・施釉陶器（素焼き含む）・タイルの各観察表の「挿図No.・写真図版No.」は遺物が掲載されている挿図および写真図版No.を明記している。

各観察表の「出土地点」については、現場での遺物取り上げ時の地点および層位を記載している。

磁器の「色調」は、肉眼での観察による色調を表現している。

施釉陶器は、決められた釉薬の調合によって画一された色調に仕上がるものが、焼成時の状況などによって微妙に色調に違いがみられる。このため、「色調」については、確認された色調をできる限り列挙し、色見本（第86図　出土遺物　色見本）を作成した。また、素焼きの陶器については、「素焼き（白）」・「素焼き（柿）」・「素焼き（練り込み）」と表現している。



第85図　土型の各部名称

C-162　胡粉　C-163　蛤粉　C-164　立徳粉　N-946　灰白　N-947　銀鼠　N-960　墨色

C-6　荷花紅　C-16　紅蓮灰　N-967　一斤染　N-723　緋色

C-145　牙黄　C-158　柠檬黄　N-802　黄水仙　N-805　たんぽぽ色　N-806　レモン色

C-208　春緑　N-790　支子色　N-795　鬱金色　N-798　深支子　N-809　藁色

C-169　嫩草緑　C-174　深芽緑　N-826　若芽色　N-829　若草色　N-820　オリーブ緑

C-193　玉緑　N-840　浅緑　N-842　青磁色　N-843　若竹色　N-845　青竹色

C-184　鸚鵡緑　N-846　鸚鵡緑　N-860　薄浅葱　N-861　水浅葱　N-863　孔雀緑

C-254　柏坊灰藍　C-251　深竹月　N-886　花浅葱　N-889　藍色　N-892　群青色

N-919　モーブ　N-921　菖蒲色　N-922　半色

N-773　生壁色　N-740　蒲色　N-752　煉瓦色　N-756　マルーン　N-763　桧皮色

第86図　出土遺物　色見本

第１表　土型観察表(1)

No.	挿図No. 写真図版No.	種別 分類	器種	形状	文様構成	出土地点	型部表面の特徴	型部裏面と台部の特徴	備考
K1	第16図 写真図版83	製品型 Ⅰ	鉢類A	丸形	無文	3区－Ⅱ 暗褐色土 (最下層)	口縁部の約2/3が欠損。直径約11cmの器内全面に文様および区画はなく、口縁部へは比較的急な角度で立ち上がる。口縁端部には凹面あるいは周縁部はつかない。	裏面全体は丁寧にナデ付けられている。型部と台部は台部の内外面に紐状粘土を巻き付け丁寧に接合されている。	台部外側にヘラ書き有り。「丸二五井ノ形明治二十五年六月之作㋐」。
K2	第16図 写真図版83	製品型 Ⅰ	鉢類A	丸形	無文	１区石垣背後 上層ⅰ	口縁部の約2/3が欠損。直径約16cmの器内全面に文様および区画はなく、口縁部へは比較的急な角度で立ち上がる。口縁端部には凹面あるいは周縁部はつかない。	裏面全体は丁寧にナデ付けられている。型部と台部は台部の内外面に紐状粘土を巻き付け丁寧に接合されている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。型部および台部全面に墨による汚れが付着。
K3	第16図 写真図版83	製品型 Ⅰ	鉢類A	丸形	無文	１区石垣背後 o層	口縁部は全周が欠損しており、全体の形状および大きさは不明。器内全面に文様および区画はなく、直径約20cmを測る鉢の型と考えられる。	裏面全体は丁寧にナデ付けられている。型部と台部は台部の内外面に紐状粘土を巻き付け丁寧に接合されている。台部の大半は欠損し、高さは不明。	台部の大半が欠損しており、銘文等は不明。
K4	第16図 写真図版83	製品型 Ⅰ	鉢類A	丸形	無文	１区石垣背後 上層ⅲ	口縁部の約3/4が欠損。直径約28cmの器内全面に文様および区画はなく、口縁部へは比較的急な角度で立ち上がる。口縁端部には凹面あるいは周縁部はつかない。	裏面全体は丁寧にナデ付けられている。型部と台部は台部の内外面に紐状粘土を巻き付け丁寧に接合されている。台部の大半は欠損し、高さは不明。	台部の大半が欠損しており、銘文等は不明。
K5	第17図 写真図版84	製品型 Ⅰ	鉢類B	丸形	無文	１区石垣背後 中層ⅰ	口縁部は大半が欠損しており、全体の形状および大きさは不明。底面と立ち上がりには明確な稜線がみられ、中央には直径3.1cmの穿穴がある。器内全面に文様および区画はなく、直径約13cmを測る鉢の型と考えられる。	わずかに残る裏面は丁寧にナデ付けられている。型部と台部には明確に接合された痕跡はみられない。	台部内側にヘラ書き有り。「□□（明治か）廿九年六月攷㋐丸三寸ヒスミ取」。
K6	第17図 写真図版84	製品型 Ⅰ	鉢類A	丸形	無文	１区石垣背後 h層	口縁部は全周が欠損しており、全体の形状および大きさは不明。中央には直径5.6cmの穿穴がみられ、器内全面に文様および区画はない。直径約16cmを測る鉢の型と考えられる。	わずかに残る裏面は丁寧にナデ付けられている。型部と台部は台部の内外面に紐状粘土を巻き付け丁寧に接合されている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K7	第17図	製品型 Ⅰ	鉢類B	丸形	無文	１区石垣背後 上層ⅱ	口縁部は大半が欠損しており、全体の形状および大きさは不明。底面と立ち上がりには明確な稜線がみられ、中央には直径2.3cmの穿穴がある。底面にヘラ書きされた４つの文字がみられる。直径約18cmを測る鉢の型と考えられる。	裏面全体は丁寧にナデ付けられている。台部が取り付けられていた痕跡は残っているが全てが欠損。	型部表面（底面）にヘラ書き有り。「井戸　梅山」か。
K8	第17図 写真図版84	製品型 Ⅰ	Ⅲ類A	丸形	鯉文	１区石垣背後 下層	文様区画はなく、直径約11cmの器内全面に文様を彫刻。右下半部に波がうねり、中央に飛び跳ねる鯉を配し、上方には雲を浮かべた構図である。文様面から口縁部へは緩やかに立ち上がり、口縁端部には凹面あるいは周縁部はつかない。	裏面の周縁部は丁寧にナデ付けられている。型部と台部は台部内面に粘土塊を、外面には紐状粘土を指押さえによって接合されており、内面にはその痕跡が明瞭に残っている。台部の約2/3は欠損。	台部の約2/3が欠損しており、銘文等は不明。遺物№197の製品型。
K9	第17図 写真図版23 上段 写真図版84	製品型 Ⅰ	Ⅲ類A	丸形	薔薇文Ⅰ	１区石垣背後 上層ⅰ	文様区画はなく、直径約12cmの器内全面に文様を彫刻。右側約1/3は欠損しているが、左下に大きく２つの薔薇の花が開き、周囲には葉が配されている。左上にはﾁｭｰﾘｯﾌﾟの蕾が咲き、右上には蝶々が舞っている。文様面から口縁部へは緩やかに立ち上がり、口縁端部には凹面あるいは周縁部はつかない。	裏面の中央部にわずかに布目痕跡が残るが、その他は台部ともに丁寧にナデ付けられている。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって接合されており、その圧痕が残っている。台部の約2/3は欠損。	台部外側にヘラ書き有り。「　年三月㋐　」。但し、台部の欠損により大半は不明。遺物№199の製品型。欠損している断面には型部の表面（文様面）と裏面が２枚の薄い粘土板を貼り付けて製作している痕跡が明瞭に残っている。
K10	第18図 写真図版85	製品型 Ⅰ	Ⅲ類A	丸形	文字文Ⅰ	１区石垣背後 中層ⅰ	文様区画はなく、直径約9.5cmの円内に文様を彫刻。左上方部および口縁部の一部が欠損するが、蝶々結びされた中央下部から半円を描くように上方中央に向けて、稲穂が配されている。中央上方に横書きで「□□」、中央にたて書きで「品評会賞品」の文字がある。文様面から口縁部へは緩やかに立ち上がり、口縁端部には凹面あるいは周縁部はつかない。	裏面の中央部に布目痕跡がわずかに残るが、周縁部は丁寧にナデ付けられている。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって丁寧に接合されており、欠損部分の断面からその状況を知ることができる。また、台部は２枚の粘土板を貼り付けて製作している痕跡がみられる。台部の約2/3は欠損。	台部の大半が欠損しており、銘文等は不明。遺物№200の製品型。欠損している断面には型部表面（文様面）と裏面が２枚の粘土板を貼り付けて製作している痕跡が残っている。

土型観察表(2)

No.	挿図No. 写真図版No.	種別 分類	器種	形状	文様構成	出土地点	型部表面の特徴	型部裏面と台部の特徴	備考
K11	第18図 写真図版23 上段 写真図版85	製品型 Ⅰ	皿類A	丸形	龍文Ⅰ	1区石垣背後 上層i	文様区画はなく、直径約9.5cmの円内に文様を線刻。龍の顔は右側を向き、胴はυ字状に曲がり尾は右横に、その周囲には雲が配されている。龍の爪は5本。文様面から口縁部へは緩やかに立ち上がり、口縁端部には凹面あるいは周縁部はつかない。	裏面の中央部に布目痕跡が残るが、周縁部は丁寧にナデ付けられている。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって丁寧に接合されており、わずかにその痕跡が残っている。台部の一部が欠損。	台部の一部が欠損しているが、ヘラ書きあるいは墨書はなし。遺物№201の製品型。
K12	第18図 写真図版85	製品型 Ⅰ	皿類A	丸形	無文	3区－Ⅱ 上層	直径約6.5cmの円内に文様は彫刻されていない。口縁部へは緩やかに立ち上がり、口縁端部には凹面あるいは周縁部はつかない。	裏面の周縁部は丁寧にナデ付けられている。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって丁寧に接合されており、わずかにその痕跡が残っている。台部の内外面の半分に濃緑色の釉が付着。台部の高さはわずか約1cmを測る。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K13	第18図 写真図版23 上段 写真図版85	製品型 Ⅰ	皿類A	丸形	無文	表層	直径約8.5cmの円内に文様は彫刻されていない。口縁部へは緩やかに立ち上がり、口縁端部には凹面あるいは周縁部はつかない。	裏面の中央部に布目痕跡が残るが、周縁部は丁寧にナデ付けられている。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって丁寧に接合されており、わずかにその痕跡が残っている。台部の一部が欠損。	台部外側にヘラ書き有り。「㋐三十九年七月□（取カ）造」。但し、台部の一部が欠損しており、その他は不明。
K14	第18図 写真図版85	製品型 Ⅰ	皿類A	丸形	無文 （龍文Ⅰ）	1区石垣背後 中層i	直径約9.5cmの円内中央に龍文Ⅰと思われる龍の文様の痕跡がわずかに残っている。しかし、その凹凸は浅く、全体的に文様を消すように周囲は丁寧にナデ付けられている。口縁部へは緩やかに立ち上がり、口縁端部には凹面あるいは周縁部はつかない。	裏面の周縁部は丁寧にナデ付けられている。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって丁寧に接合されており、わずかにその痕跡が残っている。	台部外側にヘラ書き有り。「㋐明治貳拾七年旧十二月新良」。龍文Ⅰの文様の摩滅により、文様全体を丁寧にナデ消して無文皿の型部に転用したと考えられる。
K15	第19図 写真図版86	製品型 Ⅰ	皿類C	丸形	無文	1区石垣背後 中層i	直径約6.7cmの円内に文様は彫刻されていない。口縁部へは比較的急な角度で立ち上がり、外反する口縁部へと至る。口縁端部には凹面あるいは周縁部はつかない。	裏面の中央部に布目痕跡が残るが、周縁部は丁寧にナデ付けられている。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえおよびヘラ状工具によって接合されており、その痕跡が残っている。台部の大半は欠損。	台部の大半が欠損しており、銘文等は不明。
K16	第19図 写真図版86	製品型 Ⅰ	皿類C	丸形	無文	1区石垣背後 上層i	直径約7.6cmの円内に文様は彫刻されていない。口縁部へは比較的急な角度で立ち上がり、外反する口縁部へと至る。口縁端部には凹面あるいは周縁部はつかない。	裏面の周縁部は丁寧にナデ付けられている。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって丁寧に接合されており、わずかにその痕跡が残っている。台部の約半部は欠損。	台部外側にヘラ書き有り。「　月造陶山るり仕上出ス木皿」。但し、台部の一部が欠損しており、その他は不明。
K17	第19図 写真図版23 上段 写真図版86	製品型 Ⅰ	皿類D	丸形	牡丹文Ⅰ	表層	直径6.6cmの区画された円内に文様を彫刻。中央に大きく牡丹の花が開き、その周囲には葉が配されている。文様面の周囲に幅2㎜の円が巡り、口縁部へは緩やかに立ち上がる。口縁端部に文様面と平行する幅9㎜の面をもち、その周囲を幅1.1cmの周縁部が巡る。	型部裏面および台部ともに文様面同様、丁寧にナデつけられている。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって丁寧に接合されており、わずかにその痕跡が残っている。台部中央に直径3㎜の穿孔が1ヶ所ある。	台部外側にヘラ書き、台部内側に墨書有り。「大正元年拾月㋐」（外側ヘラ書き）「大正元年」（内側墨書）。遺物№219の製品型。
K18	第19図 写真図版86	製品型 Ⅰ	皿類E	丸形	龍文Ⅱ	1区石垣背後 中層i	右上の約1/3が残存。文様区画はなく、直径約11.4cmの円内に文様を線刻。龍の顔は左側を向き、胴はυ字状に曲がるものと思われ、その周囲には雲が配されている。文様面から口縁部へは比較的急な角度で立ち上がり、角度を変えて緩やかに口縁部へと至る。口縁端部には凹面はなく、幅9㎜の周縁部が巡る。	裏面は全面的に丁寧にナデられている。台部は取り付けられていた痕跡が残っているが、すべて欠損している。	台部は欠損しており、銘文等は不明。
K19	第19図 写真図版86	製品型 Ⅴ	皿類E	丸形	網代文	1区石垣背後 上層0	口縁部の約1/6が残存し、残存する部分には網代文が彫刻されている。口縁端部に幅3㎜の凹面が巡り、全体の形状はK18と類似するものと考えられる。	台部の有無は不明であるが、幅2.4cmの周縁部は丁寧にナデつけられており、台部がつかないものと考えられる。	大半が欠損しており、銘文等は不明。

土型観察表(3)

No.	挿図No. 写真図版No.	種別 分類	器種	形状	文様構成	出土地点	型部表面の特徴	型部裏面と台部の特徴	備考
K20	第19図 写真図版87	製品型 Ⅰ	Ⅲ類F	丸形	無文	1区石垣背後 中層i	約半部が欠損しており、直径約8.5cmの円内に文様は彫刻されていない。型部は厚さ1.2cmの円板状を呈しており、口縁端部および周縁部はなく垂直に落ち込んでいる。	台部は型部とほぼ同一の径をもち、丁寧にナデ付けられている。台部は上方約1/3のみが残存。	台部外側にヘラ書き有り。「明治廿壱　戊子一月坂東　」。但し、台部の大半が欠損しており、その他は不明。
K21	第20図 写真図版23 中段 写真図版87	製品型 Ⅱ	Ⅲ類B	小判形	龍文Ⅲ	1区石垣背後 中層i	たて3.1cm、横5.1cmの楕円形内に文様を線刻。龍の顔は右下を向き、胴はυ字状に曲がり左下に尾が巡る。龍の爪は4本。文様面から口縁部へは緩やかに立ち上がる。口縁端部に幅2㎜の凹面をもつが、周縁部はなく垂直に落ち込んでいる。	台部はなく、型部表面から1.8cmの厚さをもつ。周縁部を残し、両側から中央にむけて削りこみ、中央に幅約2cmのたて方向の取っ手が付いている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。遺物No.244の製品型。
K22	第20図 写真図版23 中段 写真図版87	製品型 Ⅰ	Ⅲ類B	小判形	龍文Ⅲ	1区石垣背後 上層0	型部表面の文様構成および文様面から口縁部への立ち上がりはK21と同一。口縁端部に幅2㎜の凹面をもち、その周囲を幅9㎜の周縁部が巡る。	型部裏面および台部ともに表面同様、丁寧にナデつけられている。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって丁寧に接合されており、わずかにその痕跡が残っている。	台部外側にヘラ書き有り。「廿八年十一月改良」。遺物No.244の製品型。
K23	第20図 写真図版87	製品型 Ⅴ	Ⅲ類B	小判形	龍文Ⅳ	3区－Ⅴ 41層（iii）	右側の約半部が残存。型部表面の文様構成および文様面から口縁部への立ち上がりはK24と同一。口縁端部に幅3㎜の凹面をもち、その周囲を文様面とほぼ平行する幅1.1cmの周縁部が巡る。	台部はつかない。裏面は焼成をうけ、周縁部は赤く、中央部は灰色に変色している。	型部裏面中央部にヘラ書き有り。但し、上半部が欠損。「□七年　□造之」。遺物No.245の製品型。
K24	第20図 巻首図版6 写真図版88	製品型 Ⅰ	Ⅲ類B	小判形	龍文Ⅳ	1区石垣背後 上層0	たて4.6cm、横7.0cmの楕円形内に文様を線刻。龍の顔は左側を向き、胴はυ字状に曲がり尾は右上に、その周囲には雲が配されている。龍の爪は4本。文様面から口縁部へは緩やかに立ち上がる。口縁端部に幅3㎜の凹面をもち、その周囲を幅9㎜の周縁部が巡る。	裏面には布目痕跡が残るが、周縁部は丁寧にナデ消されている。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって丁寧に接合されており、わずかにその痕跡が残っている。台部の約1/4は欠損。	台部外側にヘラ書きおよび墨書有り。但し、台部の一部欠損。「㋐明治廿八年五月　田□佻」（ヘラ）墨書不明。遺物No.245の製品型。
K25	第20図 写真図版23 中段 写真図版88	製品型 Ⅰ	Ⅲ類B	小判形	龍文Ⅴ	表層	たて5.4cm、横8.4cmの楕円形内に文様を線刻。龍の顔は右下を向き、胴は曲がりくねり尾は左上に、その周囲に雲が配されている。龍の爪は4本。文様面から口縁部へは緩やかに立ち上がる。口縁端部に幅3㎜の凹面をもち、その周囲を幅1.1cmの周縁部が巡る。	裏面の周縁部および中央部に布目痕跡が残る。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって接合されており、その圧痕が明瞭に残っている。台部の約3/4は欠損。	台部外側上方に墨書有り。「チツ」か。但し、台部の大半は欠損しており、全容は不明。遺物No.243の製品型。
K26	第21図 写真図版88	製品型 Ⅲ	Ⅲ類B	小判形	牡丹文Ⅱ	1区石垣背後 d層	たて約4cm、横6.5cmの楕円形内に文様を彫刻。中央に大きく牡丹の花が開き、右下および左上にも花が咲き、その周囲には葉が配されている。文様面から口縁部へは緩やかに立ち上がり、直径2㎜の凹点が口縁部を飾る。口縁端部に幅3㎜の凹面をもち、その周囲を幅5㎜の周縁部が巡る。	台部はなく、型部裏面の中央にたて約2.4cm、横約3.3cmの長方形を呈するつまみが付いている。つまみは周縁部を残し、削り込んだものか、取り付けたものかは判断できない。裏面全体に丁寧なナデの痕跡がみられる。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。他の製品型の胎土とは異なり、より緻密である。型部の表面（文様面）と裏面が2つの薄い粘土板を貼り付けて製作している痕跡が残っている。
K27	第21図 写真図版88	製品型 Ⅰ	Ⅲ類B	小判形	無文	2区石垣背後 上層1	たて4cm、横6.4cmの楕円形内に文様は彫刻されていない。口縁部へは緩やかに立ち上がり、口縁端部に幅3㎜の凹面をもち、その周囲を幅1cmの周縁部が巡る。K23・24と同一規格と考えられる。	裏面の周縁部にわずかに布目痕跡が残る。型部と台部は台部内面は円板状に、外面には紐状粘土を指押さえによって丁寧に接合されており、わずかにその圧痕が残っている。台部は淡橙色を呈し、型部とは異なる胎土で成形されている。台部の大半は欠損。	台部外側にヘラ書き有り。「　㋐　」か。但し、台部の大半は欠損しており、全容は不明。
K28	第21図 写真図版89	製品型 Ⅱ	Ⅲ類A	小判形	幾何学文 Ⅰ	表層	たて6.8cm、横8.1cmの楕円形内に文様を線刻。中央の空白部から外側へ12のたて長五角形が均等に配されている。底面と立ち上がりには明瞭な稜線がみられ、口縁部へは緩やかに立ち上がる。口縁端部および周縁部はつかない。	台部はなく、型部表面から1.8cmの厚さをもつ。裏面の中央に幅約3.6cmの取っ手が付いている。	型部裏面にヘラ書き有り。「〇十七」か。

土型観察表(4)

No.	挿図No. 写真図版No.	種別 分類	器種	形状	文様構成	出土地点	型部表面の特徴	型部裏面と台部の特徴	備考
K29	第21図 写真図版24 上段 写真図版89	製品型 Ⅰ	Ⅲ類E	小判形	鯛文	1区石垣背後 中層ii	文様区画はなく、器内全面に文様を彫刻。斜め格子状に線刻された中央に鯛が横たわり、周囲に直径約5㎜の円形文が均等に配されている。小判形を呈する口縁部の外周は摘み上げられ、曲線を描く。口縁部へは緩やかに立ち上がり、口縁端部に幅3㎜の凹面をもち、その周囲を8㎜の周縁部が巡る。	裏面の周縁部に布目痕跡が残る。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって接合されており、わずかにその痕跡が残っている。台部の大半は欠損。	台部の大半が欠損しており、銘文等は不明。遺物No.246の製品型。
K30	第21図 写真図版89	製品型 Ⅰ	Ⅲ類B	小判形	草花文 Ⅰ	2区石垣背後 上層1	たて6.5cm、横9.5cmの中央の楕円形内に区画はなく、文様は彫刻されていない。口縁部へは緩やかに立ち上がり、上下に花、そのあいだに草と考えられる文様が均等に配されている。口縁部の外周は上下の花と思われる2カ所が外側にわずかに開き、口縁端部に幅2㎜の凹面をもち、その周囲を1.1cmの周縁部が巡る。	裏面の周縁部および中央部に布目痕跡が残る。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって接合されており、その痕跡が明瞭に残っている。台部は淡橙色を呈し、型部とは異なる胎土で成形されている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。遺物No.248の製品型。
K31	第21図 写真図版89	製品型 Ⅰ	Ⅲ類A	桃実形	葉文	表層	文様区画はなく、長径約8.7cm、短径約8.3cmの外形は桃の実をかたどっている。果底は半円形に陥入し、左上方に向けて曲線を描き、先端部は摘み上げられている。果底に大小2枚の葉が彫刻され、口縁部へは緩やかに立ち上がる。口縁端部に幅2㎜の面をもち、その周囲を幅1cmの周縁部が巡る。	裏面の周縁部にわずかに布目痕跡が残るが、丁寧にナデつけられている。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって接合されており、紐状粘土および台部にもその痕跡が明瞭に残っている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。遺物No.250の製品型。
K32	第22図 写真図版90	製品型 Ⅰ	Ⅲ類A	五弁花形	梅花文 Ⅰ-1	表層	文様区画はなく、一辺約5.4cmの五弁花形の器内全面に文様を彫刻。中心から一辺の中央に向けて弧を描き、5つの花弁に区画し、多数の雄しべが伸びる。丸みをもつ五角形状を呈する外形は花形をかたどり、文様面から口縁部へは緩やかに立ち上がる。口縁端部に幅2㎜の浅い凹面をもち、その周囲を6㎜の周縁部が巡る。	裏面の周縁部および中央部に布目痕跡が残る。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって接合しており、その痕跡が明瞭に残っている。台部は淡橙色を呈し、型部とは異なる胎土で成形されている。台部の約3/4は欠損。	台部の大半が欠損しており、銘文等は不明。遺物No.251の製品型。
K33	第22図 写真図版90	製品型 Ⅰ	Ⅲ類A	五弁花形	梅花文 Ⅰ-2	表層	文様区画はなく、一辺約5.8cmの五弁花形の器内全面に文様を彫刻。中心から一辺の中央に向けて弧を描き、5つの花弁に区画し、多数の雄しべが伸びる。丸みをもつ五角形状を呈する外周は花形をかたどり、文様面から口縁部へは緩やかに立ち上がる。口縁端部に幅2㎜の浅い凹面をもち、その周囲を9㎜の周縁部が巡る。	裏面の周縁部にわずかに布目痕跡が残るが、丁寧にナデつけられている。型部と台部は台部内面は一部に、外面には紐状粘土を指押さえによって接合されており、その痕跡が明瞭に残っている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K34	第22図 写真図版89	製品型 Ⅰ	Ⅲ類A	五弁花形	梅花文 Ⅰ-3	表層	文様区画はなく、一辺約6.4cmの五弁花形の器内全面に文様を彫刻。中心から一辺の中央に向けて弧を描き、5つの花弁に区画し、多数の雄しべが伸びる。丸みをもつ五角形状を呈する外周は花形をかたどり、文様面から口縁部へは緩やかに立ち上がる。口縁端部に幅2㎜の浅い凹面をもち、その周囲を9㎜の周縁部が巡る。	裏面の周縁部に布目痕跡が残る。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって接合されており、その痕跡が明瞭に残っている。台部の大半は欠損。	台部の大半は欠損しており、銘文等は不明。
K35	第22図 写真図版90	製品型 Ⅰ	Ⅲ類A	五弁花形	無文	3区-Ⅲ 黒褐色土1	一辺約6.8cmの五角形状を呈する外形は桜が咲いた花びらを抽象的にかたどり、中央部の直径約6cmの円内に区画はなく、文様も彫刻されていない。口縁部へは緩やかに立ち上がり、口縁端部に凹面はなく、幅1.1cmの周縁部が巡る。	裏面の周縁部にわずかに布目痕跡が残るが、全面的にナデ消されている。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえおよびナデによって接合されており、その痕跡が残っている。台部の約1/3は欠損。	台部外側にヘラ書き有り。「三拾六年十一月　」。但し、台部の一部が欠損しており、その他は不明。

土型観察表(5)

No.	挿図No. 写真図版No.	種別 分類	器種	形状	文様構成	出土地点	型部表面の特徴	型部裏面と台部の特徴	備考
K36	第22図 写真図版90	製品型 V	Ⅲ類A	楕円形	文字文Ⅱ	1区石垣背後 中層 i	左下方の一部のみが残存するため、型部の正確な形状は不明。たて方向に鋭利な切っ先で引いた細い線がみられるが、文様を区画するものとは考えられない。3行5文字が残るが、判読できる文字は少ない。「 □ □甘 □□」。口縁部へは緩やかに立ち上がり、口縁端部には幅1.5㎜の浅い凹面をもち、その周囲を幅3㎜の周縁部が巡る。	裏面に幅約3㎜から1㎝の斜め方向に削った工具状の痕跡が残っている。型部の裏面の状況から、台部が取り付けられていた痕跡はみられない。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K37	第22図 写真図版90	製品型 I	Ⅲ類A	楕円形	文字文Ⅲ	1区石垣背後 上層 ii	右上方の一部のみが残存するため、型部の正確な形状は不明。中央に横方向に長い楕円形状に区画する幅2.5㎜の凹面が巡り、文様面は上下2つにある。上方部は3行5文字が、下方部は1文字の一部がわずかに残る。上方部「必多 □□ □」。下方部「 □ 」。口縁部へは緩やかに立ち上がり、口縁端部には幅2㎜の浅い凹面が二重に巡る。	裏面の周縁部の一部に布目痕跡がわずかに残る。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって接合されており、その痕跡が明瞭に残っている。台部の一部のみ残存。	台部の大半が欠損しており、銘文等は不明。
K38	第23図 写真図版91	製品型 I	Ⅲ類B	隅入 正方形	龍文Ⅵ	1区石垣背後 上層 i	四隅が弧（1/4円）状に切られ、たて横4.2㎝の四辺がわずかに外反する正方形内に文様を線刻。龍の顔は右上を向き、胴は ι 字状に曲がり尾は右横に、左側のみに雲が配されている。龍の爪は4本。文様面から口縁部へは緩やかに立ち上がる。文様面同様、四隅は弧（1/4円）状に切られ、四辺はわずかに外反する。口縁端部に幅約1.5㎜の凹面をもち、その周囲を幅8㎜の周縁部が巡る。	裏面の周縁部にわずかに布目痕跡が残るが、部分的に丁寧にナデ消されている。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって比較的雑に接合されている。台部の約半部は欠損。	台部外側にヘラ書き有り。「□□□□ 」。但し、台部の欠損および文字部分の剥離により、判読はできない。
K39	第23図 写真図版23 下段 写真図版91	製品型 I	Ⅲ類B	隅入 正方形	龍文Ⅶ	表層	四隅が弧（1/4円）状に切られ、たて横5.8㎝の正方形内に文様を線刻。龍の顔は右上を向き、胴は ν 字状に曲がり尾は左横に、その周囲には雲が配されている。龍の爪は4本。文様面から口縁部へは緩やかに立ち上がる。文様面同様、四隅は弧（1/4円）状に切られ、口縁端部に幅3㎜の凹面をもち、その周囲を幅1.0㎝の周縁部が巡る。	裏面の周縁部に布目痕跡が残るが、部分的にナデ消されており、四隅には指押さえと思われる痕跡が残る。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって接合されており、その痕跡が残っている。	台部外側にヘラ書き有り。「44 o 」。遺物№260の製品型。
K40	第23図 写真図版91	製品型 I	Ⅲ類B	隅入 正方形	龍文Ⅷ	1区石垣背後 上層 0	四隅が弧（1/4円）状に切られ、たて横6.5㎝の正方形内に文様を線刻。龍の顔は正面を向き、胴は ι 字状に曲がり尾は右横に、その周囲には雲が配されている。龍の爪は4本。文様面から口縁部へは緩やかに立ち上がる。文様面同様、四隅は弧（1/4円）状に切られ、口縁端部に幅3㎜の凹面をもち、その周囲を幅1.1㎝の周縁部が巡る。	裏面の周縁部に布目痕跡が残り、一辺に3ヶ所の指押さえと思われる痕跡が明瞭に残る。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって接合されており、その圧痕が残っている。台部は淡橙色を呈し、型部とは違う胎土で成形されている。	台部外側にヘラ書き有り。「元二年十月」。遺物№261の製品型。
K41	第23図 写真図版91	製品型 I	Ⅲ類B	隅入 正方形	無文	1区石垣背後 上層 i	たて横6.2㎝四方の隅丸正方形内には区画はなく、文様も彫刻されていない。四隅が弧（1/4円）状に切られた口縁部へは比較的急な角度で立ち上がり、口縁端部に幅2㎜の凹面をもち、その周囲を幅8㎜の周縁部が巡る。	裏面には布目痕跡が残るが、周縁部は丁寧にナデ消されている。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって接合されており、その痕跡が残っている。台部の下半部は欠損。	台部の大半が欠損しており、銘文等は不明。
K42	第23図 写真図版23 下段 写真図版92	製品型 I	Ⅲ類B	隅丸 正方形	文字文Ⅳ	表層	文様区画はなく、たて横16.5㎝四方の隅丸正方形の器内に文字を彫刻。左上方部および右下口縁部が欠損するが、4行に11文字が配されている。右側から「□□ 問春最 □生□ □富発」。口縁部へは緩やかに立ち上がり、口縁端部に幅1.1㎝の面をもち、その周囲を幅2.5㎝の周縁部が巡る。	裏面の周縁部および中央部にわずかに布目痕跡が残る。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって接合されており、その痕跡が明瞭に残っている。台部の約1/3は欠損。	台部外側にヘラ書き有り。但し、台部の一部欠損。「明□（治か） 年六月」。遺物№263の製品型。

土型観察表(6)

No.	挿図No. 写真図版No.	種別 分類	器種	形状	文様構成	出土地点	型部表面の特徴	型部裏面と台部の特徴	備考
K43	第24図 写真図版92	製品型 Ⅱ	Ⅲ類A	隅丸 正方形	無文	1区石垣背後 h層	たて横6.6cm四方の正方形内には区画はなく、文様も彫刻されていない。四隅がわずかに隅丸状を呈する口縁部へは比較的急な角度で立ち上がり、口縁端部および周縁部はない。	台部はなく、型部表面から2.8cmの厚さをもつ。裏面の中央に幅約1.8cmの斜め方向の取っ手が付いている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K44	第24図 写真図版24 上段 写真図版92	製品型 Ⅰ	Ⅲ類A	隅切菱形	幾何学文 Ⅱ	2区石垣背後 中層	約1/3が残存する。文様区画はなく、器内全面に文様を彫刻。口縁部へは比較的急な角度で立ち上がり、口縁端部に幅約4mmの面をもち、その周囲を幅1.1cmの周縁部が巡る。隅切された菱形の器内は凹線で区画され、幾何学的な文様が精巧に彫刻されている。	裏面の周縁部に布目痕跡が残る。台部はみられないが、台部外面に紐状粘土を指押さえによって接合していた痕跡が明瞭に残っている。台部はすべてが欠損。	台部が欠損しており、銘文等は不明。遺物No.269の製品型。
K45	第24図 写真図版92	製品型 Ⅰ	Ⅲ類A	隅入 六角形	無文	1区石垣背後 中層i	一辺3.4cmの正六角形内に文様は彫刻されていない。底面と立ち上がりには明瞭な稜線がみられ、角部がわずかに切られた口縁部へは緩やかに立ち上がる。口縁端部に幅2.5mmの面をもち、その周囲を幅7mmの周縁部が巡る。	裏面の中央部にわずかに布目痕跡が残るが、周縁部は丁寧にナデ付けられている。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって接合されており、その痕跡が明瞭に残っている。台部の約1/3は欠損。	台部の一部が欠損しているが、ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K46	第24図 写真図版24 上段 写真図版93	製品型 Ⅰ	Ⅲ類A	襞状菱形	薔薇文 Ⅱ-1	表層	文様区画はなく、たて7.7cm、横8.9cmの菱形の器内に文様を彫刻。右下から2本の枝の伸び、中央左寄りに一輪の薔薇の花が開き、枝には葉が配されている。文様面から比較的急な角度で口縁部へ立ち上がる。口縁端部に幅2mmの凹面をもち、その周囲を幅9mmの周縁部が巡る。菱形の一辺は中央に内湾し、8つの襞に区画される。	裏面の周縁部に布目痕跡が残る。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって接合されており、その痕跡が残っている。台部は型部の大きさに対して比較的高い。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。遺物No.270の製品型。
K47	第24図 写真図版24 上段 写真図版93	製品型 Ⅰ	Ⅲ類A	襞状菱形	薔薇文 Ⅱ-2	表層	文様区画はなく、たて8.4cm、横10.2cmの菱形の器内に文様を彫刻。中央下から1本の枝の伸び、中央右寄りに一輪の薔薇の花が開き、枝には葉が配されている。文様面から比較的急な角度で口縁部へ立ち上がる。口縁端部に幅2.5mmの凹面をもち、その周囲を1cmの周縁部が巡る。菱形の一辺は中央に内湾し、8つの襞に区画される。	裏面の周縁部にわずかに布目痕跡が残るが、部分的に丁寧にナデ消されている。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって比較的雑に接合されている。台部は淡橙色を呈し、型部とは異なる胎土で成形されている。台部の下半部は欠損。	台部の大半は欠損しており、銘文等は不明。遺物No.272の製品型。
K48	第24図 写真図版93	製品型 Ⅰ	Ⅲ類B	波状菱形	曲線文	1区石垣背後 上層0	たて約8.6cm、横約12.4cmの中央の菱形内に区画はなく、文様は彫刻されていない。口縁部へは比較的急な角度で立ち上がり、曲線状の凹凸面が配されている。口縁端部は細かな波（襞）状に分かれ、幅3mmの凹面をもち、その周囲を幅約1.1cmの周縁部が巡る。口縁部の約3/4は欠損。	裏面には布目痕跡が残るが、部分的にナデ消されている。型部と台部は台部の内外面に紐状粘土を指押さえおよびヘラ状工具によって接合されており、わずかにその痕跡が残っている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K49	第25図 写真図版93	製品型 Ⅰ	Ⅲ類B	襞状丸形	龍文Ⅸ	1区石垣背後 中層i	直径6.6cmの凹んだ円内に文様を線刻。龍の顔は右側を向き、胴はι字状に曲がり尾は右横に、その周囲には雲が配されている。龍の爪は5本。文様面から口縁部へは緩やかに立ち上がり、口縁端部には幅3mmの面をもち、その周囲を幅1cmの周縁部が巡る。外周は6辺に分割され、さらに1辺は4つに区画されており、24の襞が巡る。	裏面の周縁部にわずかに布目痕跡が残る。型部と台部は台部内面に塊状の、外面に紐状の粘土を指押さえによって丁寧に接合されており、その圧痕が残っている。台部は上方のみが残存しているが、淡橙色を呈し、型部とは違う胎土で成形されている。	台部は欠損しており、銘文等は不明。遺物No.275の製品型。

土型観察表(7)

No.	挿図No. 写真図版No.	種別 分類	器種	形状	文様構成	出土地点	型部表面の特徴	型部裏面と台部の特徴	備考
K50	第25図 写真図版24 上段 写真図版93	製品型 Ⅰ	Ⅲ類B	襞状丸形	龍文X	1区石垣背後 中層i	直径6.6cmの区画された円内に陰刻文様を彫刻。龍の顔は正面を向き、胴はν字状に曲がり尾は右横に、その周囲には雲が配されている。龍の爪は5本。龍の文様面から口縁部へは緩やかに立ち上がり、口縁端部には幅3mmの凹面をもち、その周囲を幅1.1cmの周縁部が巡る。龍の文様面と口縁部のあいだにも6種の花と草を配した文様が陰刻されている。外周の形状はK49と同一。	裏面の周縁部および中央部に布目痕跡が残る。型部と台部は台部内面は一部に、外面には紐状粘土を指押さえによって接合されており、その圧痕が明瞭に残っている。台部の約半部は欠損。	台部内側および型部裏面中央に墨書の痕跡有り。但し、台部の約半部が欠損し、判読はできない。遺物No.276の製品型。
K51	第25図 巻首図版7 写真図版94	製品型 Ⅰ	Ⅲ類A	隅入 多角形	幾何学文 Ⅲ-1	2区石垣背後 上層1	器内全面に文様を彫刻。たて横3.5cmの隅切正方形内に花弁文様を抽象的に描き、幅2mmの区画を挟み、比較的急な角度で立ち上がる口縁部までの範囲にも12区画の文様を配置。四隅は抽象化した木葉文、その間は左右対称に三角形と菱形を充填した細密な文様を配している。	裏面の周縁部および中央部に布目痕跡が残る。型部と台部は台部内面は一部に、外面には紐状粘土を指押さえによって接合されており、その痕跡が明瞭に残っている。	台部外側にヘラ書き有り。「四一九造㋮陶山」。
K52	第25図 写真図版94	製品型 Ⅰ	Ⅲ類A	隅入 多角形	幾何学文 Ⅲ-2	表層	器内全面に文様を彫刻。たて横4.1cmの隅切正方形内に花弁文様を抽象的に描き、幅2.5mmの区画を挟み、比較的急な角度で立ち上がる口縁部までの範囲にも12区画の文様を配置。四隅は抽象化した木葉文、その間は左右対称に三角形と菱形を充填した細密な文様を配している。中央および四隅の文様構成はK51と同一。	裏面の周縁部に布目痕跡が残るが部分的に丁寧にナデ付けけられている。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえおよびヘラ状工具によって接合されており、その痕跡が明瞭に残っている。台部のほぼ大半は欠損。	台部の大半が欠損しており、銘文等は不明。
K53	第25図 巻首図版7 写真図版94	製品型 Ⅰ	Ⅲ類A	隅入 多角形	幾何学文 Ⅲ-3	表層	器内全面に文様を彫刻。たて横4.9cmの隅切正方形内に花弁文様を抽象的に描き、幅3mmの区画を挟み、比較的急な角度で立ち上がる口縁部までの範囲にも12区画の文様を配置。四隅は抽象化した木葉文、その間は左右対称に斜め格子文と麻の葉文を配している。中央および四隅の文様構成はK51・K52と同一。	裏面の周縁部および中央部に布目痕跡が残る。型部と台部は台部内面は一部に、外面には紐状粘土を指押さえによって接合されており、その痕跡が明瞭に残っている。	台部外側にヘラ書き有り。「四捨壱年捨壱月造㋮スヤマ」。遺物No.274の製品型。
K54	第25図 写真図版94	製品型 Ⅰ	Ⅲ類A	木の葉形	葉文	表層	文様区画はなく、長辺10cm以上、短辺約9.5cmの木の葉をかたどったと考えられる範囲内に文様を彫刻。葉元の一部および先端部が欠損。葉元から葉脈が伸び、中央部に直径1.8cmの円形の凹みをもつ。口縁部へは緩やかに立ち上がり、口縁端部に幅2mmの浅い凹面をもち、その周囲を幅1.1cmの周縁部が巡る。	裏面の周縁部および中央部に布目痕跡が残る。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって接合されており、その痕跡が明瞭に残っている。台部の大半は欠損。	台部の大半が欠損しており、銘文等は不明。遺物No.270の製品型。
K55	第25図 写真図版94	製品型 Ⅰ	Ⅲ類A	千鳥形	千鳥文	1区石垣背後 o層	文様区画はなく、文様も彫刻されていない。但し、外周は右上方に摘み上げられたくちばし、直径6mmの凹みを目と見立て、左側は羽を表現し抽象的な千鳥をかたどっている。口縁部へは緩やかに立ち上がり、口縁端部に幅2.5mmの浅い凹面をもち、その周囲を幅1.1cmの周縁部が巡る。	裏面の周縁部および中央部に布目痕跡が残る。型部と台部は台部の内外面に紐状粘土を指押さえによって接合されており、わずかにその痕跡が残っている。台部の約2/3は欠損。	台部外側にヘラ書き有り。「　□（治カ）□五年六月造　」。但し、台部の約2/3が欠損しており、その他は不明。
K56	第26図 写真図版24 中段 写真図版95	製品型 Ⅳ	蓋類A	丸形	文字文	3区下層	文様区画はなく、直径4.9cmの器内に文様を彫刻。中央に直径5.5mmの凹面（つまみの接合部分）をもち、周囲には「福壽」の文字をあわせて6文字配されている。幅8mmの周縁部には2箇所の台形状の切り込みがみられる。	蓋の形状に沿った型部に輪状の高台が取り付けられている。型部と高台部は高台部外面を指押さえによって接合されており、その痕跡が明瞭に残っている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。遺物No.429の製品型。

土型観察表(8)

No.	挿図No. 写真図版No.	種別 分類	器種	形状	文様構成	出土地点	型部表面の特徴	型部裏面と台部の特徴	備考
K57	第26図 写真図版95	製品型 Ⅲ	蓋類A	十六弁花形	菊花文	2区石垣背後上層2	約2/3が欠損しているが、直径約6.5cmの器内は凹線によって区画されている。中央に直径約1.8cmの凹面（つまみの接合部分）をもち、周囲は16弁の菊花文をかたどっている。凹面内は黄橙色の釉薬の痕跡が残っている。	蓋の形状に沿った型部に直径約2.4cmのつまみが付けられている。つまみの中央および型部裏面には「千鳥」小陰刻印がみられる。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K58	第26図 写真図版24 中段 写真図版95	製品型 Ⅳ	蓋類A	丸形	蓮華文	2区石垣背後中層1	文様区画はなく、直径8.3cmの器内に文様を彫刻。中央に直径1.1cmの凹面（つまみの接合部分）をもち、周囲を8弁の蓮華文を配している。口縁部に幅1.5mmの凹面と幅4.5mmの面をもち、その周囲を幅1.1cmの周縁部が巡る。	蓋の形状に沿った型部に輪状の高台が取り付けられている。型部と高台部の接合の痕跡はみられない。	高台内にヘラ書き有り。「二」。
K59	第26図 写真図版24 中段 写真図版95	製品型 Ⅳ	蓋類A	丸形	蓮華文	表層	文様区画はなく、直径9.5cmの器内に文様を彫刻。中央に直径1.1cmの凹面（つまみの接合部分）をもち、周囲を8弁の蓮華文を配している。口縁部に幅2mmの凹面と幅5.5mmの面をもち、その周囲を幅1.2cmの周縁部が巡る。K58・K60と文様構成は同一。	蓋の形状に沿った型部に輪状の高台が取り付けられている。型部と高台部の接合の痕跡はみられない。	高台内にヘラ書き有り。「二五」。
K60	第26図 写真図版24 中段 写真図版96	製品型 Ⅳ	蓋類A	丸形	蓮華文	3区上層	口縁部の一部は欠損するが、文様区画はなく、直径14.6cmの器内に文様を彫刻。中央に直径1.2cmの凹面（つまみの接合部分）をもち、周囲を8弁の蓮華文を配している。口縁部に幅2.5mmの凹面と幅7.5mmの面をもち、その周囲を幅1.3cmの周縁部が巡る。K58・K59と文様構成は同一。	蓋の形状に沿った型部に輪状の高台が取り付けられている。型部と高台部の接合の痕跡はみられない。	高台内にヘラ書き有り。「四」。
K61	第26図 写真図版24 中段 写真図版96	製品型 Ⅴ	蓋類B	四弁花形	柿の葉文 Ⅰ	1区石垣背後上層i	ほぼ平らな文様面は柿の葉をかたどっている。中央に直径9mmの凹面（つまみの接合部分）をもち、周囲は凹線および凸線で4枚の葉を表現している。	全体の形状は円板状を呈しており、台部あるいは取っ手などは付かない。裏面全体に指押さえの痕跡や指紋の痕跡が残っている。	型部裏面にヘラ書き有り。「三十年八月」。遺物No.473の製品型。
K62	第26図 写真図版24 中段 写真図版96	製品型 Ⅴ	蓋類B	四弁花形	柿の葉文 Ⅱ	残土一括	約半部が残存しており、ほぼ平らな文様面はK61と同様、柿の葉をかたどっている。中央に直径8mmの凹面（つまみの接合部分）をもち、周囲は凹線および凸線で4枚の葉を表現し、1箇所に抉りを入れている。	全体の形状は円板状を呈しており、台部あるいは取っ手などは付かない。裏面全体に布目および指押さえの痕跡が残っている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。遺物No.474の製品型。
K63	第26図 写真図版96	製品型 Ⅴ	蓋類C	丸形	六葉文	表層	完存しており、直径約8.5cmの円内に文様を彫刻。周縁部から文様面は比較的深く、2箇所に切り込みがみられる。文様面の中心には直径1.3cmの円形の凸面を六角形内に配し、その周囲にも同様に6つの円形凸面を並べ、梅の花を表現しているものと考えられる。円形の凸面を除く凹面には細い線で雄しべを描いている。	裏面は全体的に丁寧にナデ付けられているが、指押さえの痕跡が部分的に残っている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K64	第27図 写真図版24 下段 写真図版97	製品型 Ⅰ	蓮華類A		龍文XⅠ	1区石垣背後上層0	たて2.1cm、横3.3cmの楕円形内に文様を線刻。龍の顔は右側を向き、胴はυ字状に曲がり、上方に尾が巡る。龍の爪は3本。受部（文様面）から周囲および取っ手部（柄）へは比較的急な角度で立ち上がる。	裏面には布目痕跡が明瞭に残る。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって丁寧に接合されており、わずかにその痕跡が残る。台部の大半は欠損。台部は淡橙色を呈し、型部とは異なる胎土で成形されている。	台部の大半は欠損しており、銘文等は不明。
K65	第27図 写真図版24 下段 写真図版97	製品型 Ⅰ	蓮華類A		龍文XⅡ	コウカシ窯解体中	たて2.8cm、横4.3cmの楕円形内に文様を線刻。龍の顔は右側を向き、胴はυ字状に曲がり尾は上方に、その周囲には雲が配されている。龍の爪は3本。受部（文様面）から周囲および取っ手部（柄）へは比較的急な角度で立ち上がる。	裏面の周縁部および中央部に布目痕跡がわずかに残る。型部と台部は台部外面に紐状粘土を指押さえによって接合されており、その痕跡が残っている。台部は受部と取っ手部側の2箇所に取り付けられ、取っ手部側では粘土塊を貼り付けている。	ヘラ書きおよび墨書はなし。遺物No.530の製品型。

土型観察表(9)

No.	挿図No. 写真図版No.	種別 分類	器種	形状	文様構成	出土地点	型部表面の特徴	型部裏面と台部の特徴	備考
K66	第27図 写真図版24 下段 写真図版97	製品型 Ⅰ	蓮華類B		龍文ⅩⅢ	1区石垣背後 上層 iii	たて4.3cm、横5.6cmの楕円形内に文様を線刻。龍の顔は右側を向き、胴はυ字状に曲がり尾は上方に、その周囲には雲が配されている。龍の爪は3本。受部（文様面）の大半は残存するが、取っ手部（柄）は欠損している。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられている。台部は取り付けられていた痕跡が残っているが、すべて欠損している。	台部は欠損しており、銘文等は不明。
K67	第27図 写真図版97	製品型 Ⅰ	蓮華類A		無文	1区石垣背後 上層 0	たて1.9cm、横3.1cmの楕円形内に文様は彫刻されていない。受部の大半は残存するが、取っ手部は欠損している。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられている。型部と台部は台部内外面に紐状粘土を指押さえによって接合されており、その痕跡が残っている。台部の3/4は欠損。	台部の大半は欠損しており、銘文等は不明。
K68	第27図 写真図版24 下段 写真図版97	製品型 Ⅰ	蓮華類A		無文	表層	たて約2.8cm、横約5.2cmの楕円形内に文様は彫刻されていない。受部から周囲へは緩やかに立ち上がるが、取っ手部は欠損している。	裏面の周縁部に布目痕跡がわずかに残る。型部と台部は台部外面に紐状粘土を指押さえによって接合されており、その痕跡が明瞭に残っている。	ヘラ書きおよび墨書はなし。
K69	第27図 写真図版24 下段 写真図版97	製品型 Ⅰ	蓮華類A		無文	表層	たて約3.5cm、横約6.5cmの楕円形内に文様は彫刻されていない。受部から周囲へは比較的急な角度で立ち上がるが、取っ手部は欠損している。	裏面の周縁部および中央部に布目痕跡が明瞭に残る。型部と台部は台部外面に紐状粘土を指押さえによって接合されており、その痕跡が残っている。	ヘラ書きおよび墨書はなし。遺物No.531の製品型。
K70	第28図 写真図版98	製品型 Ⅲ	蓮華類A		無文	表層	たて3.2cm、横4.8cmの楕円形内に文様は彫刻されていない。受部から周囲および取っ手部へは急な角度で立ち上がるが、取っ手部先端は欠損している。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられている。台部はなく、たて約2.1cm、横約3.3cmの楕円形を呈するつまみが付いている。つまみは外側に粘土を指押さえによって接合されており、その痕跡が明瞭に残っている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K71	第28図 写真図版24 下段 写真図版98	製品型 Ⅰ	蓮華類B		無文	1区石垣背後 上層 i	たて約4.9cm、横約6.2cmのほぼ円形内に文様は彫刻されていない。受部から周囲および取っ手部へは比較的急な角度で立ち上がる。受部の大きさに比べ、取っ手部は短い。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられている。台部は取り付けられていた痕跡が残っているが、すべて欠損している。取っ手側にも台として粘土塊を貼付けた痕跡が残っている。	台部は欠損しており、銘文等は不明。
K72	第28図 写真図版98	製品型 Ⅴ	蓮華類A		無文	表層	たて約2.9cm、横約6.7cmの楕円形内に文様は彫刻されていない。受部から周囲および取っ手部へは急な角度で立ち上がる。受部および取っ手部の先端がともに一部欠損している。	裏面は全面的にヘラ状の工具等によって丁寧にナデ付けられている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。他の蓮華型（K64～K71）とは180°異なり、K89～K91と同様の状態であるため、元型の可能性が考えられる。
K73	第28図 写真図版98	製品型 Ⅴ	置物類		鳥文Ⅰ	表層	左上の約半部が残存し、鶏をかたどる。鶏の顔は右側を向き、目・嘴・鶏冠および羽根が彫刻されている。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられているが、布目痕跡が部分的に残っている。	大半は欠損しており、銘文等は不明。写真図版71下段の置物型。片側の型のみ出土。
K74	第28図 写真図版98	製品型 Ⅴ	置物類		鳥文Ⅱ	3区－Ⅲ 黒褐色1	左上方部の一部のみが残存するため、型部の全体の形状および大きさ等は不明。残存する部分には左側を向いた雀の顔が彫刻されている。	裏面は丁寧にナデ付けられているが、全面的に布目痕跡が残っている。	大半は欠損しており、銘文等は不明。写真図版71中段の容器（調味料入）型。片側の型のみ出土。
K75	第28図 写真図版98	製品型 Ⅴ	置物類		鳥文Ⅲ	1区石垣背後 上層 ii	上辺約9cm、下辺約3.5cm、高さ約4.5cmの逆台形状を呈する中に雀をかたどる。雀の顔は右側を向き、目・嘴・羽根が彫刻されている。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられているが、布目痕跡が部分的に残っている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。写真図版71下段の置物型。片側の型のみ出土。
K76	第28図 写真図版98	製品型 Ⅴ	置物類		鳥文Ⅳ	1区石垣背後 a層	左側の一部が残存し、雀をかたどるが、型部の全体の形状および大きさ等は不明。雀の顔は右側を向き、目・嘴・羽根が彫刻されている。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられているが、指押さえの痕跡が残っている。	大半は欠損しているが、上方部に墨書の痕跡が残っている。写真図版71中段の容器（調味料入）型。片側の型のみ出土。
K77	第28図 写真図版99	製品型 Ⅴ	置物類		鳥文Ⅴ	1区石垣背後 上層 iii	左上方部の一部が欠損するが、たて約7cm、横8.5cm以上の四角形状を呈する中に鳥（不明）をかたどる。頭の部分が欠損するが、羽根の部分は丁寧に彫刻されている。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられているが、指押さえの痕跡が残っている。	一部が欠損しているが、ヘラ書きあるいは墨書はなし。片側の型のみ出土。

土型観察表(10)

No.	挿図No. 写真図版No.	種別 分類	器種	形状	文様構成	出土地点	型部表面の特徴	型部裏面と台部の特徴	備考
K78	第29図 写真図版99	製品型 V	置物類		亀甲文	1区石垣背後 上層 iii	右上方部の一部が欠損するが、たて約5㎝、横約8㎝の長方形状を呈する中に亀をかたどる。甲羅部分は細かく、尻尾および4本の足は彫刻されているが、頭部の痕跡はない。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられているが、指押さえの痕跡が残っている。	一部が欠損しているが、ヘラ書きあるいは墨書はなし。写真図版71上段の花留型。
K79	第29図 写真図版99	元型Ⅳ	Ⅲ類	丸形	蝙蝠文	1区石垣背後 上層 iii	口縁部の約1/6が残存し、残存する部分には蝙蝠と雲の他に、円を多用した幾何学的な文様が彫刻されている。口縁部に幅1㎜の凹線をもち、その周囲を幅約1.2㎝の周縁部が巡り、ここにも幾何学的な文様が配されている。	Ⅲの形状に沿った型部裏面に輪状の高台が取り付けられている。型部と高台部の接合の痕跡はみられず、裏面は全面的に丁寧にナデ付けられている。	大半が欠損しており、銘文等は不明。元型に分類しているが、製品型（Ⅲ類）とも考えられる。
K80	第29図 写真図版99	元型Ⅳ	Ⅲ類	小判形	龍文(Ⅳ)	表層	口縁部は一部のみが残存するが、文様構成および全体の形状などからK23・K24の元型の可能性が考えられる。欠損している断面には、型部の表面（文様面）と裏面の2つの粘土板を貼り付けて製作している痕跡が明瞭に残っている。	裏面の周縁部および中央部に布目痕跡が残っている。型部裏面の輪状の高台は内外面を指押さえによって接合されており、その痕跡が明瞭に残っている。	一部が欠損しているが、ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K81	第29図 巻首図版6 写真図版99	元型Ⅳ	Ⅲ類	小判形	龍文(Ⅳ)	1区石垣背後 g層	右下の一部が欠損しているが、文様構成および全体の形状はK80と似通っている。但し、龍の下腹の鱗部分などわずかな違いがみられる。欠損している断面には、表面（文様面）と裏面の2つの粘土板を貼り付けている痕跡が残っている。	裏面の周縁部および中央部に布目痕跡が残っている。型部裏面の輪状の高台は内外面を指押さえによって接合しており、その痕跡が明瞭に残っている。	一部が欠損しているが、ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K82	第29図 巻首図版6 写真図版25 中段 写真図版100	元型Ⅳ	Ⅲ類	小判形	龍文(Ⅳ)	2区石垣背後 上層1	ほぼ完存しており、文様構成および全体の形状はK80・K81と似通っている。但し、龍の下腹の鱗部分はK80と同様な反面、左下の雲の形状はK80・K81とは明らかに異なっている。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられている。型部裏面の輪状の高台は内外面を指押さえによって接合されており、その痕跡が明瞭に残っている。	高台内にヘラ書き有り。「明治三八守岡作」。
K83	第30図 写真図版25 中段 写真図版100	元型Ⅳ	Ⅲ類	隅入 正方形	龍文(Ⅶ)	2区石垣背後 上層1	右辺が欠損しているが、文様構成および全体の形状はK39の元型の可能性が考えられる。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられている。型部裏面の方形の高台は内外面を指押さえによって接合されており、その痕跡が残っている。	一部が欠損しているが、ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K84	第30図 写真図版100	元型Ⅳ	Ⅲ類	隅丸 正方形	無文	3区下層	口縁部の全周は欠損しており、全体の大きさは不明。約7.5㎝四方の底面には文様は彫刻されていない。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられている。型部裏面の方形の高台は内外面を指押さえによって接合されており、その痕跡が残っている。	高台内にヘラ書き有り。「□□（明治か）四十四ノ　一月角小　岡嶌作」。
K85	第30図 巻首図版7 写真図版25 中段 写真図版101	元型Ⅳ	Ⅲ類	隅入 多角形	幾何学文 (Ⅲ－2)	2区石垣背後 上層1	完存しており、文様構成および全体の形状などからK52の元型の可能性が考えられる。	裏面の中央部に布目痕跡が残るが、全面的に丁寧にナデ付けられている。型部裏面の方形の高台は接合の痕跡がみられず、高台の外周には2～3条の隅丸方形状のヘラの痕跡が有る。	高台内にヘラ書き有り。「4 4□（ハか）　田中　ユ」。
K86	第31図 写真図版101	元型Ⅳ	Ⅲ類	隅入 多角形	幾何学文 (Ⅲ－2)	2区石垣背後 上層1	完存しており、文様構成および全体の形状などからK84と同様、K52の元型の可能性が考えられる。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられている。型部裏面の方形の高台は内外面を指押さえによって接合されており、その痕跡が明瞭に残っている。中央部に横断する亀裂が有る。	高台内にヘラ書き有り。「中」。K85他の元型に比べ、型部の器壁は厚い。
K87	第31図 巻首図版7 写真図版25 中段 写真図版102	元型Ⅳ	Ⅲ類	隅入 多角形	幾何学文 (Ⅲ－3)	2区石垣背後 上層1	口縁部の一部が欠損しているが、文様構成および全体の形状などからK53の元型の可能性が考えられる。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられている。型部裏面の方形の高台は内面を指押さえによって接合されており、その痕跡が残っている。高台の外周には4～6条の八角形状のヘラの痕跡が有る。	高台内にヘラ書き有り。「明治卍年八月　ユ田中」。
K88	第31図 写真図版102	元型Ⅳ	Ⅲ類	隅入 多角形	幾何学文 (Ⅲ－3)	2区石垣背後 上層1	中央部および口縁部の一部のみが残存するが、文様構成および全体の形状などからK87と同様、K53の元型の可能性が考えられる。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられている。型部裏面の方形の高台は外面を指押さえによって接合されており、その痕跡が残っている。	高台内にヘラ書き有り。「明治兀九　年五月　田中□□（作之か）」。

土型観察表(11)

No.	挿図No. 写真図版No.	種別 分類	器種	形状	文様構成	出土地点	型部表面の特徴	型部裏面と台部の特徴	備考
K89	第32図 写真図版102	元型Ⅳ	蓮華類B		龍文 （XⅣ）	表層	たて約2.5cm、横約3.8cmの楕円形内に文様を線刻。龍の顔は左下を向き、胴はυ字状に曲がり、上方に尾が巡る。龍の爪は３本。受部の大半は残存するが、取っ手部は欠損している。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられている。型部裏面の楕円形の高台は外面を指押さえによって接合されており、その痕跡が明瞭に残っている。	取っ手部が欠損しているが、ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K90	第32図 写真図版 24下段 25中段 写真図版103	元型Ⅴ	蓮華類B		龍文 （XⅤ）	表層	たて約2.8cm、横約4.8cmの楕円形内に文様を線刻。龍の顔は左側を向き、胴はυ字状に曲がり尾は上方に、その周囲には雲が配されている。龍の爪は３本。受部は残存するが、取っ手部は欠損している。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられているが、指押さえの痕跡が残っている。型部裏面の中央部をわずかに凹ませて高台状にしている。	型部裏面にヘラ書き有り。「小」。遺物No.530と文様構成は同一。
K91	第32図 写真図版103	元型Ⅳ	蓮華類B		龍文 （XⅥ）	表層	受部の半部および取っ手部が欠損しているが、文様面はほぼ残存している。たて約３cm、横約4.8cmの楕円形内に文様を線刻。龍の顔は左側を向き、胴はυ字状に曲がり、上方に尾が巡る。欠損している断面には、表面（文様面）と高台部の２つの粘土板を貼り付けている痕跡が明瞭に残っている。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられている。型部裏面の楕円形の高台は外面を指押さえによって接合されており、その痕跡が明瞭に残っている。	高台内に墨書有り。「三十三年　□（改か）上」。
K92	第32図 写真図版103	元型Ⅳ	置物類		亀甲文	１区石垣背後 中層ⅰ	全体の約2/3が欠損しているが、山形状を呈する表面は亀甲状に彫刻され、亀を表現していると考えられる。甲羅の上に足の一部が残っており、上部にさらに亀が乗りかかっていたものと思われる。	裏面は全面的に剥離しており、詳細は不明。	裏面は欠損しており、銘文等は不明。
K93	第32図 写真図版25 中段 写真図版103	元型Ⅱ	貼付類	楕円形	菊花文Ⅰ	表層	口縁部の一部がわずかに欠損するが、たて約8.6cm、横約7.4cmの楕円形内に菊の花をかたどっている。中央にたて約1.8cm、横約1.2cmの中心小花を線刻し、周囲を凹線で16弁の菊花を表現している。	台部はなく、型部表面から約3.8cmの厚さをもつ。周縁部を残し、両側から中央に向けて、ヘラ状工具で削り出し、裏面中央に幅約1.4cmの取っ手が付いている。削り出した痕跡は明瞭に残っている。	一部欠損しているが、ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K94	第32図 写真図版25 中段 写真図版104	元型Ⅱ	貼付類	楕円形	菊花文Ⅱ	表層	左上方部の約1/3および文様面の一部が欠損しているが、たて約8.6cm、横約7.4cmの楕円形内に菊の花をかたどっている。中央にたて約1.7cm、横約1.2cmの中心小花を線刻し、周囲を凹線で16弁の菊花を表現している。欠損している断面には、型部の表面（文様面）と裏面が２つの粘土板を貼り付けて製作している痕跡が残っている。	全体の形状は楕円板状を呈しており、台部はなく、型部表面から約1.8cmの厚さをもつ。周縁部を残し、両側から中央に向けて削りこみ、裏面中央に幅約1.9cmの取っ手が付いている。	一部欠損しているが、ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K95	第32図 写真図版25 中段 写真図版104	元型Ⅴ	貼付類	丸形	菊花文Ⅲ	３区－Ⅳ ⅱ層	口縁部の一部が欠損しているが、直径約6.8cmのほぼ平らな円内に菊の花をかたどっている。中央に直径約1.1cmの中心小花を線刻し、周囲を凹線で16弁の菊花を表現している。	全体の形状は円板状を呈しており、台部あるいは取っ手などは付かない。裏面は全体的に非常に丁寧にナデ付けられている。	一部欠損しているが、ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K96	第32図 写真図版25 中段 写真図版104	元型Ⅴ	貼付類	丸形	桜花文	１区石垣背後 上層ⅲ	直径約6.5cmのほぼ平らな円内に桜の花をかたどっている。中心小花はなく、凹線で５弁の花弁を表現している。	全体の形状は円板状を呈しており、台部あるいは取っ手などは付かない。裏面は全体的に丁寧にナデ付けられている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K97	第33図 写真図版105	貼付型 Ⅴ	蓋摘み類		桃実文	１区石垣背後 上層０	完存しており、たて3.2cm、横2.7cmの上方部を摘み上げた外形は桃の実をかたどっている。中央に凸線で曲線が描かれている。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられているが、約半部は剥離している。剥離している断面には、型部の表面（文様面）と裏面が２枚の粘土板を貼り付けて製作している痕跡が残っている。	ヘラ書きの痕跡が残るが、詳細は不明。片側の型のみ出土。
K98	第33図 写真図版105	貼付型 Ⅴ	蓋摘み類		無文	３区－Ⅳ 黒褐色土１	完存しており、たて2.9cm、横2.6cmの楕円形状を呈している。文様は彫刻されていないが、上方部が深く抉られている。周縁部の左右両側もわずかに深く削られている。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられているが、面取りの痕跡が明瞭に残っている。	型部裏面にヘラ書き有り。「六」。

土型観察表(12)

No.	挿図No. 写真図版No.	種別 分類	器種	形状	文様構成	出土地点	型部表面の特徴	型部裏面と台部の特徴	備考
K99	第33図 写真図版105	貼付型 V	蓋摘み類		桃実文	コウカシ窯 解体中	完存しており、たて2.3cm、横2.2cmの上方部を摘み上げた円形を呈している。内面に凸線はみられないが、下方部をわずかに押さえこみ、桃の実をかたどっていると考えられる。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられているが、一部に面取りの痕跡が残っている。	型部裏面にヘラ書き有り。「三寸」。
K100	第33図 写真図版105	貼付型 V	蓋摘み類		破風状文	残土一括	完存しており、底辺2.7cm、高さ2cmの破風状の形状を呈している。中央に三角形状の凹部および円形の凸部がみられる。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられているが、面取りの痕跡が明瞭に残っている。	型部裏面にヘラ書き有り。「平形大」。
K101	第33図 写真図版105	貼付型 V	貼付類		松葉文	1区石垣背後 中層 i	完存しており、たて8mm、横1.8cmの松の葉を凹面と線刻で彫刻。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K102	第33図 写真図版105	貼付型 V	貼付類		木の葉文 I	1区石垣背後 上層 iii	完存しており、たて約3.4cm、横1cmの木の葉を1枚彫刻。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K103	第33図 写真図版105	貼付型 V	貼付類		木の葉文 II	1区石垣背後 上層 i	完存しており、たて約3.5cm、横9mmの木の葉を1枚彫刻。葉の上方部は捻れており、下方部の葉脈は凸線で、上方部の葉脈は凹線で表現されている。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられており、一部黒く被熱を受けている。	型部裏面にヘラ書き有り。「四三五」。K102とあわせ、桃実形の蓋の摘み（遺物№422～424．451～455）に装飾。
K104	第33図 写真図版105	貼付型 V	貼付類		鳥文	1区石垣背後 上層 ii	下方部が欠損しており、全体の形状および大きさは不明。右を向いた鶴が彫刻されている。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられている。	下方部が欠損しているが、ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K105	第33図 写真図版105	貼付型 V	貼付類		菊花文	確認調査 トレンチ1 下層	文様面がわずかに欠損するが、たて約4.5cm、横約5.5cmの菊の花を彫刻。中央にたて9mm、横1.1cmの中心小花を凹点で描き、周囲を凹線で菊花を表現している。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K106	第33図 写真図版105	貼付型 V	注口類		なし	1区石垣背後 上層 iii	接合部の一部が欠損しているが、長さ約8.5cmの注口の型。先端部幅1.1cm、接合部幅約2.2cmを測り、両端ともに切り込みが入れられている。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられているが、面取りの痕跡が明瞭に残っている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。片側の型のみ出土。
K107	第33図 写真図版105	貼付型 V	注口類		なし	1区石垣背後 上層 iii	完存しており、長さ3.3cmの注口の型。先端部幅9mm、接合部2.8cmを測り、両端ともに切り込みが入れられている。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。片側の型のみ出土。
K108	第33図 写真図版106	高台型 V	丸形		なし	確認調査 トレンチ1	完存しており、直径4.4cm、幅4mmの丸形（円形）高台の型。中央部は中空でドーナツ状を呈している。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K109	第33図 写真図版106	高台型 V	丸形		なし	表層	完存しており、直径4.6cm、幅4mmの丸形（円形）高台の型。中央部は中空でドーナツ状を呈している。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K110	第33図 写真図版106	高台型 V	丸形		なし	1区石垣背後 上層 ii	わずかに欠損しているが、直径7.8cm、幅5mmの丸形（円形）高台の型。中央部は中空でドーナツ状を呈している。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられている。	型部裏面にヘラ書きおよび墨書有り。「上」（ヘラ書き）。「シナ」（墨書）。
K111	第34図 写真図版106	高台型 V	四角形		なし	表層	完存しており、一辺4.8cm、幅5mmの角形（方形）高台の型。中央部は中空でドーナツ状を呈している。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられているが、布目痕跡が残っている。	型部裏面にヘラ書き有り。「豆有」。
K112	第34図 写真図版106	高台型 V	四角形		なし	残土一括	完存しており、一辺5.4cm、幅5mmの角形（方形）高台の型。中央部は中空でドーナツ状を呈している。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられているが、わずかに布目および指押さえの痕跡が残っている。	型部の2側面にヘラ書き有り。「有三寸」。「有中」。
K113	第34図 写真図版106	高台型 V	四角形		なし	1区石垣背後 中層 ii	完存しており、一辺6.5cm、幅6.5mmの角形（方形）高台の型。中央部は中空でドーナツ状を呈している。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられているが、布目痕跡が明瞭に残っている。	型部裏面にヘラ書き有り。「□（八か）角小皿」。
K114	第34図 写真図版106	高台型 V	四角形		なし	1区石垣背後 上層 0	完存しており、一辺6.9cm、幅7mmの角形（方形）高台の型。中央部は中空でドーナツ状を呈している。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられているが、わずかに指押さえの痕跡が残っている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。

土型観察表(13)

No.	挿図No. 写真図版No.	種別 分類	器種	形状	文様構成	出土地点	型部表面の特徴	型部裏面と台部の特徴	備考
K115	第34図 写真図版106	高台型 V	襞状菱形		なし	コウカシ窯 床面断ち割り 上層	わずかに欠損しているが、たて5.5cm、横7cmの菱形高台の型。菱形の一辺は中央に内湾し、8つの襞に区画される。中央部は中空でドーナツ状を呈している。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられているが、わずかに布目痕跡が残っている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K116	第34図 写真図版106	高台型 V	襞状丸形		なし	1区石垣背後 中層i	わずかに欠損しているが、直径約6cm、幅1.1cmの襞状丸形（円形）高台の型。中央部は中空でドーナツ状を呈している。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K117	第34図 写真図版105	不明	不明		なし	1区石垣背後 q層	ほぼ完存しており、全体の形状は四角錐状を呈している。たて2.7cm、横2.2cmの底面に文字らしきものが凸線で表現されているが、詳細は不明である。印章と考えられる。	裏面および側面は全面的に丁寧にナデ付けられているが、わずかに指押さえの痕跡が残っている。側面の一辺に三角形状の彫り込みがみられ、印面の天を示す印と考えられる。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K118	第34図 写真図版105	不明	不明		なし	1区石垣背後 上層ii	完存しており、たて3.1cm、横4.6cmの楕円形内に文様は彫刻されていない。全体の形状は楕円柱状を呈し、厚さ2.5cmの中央部に表面に平行した幅約7mmの凹線が巡る。用途等は不明である。	裏面および側面は全面的に丁寧にナデ付けられている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K119	第35図 写真図版107	タイル型 V	湿式 タイル	正方形	T2 T4	1区石垣背後 中層i	左上方および右周縁部の一部が欠損。17.6cm四方のタイル成形面の右上方および左下方に対称する花弁状の文様を彫刻。周囲は幅約3cm、高さ約1.8cmの周縁部が巡る。型部の表面（文様面）の薄い粘土板と裏面の厚い粘土板を貼り付けて製作している痕跡が明瞭に残る。	側面は丁寧にナデ付けられているが、裏面には全面的に布目および指押さえの痕跡が明瞭に残っている。四辺および角部はいずれも面取りが行われている。	一部が欠損しているが、ヘラ書きあるいは墨書はなし。遺物No.T2あるいはT4のタイル型。
K120	第35図 写真図版107	タイル型 V	湿式 タイル	正方形	T7 T8	1区石垣背後 上層i	右上方の一部が欠損。17.5cm四方のタイル成形面の対角線上に円形および長楕円形を配し、各辺の中央に花形の文様を彫刻。周囲は幅約2.3cm、高さ約1.8cmの周縁部が巡る。型部の表面（文様面）の薄い粘土板に2枚の薄い粘土板のあわせて3枚の粘土板を貼り付けて製作している痕跡が明瞭に残る。	裏面および側面ともに全面的に丁寧にナデ付けられているが、裏面には布目痕跡がわずかに残っている。四辺および角部はいずれも面取りが行われている。	一部が欠損しているが、ヘラ書きあるいは墨書はなし。遺物No.T5あるいはT7・T8のタイル型。
K121	第36図 写真図版108	タイル型 V	湿式 タイル	正方形	T36	1区石垣背後 中層i	下方部の約半部が残存。残存するタイル成形面には円形あるいは波状の文様を彫刻。周囲は幅約2cm、高さ約2cmの周縁部が巡る。型部の表面（文様面）の薄い粘土板に2枚の薄い粘土板のあわせて3枚の粘土板を貼り付けて製作している痕跡が明瞭に残る。	側面は丁寧にナデ付けられているが、裏面には布目および指押さえの痕跡が明瞭に残っている。各辺および角部はいずれも面取りが行われている。	大半が欠損しているが、ヘラ書きあるいは墨書はなし。遺物No.T36のタイル型。
K122	第36図 写真図版108	タイル型 V	湿式 タイル	正方形	T9	2区石垣背後 上層o	下方部の約半部が残存。残存するタイル成形面の中央には花弁状の文様を配し、角部へ伸びる連続する半円形の文様を彫刻。周囲は幅約2cm、高さ約1.8cmの周縁部が巡る。型部の表面（文様面）の薄い粘土板と裏面の厚い粘土板を貼り付けて製作している痕跡が明瞭に残る。	側面は丁寧にナデ付けられているが、裏面には布目および指押さえの痕跡が明瞭に残っている。各辺および角部はいずれも面取りが行われている。	大半が欠損しているが、ヘラ書きあるいは墨書はなし。遺物No.T9のタイル型。
K123	第37図 写真図版109	タイル型 V	湿式 タイル	正方形	T56	1区石垣背後 上層i	左上方の一部が欠損。17.6cm四方のタイル成形面の対角線に幅1cmの凹線が引かれる。凹線によって文様面は二分され、それぞれ対称する花弁状の文様が彫刻される。周囲は幅約2cm、高さ約1.4cmの周縁部が巡る。型部の表面（文様面）の薄い粘土板と裏面の厚い粘土板を貼り付けて製作している痕跡が明瞭に残る。	側面は丁寧にナデ付けられているが、裏面には全面的に布目および指押さえの痕跡が明瞭に残っている。四辺および角部はいずれも面取りが行われている。	一部が欠損しているが、ヘラ書きあるいは墨書はなし。遺物No.T56のタイル型。

土型観察表(14)

No.	挿図No. 写真図版No.	種別 分類	器種	形状	文様構成	出土地点	型部表面の特徴	型部裏面と台部の特徴	備考
K124	第37図 写真図版108	タイル型 V	湿式 タイル	正方形	T17	表層	右下角部のわずか一部が残存。残存するタイル成形面には松の葉状の文様を彫刻。周囲は幅2.4cm、高さ1.6cmの周縁部が巡る。型部表面(文様面)の薄い粘土板に2枚の薄い粘土板のあわせて3枚の粘土板を貼り付けて製作している痕跡が明瞭に残る。	側面は丁寧にナデ付けられているが、裏面には布目および指押さえの痕跡が明瞭に残っている。各辺および角部はいずれも面取りが行われている。	大半が欠損しているが、ヘラ書きあるいは墨書はなし。遺物No.T17のタイル型。
K125	第37図 写真図版109	タイル型 V	湿式 タイル	正方形	T27	表層	文様面のわずか一部が残存。残存するタイル成形面には細かな文様が彫刻されるが詳細は不明。型部表面(文様面)の薄い粘土板に2枚の薄い粘土板のあわせて3枚の粘土板を貼り付けて製作している痕跡が明瞭に残る。	裏面には布目および指押さえの痕跡が明瞭に残っている。	大半が欠損しているが、ヘラ書きあるいは墨書はなし。遺物No.T27のタイル型。
K126	第37図 写真図版109	タイル型 V	湿式 タイル	正方形		1区石垣背後 上層 i	左下方の一部が残存。残存するタイル成形面には中央に花弁状の文様を彫刻。周囲は幅約2cm、高さ約1.8cmの周縁部が巡る。型部表面(文様面)の薄い粘土板と裏面の厚い粘土板を貼り付けて製作している痕跡が明瞭に残る。	側面は丁寧にナデ付けられているが、裏面には布目痕跡が明瞭に残っている。各辺および角部はいずれも面取りが行われている。	大半が欠損しているが、ヘラ書きあるいは墨書はなし。製品未検出。
K127	第38図 写真図版110	タイル型 V	湿式 タイル	隅切 正方形	無文	1区石垣背後 上層 i	ほぼ完存しており、四隅が切り込まれた16cm四方のタイル成形面に文様は彫刻されていない。周囲は幅2.4cm、高さ1.6cmの周縁部が巡る。	側面は丁寧にナデ付けられているが、裏面には全面的に布目および指押さえの痕跡が明瞭に残っている。四辺および角部はいずれも面取りが行われている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。遺物No.T45あるいはT46のタイル型。
K128	第38図 写真図版110	タイル型 I	湿式 タイル	正方形	T16	1区石垣背後 上層 ii	下方部の約1/4が残存。残存するタイル成形面には直線と円形を組み合わせた文様を彫刻。周囲は幅約2cm、高さ約1.6cmの周縁部が巡る。型部表面(文様面)の薄い粘土板に2枚の薄い粘土板のあわせて3枚の粘土板を貼り付けて製作している痕跡が明瞭に残る。	側面は丁寧にナデ付けられているが、裏面には布目痕跡が明瞭に残っている。直径約1.8cmの円形の凸面を台(脚)として貼付けている。	大半が欠損しているが、ヘラ書きあるいは墨書はなし。遺物No.T16のタイル型。
K129	第38図 写真図版110	タイル型 V	湿式 タイル	竹割形	無文	1区石垣背後 上層 o	全体の形状および大きさは不明であるが、断面は半円形を呈する。タイル成形面に文様は彫刻されていないが、欠損部にわずかに凹線の痕跡がみられる。周囲は幅約5mmの周縁部が巡る。	裏面は全面的に布目痕跡が明瞭に残っている。	一部が欠損しているが、ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K130	第39図 写真図版111	ピンハマ型 V	三角形A		なし	1区石垣背後 上層 iii	完存しており、一辺3.4cmの隅丸三角形のピンハマ型。三角形の角部に直径6.5mmの円錐形の穴がある。	裏面は全面的に丁寧にナデつけられているが、面取りの痕跡が明瞭に残っている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K131	第39図 写真図版111	ピンハマ型 V	三角形A		なし	1区石垣背後 上層 0	完存しており、一辺3.7cmの隅丸三角形のピンハマ型。三角形の角部に直径7mmの円錐形の穴がある。	裏面は全面的に丁寧にナデつけられているが、指押さえの痕跡が明瞭に残っている。三角形の角部をわずかに残し、台(脚)部としている。	型部裏面に墨書有り。「上」。
K132	第39図 写真図版111	ピンハマ型 V	三角形B		なし	表層	完存しており、一辺5.1cm、各辺の中央部が内湾する隅丸三角形状のピンハマ型。三角形の角部に直径7mmの円錐形の穴がある。	裏面は全面的に丁寧にナデつけられているが、指押さえの痕跡が明瞭に残っている。三角形の角部をわずかに残し、台(脚)部としている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K133	第39図 写真図版111	ピンハマ型 V	三角形C		なし	1区石垣背後 中層 i	完存しており、底辺3.8cm、高さ4.4cmの隅丸二等辺三角形状のピンハマ型。三角形の角部に直径7mmの円錐形の穴がある。	裏面は全面的に丁寧にナデつけられているが、指押さえの痕跡が明瞭に残っている。三角形の角部をわずかに残し、台(脚)部としている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K134	第39図 写真図版111	ピンハマ型 V	三角形C		なし	1区石垣背後 中層 iii	完存しており、底辺6cm、高さ5.5cm、各辺の中央部が内湾する隅丸二等辺三角形状のピンハマ型。三角形の角部に直径6.5mmの円錐形の穴がある。	裏面は全面的に丁寧にナデつけられているが、指押さえの痕跡が明瞭に残っている。三角形の角部に粘土塊を貼付け、台(脚)部としている。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。
K135	第39図 写真図版111	ピンハマ型 V	三角形B		なし	1区石垣背後 上層 0	完存しており、一辺6.6cm、各辺の中央部が内湾する隅丸三角形状のピンハマ型。三角形の角部に直径8.5mmの円錐形の穴がある。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられている。	型部裏面にヘラ書き有り。「サト大月」。
K136	第39図 写真図版111	ピンハマ型 V	三角形B		なし	表層	完存しており、一辺7.5cm、各辺の中央部が内湾する隅丸三角形状のピンハマ型。三角形の角部に直径8mmの円錐形の穴がある。	裏面は全面的に丁寧にナデ付けられている。	型部裏面にヘラ書き有り。「サト大め」。
K137	第39図 写真図版25 下段 写真図版112	製品型 V	蓋類V	丸形	花弁形	表層	左上方部の約1/4が欠損しているが、直径約6.5cm内に文様を彫刻。中央に直径1.8cmの凹み(つまみ部分か)をもち、周囲は12弁の水滴形状の花弁をかたどっている。	側面は全面的に丁寧にナデ付けられているが、裏面は部分的に傷あるいは凹みなどがみられる。	ヘラ書きあるいは墨書はなし。

第２表　磁器観察表(1)

No.	挿図No. 写真図版No.	出土地点	器　種	色　調	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1	第40図 写真図版27下段	１区石垣背後 中層ii	杯	白色	高台は比較的高い。体部内彎。口縁端部　丸味をもつ。器壁は比較的薄い。	文様　外面　界線１条。宝相華文。界線２条。内面　界線１・２条。宝相華文。	明末～清初の青花写か。
2	第40図 写真図版27下段	３区－Ⅰ 黒色土１	碗	白色	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反。端部は丸味をもつ。全体に器壁は薄い。	文様　外面　鮮やかな呉須で宝草華文を施文。	明末～清初の景徳鎮産青花写。
3	第40図 写真図版27下段	３区－Ⅳ 黒褐色土４	碗	青味を帯びた白色	器壁は全体に薄い。口縁端部は尖る。	文様　外面　呉須　界線１条。草花文。内面　界線２条。	明青花写か。
4	第40図 写真図版27下段	２区石垣背後 中層３	Ⅲ	青味を帯びた白色	高台は比較的低い。	文様　外面　鮮やかな呉須　界線１・２条。内面　草花文施文。	明青花写。
5	第40図 写真図版27下段	３区－Ⅵ 黒褐色土１	Ⅲ	青味を帯びた灰白色	器壁は全体に薄い。高台は比較的低い。体部は内彎。口縁端部は丸味をもつ。	文様　外面　界線１・２条。内面　草花文。口縁端部　鉄釉施釉（口紅）	明末～清初の青花写。
6	第40図 写真図版27下段	３区－Ⅲ iv層	Ⅲ	灰白色	器壁は全体に比較的厚い。型打ち成形により口縁部を輪花状に整形。口縁部上面に端面をもつ。	文様　外面　唐草文。内面　芙蓉手。高台裏　「成囮年製」銘。	明末～清初の青花写。
7	第40図 写真図版27上段	残土一括	鉢	青味を帯びた灰色	高台は幅が広く、低い。	文様　外面　呉須　界線２条。内面　草花文。	高台畳付に砂附着。漳州窯写か。
8	第40図 写真図版27上段	３区－Ⅱ 暗黄褐色土 （最下層）	Ⅲ	青味を帯びた灰白色	平底。高台は低い。器壁は薄い。	文様　外面　呉須　界線２条。内面　龍文。	内面に大粒の砂粒附着。漳州窯写。
9	第40図 写真図版27上段	２区石垣背後 中層２	盤	青味を帯びた白色	高台は幅が広く、低い。高台の断面形状　長方形。器壁は厚い。	文様　内面　呉須　界線２・１条。不明文施文。器面に細かい貫入。高台畳付に砂附着。	漳州窯写か。
10	第40図 写真図版27上段	１区石垣背後 中層ｉ	盤	青味を帯びた灰白色	器壁は厚い。高台は幅が広く、低い。高台の断面形　長方形。	文様　外面　呉須　界線２条。内面　草花文。界線２条。山水楼閣図。	高台畳付に砂附着。漳州窯写。
11	第40図 写真図版27上段	表層	壺	青味を帯びた灰色	平底。高台は幅が広く比較的高い。高台は幅が広く僅かに外方にひらく。	文様　外面　呉須　丸文。界線１条。内面　露胎。高台畳付迄施油。高台裏は露胎。	器面に粗い貫入。漳州窯写。
12	第40図 写真図版27下段	３区－Ⅱ 暗褐色土 （検出面）	色絵 磁器鉢	乳白色	体部と口縁部の界は大きく屈曲。口縁部は水平に折り曲げる。	文様　外面　窓絵で波頭文施文。黄・緑・青・紫・白の五彩で細かい草花文施文。内面　露胎。	中国産の五彩の写か。
13	第40図	１区石垣背後 22層	碗	青味を帯びた灰色	高台は比較的高い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。底部の器壁は比較的厚い。	文様　外面　横線・草花文・横線・界線１条。内面　界線２条。１条。見込み　島嶼文。	肥前系写か。
14	第40図	１区石垣背後 g層	碗	やや青味を帯びた灰白色	底部の器壁は非常に厚い。高台は細く高く、僅かに外方にひらく。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反。口縁端部は丸味をもつ。	文様　外面　線描き施文。内面　線描き施文。	肥前系写端反碗。19c前半以降。
15	第40図 写真図版27中段	残土一括	碗	青味を帯びた白色	高台は比較的高い。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	文様　外面　呉須　よろけ文。界線３条。内面　草花文。界線１条。	肥前系写。
16	第40図 写真図版27中段	１区石垣背後 上層ｉ	碗	青味を帯びた灰色	体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	文様　外面　呉須　縦線　斜格子文。内面　格子状文。界線１条。	肥前系写。
17	第40図 写真図版27中段	１区石垣背後 上層iii	碗	青味を帯びた灰色	体部は僅かに内彎。口縁端部は尖り気味。	文様　外面　呉須　よろけ文。内面　草花文。界線１条。	肥前系写。
18	第40図 写真図版27中段	３区－Ⅴ ii層	碗 （半磁器）	暗灰色	全体に器壁は非常に厚い。体部は内彎。	文様　外面　淡い呉須で施文。	肥前系写（18c後半）。
19	第40図 写真図版27中段	１区石垣背後 中層ｉ	碗	灰白色	器壁は全体に厚い。体部は内彎。	文様　外面　格子状文　界線１条。内面　斜格子状文。	器面に貫入あり。肥前系写か。
20	第40図 写真図版27中段	１区石垣背後 中層ｉ	碗	青味を帯びた灰色	底部の器壁は厚い。高台は細く、高い。	文様　外面　呉須　縦線。界線３条。内面　界線１条。不明文。	広東碗。肥前系写。
21	第40図	３区－Ⅱ 上層	碗	青味を帯びた灰色	高台は比較的幅が広く、低い。	文様　外面　淡い呉須で施文。	焼成　軟質。高台畳付に砂附着。肥前系写か。
22	第40図 写真図版27中段	３区－Ⅴ ii層	青磁 染付碗		底部の器壁は比較的厚い。高台は「ハ」の字状に外方にひらく。外面の底部と体部の界　僅かに屈曲。	文様　外面　青磁釉施釉。淡黄緑色に発色。内面　染付　界線２条。見込くずれたコンニャク印判で五弁花文施文。	肥前系写。
23	第40図	１区石垣背後 上層iii	碗	青味を帯びた灰白色	高台は比較的細く、高い。体部内彎。	文様　外面　呉須　花鳥文施文。界線１条。内面　草花文。	肥前系写京焼風磁器か。
24	第40図 写真図版27中段	１区石垣背後 n層	Ⅲ	青味を帯びた灰色	蛇ノ目凹形高台。底部の器壁は非常に厚い。体部は僅かに内彎。口縁端部　丸味をもつ。	文様　外面　呉須　丸文。内面　界線１条・亀甲文・網目文・界線２条。底部内面　草花文施文。底部外面の釉中央部を残してカキ取り。	肥前系写。
25	第40図	１区石垣背後 中層ｉ	鉢	青味を帯びた灰白色	平底。蛇ノ目凹形高台。体部は直線的に斜め上方に延びる。	文様　外面　呉須　源氏香・界線３条。内面　界線２条・草花文。	肥前系写。
26	第40図	３区－Ⅱ 上層	Ⅲ	白色	底部の器壁は比較的厚い。高台は断面三角形状。	文様　外面　呉須　草花文。内面　菊花文等施文。	肥前系写。
27	第40図 写真図版27中段	３区－Ⅵ ii層	Ⅲ	青味を帯びた灰色	高台は幅が広く、低い。	内面　呉須　界線１条。	内面　蛇ノ目状釉ハギ。肥前系写。
28	第40図 写真図版27中段	３区－Ⅱ v層	Ⅲ		蛇ノ目凹形高台。体部内彎。口縁端部は丸味をもつ。	外面　呉須　唐草文施文。内面　墨弾きで草花文施文。	底部外面　露胎。肥前系写。19c前半。
29	第40図	表層	碗	青味を帯びた白色	底部の器壁は厚い。高台は比較的細く高い。体部は僅かに内彎。口縁部は僅かに外反。	文様　外面　呉須　染色体状文。内面　島嶼文。口縁端部　鉄釉施釉（口紅）	瀬戸写。19c前半以降。
30	第40図	表層	碗	灰白色	底部の器壁は比較的厚い。体部内彎。口縁端部尖り気味。	文様　外面　呉須　界線４条。内面　界線２条。	口縁端部　鉄釉施釉（口紅）。瀬戸写。
31	第40図	１区石垣背後 e層	碗		口縁端部は尖り気味。	外面　呉須　蓮弁状文。内面　界線３条。	瀬戸写。
32	第40図	１区石垣背後 b層	碗	青味を帯びた白色	高台は「ハ」の字状に外方にひらく。体部内彎。	文様　外面　呉須　草花文。界線２条。内面　界線１条。「口化口製」銘。	呉須はやや滲んだ感じ。瀬戸写。
33	第40図	確認調査 １トレンチ	碗	黄灰色	高台は蛇ノ目状に成形。	文様　外面　界線3条。内面　界線２条。	高台裏　露胎。瀬戸写。近代～現代。

磁器観察表(2)

No.	挿図No. 写真図版No.	出土地点	器　種	色　調	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
34	第40図	1区石垣背後 h層	色絵磁器 小壺	やや黄味を帯びた灰色	高台を浅く削り出す。体部は直線的に斜め上方に延びる。	文様　外面に呉須　鉄釉で流水文。水草文を施文。	底部外面に砂附着。瀬戸写。19c前半以降。
35	第40図	3区－Ⅵ ii層	花瓶		平底（糸切り痕）。体部は下膨れ。頸部より上　欠損。	文様　外面　五曜星・草花文施文。底部外面　露胎。内面　露胎。	肥前系あるいは瀬戸・美濃系写か。
36	第40図	3区－Ⅴ 黒褐色土1	杯		高台は蛇ノ目凹形高台。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部僅かに外反。	文様　外面　鋼版転写で雷文帯。　草花文施文。界線2条。	清朝青花写。明治以降。
37	第40図	1区石垣背後 中層i	碗		器壁は非常に薄い。口縁部僅かに外反。	文様　内・外面とも呉須　草花文施文。	清朝青花写。
38	第41図	1区石垣背後 中層i	碗		高台畳付の幅が広い。器壁は比較的厚い。	文様　外面　呉須　草花文施文。内面　草花文・渦巻文施文。	瀬戸系。清朝青花写。
39	第41図	1区石垣背後 中層i	碗		高台は比較的幅が広い。	文様　外面　草花文　界線2・1条。内面　草花文・渦巻文施文。	清朝青花写。
40	第41図	表層	鉢	青味を帯びた灰色	蛇ノ目凹形高台。底部の器壁は比較的厚い。	文様　外面　濃いコバルト（ベロ藍）で草花文　界線2条。内面　草花文（椿）施文。	明治以降。
41	第41図	1区石垣背後 上層iii	皿	青味を帯びた灰色	蛇ノ目凹形高台。高台は比較的細く、高い。	文様　内面　濃いコバルト（ベロ藍）で草花文施文。高台裏　中央部を残して釉カキ取り。	明治以降。
42	第41図	1区石垣背後 下層	蓋	灰色	上面に蝉状のつまみ貼付。笠形。	文様　外面　呉須（ベロ藍）　界線3条。松葉文。	陶胎染付。近代～現代。
43	第41図	表層	鉢	青味を帯びた灰色	蛇ノ目凹形高台。高台は比較的幅が広い。体部は内彎。口縁部は外方にひらく。	文様　外面　濃い呉須（ベロ藍）で桜花文鋼版転写。内面　ベロ藍で龍文施文。	明治以降。
44	第41図	1区石垣背後 上層iii	碗	青味を帯びた灰色	高台は幅が広く比較的高い。底部の器壁は厚い。体部内彎。口縁部は僅かに外反。	文様　外面　濃い呉須で鋼版転写で細かい草花文施文。内面　草花文　界線1条　草花文。	明治。
45	第41図	1区石垣背後 上層iii	碗	青味を帯びた白色	高台は幅が広く比較的高い。底部の器壁は厚い。体部は内彎。口縁部は僅かに外反。	文様　外面　界線1条。濃い呉須で梅花文を鋼版転写。界線3条。内面　界線2条。蛇ノ目状釉ハギ。	明治。
46	第41図	表層	碗		器壁は全体に厚い。高台は幅が広く、低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外反。	文様　外面　鋼版転写で鳳凰文・吉祥文。界線2条。底部外面　丸文。	明治。
47	第41図	1区石垣背後 中層i	蓋付鉢		体部は直線的にほぼ直上に延びる。口縁端部は上面に端面をもつ。	文様　外面　鋼版転写で細かい草花文施文。	口縁部の釉カキ取り。明治。
48	第41図	3区－Ⅴ ii層	湯呑み		高台は幅が広く低い。体部は直線的にほぼ直上に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	文様　外面　濃い呉須で団扇文等を鋼版転写で施文する。	明治。鋼版手。
49	第41図	1区石垣背後 上層iii	鉢	青味を帯びた白色	蛇ノ目凹形高台。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部僅かに外反。	文様。外面　濃い呉須で千鳥・龍文を鋼版転写。界線2条。内面　細かい草花文・界線2条・松竹梅文。底部外面中央部を残して露胎。	明治。
50	第41図	1区石垣背後 上層i	杯	灰白色	器壁は全体に厚い。高台は低い。口縁端部は丸味をもつ。	文様　外面　呉須　源氏香・菊花文を鋼版転写。	明治以降。
51	第41図	1区石垣背後 上層0	色絵磁器 香炉	青味を帯びた白色	型作り成形。平底。脚は4脚。平面形状は八角形。底部中央を穿孔。口縁部上面に端面をもつ。	文様　外面　山水図を鋼版転写。口縁部上面に鉄釉施釉。内面　露胎。	明治以降。
52	第41図	確認調査 1トレンチ	植木鉢 あるいは 香炉		型作り成形。体部直立。口縁部上面に端面をもつ。	文様　外面　鋼版転写で蓮弁文・牡丹唐草文施文。内面　露胎。	明治。
53	第41図	1区石垣背後 n層	火鉢	青味を帯びた灰色	口縁部は僅かに内傾。口縁端部は丸味をもつ。	文様　外面　幾何学文・人物文。内面露胎。	
54	第41図	1区石垣背後 上層0	火鉢	青味を帯びた灰色	体部直立。口縁部は上面に端面をもつ。口縁端部を内側につまみ出す。	文様　外面　呉須　不明文施文。	
55	第41図	2区石垣背後 上層1	杯		高台は比較的細く高い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部外方にひらく。	文様　外面　呉須　広形の蓮弁文。不明文。	本焼前の未製品。高台裏に「菱囲千鳥」印。珉平焼。
56	第41図	3区－Ⅲ ii層	碗	白色	高台は細く高く、竹節状。体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	文様　外面　呉須　芒・菊文等を施文。高台裏に「平安　加泉」銘あり。	京焼系。現代。
57	第41図	1区石垣背後 上層i	碗	白色	高台は細く高く、僅かに外方にひらく。底部の器壁は厚い。体部は内彎。下半で一条の稜をもつ。口縁部は外反。	文様　外面　呉須　千鳥文。斜格子文。高台裏　「水荘」銘あり。	珉平焼。現代。
58	第41図	表層	湯呑み碗	やや黄味を帯びた白色	高台は比較的細く高い。体部は直立。口縁部は僅かに外方にひらく。	文様　外面　呉須　格子によろけ文。	陶胎染付。現代。底部外面「千鳥小陰刻」印。珉平焼。
59	第41図	表層	桶形注口 土器		平底。体部直立。外面　凸帯3条。注口は直線的に斜め上方に延びる。	文様　外面　呉須　格子によろけ文。把手の外面　貼花で施文。外面　呉須を流しがけし、澱青釉風にした後、透明釉施釉。内面・底部外面　露胎。	本焼前の未製品。珉平焼。
60	第41図	3区－Ⅰ 暗褐色土 （検出面）	手付手焙		型作り成形。4脚をもつ。体部は内彎。口縁部に2ヶ所把手を貼付。	文様　外面　呉須　よろけ文＋蓮弁文。界線1条。	明治以降。珉平焼か。
61	第42図	表層	碗	やや黄味を帯びた白色	碁笥底。体部は内彎。	文様　外面　呉須　界線2条。竹葉文。界線1・1条。	陶胎染付。近代～現代。
62	第42図	表層	蓋付碗	アイボリーホワイト	高台は比較的低い。底部～体部は大きく屈曲。体部・口縁部ともほぼ直立。	文様　外面　呉須　松葉文。　底部外面　露胎。	内面に蓋の受部をもつ。陶胎染付。近代～現代。底部に「JAPAN」印。
63	第42図	確認調査 1トレンチ	火鉢 あるいは 水桶		高台の端部は丸味をもつ。底部外面は露胎。体部は直立。	文様　外面　赤絵で鯛文施文。緑釉で海藻を施文するが剥離。	陶胎染付。近代～現代。

磁器観察表(3)

No.	挿図No. 写真図版No.	出土地点	器　種	色　調	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
64	第42図	確認調査 1トレンチ	色絵磁器 碗		体部内彎、口縁端部尖り気味。 体部は直線的に斜め上方に延びる。	文様　外面　呉須・緑釉・鉄釉で水玉文施文。内面　界線1条。	近代～現代。
65	第42図	1区石垣背後 h層	色絵磁器 碗		口縁端部　丸味をもつ。	文様　外面　色絵で玩具・赤絵で界線2条。内面　口縁部　赤絵で界線1条。	産地・時期とも不明。
66	第42図	1区石垣背後 上層 i	色絵磁器 碗	白色	体部は内彎。口縁端部は尖り気味。	文様　外面　色絵で玩具・赤絵で界線2条。内面　口縁部　赤絵で界線1条。	
67	第42図	3区－Ⅰ 黒褐色土1 (検出面)	色絵磁器 重ね鉢		体部直立。口縁端部　端面をもつ。	文様　外面　呉須で窓文。赤絵で草花文施文。口縁端部釉ハギ。	近代～現代。
68	第42図	表層	色絵磁器 碗	青味を帯びた 灰白色	高台は僅かに外方にひらく。体部は内彎。口縁端部は尖り気味。	文様　外面　呉須・緑釉・金彩で鶴文を鋼版転写。	現代。
69	第42図	3区－Ⅰ 暗赤褐色土 (最下層)	碗		底部の器壁は厚い。高台は比較的細い。体部は内彎。口縁端部は尖り気味。	文様　外面　濃い呉須で帯状に施文。内面　馬ノ目状文。	現代。
70	第42図	1区石垣背後 上層 iii	碗		高台はほぼ直立。	文様　内面　無文。外面　瑠璃ナマコ釉。高台裏「同臨出製」銘。	京焼系。現代。
71	第42図	3区－Ⅰ 黒土色1	碗		器壁は非常に薄い。高台は「ハ」の字状に外方にひらく。体部　僅かに内彎。口縁端部は尖る。	文様　外面　呉須　鋼版転写で桜花文・波頭文施文。内面　桜花文施文。高台裏に呉須で銘。	現代。
72	第42図	表層	碗	白色	高台はほぼ直立。体部は内彎。口縁端部は丸味をもつ。	文様　外面　呉須　型紙摺りで菊花文施文。界線1条。	現代。
73	第42図	残土一括	鉢	白色	型打ち成形。口縁部は輪花状に成形する。高台はやや外方にひらく。高台の断面は台形状。	文様　外面　呉須　鋼版転写で丸に寿字文・花鳥文を描く。界線2条。内面草花文。	現代。
74	第42図	3区－Ⅱ Ⅴ層	角形 重ね鉢	白色	型造り成形。	文様　外面　酸化コバルトで千鳥・波頭文施文。下段の鉢との重ね合せ部分は露胎。器面は光沢をもつ。	現代。
75	第42図	2区石垣背後 中層3	蓋	やや青味を 帯びた白色	つまみは比較的高い。	文様　外面　呉須　鋼版転写で草花文施文。つまみの内面「素陶園製」銘。	現代。
76	第42図	3区－Ⅰ i層		やや青味を 帯びた灰白色	つまみは細く高い。体部は内彎。口縁端部は尖り気味。	文様　外面　呉須　鋼版転写で鹿・竹等を施文。つまみの内面に「口種園製」銘。	現代。
77	第42図	1区石垣背後 上層 i	蓋	白色	つまみは比較的高い。口縁部は僅かに外反。	つまみの裏と内面　「陶々園製」銘。界線1条。	現代。
78	第42図	1区石垣背後 中層 i	杯		高台は比較的高い。平底。体部直立。口縁部　僅かに外反。口縁端部は尖る。	文様　外面　呉須　鋼版転写で草花文施文。界線2条。	現代。
79	第42図	確認調査 1トレンチ	白磁 酒杯		高台は細く高く「ハ」の字状に外方にひらく。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	文様　内・外面とも透明釉施釉。白色に発色。	近代～現代。
80	第42図	1区石垣背後 上層 ii	白磁 植木鉢		体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は大きく外反。口縁端部は端面をもつ。底部は穿孔。	文様　内・外面とも透明釉施釉。アイボリーホワイトに発色。	白磁の植木鉢か。
81	第42図	1区石垣背後 上層 iii	白磁 鉢		器壁は厚い。平底。体部内彎。口縁端部丸味をもつ。	文様　内・外面とも透明釉施釉。白色に発色。底部内・外面露胎。	白磁の小鉢か。近代～現代。
82	第42図	3区－Ⅱ 下層	白磁 瓶の把手			文様　全面に透明釉施釉。粗い貫入が入る。	瓶の把手か。
83	第42図	1区石垣背後 上層 iii	施釉陶器		器形は木枝状に節をもつ。	文様　外面　灰釉施釉。黄緑色に発色。	器種不明。
84	第42図	3区－Ⅱ 黄褐色土および 黒色土（下層）	青磁 香炉		高台は中央部にかけて深く抉る。三角形状の脚をもつ。底部の器壁は非常に厚い。	文様　外面　青磁釉施釉。暗黄緑色に発色。高台裏・内面は露胎。釉層は厚い。	三田青磁写か。
85	第42図	3区－Ⅰ 暗褐色土 (検出面)	青磁 方形盤	明緑灰色	型作り成形。貼付け高台。高台の断面は台形状。	文様　内面に草花文を劃花で施文。	高台畳付迄施釉。高台裏露胎。肥前系写。
86	第42図	1区石垣背後 中層 i	青磁 碗	淡い黄緑色	高台は比較的細く高い。体部内彎。口縁部僅かに外反。	文様　外面　青磁釉施釉の後、緑釉と鉄釉で草花文施文（上絵付）。内面および高台裏　白磁。	クローム青磁。近代～現代。
87	第42図	3区－Ⅴ v層		青味を帯びた 灰白色	高台は「ハ」の字状に外方にひらく。	文様　外面　呉須　界線1条。	高台裏に渦巻き状のケズリ痕。
88	第42図	3区－Ⅲ iv層	Ⅲ	青味を帯びた 灰白色	高台は細く、高い。	文様　外面　界線1・2条。内面　界線1条。不明文。	
89	第42図	3区－Ⅲ v層	Ⅲ	青味を帯びた 白色	高台は細く、低い。	文様　内面　施文。外面　界線2条。高台裏は露胎。	
90	第42図	残土一括	Ⅲ	青味を帯びた 灰色	器壁は比較的薄い。体部は僅かに内彎。口縁端部は丸味をもつ。	文様　外面　蝶文。界線1条。内面　界線2・1条。	
91	第42図	3区－Ⅲ ii層	鍋	やや青味を 帯びた白色	体部は内彎。口縁部は「L」字状に屈曲。口縁部外面に環状の把手貼付。	文様　外面　呉須でラフに施文。口縁部内面の蓋の受部のみ露胎。	明治以降。京焼風。

第３表　施釉陶器観察表(1)

No.	挿図No. 写真図版No.	器種 器種分類	色調	出土地点	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
92	第43図 写真図版 29上段	碗類 Ⅰ-A-3	C-193 玉緑	確認調査 トレンチ１ 下層	高台は細く高い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部はそのまま上方に引き上げる。体部外面　ヘラ削りで草花文施文。	内面・底部外面　透明釉施釉。体部外面　緑釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	底部外面に「珉平（振り平）」印有り。
93	第43図 写真図版 29上段	碗類 Ⅰ-A-3	素焼き（白）	１区石垣背後 上層ⅰ	器壁は全体に非常に薄い。高台は小さく、断面三角形状の浅い削り出し高台。体部は内彎気味にほぼ直上に延び、口縁部は直立。体部外面に梅花文を貼付。	内・外面ともヨコナデ調整。	
94	第43図 写真図版 29上段	碗類 Ⅰ-A	C-145 牙黄	１区石垣背後 上層ⅰ	高台は比較的細く、高い。体部は内彎。	内・外面とも透明釉施釉の後、体部外面に鉄釉と緑釉で柳葉文施文。高台畳付の釉カキ取り。	底部外面に「珉平（振り平）」印有り。京焼風。
95	第43図 写真図版 29上段	碗類 Ⅰ-A-3	C-163 蛤粉	表層	高台は比較的細く、高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部はそのまま上方に挽き上げる。	体部外面に黒釉で、富士・帆掛舟・松原を施文の後、透明釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	底部外面に「千鳥（小陰刻）」印有り。
96	第43図 写真図版 29上段	碗類 Ⅰ-A-3	C-163 蛤粉	１区石垣背後 上層ⅲ	高台は比較的幅が広く、高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口線部はそのまま上方に挽き上げる。	体部外面　黒釉と褐釉で海辺の楼閣図施文の後、透明釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	底部外面に「千鳥（小陰刻）」印有り。
97	第43図 写真図版 29上段	碗類 Ⅰ-A-3	C-162 胡粉	２区石垣背後 中層３	高台は比較的細く、高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部はそのまま上方に挽き上げる。	内・外面とも透明釉施釉の後、黄・鉄・緑釉で菊花文施文。高台畳付の釉カキ取り。	
98	第43図 写真図版 29上段	碗類 Ⅰ-A-3	C-162 蛤粉	１区石垣背後 中層ⅰ	高台は比較的高く「ハ」の字状に外方にひらく。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部はそのまま上方に挽き上げる。	内・外面とも透明釉施釉の後、朱・緑・青・黄・赤釉で菊花文を端正に施文。高台畳付の釉カキ取り。	底部外面に「千鳥（小陰刻）」印有り。京焼風の上手物。
99	第43図 写真図版 29上段	碗類 Ⅰ-A-3	C-163 蛤粉	表層	高台は比較的細く高く「ハ」の字状に外方にひらく。体部は内彎。口縁部は直立。	内面・体部外面～底部外面　透明釉施釉。口縁部外面　黒釉施釉。体部外面　金彩で菊花文施文。口縁部外面　金彩で竹林文施文。高台畳付の釉カキ取り。	底部外面に「千鳥（小陰刻）」印有り。
100	第43図 写真図版 29上段	碗類 Ⅰ-B-3	N-919 モーブ	１区石垣背後 上層ⅲ	高台は碁笥底状に浅く削り出す。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部はそのまま上方に引き上げる。	内面　透明釉施釉。外面　紫釉施釉。畳付は露胎。	
101	第43図 写真図版 29上段	碗類 Ⅱ-A-2	素焼き（白）	表層	高台は外縁部を残して浅く削り出す。体部は大きく内彎して立ち上がり、僅かに内傾して直線的に斜め上方に延びる。口縁部は大きく外反する。	内・外面とも回転ナデ調整。	
102	第43図 写真図版 29上段	碗類 Ⅱ-B-1	N-806 レモン色	１区石垣背後 中層ⅰ	高台は断面三角形状で浅く削り出す。体部はほぼ直立。口縁端部は尖り気味。	内・外面とも黄釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
103	第43図 写真図版 29上段	碗類 Ⅱ-B-1	N-946 灰白	２区石垣背後 上層１	底部は碁笥底風に削り出す。体部はほぼ直立。口縁端部は水平に端面をもつ。	体部外面　緑釉で草花文施文の後、透明釉施釉。畳付の釉カキ取り。	
104	第43図 写真図版 30上段	碗類 Ⅲ-A-1	素焼き（白）	表層	高台は「ハ」の字状に外方にひらく。体部は直立。口縁部直立。	内・外面とも施釉。未焼成。	底部外面に「千鳥（小陰刻）」印有り。
105	第43図 写真図版 30上段	碗類 Ⅲ-A-1	素焼き（白）	１区石垣背後 上層ⅲ	高台は幅が広く、低い。体部は直立。口縁部直立。	内・外面とも回転ナデ調整。	体部外面に「六十二」の墨書。底部外面　「千鳥（小陰刻）」印有り。
106	第43図 写真図版 30上段	碗類 Ⅲ-A-1	素焼き（柿）	１区石垣背後 上層ⅰ	高台は幅が広く比較的高い。体部は直立。口縁部直立。	内・外面とも回転ナデ調整。	
107	第43図 写真図版 30上段	碗類 Ⅲ-A-1	三彩　C-162 N-795 N-756	１区石垣背後 上層ⅲ	高台は断面三角形状で低い。体部は僅かに外傾して、直線的に斜め上方に延びる。口縁部直立。	内・外面とも透明釉施釉の後、外面に緑・黄・茶釉の三彩釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	底部外面に「千鳥（小陰刻）」印有り。
108	第43図 写真図版 30中段	碗類 Ⅲ-A-1	素焼き（柿）	３区－Ⅲ ⅲ上	高台は細く高く「ハ」の字状に外方にひらく。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。	内・外面とも回転ナデ調整。外面の口縁部～体部上位　鉄泥漿塗布（朱漆を模倣）。外面の体部下半～底部外面　黒釉を施釉（黒漆を模倣）。高台畳付の釉カキ取り。	
109	第43図 写真図版 30上段	碗類 Ⅲ-A-2	素焼き（柿）	３区 下層	高台は比較的細く高い。体部は僅かに内彎して外上方へ延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。	内・外面とも回転ナデ調整。内面に白泥を塗布。	
110	第43図 写真図版 30上段	碗類 Ⅲ-A-2	素焼き（白）	表層	高台は外縁部を残して削り出す。体部は直線的に斜め上方に延び、上位で屈曲・直立する。口縁部は外反。	内・外面とも回転ナデ調整。	
111	第43図 写真図版 30上段	碗類 Ⅲ-A-2	C-164 立徳粉	確認調査 トレンチ１ 下層	高台は断面台形状で比較的高い。体部は直立。口縁部は僅かに外方にひらく。	内・外面とも透明釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
112	第43図 写真図版 30上段	碗類 Ⅲ-A	C-163 蛤粉	２区石垣背後 上層１	高台は比較的幅が広く「ハ」の字状に外方にひらく。体部は直立。	体部外面に黒釉と銀彩で帆掛舟に島嶼文施文。高台畳付の釉カキ取り。	
113	第43図 写真図版 30上段	碗類 Ⅲ-A	C-164 立徳粉	表層	高台は細く、比較的高い。体部は直立。	外面　鉄絵と呉須で山水文施文の後、透明釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	

施釉陶器観察表(2)

No.	挿図No. 写真図版No.	器種 器種分類	色調	出土地点	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
114	第43図 写真図版 30中段	碗類 Ⅳ-A-1	素焼き（柿）	3区－Ⅰ 赤褐色土1	高台は比較的細く高く削り出す。体部は内彎して斜め上方に延びる。口縁部はほぼ直立。	内・外面とも回転ナデ調整。	
115	第43図 写真図版 30下段	碗類 (ティーカップ) Ⅰ-B-3	素焼き（白）	表層	底部は碁笥底風。体部は内彎して斜め上方に延びる。口縁部は直立。体部外面に環状の把手貼付。	内・外面とも回転ナデ調整。	
116	第43図 写真図版 30下段	碗類 (ティーカップ) Ⅰ-B-3	N-919 モーブ	確認調査 トレンチ1 下層	底部は碁笥底。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部直立。	内・外面とも紫釉施釉。畳付の釉はカキ取り。	
117	第43図 写真図版 30下段	碗類 (ティーカップ) Ⅲ-B-1	素焼き（白）	表層	底部は碁笥底風に浅く削り出す。体部は直立。口縁部直立。体部外面に環状の把手貼付。	内・外面とも回転ナデ調整。	
118	第43図 写真図版 30下段	碗類 (ティーカップ) Ⅲ-B-1	素焼き（白）	表層	底部は碁笥底。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がり、下位で屈曲、ほぼ直立する。口縁部は直立。体部外面に環状の把手を貼付。	内・外面とも回転ナデ調整。	
119	第43図 写真図版 30下段	碗類 (ティーカップ) Ⅳ-A-1	素焼き（白）	表層	平底。高台は周縁部を残して浅く削り出す。体部は大きく外反して、ほぼ直上に延びる。体部外面に環状の耳を貼付。	内・外面とも回転ナデ調整。	
120	第43図 写真図版 29下段	碗類 杯 Ⅰ-A-3	N-921 菖蒲色	1区石垣背後 中層i	型作り成形。高台の平面形は四隅を切った方形。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部はそのまま上方に挽き上げる。	内面　透明釉。外面　紫釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	底部外面に「千鳥（小陰刻）」印有り。
121	第43図 写真図版 29下段	碗類 杯 Ⅰ-A-2	C-164 立徳粉	表層	高台は比較的細く、高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は僅かに外方にひらく。	内・外面とも透明釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
122	第43図 写真図版 29下段	碗類 杯 Ⅰ-A-2	C-162 胡粉	表層	器壁は全体に薄い。高台は細く高く、「ハ」の字状に外方にひらく。	内・外面とも透明釉施釉の後、底部内面に赤絵で海老文施文。高台裏　露胎。	
123	第43図 写真図版 29下段	碗類 杯 Ⅰ-A	C-162 胡粉	残土一括	器壁は全体に薄い。高台は非常に高く細く、「ハ」の字状に外方にひらく。	内・外面とも透明釉施釉の後、底部内面に朱・黒釉と金彩で文字文（和歌か？）施文。高台畳付の釉カキ取り。	
124	第44図 写真図版 31上段	鉢A類 Ⅰ-A	素焼き（白）	表層	平底。高台は断面台形状の比較的低い輪高台。体部は大きく内彎。口縁部は内側にひき出す。	内・外面とも回転ナデ調整。	底部外面に「ＪＡＰＡＮ」印有り。
125	第44図 写真図版 31上段	鉢A類 Ⅰ-B	素焼き（白）	表層	水挽きロクロ成形。底は丸底に近い。底部外面を碁笥底状に浅く削り出す。体部は内彎。口縁部は型打ちで方形に成形。	内・外面とも回転ナデ調整。	浅鉢　変形。
126	第44図 写真図版 31中段	鉢A類 Ⅰ-C	C-184 鸚鵡緑	表層	平底。底部外面に団子状の低い脚を3ヶ所貼付。体部は大きく内彎。口縁部内傾。	内・外面とも緑釉施釉。脚の先端の釉カキ取り。	底部外面に黒字で「JAPAN」印有り。
127	第44図 写真図版 31中段	鉢A類 Ⅰ-C	素焼き（白）	表層	平底。底部外面に扁平な脚を貼付。体部は大きく内彎。口縁部は内傾。	内・外面ともヨコナデ調整。	底部外面に「JAPAN」印有り。
128	第44図 写真図版 32中段	鉢A類 Ⅱ-A-3-a	素焼き（柿）	2区石垣背後 中層1	平底。高台は断面台形状の比較的高い輪高台。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内・外面とも回転ナデ調整。	
129	第44図 写真図版 32下段	鉢A類 Ⅱ-A-3-a	N-829 若草色	2区石垣背後 中層1	水挽きロクロ成形。高台は比較的高い。平底。体部は僅かに内彎気味に外上方へ延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内・外面とも緑釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
130	第44図 写真図版 32下段	鉢A類 Ⅱ-A-3-a	C-184 鸚鵡緑	1区石垣背後 h層	水挽きロクロ成形。高台は比較的幅が広く、高い。平底。体部は僅かに内彎気味に外上方へ延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内・外面とも緑釉施釉。	
131	第44図 写真図版 32下段	鉢A類 Ⅱ-A-3-a	三彩	表層	水挽きロクロ成形。高台は比較的高い。体部は僅かに内彎して外上方へ延びる。口縁端部は丸味をもつ。	体部外面は透明釉施釉の後、黄・緑・茶の三彩釉を掛け分ける（唐三彩を模倣）。内面・底部外面　透明釉施釉。	
132	第44図 写真図版 32中段	鉢A類 Ⅱ-A-3-a	N-740 蒲色	2区石垣背後 上層1	平底。高台は断面台形状の比較的高い輪高台。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内・外面とも透明釉施釉。	
133	第44図 写真図版 31下段	鉢A類 Ⅱ-A-3-a	素焼き (練込み)	表層	胎土は赤土と白土の交胎陶。高台は内側面を削り込む凹形高台。高台は幅が広く、低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は上面に水平に端面をもつ。内・外面ともヘラ削りにより器面に凹凸が見られる（木製品を模倣）。	内・外面とも回転ナデの後、ヘラ削り。	赤土が流れて木の年輪状に見える。
134	第44図 写真図版 31下段	鉢A類 Ⅲ-A-3-a	C-162 胡粉	確認調査 表採	水挽きロクロ成形。高台は低い。平底。体部はほぼ直立。口縁端部は丸味をもつ。	体部外面に鉄釉で竹文施文の後、内・外面とも透明釉施釉。器面に細かい貫入。口縁部内面の釉カキ取り。	
135	第44図 写真図版 33上段	鉢A類 Ⅱ-A-3-b	素焼き（柿）	2区石垣背後 上層1	平底。高台は断面台形状の比較的高い輪高台。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は波状に成形。	内・外面とも回転ナデ調整。	
136	第44図 写真図版 33中段	鉢A類 Ⅱ-A-3-b	素焼き（白）	2区石垣背後 上層1	水挽きロクロ成形。高台は比較的高い。体部は内彎して外上方へ延びる。口縁部は波状に成形。	内・外面とも回転ナデ調整。体部外面ヘラ彫りで草花文施文（水仙）。	

施釉陶器観察表(3)

No.	挿図No. 写真図版No.	器種 器種分類	色調	出土地点	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
137	第44図 写真図版 33上段	鉢A類 Ⅱ-A-3-b	N-740 蒲色	表層	平底。高台は断面台形状の比較的高い輪高台。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。口縁部は波状に成形。	内・外面とも透明釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	底部外面に「千鳥(小陰刻)」印有り。
138	第44図 写真図版 33上段	鉢A類 Ⅱ-A-3-b	素焼き（柿）	残土一括	平底。高台は断面台形状の比較的高い輪高台。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は波状に成形。	内・外面とも回転ナデ調整。底部内面・体部外面に白泥・鉄釉・緑釉で菊花文施文。	
139	第44図 写真図版 33下段	鉢A類 Ⅱ-D-1	素焼き（白）	2区石垣背後 中層1	水挽きロクロ成形。高台は凹形高台。底部の器壁は厚い。体部は直線的にほぼ直上に延びる。口縁部直立。口縁端部は上面に水平に端面をもつ。	内・外面とも回転ナデ調整。	
140	第44図 写真図版 33下段	鉢A類 Ⅱ-D-1	素焼き（白）	2区石垣背後 上層1	水挽きロクロ成形。高台は凹形高台。体部はほぼ直上に延びる。口縁部直立。口縁端部は上面に水平に端面をもつ。	内・外面とも回転ナデ調整。体部外面に型作りの桜花文貼付。葉は鉄釉で施文。	
141	第44図 写真図版 33下段	鉢A類 Ⅱ-D-1	外面　N-922 半色 内面　C-162 胡蝶	1区石垣背後 上層i	水挽きロクロ成形。高台は凹形高台。体部はほぼ直上に延びる。口縁部直立。口縁端部は水平に端面をもつ。	体部外面に草葉文をヘラ描き施文。内面・底部外面は透明釉、体部外面　紫釉、草葉部は緑釉をそれぞれ施釉。	
142	第44図 写真図版 33下段	鉢A類 Ⅱ-D-1	素焼き（柿）	表層	平底。高台は内側面を削る凹形高台。体部は直立。口縁部は上面に水平に端面をもつ。	内・外面とも回転ナデ調整。	
143	第44図 写真図版 33下段	鉢A類 Ⅱ-D-1	N-740 蒲色	1区石垣背後 上層i	平底。高台は内側面を削る凹形高台。体部は直立。口縁部は上面に水平に端面をもつ。	内・外面とも透明釉施釉。高台畳付の釉はカキ取り。	口縁部上面に重ね焼痕。
144	第44図 写真図版 33下段	鉢A類 Ⅱ-D-1	N-806 レモン色	2区石垣背後 上層1	水挽きロクロ成形。高台は凹形高台。体部はほぼ直上に延びる。口縁部直立。口縁端部は上面に水平に端面をもつ。	内・外面とも黄色釉施釉。	
145	第44図 写真図版 33下段	鉢A類 Ⅱ-D-1	C-164 立徳粉	確認調査 トレンチ2 下層	水挽きロクロ成形。高台は凹形高台。体部はほぼ直上に延びる。口縁部直立。口縁端部は水平に端面をもつ。	内・外面とも透明釉施釉。	
146	第44図 写真図版 34上段	鉢A類 Ⅱ-A-4	N-806 レモン色 N-846 鸚鵡緑	1区石垣背後 上層i	高台は比較的細く高く、「ハ」の字状に外方にひらく。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は僅かに外方にひらく。口縁部は小さく玉縁状に肥厚。	体部外面　黄釉施釉の後、緑釉を飴状に流し掛け。内面・底部外面　黄釉のみ施釉。	
147	第45図 写真図版 34上段	鉢A類 Ⅱ-A-4	素焼き（白）	3区－V 41層（iii）	水挽きロクロ成形。全体に器壁は薄い。高台は細く、高い（貼付高台）。体部は外反気味に外上方へ延びる。口縁部は大きく外方にひらく。口縁端部は尖り気味。	内・外面とも回転ナデ調整。	
148	第45図 写真図版 34上段	鉢A類 Ⅱ-A-5	素焼き（白）	1区石垣背後 中層i	水挽きロクロ成形。高台は細く、高い（貼付高台）。体部は内彎。口縁部は外方に大きくひらき、端部は直上につまみ上げる。	内・外面とも回転ナデ調整。	
149	第45図 写真図版 34上段	鉢A類 Ⅱ-A-5	素焼き（白）	2区石垣背後 上層1	水挽きロクロ成形。高台は比較的低い。平底。体部は僅かに内彎して直上に延びる。口縁部直立。口縁端部は丸味をもつ。内面の口縁部と体部の界に段をもつ。	内・外面とも回転ナデ調整。体部外面　型作りの桜花を貼付。枝葉は鉄釉で施文。蕾は白泥を貼付。	
150	第45図 写真図版 31下段	鉢A類 Ⅲ-A-1-a	素焼き（白）	1区石垣背後 中層i	水挽きロクロ成形。底径に対する器高の比率が低い。平底。高台は比較的幅が広く、低い。体部は直立。口縁端部上面は水平に端面を持つ。	内・外面とも回転ナデ調整。	
151	第45図 写真図版 31下段	鉢A類 Ⅲ-A-1-a	素焼き（白）	表層	水挽きロクロ成形。平底。低い高台をもつ。体部は直立。口縁端部上面は水平に端面をもつ。	内・外面とも回転ナデ調整。体部外面に型作りの桜花文貼付。枝葉は鉄釉で施文。	
152	第45図 写真図版 31下段	鉢A類 Ⅲ-A-1-a	素焼き（白）	表層	水挽きロクロ成形。平底。高台は浅く削り出す。体部は僅かに内彎気味に直上に延びる。口縁部直立。口縁端部上面は水平に端面をもつ。	内・外面とも回転ナデ調整。体部外面に型作りの桜花文を貼付。枝葉は鉄釉で施文。	鉢　筒形（大）。
153	第45図 写真図版 31下段	鉢A類 Ⅲ-A-1-b	C-184 鸚鵡緑	1区石垣背後 上層i	体部はほぼ直立。体部外面に型作りの梅花文施文。	内・外面とも緑釉施釉。花弁は透明釉、花芯は黄釉をそれぞれ施釉。	
154	第45図 写真図版 34下段	鉢A類 Ⅲ-A-1-b	素焼き（柿）	1区石垣背後 上層iii	平底。高台は外縁部を残して浅く削り出す。体部は僅かに外傾、直線的に上方に延びる。口縁端部は上面に端面をもつ。体部外面中位に1条、下位に2条、それぞれ凸帯がめぐる（桶のタガを表現）。	内・外面とも回転ナデ調整。	
155	第45図 写真図版 34下段	鉢A類 Ⅲ-A-1-b	練込み C-145　牙黄 N-740　蒲色	1区石垣背後 h層	胎土は白土と赤土の交胎で赤土が縞状に見える。平底。高台は外縁部を残して浅く削り出す。体部は僅かに外傾して斜め上方に延びる。口縁部は上面に水平に端面をもつ。体部外面中位・下位に凸帯がめぐる（桶のタガを表現）。	内・外面とも回転ナデ調整。	
156	第45図 写真図版 34中段	鉢A類 Ⅲ-A-1-b	C-162 胡粉	表層	水挽きロクロ成形。底径に対する器高の比率が低い。平底。高台は比較的幅が広く、低い。体部はほぼ直立。口縁端部は上面に端面をもつ。体部外面下位、中央にそれぞれ1条の凸帯が廻る（桶のタガを表現）。	体部外面　透明釉施釉。	

施釉陶器観察表(4)

No.	挿図No. 写真図版No.	器種 器種分類	色調	出土地点	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
157	第45図 写真図版 34中段	鉢A類 Ⅲ-A-1-b	N-806 レモン色	3区－Ⅳ 黒褐色土4	水挽きロクロ成形。底径に対する器高の比率が低い。平底。高台は比較的幅が広く、低い。体部は直立。口縁端部は上面に端面をもつ。体部外面下位に2条、中央に1条の凸帯が廻る（桶のタガを表現）。	内・外面とも黄釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
158	第45図 写真図版 34中段	鉢A類 Ⅲ-A-1-b	N-795 鬱金色	表層	水挽きロクロ成形。底径に対する器高の比率が高い。平底。高台は比較的幅が広く、低い。体部外面の下位に2条、中央に1条の凸帯が廻る（桶のタガを表現）。口縁端部は上面に端面をもつ。	内・外面とも褐釉を施釉。	
159	第45図 写真図版 34下段	鉢A類 Ⅲ-A-1-b	N-740 蒲色	3区－Ⅳ ii	平底。高台は外縁部を残して浅く削り出す形。体部は僅かに外傾して直線的に斜め上方に延びる。体部外面下位に沈線1条。体部外面中央に低い凸帯1条。（いずれも桶のタガを表現。）	内・外面とも透明釉施釉。	
160	第45図 写真図版 34中段	鉢A類 Ⅲ-A-1-b	三彩	表層	水挽きロクロ成形。底径に対する器高の比率が高い。平底。高台は比較的幅が広く、低い。体部はほぼ直立。口縁端部は上面に端面をもつ。体部外面の下位に2条、中央部に1条の凸帯が廻る（桶のタガを表現）。	体部外面は透明釉施釉の後、黄・茶・緑の三彩釉を掛け分ける（唐三彩を意識）。内面・底部外面　透明釉施釉。	
161	第45図 写真図版 34下段	鉢A類 Ⅲ-A-1-b	素焼き（柿）	表層	平底。高台は比較的高くつくり出す。高台に半円形の透かしを3ヶ所つくる。体部は僅かに外傾して、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は上面に水平に端面をもつ。体部外面中位に1条、下位に2条、それぞれ凸帯が廻る（桶のタガを表現）。	内・外面とも回転ナデ調整。	
162	第45図 写真図版 31下段	鉢A類 Ⅲ-A-1-b	素焼き（白）	3区－Ⅳ 黒褐色土2	水挽きロクロ成形。底径に対する器高の比率が高い。器壁は全体に比較的薄い。平底。高台は比較的低い。体部は直立。口縁端部は上面に水平に端面をもつ。体部外面上位に凸帯が1条廻る（桶のタガを表現）。	内・外面とも回転ナデ調整。	
163	第45図 写真図版 35上段	鉢A類 Ⅲ-A-1-b	N-861 水浅葱	表層	水挽きロクロ成形。平底。低い高台をもつ。体部は直立。口縁部は外方に水平に折り曲げる。	内・外面とも淡緑色釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	底部外面に「JAPAN」印有り。
164	第45図 写真図版 35上段	鉢A類 Ⅲ-A-2-b	素焼き（白）	表層	型作り成形。平面形状は六角形。平底。底部外面に団子状の脚を3ヶ所貼付。体部は僅かに外傾して直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方に水平に折り曲げる。口縁部上面は水平に端面をもつ。底部に穿孔1ヶ所。	外面　ナデ調整。	
165	第45図 写真図版 35上段	鉢A類 Ⅲ-A-2-b	N-806 レモン色	1区石垣背後 e層	型作り成形か。平底。高台は細い。高台は3ヶ所、半月形の抉りを入れる。体部は直立。口縁部は外方に折り曲げる。口縁端部上面に水平に端面をもつ。体部に穿孔1ヶ所。	口縁部内面～外面　黄釉施釉。内面露胎。	植木鉢。
166	第45図 写真図版 35中段	鉢A類 Ⅰ-B	素焼き（白）	表層	型作り成形。平面形は四隅を扇形にくぼませた方形。底部はやや上げ底。高台は低い。体部は僅かに内彎。口縁部上面に水平に端面をもつ。体部外面は型押しで壽字文・唐草文を施文。底部内面　二重円に壽字文施文。	内面・底部外面　ナデ調整。	
167	第45図 写真図版 35中段	鉢A類 Ⅱ-A	N-806 レモン色	1区石垣背後 g層	型作り成形。底部の平面形は四隅をくぼませた方形。高台は外縁を残す形。体部は直線的に斜め上方に延びる。	内・外面とも黄釉施釉。畳付の釉カキ取り。	底部外面に「日本⑦」小印有り。
168	第45図 写真図版 35中段・67下段	鉢A類 Ⅱ-C	N-921 菖蒲色	表層	型作り成形。平面形は方形。底部の四隅を押し出して低い脚を作り出す。	内・外面とも紫釉施釉。脚の先端は露胎。	
169	第45図 写真図版 35中段	鉢A類 Ⅰ-B	素焼き（白）	3区－Ⅵ 黒褐色土1	型作り成形。高台は平底高台。口縁部の平面形状は六角形。体部は直線的に斜め上方に立ち上がり、中位で屈曲し、直立する。口縁端部上面は水平に端面をもつ。	内・外面ともヨコナデ調整。	
170	第45図 写真図版 35下段	鉢A類 Ⅰ-B	素焼き （練込み）	表層	型作り成形。胎土は赤土と白土の交胎。赤土が縞状に見える。全体の器形は太鼓形。底部は上げ底風。体部は内彎。	体部外面下位～底部外面と内面は白泥を塗布。体部外面下位に鉄釉で列点文施文（太鼓の鋲を表現）。	
171	第45図 写真図版 35中段	鉢A類 Ⅰ-A	素焼き（白）	2区石垣背後 上層1	型作り成形。口縁部・高台の平面形状は楕円形。高台は比較的細く、高い（型作り・貼付け高台）。体部は内彎して外上方へ延びる。口縁部は花弁状に成形。	内・外面ともナデ調整。	
172	第46図 写真図版 36上段	鉢B類 （重ね鉢） Ⅰ-A-1	N-802 黄水仙	表層	平底。高台は断面台形状で低い。体部は内彎。口縁部外面に水平に延びる注口貼付。	内・外面とも黄釉施釉。	底部外面に目跡3ヶ所。
173	第46図 写真図版 36上段	鉢B類 （重ね鉢） Ⅰ-A-1	N-826 若芽色	表層	底部は外縁部を浅く削り出す。体部は内彎。口縁端部上面は水平に面取り。	内・外面とも淡黄緑色釉施釉。底部外縁部は露胎。	底部外面に目跡3ヶ所。
174	第46図 写真図版 36上段	鉢B類 （重ね鉢） Ⅲ-A-1	N-806 レモン色	2区石垣背後 上層1	高台は断面三角形状の低い輪高台。体部は直立。口縁端部は水平に面取り。	内・外面とも黄釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	

施釉陶器観察表(5)

No.	挿図No. 写真図版No.	器種 器種分類	色調	出土地点	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
175	第46図 写真図版 36上段	鉢B類 (重ね鉢) Ⅲ-A-2	素焼き（白）	1区石垣背後 上層 iii	高台は断面三角形状の低い輪高台。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	内・外面とも回転ナデ調整。	
176	第46図 写真図版 36上段	鉢B類 (重ね鉢) Ⅲ-A-2	C-145　牙黄 N-843　若竹色	1区石垣背後 上層 i	高台は断面三角形状の低い輪高台。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	内・外面とも透明釉施釉。口縁部～体部外面。緑釉を流し掛け。	底部外面に「千鳥（小陰刻）」印有り。
177	第46図 写真図版 36上段	鉢B類 (重ね鉢) Ⅲ-A-2	N-740 蒲色	表層	平底。高台は細く低い輪高台。体部は直立。底部内面に浅い段をもつ。	内・外面とも透明釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	底部外面に「千鳥（小陰刻）」印有り。
178	第46図 写真図版 36上段	鉢B類 (重ね鉢) Ⅲ-B-2	素焼き（白）	コーカシ窯 解体中	高台は碁笥底風に浅く削り出す。底部外側面を斜め方向に面取り。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	内・外面とも回転ナデ調整。	
179	第46図 写真図版 36上段	鉢B類 (重ね鉢) Ⅲ-B-2	C-162 胡粉	1区石垣背後 g層	高台は外縁を残して浅く削り出す。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	内・外面とも透明釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
180	第46図 写真図版 36上段	鉢B類 (重ね鉢) Ⅳ-A-1	素焼き（白）	1区石垣背後 h層	水挽きロクロ成形。高台は細く低い。体部は短く直立。口縁部短く直立。	体部外面に凹線が廻る。内・外面とも強い回転ナデ調整。	
181	第46図 写真図版 36中段	鉢C類 (香炉) Ⅰ-A-3	素焼き（白）	表層	高台は細く、比較的高い。高台には3ヶ所半円形の透かしを入れる。体部は大きく内彎。口縁部は内傾。	内・外面とも回転ナデ調整。	
182	第46図 写真図版 36中段	鉢C類 (香炉) Ⅰ-B-2	素焼き（白）	表層	高台は断面台形状の低い輪高台。体部は内彎気味にやや内傾して上方に延びる。口縁部は外反。	内・外面とも回転ナデ調整。	
183	第46図 写真図版 36中段	鉢C類 (香炉) Ⅰ-B-2	N-740 蒲色	1区石垣背後 上層 i	高台は比較的細く低い輪高台。体部は大きく内彎して立ち上がり、下位で屈曲し、やや内傾する。口縁部は外反。	内・外面とも透明釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
184	第46図 写真図版 36中段	鉢C類 (香炉) Ⅰ-B-2	N-795 鬱金色	3区－V v層	高台は断面台形状の比較的低い輪高台。体部は僅かに内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁部　若干外方にひらく。口縁部側面に端面をもつ。	口縁部内面～外面　褐釉施釉。体部内面・高台畳付は露胎。	
185	第46図 写真図版 36下段	鉢C類 (香炉) Ⅱ-B-3	C-251 深竹月	表層	丸底。底部外面中央を浅く碁笥底風に削り出す。底部外面に先端の曲がった脚を3ヶ所貼付。体部は大きく内彎。無頸。口縁部上面に耳を2ヶ所貼付。	内・外面とも瑠璃釉施釉。脚の先端は露胎。	
186	第46図 写真図版 36下段	鉢C類 (香炉) Ⅱ-B-1	素焼き（柿）	1区石垣背後 上層 i	平底。体部は内彎して外上方へ延びる。頸部は短く直立。口縁部は小さい玉縁状に肥厚する。体部下位に先の曲がった脚を3ヶ所貼付。体部上位に把手の貼付痕2ヶ所。	内・外面とも回転ナデ調整。	
187	第46図 写真図版 36下段	鉢C類 (香炉) Ⅱ-B-1	N-826 若芽色	表層	平底。先端が外方に屈曲する脚を体部外面下位に3ヶ所貼付。体部は僅かに内彎して斜め上方に延び上位で屈曲、水平方向に大きく内傾する（肩が張り出す）。頸部は短く直立。口縁端部は小さな玉縁状に肥厚する。肩部上面に耳を2ヶ所貼付。	内・外面とも緑釉施釉。脚の先端は露胎。	形態は古代の青銅器写し。
188	第46図 写真図版 36下段	鉢C類 (香炉) Ⅰ-B-2	素焼き（白）	表層	平底。逆円錐状の脚を底部外面に貼付。体部は内彎して立ち上がり、中位で屈曲。上半部はほぼ直立する。口縁部は断面長方形状に肥厚する。口縁部上面は水平に端面をもつ。	体部内・外面　回転ナデ調整。口縁部上面に鉄釉施釉。	
189	第46図 写真図版 35下段	鉢C類 (香炉) Ⅱ	練り込み C-145　牙黄 N-740　蒲色	1区石垣背後 上層 ii	底部は白土。体部は赤土と白土の交胎。脚部は獣足で貼付。底部は平底。底部の外側面に円形浮文貼付。体部はほぼ直立。	内・外面とも透明釉施釉。	
190	第46図 写真図版 36下段	鉢C類 (香炉) Ⅱ-B-3	N-790 支子色	表層	底部はやや上げ底風。内面を押し出して、3ヶ所の脚を作り出す。体部は大きく内彎。口縁部は内側に引き出す。	内・外面とも黄褐色釉施釉。脚の先端は露胎。	底部外面に「ＪＡＰＡＮ」印有り。
191	第46図 写真図版 36下段	鉢C類 (香炉) Ⅲ-C-3	素焼き（白）	表層	型作り成形。平底。底部内面を押して三角錐状の脚を3ヶ所作り出す。体部は直立。口縁部は内側に水平に引き出す。口縁部の平面形は六角形。上面は円形に穿孔。	内面　ナデ調整。外面　ヨコナデ調整。	底部外面に「ＪＡＰＡＮ」印有り。
192	第46図 写真図版 37下段	ⅢA類 (丸Ⅲ) Ⅰ-A-1	素焼き（柿）	2区石垣背後 上層 1	平底。高台は外縁部を残して浅く削り出す輪高台。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	内・外面とも回転ナデ調整。底部内面　白泥・緑釉で梅花文施文。	
193	第46図 写真図版 37下段	ⅢA類 (丸Ⅲ) Ⅰ-A-1	素焼き（柿）	2区石垣背後 上層 1	平底。高台は外縁部を残して浅く削り出す形。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	内・外面とも回転ナデ調整。底部内面に白泥・緑釉でナデシコ文施文。	
194	第46図 写真図版 37下段	ⅢA類 (丸Ⅲ) Ⅰ-A-1	N-740 蒲色	1区石垣背後 h層	平底。高台は外縁部を残して浅く削り出す。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	内・外面とも透明釉施釉。	底部外面に目跡3ヶ所。
195	第46図 写真図版 37下段	ⅢA類 (丸Ⅲ) Ⅰ-A-1	C-184 鸚鵡緑	2区石垣背後 上層 1	高台は断面三角形状の低い輪高台。体部は内彎。口縁端部は丸味をもつ。	内・外面とも緑釉施釉。	底部外面に目跡3ヶ所。
196	第46図 写真図版 37下段	ⅢA類 (丸Ⅲ) Ⅰ-A-1	N-806 レモン色	1区石垣背後 上層 iii	高台は断面三角形状で低く削り出す。体部は内彎。口縁端部　丸味をもつ。	内・外面とも黄釉施釉。内面　朱・緑・金彩で草花文施文。口縁端部金彩。	底部外面に目跡2ヶ所。器面に細かい貫入。

施釉陶器観察表(6)

No.	挿図No. 写真図版No.	器種 器種分類	色調	出土地点	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
197	第46図 写真図版 38上段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅰ-A-1	素焼き（白）	2区石垣背後 上層2	平底。高台は断面台形状の低い輪高台。体部は内彎。口縁端部は尖り気味。内面　型押しで波に鯛文施文。	内・外面ともナデ調整。	底部外面に「千鳥（山波）」印有り。
198	第46図 写真図版 38上段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅰ-A-1	素焼き（白）	1区石垣背後 中層 i	平底。高台は断面三角形状の低い貼付高台。体部は内彎。口縁端部は丸味をもつ。	内面　型押しで半截菊花文施文。体部外面ヨコナデ調整。	
199	第46図 写真図版 38上段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅰ-A-1	素焼き（白）	1区石垣背後 中層 i	平底。高台は断面台形状の輪高台。体部は内彎。口縁端部は丸味をもつ。内面は型押しで蝶に牡丹文施文。蝶と花びらは陽刻。葉は陰刻。	口縁部内・外面とも回転ナデ調整。	
200	第46図 写真図版 38上段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅰ-A-1	素焼き（白）	1区石垣背後 上層 ii	平底。高台は断面台形状の輪高台。体部は内彎。口縁端部は丸味をもつ。内面　型押しで共に「■品評會賞品」銘施文。	内・外面ともナデ調整。	底部外面に「千鳥（小陰刻）」印有り。
201	第47図 写真図版 38中段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅰ-A-1	C-184 鸚鵡緑	表層	底部の器壁は厚い。体部は内彎。口縁端部は丸味をもつ。底部内面に横向きの龍文施文。	内・外面とも緑釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
202	第47図 写真図版 38上段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅰ-A-1	C-184 鸚鵡緑	1区石垣背後 上層 iii	高台は断面台形状の低い貼付高台。平底。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面　型押しで菊花文施文。	内・外面とも緑釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
203	第47図 写真図版 38上段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅰ-A-1	三彩	表層	平底。高台は断面台形状の低い輪高台。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内・外面とも緑・茶・褐釉で施文の後、透明釉施釉。三彩Ⅲ。底部外面は透明釉のみ施釉。	
204	第47図 写真図版 38下段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅰ-A-1	素焼き（白）	表層	平底。高台は断面台形状の低い輪高台。体部は内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面　型押しで網代文・花文施文。体部外面全体に沈線1条施文。	口縁部内外面・底部外面　回転ナデ調整。	
205	第47図 写真図版 38下段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅰ-A-1	素焼き（白）	残土一括	高台は幅が広く低い貼り付け高台。高台の平面形状は六角形。体部は僅かに内彎気味に緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面　回転ナデ調整。体部外面　ヘラ削り。	底部外面（高台裏）に「珉平（振り平）」印有り。
206	第47図 写真図版 39上段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅰ-A-1	N-806 レモン色	1区石垣背後 上層 i	高台は断面三角形状の低い輪高台。体部は内彎。口縁端部は小さい玉縁状に肥厚する。	内・外面とも黄釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	器面に細かい貫入。
207	第47図 写真図版 39中段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅰ-A-2	C-251 深竹月	表層	平底。高台は断面三角形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反。内面に型押しでとんぼ施文。	内・外面とも青釉（瑠璃釉）施釉。	底部外面に目跡3ヶ所。
208	第47図 写真図版 39中段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅰ-A-2	素焼き（柿）	3区－Ⅳ 黒褐色土5 (最下層)	平底。高台は外縁部を残して比較的浅く削り出す。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反。底部内面に、白泥・緑釉で菊花文施文。	内・外面とも回転ナデ調整。	
209	第47図 写真図版 39中段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅰ-A-2	N-740 蒲色	表層	平底。高台は外縁部を残して比較的浅く削り出す形。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反。	内・外面とも透明釉施釉。高台畳付の釉はカキ取り。	
210	第47図 写真図版 39中段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅰ-A-2	素焼き（白）	表層	高台は断面台形状の低い輪高台。体部は内彎。口縁部は外反。	内・外面とも回転ナデ調整。内面　鉄釉で施文。	
211	第47図 写真図版 39中段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅰ-A-2	素焼き（白）	表層	底部の器壁は厚い。高台は比較的細い。体部は僅かに内彎。口縁部は外方にひらく。底部内面に正面向きの龍文施文。	内・外面とも回転ナデ調整。	
212	第47図 写真図版 39中段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅰ-A-2	素焼き（白）	1区石垣背後 上層 i	高台は断面長方形状の比較的高い高台。体部は緩やかに斜め上方に延び、中位で屈曲。口縁部は外方にひらく。口縁端部は上方につまみ上げる。内面　型押しで網代文・牡丹文施文。	外面　回転ナデ調整。	
213	第48図 写真図版 39下段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅰ-A-2	素焼き（白）	3区－Ⅲ iii上	器壁は比較的厚い。平底。高台は断面台形状で比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外反。	内面　型押しで草花文施文。外面　ヘラ削り。	
214	第48図 写真図版 39下段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅰ-A-2	C-193 玉緑	2区石垣背後 上層1	平底。高台は断面台形状の端正な貼付高台。体部は内彎気味に緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は水平に外方に折り曲げる。内面に型押しで菊花文施文。	内・外面とも淡い緑釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。内面の菊花は、花弁は透明釉、葉は濃い緑釉をそれぞれ施釉。	器面に細かい貫入。
215	第48図 写真図版 39下段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅰ-A	N-886 花浅葱	1区石垣背後 上層 i	平底。高台は断面三角形状の低い貼付高台。体部は緩やかに斜め上方に延びる。内面　型押しで鳥（鳳凰）文施文。	内・外面とも青色釉施釉（瑠璃釉）。高台畳付の釉カキ取り。施文部は瑠璃地に鉄・緑・黄・紫・白釉を施釉。	
216	第48図 写真図版 39下段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅰ-B-1	素焼き（白）	1区石垣背後 上層0	底部は碁笥底。体部は内彎。口縁端部は丸味をもつ。	内・外面とも回転ナデ調整。	
217	第48図 写真図版 39下段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅰ-B-1	素焼き（白）	表層	器壁は全体に比較的厚い。底部　碁笥底。体部は内彎。口縁端部は丸味をもつ。	内・外面とも回転ナデ調整。底部外面ヘラ削り。	底部内面に煤付着。
218	第48図 写真図版 40上段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅱ-A-1	素焼き（白）	3区－Ⅴ 41層（iii）	高台は幅が細く、比較的高い。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁部内面に沈線1条。	内・外面とも回転ナデ調整。内面　型押しで草魚文施文。	
219	第48図 写真図版 40上段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅱ-A-2	C-184 鸚鵡緑	2区石垣背後 上層1	高台は断面三角形状の低い輪高台。体部は直線的に緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は外方に水平に折り曲げ。底部内面　型押しで花文施文。	内・外面とも緑釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。底部内面　黄・緑・黄釉で花文施釉。	

施釉陶器観察表(7)

No.	挿図No. 写真図版No.	器種 器種分類	色調	出土地点	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
220	第48図 写真図版 40中段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅲ-A-1	素焼き（白）	表層	高台は、断面三角形状の低い輪高台。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内・外面とも回転ナデ調整。	
221	第48図 写真図版 40中段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅲ-A-2	素焼き（白）	1区石垣背後 上層0	高台は断面台形状の低い輪高台。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反。口縁端部は尖り気味。	内・外面とも回転ナデ調整。	底部外面に「千鳥（小陰刻）」印有り。
222	第48図 写真図版 40中段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅲ-A-2	素焼き（白）	表層	平底。高台は断面台形状で低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は水平に端面をもつ。底部内面に正面向きの龍文を陽刻で施文。爪は3本。	内・外面とも回転ナデ調整。	
223	第48図 写真図版 40中段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅲ-C-1	N-806 レモン色	確認調査 トレンチ1 下層	高台は外縁を残して浅く削り出す。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内・外面とも黄釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	底部外面に目跡3ヶ所。
224	第49図 写真図版 40中段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅲ-C-1	C-251 深竹月	表層	平底。高台は外縁部のみ残して浅く削り出す。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内・外面とも青釉（瑠璃釉）施釉。	底部外面に目跡3ヶ所。
225	第49図 写真図版 40中段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅲ-C-1	素焼き（白）	表層	平底。高台は周縁部のみ残して浅く削り出す。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面型押しで界線1条・葡萄唐草文・界線1条・鳳凰文施文。	内・外面とも回転ナデ調整。	
226	第49図 写真図版 40下段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅳ-C-2	内外面及び口縁 N-922半色 内面底部 N-860 薄浅葱	2区石垣背後 上層1	高台は周縁部のみを残し、浅く削り出す。体部は外反気味に斜め上方に延びる。口縁部は外反。	体部内面～外面　紫釉施釉。底部内面　青・緑・白・鉄・水色の釉で富士に帆掛舟文を施文。	底部外面に目跡。 「DANTO-KAISHA 千鳥（小陰刻）　AWAJI」印有り。
227	第49図 写真図版 40下段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅳ-C-2	素焼き（白）	表層	高台は外縁部を残して浅く削り出す。体部は外反気味に斜め上方に延びる。口縁部は外反。	内面　青釉で界線2条。紫・黄釉で五曜星文施文。	
228	第49図 写真図版 40下段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅳ-C-2	素焼き（白）	表層	高台は外縁部を残して浅く削り出す。体部は外反気味に斜め上方に延びる。口縁部外反。口縁端部は丸味をもつ。	内面　黒・鉄釉で松葉文施文。	
229	第49図 写真図版 40下段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅳ-C-2	素焼き（白）	表層	平底。高台は外縁部を残して浅く削り出す。体部は外反気味に斜め上方に延びる。口縁部は比較的器壁が厚く、口縁端部は丸味をもつ。	内・外面とも回転ナデ調整。底部外面　ヘラ削りの後、回転ナデ調整。	底部外面に「JAPAN」印有り。
230	第49図 写真図版 40下段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅳ-C-2	N-861 水浅葱	表層	高台は外縁部のみを残して浅く削り出す。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内・外面とも施釉。	底部外面に「JAPAN」印有り。
231	第49図 写真図版 40下段	Ⅲ A類 (丸Ⅲ) Ⅳ-C-2	C-251 深竹月	表層	高台は外縁部のみを残して浅く削り出す。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は小さく玉縁状に肥厚する。	内・外面とも青釉（瑠璃釉）施釉。	底部外面に目跡3ヶ所。 「JAPAN」印有り。
232	第49図 写真図版 41上段	Ⅲ A類 (洋Ⅲ) Ⅰ-A-1	C-164 立徳粉	表層	器壁は全体的に比較的厚い。高台は断面三角形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面　鉄・赤・黄緑・黄・紫釉で洋風の草花文施文の後、透明釉施釉。	底部外面に鳶か「TRADE MARK〈◇〉MADE IN JAPAN」銘を黒色で印刷。
233	第49図 写真図版 41上段	Ⅲ A類 (洋Ⅲ) Ⅰ-A-1	C-164 立徳粉	表層	平底。高台は断面三角形状で低い。体部は内彎、斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面　緑・茶　黄緑　青・赤釉で洋風の界線1条・横線・界線2・1条・草花文　施文。	底部外面に鳶か「TRADE MARK〈◇〉MADE IN JAPAN」銘を黒色で印刷。
234	第50図 写真図版 41上段	Ⅲ A類 (洋Ⅲ) Ⅰ-A-1	C-164 立徳粉	表層	平底。高台は断面三角形状で低い。体部は僅かに内彎して斜め上方へ延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面　赤・黄緑・青・紫釉で界線1条・草花文・界線1条　施文。	
235	第50図 写真図版 41上段	Ⅲ A類 (洋Ⅲ) Ⅰ-A-1	C-164 立徳粉	表層	平底。高台は断面三角形状で低い。体部は僅かに内彎して斜め上方へ延びる。口縁端部は丸味をもつ。器壁は比較的厚い。	体部内面に青・赤・緑釉で界線1条・菱形文・界線3条・草花文　施文。	器面に貫入あり。
236	第50図 写真図版 41中段	Ⅲ A類 (洋Ⅲ) Ⅰ-A-1	素焼き（白）	表層	平底。高台は断面台形状で低い。体部は内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内・外面とも回転ナデ調整。底部内外面・体部外面に青緑色で文字施文。	
237	第50図 写真図版 41下段	Ⅲ A類 (洋Ⅲ) Ⅰ-A-2	C-158 檸檬黄	表層	高台は断面三角形状の低い輪高台。体部は緩やかに斜め上方に延び、中位で屈曲、口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。内面の底部と体部の界に段をもつ。	内・外面とも施釉。	体部外面に目跡3ヶ所。 底部外面に「ＪＡＰＡＮ」印有り。
238	第50図 写真図版 42上段	Ⅲ A類 (洋Ⅲ) Ⅰ-A-2	素焼き（白）	表層	平底。高台は非常に低く、小さい（型作りか）。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がり、体部下位で屈曲。口縁部は外方にひらく。	内・外面とも回転ナデ調整。口縁部内面　酸化コバルトで界線2・1条。	
239	第50図 写真図版 42中段	Ⅲ A類 (洋Ⅲ) Ⅰ-A-2	素焼き（白）	表層	平底。高台は非常に低く、小さい（型作りか）。体部は内彎して斜め上方に延び、中位で屈曲。口縁部は外方にひらく。	内・外面とも回転ナデ調整。口縁部内面に酸化コバルトで界線2・1条。	
240	第51図 写真図版 42下段	Ⅲ A類 (洋Ⅲ) Ⅰ-A-2	素焼き（白）	表層	平底。高台は断面台形状で非常に低い。体部は内彎して斜め上方に立ち上がり、中位で屈曲、口縁部は外方にひらく。	内・外面とも回転ナデ調整。口縁部内面に酸化コバルトで界線2・1条。	
241	第51図 写真図版 42下段	Ⅲ A類 (洋Ⅲ) Ⅰ-A-2	素焼き（白）	表層	平底。高台は断面台形状で非常に低い。体部は内彎して斜め上方に立ち上がり、中位で屈曲、口縁部は外方にひらく。	内面　黒・赤・黄緑・黄・紫釉で、界線1条・草花文・界線1条・草花文　施文。	

施釉陶器観察表(8)

No.	挿図No. 写真図版No.	器種 器種分類	色調	出土地点	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
242	第51図 写真図版 42下段	Ⅲ A類 （洋Ⅲ） Ⅰ-A-2	C-6 荷花紅	表層	器壁は全体に比較的厚い。高台は断面台形状の比較的幅が広く低い高台。体部は内彎気味に緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は水平に外方に折り曲げる。内面の口縁部と体部の界　凹線１条。	内・外面とも施釉。高台畳付の釉カキ取り。	底部外面に「ＪＡＰＡＮ」印有り。
243	第51図 写真図版 44上段	Ⅲ B類 （丸Ⅲ変形） Ⅰ	素焼き（白）	３区－Ⅰ 赤褐色土１	型作り成形。平底。高台無し。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部内面に沈線１条。底部内面に横向きの龍を型押し施文。爪は４本。	体部内面～外面　ヨコナデ調整。底部外面　ナデ調整。	
244	第51図 写真図版 44上段	Ⅲ B類 （丸Ⅲ変形） Ⅰ	C-184 鸚鵡緑	３区－Ⅲ 黒色土１	型作り成形。平底。高台なし。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部内面に沈線１条。口縁端部は丸味をもつ。底部内面に横向きの龍を型押し施文。爪は４本。	内・外面とも緑釉施釉。	底部外面に目跡３ヶ所。
245	第51図 写真図版 43上段	Ⅲ B類 （丸Ⅲ変形） Ⅰ	C-184 鸚鵡緑	１区石垣背後 上層	型作り成形。平底。高台無し。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部内面に沈線１条。口縁端部は丸味をもつ。底部内面に横向きの龍を型押し施文。爪は４本。	内・外面とも緑釉施釉。	底部外面に目跡３ヶ所。「千鳥（小陰刻）」印有り。
246	第51図 写真図版 44中段	Ⅲ B類 （丸Ⅲ変形） Ⅱ	C-184 鸚鵡緑	１区石垣背後 g層	型作り成形。平底。体部は緩やかに斜め上方に延び、口縁部は水平に折り曲げる形。内面に型押しで網と鯛文施文。	内・外面とも緑釉施釉。	底部外面に目跡３ヶ所。「千鳥（小陰刻）」印有り。
247	第51図 写真図版 44中段	Ⅲ B類 （丸Ⅲ変形） Ⅱ	素焼き（白）	１区石垣背後 上層ii	型作り成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は花弁状に成形。	内・外面ともナデ調整。	
248	第51図 写真図版 44中段	Ⅲ B類 （丸Ⅲ変形） Ⅱ	素焼き（白）	２区石垣背後 上層１	型作り成形。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	体部内面に型押しで雲龍文？施文。	底部外面に「千鳥（小陰刻）」印有り。
249	第51図 写真図版 44中段	Ⅲ B類 （丸Ⅲ変形） Ⅲ	素焼き（白）	表層	型作り成形。平面形状は菱形or扇形。底部は外縁と低い段をもつ。内面型押しで網代文・楓文施文。	外面　ナデ調整。	
250	第51図 写真図版 44中段	Ⅲ B類 （丸Ⅲ変形） Ⅳ-A	素焼き（白）	２区石垣背後 中層１	型作り成形。平面形は桃形。高台は非常に低い。内面に型押しで葉を施文。	内・外面ともナデ調整。	
251	第51図 写真図版 44中段	Ⅲ B類 （丸Ⅲ変形） Ⅳ-B	N-806 レモン色	１区石垣背後 g層	型作り成形。平面形は六角形の花びら形。内面に型押しで花弁を施文。	内・外面とも黄釉施釉。	底部外面に目跡２ヶ所。
252	第51図 写真図版 44中段	Ⅲ B類 （丸Ⅲ変形） Ⅳ-B	素焼き（白）	２区石垣背後 中層１	平底。高台は断面半円形の非常に低い高台。体部は内彎して緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面に型押しで梅花文施文。	内・外面ともナデ調整。	
253	第52図 写真図版 44下段	Ⅲ C類 （角Ⅲ） Ⅰ-A	C-254 柏坊灰藍	表層	型作り成形。平底。高台は非常に低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。体部内面に型押しで草花文施文。	内・外面とも瑠璃釉施釉。	底部外面に目跡３ヶ所。
254	第52図 写真図版 44下段	Ⅲ C類 （角Ⅲ） Ⅰ-A	N-889 藍色	表層	型作り成形。平底。高台は非常に低い。体部は僅かに外反。口縁部の平面形は方形。内面に型押しで網代文・木ノ葉文施文。	内・外面とも瑠璃釉施釉。木ノ葉は緑釉施釉。	底部外面に目跡３ヶ所。
255	第52図 写真図版 44下段	Ⅲ C類 （角Ⅲ） Ⅰ-A	N-809 藁色	表層	型作り成形。平底。高台は非常に低い。体部は僅かに外反。口縁部の平面形は四角形。内面に型押しで網代文・木ノ葉文施文。	内・外面とも灰釉施釉。	底部外面に目跡３ヶ所。
256	第52図 写真図版 44下段	Ⅲ C類 （角Ⅲ） Ⅰ-B	素焼き（柿）	３区－Ⅳ iv層	型作り成形。口縁の平面形は四隅を切った方形。高台の平面形も同様に四隅を切った方形。高台は比較的幅が広く高いものを貼付。体部は直線的に斜め上方に緩やかに延びる。口縁部内面が僅かに肥厚。	内・外面ともナデ調整。	
257	第52図 写真図版 44下段	Ⅲ C類 （角Ⅲ） Ⅰ-C	素焼き（白）	表層	型作り成形。高台は非常に低い。平面形は四隅を扇形に凹ませる方形。底部内面に正面向きの龍文を型押し施文。爪は４本。	体部内面～底部外面　ナデ調整。	
258	第52図 写真図版 44下段	Ⅲ C類 （角Ⅲ） Ⅰ-C	N-842 青磁色	表層	型作り成形。器壁は全体に非常に厚い。口縁部の平面形は四隅を扇形に凹ませる方形。高台の平面形は西隅を切る方形。平底。高台は非常に低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。	内面に型押しで壽字文他施文。内・外面とも施釉。	底部外面に目跡３ヶ所。
259	第52図 写真図版 44下段	Ⅲ C類 （角Ⅲ） Ⅰ-C	C-169 嫩草緑	３区－Ⅵ 黒褐色土1	型作り成形。平底。高台は非常に低い。体部は僅かに内彎。口縁端部は丸味をもつ。平面形は四隅を凹ます方形。底部内面　型押しで菊花文施文。	内・外面とも灰釉施釉。	底部外面に目跡３ヶ所。
260	第52図 写真図版 43下段	Ⅲ C類 （角Ⅲ） Ⅰ-C	C-184 鸚鵡緑 内面立ち上がり及び口縁　三彩	１区石垣背後 b層	型作り成形。高台は非常に低い。平面形は四隅を扇形に凹ませる方形。底部内面に正面向きの龍文を型押し施文。爪は４本。	体部内面のみ緑・茶・黄の三彩釉施釉。底部内面及び外面は緑釉施釉。高台畳付の釉一部カキ取り。	
261	第52図 写真図版 45上段	Ⅲ C類 （角Ⅲ） Ⅰ-C	C-184 鸚鵡緑	１区石垣背後 n層	型作り成形。高台は非常に低い。平面形は四隅を扇形に凹ませる方形。底部内面に正面向きの龍文を型押し施文。爪は４本。	内・外面とも緑釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	底部外面に「千鳥（小陰刻）」印有り。
262	第52図 写真図版 44下段	Ⅲ C類 （角Ⅲ） Ⅰ-D	N-886 花浅葱	表層	型作り成形。平面形は２隅(?)をＬ字形に変形させる形。平底。高台は非常に低い。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。体部内面の１辺　型押しで網代文、底部内面に筍文？を同じく型押しで施文。	花弁は緑釉。他は内・外面とも瑠璃釉施釉。	底部外面に目跡３ヶ所。

施釉陶器観察表(9)

No.	挿図No. 写真図版No.	器種 器種分類	色調	出土地点	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
263	第52図 写真図版 45中段	ⅢC類 (角Ⅲ) Ⅰ-E	C-184 鸚鵡緑	1区石垣背後 g層	型作り成形。平面形は隅丸方形。高台の平面形は方形。高台の断面形は台形。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。底部内面に陽刻の篆書の文字文施文。	内・外面とも緑釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
264	第52図 写真図版 45下段	ⅢC類 (角Ⅲ) Ⅱ-A	C-174 深芽緑	2区石垣背後 中層3	型作り成形。平面形は長方形。高台は非常に低い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。内面に型押しで網代文・草花文を施文。	内・外面とも灰釉施釉。高台畳付の釉はカキ取り。	
265	第52図 写真図版 45下段	ⅢC類 (角Ⅲ) Ⅱ-B	素焼き（白）	3区－Ⅴ 41層（iii）	型作り成形。口縁部の平面形は四隅を切る方形。高台の平面形も四隅を切る方形。高台は貼付。平底。高台は断面台形状で低い。体部は直線的に緩やかに外上方へ延びる。口縁端部は丸く内側に引き出す。	内面　型押しで草花文施文。内面の底部と体部の界に浅い段をもつ。	
266	第52図 写真図版 45下段	ⅢC類 (角Ⅲ) Ⅱ-D	素焼き（白）	表層	型作り成形。平面形は2隅をL字形に変形させる形。平底。高台は非常に低い。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。底部内面に型押しで薔薇文施文。	内・外面ともヨコナデ調整。	
267	第52図 写真図版 45下段	ⅢC類 (角Ⅲ) Ⅱ-D	C-254 柏坊灰藍	表層	型作り成形。平面形は2隅をL字形に変形させる形。平底。高台は非常に低い。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。底部内面に型押しで牡丹文施文。	内・外面とも瑠璃釉施釉。	底部外面に目跡3ヶ所。
268	第52図 写真図版 45下段	ⅢC類 (角Ⅲ) Ⅲ-A	N-806 レモン色	1区石垣背後 上層i	型作り成形。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は外方に水平に折り曲げ。	内・外面とも黄釉施釉。	底部外面に目跡3ヶ所。 「千鳥（小陰刻）」印有り。
269	第52図 写真図版 45下段	ⅢC類 (角Ⅲ) Ⅲ-B	C-251 深竹月	確認調査 トレンチ1	型作り成形。高台は比較的幅が広く、高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は水平に端面をもつ。口縁部の平面形状は四隅を切った変形の菱形。高台の平面形状も変形の菱形。内面に型押しで牡丹文等を施文。	内・外面とも瑠璃釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
270	第53図 写真図版 46下段	ⅢD類 (角Ⅲ変形) Ⅰ	素焼き（白）	表層	型作り成形。平面形は花弁状に成形。高台の平面形も花弁形。底部内面に型押しでバラ文施文。	内・外面ともナデ調整。	
271	第53図 写真図版 46上段	ⅢD類 (角Ⅲ変形) Ⅰ	C-174 深芽緑	2区石垣背後 上層1	型作り成形。平面形は花弁状に成形。高台の平面形も花弁形。体部内面に草花文・底部内面に正面向きの龍文をそれぞれ型押しで施文。	内・外面とも灰釉施釉。	底部外面に目跡3ヶ所。 高台畳付の釉カキ取り。
272	第53図 写真図版 46上段	ⅢD類 (角Ⅲ変形) Ⅰ	C-254 柏坊灰藍	表層	型作り成形。平面形は花弁状に成形。高台の平面形も花弁形。底部内面に型押しでバラ文施文。	内・外面とも瑠璃釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
273	第53図 写真図版 46上段	ⅢD類 (角Ⅲ変形) Ⅰ	N-860 薄浅葱	表層	型作り成形。口縁部の平面形は変形の八角形。高台も同様に平面形は変形の八角形。高台は比較的幅が広く、低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は上面に端面をもつ。体部内面に型押しで草花文・正面向きの龍文を施文。	内・外面とも水色の釉を施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
274	第53図 写真図版 47上段	ⅢD類 (角Ⅲ変形) Ⅱ	C-184 鸚鵡緑 内面立ち上がり及び口縁　三彩	表層	型作り成形。平面形は花弁状。高台は断面台形状で低い。内面は型押しで花弁文施文。	内面　緑・黄・茶の三彩釉施釉。外面　緑釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。畳付に1ヶ所鉄釉で「＋」施文。	
275	第53図 写真図版 46上段	ⅢD類 (角Ⅲ変形) Ⅱ	素焼き（白）	1区石垣背後 上層i	型作り成形。高台は断面台形状の輪高台。体部は内彎気味に緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は輪花状に成形。底部内面に型押しで龍文施文。	内・外面ともナデ調整。	
276	第53図 写真図版 46上段	ⅢD類 (角Ⅲ変形) Ⅱ	N-843 若竹色	3区－Ⅴ ii層	型作り成形。高台は断面台形状の輪高台。体部は僅かに内彎。口縁部は輪花状に成形。内面　型押しで草花文・正面向きの龍文施文。爪は4本。	内・外面とも緑釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
277	第53図 写真図版 46中段	ⅢE類 (変形Ⅲ) Ⅰ	素焼き（白）	3区－Ⅴ 暗黄褐色土 (最下層)	型作り成形。高台は変形で貼付。全体の平面形状は不明。内面は型押しで花弁状に成形。底部内面も同じく型押しで流水文施文。	内・外面ともナデ調整。	
278	第53図 写真図版 46中段	ⅢE類 (変形Ⅲ) Ⅰ	素焼き（白）	3区－Ⅰ iv層	型作り成形。高台は比較的高く、「ハ」の字状に外方にひらく。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	外面　型押しで花弁状に施文。内面ヘラケズリ調整。	底部外面（高台裏）に「日本㋐」小印有り。
279	第53図 写真図版 46中段	ⅢE類 (変形Ⅲ) Ⅱ	N-860 薄浅葱	3区－Ⅰ 暗褐色土 (検出面)	型作り成形。高台の平面形は楕円形。内面　型押しで葉脈を施文。口縁部は波状に成形。	内・外面ともナデ調整。	底部外面に「千鳥（小陰刻）」印有り。
280	第53図 写真図版 46中段	ⅢE類 (変形Ⅲ) Ⅱ	素焼き（白）	表層	型作り成形。高台の平面形状は楕円形。全体を型押しで木ノ葉形に成形。内面　型押しで葉脈等を施文。	内・外面ともナデ調整。	一部に釉附着。
281	第53図 写真図版 46中段	ⅢE類 (変形Ⅲ) Ⅱ	C-174 深芽緑	2区石垣背後 上層2	型作り成形。高台の平面形は楕円形。内面は型押しで葉脈等を施文。	内・外面とも緑釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	一部に釉附着。
282	第53図 写真図版 46下段	ⅢE類 (変形Ⅲ) Ⅱ	素焼き（白）	確認調査 トレンチ1 下層	型作り成形。高台の平面形は変形。内面　型押しで葉脈等を施文。	外面　ナデ調整。	一部に釉附着。

施釉陶器観察表(10)

No.	挿図No. 写真図版No.	器種 器種分類	色調	出土地点	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
283	第54図 写真図版 46下段	ⅢE類 (変形Ⅲ) Ⅱ	素焼き（白）	確認調査 トレンチ1 下層	型作り成形。高台の平面形は変形。内面はヘラ描きで葉脈等を施文。口縁部は波形に成形。	内・外面ともナデ調整。	
284	第54図 写真図版 46下段	ⅢE類 (変形Ⅲ) Ⅱ	N-889 藍色	1区石垣背後 上層i	型作り成形。高台の平面形は楕円形。内面は型押しで花弁状に成形。口縁部　花弁状に成形。	内・外面とも青釉（瑠璃釉）施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
285	第54図 写真図版 48上段	ⅢF類 (托) Ⅰ-A	素焼き（柿）	1区石垣背後 上層ii	底部の器壁は非常に厚い。高台は低い輪高台。体部は僅かに内彎して緩やかに斜め上方に延びる。底部内面に浅い段をもつ。	内・外面とも回転ナデ調整。底部内面の段内に白泥を塗布。	
286	第54図 写真図版 48上段	ⅢF類 (托) Ⅰ-A	素焼き（柿）	2区石垣背後 上層1	平底。高台は断面三角形状で非常に低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は僅かに外方にひらく。底部内面に浅い段をもつ。	内・外面とも回転ナデ調整。	
287	第54図 写真図版 48上段	ⅢF類 (托) Ⅰ-A	N-806 レモン色	表層	高台は断面台形状の低い輪高台。体部は内彎。口縁端部は丸味をもつ。底部内面に浅い段をもつ。	内・外面とも黄釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
288	第54図 写真図版 48上段	ⅢF類 (托) Ⅰ-A	C-208 春緑	表層	平底。高台は断面三角形状の低い輪高台。体部は内彎気味に緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。底部内面に浅い段をもつ。	内・外面とも灰釉施釉。	体部外面に3ヶ所目跡。底部外面に「JAPAN」印有り。
289	第54図 写真図版 48上段	ⅢF類 (托) Ⅰ-A	素焼き（白）	表層	高台は比較的高い。体部は内彎。口縁端部は尖り気味。底部内面に浅い段をもつ。	内・外面とも回転ナデ調整。	底部外面に「千鳥（小陰刻）」印有り。
290	第54図 写真図版 48上段	ⅢF類 (托) Ⅰ-B	素焼き（白）	表層	高台は比較的高い輪高台。体部は直線的に緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。底部内面に段をもつ。	内・外面とも回転ナデ調整。	
291	第54図	ⅢF類 (托) Ⅰ-B	素焼き（白）	2区石垣背後 中層2	高台は断面台形状で低い。体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。体部内面に型作りの梅花文を貼付。蕾と枝はイッチン掛け。底部内面に浅い段をもつ。	内・外面とも回転ナデ調整。	
292	第54図	ⅢF類 (托) Ⅰ-B	素焼き（白）	1区石垣背後 上層ii	高台は断面台形状で比較的低い。体部は僅かに内彎気味に緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は若干水平方向につまみ出す。内面の底部と体部の界に浅い段をもつ。	内面に型作りの梅花文貼付。口縁部内面～外面　回転ナデ調整。	
293	第54図 写真図版 48中段	ⅢF類 (托) Ⅱ-A	N-740 蒲色	1区石垣背後 g層	高台は比較的細く高い輪高台。体部は僅かに内彎気味に緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は僅かに外反。底部内面に比較的高い凸帯が1条巡る。	内・外面とも透明釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	底部外面に「千鳥（小陰刻）」印有り。
294	第54図 写真図版 48中段	ⅢF類 (托) Ⅱ-A	素焼き（白）	1区石垣背後 上層iii	高台は断面台形状の比較的低い輪高台。体部は僅かに内彎。口縁部は僅かに外反。底部内面に比較的高い凸帯が1条廻る。	内・外面とも回転ナデ調整。内面　赤・黄・緑・紫釉で菊花文施文。	
295	第54図 写真図版 48中段	ⅢF類 (托) Ⅱ-B	素焼き（白）	表層	高台は断面台形状の低い削り出し高台。平底。体部は直線的に緩やかに斜め上方に延びる。底部上面に円柱状の凸帯を貼りつける。	内・外面とも回転ナデ調整。口縁部内面に酸化コバルトで界線2条。	底部外面に「ＪＡＰＡＮ」印有り。
296	第54図 写真図版 48中段	ⅢG類 (おろしⅢ)	素焼き（白）	3区－Ⅱ 上層	平底。体部は内彎して短く斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。底部内面の周縁部は溝状に凹む。底部内面におろし目施文。	体部内・外面　回転ナデ調整。	底部外面に灰附着。焼成は非常に堅緻。
297	第54図 写真図版 48下段	ⅢH類 (灰Ⅲ) Ⅰ-A	N-921 菖蒲色	2区石垣背後 上層1	型作り成形。平底。底部中央　1ヶ所穿孔。高台は幅が広く、比較的高い。口縁部は水平に外方に延びる。口縁部の平面形は花びら形。口縁部内面に3ヶ所煙草を置く溝をつける。	溝の先端に型作りの蝶を貼付。底部内面中央に型押しで花弁文施文。内・外面とも紫釉施釉。高台畳付の釉はカキ取る。蝶は黄・緑・鉄釉施釉。	
298	第54図 写真図版 48下段	ⅢH類 (灰Ⅲ) Ⅱ-A	素焼き（白）	表層	底部は碁笥底。体部は大きく内彎。口縁部は内側に折り曲げる。口縁部内面に蓋を受ける段あり。	口縁部内面に型押しで幾何学文、体部外面に草花文を施文。	底部外面に「ＪＡＰＡＮ」印有り。
299	第54図 写真図版 48下段	ⅢH類 (灰Ⅲ) Ⅱ-B	素焼き（白）	表層	型作り成形。全体の器形は直方体。上面に煙草を置く凹みが4ヶ所あり。	内・外面とも回転ナデ調整。	底部外面に「新案特許（PAT）　№67919　□□式灰Ⅲ」の刻印有り。
300	第55図 写真図版 48下段	ⅢH類 (灰Ⅲ) Ⅱ-C	N-773 生壁色	表層	体部は球形。底部外面に球形の脚3ヶ所貼付。体部の1/2をカットして手焙り状に成形。	内・外面とも施釉。	焼成は非常に堅緻。色調淡茶褐色。底部外面に「珉平（振り平）」印有り。体部外面に「神」印施文。
301	第55図 写真図版 49上段	壷A類 (無頸壷) Ⅰ-B-1	N-740 蒲色	表層	底部は碁笥底風に浅く削り出し、さらにその外縁に断面三角形状の低い高台を削り出す。体部は大きく内彎。無頸。	内・外面とも透明釉施釉。畳付の釉はカキ取り。	
302	第55図 写真図版 49中段	壷A類 (無頸壷) Ⅰ-B-1	素焼き（柿）	3区－Ⅰ 暗褐色土 (検出面)	型作り成形。底部は碁笥底状に浅く削り出す。体部は内彎。無頸。体部外面に型押しで木瓜状に施文。	内・外面ともナデ調整。	
303	第55図 写真図版 49中段	壷A類 (無頸壷) Ⅰ-B-2	素焼き（柿）	表層	底部は碁笥底。体部は大きく内彎。無頸。体部外面に型作りの環状の耳を2ヶ所貼付。	内・外面ともナデ調整。内・外面とも鉄泥漿を塗布。	

施釉陶器観察表(11)

No.	挿図No. 写真図版No.	器種 器種分類	色調	出土地点	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
304	第55図 写真図版 49中段	壷A類 (無頸壷) Ⅲ-A-3	C-184 鸚鵡緑	1区石垣背後 中層 i	体部は中位で「く」の字状に屈曲。無頸。	体部外面上位に型押しで花弁文施文の後、型造りの菊花文を貼り付ける。茎の一部は把手となる。体部外面下位は線描きの流水文施文。内・外面とも全面に緑釉施釉。茎・葉はやや黄色味がかった緑釉を、花弁部には黄釉を施釉。	
305	第55図 写真図版 49中段	壷A類 (無頸壷) Ⅴ-A-2	素焼き（白）	表層	平底。底部は周縁部を残して浅く削り出す。体部はほぼ直立、上方で外方にひらく。無頸。体部外面に耳を2ヶ所貼付。口縁部内面に段をもつ（蓋の受け部）。	内面　ナデ調整。体部外面　縦方向のナデ調整。	
306	第55図 写真図版 49下段	壷A類 (短頸壷) Ⅰ-A-1	素焼き（白）	表層	型作り成形。平底。体部は内彎。頸部は僅かに外反。口縁端部は小さな玉縁状に肥厚。	体部外面　型押しで矢羽根文施文の後、花文を貼付。	
307	第55図 写真図版 49下段	壷A類 (短頸壷) Ⅰ-A-1	素焼き（白）	3区－Ⅰ 暗褐色土 (検出面)	型作り成形。底部は周縁部を残す低い高台。体部は大きく内彎。頸部は短く直立。外面に型押しで木瓜状に施文。	内面　多方向のナデ調整。	
308	第55図 写真図版 49下段	壷A類 (短頸壷) Ⅰ-A-1	素焼き（白）	1区石垣背後 上層 i	平底。高台は外縁部を残して削り出す形。体部は大きく内彎。頸部は短く、口縁部は外反する。	内・外面とも回転ナデ調整。	
309	第55図 写真図版 49下段	壷A類 (短頸壷) Ⅰ-B-1	素焼き（白）	1区石垣背後 g層	型作り成形。底部は碁笥底風。体部は大きく内彎。口縁部は花弁状に成形。外面型押しで複式の広形蓮弁文施文。	外面　ナデ調整。型は上下2つで、中央に貼り合わせ痕が認められる。	
310	第55図 写真図版 49下段	壷A類 (短頸壷) Ⅰ-B-1	C-184 鸚鵡緑	残土一括	体部は大きく内彎。口縁部は短く直立。口縁端部は丸味をもつ。	体部外面に型作りの菊花文を貼付。内・外面とも緑釉施釉。花は、花弁には黄釉、花びらは透明釉、葉・茎は淡い緑釉をそれぞれ施釉。	
311	第55図 写真図版 50上段	壷A類 (短頸壷) Ⅰ-B-1	N-802 黄水仙	表層	平底。体部は大きく内彎。頸部は短く直立。口縁部直立。	内・外面とも灰釉施釉。	底部外面に目跡3ヶ所。「JAPAN E&J. B」印有り。
312	第55図 写真図版 50上段	壷A類 (短頸壷) Ⅰ-B-2	C-6荷 花紅	表層	高台は外縁部を残して断面台形状に浅く削り出す。体部は大きく内彎。頸部は短く直立。体部外面に環状の把手を2ヶ所貼付。	内・外面とも赤紫釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	底部外面に「ＪＡＰＡＮ」印有り。
313	第55図 写真図版 50中段	壷A類 (短頸壷) Ⅱ-A-1	素焼き（柿）	1区石垣背後 上層 ii	底部は碁笥底。体部は内彎。頸部は短く直立。	内・外面とも回転ナデ調整。	
314	第55図 写真図版 50中段	壷A類 (短頸壷) Ⅱ-A-1	C-162　胡粉 N-843　若竹色 (斑状)	表層	底部は碁笥底状に浅く削り出す。体部は内彎してほぼ直上に延びる。頸部は短く直立。	内・外面とも透明釉施釉。外面　透明釉の上に青色釉を斑状に施釉。高台脇の釉カキ取り。	
315	第55図 写真図版 49下段	壷A類 (短頸壷) Ⅲ-B-3	素焼き（白）	確認調査 トレンチ2 下層	底部は碁笥底。体部は大きく「く」の字状に屈曲。頸部は短く直立。体部上面に環状のツルの受け部貼付。一つは剥落。	内面～口縁部外面　回転ナデ調整。体部外面　ヘラ削りの後、ナデ調整。	
316	第55図 写真図版 49下段	壷A類 (短頸壷) Ⅲ-B-1	C-184 鸚鵡緑	1区石垣背後 g層	体部は中位で「く」の字状に大きく屈曲。口縁部は短く直立する。	体部外面に型作りの菊花文を貼付。内・外面とも全面に緑釉を施釉。花は透明釉、花弁には黄釉をそれぞれ施釉。	
317	第55図 写真図版 49下段	壷A類 (短頸壷) Ⅳ-B-1	三彩 C-162　胡蝶 C-158　檸檬黄	2区石垣背後 中層3	型作り成形。口縁部の平面形は楕円もしくは隅丸方形。平底。高台は低い。体部大きく「く」の字状に屈曲、大きく内傾して上方にのびる。口縁部は短く内傾する。口縁端部は丸味をもつ。	外面　型押しにより、唐草文施文。体部外面　茶・緑・黄色の三彩釉施釉の後、透明釉施釉（唐三彩を模倣か）。内面・底部外面　透明釉のみ施釉。	
318	第55図 写真図版 53中段	壷A類 (短頸壷) Ⅴ-A-1	N-967 一斤染	表層	高台は断面台形状で比較的低い。体部はほぼ直立。口縁部は大きく外反。	内・外面とも淡い桃色釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
319	第55図 写真図版 49下段	壷A類 (短頸壷)	N-752 煉瓦色	表層	頸部は短く直立。体部外面　線刻で施文。	外面　鉄泥漿塗布。朱泥風。	
320	第56図 写真図版 53中段	壷A類 (長頸壷) Ⅰ-B-1	素焼き（白）	表層	平底。高台は断面台形状の低い輪高台。体部は大きく内彎。頸部は直立。	外面　不定方向のナデ調整。	底部外面に「ＪＡＰＡＮ」印有り。
321	第56図 写真図版 50下段	壷A類 (長頸壷) Ⅱ-A-1	N-795 鬱金色	3区－Ⅰ 赤褐色土1	体部は直立、上位で大きく内側に屈曲。頸部は直立。口縁部は小さな玉縁状に肥厚。	内・外面とも褐釉施釉。	
322	第56図 写真図版 50下段	壷A類 (長頸壷) Ⅱ-A-1	素焼き（白）	表層	平底。底部は外縁部を残して浅く削り出す。体部はほぼ直線的に斜め上方に立ち上がり、上位で屈曲、大きく内傾する。頸部は直立。	外面　回転ナデ調整。	底部外面に「ＪＡＰＡＮ」印有り。
323	第56図 写真図版 50下段	壷A類 (長頸壷) Ⅱ-B-1	素焼き（白）	3区－Ⅱ 黒褐色土2	平底。高台は断面台形状の低い輪高台を貼付。体部は大きく内彎。頸部は直立。	外面　回転ナデ調整。	体部外面に鉄分附着。
324	第56図 写真図版 50下段	壷A類 (長頸壷) Ⅱ-B-1	C-164 立徳粉	表層	底部碁笥底状に浅く削り出す。体部は大きく内彎。頸部は直立。口縁部は直立。	内・外面とも透明釉施釉。高台畳付附近の釉大きくカキ取り。	底部外面に「珉平（振り平）」印有り。
325	第56図 写真図版 51上段	壷B類 (注口無頸) Ⅰ-A-2-a	素焼き（白）	表層	底部はやや上げ底気味。体部は内彎。無頸。体部外面に環状のつまみ貼付。口縁部外面に三角形状の注口貼付。	内・外面とも不定方向のナデ調整。	
326	第56図 写真図版 51上段	壷B類 (注口無頸) Ⅰ-A-2-a	素焼き（白）	3区－Ⅱ 黒褐色土2	型作り成形。底部は碁笥底風。体部は内彎。無頸。口縁部は内傾。把手の受け部は剥落。注口貼付。	外面ナデ調整。内面一部施釉。	

施釉陶器観察表(12)

No.	挿図No. 写真図版No.	器種 器種分類	色調	出土地点	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
327	第56図 写真図版 51上段	壺B類 (注口無頸) Ⅰ-A-2-b	素焼き（白）	3区－Ⅰ 黒色土1	型作り成形。底部は浅い碁笥底風。体部は大きく内彎。無頸。口縁部外面に把手の受け部2ヶ所貼付。体部外面に注口貼付。体部外面・注口外面に型押しで木瓜状に施文。	外面ナデ調整。	
328	第56図 写真図版 51上段	壺B類 (注口無頸) Ⅰ-A-2-b	素焼き（白）	表層	型作り成形。底部は碁笥底風。体部は大きく内彎。無頸。口縁部に2ヶ所把手の受け部を貼付。体部外面に注口貼付。	外面ナデ調整。	
329	第55図 写真図版 51中段	壺B類 (注口無頸) Ⅰ-C-1-b	素焼き（白）	1区石垣背後 上層i	平底。高台は周縁部を残して浅く削り出す形。体部はほぼ直立して立ち上がり、中位で屈曲して大きく内彎する。無頸。体部外面に把手の貼付痕2ヶ所。体部外面　注口1ヶ所貼付。	外面ナデ調整。	
330	第56図 写真図版 51中段	壺B類 (注口無頸) Ⅰ-C-1-c	N-740 蒲色	表層	平底。高台は断面台形状の細く低い輪高台。体部は内彎して立ち上がり、中位で屈曲し、外反する。さらに上位で再び屈曲して内彎する。僅かに頸部をつくり出す。体部外面に把手の貼付痕2ヶ所。体部外面下位に注口貼付。	内・外面とも透明釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
331	第56図 写真図版 51中段	壺B類 (注口無頸) Ⅰ-E-2-c	素焼き（白）	表層	型作り成形か。やや上げ底風の平底。体部は内傾してやや外反気味に上方に延びる。無頸。体部外面に把手の貼付痕2ヶ所。体部外面に注口貼付。	内・外面とも回転ナデ調整。	
332	第56図 写真図版 51中段	壺B類 (注口無頸) Ⅰ-E-2-c	N-860 薄浅葱	表層	型作り成形。全体を竹の切り株状に成形。平底。高台は周縁部を浅く残す。体部外面に型押しで竹の節・葉を施文。上部に楕円形に透かしを入れ、注口孔らしきものを貼り付けた痕跡あり。	内・外面とも施釉。畳付の釉カキ取り。	
333	第56図 写真図版 51下段	壺B類 (注口無頸) Ⅱ-A-2	素焼き（白）	1区石垣背後 g層	型作り成形。やや上げ底気味の平底。体部は内彎気味に直上に延びる。口縁部は花弁状に成形。体部外面に型押しで草花文施文。体部外面にヘタ状の把手の貼付痕。口縁部に花弁状の注口をつくり出す。	内面　ヨコナデ調整。	
334	第56図 写真図版 51下段	壺B類 (注口無頸) Ⅱ-F-1	素焼き（白）	表層	高台は断面台形状に低く削り出す。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は内側に折り曲げ、体部外面上位に松ぼっくり形貼付。	内・外面とも回転ナデ調整。	
335	第56図 写真図版 51下段	壺B類 (注口無頸) Ⅱ-B-1	素焼き（白）	1区石垣背後 中層i	型作り成形。高台は細く、高い（貼付高台）。高台の平面形は楕円形。体部は僅かに内彎して直上に延びる。口縁部の一ヶ所を捻って注口をつくる。	内・外面ともヨコナデ調整。	
336	第56図 写真図版 51下段	壺B類 (注口無頸) Ⅱ-D-1	素焼き（白）	1区石垣背後 上層ii	平底。高台は周縁部を残して浅く削り出す。体部はほぼ直立。口縁部は僅かに外方にひらく。口縁部の1ヶ所を捻って鳶口状に注口をつくり出す。体部外面上位に環状の把手を貼付。	内・外面とも回転ナデ調整。	底部外面に「千鳥（小陰刻）」印有り。
337	第56図 写真図版 52上段	壺B類 (注口短頸) Ⅰ-A-1-c	C-164 立徳粉	表層	高台は断面台形状の比較的幅の広い輪高台。体部は大きく内彎。頸部は短く直立。体部外面に把手の貼付痕2ヶ所、注口貼付。	内・外面とも透明釉施釉の後、外面に鉄・赤・黒釉と金彩で山水楼閣図施文。高台畳付の釉カキ取り。	底部外面に「千鳥（小陰刻）」印の上に「珉平焼」銘を黒字で施文。現代。
338	第56図 写真図版 52上段	壺B類 (注口短頸) Ⅰ-A-1-c	素焼き（白）	表層	底部は碁笥底風に浅く削り出す。体部は大きく内彎。頸部は短く僅かに直立。体部外面に把手の貼付痕。体部外面に注口貼付。体部外面　型押しで「福壽」字　施文。	内面～口縁部外面　回転ナデ調整。体部外面　ナデ調整。	
339	第56図 写真図版 52中段	壺B類 (注口短頸) Ⅰ-A-1-c	素焼き（白）	表層	底部は碁笥底風に浅く削り出す。体部は大きく内彎。頸部は短く直立。口縁部外面に環状の把手の受け部2ヶ所貼付。体部外面に注口貼付。	内・外面とも回転ナデ調整。	
340	第56図 写真図版 52上段	壺B類 (注口短頸) Ⅰ-A-1-c	N-829 若草色	1区石垣背後 上層0	平底。体部は大きく内彎。頸部は短く内傾。体部外面に環状の把手貼付。体部外面に注口貼付。体部外面・注口外面　型押しで木瓜状に施文。	内・外面とも緑釉施釉。畳付の釉輪状にカキ取り。	底部外面に目跡3ヶ所。
341	第56図 写真図版 52上段	壺B類 (注口短頸) Ⅰ-A-3-c	素焼き（白）	1区石垣背後 上層i	円盤状の短い脚部をもつ。体部は大きく内彎。口縁部（頸部）は外反。体部外面に把手の貼付痕2ヶ所。注口1ヶ所貼付。体部外面に型作りの梅花文貼付。	内面～口縁部外面　回転ナデ調整。	
342	第56図 写真図版 52中段	壺B類 (注口短頸) Ⅰ-B-4-c	素焼き（白）	1区石垣背後 中層i	型作り成形。平底。体部は大きく内彎。頸部は短く直立。体部外面にヘラガキで桜文施文。体部外面に注口貼付。把手の受け部は剥落。	外面ナデ調整。	
343	第56図 写真図版 52中段	壺B類 (注口短頸) Ⅰ-B-2-c	素焼き（白）	残土一括	底部は碁笥底。体部は大きく内彎。頸部は短く直立。体部上面に環状のツルの受け部を2ヶ所貼付。体部外面に注口貼付。	内・外面ともナデ調整。	
344	第57図 写真図版 52下段	壺B類 (注口短頸) Ⅰ-C-2-b	素焼き（白）	確認調査 トレンチ2 下層	底部は碁笥底風に浅く削り出す。体部は「く」の字状に大きく屈曲。頸部は短く直立。体部上面に三角形状のツルの受け部2ヶ所、注口1ヶ所貼付。	内・外面とも回転ナデ調整。	

施釉陶器観察表(13)

No.	挿図No. 写真図版No.	器種 器種分類	色調	出土地点	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
345	第57図 写真図版 52下段	壷B類 (注口短頸) Ⅰ-D-1-c	素焼き（柿）	表層	平底。高台は断面台形状の低く小さい輪高台。体部はほぼ直立して立ち上がり、上位で内傾する。頸部は短く直立。体部外面に把手の貼付痕２ヶ所。注口貼付。	内・外面とも回転ナデ調整。	
346	第57図 写真図版 52下段	壷B類 (注口短頸) Ⅰ-D-1-a	C-6 荷花紅	表層	高台は断面三角形状に浅く削り出す。体部は僅かに内傾して、直線的に斜め上方に延びる。口縁部は若干外方にひらく。体部外面下位に注口貼付。体部外面中位に把手１ヶ所貼付。	内・外面とも赤紫釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
347	第57図 写真図版 52下段	壷B類 (注口短頸) Ⅰ-C-2-b	C-164 立徳粉 N-922 半色	表層	平底。体部は直立して立ち上がり、中位で屈曲。大きく内彎する。体部外面に環状の把手貼付。体部外面上位に直線的な注口貼付。	内・外面とも透明釉施釉の後、口縁部先端、体部外面上半、把手上面に紫釉を掛け流す。畳付の釉　輪状にカキ取り。	
348	第57図 写真図版 51下段	壷B類 (注口短頸) Ⅱ-A-2	素焼き（柿）	３区－Ⅰ 黒褐色土1	型作り成形。平底。全体の器形は木瓜形に整形。口縁部の平面形は三角形。鳶口状の注口をつくり出す。口縁部外面に把手の貼付痕。	内・外面ともナデ調整。	
349	第57図 写真図版 51下段	壷B類 (注口短頸) Ⅱ-A-2	素焼き（白） N-805 たんぽぽ色	表層	高台は比較的幅が広く「ハ」の字状に外方にひらく。体部は大きく内彎。頸部は短く直立。体部外面に環状の把手貼付。注口は大きく鳶口状に上方につくり出す。	内・外面とも回転ナデ調整。	
350	第57図 写真図版 51下段	壷B類 (注口短頸) Ⅱ-C-2	素焼き（白）	２区石垣背後 上層１	底部は碁笥底風に浅く削り出す。体部は「く」の字状に大きく屈曲。頸部は短く直立。体部外面に環状の把手を貼付。口縁部外面に鳶口状の注口をつくり出す。	内・外面とも回転ナデ調整。	
351	第57図 写真図版 53上段	壷B類 (注口長頸) Ⅱ-A-2-c	N-740 蒲色	コーカシ窯内 16層	平底。高台は断面三角形状で小さく低い。体部は大きく内傾して、斜め上方に延びる。頸部はほぼ直立。口縁部は小さな玉縁状に肥厚。外面の体部と頸部の界に低い凸帯１条。体部外面に注口貼付。	内・外面とも透明釉施釉。	
352	第57図 写真図版 53上段	壷B類 (注口長頸) Ⅰ-C-1-c	素焼き（白）	２区石垣背後 上層１	高台は断面台形状に浅く削り出す。体部はほぼ直立して立ち上がり、中位で屈曲、大きく内傾する。頸部は直立し、口縁部は断面台形状に肥厚する。体部外面中位に注口貼付。	外面　ヘラ削りの後、回転ナデ調整。	
353	第57図 写真図版 53上段	壷B類 (注口長頸) Ⅱ-D-1-b	素焼き（柿）	確認調査 ２トレンチ 灰層・下層	平底。高台は断面台形状の比較的高い輪高台。体部は直立して立ち上がり、上位で内傾する。頸部は直立し、口縁部は外方にひらく。口縁部に１ヶ所鳶口状に注口をつくり出す。体部外面に把手の貼付痕２ヶ所。	内・外面とも回転ナデ調整。	体部外面下位に「（右から）實用新案　壱六七〇□（三か）」印有り。明治40年代の醤油差し。
354	第57図 写真図版 53上段	壷B類 (注口長頸) Ⅱ-D-1-b	素焼き（白）	表層	高台は断面台形状の低い輪高台。体部はほぼ直立。口縁部は内傾。頸部は直立し、口縁端部は鳶口状に成形。体部外面に耳状の把手貼付。	外面　回転ナデ調整。	体部外面下位に「（右から）實用新案　壱六七〇三」印有り。明治43年の醤油差し。
355	第57図 写真図版 53上段	蓋類	N-826 若芽色 C-184 鸚鵡緑	表層	口縁部は外方に水平に引き出す。体部は直立。上面はほぼ水平。	内・外面とも淡黄緑色釉施釉の後、外面上面のみ緑色釉施釉。口縁端部の釉カキ取り。	遺物№353・354の蓋。
356	第57図 写真図版 53中段	壷C類 (唾壺) Ⅰ	素焼き（柿）	２区石垣背後 中層３	平底。高台は周縁部を残して浅く削り出す。体部　若干内彎して大きく内傾し、斜め上方へ延びる。口縁部は大きく外方にひらく。	内・外面とも回転ナデ調整。体部　白泥・緑・黄釉で菊花文施文。	
357	第57図 写真図版 53中段	壷C類 (唾壺) Ⅰ	N-826 若芽色	表層	平底。底部は周縁部を残して浅く削り出す。体部は内傾。体部と口縁部の界は大きく屈曲して、口縁部は外方にひらく。	内・外面とも緑釉施釉。畳付の釉カキ取り。	
358	第57図 写真図版 53中段	壷C類 (唾壺) Ⅱ	素焼き（柿）	表層	底部は碁笥底。体部は大きく内彎。体部と口縁部の界は大きく屈曲。口縁部は外方にひらく。体部外面に把手１ヶ所貼付。	内面～口縁部外面　回転ナデ調整。	
359	第57図 写真図版 54上段	壷D類 (花瓶) Ⅱ-B	N-829 若草色	表層	底部は円盤状。脚部は短く直立。体部内彎。頸部は直立。口縁部は大きく外方にひらく。口縁端部は上方につまみ上げる。頸部外面に耳を２ヶ所貼付。	内・外面とも緑釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	青銅器写しの尊形花瓶。
360	第57図 写真図版 54上段	壷D類 (花瓶) Ⅱ-B	素焼き（柿）	１区石垣背後 中層ⅰ	脚部は「ハ」の字状にひらく。体部は内彎。体部と頸部の界は大きく屈曲。頸部はほぼ直立。頸部外面に凸帯１条。頸部外面に耳の貼付痕２ヶ所。	内・外面ともナデ調整。	
361	第57図 写真図版 54中段	壷E類 (花生) Ⅰ-A	素焼き（白）	１区石垣背後 上層ⅲ	高台は「ハ」の字状に外方にひらく。低い輪高台、体部は僅かに外方にひらき気味に上方に延びる。口縁端部は尖り気味。体部外面上位は木ノ葉文と列点文を型押し施文。体部外面下位　沈線施文。	口縁部外面、体部外面上位、高台側面に帯状に鉄釉施釉。	
362	第57図 写真図版 54中段	壷E類 (花生) Ⅰ-A	N-892 群青色	１区石垣背後 中層ⅰ	平底。高台は周縁部を残して浅く削り出す形。体部はほぼ直立。外面に型作りの桜花文施文。	内・外面とも瑠璃釉施釉。施文部は透明釉・黄釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	

施釉陶器観察表(14)

No.	挿図No. 写真図版No.	器種 器種分類	色調	出土地点	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
363	第57図 写真図版 54中段	壷E類 (花生) Ⅰ-A	C-184 鸚鵡緑	表層	平底。高台は周縁部を残して浅く削り出す形。体部は直立。体部外面にヘラ彫りで草花文を施文。	内・外面とも緑釉施釉。施文部は瑠璃釉・透明釉を施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
364	第57図 写真図版 54中段	壷E類 (花生) Ⅰ-A	C-158 檸檬黄	1区石垣背後 上層 iii	平底。底部は周縁部を残して浅く削り出す。体部は直立。体部外面に蕉葉文を貼付。	内・外面とも黄釉施釉。蕉葉は緑釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
365	第57図 写真図版 54下段	壷E類 (花生) Ⅰ-B	N-892 群青色	表層	平底。高台は周縁部を残して浅く削り出す形。体部は直立。体部外面に線刻の牡丹文施文。	内・外面とも瑠璃釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
366	第57図 写真図版 55上段	壷E類 (花生) Ⅰ-B	素焼き（柿）	表層	脚部は「ハ」の字状に外方に大きくひらく。体部は直立。口縁端部は上面に水平に端面をもつ。体部外面上位に凹線1条。外面の体部と脚部の界に小さい凸帯1条。	内・外面とも回転ナデ調整。	
367	第57図 写真図版 55上段	壷E類 (花生) Ⅰ-B	素焼き（白）	表層	底部は「ハ」の字状に外方にひらく高台状の脚を貼付。体部は直立。口縁部直立。外面の脚部と体部の界に細い凸帯1条。口縁部外面に凹線1条。体部外面に型作りの桜花文貼付。	内面～口縁部外面　回転ナデ調整。体部外面　不定方向のナデ調整。脚部内・外面　回転ナデ調整。桜花　茎・葉を鉄釉で施文。	
368	第57図 写真図版 54中段	壷E類 (花生) Ⅰ-C	C-184 鸚鵡緑	1区石垣背後 中層 ii	型作り成形。全体に竹形に成形。脚部は欠失。体部は直立。外面中央に凸帯1条（節を表現）。枝の貼付痕あり。又型押しで竹葉文を施文。	内・外面とも緑釉施釉。	
369	第58図 写真図版 55中段	壷E類 (花生) Ⅱ-A	素焼き（白）	表層	水挽きロクロ成形。平底。高台は浅く削り出す。体部はほぼ直立。口縁部は外方にひらく。	内・外面とも回転ナデ調整。体部外面上位に10条単位の浅い沈線。	底部外面に「JAPAN」印有り。
370	第58図 写真図版 55中段	壷E類 (花生) Ⅱ-A	C-184 鸚鵡緑	1区石垣背後 上層 iii	高台は外縁部を残して浅く削り出す形。体部は内傾して斜め上方に延びる。体部外面に型作りの菊花文貼付。体部外面に把手の貼付痕。	内・外面とも緑釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
371	第58図 写真図版 55中段	壷E類 (花生) Ⅱ-A	N-889 藍色	表層	平底。高台は断面台形状の低い輪高台。体部は内傾して斜め上方に延び、中位でほぼ直立する。	内・外面とも瑠璃釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
372	第58図 写真図版 55中段	壷E類 (花生) Ⅱ-A	N-806 レモン色	1区石垣背後 g層	型作り成形。底部は六角形の花弁or木の根状に成形。体部は内傾。	内・外面とも黄釉施釉。底部の接地面のみ釉をカキ取る。	
373	第58図 写真図版 55下段	壷F類 (懸花生) Ⅰ	素焼き（白）	表層	型作り成形。全体を上下2つの型で成形した後貼り合わせる。全体にひさご型に成形。背面は平坦。体部外面に葉・蔓・虫を型押しで施文。	外面はナデ調整。体部内面に貼り合わせ痕あり。	背面に1ヶ所釘穴有り。
374	第58図 写真図版 55下段	壷F類 (懸花生) Ⅰ	C-158 檸檬黄	表層	型作り成形。全体を木の幹あるいは枝状に成形。	体部外面　中央に花を型押し施文。底部外面は木目を施文。内・外面とも黄釉施釉。花文部は緑釉と透明釉施釉。	
375	第58図 写真図版 55下段	壷F類 (懸花生) Ⅰ	N-863 孔雀緑	表層	全体に竹形に成形。背面は平坦。	全面に緑釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
376	第58図 写真図版 55下段	壷F類 (フラワーポット) Ⅱ	素焼き（白）	表層	平底。高台は周縁部を残して浅く削り出す形。体部は直立。口縁部は大きく外方にひろげ、内2方を歪めて直立させる。直立させた口縁部に2ヶ所穿孔。穿孔部の外側に花弁状の装飾を貼り付ける。	内・外面ともナデ調整。	
377	第58図 写真図版 56上段	蓋A類 (つまみ無し) Ⅰ-B-1	素焼き（白）	1区石垣背後 上層 ii	円盤状の体部に低い凸帯状の受け部をもつ。中央部に穿孔1ヶ所。	内・外面とも回転ナデ調整。	内面に「４６　□（前か）天　東」の釉書有り。
378	第58図 写真図版 56下段	蓋A類 (つまみ無し) Ⅰ-B-1	N-795 鬱金色	確認調査 トレンチ1 下層	円盤状の体部に低い凸帯状の受け部をもつ。	内・外面とも黄褐色釉施釉。	内面中央部に「千鳥（小陰刻）」印有り。
379	第58図 写真図版 56中段	蓋A類 (つまみ無し) Ⅰ-B-1	N-740 蒲色	1区石垣背後 上層 iii	円盤状の体部に低い凸帯状の受け部をもつ。	内・外面とも透明釉施釉。	
380	第58図 写真図版 56下段	蓋A類 (つまみ無し) Ⅰ-B-1	C-184 鸚鵡緑	3区 下層	円盤状の体部に低い凸帯状の受け部をもつ。	内・外面とも緑釉施釉。受け部　先端の釉　カキ取り。	内面に「T」小印有り。
381	第59図 写真図版 57上段	蓋A類 (つまみ無し) Ⅰ-B-2	C-158 檸檬黄	表層	円盤状の体部に低い凸帯状の受け部をもつ。	全面に黄釉施釉。受部の外面（下部）の釉カキ取り。	
382	第59図 写真図版 57上段	蓋A類 (つまみ無し) Ⅰ-B-2	三彩	表層	円盤状の体部に低い凸帯状の受け部をもつ。	外面（上面）　緑・黄・茶の三彩釉施釉の後、透明釉施釉。内面（下面）透明釉施釉。	
383	第59図 写真図版 57上段	蓋A類 (つまみ無し) Ⅰ-B-2	三彩	残土一括	円盤状の体部に低い凸帯状の受け部をもつ。	外面（上面）　緑・黄・茶の三彩釉施釉の後、透明釉施釉。内面（下面）は透明釉施釉。	内面中央部に「千鳥（大陽刻）」印有り。
384	第59図 写真図版 57上段	蓋A類 (つまみ無し) Ⅰ-B-2	三彩	表層	円盤状の体部に低い凸帯状の受け部をもつ。	外面（上面）　緑・黄・茶の三彩釉施釉の後、透明釉施釉。内面（下面）透明釉施釉。	内面中央部に「千鳥（大陽刻）」印有り。
385	第59図 写真図版 57中段	蓋A類 (つまみ無し) Ⅱ-B-1	N-806 レモン色	表層	受け部は短く直立。体部は短く直立。上面はほぼ水平。	内・外面とも黄釉施釉。受け部の釉はカキ取る。	
386	第59図 写真図版 57中段	蓋A類 (つまみ無し) Ⅱ-B-1	N-740 蒲色	1区石垣背後 g層	体部上面はほぼ扁平。外側面は端面をもつ。かえりは短く直立。	内・外面とも透明釉施釉。かえりの釉はカキ取り。	内面中央部に「千鳥（小陰刻）」印有り。

施釉陶器観察表(15)

No.	挿図No. 写真図版No.	器種 器種分類	色調	出土地点	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
387	第59図 写真図版 57中段	蓋A類 (つまみ無し) Ⅱ-B-1	C-184 鸚鵡緑	2区石垣背後 上層1	体部は直立。口縁部は内彎。上面はほぼ水平に成形。	外面は緑釉施釉。内面　露胎。	
388	第59図 写真図版 57中段	蓋A類 (つまみ無し) Ⅱ-B-1	素焼き（白）	確認調査 トレンチ1 下層	かえりは短く直立。体部の上面は扁平。上面に型作りの柿葉を貼付。	内・外面とも回転ナデ調整。	
389	第59図 写真図版 57中段	蓋A類 (つまみ無し) Ⅱ-A	N-740 蒲色	2区石垣背後 中層2	体部は山笠状。上面中央につまみ状に低い凸帯を削り出す。口縁部は直立。	内・外面とも透明釉施釉。	
390	第59図 写真図版 57下段	蓋A類 (つまみ無し) Ⅱ-B-2	素焼き（白）	2区石垣背後 上層2	型作り成形。受け部は短く直立。口縁部は水平に外方へ引き出す。体部　山笠状に成形。	体部上面に型押しで、蝶・花・蕾を施文。体部内面　ナデ調整。	
391	第59図 写真図版 57下段	蓋A類 (つまみ無し) Ⅱ-B-1	素焼き（白）	1区石垣背後 h層	型作り成形。受け部は直立。口縁部は水平に引き出す。体部は山笠状に成形。	体部外面に草花文・蝶文を型押し施文。	
392	第59図 写真図版 57下段	蓋A類 (つまみ無し) Ⅱ-B-1	N-756 マルーン	1区石垣背後 上層ii	体部は山笠形に成形。かえりは短く直立。	内・外面とも透明釉施釉。	
393	第59図 写真図版 57下段	蓋A類 (つまみ無し) Ⅱ-B-1	N-829 若草色	表層	受け部は短く直立。口縁部は水平に外方へ引き出す。体部は山笠形に成形。	内・外面とも黄緑色釉施釉。受け部の先端の釉カキ取り。	
394	第59図 写真図版 58上段	蓋A類 (つまみ無し) Ⅱ-B-2	N-829 若草色	表層	受け部は短く直立。口縁部は水平に外方へ引き出す。体部は山笠形に成形。	内・外面とも黄緑色釉施釉。受け部の先端の釉カキ取り。	
395	第59図 写真図版 58上段	蓋A類 (つまみ無し) Ⅱ-B-2	N-919 モーブ	表層	受け部は短く直立。口縁部は水平に外方へ引き出す。体部は山笠形に成形。	内・外面とも紫色釉施釉。受け部の先端の釉カキ取り。	
396	第59図 写真図版 58中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-A-1-b	C-6 荷花紅	表層	口縁部は直立。体部は扁平。上面中央に扁平な釦状のつまみ貼付。	内・外面とも施釉。	内面に目跡3ヶ所。
397	第59図 写真図版 58下段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-A-1-f	N-806 レモン色	1区石垣背後 e層	口縁部は水平に折り曲げる。上面に木枝状のつまみを貼り付ける。	内・外面とも黄色釉施釉。口縁端部は露胎。	
398	第59図 写真図版 58中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-A-1-b	C-174 深芽緑	確認調査 表採	口縁部はほぼ直立。口縁端部は若干玉縁状に肥厚。体部は扁平。上面中央に短い円柱状のつまみ貼付。つまみの上面　透かし4ヶ所。上面に梅花の花・蕾を貼付。茎・葉は鉄釉で施文。	内・外面とも緑釉施釉。口縁端部は露胎。花は白釉・花芯は黄釉をそれぞれ施釉。	
399	第59図 写真図版 58中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-A-1-c	素焼き（白）	表層	上面中央に環状のつまみをもつ。つまみは僅かに外傾。体部は内彎気味。	内・外面とも回転ナデ調整。	
400	第59図 写真図版 58中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-A-1-c	N-795 鬱金色	1区石垣背後 上層i	口縁部は外方にひらく。体部は扁平。体部上面に、端部が外方に大きくひらく環状のつまみ貼付。	内・外面とも褐釉施釉。	内面に砂粒附着。気泡が認められる。
401	第59図 写真図版 58中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-A-1-c	N-798 深支子	残土一括	上面の中央に環状のつまみを貼付。	内面　染付で丸に壽字文施文。外面　褐釉施釉。つまみの端部の釉カキ取り。	
402	第59図 写真図版 58下段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-A-1-f	C-158 檸檬黄	1区石垣背後 上層i	上面は扁平。体部は直立。上面中央に型作りの桃形つまみ貼付。	外面　赤・黄・緑釉と白泥で菊花文施文。内面　黄釉施釉。口縁端部の釉カキ取り。	遺物№501とセット。
403	第59図 写真図版 58下段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-A-1-c	素焼き（白）	1区石垣背後 k層	水挽きロクロ成形。口縁端部は尖り気味。体部は内彎。外面中央部に環状のつまみと木ノ葉文貼付。	内・外面とも回転ナデ調整。	
404	第59図 写真図版 59上段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-A-2-f	素焼き（白）	表層	体部は扁平。かえりなし。上面中央に竹形のつまみ貼付。蒸気孔1ヶ所穿孔。	外面　回転ナデ調整。界線1条・列点文・界線2条施文。内面　不定方向のナデ。	
405	第59図 写真図版 59上段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-A-2-a	C-158 檸檬黄 N-846 鸚鵡緑	表層	体部は扁平。球形のつまみを貼付。	外面（上面）　黄釉・緑釉を施釉。内面（下面）は露胎。	
406	第59図 写真図版 59上段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-A-2-a	N-892 群青色	1区石垣背後 g層	体部は扁平。上面中央に、扁平な球形のつまみを貼付。蒸気孔1ヶ所穿孔。	内・外面とも青色釉施釉（瑠璃釉）。口縁端部の釉カキ取り。	内面に目跡3ヶ所。
407	第59図 写真図版 59上段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-A-2-f	素焼き（柿）	3区－Ⅲ ii層	型作り成形。体部は扁平な円盤形。上面中央に菊形つまみ貼付。	上面に型押しで六角形の文様施文（菊の花弁を表現か）。	
408	第59図 写真図版 59上段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-A-2-a	素焼き（白）	確認調査 トレンチ1 下層	体部は扁平。上面中央に、扁平な球形のつまみを貼付。	内・外面ともヘラケズリの後、回転ナデ調整。	
409	第59図 写真図版 59上段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-A-2-f	N-919 モーブ	表層	体部は若干山笠形。上面中央に花弁（菊花）状のつまみ貼付。	内・外面とも紫色釉施釉。	
410	第60図	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-A-2-b	N-752 煉瓦色	表層	器壁は厚く、落し蓋風に成形。つまみは短い円柱状。	内・外面とも回転ナデ調整。底部外面未調整。糸切り痕。	珉平焼の製品ではなく製作用具の一部か。
411	第60図 写真図版 59上段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-A-2-c	C-184 鸚鵡緑	1区石垣背後 h層	体部は扁平。内面中央部は円形に凹む。上面中央に環状のつまみを貼付。	内・外面とも全面に緑釉施釉。一部透明釉、青釉施釉。	内面中央部に目跡3ヶ所。
412	第60図 写真図版 59中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-B-2-a	素焼き（白）	表層	受け部は短く直立。体部は薄い円盤状。上面に沈線を1条廻らせる。上面中央部に球形のつまみを貼付。	内・外面とも回転ナデ調整。	

施釉陶器観察表(16)

No.	挿図No. 写真図版No.	器種 器種分類	色調	出土地点	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
413	第60図 写真図版 59中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-B-2-a	N-740 蒲色	表層	体部はほぼ扁平な円盤状。かえりは長く直立。上面中央に球形のつまみ貼付。上面に１ヶ所蒸気孔穿孔。	内・外面とも透明釉施釉。かえりの先端の釉カキ取り。	
414	第60図 写真図版 60上段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-B-2-a	素焼き（柿）	１区石垣背後 上層 iii	体部上面は扁平で円盤状。上面中央に扁平な釦状のつまみ貼付。かえりは短く直立。	外面　回転ナデ調整。内面　ヘラ削り。	内面中央に「千鳥（小陰刻）」印有り。
415	第60図 写真図版 60上段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-B-2-b	素焼き（柿）	１区石垣背後 中層 ii	体部は扁平な円盤状。かえりは直立。上面中央に扁平な釦状のつまみ貼付。	内・外面とも回転ナデ調整。上面に白泥・緑釉・鉄釉で草花文施文。	底部外面に「千鳥（小陰刻）」印有り。
416	第60図 写真図版 59下段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-B-2-b	二彩 C-158　檸檬黄 C-184　鸚鵡緑	表層	かえりは直立。体部は扁平。上面中央に扁平な釦状のつまみ貼付。	内・外面とも黄釉施釉の後、つまみの頂部、上面の周縁部　緑釉施釉。	器面に細かい貫入。
417	第60図 写真図版 59下段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-B-2-b	三彩	表層	受け部は比較的高く直立。体部は薄い円盤状。上面中央部にほぼ球形のつまみを貼付。	上面　緑・茶・黄の三彩釉施釉の後、透明釉施釉。下面　透明釉のみ施釉。	
418	第60図 写真図版 59下段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-B-2-b	N-946 灰白	１区石垣背後 上層 i	受け部は比較的長く直立。体部は薄い円盤状。上面中央に扁平なつまみを貼付。	上面　白濁釉施釉の後、鉄釉と緑釉で巴形の草花文施文。内面　露胎。	京焼系－明石産のものに類似。
419	第60図 写真図版 59下段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-B-2-b	N-806 レモン色	１区石垣背後 e層	受け部は短く直立。体部は薄い円盤形。上面中央部に扁平なつまみを貼付。	内・外面とも黄釉施釉。受け部の先端の釉は拭き取る。	
420	第60図 写真図版 60中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-B-2-f	素焼き（白）	１区石垣背後 g層	かえりは直立。上面は扁平。上面に型作りの花弁形とつまみと葉を貼り付ける。	内・外面とも回転ナデ調整。	内面中央に「千鳥（小陰刻）」印有り。
421	第60図 写真図版 60中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-B-2-f	N-763 桧皮色＝鉄釉 N-820 オリーブ緑(つまみ)	表層	体部は扁平。かえりは短く直立。上面中央に型作りの桃形つまみ貼付。	上面　鉄釉施釉。つまみは緑釉施釉。下面は露胎。	
422	第60図 写真図版 60中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-B-2-f	N-740　蒲色 N-840　浅緑 （つまみ）	表層	体部は扁平な円盤状。かえりは短く直立。上面中央に型作りの桃形つまみ貼付。	内・外面とも透明釉施釉。つまみは緑釉施釉。	
423	第60図 写真図版 60中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-B-2-f	N-795 鬱金色	表層	かえりは直立。体部は円盤状で扁平。上面中央に型作りの桃形のつまみを貼付。	内・外面とも褐釉施釉。つまみは緑釉施釉。	
424	第60図 写真図版 60中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-B-1-f	N-740 蒲色	表層	体部上面は扁平。口縁部は直立。口縁端部は水平方向につまみ出す。かえりは短く直立。	内・外面とも透明釉施釉。かえりの先端の釉カキ取り。つまみは緑釉施釉。	内面中央に「千鳥（小陰刻）」印有り。
425	第60図 写真図版 60中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅰ-B-2-f	N-886 花浅葱	残土一括	型作り成形。かえりは直立。体部は扁平。上面に花弁状のつまみ貼付（牡丹か？）。蒸気孔１ヶ所穿孔。	内・外面とも青色釉（瑠璃釉）施釉。	
426	第60図 写真図版 60下段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-A-2-f	N-806 レモン色	１区石垣背後 e層	型作り成形。体部は若干山笠形に成形。上面中央部に虫（蝉か？）形のつまみを貼付。上面周縁部は花弁状に成形。	内・外面とも黄釉施釉。虫の体部は緑釉・羽根は青釉をそれぞれ施釉。	内面に目跡３ヶ所。
427	第60図 写真図版 60下段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-A-2-f	素焼き（白）	表層	水挽きロクロ成形。口縁部側面に端面をもつ。体部は山笠形に成形。頂部に型作りの花弁状のつまみを貼付。	内・外面とも回転ナデ調整。	
428	第60図 写真図版 61上段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-a	素焼き（柿）	１区石垣背後 上層 iii	体部は浅い山笠形。上面中央に球形のつまみ貼付。上面に蒸気孔１ヶ所穿孔。かえりは比較的長く直立。	内・外面とも回転ナデ調整。	
429	第60図 写真図版 61上段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-a	C-158 檸檬黄 C-184 鸚鵡緑	表層	かえりはほぼ直立。体部は若干山笠形。つまみは扁平な球形。体部上面に型打ちで「　壽」の文字施文。１ヶ所蒸気孔穿孔。	黄・緑の２釉施釉。	
430	第60図 写真図版 61上段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-a	N-892 群青色	３区 下層	受け部は直立。体部は浅い山笠形。上面に球状のつまみを貼付。上面に蒸気孔穿孔。	内・外面とも青色釉（瑠璃釉）施釉。	受け部端部の釉カキ取り。
431	第60図 写真図版 61上段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-a	N-889 藍色	２区石垣背後 中層１	かえりは比較的長い。体部は若干山笠形。上面中央に球形のつまみ貼付。上面に蒸気孔１ヶ所穿孔。	内・外面とも青色釉施釉（瑠璃釉）。かえりの端部は露胎。	
432	第60図 写真図版 61上段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-a	C-158 檸檬黄	表層	水挽きロクロ成形。受け部は直立。体部は山笠形。頂部に球形のつまみ貼付。体部上面に蒸気孔穿孔。	内・外面とも黄釉施釉。	
433	第60図 写真図版 61上段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-a	N-740 蒲色	表層	体部は山笠形に成形。上面中央に球形のつまみ貼付。上面に１ヶ所蒸気孔穿孔。かえりは短く直立。	内・外面とも透明釉施釉。	
434	第61図 写真図版 61中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-a	C-163 蛤粉	表層	かえりは比較的細く高い。体部は山笠形。口縁端部は水平に引き出す。上面中央に球形のつまみ貼付。つまみに１ヶ所蒸気孔穿孔。	内・外面とも透明釉施釉。かえりの端部は露胎。	
435	第61図 写真図版 61中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-a	C-184 鸚鵡緑	表層	かえりはやや内傾。体部は山笠形。口縁端部は若干外方につまみ出す。上面中央に球形のつまみ貼付。	内・外面とも緑釉施釉。外面の周縁部に釉溜りが出来更に濃く発色。かえりの端部の釉カキ取り。	
436	第61図 写真図版 61中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-a	C-16 紅蓮灰	表層	かえりは短く直立。体部は山笠形。上面中央に球形のつまみ貼付。	内・外面とも赤紫釉施釉。かえりの端部の釉カキ取り。	
437	第61図 写真図版 61中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-a	N-960　墨色 C-164　立徳粉 （内面）	確認調査 表採	かえりは短く直立。体部は山笠形。上面中央に球形のつまみ貼付。	外面黒釉施釉の後、金彩で鶴文施文。内面　透明釉施釉。かえりの端部の釉はカキ取り。	
438	第61図 写真図版 61中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-a	N-960　墨色 C-164　立徳粉 （内面）	表層	かえりは短く直立。体部は山笠形。上面中央に球形のつまみ貼付。	外面　黒釉施釉。内面　透明釉施釉。かえりの端部の釉カキ取り。	

施釉陶器観察表(17)

No.	挿図No. 写真図版No.	器種 器種分類	色調	出土地点	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
439	第61図 写真図版 62上段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-b	素焼き（白）	表層	かえりは短く直立。体部は山笠形。口縁端部は水平に外方に引き出す。外面の体部と口縁部の界に凸帯１条。上面中央に扁平な釦状のつまみを貼付。外面に型作りの草花文貼付。	内・外面とも回転ナデ調整。	
440	第61図 写真図版 62中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-b	素焼き（白）	１区石垣背後 c層	かえりは短く直立。体部は山笠形。外面の体部と口縁部の界に凸帯１条。上面中央に扁平な釦状のつまみ貼付。	上面に型作りの花文（桜花）を貼付。枝葉は鉄釉で施文。	
441	第61図 写真図版 62下段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-b	素焼き（白）	１区石垣背後 上層 iii	かえりは短く直立。体部はやや高い山笠形。口縁端部は水平に外方に引き出す。外面の体部と口縁部の界に凸帯１条。上面中央に扁平な釦状のつまみ貼付。	外面に緑釉と紅釉で菊花文施文。	
442	第61図 写真図版 62下段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-b	素焼き（白）	１区石垣背後 c層	かえりは短く直立。体部は高い山笠形。口縁部は水平に外方に引き出す。外面の体部と口縁部の界に凸帯１条。上面中央に扁平な釦状のつまみ貼付。	上面に鉄・緑釉で牡丹文施文。	
443	第61図 写真図版 63上段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-b	N-740 蒲色	表層	体部は山笠形に成形。口縁端部を水平につまみ出す。かえりは短く直立。上面中央に扁平な釦状のつまみを貼付。	内・外面とも透明釉施釉。	
444	第61図 写真図版 63上段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-b	C-164 立徳粉	表層	かえりは短く直立。体部は山笠形。口縁端部は水平に外方に引き出す。上面中央に扁平な釦状のつまみ貼付。	内・外面とも透明釉施釉の後、上面に緑・紫・黄・青釉で界線２条、草花施文。	
445	第61図 写真図版 63上段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-b	C-162 胡蝶	１区石垣背後 中層 i	かえりは短く直立。体部は山笠形。口縁端部は水平に外方に引き出す。上面中央に扁平な釦状のつまみ貼付。	内・外面とも透明釉施釉の後、体部外面に朱・赤・茶・鉄釉で木ノ葉文等を施文（上絵付）。かえりの端部の釉はカキ取る。	
446	第61図 写真図版 62中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-b	C-184 鸚鵡緑	表層	かえりは短く直立。体部は低い山笠形。口縁端部は水平に外方に引き出す。上面中央に扁平な釦状のつまみ貼付。	上面に型作りの桜花文貼付。内・外面とも緑釉施釉。かえりの端部の釉はカキ取り。花弁は透明釉と黄釉施釉。枝葉は鉄釉で施文。	
447	第61図 写真図版 62中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-b	C-174 深芽緑	表層	かえりは短く直立。体部は山笠形。口縁端部は水平に外方に引き出す。外面の体部と口縁部の界に凸帯１条。上面中央に扁平な釦状のつまみを貼付。かえりの端部の釉はカキ取り。	外面に型作りの花びら（桜あるいは梅）を貼付。内・外面とも緑釉施釉。貼付の花弁は透明釉と黄釉施釉。枝葉は鉄釉で施文。	
448	第61図 写真図版 62下段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-e	C-162 胡蝶	１区石垣背後 上層 i	受け部は比較的長くほぼ直立。体部は僅かに山笠状を呈する。上面中央に扁平な宝珠つまみを貼付。	外面（上面）　白濁釉施釉の後、鉄釉と酸化コバルトで松林・海・帆掛舟等を簡略に施文。内面（下面）　露胎。器面に虫喰いが認められる。	京焼系－明石産のものに類似。
449	第61図 写真図版 62下段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-b	C-164 立徳粉	表層	かえりは短く直立。体部は山笠形。口縁端部は水平に外方に引き出す。外面の体部と口縁部の界に凸帯１条。上面中央に扁平な釦状のつまみを貼付。	内・外面とも透明釉施釉の後、体部外面に緑・鉄・紫・黄釉で草花文（椿）を施文。かえりの端部の釉はカキ取り。	
450	第61図 写真図版 63中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-e	N-967 一斤染	表層	かえりは細く高く、直立する。体部は山笠形。上面中央に宝珠形のつまみを貼付。蒸気孔１ヶ所穿孔。	内・外面とも施釉。	
451	第62図 写真図版 63中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-f	C-184 鸚鵡緑 つまみ C-158 檸檬黄	表層	かえりは短く直立。体部は水平に外方へ引き出す。上面中央に型造りの桃形つまみ貼付。上面に１ヶ所蒸気孔穿孔。	内・外面とも緑釉施釉。上面の周縁部は釉溜りが出来、濃く発色。桃の実は黄釉、葉は透明釉でそれぞれ施釉。	
452	第62図 写真図版 63中段 63下段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-f	N-740 蒲色	表層	体部は山笠形に成形。口縁端部は水平に引き出す。外面の体部と口縁部の界に凸帯１条。かえりは短く直立。上面中央に型作りの桃形つまみ貼付。	内・外面とも透明釉施釉。つまみは緑釉施釉。	
453	第62図 写真図版 63中段 63下段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-f	C-158 檸檬黄	表層	かえりは短く直立。体部は山笠形。口縁端部は水平に外方に引き出す。外面の体部と口縁部の界に凸帯１条。上面中央に型作りの桃形つまみを貼付。	内・外面とも黄釉施釉。つまみは緑釉施釉。	
454	第62図 写真図版 63中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-f	C-164 立徳粉 N-967 一斤染 (つまみ)	表層	かえりは短く直立。体部は山笠形。口縁端部は水平に外方に引き出す。外面の体部と口縁部の界に凸帯１条。上面中央に型作りの桃形つまみ貼付。	内・外面とも透明釉施釉。桃は桃色釉、葉は濃い緑釉施釉。	
455	第62図 写真図版 63中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-f	三彩 N-829 若草色 (つまみ)	表層	かえりは短く直立。体部は山笠形。口縁端部　水平に外方に引き出す。外面の体部と口縁部の界に凸帯１条。上面中央に型作りの桃形つまみを貼付。	内・外面とも透明釉施釉の後、外面は緑・茶・褐色の三彩釉施釉。さらにつまみの桃は黄緑色釉、葉は藍色釉を施釉。かえりの端部は釉カキ取り。	
456	第62図 写真図版 64上段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2	素焼き（白）	表層	型作り成形。受け部は直立。上面に蒸気孔を穿孔。上面に五弁の花文を型押し施文。つまみは剥落。	内・外面とも回転ナデ調整。	
457	第62図 写真図版 64中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-f	素焼き（白）	表層	体部は山笠形に成形。かえりは短く直立。上面中央に型作りの竹形つまみを貼付。つまみの胎土は白色。	内・外面とも回転ナデ調整。	
458	第62図 写真図版 64中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-f	素焼き（白）	２区石垣背後 上層１	かえりは短く直立。体部は山笠形。上面中央に竹形のつまみを貼付。	内・外面とも回転ナデ調整。	
459	第62図 写真図版 64中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-f	素焼き（柿）	表層	体部　山笠形に成形。かえりはやや内傾する。	内・外面とも回転ナデ調整。	竹のつまみの痕跡有り。
460	第62図 写真図版 64上段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-f	C-158 檸檬黄 N-846 鸚鵡緑	表層	かえりは直立。体部は若干山笠形。上面中央に型作りの菊花状のつまみ貼付。上面に１ヶ所蒸気孔穿孔。上面　形打ちで菊花状に施文。	黄・緑の２釉を施釉。	

施釉陶器観察表(18)

No.	挿図No. 写真図版No.	器種 器種分類	色調	出土地点	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
461	第62図 写真図版 64中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-f	N-740　蒲色 C-158　檸檬黄 (つまみ)	1区石垣背後 中層 i	体部は山笠形。口縁端部は水平にひき出す。かえりは短く直立。上面中央に菊形つまみ貼付。	内・外面とも透明釉施釉。つまみは黄釉と緑釉施釉。かえりの端部の釉はカキ取り。	
462	第62図 写真図版 64中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-f	N-892 群青色	1区石垣背後 上層 iii	水挽きロクロ成形。受け部は短く直立。上面に花弁状の（梅か）つまみ貼付。	内・外面とも青色釉（瑠璃釉）施釉。	
463	第62図 写真図版 64上段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-f	N-860 薄浅葱	3区－Ⅱ 黒褐色土1	かえりは短く直立。体部は山笠形。口縁端部は水平に外方に引き出す。外面の体部と口縁部の界に凸帯1条。外面に花芯（牡丹か）状のつまみ貼付。体部外面　型押しで花文施文（牡丹文か）。	内・外面とも全面に施釉。かえりの端部の釉カキ取り。	
464	第62図 写真図版 64中段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2	素焼き（白）	3区－Ⅰ 赤褐色土1	受け部は直立。口縁部は外方に引き出す。体部は山笠形に成形。外面上面は型押しで鱗状に施文。つまみは剥落。	内面はヨコナデ調整。	
465	第62図 写真図版 64下段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅱ-B-2-a	素焼き（白） N-947　銀鼠	表層	体部の断面形は台形状。かえりは短く直立。上面中央に扁平な球形のつまみを貼付。	内・外面ともケズリの後、回転ナデ調整。内・外面ともにロクロの回転を用いて白濁釉を螺旋状に施釉。	
466	第62図 写真図版 64下段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅲ-B-2-a	C-164 立徳粉	表層	体部の断面形は台形状。かえりは短く直立。上面中央に扁平な球形のつまみを貼付。	内・外面とも透明釉施釉の後、上面に鉄・緑釉で草花文施文。	
467	第62図 写真図版 64下段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅲ-B-2-b	N-763 桧皮色	表層	体部は編笠形に成形。口縁端部を水平につまみ出す。上面中央に扁平な釦状のつまみ貼付。かえりは短く直立。	内・外面とも鉄釉施釉。	焼成は極めて堅緻。鉄製品を模倣。
468	第62図 写真図版 64下段	蓋B類 (つまみ有り) Ⅲ-B-2	C-163 蛤粉	表層	型作り成形。受け部はほぼ直立。口縁部は外方に拡張。上面は平坦。上面に三角形状の把手を貼付。上面に1ヶ所穿孔（空気孔）。	内・外面とも透明釉施釉。	
469	第63図 写真図版 65上段	蓋C類 (変形) Ⅰ-B-2	素焼き（白）	残土一括	受け部は内傾。体部は螺旋状に成形。	内・外面とも回転ナデ調整。	
470	第63図 写真図版 65上段	蓋C類 (変形) Ⅰ-B-2	素焼き（白）	表層	型作り成形か。型押しで上面を渦巻き状に成形。上面に型作りの蝉を貼り付ける。かえりは内傾。	内・外面とも回転ナデ調整。	
471	第63図 写真図版 65上段	蓋C類 (変形) Ⅰ-B-2	素焼き（白）	表層	型作り成形。受け部は短くほぼ直立。口縁端部は外方に水平に引き出す。体部は菊花弁状に透かしを入れる。上面中央部　花弁を施文。	内・外面ともナデ調整。	
472	第63図 写真図版 65上段	蓋C類 (変形) Ⅱ-B-2	C-16 紅蓮灰	表層	かえりは内傾。体部は山笠形。上面中央にやや扁平な球形のつまみを貼付。体部　花弁状に透かしを12ヶ所入れる。	内・外面とも紅釉施釉。	
473	第63図 写真図版 65上段	蓋C類 (変形) Ⅲ-B-2	N-740 蒲色	表層	型作り成形。平面形は木の葉形（柿葉か）に成形。内面　低い環状の受け部を貼付。外面中央につまみの貼付痕。	内・外面とも透明釉施釉。	
474	第63図 写真図版 65上段	蓋C類 (変形) Ⅲ-B-2-f	N-806 レモン色 C-184 鸚鵡緑	1区石垣背後 上層 iii	型作り成形。平面形は木ノ葉形（柿葉か）に成形。1ヶ所を抉る。内面　低い環状の受け部を貼付。外面中央にヘタ状のつまみを貼付。つまみは剥落。	内・外面とも黄釉と緑釉の2釉を掛け分ける。	
475	第63図 写真図版 65上段	蓋D類 (落し蓋) Ⅰ-A-2-c	C-184 鸚鵡緑	3区－Ⅲ i層	体部は凹む落とし蓋風。体部上面中央に半円形の環状のつまみ貼付。つまみは2重で鎖状に連鎖か。	内・外面とも緑釉施釉。	底部外面に目跡3ヶ所。
476	第63図 写真図版 65上段	蓋D類 (落し蓋) Ⅰ-A-2-a	N-886 花浅葱	残土一括	かえりは短く直立。体部は凹む落とし蓋風。上面中央に球形のつまみ貼付。	内・外面とも青釉施釉（瑠璃釉）。かえりの端部は露胎。	
477	第63図 写真図版 65中段	蓋D類 (落し蓋) Ⅱ-A-2-a	C-184 鸚鵡緑	表層	体部は扁平。口縁端部は水平に外方に折り曲げ。体部上面に球形のつまみ貼付。蒸気孔1ヶ所穿孔。	内・外面とも緑釉施釉。	底部外面に目跡3ヶ所。
478	第63図 写真図版 65中段	蓋D類 (落し蓋) Ⅱ-A-2-a	N-919 モーブ	表層	体部は扁平。口縁端部は水平に外方に折り曲げ。上面中央に球形のつまみ貼付。	内・外面とも紫釉施釉。釉のムラが著しい。底部外面　露胎。	
479	第63図 写真図版 65中段	蓋D類 (落し蓋) Ⅱ-A-2-a	C-158　檸檬黄 N-846　鸚鵡緑 (つまみ及び周縁部)	1区石垣背後 上層 ii	体部は扁平。口縁端部は水平に外方に折り曲げ。体部上面にやや長い球形のつまみ貼付。	全面に黄釉施釉の後、つまみの頂部・口縁端部に緑釉施釉。	
480	第63図 写真図版 65中段	蓋D類 (落し蓋) Ⅱ-A-2-b	N-763 桧皮色＝鉄釉	3区－Ⅲ iv層	形態は中央部が凹む落とし蓋。上面中央に扁平な釦状のつまみ貼付。	上面　鉄釉施釉。胡麻状に灰被り。下面（内面）露胎。	
481	第63図 写真図版 65中段	蓋D類 (落し蓋) Ⅱ-A-2-f	素焼き（白）	3区－Ⅱ 上層	体部は扁平。口縁端部は水平に外方に折り曲げ。上面に先端の丸い円柱状のつまみ貼付。上面に蒸気孔を5ヶ所穿孔。	内面　回転ナデ調整。外面　ケズリの後、ナデ調整。	
482	第63図 写真図版 65中段	蓋D類 (落し蓋) Ⅱ-A-2-c	素焼き（白）	表層	体部は扁平。口縁端部は水平に外方に折り曲げ。上面に半円形のつまみを貼付。上面に1ヶ所蒸気孔穿孔。	内・外面ともヨコナデ調整。底部外面～体部外面　ヘラケズリの後、ナデ調整。	
483	第63図 写真図版 65下段	蓋E類 (栓) Ⅰ-A	N-806 レモン色	表層	薄い円盤状の体部に比較的長い円筒状の体部を貼り付ける。体部上面に1ヶ所穿孔（空気孔）。	内・外面とも黄釉施釉。受け部の先端附近は大きく露胎。	
484	第63図 写真図版 65下段	蓋E類 (栓) Ⅰ-A	N-740 蒲色	表層	体部は薄い円盤形。上面に1ヶ所蒸気孔穿孔。かえりは僅かに内傾して比較的長い。	内・外面とも透明釉施釉。かえりの下位は露胎。	

施釉陶器観察表(19)

No.	挿図No. 写真図版No.	器種 器種分類	色調	出土地点	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
485	第63図 写真図版 65下段	蓋E類 （栓） Ⅰ-A	N-740 蒲色	表層	体部は薄い円盤形。上面に１ヶ所蒸気孔穿孔。かえりは僅かに内傾して比較的長い。	内・外面とも透明釉施釉。かえりの下位は露胎。	
486	第63図 写真図版 65下段	蓋E類 （栓） Ⅰ-B	N-861 水浅葱	表層	円盤状の体部に比較的長い円筒状の体部を貼り付ける。体部と口縁部に注口状の溝をヘラでつける。	内・外面とも青色釉を施釉。底部外面の釉拭き取り。	
487	第63図 写真図版 65下段	蓋E類 （栓） Ⅱ-A	素焼き（白）	表層	体部は山笠形。かえりは非常に長い（瓶の蓋か）。	内・外面ともナデ調整。	
488	第63図	蓋E類 （栓） Ⅰ-B	N-795 鬱金色	表層	薄い円盤状の体部に比較的長い円筒状の体部を貼り付ける。体部上面に１ヶ所穿孔（空気孔）。	内・外面とも黄褐色釉施釉。受け部の先端の釉カキ取り。	
489	第63図 写真図版 66上段	蓋物Ａ類 （丸形） Ⅰ	素焼き（柿）	３区－Ⅳ 黒褐色土2	型作り成形。上面は扁平。口縁部はほぼ直立。	体部外面に型押しで雷文帯。唐草文施文。	遺物№490とセット。
490	第63図 写真図版 66上段	蓋物Ａ類 （丸形） Ⅰ-B	素焼き（柿）	３区－Ⅰ iii層	型作り成形。底部は碁笥底状。高台は断面台形状の低い高台。体部は内彎。蓋の受け部は短くやや内傾。	内面～口縁部外面　回転ナデ調整。体部外面　型押しで雷文帯・唐草文等を施文。	遺物№489とセット。
491	第63図 写真図版 66下段	蓋物Ａ類 （丸形） Ⅰ	素焼き（柿）	１区石垣背後 中層ｉ	型作り成形。上面は扁平。口縁部はほぼ直立。外面に型押しで蓮華文を施文。（博山炉風）	内面　ナデ調整。	遺物№492とセット。
492	第63図 写真図版 66下段	蓋物Ａ類 （丸形） Ⅰ-B	素焼き（柿）	１区石垣背後 中層ｉ	型作り成形。底部は碁笥底風。体部は大きく内彎。蓋の受け部は短くほぼ直立。	内面　ナデ調整。体部外面　型押しで蓮華文施文。	遺物№491とセット。
493	第63図 写真図版 66下段	蓋物Ａ類 （丸形） Ⅰ	素焼き（柿）	１区石垣背後 中層ｉ	型作り成形。上面は扁平。口縁部はほぼ直立。外面に型押しで蓮華文施文。	内面　回転ナデ調整。	遺物№494とセット。
494	第63図 写真図版 66下段	蓋物Ａ類 （丸形） Ⅰ-B	素焼き（柿）	１区石垣背後 中層ii	型作り成形。底部は碁笥底。体部は内彎。蓋の受け部は短く直立。体部外面に型押しで蓮華文施文。	内面～口縁部外面　回転ナデ調整。	遺物№493とセット。
495	第63図 写真図版 66下段	蓋物Ａ類 （丸形） Ⅰ	N-889 藍色	１区石垣背後 上層ii	型作り成形。外面に型押しで蓮弁文施文。	内・外面とも青釉（瑠璃釉）施釉。口縁端部の釉カキ取り。	遺物№496とセット。
496	第63図 写真図版 66下段	蓋物Ａ類 （丸形） Ⅰ-B	N-889 藍色	１区石垣背後 中層ｉ	型作り成形。体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。底部はやや上げ底気味。蓋の受け部は僅かに内傾。体部外面に型押しで蓮弁文施文。	内・外面とも青釉（瑠璃釉）施釉。蓋の受け部と底部外面は露胎。	遺物№495とセット。
497	第63図 写真図版 66下段	蓋物Ａ類 （丸形） Ⅰ-B	N-740 蒲色	１区石垣背後 h層	底部は碁笥底風に浅く削り出す。体部は内彎。蓋の受け部は短く、僅かに内傾。体部外面　型押しで花弁文施文。	内・外面とも透明釉施釉。蓋の受け部及び畳付の釉はカキ取り。	
498	第63図 写真図版 67上段	蓋物Ａ類 （丸形） Ⅰ-B	三彩 C-163 蛤粉	２区石垣背後 中層１	底部は碁笥底風に浅く削り出す。体部はほぼ直立。かえりは短く直立。	外面　緑・黄・茶の三彩釉施釉。内面　透明釉施釉。かえりの釉はカキ取る。	
499	第64図 写真図版 67上段	蓋物Ａ類 （丸形） Ⅰ	C-16 紅蓮灰	表層	上面は扁平。体部はほぼ直立。	内・外面とも赤紫釉施釉。口縁端部の釉カキ取り。	遺物№500とセット。
500	第64図 写真図版 67上段	蓋物Ａ類 （丸形） Ⅰ-B	C-16 紅蓮灰	表層	底部は碁笥底風に浅く削り出す。体部は内彎。口縁部は内傾。	内・外面とも赤紫釉施釉。かえりと底部の周縁部は釉カキ取り。	遺物№499とセット。底部外面に「JAPAN E&J. B」印有り。
501	第64図 写真図版 67上段	蓋物Ａ類 （丸形） Ⅰ-C	C-158 檸檬黄	１区石垣背後 上層ｉ	平底。体部はほぼ直立。かえりはやや内傾。	内面　黄釉施釉。外面　黄・紅釉と金彩・白泥で菊花文施文。	遺物№402とセット。
502	第64図 写真図版 67中段	蓋物Ａ類 （丸形） Ⅰ	N-806　レモン色 N-723　緋色 （つまみ）	２区石垣背後 上層１	上面は扁平。体部はほぼ直立。上面中央に型作りの桃形つまみ貼付。	内面　黄釉施釉。外面　黄・紅・緑釉と金彩・白泥で菊花文施文。口縁端部の釉カキ取り。	遺物№503とセット。
503	第64図 写真図版 67中段	蓋物Ａ類 （丸形） Ⅰ-C	N-806 レモン色	１区石垣背後 中層ｉ	平底。体部はほぼ直立。かえりもほぼ直立。	内面　黄釉施釉。外面　黄・緑釉と金彩・白泥で菊花文施文。かえりの釉カキ取り。	遺物№502とセット。
504	第64図 写真図版 67中段	蓋物Ａ類 （丸形） Ⅰ	C-158 檸檬黄	表層	上面は扁平。体部はほぼ直立。上面中央に型作りの桃形つまみ貼付。	内・外面とも黄釉施釉。	遺物№505とセット。
505	第64図 写真図版 67中段	蓋物Ａ類 （丸形） Ⅰ-C	素焼き（白）	２区石垣背後 上層１	平底。体部は直立。かえりは短く直立。	内・外面とも回転ナデ調整。	遺物№504とセット。
506	第64図 写真図版 66上段	蓋物Ａ類 （丸形） Ⅰ	素焼き（柿）	確認調査 トレンチ１ 下層	上面は扁平。口縁部は直立。口縁端部は僅かに肥厚。	外面に白土で蕨手文他施文。	
507	第64図 写真図版 66上段	蓋物Ａ類 （丸形） Ⅰ	素焼き（柿）	確認調査 トレンチ１ 下層	体部はほぼ直立。蓋の受け部　短く直立。	外面に白土で蕨手文他施文。	
508	第64図 写真図版 67下段	蓋物B類 （角形） Ⅰ	N-921 菖蒲色	表層	型作り成形。器形は切頭角錐形。上面中央部に角錐形のつまみを貼付。受け部は大きく内傾。	内・外面とも紫色釉施釉。受け部の先端の釉はカキ取り。	体部内面に「JAPAN」印有り。
509	第64図 写真図版 67下段	蓋物B類 （角形） Ⅱ	素焼き（白）	表層	基本的なモチーフは№508に同じ。型作り成形。平面形は長方形。上面中央に球形の蕾を模したつまみを貼付。受け部は内傾。口縁端部は外方につまみ出す形。体部上面に草花文を型押し施文。	内・外面ともヨコナデ調整。	

施釉陶器観察表(20)

No.	挿図No. 写真図版No.	器種 器種分類	色調	出土地点	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
510	第64図 写真図版 67下段	蓋物Ｂ類 （角形） Ⅱ	素焼き（白）	表層	基本的なモチーフは№508と同じ。型作り成形。平面形は長方形。体部上面中央に球形の蕾を模したつまみ貼付。体部外面上面に草花文を型押し施文。受け部は内傾。	葉は緑釉、茎は鉄釉、花弁は紅釉を施釉。釉は剥落が著しいが一部残存。	
511	第64図 写真図版 67下段	蓋物Ｂ類 （角形） Ⅱ	C-163　蛤粉 N-863　孔雀緑 （外面周縁）	表層	基本的なモチーフは№508に同じ。型作り成形。平面形は長方形。つまみは剥落。葉・茎は型押し施文。	内面　透明釉施釉。外面　縁から緑釉・黄釉・透明釉施釉。葉・茎は濃い緑釉、花弁は濃い紅釉施釉。	
512	第64図 写真図版 67下段	蓋物Ｂ類 （角形） Ⅱ	C-158　檸檬黄 N-860　薄浅葱 （外面周縁）	表層	型作り成形。平面形は長方形。上面中央部に花弁状のつまみ貼付。葉・茎は型押し施文。	内面　透明釉施釉。外面　縁から黄釉・青釉・透明釉施釉。葉・茎は緑釉、花弁は紅釉施釉。	
513	第64図 写真図版 67下段	蓋物Ｂ類 （角形） Ⅱ	素焼き（白）	表層	型作り成形。平面形は長方形。平底。底部は浅く削り出す。体部はほぼ直立。口縁端部は水平に端面をもつ。底部内面に断面三角形の凸帯を２本貼り付ける。	内・外面ともヨコナデ調整。	
514	第64図 写真図版 68上段	蓋物Ｃ類 （変形） Ⅰ	素焼き（白）	１区石垣背後 h層	型作り成形。丸底。平面形は卵形。底部に団子状の脚を３ヶ所貼付。	内・外面ともヨコナデ調整。	底部外面に「千鳥（小陰刻）」印有り。
515	第64図 写真図版 68上段	蓋物Ｃ類 （変形） Ⅱ	素焼き（白）	表層	型作り成形。全体を桃形に成形。上面に型造りの茎と葉を貼付。	内・外面ともヨコナデ調整。	遺物№516とセット。
516	第64図 写真図版 68上段	蓋物Ｃ類 （変形） Ⅱ	素焼き（白）	表層	型作り成形。全体を桃形に成形。底部は碁笥底風に浅く削り出す。体部は内彎。蓋の受け部は内傾。	内・外面ともヨコナデ調整。	遺物№515とセット。
517	第64図 写真図版 68上段	蓋物Ｃ類 （変形） Ⅲ	素焼き（白）	３区－Ⅳ 黒褐色土2	型作り成形。器形は全体に隅丸の菱形に成形。上面に兎の耳を貼付。	内・外面ともヨコナデ調整。	
518	第65図 写真図版 68中段	蓋物Ｃ類 （変形） Ⅳ	素焼き（柿）	１区石垣背後 中層ｉ	型作り成形。全体の形状はやや角張ったヘチマ形に成形。短辺の一辺を内側に折り曲げる。頂辺にヘタを貼付。	内・外面ともナデ調整。	底部外面に「千鳥（小陰刻）」印有り。
519	第65図 写真図版 68中段	蓋物Ｃ類 （変形） Ⅳ	C-184 鸚鵡緑	表層	型作り成形。ヘチマ形に成形。平底。体部外面に葉と茎を貼付。	全面に緑釉施釉。葉の部分は白濁釉施釉。	
520	第65図 写真図版 70上段	ミニチュア	N-826 若芽色	表層	底部は平底高台風。体部は内彎。口縁部は直立。体部外面に環状の把手を貼付。	内・外面とも緑釉施釉。底部外面　露胎。	
521	第65図 写真図版 70上段	ミニチュア	N-889 藍色	表層	型作り成形か。平底。体部はほぼ直立。体部外面に把手を１ヶ所貼付。	内・外面とも藍色釉（瑠璃釉）施釉。	底部外面に目跡２ヶ所。
522	第65図 写真図版 70上段	ミニチュア	素焼き（白）	表層	平底。低い脚部をつくり出す。体部は僅かに内彎してほぼ直上に延びる。体部上方は半月状に切り、把手をはめこみ、手桶状に成形。体部外面中央に低い凸帯が１条廻る（桶のタガを表現）。	内・外面ともナデ調整。	
523	第65図 写真図版 70上段	ミニチュア	N-846 鸚鵡緑	１区石垣背後 上層ii	平底。高台は外縁部を残して、浅く削り出す。体部は内彎して、ほぼ直上に延びる。頸部は直立。体部と頸部の外面に耳の貼付痕２ヶ所。	外面　緑釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。	
524	第65図 写真図版 69下段	器台 Ⅰ	N-806 レモン色	２区石垣背後 中層１	平底。比較的低い脚をもつ。外側面は玉縁状に肥厚する。上面に断面「Ｕ」の字状の凸帯が１条廻る。	内・外面とも黄釉を施釉。脚の畳付の釉はカキ取る。	
525	第65図 写真図版 69下段	器台 Ⅱ	C-184 鸚鵡緑	１区石垣背後 上層iii	高台は断面台形状で低い。体部直立。口縁部は上面に水平に端面をもつ。	内・外面とも緑釉施釉。高台畳付の釉カキ取り。色調　深緑色。	底部外面中央に「千鳥（小陰刻）」印有り。
526	第65図 写真図版 69下段	器台 Ⅱ	N-889 藍色	１区石垣背後 b層	型作り成形。形態は立方体。上面　円形の透かし。４側面にそれぞれ長方形の透かし。	内・外面とも瑠璃釉施釉。脚部の先端に熔着物あり。	
527	第65図 写真図版 69下段	燭台 Ⅰ	素焼き（白）	表層	底部は蓋状。脚部は長く直立。体部は直立。口縁部は水平に外方にひらき、口縁端部は上方につまみ上げる。体部中央にロウソクを立てる穴を穿孔。脚部上端と下端にそれぞれ凸帯１条。	体部内・外面　回転ナデ調整。脚部外面　不定方向のナデ調整。底部内・外面　回転ナデ調整。	底部外面に「ＪＡＰＡＮ」印有り。
528	第65図 写真図版 69下段	燭台 Ⅰ	素焼き（白）	表層	底部は蓋状。脚部は長く直立し、上方で外方にひらく。脚部は中空。	底部内・外面　回転ナデ調整。脚部外面　ナデ調整。	底部外面に「ＪＡＰＡＮ」印有り。
529	第65図 写真図版 69下段	燭台 Ⅱ	素焼き（白）	１区石垣背後 l層	底部は皿状で碁笥底状に中央部を削る。脚部　短く直立、上端は外方にひらく。体部は欠損。脚部は中空。	内・外面とも回転ナデ調整。	底部外面に「千鳥（山波）」印有り。
530	第65図 写真図版 69上段	蓮華 Ⅰ	C-184 鸚鵡緑	１区石垣背後 上層ｉ	型作り成形。底部は平底。底部内面に型押しで横向きの龍文施文。	内・外面とも緑釉施釉。	底部外面に目跡３ヶ所。
531	第65図 写真図版 70中段	蓮華 Ⅱ	N-919 モーブ	表層	型作り成形。底部は丸底。無文。	内・外面とも紫釉施釉。一部灰被り。	底部外面に目跡３ヶ所。
532	第65図 写真図版 70中段	さじ	素焼き（白）	表層	型作り成形。底部は丸底。無文。	内・外面ともナデ調整。	
533	第65図 写真図版 70下段	筆架	N-806　レモン色 N-846　鸚鵡緑	２区石垣背後 上層１	型作り成形。平面形が楕円形の体部を２つ貼り合わせた形。高台は楕円形を２つ重ねた変形。高台の側面は扇形に抉る。口縁部外面に把手を貼付。	外面　黄釉施釉の後、緑釉を流し掛け。内面は黄釉のみ施釉。高台裏は露胎。	

施釉陶器観察表(21)

No.	挿図No. 写真図版No.	器種 器種分類	色調	出土地点	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
534	第66図 写真図版 70下段	硯	素焼き（白）	3区－Ⅳ 黒褐色土4	全体の器形は浅い桶形。高台は断面台形状で低い。体部は短く直立。体部外面に凸帯2条。底部内面に楕円形の海部をつくり出す。	内面～口縁部外面　回転ナデ調整。	底部外面に「大日本アハシ三平」印有り。
535	第66図 写真図版 70下段	硯	N-946　灰白 N-752　煉瓦色 （側面一部）	残土一括	全体の形態は直方体。海部の平面形は楕円形。	上面はナデ調整。	上面に墨書「山下□□」。底部外面に灰釉附着。墨附着。焼成は非常に堅緻。
536	第66図 写真図版 70下段	水滴	三彩	1区石垣背後 上層 i	蓋状の形態を呈し、内面に3ヶ所穿孔。	外面に三彩釉を施釉。水滴を兼ねた硯の蓋か。	
537	第66図 写真図版 72中段	器種不明	素焼き（柿）	表層	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は直立。	内・外面とも回転ナデ調整。	
538	第66図 写真図版 72中段	器種不明	素焼き（白）	1区石垣背後 中層 i	高台は浅く削り出す。底部は欠失（平底）。体部は内傾して直線的に上方へ延びる。頸部より上は欠失。	内面　ロクロ目明瞭。外面　線刻で波頭文施文。	
539	第66図 写真図版 72中段	器種不明	C-16 紅蓮灰	表層	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。体部と口縁部の界は外方に屈曲。口縁部は直立。口縁端部は水平に端面をもつ。口縁部下、体部下位、底部中央をそれぞれ穿孔。	体部外面　中央に唐草文施文。内・外面とも淡赤褐色釉施釉。	
540	第66図 写真図版 72中段	器種不明	素焼き（白）	表層	平底。底部は周縁部を残して浅く削り出す。体部は僅かに内傾、直線的に上方に延びる。体部と口縁部の界に凸帯1条。口縁部は波形に成形。上面に大3ヶ所、小3ヶ所の円孔を穿孔。	外面　ヨコナデ調整。	
541	第66図 写真図版 82上段	備前焼　徳利		1区石垣背後 上層 iii	平底。体部は内彎。体部外面を大きく凹ませる。	体部外面の凹部に型作りの布袋像を貼り付ける。	外面に化粧土塗布。19c前半。
542	第66図 写真図版 82下段	大谷焼　甕		3区－Ⅱ 暗褐色土 （最下層）	平底。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁部は水平に外方に折り曲げる。	内・外面ともヨコナデ調整。	
543	第66図 写真図版 82下段	大谷焼　甕		3区－Ⅱ 暗褐色土 （最下層）	体部はほぼ直立。肩部はわずかに外方に張る。口縁部はやや外方にひらく。	口縁部外面に凸帯1条。内・外面とも鉄釉施釉。	
544	第67図 写真図版 118中段	産地不明　羽釜		2区石垣背後 中層1	体部は内彎。体部の中央に幅の広い鍔を貼り付ける。	外面に灰釉施釉。暗茶褐色に発色。	
545	第67図 写真図版 118中段	産地不明　鉢		1区石垣背後 上層 iii	平底。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は水平に外方に折り曲げる。	内・外面ともヨコナデ調整。素焼。外面に把手を貼り付ける。	広義の窯道具（施釉用の鉢）か。
546	第67図 写真図版 118中段	産地不明　鉢		3区－Ⅲ 赤褐色土 および黒色土3	輪高台をもつ。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部はそのまま上方に挽き上げる。	内・外面ともヨコナデ調整。素焼。外面に把手を貼り付ける。	広義の窯道具（施釉用の鉢）か。

第４表　タイル観察表(1)

No.	挿図No.	出土地点	成形	形状		寸法mm（　）残存値			焼成	表面			裏面		備考
				規格（インチ）	形態	横	縦	厚さ		文様番号	文様表現法	文様種類	形態	文字・記号等	
T001	第68図	１区石垣背後　中層ⅰ	湿式	8″×8″	正方形	180	(130)	19	釉焼	T1	多彩レリーフ	花文	クシ8条	裏面ベンガラ「…ミ」	
T002	第68図	１区石垣背後　上層ⅱ	湿式	6″×6″	正方形	152	153	14	本焼	T2	多彩レリーフ	瓔珞文	クシ7条		
T003	第68図	１区石垣背後　上層ⅰ	湿式	8″×8″	正方形	179	(96)	17	素焼	T3	単彩	無紋	クシ8条		
T004	第68図	１区石垣背後　上層ⅲ	湿式	6″×6″	正方形	153	156	15	本焼	T4	多彩レリーフ	瓔珞文	クシ7条	ベンガラ「○」	
T005	第68図	１区石垣背後　上層ⅰ	湿式	6″×6″	正方形	154	155	15	本焼	T5	多彩レリーフ	花文	クシ7条		
T006	第68図	１区石垣背後　上層ⅲ	湿式	6″×6″	正方形	153	153	15	本焼	T6	多彩レリーフ	花文	クシ7条	「[illegible]」ベンガラ「…」	中央穿孔
T007	第68図	１区石垣背後　h層	湿式	6″×6″	正方形	(115)	(68)	17	本焼	T7	多彩レリーフ	花文	クシ9条	「[illegible]」	
T008	第68図	２区石垣背後　中層３	湿式	6″×6″	不明	(64)	(35)	16	本焼	T8	多彩レリーフ	花文	クシ9条		
T009	第68図	１区石垣背後　e層	湿式	6″×6″	正方形	154	154	16	本焼	T9	多彩レリーフ	唐草文	クシ7条	ベンガラ「○」	
T010	第68図	１区石垣背後　上層ⅲ	湿式	6″×6″	不明	151	(116)	15	本焼	T10	多彩レリーフ	草花文	クシ7条		
T011	第69図	１区石垣背後　g層	湿式	6″×6″	正方形	155	155	15	本焼	T11	多彩レリーフ	草花文	クシ8条	ベンガラ「○」	
T012	第69図	コウカシ窯内	湿式	6″×6″	不明	(103)	(112)	15	本焼	T12	多彩レリーフ	草花文	クシ9条		
T013	第69図	表層	湿式	6″×6″	正方形	(136)	(96)	16	素焼	T13	レリーフ	草花文	クシ8条		
T014	第69図	１区石垣背後　中層ⅱ	湿式	6″×6″	正方形	(101)	(105)	15	素焼	T14	レリーフ	草花文	クシ8条		
T015	第69図	１区石垣背後　g層	湿式	6″×6″	不明	(111)	(107)	14	本焼	T15	多彩レリーフ	草花文	クシ7条		
T016	第69図	３区－Ⅴ　ⅱ-２層	湿式	6″×6″	正方形	156	(135)	16	本焼	T16	多彩レリーフ	草花文	クシ7条	ベンガラ「[illegible]」	
T017	第69図	１区石垣背後　g層	湿式	6″×6″	正方形	159	158	16	本焼	T17	多彩レリーフ	草花・文字	クシ7条		
T018	第69図	１区石垣背後　上層ⅲ	湿式	6″×6″	不明	159	159	15	本焼	T18	多彩レリーフ	草花文	クシ7条		中央穿孔
T019	第69図	１区石垣背後　上層ⅲ	湿式	6″×6″	不明	(106)	(111)	16	本焼	T19	多彩レリーフ	草花文	クシ6条		
T020	第69図	表層	湿式	6″×6″	正方形	152	(105)	13	素焼	T20	多彩レリーフ	花蝶文	クシ7条		
T021	第70図	表層	湿式	6″×6″	正方形	151	(103)	14	素焼	T21	多彩レリーフ	草花文	クシ7条		
T022	第70図	２区石垣背後　中層２	湿式	6″×6″	正方形	(126)	(118)	12	本焼	T22	単彩レリーフ	草花文	クシ7条		
T023	第70図	１区石垣背後　h層	湿式	6″×6″	正方形	152	(122)	18	本焼	T23	単彩レリーフ	草花文	クシ7条		
T024	第70図	１区石垣背後　上層ⅰ	湿式	6″×6″	正方形	152	152	13	素焼	T24	レリーフ	草花文	クシ7条		
T024-2	未掲載	１区石垣背後　上層ⅰ	湿式	6″×6″	正方形			13	素焼	T24	レリーフ	草花文	クシ7条		
T025	第70図	表層	湿式	6″×6″	正方形	154	(108)	13	本焼	T25	単彩レリーフ	草花文	クシ7条		
T026	第70図	表層	湿式	6″×6″	正方形	(110)	(97)	14	本焼	T26	多彩レリーフ	草花文	クシ7条	ベンガラ「キ」	
T027	第70図	１区石垣背後　b層	湿式	6″×6″	正方形	(111)	152	17	本焼	T27	単彩レリーフ	草花文	クシ7条		
T028	第70図	表層	湿式	6″×6″	正方形	151	152	16	本焼	T28	多彩レリーフ	草花文	クシ7条		
T028-2	第90図	表層	湿式	6″×6″	正方形			17	本焼	T28-2	多彩レリーフ	草花文	クシ7条	緑・白	
T029	第70図	表層	湿式	6″×6″	正方形	154	(92)	14	本焼	T29	単彩レリーフ	草花文	クシ7条		
T030	第70図	表層	湿式	6″×6″	正方形	152	(146)	14	素焼	T30	レリーフ	草花文	クシ7条		
T031	第71図	表層	湿式	6″×6″	正方形	156	157	14	素焼	T31	レリーフ	草花文	クシ7条	「特製品　淡陶會社」印	
T032	第71図	１区石垣背後　上層ⅲ	湿式	6″×6″	正方形	155	155	14	本焼	T32	多彩レリーフ	草花文	クシ7条		
T033	第71図	残土一括	湿式	6″×6″	正方形	154	154	15	素焼	T33	レリーフ	草花文	クシ8条		
T034	第71図	２区石垣背後　中層２	湿式	6″×6″	不明	(107)	(80)	15	素焼	T34	レリーフ	幾何学文	クシ7条		
T035	第71図	１区石垣背後　上層ⅰ	湿式	6″×6″	正方形	152	153	13	素焼	T35	レリーフ	草花文	クシ7条		
T036	第71図	２区石垣背後　中層２	湿式	6″×6″	正方形	152	151	16	本焼	T36	多彩レリーフ	草花文	クシ7条	ベンガラ「キ」	
T037	第71図	３区－Ⅰ　ⅰ層	湿式	6″×6″	正方形	(104)	(137)	17	本焼	T37	レリーフ	デザイン文	クシ9条		
T038	第71図	１区石垣背後　上層ⅲ	湿式	6″×6″	不明	(78)	(81)	16	本焼	T38	多彩レリーフ	デザイン文	クシ7条		
T039	第71図	１区石垣背後　上層ⅰ	湿式	6″×6″	不明	(73)	(77)	13	素焼	T39	レリーフ	草花文	クシ7条	角に葉マーク有	
T040	第71図	１区石垣背後　中層ⅰ	湿式	5.5″×5.5″	正方形	140	(80)	16	本焼	T40	多彩レリーフ	雲龍文	無文		
T041	第71図	１区石垣背後　中層ⅰ	湿式	6″×6″	正方形	157	(156)	8	素焼	T41	手書き	草花文	クシ9条		
T042	第71図	３区－Ⅲ　ⅱ層	湿式	6″×6″	不明	(70)	(67)	14	素焼	T42	手書き	草花文	クシ7条		
T043	第72図	１区石垣背後　上層ⅲ	湿式	6″×6″	正方形	154	(88)	17	本焼	T43	単彩	無地	クシ27条	墨書有	
T043-2	第92図	表層	湿式	6″×6″	正方形			16	本焼	T43-2	単彩	無地	クシ10条	白、「四天」文字	
T044	第72図	１区石垣背後　上層ⅰ	湿式	6″×6″	正方形	156	156	13	素焼	T44	チューブライニング	草花文	クシ7条	墨書「丸 力」	
T045	第72図	１区石垣背後　上層ⅲ	湿式	5.5″×5.5″	八角形	143	146	14	素焼	T45	手書き	草花文	無文		
T046	第72図	表層	湿式	6″×6″	八角形	(110)	(82)	14	本焼	T46	無地	三彩	無文	裏面も釉あり	
T047	第72図	２区石垣背後　中層３	湿式	8″×1/2	三角形	174	(92)	17	素焼	T47	レリーフ	花文	クシ8条		
T048	第72図	１区石垣背後　上層ⅰ	湿式	8″×1/2	三角形	177	177	17	素焼	T48	レリーフ	花文	クシ8条		
T049	第72図	１区石垣背後　上層ⅲ	湿式	6″×1/2	三角形	(144)	(100)	16	釉焼	T49	多彩レリーフ	花文	クシ7条	ベンガラ「キ」	
T050	第72図	１区石垣背後　上層ⅲ	湿式	6″×1/2	三角形	152	(140)	15	素焼	T50	多彩レリーフ	瓔珞文	クシ7条	ベンガラ「○」	
T051	第72図	１区石垣背後　上層ⅱ	湿式	6″×1/2	三角形	(150)	(151)	16	素焼	T51	レリーフ	瓔珞文	クシ6条	ベンガラ「○」	
T052	第72図	２区石垣背後　中層１	湿式	6″×1/2	三角形	151	(135)	16	本焼	T52	多彩レリーフ	花文	クシ7条	ベンガラ「キ」	
T053	第73図	表層	湿式	6″×1/2	三角形	149	153	16	素焼	T53	レリーフ	唐草文	クシ7条		
T054	第73図	２区石垣背後　中層１	湿式	6″×1/2	三角形	(149)	(148)	16	素焼	T54	レリーフ	草花文	クシ8条		
T055	第73図	２区石垣背後　上層１	湿式	6″×1/2	三角形	(66)	(123)	15	素焼	T55	レリーフ	草花・文字	クシ7条		
T056	第73図	残土一括	湿式	6″×1/2	三角形	(148)	(102)	14	本焼	T56	単彩レリーフ	草花文	クシ7条		
T057	第73図	１区石垣背後　上層0	湿式	6″×1/2	三角形	150	151	13	素焼	T57	レリーフ	草花文	クシ7条		
T058	第73図	表層	湿式	6″×1/2	三角形	152	(48)	13	本焼	T58	単彩レリーフ	草花文	クシ7条	墨書	
T059	第73図	１区石垣背後　上層ⅲ	湿式	6″×1/2	三角形	(149)	(142)	16	素焼	T59	レリーフ	草花文	クシ7条		
T060	第73図	表層	湿式	6″×1/2	三角形	(149)	(149)	16	素焼	T60	レリーフ	草花文	クシ7条		
T061	第73図	表層	湿式	6″×1/4	三角形	(148)	(70)	13	素焼	T61	レリーフ	瓔珞文	クシ7条		
T062	第73図	１区石垣背後　g層	湿式	6″×1/4	三角形	153	76	16	素焼	T62	レリーフ	花文	クシ6条		
T063	第73図	１区石垣背後　上層ⅰ	湿式	6″×1/4	三角形	150	76	15	素焼	T63	レリーフ	草花文	クシ7条	「特」印	
T064	第73図	表層	湿式	6″×3″	長方形	(138)	81	17	本焼	T64	手描き（釉下彩）	十字文	クシ7条		
T065	第73図	表層	湿式	3″×3″	正方形	79	79	12	素焼	T65	レリーフ	花文	無文		T26の1/4タイプ
T066	第74図	表層	乾式	8″×8″	正方形	186	(152)	12	本焼	T66	多彩レリーフ	草花文	A3	ベンガラ「イ」	
T066-2	第94図	表層	乾式	8″×8″	正方形			12	本焼	T66	多彩レリーフ	草花文	A3	緑	
T066-3	未掲載	表層	乾式	8″×8″	正方形			12	本焼	T66	多彩レリーフ	草花文	A3	藍??	
T067	第74図	表層	乾式	8″×8″	正方形	186	(142)	13	本焼	T67	多彩レリーフ	草花文	A1	ベンガラ「[illegible]」墨書「四五三　見本」	チューブライニング試作?
T068	第74図	１区石垣背後　上層ⅲ	乾式	8″×8″	正方形	(170)	(145)	14	本焼	T68	多彩レリーフ	草花文	A3		
T069	第74図	１区石垣背後　上層ⅲ	乾式	6″×6″	正方形	151	151	10	本焼	T69	多彩レリーフ	瓔珞文	A3		
T070	第74図	表層	乾式	6″×6″	正方形	152	(110)	11	素焼	T70	レリーフ	花文	A3		
T071	第74図	表層	乾式	6″×6″	正方形	155	(108)	10	本焼	T71	多彩レリーフ	唐草文	A3		
T072	第74図	２区石垣背後　中層３	乾式	6″×6″	正方形	(84)	(65)	10	本焼	T72	多彩レリーフ	草花文	A3		
T073	第74図	２区石垣背後　上層１	乾式	6″×6″	正方形	156	156	11	本焼	T73	多彩レリーフ	草花文	A3		
T073-2	第94図	３区-Ⅱ上層	乾式	6″×6″	正方形			11	本焼	T73	多彩レリーフ	草花文		紺・浅緑	
T074	第74図	表層	乾式	6″×6″	正方形	(80)	(73)	8	本焼	T74	多彩レリーフ	草花文	A4		
T075	第74図	２区石垣背後　中層１	乾式	6″×6″	正方形	(111)	(127)	12	本焼	T75	多彩レリーフ	花蝶文	A3		

タイル観察表(2)

No.	挿図No.	出土地点	成形	形状		寸法mm(　)残存値			焼成	表面			裏面		備考
				規格(インチ)	形態	横	縦	厚さ		文様番号	文様表現法	文様種類	形態	文字・記号等	
T076	第75図	表層	乾式	6″×6″	正方形	155	155	9	本焼	T76	単彩レリーフ	草花文	D5		
T076-2	第95図	表層	乾式	6″×6″	正方形			12	本焼	T76	単彩レリーフ	草花文	D5	藍	
T077	第75図	2区石垣背後　上層1	乾式	6″×6″	正方形	(133)	(93)	11	本焼	T77	単彩レリーフ	草花文	A3		
T078	第75図	表層	乾式	6″×6″	正方形	(67)	(56)	9	本焼	T78	単彩レリーフ	草花文	A		
T079	第75図	1区石垣背後　上層ii	乾式	6″×6″	正方形	156	156	11	本焼	T79	多彩レリーフ	草花文	A3		
T080	第75図	表層	乾式	6″×6″	正方形	(110)	(96)	9	本焼	T80	単彩レリーフ	草花文	A4		
T080-2	第95図	1区石垣背後　上層i	乾式	6″×6″	正方形			11	本焼	T80	単彩レリーフ	草花文	A系	黄緑一色	
T081	第75図	表層	乾式	6″×6″	正方形	(106)	(80)	10	本焼	T81	多彩レリーフ	草花文	A3		
T082	第75図	表層	乾式	6″×6″	正方形	156	(127)	10	本焼	T82	多彩レリーフ	草花文	A3	ベンガラ「い」	
T082-2	第95図	2区石垣背後　上層1	乾式	6″×6″	正方形			10	本焼	T82	多彩レリーフ	草花文	A3		
T083	第75図	1区石垣背後　中層i	乾式	6″×6″	正方形	153	(110)	11	本焼	T83	多彩レリーフ	幾何学文	A3		
T084	第75図	表層	乾式	6″×6″	正方形	153	153	10	本焼	T84	多彩レリーフ	草花文	A4		
T085	第75図	2区石垣背後　上層1	乾式	6″×6″	正方形	153	153	11	素焼	T85	レリーフ	花文	A3		
T086	第76図	3区-Ⅰ　暗褐色土(検出面)	乾式	6″×6″	正方形	159	159	11	本焼	T86	多彩レリーフ	草花文	A3		
T087	第76図	1区石垣背後　上層i	乾式	6″×6″	正方形	154	154	11	本焼	T87	単彩レリーフ	幾何学文	A3		
T088	第76図	2区石垣背後　上層1	乾式	6″×6″	正方形	156	156	10	本焼	T88	多彩レリーフ	草花文	A3		
T088-2	第96図	1区石垣背後　上層iii	乾式	6″×6″	正方形			11	本焼	T88	多彩レリーフ	草花文	A3		紺色
T089	第76図	表層	乾式	6″×6″	正方形	(125)	154	10	本焼	T89	多彩レリーフ	草花文	D5		
T090	第76図	表層	乾式	6″×6″	正方形	155	155	9	本焼	T90	多彩レリーフ	草花文	D5		
T090-2	第96図	表層	乾式	6″×6″	正方形			10	本焼	T90	チューブライニング	草花文	D6		桃・黄・ライム
T090-3	第96図	表層	乾式	6″×6″	正方形			10	本焼	T90	チューブライニング	草花文	D2		桃・黄・薄黄
T091	第76図	2区石垣背後　上層1	乾式	6″×6″	正方形	155	156	11	本焼	T91	単彩レリーフ	デザイン文	A3		
T091-2	第96図	表層	乾式	6″×6″	正方形			9	素焼	T91	チューブライニング	デザイン文	D6		
T092	第76図	2区石垣背後　中層1	乾式	6″×6″	正方形	(77)	(90)	12	本焼	T92	単彩レリーフ	草花文	A3?		
T093	第76図	表層	乾式	6″×6″	正方形	154	155	12	本焼	T93	単彩レリーフ	デザイン文	A3		
T094	第76図	表層	乾式	6″×6″	正方形	(64)	(108)	10	本焼	T94	多彩レリーフ	草花文	F2	PATENTNo.有	エンボスタイル,カタログNo.562
T095	第76図	表層	乾式	6″×6″	正方形	154	(105)	9	本焼	T95	チューブライニング	花鳥文	A4		表に千鳥
T096	第76図	表層	乾式	6″×6″	正方形	(60)	(74)	9	本焼	T96	レリーフ	不明	A	ベンガラ「イ」	
T097	第77図	3区-Ⅳ　赤色土1	乾式	6″×6″	正方形	151	151	10	本焼	T97	チューブライニング	草花文	E2		
T097-2	第97図	表層	乾式	6″×6″	正方形			10	本焼	T97	チューブライニング	草花文	D6		桃・浅緑・緑・青黄・緑
T097-3	第97図	表層	乾式	6″×6″	正方形			10	本焼	T97	チューブライニング	草花文	E2		茶
T098	第77図	表層	乾式	6″×6″	正方形	152	(130)	11	本焼	T98	チューブライニング	草花文	E4		
T099	第77図	表層	乾式	6″×6″	正方形	(147)	(112)	9	本焼	T99	チューブライニング	草花文	C3		
T100	第77図	3区-Ⅲ　i層	乾式	6″×6″	正方形	(105)	(92)	10	本焼	T100	チューブライニング	草花文	D6		
T101	第77図	表層	乾式	6″×6″	正方形	149	149	8	本焼	T101	チューブライニング	草花文	A4	ベンガラ「イ」	
T102	第77図	表層	乾式	6″×6″	正方形	151	151	9	本焼	T102	チューブライニング	草花文	A5	ベンガラ「ハ」	
T103	第77図	残土一括	乾式	6″×6″	正方形	(90)	(87)	9	本焼	T103	チューブライニング	草花文	D		
T104	第77図	表層	乾式	6″×6″	正方形	(115)	(100)	10	本焼	T104	チューブライニング	草花文	D6		
T104-2	第96図	表層	乾式	6″×6″	正方形			10	本焼	T104	チューブライニング	草花文	E4		青・浅黄・桃
T105	第77図	表層	乾式	6″×6″	正方形	(95)	151	10	本焼	T105	チューブライニング	草花文	F2		
T106	第77図	表層	乾式	6″×6″	正方形	(95)	(91)	10	本焼	T106	チューブライニング	草花文	D6		
T107	第78図	表層	乾式	6″×6″	正方形	153	153	11	本焼	T107	チューブライニング	草花文	A5	ベンガラ「タ」	
T108	第78図	表層	乾式	6″×6″	正方形	(103)	73	9	本焼	T108	チューブライニング	デザイン文	D2		
T108-2	第97図	1区石垣背後　上層i	乾式	6″×6″	正方形			11	本焼	T108	チューブライニング	デザイン文	E2		浅緑・緑
T109	第78図	表層	乾式	6″×6″	正方形	149	150	8	本焼	T109	チューブライニング	草花文	A5		
T110	第78図	表層	乾式	6″×6″	正方形	(122)	(110)	9	本焼	T110	チューブライニング	草花文	A5		
T111	第78図	表層	乾式	6″×6″	正方形	(103)	(61)	9	本焼	T111	チューブライニング	草花文	D6		カタログNo.14
T112	第78図	表層	乾式	6″×6″	正方形	153	153	9	本焼	T112	チューブライニング	草花文	D6		
T113	第78図	表層	乾式	6″×6″	正方形	151	(135)	10	本焼	T113	チューブライニング	デザイン文	A4		
T113-2	第98図	表層	乾式	6″×6″	正方形			10	本焼	T113	チューブライニング	デザイン文	E2・A系		白・緑・浅緑
T114	第78図	表層	乾式	6″×6″	正方形	(109)	153	8	本焼	T114	チューブライニング	デザイン文	D6		白線・乳青
T115	第78図	表層	乾式	6″×6″	正方形	153	(114)	10	本焼	T115	チューブライニング	デザイン文	D3		
T116	第78図	表層	乾式	6″×6″	正方形	151	151	9	素焼	T116	チューブライニング	デザイン文	A5	記号あり「?」	表面釉薬残る
T117	第78図	表層	乾式	6″×6″	正方形	(109)	(84)	10	本焼	T117	チューブライニング	デザイン文	D6		
T118	第78図	表層	乾式	6″×6″	正方形	(64)	(103)	10	本焼	T118	チューブライニング	文字	B1かB2		「湯」?文字
T119	第79図	表層	乾式	6″×6″	正方形	(133)	(98)	10	本焼	T119	無地	マット	F1		マット調　カタログNo.1006
T119-2	第98図	表層	乾式	6″×6″	正方形			10	本焼	T119	無地	マット	F1		乳緑マット調
T120	第79図	表層	乾式	6″×6″	正方形	150	(136)	10	本焼	T120	無地	マット	F1		マット調　カタログNo.46
T121	第79図	表層	乾式	6″×6″	正方形	153	153	10	素焼	T121	凹凸	マット?	F1		
T122	第79図	表層	乾式	6″×6″	正方形	(62)	(50)	10	本焼	T122	凹凸	マット?	F2		マット調?
T123	第79図	表層	乾式	6″×6″	正方形	151	(72)	9	素焼	T123	銅版転写	草花文	A5		
T124	第79図	表層	乾式	6″×6″	正方形	150	(139)	11	素焼	T124	銅版転写	草花文	E3		
T125	第79図	3区　上層	乾式	6″×6″	正方形	(124)	(135)	10	本焼	T125	銅版転写	草花文	E3		
T126	第79図	表層	乾式	6″×6″	正方形	153	154	10	素焼	T126	銅版転写	草花文	E3		
T127	第79図	表層	乾式	6″×6″	正方形	(124)	(136)	10	本焼	T127	銅版転写	草花文	E3		T128文様裏写りあり
T128	第79図	表層	乾式	6″×6″	正方形	153	153	10	素焼	T128	銅版転写	草花文	E3		
T129	第79図	表層	乾式	6″×6″	正方形	152	152	10	素焼	T129	銅版転写	草花文	E3		
T130	第79図	表層	乾式	6″×6″	正方形	148	148	10	素焼	T130	銅版転写	草花文	D4		
T131	第80図	表層	乾式	6″×6″	正方形	152	151	10	素焼	T131	絵画	花鳥文	E3		手描き　鳥草(すすき)画
T132	第80図	表層	乾式	6″×6″	正方形	(116)	(83)	10	本焼	T132	絵画	花鳥文	D4		手描き　鳥草画　釉下彩
T133	第80図	表層	乾式	6″×6″	正方形	150	150	9	素焼	T133	絵画	竹笹文	D4		竹画
T134	第80図	コウカシ窯内　上層	乾式	6″×6″	正方形	(103)	(61)	10	本焼	T134	絵画	山水画?	D4?		
T135	第80図	コウカシ窯内　上層	乾式	6″×6″	正方形	(62)	(105)	9	本焼	T135	絵画	不明	D4?		
T136	第80図	3区-Ⅲ　黒色土1	乾式	6″×6″	正方形	(88)	(76)	8	素焼	T136	絵画	草花文	D5		
T137	第80図	表層	乾式	6″×6″	正方形	(66)	(118)	10	素焼	T137	絵画	草花文	D2?		
T138	第80図	表層	乾式	6″×6″	正方形	(88)	(96)	9	本焼	T138	無地	文字	F1		表「湯」?
T139	第80図	表層	乾式	6″×6″	正方形	154	(96)	10	本焼	T139	無地	マーブル	C4	(HD)登録意匠　叢雲意板スタンプ	
T140	第80図	表層	乾式	6″×6″	正方形	(85)	152	10	本焼	T140	無地	ぼかし	B1		
T141	第81図	2区石垣背後　中層3	乾式	6″×1/2	三角形	(122)	(138)	10	本焼	T141	多彩レリーフ	花文	A2	ベンガラ文字?あり	T70の三角タイプ
T142	第81図	1区石垣背後　上層i	乾式	6″×1/2	三角形	(123)	(117)	10	素焼	T142	レリーフ	花文	A2		T72の三角タイプ
T143	第81図	1区石垣背後　中層i	乾式	6″×1/2	三角形	151	151	12	素焼	T143	レリーフ	草花文	A2		T77の三角タイプ

タイル観察表(3)

No.	挿図No.	出土地点	成形	形状		寸法mm（ ）残存値			焼成	表面			裏面		備考
				規格（インチ）	形態	横	縦	厚さ		文様番号	文様表現法	文様種類	形態	文字・記号等	
T144	第81図	表層	乾式	6″×1/2	三角形	150	(140)	11	本焼	T144	多彩レリーフ	草花文	A2	ベンガラ「イ」	T81の三角タイプ
T145	第81図	表層	乾式	6″×1/2	三角形	(140)	(83)	10	本焼	T145	多彩レリーフ	草花文	A2		T84の三角タイプ
T146	第81図	表層	乾式	6″×1/2	三角形	152	(113)	11	本焼	T146	単彩レリーフ	デザイン文	A2		T91の三角タイプ
T147	第81図	表層	乾式	6″×3″	長方形	(64)	75	9	本焼	T147	単彩レリーフ	草花文	A7	文字「イ」	
T148	第81図	表層	乾式	6″×3″	長方形	(132)	76	11	本焼	T148	多彩レリーフ	草花文	B3		
T148-2	第101図	表層	乾式	6″×3″	長方形			9	本焼	T148	多彩レリーフ	草花文	B3		黄・黄緑・青
T149	第81図	表層	乾式	6″×3″	長方形	(111)	76	9	本焼	T149	チューブライニング	草花文	A6	ベンガラ「十一」	
T150	第81図	表層	乾式	6″×3″	長方形	157	79	9	素焼	T150	チューブライニング	草花文	D6	ベンガラ「ニ」	
T151	第81図	表層	乾式	6″×3″	長方形	151	76	11	本焼	T151	チューブライニング	草花文	A6		
T152	第81図	表層	乾式	6″×3″	長方形	(94)	79	9	本焼	T152	チューブライニング	雷文	D6		
T153	第81図	表層	乾式	6″×2″	長方形	(98)	52	9	本焼	T153	チューブライニング	雷文	B7		
T154	第82図	表層	乾式	4.3″×4.3″	正方形	110	110	10	本焼	T154	無地	マーブル	B10		
T155	第82図	表層	乾式	3″×3″	正方形	76	77	9	本焼	T155	多彩レリーフ	草花文	B21		
T156	第82図	表層	乾式	3″×3″	正方形	76	(56)	10	本焼	T156	単彩レリーフ	草花文	B19		
T157	第82図	表層	乾式	3″×3″	正方形	76	(54)	9	本焼	T157	単彩レリーフ	草花文	A12		
T158	第82図	表層	乾式	3″×3″	正方形	76	76	10	本焼	T158	多彩レリーフ	草花文	B21		
T158-2	第102図	表層	乾式	3″×3″	正方形			8	本焼	T158	多彩レリーフ	草花文	A12		黄・紫・緑・白
T159	第82図	表層	乾式	3″×3″	正方形	77	77	8	本焼	T159	多彩レリーフ	草花文	A12		
T160	第82図	表層	乾式	3″×3″	正方形	(57)	76	9	本焼	T160	無地	マット	B21		
T161	第82図	表層	乾式	3″×3″	正方形	77	77	8	素焼	T161	チューブライニング	草花文	A13		
T162	第82図	表層	乾式	6″×3″	クッション	152	76	10	素焼	T162	無地	無紋	B4		淡陶分類2分の1平
T163	第82図	表層	乾式	6″×3″	手摺	153	76	15	素焼	T163	無地	無紋	B6		淡陶分類5号
T164	第82図	表層	乾式	6″×3″	手摺	150	74	12	素焼	T164	無地	無紋	A6		淡陶分類5号
T165	第82図	表層	乾式	6″×3″	笠木	154	79	8	素焼	T165	無地	無紋	A8		
T166	第82図	表層	乾式	6″×2.4″	笠木	153	61	10	素焼	T166	無地	無紋	A9		淡陶分類4号
T167	第82図	3区－Ⅲ　黒色土1	乾式	不明	正方形	(94)	66	15	本焼	T167	無地	無紋	無文		異形
T168	第83図	1区石垣背後　中層ii	乾式	6″×2.2″	笠木	(62)	56	10	本焼	T168	無地	マーブル	I1?		淡陶分類5号、曲面
T169	第83図	表層	乾式	6″×2.2″	笠木	152	57	10	素焼	T169	無地	無紋	I1		淡陶分類5号
T170	第83図	表層	乾式	6″×1.6″	笠木	(97)	40	16	本焼	T170	無地	マーブル	B8	叢雲壁板スタンプ有	淡陶分類8号、変形
T171	第83図	表層	乾式	6″×1.6″	笠木	(107)	41	15	素焼	T171	無地	マーブル	B25		淡陶分類8号
T172	第83図	表層	乾式	6″×1.6″	笠木	(115)	41	10	本焼	T172	無地	無紋	I2		白釉消し、淡陶分類8号
T173	第83図	表層	乾式	6″×1.6″	笠木	156	40	9～17	素焼	T173	無地	無紋	A10		淡陶分類8号
T174	第83図	表層	乾式	6″×2.2″	竹割	(91)	56	13	本焼	T174	無地	マーブル	無文	叢雲壁板スタンプ有	淡陶分類4号変形
T175	第83図	表層	乾式	6″×1.6″	竹割	(78)	41	11	本焼	T175	無地	無紋	無文		淡陶分類7号
T176	第83図	表層	乾式	6″×6″	手摺曲隅	152	153	15	素焼	T176	無地	無紋	B25		淡陶分類5号
T177	第83図	表層	乾式	6″×4.3″	手摺小曲隅	111	111	13	素焼	T177	無地	無紋	B26		淡陶分類4号
T178	第83図	表層	乾式	不明	手摺曲隅	(106)	(86)	16	本焼	T178	無地	マーブル	B24		淡陶分類6号変形隅
T179	第83図	2区石垣背後　中層2	乾式	2.7″×2.7″	竹割足元隅	70	70	12	本焼	T179	無地	無紋	無文		白、淡陶分類3号変形曲面
T180	第83図	表層	乾式	隅タイル	笠木曲出	91	56	13	素焼	T180	無地	無紋	J2		
T181	第83図	表層	乾式	隅タイル	曲折	107	60	10	素焼	T181	無地	無紋	無文		淡陶分類小口平
T182	第83図	表層	乾式	隅丸タイル	笠木C丸隅	60	58	13	素焼	T182	無地	無紋	J1		淡陶分類5号
T183	第84図	表層	湿式	-	形象	108	93	10	素焼	T183	レリーフ	ちどり	－	千鳥	
T184	第84図	表層	湿式	-	形象	107	114	10	素焼	T184	レリーフ	ゆり	－	ゆり	
T185	第84図	表層	湿式	-	形象	106	104	9	素焼	T185	レリーフ	うめ	－	うめ	
T186	第84図	表層	湿式	-	形象	107	104	10	素焼	T186	レリーフ	さくら	－	さくら	
T187	第84図	1区石垣背後　上層iii	湿式	-	形象	(59)	(74)	17	素焼	T187	レリーフ	うさぎ	－	うさぎ淡紺	
T188	第84図	表層	湿式	-	形象	74	62	11	素焼	T188	レリーフ	ちょう	－	鳥　釉薬残る	
T189	第84図	表層	湿式	-	形象	68	60	10	素焼	T189	レリーフ	とり	－	ちょう	
T190	第84図	1区石垣背後　上層0	湿式	-	形象	70	68	10	素焼	T190	レリーフ	もみぢ	－	もみぢ	
T191	第84図	表層	湿式	-	形象	54	82	11	素焼	T191	レリーフ	ひょうたん	－	ひょうたん	
T192	第99図	2区石垣背後　上層1	乾式	6″×6″	正方形			8	本焼	T192	無地	無文	A4		白
T192-2	第99図	表層	乾式	6″×6″	正方形			10	本焼	T192	無地	無文	C4		薄緑
T192-3	第99図	表層	乾式	6″×6″	正方形			9	本焼	T192	無地	無文	A5		乳黄
T192-4	第99図	表層	乾式	6″×6″	正方形			10	本焼	T192	無地	無文	B1		乳橙
T192-5	第99図	表層	乾式	6″×6″	正方形			10	本焼	T192	無地	無文	D4		薄黄
T192-6	第99図	表層	乾式	6″×6″	正方形			10	本焼	T192	無地	無文	F2		青ライム
T192-7	第99図	表層	乾式	6″×6″	正方形			9	本焼	T192	無地	無文	A5		青緑
T192-8	第99図	表層	乾式	6″×6″	正方形			11	本焼	T192	無地	無文	C4		緑
T192-9	第99図	表層	乾式	6″×6″	正方形			10	本焼	T192	無地	無文	F1		茶
T193	第99図	表層	乾式	6″×6″	正方形片面取り			10	本焼	T193	無地	無文	G1		赤桃
T194	第101図	表層	乾式	6″×3″	長方形			8	本焼	T194	無地	無文	A6		緑
T194-2	第101図	表層	乾式	6″×3″	長方形			9	本焼	T194	無地	無文	B5		桃
T195	第101図	表層	乾式	4″×2″	小口（長方形）			8	本焼	T195	無地	無文	B13		白
T195-2	第101図	表層	乾式	4″×2″	小口（長方形）			9	本焼	T195	無地	無文	B18		黄
T195-3	第101図	表層	乾式	4″×2″	小口（長方形）			8	本焼	T195	無地	無文	B13		緑
T195-4	第101図	3区－Ⅳ　上層	乾式	4″×2″	小口（長方形）			8	本焼	T195	無地	無文	B13		茶
T195-5	第101図	表層	乾式	4″×2″	小口（長方形）			9	本焼	T195	無地	無文	B13		黒
T196	第102図	表層	乾式	4.3″×4.3″	正方形			7	本焼	T196	無地	無文	B10か12		白
T196-2	第102図	表層	乾式	4.3″×4.3″	正方形			7	本焼	T196	無地	無文	B12		ピンク
T196-3	第102図	表層	乾式	4.3″×4.3″	正方形			11	本焼	T196	無地	無文	B10か12		緑
T196-4	第102図	表層	乾式	4.3″×4.3″	正方形			10	本焼	T196	無地	無文	B10か12		紫
T197	未掲載	3区　上層	乾式	3″×3″	正方形			7	本焼	T197	無地	無文	B22		白
T197-2	未掲載	3区－vi　75層(ii)	乾式	3″×3″	正方形			8	本焼	T197	無地	無文	B22		薄緑
T197-3	未掲載	表層	乾式	3″×3″	正方形			7	本焼	T197	無地	無文	B22		青
T197-4	未掲載	表層	乾式	3″×3″	正方形			6	本焼	T197	無地	無文	B22		黄
T197-5	未掲載	表層	乾式	3″×3″	正方形			11	本焼	T197	無地	無文	B19		濃灰
T197-6	未掲載	表層	乾式	3″×3″	正方形			9	本焼	T197	無地	無文	B19		淡桃
T197-7	未掲載	表層	乾式	3″×3″	正方形			10	本焼	T197	無地	無文	B21		紫
T197-8	未掲載	表層	乾式	3″×3″	正方形			11	本焼	T197	無地	無文	B21		緑
T197-9	未掲載	表層	乾式	3″×3″	正方形			9	本焼	T197	無地	無文	A12		藍

5．窯道具

今回の調査で出土した窯道具は、遺物の概要でも触れたが、現場での選択的取り上げによって全遺物量の約10%に過ぎない分量である。しかし、調査時の現場での状況や石垣背後および窯前面下層の土層断面の状況などでは、投棄されていた量は陶磁器類以上であったと考えられる。特に、匣鉢・棒状および環状の粘土塊（焼成台に分類）などは、遺物の選択的取り上げによって、大半を廃棄している。また、整理作業時の時間的な制約により、窯道具に分類したすべての遺物は、実測を行っておらず、写真のみの掲載（写真図版81・114～117）である。このため、窯道具については写真図版を参照し、順次その概要を記載していきたい。なお、窯道具の名称は、同じ用途に使用するものでも、その地域によって名称が異なるため、近世・近代の京焼の解説図[17]を参考とした。

色見本（写真図版81上段・中段）

色見本は、蓋あるいは碗や鉢などの素焼きの製品に釉薬を掛け、覚書きを明記したもの（写真図版81上段）と割れた鉢の口縁部あるいは５～６cm四方の薄い素焼きの板に釉薬を掛け、一部に覚書きを明記したもの（写真図版81中段）の２種類が確認された。

前者の特徴的な８点（写真図版81上段ａ～ｈ）について、釉掛けされた色調および内外面の覚え書きを下記に表わした。このうち、ｂとｇは同じ赤色系の紅蓮灰に発色しているが、ｂでは「柿上」、ｇでは「Ｒ32」と異なった表現で書かれている。また、「キツヲ」「三通」「根」など共通する表現もみられる。この他、ｈの４色以上が釉掛けされた緑色系の釉薬には、金色で草花の絵付けが試し描きされている。

No.	釉掛け品	釉薬の色調	外面の覚え書き	内面の覚え書き
a	素焼き　蓋	N-922　半色	「□□だれ用　種　新三号　白玉合　桃ヨワ」	なし
b	素焼き　鉢	C-16　紅蓮灰	「柿上」	なし
c	施釉　蓋 C-158　□檬黄	N-756　マルーン 他15色	「九　六　一二　四　十六一十七　サ」他	なし
d	素焼き　碗	C-184　鸚鵡緑	「□□前川入　セヨワ　四十二年九月」他	なし
e	素焼き　碗	N-806　レモン色	「五通　キツラ（ヲか）中□」	「五　キツヲ中」
f	素焼き　碗	N-889　藍色	「に六　三通　セ□」	「□七三通七根」
g	素焼き　蓋	C-16　紅蓮灰　他 濃淡3色	「Ｒ32　□（Ｒか）33　□□（Ｒ34か）	「西七□□　上通　キツヲ根」
h	素焼き　蓋	N-846　鸚鵡灰　他 4色以上	「のち弐三　五月九日　楓谷誠者」	「□四通り　止メ」

後者の薄い素焼きの板に釉薬を掛けた形状のものは、写真図版に掲載している他にも破片を含めれば多量に出土している。このうち、完存するものは、団子大程度の粘土塊を台にし、薄い素焼きの板を挟み込む形状を呈している。薄い素焼きの板には、片面に黄色系の釉薬１色（N-795　鬱金色）を３条掛け、その裏面には黄色系（N-806　レモン色）および緑色系（C-184　鸚鵡緑）の２色の釉薬をそれぞれ１条掛けている。小さい板のものでは、黄色系の釉薬が１～２条、その裏面は黄色あるいは緑色のどちらか一方の釉薬が掛けられている。また、一部には「七　七□　木　四十七」「（右から）択八□（時か）半」「七□　木五十八　□□　十六」など覚え書きが墨書されている。なお、高温測定計のゼーゲル錘も数点出土しており、写真のみを掲載（写真図版81中段）している。

乳鉢・乳棒（写真図版81下段）

乳鉢は、非常に精緻な胎土で底部が丸みをもつ鉢状を呈するもの（ａ～ｃ他）と、製品（桶形の鉢鉢Ａ類ⅢＡ１ｂ）を乳鉢に転用したもの（ｄ他）がある。前者には、製陶に関係する刻印や墨書が確認され、そのうち、ａの底部には３つの刻印が押印され、その真ん中には「賀集」の名がみられる。ｂの底には「大日本アハシ三平」の刻印が押印され、内面には赤色系の釉薬がこびり付いている。また、ｃの側面には横書きで、「淡陶社」と判読できる墨書がみられる。

後者の桶形の鉢には、赤色系あるいは黄色系の釉薬がこびり付いているものが数点確認され、淡い赤色系の釉薬が残るｄの側面には「赤」の文字が書かれている。

乳棒は、完存するものもいくつか出土し、棒状を呈するもの（ｅ～ｈ）と先端部を取り付けるもの（ｉ・ｊ）が確認された。前者のうち、ｇは先端部のみが残存するものの表面は赤色系の釉薬が付着しており、ｈの持ち手側の端面には「日本アハチ三平」の刻印が押印されている。

	種別	刻印・文字	写真図版(接写)
a	乳鉢	「賀集」印	写真図版119
b	乳鉢	「大日本アハシ三平」印	写真図版119
c	乳鉢	「淡陶社」墨書	
d	乳鉢	「赤」墨書か	
h	乳棒	「日本アハチ三平」印	写真図版119

湿台（写真図版114上段）

湿台は、円筒形を呈するものと中央が狭まる円筒形状を呈するものに分けられ、後者は上下面の直径の大小に比例して高低がみられる。直径約4.5cm、高さ６～９cmを測る大きさものと直径約6.5cm、高さ約10cmを測るものが多く、その他、直径10cmを超える大型のものも確認された。また、筒状のものや上下面の片面に糸切り痕が残る塞がったものや、あるいは中央に直径約１cm前後の穿孔するものもあり、成形時の製品の大きさや器種などによって使い分けられていたものと考えられる。

乾燥台（写真図版114中・下段）

上下の円の直径が異なる鏡餅状を呈する円板（写真図版114中段）と上下の円の直径がほぼ同じヨーヨー形を呈する円板（写真図版114下段）が多量に出土した。一部に製品と同様、白色粘土と柿色粘土を練り込んだものも確認されたが、土型と同じ胎土で素焼きされたものが大半を占め、製品の成形時に使用された乾燥台と考えられる[18]。

前者は、上方の円の直径を計測すると、直径約3.5cm～9.5cmを測り、数mm単位で大きさにわずかな違いがみられる。上方の円の中心部がわずかに凹んだものと凹んでないもの、円の中心に直径約１cmの穿孔するもの、しないものに分かれ、さらに穿孔するものにも貫通するものと貫通しないものがある。また、直径約13cmを測るａの片面には鳳凰と雲が彫刻されているが、中心には直径約１cmの穿孔があり、ｂは上方に直径約11cmの高台が付き、「内皿」とヘラ書きされている。ｃは全面的に墨が付着しており、上方の円内には「天川　□　□□」と墨書がみられる。

後者も、数mm単位で大きさにわずかな違いがみられるが、直径約5.5cm～7.5cmを測る。前者が比較的薄い（厚さ約1.5cm～2.5cm）のに対し、ヨーヨーのように上下面の間に幅約１cmの溝が巡り、厚さは約３～４cmを測る。中心には直径約１cmの穿孔するものが多く、穿孔しないものには、匣鉢と考えられる破片が付着したもの（ｄ）もみられる。

ヌケ・ハマ（写真図版115上段）

窯の焼成時に焼き台として使用するヌケは円柱形あるいは四角柱形を呈し、上下両端には縁が巡って

いる。大きさは、円柱の直径が約５㎝、高さ約５㎝の小さく低いものから、円柱の直径が約９㎝、高さ約21㎝を測るものまでさまざまな大きさのものが確認された。さらに、円柱の直径が約11㎝、高さ26㎝以上の大型のものや、上面に敷板などが熔着したものもみられる。また、直径約4.5㎝、高さ約６㎝を測る湿台と大きさや形状などが類似するものもみられるが、被熱を受けており、窯の焼成時に使用されたヌケと考えられる。

ヌケの上部に載せ、製品を置くためのハマには、平面の形状によって角ハマ、丸ハマなどがみられるが、調査ではタコハマと呼ばれる十字形を呈するハマが出土している。長さ約27㎝、厚さ約５㎝を測り、上面は製品を置くために平坦で、下面の中心には楕円形の凹みがある。

匣鉢（写真図版115中・下段）

匣鉢は、窯の焼成時に製品を収納・保護し、窯内に積み上げる耐火用の容器であるが、調査では大量に出土、その後、選択的取り上げによって大半を廃棄した。方形（隅丸方形を含む）を呈するものと円形を呈するものに分かれるが、いずれも平面が20㎝を超える大きさ（円形のものは直径、方形のものは一辺を計測）である。内面に砂が付着したものや、側面の中央にふたつの穿孔とその対面する内面に棚状の凸帯が取り付けられたものが確認され、匣鉢内の製品の据え方が想定される。また、厚さ２～３㎝の片面が被熱を受けた方形あるいは円形の板状のものが出土しており、匣鉢蓋と考えられる。

ピンハマ・ハマ（写真図版116上段）

ハマのうち、三角形状を呈し、三角の先端に「目」（芽）と呼ばれる先の尖った目土が付いたものをピンハマと呼称している。土型のピンハマ型でも触れたが、ピンハマは平面の形状が正三角形あるいはその各辺の中央が内湾する形状を呈するものがあり、大きさも約１㎝～７㎝を超えるもの（「目」の二点間を計測）が確認されている。細分された大きさは、その上に置く製品の大小によるものと考えられ、施釉された製品（小判形龍文皿や桶形の鉢など）の底部にはその痕跡が明瞭に残っている。この他、ひとつの円錐形の先端が尖った形状のものなどが確認され、ハマと考えられる。

焼成台（写真図版116中・下段　写真図版117上段）

棒状および環状粘土塊（写真図版116中段）は匣鉢と同様、大量に出土し、その後、選択的取り上げによって大半を廃棄した。１本あるいは１条にまわるものから複数本をつなぎ合わせたもの、薄く平たく伸ばしたものなどさまざまな形状がみられる。また、煩雑に粘土を固めた不正形なものは、指紋や指の跡が明瞭に残っている。これらは、製品等の隙間を埋めるためのものと考えられ、焼成台とした。

薄い円形あるいは方形の粘土板および断面が台形を呈する粘土板も大量に出土したが、大半を廃棄した。前者は、胎土の粗い粘土でつくられた使い捨て用、後者は表面が被熱を受けており、使い回しされた焼成台と考えられる。

この他、比較的大形の製品を置いたと考えられるもの（写真図版117上段）も出土しており、焼成台に分類した。

用途不明（写真図版117中・下段）

用途不明としたものは、その胎土や形状などから、製品とは考えられず、窯道具に分類したものである。磁器質で表面が被熱を受けたもの（写真図版117中段）や焼成台と考えられるものもあるが、京焼の窯道具に類似する形状はなく、その用途などは不明である[19]。その中で、先が小さくなる円錐あるいは円柱形を呈し、その中央に凹みがあるもの（写真図版117下段）は、本窯（登窯）の色見孔の蓋の可能性が考えられる。

6．刻印・文字資料

(1) 陶器類

1．刻印および小印

今回の調査で出土した施釉陶器あるいは素焼きの陶器には、刻印および小印が押印されたものが多数確認された。珉平あるいは三平、淡陶社の商標である千鳥[20]など陶工、生産者などを示す印を「刻印」、○・×・T・イ・リなどの記号を「小印」と呼称し、ふたつに大別した。

刻印　刻印は、小型の皿や桶形および碗状の鉢の底部、あるいは蓋の内面のそれぞれほぼ中央に押印されている。確認された刻印は、9種を数え、25点を掲載（写真図版119）した。

珉平の甥、賀集三平に関係する印としては、「日本アハチ三平」・「大日本アハシ三平」の2種類が確認され、前者は窯道具の乳棒にのみ押印され、後者は硯（遺物№534　以下同）や窯道具の乳鉢など数点に押印されている。珉平印は、すべて通称「振り平」印[21]と呼ばれる「平」のたて棒の下の部分を横に振ったもので、数種類が確認された。楕円形あるいは長方形を呈する「振り平」印は、大型の皿（133・205）や灰皿（300）、酒杯など出土点数の少ない製品に押印されている。

淡陶社（淡陶株式会社）の商標である「千鳥」印は、小さな千鳥が刻印された「小陰刻」、山の下に千鳥が飛ぶ「山波小陰刻」、千鳥が二羽刻印された「二羽小陰刻」、菱形の中に千鳥が刻印された「菱囲小陰刻」、大きな千鳥が線刻された「大陽刻」の以上5種類が確認された。「三平」および「振り平」印が出土点数の少ない製品に押印されているのに対し、「千鳥」印は、土型によって製作された小型の皿や桶形および碗状の鉢など大量に生産された製品に押印されている。この他、淡陶社に関する刻印では、漢字で現された「淡陶會社」・「淡陶謹製」印や、アルファベットで現された「DANTO-KAISHA（「千鳥」印）AWAJI」・「TRADE MARK ⟐ DANTO KAISHA」・「TRADE MARK ⟐ MADE IN JAPAN」印などが確認された。また、書体の異なる「JAPAN」印数種、「MADE IN JAPAN」・「JAPAN E&J.B」印など明治中頃から大正年間に海外輸出向け製品に押印されたと考えられる刻印も確認された。

「三平」・「振り平」印を除くこれらの刻印については、整理作業時にその点数を数え、表にしたものが第5表　出土遺物の刻印点数である。刻印のカウントについては、皿や鉢の底部、蓋の内面の約1/3が残存するものをその対象とし、刻印の有無、その種類を記録した。但し、押印箇所の中心部が残存していないものは画一的に無印となっていることや、再三述べているように、遺物は選択的に取り上げており、すべての製品の刻印の状況を現しているわけではなく、刻印の出土傾向から遺物の年代設定や当時の生産状況などを想定するひとつの資料と捉えている。

この他、「賀集」印1点、「MADJA □EIT」・「 □A PAEIT」印各1点、不明印1点がそれぞれ確認された。

小印　たて横約1㎝四方の大きさの小印は、皿類および蓋類では確認されず、桶形および碗状の鉢の底部の高台際に押印されている。小印は・や∴、×などが「○」で囲われた記号、＝や×が「□」で囲われた記号、瓢箪や三日月、扇などがかたどられた記号、ワ・キなどカタカナを「○」で囲った記号、イ・リ・セなどのカタカナ、この他アルファベット、漢字などに分けられ、38種類（写真図版120）が確認された。

これらの刻印および小印については、その有無や種別、出土傾向など第6章　遺構・遺物の検討において、改めて記載したい。

第５表　出土遺物の刻印点数

(1) 出土遺物刻印総点数

	「千鳥」					「DANTO」	「JAPAN」	無印
	「小陰刻」	「菱囲」	「二羽」	「山波」	「大陽刻」			
総点数	4,186	77	21	20	235	5	432	13,522

(2) 石垣背後

	「千鳥」					「DANTO」	「JAPAN」	無印
	「小陰刻」	「菱囲」	「二羽」	「山波」	「大陽刻」			
表層	97	27	2	0	23	3	131	1,623
上層(1)	563	22	0	1	90	1	8	1,575
上層(2)	1,274	1	4	1	9	1	5	1,480
中層(1)	517	7	4	9	20	0	5	1,305
中層(2)	289	0	3	1	22	0	5	571
下層	89	2	2	2	6	0	3	178

(3) 石垣背後　土層断面

	「千鳥」					「DANTO」	「JAPAN」	無印
	「小陰刻」	「菱囲」	「二羽」	「山波」	「大陽刻」			
a層	40	0	0	0	0	0	0	78
b層	13	0	0	0	0	0	0	46
c層	8	0	0	0	1	0	0	31
d層	6	0	0	0	0	0	0	14
e層	106	0	2	0	0	0	1	248
f層	2	0	0	0	0	0	0	14
g層	194	0	1	0	0	0	2	281
h層	206	0	0	0	1	0	2	371
j層	29	0	0	1	0	0	0	33
k層	30	0	1	0	0	0	0	38
l層	20	0	0	1	0	0	0	36
m層	22	0	0	0	0	0	0	70
n層	29	0	0	2	0	0	0	32
o層	16	0	0	0	0	0	0	12
p層	6	0	0	0	0	0	0	27
q層	1	0	0	0	0	0	0	17

(3) コウカシ窯前面下層

	「千鳥」					「DANTO」	「JAPAN」	無印
	「小陰刻」	「菱囲」	「二羽」	「山波」	「大陽刻」			
表層	12	4	0	0	2	0	147	610
検出面	23	1	0	0	2	0	2	307
上層	42	0	0	0	1	0	5	397
中層	47	2	0	0	13	0	4	445
下層	48	1	0	0	12	0	3	503

(4) コウカシ窯前面下層　縦断土層

	「千鳥」					「DANTO」	「JAPAN」	無印
	「小陰刻」	「菱囲」	「二羽」	「山波」	「大陽刻」			
i 層	12	0	0	0	0	0	0	67
ii 層	5	0	0	0	0	0	0	187
iii 層	0	0	0	0	0	0	0	196
iv 層	1	0	0	0	0	0	0	105
v 層	2	0	0	0	0	0	0	65

(6) コウカシ窯前面下層　横断土層 (1)

	「千鳥」					「DANTO」	「JAPAN」	無印
	「小陰刻」	「菱囲」	「二羽」	「山波」	「大陽刻」			
i 層	10	1	0	0	0	0	2	61
ii 層	6	0	0	0	1	0	1	177
iii 層	0	0	0	0	0	0	0	165
iv 層	2	0	0	0	0	0	0	222
v 層	2	0	0	0	0	0	0	91

(7) コウカシ窯前面下層　横断土層 (2)

	「千鳥」					「DANTO」	「JAPAN」	無印
	「小陰刻」	「菱囲」	「二羽」	「山波」	「大陽刻」			
i 層	13	0	0	0	5	0	1	40
ii 層	27	0	0	0	1	0	0	96
iii 層	54	1	0	1	2	0	1	181
iv 層	2	0	0	0	0	0	0	72
v 層	6	0	1	0	0	0	0	92
vi 層	1	0	0	0	0	0	0	27
vii 層	6	0	0	0	0	0	0	118
viii 層	5	0	0	0	0	0	0	101
ix 層	0	0	0	0	0	0	0	59

(8) 調査区内その他一括（確認調査含む）

	「千鳥」					「DANTO」	「JAPAN」	無印
	「小陰刻」	「菱囲」	「二羽」	「山波」	「大陽刻」			
その他	303	8	1	1	24	0	104	1,058

2. 文字資料

土型の台部内外面に年（月）号や製作者名などがヘラ書きあるいは墨書された文字資料が確認されたが、これらの他にも素焼きの陶器あるいは窯道具などに文字が書かれているものが多数確認された。土型を除くこれらの文字資料は、判読不明なものを含めれば約200点を数え、社名・地名・焼成に関する覚え書き・落書き（手紙文・計算式）・人名などに分類され、そのうち26点を掲載（写真図版125・126）した。これらは、墨書されたものが大半を占めるが、釉や鉛筆で書かれた文字もわずかにみられる。焼成に関する覚え書きは、個々の文字は判読されても、全容が理解できないものがあり、また、欠損する部分が多く詳細が不明なものも多くみられた。

写真図版	種　別	文字資料
写真図版125上段	記念品名	「北阿萬消防第二部　贈功労記念」
	社　名	「　□組　淡陶株□（式か）　」
	地　名	「淡路国三□□（原郡か）　北阿万邑の内　稲田邑」
	社　名	「（右から）東京合名會社木村商店製造」
	不　明	「　□甲□　」
写真図版125下段	焼成に関する覚書	「　四通　甲止メ　」
	色　調	「ＢＬＡＣＫ」
	色　調	「ＲＥＤ」
	色　調	「白」
	焼成に関する覚書	「半造弐無加ん　米□」
	焼成に関する覚書	「焼直シ　□□（五百か）　火前天　ａｒｇ２」
	焼成に関する覚書	「ト廿　□９」
	焼成に関する覚書	「ヱニ　□□□□（弥上ワ弓か）　火前天」

写真図版	種　別	文字資料
写真図版126上段	不　明	「　□□□　二十五□　四円九十二□（歩か）　□十一年　」
	不　明	「　□□　□□　□　」
	手紙文	「　右　□　」
	手紙文	「　□□　右御□　右御□　（香か）　」
	手紙文	「　右之通　人ふ御□　水口□（歩か）正　早々　右□　」
	不　明	「　三□（才か）量　二□□（才厚か）　二□（才か）前山　□（才か）水左□□（才平か）村　□平」
写真図版126下段	不　明	「（右から）□五十六　障」
	計算式	「（たて書き　鉛筆）計算式か」
	不　明	「十五　三□　□□　」
	人　名	「中川」
	計算式	「（たて書き　鉛筆）数字有り」
	人　名	「大日本　帝國萬歳　大坂歩兵□（號か）　江本由平記」
	人　名	「　□（徳か）様　より　□（次か）郎」

(2)　タイル類

湿式タイルおよび乾式タイルの裏面を主に印・文字や記号が見られる。分類すると、乾式タイルの金型に彫られた会社名・商標マーク・国名・数字がある。湿式や乾式タイルに押印された、品位、実用新案、手書きされた窯内部焼成箇所、土質の符号、焼成箇所と種類の覚え書き、坏土見本、見本番号、年号、製作者名、記号試し書き（社名・地名・記号）、落書き（計算、絵、文章下書きなど）がある。用具としては毛筆が多く、鉛筆も若干みられる。

なお、金型成形により写されたタイル裏の社名や商標マークおよびベンガラによる手書き記号については第６章（第２節　出土遺物について　３．タイル）にて記述し、第５章（第２節　出土遺物の釉薬分析）にて分析する。ここでは手書きによる文字、スタンプによる押印文について説明する。

品位　Ｔ31など４点に「特製品　淡陶会社」の印がある。これらはＴ21・Ｔ24・Ｔ25・Ｔ31にみられるもので、いずれも湿式タイルの素焼きである。何が特製品であるのか、土の構成、釉薬彩色、寸法など考慮したが不明である。

実用新案　実用新案についてはＴ６の裏面にて「実用新案　二一六六」の刻印がみられる。これは湿式タイルの中央部分に上端径10㎜、中央および下端径５㎜の穿孔がある。申請の確認をとれなかったが、明治時代に、タイルの張り付けにおいて釘の頭がタイル上面から飛び出さない仕組みについての実用新案と考えられる。この他、ＰＡＴＥＮＴの文字が一部みえるものがあるが、ナンバーは不明である。ただし、同系統のタイルをダントー技術研究所で確認したところ、「ＰＡＴＥＮＴ　№21652」が伺える。この特許はフィルム転写技術についてのものである。

窯内部焼成箇所　ＴＷ１～ＴＷ３は「東九番窯□二ノ間など」がある。これはどの窯なのか、窯の何部屋目なのか、部屋のどの付近などかを示した記録である。裏面に墨書が存在するが、試験的なものと考えられる。

土符号　ＴＷ１～ＴＷ３・ＴＷ５～ＴＷ７は土の種類を示したもので、「池の内」や「柿荒土」など土の種類と考えられる。また五分土や三分土などある種の土の配合具合を示したものである。

焼成箇所と種類の覚え書き　ＴＷ９に記された文字は窯内部におけるタイルの種類の詰め方を示し、窯出しに至る工程を示した覚え書きである。この文字は素焼きタイル裏面に記されたもので、正式文書ではなく現場の覚え書きと考えられる。

坏土見本　ＴＷ14の素焼きタイル裏面にベンガラによる「土見本」の文字がある。具体的な土の成分を示したものではなく、技術者同士の見本と考えられる。なお、土の成分については第５章の胎土分析の結果、シリカ分の多い白色系の胎土である。

見本番号　ＴＷ12などはタイル製作時の試料番号である。これは湿式タイルであり、成形技法、釉薬あるいは土の成分の試験的なものと考えられる。

年号　ＴＷ13の裏面中央に「四五.三」の墨書がある。西暦や和暦の表示はないが乾式タイルの古式タイプであることから、明治45年３月を意味しているものと考えられる。

製作者名　年号が書かれているＴＷ13タイル裏型隅にベンガラによる「□瀬熊市」の文字がみえる。このタイルが見本と記されていることから、製作者の人名を示しているものと考えられる。なお、□瀬の□部分は白瀬性は福良付近に、平瀬性は賀集付近に多い性である。

記号試し書き　ＴＷ18などではタイル裏面に記されているベンガラによる漢字などの文字が記されているが、試し書きではないかと考えられる。

落書き　TW20～TW27は落書きと考えられる文字、数字による計算、絵がある。明治時代や大正時代以降の遊びや流行言葉の一端を知りえる資料である。

番号	成形	土構成	裏型	内容種別	文字内容
TW01	湿式	２種	—	焼成･胎土	東九番窯　二ノ間三通荒土一杯下　池荒土　金濂□新作　二（墨書）　二（陰刻）
TW02	湿式	２種	—	焼成･胎土	東九番窯　壱ノ間三通□鉢ノ□　池荒土□　金濂□　新□　八ヵ（墨書）
TW03	湿式	２種	—	焼成･胎土	東九番　二ノ間茶□　三通　池之内荒　金□濂　新作□（墨書）
TW04	湿式	２種	—	不明	金□　新□（墨書）
TW05	湿式	２種	—	焼成･胎土	〔裏〕池之内　七　　四番カス弐カ　　柿荒土□ 〔表〕見本壱　　二□　　弐ノ間
TW06	湿式	２種	—	胎土	内ヵ荒土｀　□（墨書）
TW07	湿式	２種	—	胎土	池之内土　□カス（墨書）　二（陰刻）
TW08	湿式	１種	—	胎土	○□□　○ワレ土五分　○ヒア土（墨書）
TW09	乾式	—	Ｃ１	焼成	奥三通りより北カラ六本ト大タ□　其ヨリ九通まで小柄入江共　九通ヨリ十四通り迄で　大タイル　　□□　　十八番窯出し（墨書）
TW10	湿式	１種	—	焼成?	（ほほえむ人の顔?絵）　四天（墨書）
TW11	乾式	—	Ｅ４	焼成?	□本通（墨書）
TW12	湿式	２種	—	見本番号?	壱號　　□□（墨書）
TW13	乾式	—	Ａ１	見本･人名	四五、三　見本（墨書）　□瀬熊市（ﾍﾞﾝｶﾞﾗ）
TW14	乾式	—	Ｅ３	胎土見本	土見本（ﾍﾞﾝｶﾞﾗ）
TW15	湿式	２種	—	職人指導等?	甲　（割付け図）（墨書?）
TW16	湿式	２種	—	不明･人名	火象　得五郎（ﾍﾞﾝｶﾞﾗ）
TW17	乾式	—	Ａ５	図解?	重ね合わせの図解?（ﾍﾞﾝｶﾞﾗ）
TW18	乾式	—	Ｃ４	試し書き?	〔表〕珉平焼　淡陶株式会社　兵庫県三原郡北阿万村（ﾍﾞﾝｶﾞﾗ） 〔裏〕淡陶株式会社（ﾍﾞﾝｶﾞﾗ）
TW19	乾式	—	Ａ５	地名	三原郡阿万村（墨書）
TW20	乾式	—	Ｄ６	絵(落書き)	人物絵（兵隊）（ﾍﾞﾝｶﾞﾗ）
TW21	湿式	２種	—	人名(落書き)	林長市　　君　　萬　　蔵（鉛筆）
TW22	乾式	—	Ｃ１	人名(落書き)	江本末一（墨書）
TW23	乾式	—	Ａ７	人名(落書き)	藪田枚郎（墨書）
TW24	乾式	—	Ａ６	人名(落書き)	□吉（墨書）
TW25	乾式	—	Ａ３	人名(落書き)	□　□元　平君（墨書）
TW26	乾式	—	Ｅ２	文字遊び	ｷｻﾐｻﾆｻﾎｻﾚｻﾀｻｶﾞｻｷｻﾜｻﾅｻｲｻｶｻ・・・・（ﾍﾞﾝｶﾞﾗ）
TW27	乾式	—	Ｅ２	文字遊び	かずゑさん□□　数字の羅列（墨書）
TW28	乾式	—	Ｃ１	金銭(落書き)	二十九円・・・・等（墨書）
TW29	乾式	—	Ｃ１	金銭(落書き)	三十□・・・・（墨書）

7．その他の遺物

珉平焼の陶器類は、大半の遺物が碗類・鉢類・皿類・壺類・蓋類に大別した分類枠に収まるが、それらの範疇には入らない遺物も出土している。その一部は、ミニチュア陶器・器台・燭台・蓮華・さじ・筆架・硯・不明遺物として実測し、図化している（520～540）が、その他にも、水滴・花留・容器・置物・火鉢などが確認されている。これらは、窯道具と同様、実測を行っておらず、写真のみの掲載（写真図版70～72）である。また、珉平焼以外の遺物には、磁器製品・ガラス瓶・煉瓦・瓦・他産地の製品などがあり、これらについても写真のみを掲載（写真図版76・113・118）した。ここでは、珉平焼のその他の遺物・磁器製品・ガラス瓶・煉瓦・瓦・他産地の製品について、写真図版を参照し、順次その概要を記載していきたい。

(1) 珉平焼のその他の遺物

水滴は、外面に三彩釉が施された硯の蓋を兼ねた形態のもの（536）の他に、犬・蛙・亀・鳥・茄子など動植物をかたどったものや、屋形舟・扇などをかたどったもの、上面に草花の文様が彫刻された箱形のものなどが出土している（写真図版70下段）。

背面に直径約1㎝の穿孔が5～10数個貫通した蛙・亀・水鳥・鯉・蟹・茸など動植物をかたどったものや、円柱形を呈するものが出土しており、これらは、穿孔に生け花を挿し込む花留と考えられる。底部に「JAPAN」印が押印されたものが確認されており、海外向けの製品であったと思われる（写真図版71上段）。

上部に直径約3㎜の穿孔を10数個、下部には直径約1㎝の穿孔をひとつ開けた中空の雀をかたどったものや、茄子・瓢箪・水鳥などをかたどり、穿孔をひとつ開けた容器類が出土した。また、水鳥の背面に碗を載せたものも出土し、これらは、調味料入れや楊枝入れ、エッグスタンドなど食卓に並ぶ容器と考えられる（写真図版71中段）。容器類とは異なり、穿孔のない鶏・小鳥・犬・胡瓜などをかたどったものが出土しており、これらは置物と考えられる。鶏や小鳥、調味料入れの雀などは、置物類に分類した土型（K73～K77）に酷似する形状であり、それらの型から製作されたものと考えられる（写真図版71下段）。

この他、火鉢と考えられる比較的大形の破片やお多福手焙りの破片（写真図版72上段）、形状や用途が不明な遺物も出土している（写真図版72中・下段）。

(2) 磁器製品

表層からのみ出土している磁器製品には、菱囲のDK印や「佐野式」「実用新案登録　第315218号　第319410号　第390889号　第390890号　□□□□会社製」などの文字がみられ、碍子あるいは点火栓用碍管、耐酸バルブなど戦時中、淡陶株式会社が軍需工場として機能していた時に生産された戦時遺物と考えられる。また、耐酸バルブが石膏型から製造されている[22]ことから、他の磁器製品も石膏型から製造されたと仮定すると、出土している比較的大型のものや形状が不明な石膏型は、戦時中、これら磁器製品を製造するための型であった可能性が高いと考えられる（写真図版76中段）。

(3) ガラス瓶

上記の磁器製品と同様、表層を中心にガラス瓶が出土し、17点を掲載（写真図版76下段）した。そのうち、6点は無記名であったが、11点には「DAINIPPON　BREWERY　CO, LTD」「別府鑛泉株式會社」「（右から）タカラタンサン．タカラサイダー」「消毒　全乳　長榮舎」「全乳　蔭山牧場」「全乳

(無記名)」「ヘルツ液　熊木湖月園」「"ＬＡＩＴ"　TOILET WATER ＳＡＭＰＥＩ．ＨＩＲＡＯ」「高橋製」「朝陽堂巛下製」「ニチヲ　麻液　喜香堂」など製造会社あるいは製品名などが記されている。

(4)　煉瓦

今回の調査で出土した煉瓦は、作業場跡の平坦地の検出時、焼土層に隣接して検出された一群と、コウカシ窯の構築材として使用された一連のものである。その大半は、コウカシ窯の移築・復元時の構築材として再利用するため、遺物として取り上げは行っていないが、刻印が確認された９点を持ち帰り、掲載（写真図版113上段）した。

刻印は、完存するものはなかったが、「SHINAGA」「MITSUISHI」「 SHI BRICK」「大日本　大坂　横山」の４種類が確認された。「SHINAGA」は品川耐火煉瓦、「MITSUISHI」「 SHI BRICK」は三石耐火煉瓦であり、「大日本　大坂　横山」は大阪難波で耐火煉瓦工場を起こした横山善三に関係する煉瓦[23]と考えられる。煉瓦は刻印の細かな違いによって、その製造年代が限定されるが、出土した煉瓦はいずれも破片であるため、構築材として使用されたコウカシ窯の築造年代を特定することは不可能であった。

(5)　瓦

淡路島南端の南淡町あるいは西淡町は、淡路瓦の生産地として現在も瓦製造業者が数多く点在しており、瓦の一大産地である。調査では、表層および作業場跡の平坦地から多量の瓦が出土したが、ここでは、刻印が押印されているものを中心に掲載（写真図版118下段）した。

刻印は、「阿万新」「阿万浅」「阿万忠」など、南淡町の阿万の地名に関するものが複数みられ、地元で生産された瓦と考えられる。表層あるいは窯前面下層から出土しているため、周辺から投棄されたものと考えられるが、作業場跡の平坦地あるいはコウカシ窯を覆う建物に葺かれた瓦の可能性も考えられる。しかし、調査では、建物跡の痕跡は確認されておらず、詳細は不明である。

(6)　他産地の製品

珉平焼以外の他産地の遺物は、備前焼・大谷焼・産地不明の６点を図化している（541～546）が、これらの他にも、多量の遺物が出土しており、一部を写真のみ掲載（写真図版82・118）した。

産地が判明しているものは、明石・舞子産の施釉陶器の蓋、京・信楽焼の灯明皿・燭台、丹波焼の擂鉢、明石産擂鉢など（写真図版82上段）であり、いずれも近世後半～近代の時期と考えられる。産地不明の遺物は、壺や擂鉢、羽釜などが出土している。このうち、壺の底部にヘラ書きされた「藪田性」は、南淡町に存在する名字であり、陶器製作に関わった道具であったと考えられる。

注(1)　石垣背後は、現場では第10図のように、非常に細かく分層し、記録を行ったが、畦中の遺物については、上方から任意に16層（ａ～ｑ層）に分けて取り上げを行った。また、窯前面下層についても、第８・９図のように非常に細かく分層しているが、石垣背後同様、畦中の遺物の取り上げは、縦断土層では５層（ｉ～ｖ層）、横断土層(1)では６層（ｉ～iv層）、横断土層(2)では９層（ｉ～ix層）に任意に分けて行った。

注(2)　石垣背後のトレンチ北側では、上層を４層（検出面を上層０，以下、上層ｉ～iii層）、中層を２層（中層ｉ・ii層）、さらに下層および最下層とあわせて８層に任意に分層し、遺物を取り上げた。また、トレンチ南側でも同様に、上層を２層（上層１・２）、中層を３層（中層１～３層）のあわせて５層に分層した（右頁）。

注(3)　窯前面下層の６区画では、下記のようにそれぞれ３層～７層に分けて遺物を取り上げた（右頁）。

注(4)　現場では、調査の進行上、様々な遺物が混在しているものをそのまま取り上げざるを得なかったが、水洗い・ネーミング後に遺物分類表を作成し、ネーミング番号毎に各種データを記入した。遺物分類表には、陶磁器類・土型類・タイル類・窯道具類の各項目に、形状や計測値、文様の種類、刻印あるいは（紀年）銘の有無などを書き込むことによって、遺物の出土状況を把握した。

注(2)

現場での取り上げ層位		整理後の層位
表層	表層	表層
1区石垣　上層0	2区石垣　上層1	石垣背後上層(1)
1区石垣　上層i		
1区石垣　上層ii	2区石垣　上層2	石垣背後上層(2)
1区石垣　上層iii		
1区石垣　中層i	2区石垣　中層1	石垣背後中層(1)
1区石垣　中層ii	2区石垣　中層2	石垣背後中層(2)
1区石垣　下層	2区石垣　中層3	石垣背後下層

注(3)

現場での取り上げ層位						整理後の層位
3区－Ⅰ 表層	3区－Ⅱ 表層	3区－Ⅲ 表層	3区－Ⅳ 表層	3区－Ⅴ 表層	3区－Ⅵ 表層	窯前面下層 表層
1．暗褐色土 (検出面)	1．黄褐色土 (検出面)	1．黒色土 (検出面)	0．黄褐色土 (検出面)	1．黒色土	R．赤色土 (焼土)	窯前面下層 検出面
2．黒色土	2．黒褐色土1	2．暗黄褐色土 黒色土2	1．黒褐色土1	2．暗褐色土	1．黒褐色土	窯前面下層 上層
	3．黒色土1	3．赤褐色土 黒色土3				
3．赤褐色土	4．黒色土2	4．黄褐色土 黒色土4	2．黒褐色土2	3．黒褐色土		窯前面下層 中層
	5．黒褐色土2	5．赤褐色土	3．黒褐色土3			
4．暗赤褐色土 (最下層)	6．黄褐色土2	6．黄褐色土 黒色土(下層)	4．黒褐色土4	6．黄褐色土 黒色土(下層)	2．黒褐色土 (最下層)	窯前面下層 下層
	7．暗褐色土 (最下層)	7．黄褐色土 (最下層)	4．黒褐色土5 (最下層)	7．暗黄褐色土 (最下層)		

注(5)　白色粘土は、第3章で詳述した『珉平傳』では、「(前略) 由良浦ニ至リ帰途千草村ヨリ池之内村ヲ過キ白土ヲ発見シ齎シ帰テ之ヲ焼試ルニ頗ル陶器ニ適スルヲ以テ (後略)」と記載されており、現在の洲本市木戸で採掘された粘土である。珉平焼の創業時から使用され、田中家に残る明治30年代の淡陶株式会社と洲本市の淡路製陶株式会社との間で交わされた手紙の文中にも白色粘土に関することが書かれており、この時代にも採掘・使用されていたと考えられる。なお、手紙には、降雨によって粘土採掘場から下方の田畑に不純な水が流れ込み、農作物に被害をもたらしたため、訴えられた両社の重役がその補償についてやりとりしたことが書かれている。柿色粘土は、『珉平傳』には記載されていないが、南淡町福良で採掘されたといわれている。

注(6)　三田焼（三田市）を技術指導した欽古堂亀祐が文政13（1830）年に著した『陶器指南』や京都府が明治5（1872）年に記録したと考えられている『京都陶磁器説・京都陶磁器説図』など、賀集珉平が技術指導を受けた尾形周平に関わる京焼系の文献を参考とした。

注(7)　土型から器高の低い皿類を成形する時は、型から粘土板を引き剥がすことは比較的容易であるが、器高の高い鉢を成形し、型から粘土板を引き剥がす時は、密着面積が広く、深いため、困難である。このため、鉢類の型の中心部には直径約２㎝程度の穿穴を開け、空気穴とするようである。実測・図化していない鉢類の型の中には、そのようなものも出土している。

注(8)　製品型の文様彫刻で線刻としているものは、実際は細い線が浮き上がったもので、製品では細い線刻となる。後述する元型で線刻としているものは、製品型とは反転するため、製品同様、細い線刻で文様が表現されている。

注(9)　注(8)に同じ。

注(10)　丸形の高台型は直径４㎝大および６～７㎝大で数㎜単位に違いがみられ、四角形の高台型についても一辺４㎝大、5.5～6.5㎝大、７㎝大で違いがみられた。

注(11)　ピンハマ型は、一辺２～６㎝大のさまざまな大きさのものがあり、さらにそれらにも数㎜単位に違いがみられる。これは、製品型やそれに付随する高台型などのいわゆる売り物を製作するための土型とは異なり、窯詰め時に製品を支えるなかば使い捨てのピンハマを製作するための土型であるため、大きさ等に厳格な規格等はなかったことによるものと考えられる。

注(12)　淡陶創業90周年に際し、昭和51年に淡陶株式会社から発行された記念誌『日本のタイル文化』に戦時統制時代、タイル工場が軍需協力で製造していた耐酸バルブの石膏型の写真が掲載されており、その形状から出土した磁器製品と酷似しており、その型と考えられる。『日本のタイル文化』　淡陶株式会社　昭和51年　120P参照。

注(13)　タイルの名称は大正11年、平和記念東京博覧会で、敷瓦や化粧瓦等と呼ばれていたものを「タイル」と呼称統一された。

注(14)　『日本のタイル文化』　淡陶株式会社　昭和51年　53P参照。

注(15)　『日本のタイル文化』　淡陶株式会社　昭和51年　62P参照。

注(16)　『日本のタイル工業史』　株式会社INAX　平成３年　192P～198Pにて裏型文様の違いと表文様の変化により製作時期を与えている。

注(17)　注(6)と同じ。

注(18)　京焼の陶工、西村徳二郎氏に実見していただき、ひとつの可能性として製品の乾燥台とのご教示をいただいた。しかし、現在の京焼ではみない形状であることや、窯道具はその窯場（生産地）で製品にあわせて職人が道具などを改良・製作していくため、調査で出土している製品を詳細に観察することによって、いつ（製品の成形（整形）時あるいは窯の焼成時）、どのように使用したかを理解することができるのではないかともいわれ、今後の課題である。

注(19)　注(18)に同じ。改めて、製品との照合が必要であり、さらに、淡陶社（淡陶株式会社）の記録などの再調査を行うことも今後の課題である。

注(20)　『陶器商報』（明治三十一年二月一日　第五拾六號附録ノ二）によれば、「商標登録ニ付廣告　弊社製造の淡路珉平焼の義今般農商務省の登録を經て千鳥を以て商標と相定め候（後略）」との記載がある。

注(21)　淡陶社設立（明治16年頃）以降、賀集珉平が押印していた「珉平」印と区別するため、新たにつくられた印といわれている。

注(22)　注(12)と同じ。

注(23)　藤原学氏よりご教示いただいた。

第５章　自然科学分析の成果

第１節　出土遺物の胎土分析

ダントー㈱技術研究所　池田　健

１．珉平焼窯跡出土遺物の化学分析およびＸ線回析

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所より依頼を受けた、珉平焼窯跡から出土した淡陶社タイルおよび珉平焼（陶器類）の化学分析、X線回折測定をおこなった[1]。

(1)試験方法

1-1．化学分析

リガク製3270蛍光X線分析装置（写真５）を用いて分析した。

試料はダイアモンドカッターで切断してサンプリングし、蒸留水にて洗浄した。次にメノウ乳鉢にて、おおよそ100メシュ以下に粗粉砕し、その後タングステンカーバイトのサンプルホルダーに入れてHEIKO製作所製TI-100振動ミル（写真６）にて、５分間粉砕した。試料は乾燥機にて105℃で３時間以上乾燥し、その後デシケータで冷却した。この試料0.4gと四ホウ酸リチウム4.0000ｇ（蛍光X線分析用無水四ホウ酸リチウム－キシダ化学㈱）を白金皿に入れてガラス棒でよくかき混ぜた後、リガク製OMB-32Aビードサンプラー（写真７）にセットして、約1000℃で６分間溶融しガラスビードを作成した。このガラスビードを用いて、蛍光X線分析装置により化学分析を行った。

定量した元素は、珪素（Si）、アルミニウム（Al）、鉄(Fe)、カルシウム（Ca）、マグネシウム（Mg）、カリウム（K）、ナトリウム(Na)、チタン（Ti）の８成分である。

粘土は結晶水や有機物を含有しているので、８成分以外にIgloss（灼熱減量）も測定した。測定方法は以下のとおりである。白金坩堝を強熱バーナーで約５分間加熱し、デシケータに入れて放冷する。坩堝重量を測定した後、坩堝に試料約１ｇ入れて再度秤量した。ヤマト科学製マッフル炉FM-35（写真８）にて1000℃で１時間加熱し、その後デシケータ中で放冷して重量を測定した。加熱前後の重量差よりIglossを求めた。

1-2．X線回折

メノウの乳鉢にて微粉砕しリガク製Multiflex（写真９）にて測定した。

(2)試験結果

珉平焼窯跡出土遺物の化学分析およびX線回折測定結果については、淡陶社タイルは第６表、珉平焼（陶器類）は第７表、粘土は第８表をそれぞれ参照。

(3)考察

1．淡陶社タイル

上下２層になっている湿式タイルの上層は白色であり、下層は少し赤黄色に着色している。これは酸化鉄（Fe_2O_3）による着色のためである。上層の鉄分含有量は0.5～0.8%、下層は0.8～1.3%であり、その差は0.2～0.5%であった。つまり上層が白色となっているのは、鉄分の少ない土を使用しているためである。

第６表　珉平焼窯跡出土遺物の化学分析およびX線回折測定結果　淡陶社タイル

No.	型式		出土地点	SiO2	Al2O3	Fe2O3	CaO	MgO	K2O	Na2O	TiO2	Total	X-ray analysis
1	上	湿式	１区石垣背後上層ⅰ	71.20	22.93	0.58	0.18	0.13	2.90	0.87	0.25	99.03	α-Quartz,Mullite
	下			70.92	21.99	0.84	0.22	0.27	3.52	1.02	0.36	99.12	α-Quartz,Mullite
2	上	湿式	１区石垣背後上層ⅲ	69.44	22.89	0.84	0.26	0.22	3.70	1.44	0.32	99.11	α-Quartz,Mullite
	下			68.89	23.84	0.92	0.29	0.24	3.45	1.52	0.37	99.51	α-Quartz,Mullite
3	上	湿式	１区石垣背後上層ⅰ	71.77	22.14	0.58	0.15	0.14	2.66	0.80	0.25	98.50	α-Quartz,Mullite
	下			71.10	21.86	0.86	0.21	0.26	3.26	1.06	0.35	98.95	α-Quartz,Mullite
4	上	湿式	１区石垣背後上層ⅲ	71.18	22.66	0.65	0.16	0.15	2.89	1.09	0.27	99.05	α-Quartz,Mullite
	下			70.22	22.37	1.01	0.24	0.28	3.52	1.29	0.43	99.35	α-Quartz,Mullite
5	上	湿式	１区石垣背後上層ⅱ	72.24	21.90	0.62	0.16	0.12	2.85	0.93	0.27	99.09	α-Quartz,Mullite
	下			69.90	22.70	0.95	0.24	0.23	3.48	1.30	0.38	99.17	α-Quartz,Mullite
6	湿式		１区石垣背後e層	71.89	20.56	0.84	0.25	0.20	3.90	1.42	0.33	99.38	α-Quartz,Mullite
7	上	湿式	１区石垣背後上層ⅲ	72.39	22.76	0.55	0.15	0.13	2.58	0.74	0.23	99.53	α-Quartz,Mullite
	下			71.32	22.26	0.80	0.20	0.25	3.44	1.00	0.33	99.60	α-Quartz,Mullite
8	上	湿式	１区石垣背後上層ⅰ	71.48	23.12	0.62	0.20	0.13	3.00	0.95	0.25	99.74	α-Quartz,Mullite
	下			71.74	21.52	1.07	0.28	0.26	3.43	1.36	0.39	100.05	α-Quartz,Mullite
9	乾式		表層	70.41	23.06	0.74	0.22	0.16	3.00	1.13	0.30	99.03	α-Quartz,Mullite
10	乾式		表層	66.60	27.12	0.70	0.25	0.16	2.94	1.21	0.30	99.28	α-Quartz,Mullite
11	乾式		表層	67.94	26.38	0.72	0.23	0.19	2.74	0.94	0.31	99.44	α-Quartz,Mullite
12	乾式		表層	67.87	27.07	0.69	0.23	0.16	2.55	0.97	0.31	99.85	α-Quartz,Mullite
13	乾式		表層	67.42	26.61	0.73	0.23	0.19	2.66	1.40	0.31	99.55	α-Quartz,Mullite
14	乾式		２区石垣背後中層２	67.56	26.81	0.70	0.24	0.18	2.58	1.04	0.31	99.41	α-Quartz,Mullite
15	乾式		表層	67.20	27.36	0.68	0.23	0.16	2.54	0.96	0.28	99.40	α-Quartz,Mullite
16	乾式		２区石垣背後中層２	72.70	23.70	0.53	0.13	0.11	0.95	0.24	0.43	98.79	α-Quartz, α-Cristobalite,Mullite
17	乾式		表層	71.90	24.29	0.55	0.15	0.11	1.09	0.55	0.30	98.94	α-Quartz, α-Cristobalite,Mullite
18	乾式		表層	73.24	23.37	0.41	0.12	0.07	1.42	0.25	0.28	99.16	α-Quartz, α-Cristobalite,Mullite
19	乾式		表層	73.33	23.02	0.39	0.12	0.06	1.47	0.23	0.28	98.91	α-Quartz, α-Cristobalite,Mullite
20	乾式		表層	72.50	23.65	0.28	0.10	0.07	2.11	0.30	0.18	99.19	α-Quartz, α-Cristobalite,Mullite
21	乾式		表層	75.11	20.95	0.38	0.11	0.06	0.59	1.08	0.29	98.57	α-Quartz, α-Cristobalite,Mullite
22	乾式		２区石垣背後中層２	74.88	21.21	0.40	0.11	0.06	0.64	1.09	0.28	98.68	α-Quartz, α-Cristobalite,Mullite
23	乾式		２区石垣背後中層３	73.74	22.31	0.40	0.13	0.07	0.71	1.02	0.28	98.67	α-Quartz, α-Cristobalite,Mullite
24	乾式		表層	72.56	24.60	0.54	0.18	0.14	1.03	0.56	0.30	99.90	α-Quartz, α-Cristobalite,Mullite
25	乾式		表層	75.75	20.07	0.34	0.15	0.07	1.55	0.36	0.26	98.55	α-Quartz,Mullite
26	湿式		３区よこ畦中ⅰ	72.90	22.00	0.60	0.18	0.16	2.56	0.78	0.24	99.42	α-Quartz,Mullite
27	湿式		１区石垣背後上層ⅲ	73.86	17.90	0.84	0.20	0.20	4.48	1.30	0.30	99.06	α-Quartz,Mullite
28	上	湿式	表層	71.79	22.07	0.66	0.18	0.18	2.70	1.02	0.26	98.85	α-Quartz,Mullite
	下			69.71	22.54	1.03	0.28	0.27	3.64	1.53	0.41	99.41	α-Quartz,Mullite
29	上	湿式	表層	70.27	23.08	0.68	0.20	0.16	3.24	1.17	0.29	99.08	α-Quartz,Mullite
	下			70.30	22.49	1.11	0.28	0.26	3.40	1.46	0.42	99.73	α-Quartz,Mullite
30	上	湿式	表層	71.10	23.16	0.64	0.19	0.14	2.96	1.02	0.27	99.48	α-Quartz,Mullite
	下			71.17	21.69	1.33	0.28	0.32	3.31	1.33	0.44	99.87	α-Quartz,Mullite
31	上	湿式	１区石垣背後上層ⅲ	70.84	23.18	0.72	0.21	0.16	3.20	1.02	0.30	99.63	α-Quartz,Mullite
	下			72.79	19.85	0.88	0.19	0.39	4.10	1.05	0.44	99.69	α-Quartz,Mullite
32	上	湿式	表層	69.68	23.42	0.77	0.24	0.21	3.28	1.13	0.30	99.03	α-Quartz,Mullite
	下			70.48	21.80	0.96	0.25	0.36	3.74	1.22	0.44	99.25	α-Quartz,Mullite
33	上	湿式	表層	70.34	22.92	0.69	0.21	0.18	3.04	0.99	0.29	98.65	α-Quartz,Mullite
	下			71.14	21.17	0.95	0.19	0.41	3.87	0.99	0.45	99.17	α-Quartz,Mullite
34	上	湿式	１区石垣背後上層０	71.29	23.18	0.63	0.19	0.16	2.91	1.03	0.27	99.65	α-Quartz,Mullite
	下			69.42	23.44	1.04	0.22	0.30	3.33	1.10	0.44	99.29	α-Quartz,Mullite
35	上	湿式	表層	69.98	23.00	0.87	0.24	0.25	3.58	1.24	0.36	99.51	α-Quartz,Mullite
	下			70.62	21.75	0.96	0.22	0.36	3.90	1.11	0.46	99.38	α-Quartz,Mullite
36	乾式		表層	70.99	25.95	0.39	0.14	0.08	1.65	0.23	0.25	99.68	α-Quartz, α-Cristobalite,Mullite
37	形象		表層	69.37	22.20	1.08	0.26	0.29	3.54	1.22	0.45	98.41	α-Quartz,Mullite,Feldspar
38	形象		３区－Ⅴ　最上層	74.32	21.90	0.39	0.18	0.08	1.51	0.31	0.25	98.94	α-Quartz, α-Cristobalite,Mullite
39	乾式		表層	74.58	21.47	0.40	0.14	0.04	0.69	1.07	0.21	98.61	α-Quartz, α-Cristobalite,Mullite

第７表　珉平焼窯跡出土遺物の化学分析およびX線回折測定結果　珉平焼（陶器類）

No.	色調･胎土	出土地点	SiO2	Al2O3	Fe2O3	CaO	MgO	K2O	Na2O	TiO2	Total	X-ray analysis
1	黄色	表層	74.71	21.71	0.40	0.13	0.07	1.44	0.36	0.32	99.15	α-Quartz, α-Cristobalite,Mullite
2	緑色		69.69	22.98	0.84	0.26	0.20	3.96	1.31	0.35	99.58	α-Quartz,Mullite,Feldspar
3	三彩		71.61	21.69	0.93	0.36	0.19	3.31	1.56	0.35	99.99	α-Quartz,Mullite
4	白色		73.23	22.93	0.51	0.19	0.10	1.05	0.61	0.27	98.88	α-Quartz, α-Cristobalite,Mullite
5	ピンク色		74.75	22.34	0.32	0.12	0.04	1.29	0.40	0.21	99.48	α-Quartz, α-Cristobalite,Mullite
6	青色		73.98	22.25	0.38	0.14	0.05	1.57	0.34	0.24	98.96	α-Quartz, α-Cristobalite,Mullite
7	紫色		74.84	21.86	0.38	0.13	0.06	1.63	0.35	0.33	99.59	α-Quartz, α-Cristobalite,Mullite
8	黄色	1区石垣背後上層ii	66.33	25.63	1.06	0.35	0.22	3.29	1.74	0.41	99.02	α-Quartz,Mullite
9	緑色		67.51	25.15	1.02	0.27	0.25	3.31	1.45	0.38	99.34	α-Quartz,Mullite
10	三彩		68.70	23.99	0.90	0.26	0.23	3.71	1.32	0.35	99.46	α-Quartz,Mullite
11	レモン色		71.45	20.79	0.92	0.25	0.19	4.08	1.43	0.28	99.38	α-Quartz,Mullite
12	黄色	1区石垣背後中層i	66.29	25.14	1.05	0.38	0.23	3.38	2.22	0.40	99.09	α-Quartz,Mullite
13	緑色		68.69	23.55	0.89	0.27	0.21	3.66	1.52	0.35	99.13	α-Quartz,Mullite
14	三彩		69.04	23.45	0.86	0.26	0.20	3.72	1.48	0.34	99.35	α-Quartz,Mullite
15	レモン色	1区石垣背後中層ii	68.56	24.02	0.80	0.24	0.17	4.04	1.15	0.28	99.27	α-Quartz,Mullite
16	黄色	1区石垣背後下層i	66.31	26.57	1.01	0.31	0.22	3.21	1.63	0.40	99.67	α-Quartz,Mullite
17	緑色		66.14	26.78	1.03	0.33	0.24	3.16	1.78	0.41	99.87	α-Quartz,Mullite
18	三彩		66.84	25.41	1.01	0.33	0.23	3.28	1.68	0.39	99.17	α-Quartz,Mullite
19	黄色	3区たて畦中ii	66.24	26.09	0.96	0.33	0.27	3.23	1.69	0.38	99.17	α-Quartz,Mullite
20	緑色		65.86	26.61	0.97	0.29	0.23	3.17	1.60	0.38	99.11	α-Quartz,Mullite
21	三彩		66.51	26.57	1.01	0.30	0.23	3.33	1.60	0.41	99.95	α-Quartz,Mullite
22	レモン色		66.61	26.23	1.12	0.35	0.26	3.29	1.64	0.41	99.91	α-Quartz,Mullite
23	黄色	3区たて畦中iv	66.45	26.57	1.04	0.32	0.25	3.25	1.62	0.41	99.90	α-Quartz,Mullite
24	緑色		66.45	26.42	1.03	0.32	0.24	3.27	1.58	0.41	99.72	α-Quartz,Mullite
25	三彩		66.49	25.38	0.98	0.33	0.26	3.31	1.59	0.37	98.71	α-Quartz,Mullite
26	レモン色		66.08	27.04	0.99	0.28	0.24	3.29	1.37	0.39	99.68	α-Quartz,Mullite
27	黄色	3区たて畦中v	67.01	25.13	1.09	0.31	0.26	3.28	1.52	0.42	99.01	α-Quartz,Mullite
28	緑色		66.73	26.17	1.01	0.34	0.24	3.23	1.65	0.37	99.73	α-Quartz,Mullite
29	三彩		65.72	27.07	0.94	0.32	0.24	3.09	1.58	0.40	99.36	α-Quartz,Mullite
30	レモン色		66.10	26.61	0.95	0.34	0.24	3.05	1.70	0.37	99.36	α-Quartz,Mullite
31	素焼き(白)	3区たて畦中iii	66.01	27.36	0.98	0.26	0.24	3.21	1.42	0.38	99.86	α-Quartz,Mullite
32	素焼き(白)	1区石垣背後上層iii	69.26	22.96	0.83	0.25	0.21	3.75	1.28	0.30	98.83	α-Quartz,Mullite
33	素焼き(白)	3区よこ畦中ii	66.92	25.44	0.95	0.32	0.22	3.16	1.77	0.36	99.14	α-Quartz,Mullite
34	白土	表層	75.37	20.54	0.44	0.22	0.07	1.60	0.43	0.27	98.94	α-Quartz, α-Cristobalite,Mullite
35			66.19	26.74	1.07	0.34	0.26	3.00	1.52	0.42	99.53	α-Quartz,Mullite
36		1区石垣背後上層ii	68.85	24.47	0.88	0.24	0.23	3.63	1.36	0.33	99.98	α-Quartz,Mullite
37			67.68	24.70	1.03	0.28	0.22	3.33	1.51	0.38	99.12	α-Quartz,Mullite
38		1区石垣背後中層i	67.30	25.20	1.00	0.30	0.24	3.23	1.56	0.40	99.22	α-Quartz,Mullite
39			69.71	22.48	0.88	0.26	0.19	3.79	1.44	0.31	99.05	α-Quartz,Mullite
40		1区石垣背後下層	66.43	25.71	1.05	0.38	0.26	3.15	1.85	0.40	99.22	α-Quartz,Mullite
41			66.77	26.02	1.06	0.34	0.27	3.13	1.74	0.39	99.73	α-Quartz,Mullite
42		3区たて畦中ii	66.17	26.32	0.94	0.30	0.23	3.10	1.66	0.38	99.10	α-Quartz,Mullite
43			65.80	26.89	1.01	0.32	0.24	3.10	1.67	0.39	99.43	α-Quartz,Mullite
44		3区たて畦中iv	65.58	26.45	1.08	0.35	0.26	3.19	1.71	0.41	99.04	α-Quartz,Mullite
45			66.14	26.66	1.06	0.33	0.26	3.13	1.70	0.42	99.70	α-Quartz,Mullite
46	柿色土	表層	77.02	14.40	3.03	0.29	0.71	2.25	0.76	0.73	99.19	α-Quartz, α-Cristobalite,Mullite
47			77.83	13.59	3.16	0.19	0.59	2.06	0.68	0.75	98.85	α-Quartz, α-Cristobalite,Mullite
48		1区石垣背後上層ii	77.00	14.18	3.39	0.18	0.64	2.15	0.61	0.76	98.90	α-Quartz, α-Cristobalite,Mullite
49			74.44	15.71	3.48	0.25	0.76	2.39	0.73	0.65	98.41	α-Quartz,Mullite
50		1区石垣背後中層i	74.60	15.84	3.63	0.27	0.77	2.33	0.69	0.67	98.80	α-Quartz,Mullite
51			75.30	16.26	2.62	0.32	0.56	2.34	1.07	0.69	99.16	α-Quartz, α-Cristobalite,Mullite
52		3区たて畦中ii	77.18	13.82	3.22	0.29	0.62	1.97	0.76	0.72	98.58	α-Quartz,Mullite
53			76.82	14.36	3.26	0.25	0.68	2.10	0.69	0.80	98.96	α-Quartz, α-Cristobalite,Mullite
54		3区たて畦中iv	77.65	13.68	3.00	0.26	0.63	1.97	0.69	0.70	98.58	α-Quartz,Mullite
55			77.41	13.97	3.15	0.25	0.64	2.00	0.62	0.74	98.78	α-Quartz

第８表　珉平焼窯跡出土粘土の化学分析およびX線回折測定結果

No.	出土地点	Ig.loss	SiO2	Al2O3	Fe2O3	CaO	MgO	K2O	Na2O	TiO2	Total	X-ray analysis
56	表層（ｺｰｶｼ窯周辺）	7.17	64.86	22.18	0.92	0.40	0.18	2.58	1.09	0.43	99.82	Q, K, A, O, Py
57	1区石垣背後ｇ層	5.51	69.51	16.91	1.39	0.53	0.29	3.10	1.28	0.35	98.88	Q, K, A, O
58	3区－Ⅵ　66層（iv）	6.53	64.27	17.49	5.80	0.47	0.72	2.81	1.05	0.58	99.71	Q, K, A, O, S
59	3区－Ⅵ　53層（iii）	4.21	72.48	12.48	4.63	0.42	0.55	2.19	0.69	0.53	98.17	Q, K, A, O

Q: α-Quartz　K:Kaolinite　A:Albite　O：Orthoclase　S：Sericite　Py：Pyrophyllite

乾式成形品の素地はいずれも鉄分が0.8%以下で、かなり白い土を使用しているといえる。淡陶社タイルをシリカ（SiO_2）、アルミナ（Al_2O_3）、アルカリ酸化物（K_2O+Na_2O）の含有量に着目して、以下のように３種類に分類した。

T36は土見本

		SiO_a	Al_2O_3	K_2O+Na_2O	備考
ﾀｲﾙ－1	T01～T09・T26～T35・T37	69～72%	21～23%	3～5%	湿式
ﾀｲﾙ－2	T10～T15	66～68%	26～27%	3～4%	乾式
ﾀｲﾙ－3	T16～T25・(T36)・T38・T39	72～75%	20～23%	1～2%	乾式

ﾀｲﾙ-1に分類した湿式品の素地は多少ばらつきがあるが、いずれもほぼ同じ素地といえる。

次に、乾式成形品は大きく分けて2種類に分かれる。

一つは湿式の土と同量の約３%のアルカリ酸化物（K_2O+Na_2O）を含有している素地であり、ﾀｲﾙ-2と分類した。T10～T15がこれに該当する。湿式用の素地に類似しているが、アルミナ値に差が見られ同一のものではないと考えられる。

もう一つは、K_2O、Na_2Oが少なく、シリカ（SiO_2）が多い素地で、ﾀｲﾙ-3と分類した。T16～T24・T36・T38・T39がこれに該当する。これらの素地はCristobaliteの結晶が生成している。カリウムおよびナトリウム酸化物は焼成時に融剤として作用する。これらの素地は、その成分が少ないので焼結が悪く、ﾀｲﾙ-1,2より高温で焼成したものと思われる。高温焼成したためCristobaliteの結晶が大きく生成したと考えられる。

T25はK_2Oの少ない土で、ﾀｲﾙ-3に分類したが、Cristobaliteの結晶が見られなかった。化学組成はT16～T24と同じであるので、比較的低い温度で焼成したと考えられる。

土見本の文字があるT36のタイルは、アルミナが25.95%あるが、K_2O+Na_2Oが少なくCristobaliteの結晶が見られるので、ﾀｲﾙ-3に分類した。しかし、他と比較してアルミナが2～3%多いので、他とは異なるのではないかと考えられる。

2. 珉平焼

珉平焼（陶器類）をシリカ（SiO_2）、アルミナ（Al_2O_3）、アルカリ酸化物（K_2O+Na_2O）、酸化鉄（Fe_2O_3）の含有量に着目して、以下のように４種類に分類した。

		SiO_a	Al_2O_3	K_2O+Na_2O	SiO_a
ﾐﾝﾍﾟｲ－1	８～10・12～31・33・35～38・40～45	66～69%	23～27%	4～6%	0.9～1.0
ﾐﾝﾍﾟｲ－2	２・３・11・32・39	68～71%	20～22%	4～5%	0.9～1.0
ﾐﾝﾍﾟｲ－3	１・４～７・34	71～75%	20～23%	1～2%	0.4～0.5
ﾐﾝﾍﾟｲ－4	46～55	74～78%	13～15%	2～4%	3～4%

ﾐﾝﾍﾟｲ-1～ﾐﾝﾍﾟｲ-3は白色品である。ﾐﾝﾍﾟｲ-1とﾐﾝﾍﾟｲ-2はよく似ており、ばらつきの範囲と言えないこともないが、アルミナの少ないものをﾐﾝﾍﾟｲ-2として分けた。

ﾐﾝﾍﾟｲ-1とミミﾝﾍﾟｲ-2は淡陶社湿式タイルの素地 ﾀｲﾙ-1に近いが、アルカリ酸化物（K_2O+Na_2O）が４～６%と多く、さらに酸化鉄もすべて１%近くある。このことより、これらは類似しているが、同一の素地

ではないと考えられる。

ﾐﾝﾍﾟｲ-3はCristobaliteの結晶が生成している素地である。アルカリ酸化物（K_2O+Na_2O）が少なく、シリカ（SiO_2）が多い素地で焼結が悪く、そのため高温焼成したと考えられる。この素地は淡陶社乾式タイル用素地 ﾀｲﾙ-3と非常に良く似ており同一の可能性がある。

ﾐﾝﾍﾟｲ-4は酸化鉄（F_2O_3）が３％含まれており、そのため素地は褐色に着色している。46～55の製品がこれに該当する。またアルミナ（Al_2O_3）も少なく13～15%となっている。しかし、10個のサンプルすべてが同じではなく、生成している結晶が異なる。化学組成は同じであるので、焼成温度が異なることが要因と考えられる。以下はﾐﾝﾍﾟｲ-4にあたる製品の細分類である。

46～48・51・53	焼成温度が少し高いと考えられCristobaliteの結晶が生成している。
49・50・52・54	Cristobaliteの結晶が見られないので、上記のものと比較して低い温度で焼成したものといえる。
55	Mulliteも極わずかしか生成していないので1000℃程度のかなり低い温度の素焼き品と考えられる。

3．粘土

56～59の粘土についての考察は以下のとおりである。

56	鉄分が少ない白色の粘土でカリウム（K_2O）が3%近くあり製品用の粘土と思われる。
57	白色の粘土であるがアルミナ（$A1_2O_3$）が少なく製品の分析値からみて該当するものはない。
58	鉄分が非常に多く製品用の粘土とは考えにくい。
59	鉄分が非常に多く製品用の粘土とは考えにくい。

２．淡陶社タイル再焼成実験

T3-38とT3-39の淡陶社タイル[(2)]は、表面模様、裏の櫛目模様が同じ製品であるが、寸法、素地の色、表面の釉薬の発色が異なっている。この２つのタイルが同一模様でありながらなぜこのように異なるのか、原因を調査した。

(1)試験体

T3-38白色品・T3-39ベージュ品

(2)試験項目および方法

2-1．化学分析及びX線回折

化学分析－リガク製蛍光X線分析装置（写真５）により測定した。

X線回折－リガク製Multiflex（写真９）にて測定した。

2-2．製品寸法

寸法は最大辺の1辺をノギスにて測定した。

2-3．製品吸水率

試験体は105℃で３時間以上乾燥し、冷却後重量（W1）を秤量、その試験体を1時間煮沸し水で冷却後重量(W2)を秤量した。吸水率は次の式により求めた。

（W2－W1）÷W1×100＝吸水率（%）

2-4．かさ比重

2-3の1時間煮沸後の試料を、細かい糸で自由につるしたまま水を入れた別の容器に入れ、試料の浮力により増加した容器の重量(W3)を秤量する。次の式にてかさ比重を求めた。

W1÷W3＝かさ比重

2-5. 再焼成

試料はダイヤモンドカーターにて切断し、釉薬を落として試験体とした。105℃で3時間以上乾燥機で乾燥し、その後㈱モトヤマ製電気炉SBH-2025（写真10）にて最高温度1100℃、1150℃、1200℃で再焼成した。なお、焼成条件は昇温100℃/時間、最高温度2時間保持、降温200℃/時間とした。焼成前後の寸法より収縮率をもとめ、また焼成後の吸水率も2-3. と同方法により求めた。

(3)試験結果

3-1. 化学分析

単位（%）

	lg. loss	SiO2	Al2O3	Fe203	CaO	MgO	K2O	Na2O	TiO2	Total	X-rary analysis
T3-38	0.89	68.64	21.62	0.84	0.21	0.27	3.40	1.01	0.34	97.22	α-Quartz, Mullite
T3-39	0.87	68.48	21.03	0.94	0.29	0.22	3.19	1.53	0.35	96.90	α-Quartz, Mullite

3-2. 製品寸法（mm）

T3-38　153.72

T3-39　159.87

3-3. 吸水率（%）

T3-38　4.113

T3-39　9.533

3-4. かさ比重

T3-38　2.136

T3-39　1.886

3-5. 再焼成結果

		収縮率%	吸水率%
T3-38 白色	元		4.76
	1100℃	0.59	4.97
	1150℃	0.64	4.41
	1200℃	2.71	1.49
T3-39 赤色	元		10.35
	1100℃	0.25	10.26
	1150℃	0.78	9.38
	1200℃	2.27	7.45

(4)考察

化学分析値はT3-38、T3-39とはほとんど同じであるといえる。ただ、T3-38はT3-39に比較し、わずかであるが0.1%鉄分が少なくそのためT3-38の方が少し白い素地となっていると考えられる。

分析値は同じであるが、T-38に比較しT3-39は寸法が5mm大きく吸水率も5%大きい。つまりT-39の方が焼結が悪いと言える。

再焼成の結果より、T3-38、T3-39いずれも1150℃から吸水率が下がりはじめている。つまりどちらのタイルも1100℃付近の温度で焼成されたものと思われ、焼成温度の差があるとは考えられない。

この2つのタイルのもっとも大きな差はかさ比重であり、T3-39の方が低い。つまりT3-39のほうが充填密度は低く、そのため同じ温度で焼成しても焼結が悪くなり、寸法が大きく、吸水率が高くなっていると考えられる。

写真５　蛍光X線分析装置

写真６　振動ミル

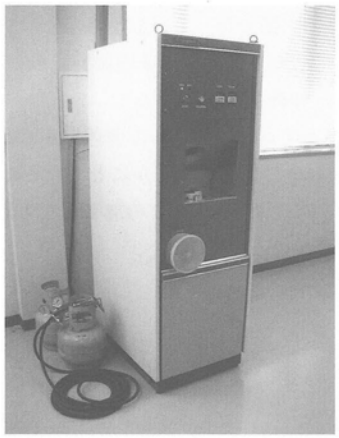


写真７　ビードサンプラー

写真８　マッフル炉

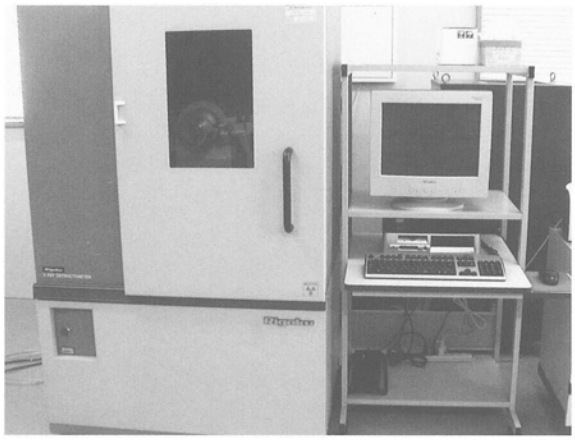


写真９　X線回折装置

写真10　電気炉

注(1)　タイルおよび珉平焼（陶器類）の胎土分析については、調査担当者（深井・仁尾）が以下の目的によって、抽出し、試料を選別した。

タイル　試料のサンプリングについては、次の目的で選別した。

1．湿式タイルと乾式タイルの基本的な胎土の違い。

2．湿式タイルの断面に見える胎土が1種によるものと、2種によるものの成分違い。

3．湿式タイル裏面墨書に見える柿荒土と池荒土の違い。

4．湿式タイルの新しいタイプと乾式タイルの古いタイプは、製法は違うものの同時期と考えられ、これらの胎土に違いがあるのか。

5．形象タイルのうち、昭和初期のタイルカタログに掲載されているものと、それ以前と考えられるものとの違い。

この他、同型式のタイルで色調の違いが生じている理由をお聞きし、再焼成実験により明らかになる可能性があるとのことで、試験をお願いした。

珉平焼（陶器類）　陶器類の試料のサンプリングについては、調査区全域の各土層から広く抽出し、土層の上下によって胎土に違いがみられるのかを目的とした。試料は白色粘土（試料№34～45）および柿色粘土（№46～55）に加え、調査区内に廃棄されていた粘土塊（№56～59）の3種をできる限り同一地点の上下層から選別した。また、試料№1～33は出土点数の多い、黄色（N-795　鬱金色）・緑色（C-鸚鵡緑）・三彩・レモン色（N-806　ﾚﾓﾝ色）の4色を中心とした施釉された製品の失敗品である。これらは、次節で行っている釉薬の分析用に提出した試料と同一試料（同一個体）である。釉薬下の胎土の正確なデータを表示するための基礎試料であるが、併せて、施釉される色調によって胎土に違いがみられるのかを比較するため、分析をお願いした。

注(2)　T3-38とT3-39は、今回の調査報告でＴ４と同一の文様をもつ湿式タイルである。タイルの整理作業では、湿式および乾式タイルともに表面の文様ごとに仮番号を付して分類を行い、その中で個々のタイルにともなう出土地点・寸法・表面の釉薬色などの情報を記録していった。T3-38およびT3-39は、T3（報告№Ｔ４）の38番目と39番目のタイルとして記録しているもので、ともに1区石垣背後上層ｉから出土した。

第２節　陶器およびタイルの釉薬材料に関する文化財科学的調査

くらしき作陽大学　北野信彦

１．はじめに

兵庫県教育委員会による三原郡南淡町伊賀野の珉平焼窯跡発掘調査の結果、明治・大正・昭和時代の淡路焼（以下、珉平焼）の生活什器類破片や建物内装用壁タイルなどが大量に出土した。これら陶磁器類の彩色は、多岐に及んでいる。これらを調査することは、江戸時代から今日に至るまでの釉薬や呈色材料の歴史を知る上で意味が深いものと考える。

今回、兵庫県教育委員会のご好意により、これらの彩色釉薬の原材料（釉薬材料および呈色材料）について自然科学的手法を用いた分析調査を行う機会を得た。本報では、この結果を報告するとともに、ここから派生する幾つかの諸問題についても言及したい。

２．調査対象試料

今回調査を行った珉平焼窯跡の珉平焼資料は、生活什器類破片と建造物内装用壁タイル資料に分類される。このうち、(1)生活什器類破片は、調査区内の大枠の出土層位から、表層、1区石垣背後上層、1区石垣背後中層、1区石垣背後下層、３区たて畦中、３区よこ畦中の６箇所にわけた地点からの出土資料101点、(2)タイル資料は、製法から乾式と湿式にわけた出土資料26点、(3)素焼き陶磁器内に残存した呈色釉薬の原材料の出土資料５点、の合計132点である。

これら近代以降の珉平焼窯跡出土の珉平焼資料は、生活什器類の破片資料では、黄・緑・紫・白・レモン・三彩（白・緑・黄・紫）・青・ピンクの７種類、タイル資料では、緑・青緑・ライム・草色・紺・藍・紫・黒およびマーブル黒・茶およびこげ茶・黄・浅黄および乳黄・橙・朱・桃・白の15種類の彩色釉薬にグルーピングされる。

本報では、肉眼観察により幾つかの色彩にグルーピングされた各出土資料における彩色釉薬の元素分析を行い、使用された釉薬材料および呈色材料を調査すること。その上で、生活什器類破片の陶磁器資料のそれと、建築用壁タイル資料のそれとが同じであるのか、さらには年代差があるのかを推定することにある。そのため、三彩陶磁器のように、同一資料の中に白・緑・黄・紫同の４種類の彩色釉薬が使用されている場合、それぞれの小破片をサンプリングして分析に供した。そのため、生活什器類破片の陶磁器資料では計131サンプル、建造物内装用壁タイル資料では計74サンプルであり、最終的には合計205サンプルが調査対象試料となった。

３．調査方法

釉薬材料および呈色材料における構成元素の成分分析には、あらかじめ、電子線(Ｘ線)検知口に設置した場合に全面積分析が可能な大きさに各試料を切り出した。この数センチ角の分析試料を、（株）堀場製作所MESA-500型の蛍光X線分析装置に設置して、電子線(Ｘ線)を照射し、特性Ｘ線を検出した。

本調査では、まず、明治39(1906)年に能勢敏雄氏によって記録された『釉薬沿革報告書』で管見される珉平焼生産地における釉薬原材料および呈色材料をまとめた。この記載内容を参照して整理、検出される元素のうち、Na（ナトリウム）、Mg（マグネシウム）、Al（アルミニウム）、Si(ケイ素)、S（硫黄）、K(カリウム)、Ca(カルシウム)、Ti(チタン)、Cr（クロム）、Mn(マンガン)、Fe(鉄)、Co(コバルト)、Cu(銅)、

Zn（亜鉛）、As(砒素)、Sn（スズ）、Pb（鉛）の二次電子線強度をカウントした。なお、設定条件は以下の通りである。分析設定時間：600秒、試料室内は真空状態、X線管電圧:15kVおよび50kV、電流:300μAおよび20μA、検出強度:50.000cps、定量補正法：スタンダードレス。

ところで、蛍光X線分析装置を用いて陶磁器類の釉薬材料および呈色材料の成分分析を基本的に非破壊調査で行った場合、検出された特性X線には、下部の陶磁器胎土・上薬釉薬・呈色材料の構成元素の情報が、混然一体化して検出される危険性が高いことがあらかじめ想定された。今回の分析調査の主目的は、あくまでも上薬である釉薬材料と呈色材料の構成元素の情報を入手する点にある。本報告書では、あらかじめダントー株式会社の分析センターにおいて、本報の分析対象試料と同一試料について、陶磁器の胎土分析が行なわれ、別報（第５章　第１節）で研究成果が掲載されている。ここでは、この胎土分析の調査結果を参考にしつつ、あらかじめX線管電圧条件や電流条件を換えて、軽元素・重元素の検出状況を確認した。その結果、成分分析にはX線管電圧:15kV、電流:300μAの条件を基本方針とした。

次に、素焼き陶磁器内に残存した釉薬の原材料の鉱物結晶相（化合物）の同定は、奈良文化財研究所埋蔵文化財センターのご好意により、同センター設置のX線回析分析装置（マックサイエンス社製M18XHF-SRA型）を使用して分析していただくこととした。測定条件は以下の通りである。対陰極；Cu、X線管電圧；50kV、X線管電流；30mA、検出器はシンチレーションカウンタを用い、走査速度；1度／分。走査範囲；5-90度、モノクロメータを使用。

４．調査結果

今回調査を行った珉平焼の出土陶磁器資料は、生活什器類破片の陶磁器資料では計131サンプル、建造物内装用壁タイル資料では計74サンプル、合計205サンプルの調査対象試料である。これらの構成元素の第一次の分析結果を（第９表・第10表）に示す。なお、ダントー株式会社による各陶磁器類の胎土分析調査では、Al（アルミニウム）およびSi（ケイ素）、とりわけSi（ケイ素）が主成分であり、Fe（鉄）などは微量成分であるとの結果を得ている。このため本報では、二次電子線強度をカウントした17の検出元素のうち、各元素の検出量の多少をSi（ケイ素）母数で割った数値で算出した（第11表・第12表）。さらに、今回調査を行った珉平焼資料は、生活什器類破片では、黄・緑・紫・白・レモン・三彩（白・緑・黄・紫）・青・ピンクの７種類に、タイル資料では、緑・青緑・ライム・草色・紺・藍・紫・黒およびマーブル黒・茶およびこげ茶・黄・浅黄および乳黄・橙・朱・桃・白の15種類の彩色釉薬にグルーピングされている。そのため、生活什器類破片７種類とタイル資料15種類の彩色釉薬ごとに、さらに三彩資料と単色資料にわけた母数であるSi(ケイ素)元素を除く16検出元素の算出数値の平均値を改めて（第13表・第14表）に掲げる。

次に、今回調査を行った釉薬材料および呈色材料の構成元素の成分分析結果を理解するうえで、参照資料として、明治39(1906)年に能勢敏雄氏によって記録された『釉薬沿革報告書』で管見される珉平焼生産地における釉薬および呈色材料の種類をまとめた（第15表）。さらに、この文献史料から想定される色彩釉薬別の構成元素の種類についてもまとめてみた（第16表）。この文献史料に先立つ明治19年(1886)に、賀集三平によって記された『淡路陶器彩色薬法記』には、「淡陶近来ノ彩薬中草色（彩色ノ青シ）、鉄赤（赤画薬シ）、藍色（艶紺青シ）ノ三程ハ　日ニ日本故有ノ雅美アリテ欧米人ノ賛賞スル所ナリ　又日本他窯ノ及ハナル所アルヲ着眼シテ奨励スヘシト」という記述があり、近世以来の淡路焼（珉平焼）の伝統的な彩色釉薬は、緑・赤・青（藍）色の三色であったようである。

さて、本報で参照した『釉薬沿革報告書』は、明治24年から39年にかけて淡陶株式会社の支配人兼釉薬係であった能勢敏雄氏が、従来使用していた南京焼釉薬の強度を上げることと、新たな色彩の釉薬開発を目的として行った実験報告書である。この中には、各種原材料の配合比率なども詳細に記録されており、当時の窯業技術を知る上で大変参考となる。

この文献史料によると、まず、淡路焼（珉平焼）陶磁器類の釉薬材料には、唐土・日ノ岡・白玉もしくは玉石などが共通の原材料として示されている。これらが実際どのような材料であるのかは、伝世品である当時の物的資料を見出し得ない現状では、不明の点もある。ところが、幸いにも、この『釉薬沿革報告書』には、「唐土は硫酸液に入れると鉛分は皆溶解して、異分子の混合物のみが残る」とあり、今日でも鉛白（塩基性炭酸鉛）を「唐の土」と称する地域もある。そのため、基本的には「唐土」は、鉛材料に相当しよう。また、「日ノ岡」も、膨張係数の関係で亀裂が入りやすい釉薬の罅止め（融点調整）に使用される珪石材料として、現代の窯業界でも使用される原材料の一つである。さらに、「釉薬には、白玉、長石、瀬戸蛙目（基礎釉の補助剤の蛙目粘土：Al_2O_3・$2SiO_2$・$2H_2O$の一種と考えられ、釉泥の沈殿防止のため5～10%添加する）を用いる」、「硬質投棄（陶器）釉薬には、酸化亜鉛、鉛丹、石灰、長石、炭酸ソーダ、結晶硼酸を用いる」、「白玉には、鉛丹、長石、炭酸ソーダ、酸化亜鉛、石灰、珪石、結晶硼酸を用いる」などの記述がある。これら記述内容からは、当時の淡路焼（珉平焼）釉薬原材料における主要構成元素の主成分は、Al（アルミニウム）、Si(ケイ素)、Pb（鉛）などであること。これにNa（ナトリウム）、Ca(カルシウム)、Zn（亜鉛）などの微量元素が付加されることが想定された。

今回の蛍光X線分析装置による分析結果では、いずれの調査対象試料からも、Al（アルミニウム）、Si(ケイ素)、Pb（鉛）などの元素の検出量が多かった。そのため、文献史料のそれと基本的には一致する情報を得たと言えよう。

次に、各彩色釉薬の呈色材料の調査結果を見てみる。まず、生活什器類の釉薬の場合は、黄色ではFe（鉄）が、緑色ではCu（銅）が、紫色ではMn（マンガン）が、青色ではCo（コバルト）が、ピンク色ではCa（カルシウム）などの元素が特徴的に確認された。ただし、三彩の陶磁器資料と単色の陶磁器資料では、紫色の呈色材料のように、状況が大きく異なる場合もある。この点からは、時代により、もしくは陶磁器の種類により、呈色材料が使い分けられていた可能性も指摘されよう。

また、タイル資料の釉薬の場合は、Ti（チタン）は橙色に、Cr(クロム)は朱色・黒色に、Mn（マンガン）は茶色・黒色に多く、微量では橙色・草色などに、Fe(鉄)は黒色・橙色・草色などに、Co（コバルト）は黒色・紺色に多く、微量では茶色・紫色・青緑色・緑色に、Cu（銅）は桃色・藍色・ライム色・草色・緑色に多く、Zn（亜鉛）は青緑色に、Sn(スズ)は桃色・朱色・紫色などに、構成元素として特徴的に検出された。いずれにしても、この分析結果からは、緑色の呈色材料などは、生活什器類のそれとほぼ同様の原材料が使用されていた可能性が高いものの、その他の彩色釉薬では、呈色材料は若干異なるか、幾つかの呈色材料がブレンドしてある可能性も指摘される。

今日の窯業界では、釉薬の着色(呈色)酸化剤として、青・瑠璃・紺青色には酸化コバルト（CoO）が、緑・赤・赤紫・青緑・トルコ青・水色には酸化銅（CuO）が、飴色・赤褐色・黒・朱赤・にぶ黄・薄青・薄緑色には酸化第二鉄(Fe_2O_3)が、飴色・黄茶・紫には二酸化マンガン（MnO_2）が、レモン黄・橙・ヒワ・緑色には酸化クロム（Cr_2O_3）などが一般的には使用されていることが知られる。

そして先の『釉薬沿革報告書』によると、辰砂色には「酸化錫・炭酸石灰・重クロム酸カリ」、黒色には「酸化鉄・酸化クロム・酸化マンガン・酸化コバルト」、緑色系には「ハケ(酸化銅が主成分)」、瑠璃色に

は「酸化コバルト」、紫色系には「呉須コバルト・マンガン」、黄色系には「黄土」などの呈色材料の使用が記述されている。この点に関しては、今回の分析結果とも、ほぼ一致した情報であるといえよう。

その一方で、今回の分析結果では、Na（ソーダ）や、Cr（クロム）、Zn(亜鉛)などの元素の検出強度は、基本的には概して低くなる傾向が認められた。今後、この点を考慮に入れた分析方法を再検討する必要性も課題として残された。

いずれにしても、本資料群には、今日においても使用されている釉薬材料や呈色材料、すでに使用されなくなってしまった近代以前の技術を反映した釉薬材料や呈色材料など、過去から現在に至る窯業史のさまざまな状況が内包された状態で提供されたものといえよう。

以上、本報では、珉平焼陶磁器類の各種彩色釉薬の基礎的調査として、実際の出土資料における構成元素の成分分析、および、出土資料とほぼ同時代の文献史料に記述された釉薬材料および呈色材料の技術内容の解析を並行して行った。その結果、文献史料の内容と一致する情報、若干異なる結果が得られた情報など、さまざまな知見を得た。

今後は、基本的な分析方法の検証を含め、近世～近代、さらには現代に至る、さまざまな局面における陶磁器資料の釉薬材料と呈色材料に関する基礎的データの蓄積と充実を図っていきたい。

(謝辞)

本調査を進めるにあたり、分析用の陶器資料の選定や文献史料の提示などの便宜を図ってくださった兵庫県教育委員会の岡田章一・深井明比古・村上泰樹・仁尾一人の各氏、陶磁器資料の胎土分析結果およびその分析条件を提示してくださったダントー株式会社技術研究所の池田健氏には大変お世話になりました。また、奈良文化財研究所　埋蔵文化財センターの肥塚隆保室長および降幡順子研究員には、X線回折分析をはじめとする陶磁器分析一般に関して大変多くのご教示を賜りました。あわせて厚く謝意を表します。

参考文献

素木洋一『わかりやすい工業用陶磁器』　技報堂　昭和51（1976）年
加藤悦三『釉調合の基本』　窯技社　昭和55（1980）年
大木道則ほか編集『化学辞典』　東京化学同人　平成7（1995）年
照屋善義『沖縄の陶器　－技術と科学－』　平成12（2000）年

第9表　釉薬および呈色材料の蛍光X線分析結果(A)　陶器類

No.	color	Na	Mg	Al	Si	S	K	Ca	Ti	Cr	Mn	Fe	Co	Cu	Zn	As	Sn	Pb
1-1-1	黄色	0	0	0.34	2.84	0	0.19	0.67	0.01	0	0	0.12	0	0	0.01	0	0.21	0.40
1-1-2	黄色	0	0	0.16	2.54	0	0.14	0.77	0	0	0	0.13	0	0	0	0	0.21	0.40
1-2-1	黄色	0.01	0.01	0.20	1.95	0	0.15	0.03	0.03	0	0.01	0.53	0	0	0	0.13	0.02	0.44
1-3-1	黄色	0	0	0.04	0.68	0	0.08	0.03	0.03	0	0	0.46	0	0	0	0.12	0.01	0.46
2-1-1	緑色	0	0	0.09	1.49	0	0.04	0.09	0	0	0	0.01	0	1.1	0	0	0.01	0.44
2-2-1	緑色	0	0	0.20	2.41	0	0.08	0.11	0.01	0	0	0.04	0	1.07	0.02	0	0.01	0.44
2-3-1	緑色	0	0	0.09	1.65	0	0.07	0.03	0	0	0	0	0	1.30	0.01	0	0.01	0.52
3-1W1	白色	0	0	0.03	0.75	0	0.11	0.03	0	0	0	0.02	0	0.01	0	0.13	0.01	0.47
3-1W2	白色	0	0	0.03	0.73	0	0.10	0.04	0.01	0	0	0	0	0	0	0.14	0.01	0.47
3-1G1	緑色	0	0	0.03	0.70	0	0.11	0.05	0.01	0	0	0.03	0	0.53	0	0.11	0	0.40
3-1G2	緑色	0	0	0.03	0.61	0	0.11	0.05	0.01	0	0	0.03	0	0.93	0	0	0	0.36
3-1Y1	黄色	0	0	0.07	0.81	0	0.19	0.01	0.03	0	0.01	0.22	0	0.01	0	0.09	0.03	0.39
3-1Y2	黄色	0	0	0.04	0.61	0	0.09	0.03	0.02	0	0.01	0.31	0	0.01	0	0.13	0.01	0.45
3-1P1	紫色	0	0	0.04	0.71	0	0.13	0.04	0.01	0	0.19	0.03	0	0.03	0	0.1	0.02	0.37
3-1P2	紫色	0	0	0.04	0.71	0	0.12	0.05	0.01	0	0.14	0.03	0	0.02	0	0.12	0.03	0.38
4-1-1	白色	0.03	0	0.32	6.15	0	0.54	0.52	0.01	0	0	0.05	0	0	0	0	0.20	0.33
4-1-2	白色	0.03	0	0.33	7.05	0	0.55	0.47	0.03	0	0	0.06	0	0	0	0	0.21	0.30
4-2-1	白色	0.01	0	0.19	2.3	0	0.21	0.23	0.01	0	0	0.02	0	0	0	0.05	0.06	0.15
4-2-2	白色	0.01	0	0.15	1.75	0	0.18	0.18	0.01	0	0	0.02	0	0	0	0.3	0.04	0.10
4-3-1	白色	0.02	0	0.34	5.35	0	0.50	0.59	0.02	0	0	0.06	0	0	0	0	0.15	0.31
4-3-2	白色	0.03	0	0.32	6.15	0	0.59	0.57	0.01	0	0	0.03	0	0	0	0	0.21	0.33
5-1-1	ﾋﾟﾝｸ色	0.01	0	0.20	3.03	0	0.19	0.58	0.01	0.01	0	0.02	0	0	0.02	0	0.27	0.40
5-1-2	ﾋﾟﾝｸ色	0.01	0	0.23	3.42	0	0.23	0.71	0.02	0.01	0	0.04	0	0	0.02	0.1	0.34	0.42
5-2-1	ﾋﾟﾝｸ色	0.01	0	0.12	3.06	0	0.24	0.64	0.01	0.01	0	0.02	0	0.01	0.02	0	0.36	0.42
5-2-2	ﾋﾟﾝｸ色	0	0	0.13	3.06	0	0.22	0.64	0.01	0	0	0.02	0	0	0.01	0.11	0.32	0.42
5-3-1	ﾋﾟﾝｸ色	0	0	0.08	1.87	0	0.16	0.43	0.01	0	0	0.02	0	0	0	0.10	0.30	0.40
6-1-1	青色	0	0	0.08	1.73	0	0.17	0.08	0	0	0	0.01	0.05	0.20	0.01	0.12	0.02	0.43
6-1-2	青色	0	0.01	0.08	1.68	0	0.13	0.08	0	0	0	0.02	0.05	0.16	0.01	0.11	0.01	0.41
6-1-3	青色	0	0	0.10	1.80	0	0.14	0.08	0	0	0	0.01	0.04	0.13	0.01	0.1	0.01	0.42
6-2-1	青色	0	0	0.05	0.60	0	0.04	0.07	0	0	0	0	0.02	0.04	0	0.02	0	0.05
6-3-1	青色	0	0	0.03	0.92	0	0.07	0.04	0	0	0	0.01	0.02	0.09	0	0.06	0.01	0.22
7-1-1	紫色	0	0	0.15	2.01	0	0.01	0.32	0.01	0	0	0.02	0	0	0	0.08	0.41	0.29
7-1-2	紫色	0.01	0	0.19	2.64	0	0.06	0.46	0.01	0	0	0.02	0	0.01	0	0.10	0.55	0.38
7-1-3	紫色	0.01	0.01	0.27	3.10	0	0.16	0.37	0.02	0	0	0.03	0	0	0.01	0	0.49	0.40
7-2-1	紫色	0	0	0.01	0.12	0	0	0.03	0	0	0	0	0	0	0	0	0.02	0.01
7-3-1	紫色	0	0	0	0.02	0	0	0.01	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
8-1-1	黄色	0	0	0.12	1.20	0	0.05	0.02	0.02	0	0	0.29	0	0	0	0.08	0.01	0.26
8-1-2	黄色	0.01	0	0.17	1.76	0	0.08	0.02	0.03	0	0.01	0.42	0	0	0	0.12	0.01	0.44
8-1-3	黄色	0.01	0.01	0.16	1.72	0	0.08	0.02	0.04	0	0.01	0.48	0	0	0	0.13	0.01	0.43
8-2-1	黄色	0	0	0.09	0.76	0	0.06	0.01	0.01	0	0	0.21	0	0	0	0.06	0.01	0.19
8-2-2	黄色	0.01	0.01	0.21	1.93	0	0.16	0.04	0.03	0	0.01	0.50	0	0	0	0.13	0.02	0.45
8-3-1	黄色	0.01	0.01	0.14	1.52	0	0.09	0.02	0.02	0	0.01	0.40	0	0.04	0	0.11	0.01	0.40
8-3-2	黄色	0.01	0	0.18	1.77	0	0.12	0.02	0.03	0	0.01	0.50	0	0.03	0	0	0.01	0.52
8-3-3	黄色	0.01	0.01	0.19	1.77	0	0.12	0.02	0.03	0	0	0.50	0	0.07	0	0.14	0.01	0.46
9-1-1	緑色	0	0	0.12	2.59	0	0.09	0.09	0.01	0	0	0.02	0	0.60	0	0.17	0.01	0.27
9-1-2	緑色	0	0.01	0.19	4.26	0	0.13	0.17	0.02	0	0	0.02	0	1.08	0	0	0.01	0.49
9-2-1	緑色	0	0.01	0.09	1.29	0	0.07	0.03	0	0	0	0.01	0	1.04	0	0	0.01	0.41
9-3-1	緑色	0	0	0.16	2.61	0	0.05	0.11	0.01	0	0	0.02	0	1.05	0	0	0	0.53
9-3-2	緑色	0.01	0.01	0.28	3.57	0	0.10	0.24	0.02	0	0	0.03	0	1.00	0	0.14	0	0.49
10-1G1	緑色	0	0	0.04	0.97	0	0.09	0.1	0.02	0	0	0.05	0	1.22	0	0.13	0	0.44
10-1G2	緑色	0	0	0.04	0.83	0	0.13	0.09	0.02	0	0	0.05	0	1.16	0.01	0.12	0.01	0.44
10-1P1	紫色	0	0	0.02	0.37	0	0.05	0.01	0.01	0	0.07	0.02	0	0.02	0	0.07	0.01	0.23
10-1P2	紫色	0	0	0.03	0.72	0	0.11	0.04	0.01	0	0.16	0.02	0	0.3	0	0.13	0.02	0.43
10-1Y1	黄色	0	0	0	0.56	0	0.08	0.02	0.01	0	0.01	0.41	0	0.01	0	0.13	0.01	0.44
10-1Y2	黄色	0	0	0.04	0.39	0	0.04	0.01	0.02	0	0	0.20	0	0.01	0	0	0	0.23
11-1-1	ﾚﾓﾝ色	0	0	0.07	2.29	0	0.07	0.02	0	0	0	0.03	0	0	0	0.15	0.01	0.53
11-2-1	ﾚﾓﾝ色	0	0	0.27	2.39	0	0.15	0.02	0.01	0.01	0	0.02	0	0.01	0	0	0.02	0.56
11-3-1	ﾚﾓﾝ色	0.01	0	0.11	2.18	0	0.14	0.01	0.01	0.01	0	0.01	0	0.01	0	0.14	0.04	0.53
12-1-1	黄色	0.01	0	0.21	2.03	0	0.13	0.03	0.04	0	0	0.56	0	0	0	0	0.01	0.54
12-1-2	黄色	0.01	0.01	0.19	1.96	0	0.12	0.02	0.03	0	0.01	0.60	0	0	0	0	0.01	0.53
12-2-1	黄色	0	0	0.06	0.57	0	0.03	0.01	0.01	0	0	0.16	0	0	0	0.04	0	0.12
12-3-1	黄色	0	0	0.06	0.57	0	0.03	0.01	0.01	0	0	0.15	0	0	0	0	0.01	0.14
13-1-1	緑色	0.01	0.01	0.32	3.25	0	0.2	0.26	0.01	0	0	0.02	0	1.08	0	0	0.02	0.51
13-1-2	緑色	0	0	0.28	1.95	0	0.1	0.11	0	0	0	0.01	0	0.96	0	0	0.01	0.39
13-2-1	緑色	0	0	0.09	1.94	0	0.03	0.07	0	0	0	0.01	0	1.17	0.01	0.28	0	0.46
13-2-2	緑色	0	0.01	0.01	2.40	0	0.04	0.09	0.01	0	0	0.02	0	1.12	0	0	0	0.49
13-3-1	緑色	0	0.01	0.05	1.48	0	0.04	0.24	0	0	0	0.01	0	1.09	0	0	0	0.43
13-3-2	緑色	0	0.01	0.03	1.27	0	0.01	0.53	0.01	0	0	0.01	0	0.93	0	0	0	0.44
14-1G1	緑色	0	0	0.03	0.73	0	0.10	0.04	0.01	0	0	0.04	0	0.9	0	0	0.01	0.46
14-1P1	紫色	0.01	0	0.09	1.92	0	0.11	0.05	0	0	0.23	0	0	0.02	0	0.11	0.01	0.49
14-1W1	白色	0	0	0.03	1.03	0	0.06	0.02	0.01	0	0	0.02	0	0.01	0	0.11	0	0.42
14-1Y1	黄色	0	0	0.03	0.51	0	0.05	0.02	0.03	0	0.02	0.34	0	0.01	0	0.11	0	0.42
15-1-1	ﾚﾓﾝ色	0	0	0.06	2.55	0	0.07	0.01	0.01	0	0	0.02	0	0.01	0	0	0.01	0.56

15-2-1	ﾚﾓﾝ色	0	0	0.07	2.54	0	0.08	0.02	0.01	0.01	0	0.04	0	0.01	0	0.15	0.01	0.49
15-2-2	ﾚﾓﾝ色	0.01	0	0.11	2.68	0	0.10	0.03	0.01	0.01	0	0.05	0	0.01	0	0.13	0.01	0.52
15-3-1	ﾚﾓﾝ色	0	0	0.07	2.07	0	0.05	0.02	0	0.01	0	0.03	0	0	0	0	0.01	0.46
15-3-2	ﾚﾓﾝ色	0	0	0.01	0.09	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.01	0	0.01
16-1-1	黄色	0.01	0.01	0.18	1.80	0	0.09	0.02	0.03	0	0.01	0.51	0	0	0	0.14	0.01	0.46
16-1-2	黄色	0.01	0	0.19	1.93	0	0.1	0.02	0.04	0	0.02	0.55	0	0	0	0	0.01	0.54
16-1-3	黄色	0.01	0	0.20	1.95	0	0.1	0.02	0.03	0	0.01	0.51	0	0	0	0	0.01	0.54
16-2-1	黄色	0.01	0	0.26	2.21	0	0.15	0.04	0.04	0	0.01	0.64	0	0.01	0	0	0.02	0.51
16-2-2	黄色	0.01	0.01	0.27	2.19	0	0.18	0.02	0.05	0	0	0.68	0	0.04	0	0.14	0.02	0.49
16-3-1	黄色	0	0	0.12	1.15	0	0.06	0.01	0.03	0	0	0.33	0	0	0	0	0.01	0.34
17-1-1	緑色	0	0	0.10	2.45	0	0.05	0.04	0.01	0	0	0.02	0	1.15	0	0	0.01	0.47
17-2-1	緑色	0	0.01	0.31	3.43	0	0.22	0.26	0.02	0	0	0.02	0	1.05	0	0	0.03	0.49
17-3-1	緑色	0	0	0.26	2.73	0	0.12	0.12	0.02	0	0	0.04	0	1.21	0	0	0.01	0.44
18-1G1	緑色	0	0	0.04	1.11	0	0.08	0.05	0.01	0	0	0.02	0	1.00	0	0.13	0	0.45
18-1P1	紫色	0	0	0	0.38	0	0	0.01	0.01	0	0.20	0	0	0.01	0	0.09	0	0.30
18-1W1	白色	0	0	0.02	0.63	0	0.04	0.02	0.01	0	0	0.02	0	0.02	0	0.12	0	0.38
18-1Y1	黄色	0	0	0.03	0.38	0	0.05	0.02	0.02	0	0	0.24	0	0	0	0.09	0	0.26
19-1-1	黄色	0.01	0.01	0.28	3.17	0	0.12	0.06	0.03	0	0.01	0.52	0	0	0	0.13	0.03	0.46
19-1-2	黄色	0.01	0.01	0.18	1.96	0	0.11	0.02	0.03	0	0.01	0.46	0	0	0	0.12	0.01	0.44
19-2-1	黄色	0.01	0.01	0.18	1.77	0	0.08	0.03	0.03	0	0.01	0.44	0	0	0	0.14	0.01	0.47
19-3-1	黄色	0.01	0	0.17	1.75	0	0.09	0.01	0.03	0	0.01	0.46	0	0	0	0.12	0.01	0.48
19-3-2	黄色	0.01	0.01	0.18	1.82	0	0.09	0.02	0.03	0	0.01	0.47	0	0	0	0	0.01	0.54
20-1-1	緑色	0	0	0.07	1.58	0	0.05	0.02	0.01	0	0	0.02	0	1.06	0	0	0.01	0.44
20-2-1	緑色	0	0	0.09	2.61	0	0.04	0.06	0.01	0	0	0.02	0	1.05	0	0	0.01	0.54
20-3-1	緑色	0	0	0.04	1.65	0	0.02	0.02	0	0	0	0.02	0	1.20	0	0	0	0.53
21-1Y1	黄色	0	0	0.04	0.42	0	0.03	0.02	0.02	0	0.01	0.24	0	0.01	0	0.09	0	0.33
21-1W1	白色	0	0	0.02	0.78	0	0.03	0.02	0.01	0	0	0.01	0	0.01	0	0.15	0.01	0.48
21-1P1	紫色	0	0	0.01	0.40	0	0.02	0.01	0.01	0	0.06	0.08	0	0.01	0	0.09	0	0.32
21-1G1	緑色	0	0	0.01	0.49	0	0.01	0.03	0.01	0	0	0.02	0	0.83	0	0	0	0.41
22-1-1	ﾚﾓﾝ色	0	0	0.06	2.37	0	0.06	0.03	0.01	0.01	0	0.02	0	0.01	0	0.15	0.01	0.50
22-2-1	ﾚﾓﾝ色	0	0	0.03	1.13	0	0.03	0.01	0	0.01	0	0	0	0	0	0.07	0	0.17
22-3-1	ﾚﾓﾝ色	0.01	0	0.07	2.29	0	0.06	0.02	0.01	0.01	0	0.03	0	0	0	0	0.01	0.55
23-1-1	黄色	0	0	0.21	2.13	0	0.14	0.02	0.05	0	0	0.57	0	0	0	0.13	0.01	0.48
23-2-1	黄色	0.01	0	0.21	2.08	0	0.12	0.02	0.05	0	0.01	0.56	0	0	0	0.15	0.01	0.51
23-3-1	黄色	0.01	0.01	0.18	1.65	0	0.11	0.02	0.04	0	0	0.45	0	0.01	0	0.13	0.01	0.40
24-1-1	緑色	0	0	0.07	1.79	0	0.05	0.03	0	0	0	0.02	0	1.26	0	0	0.01	0.50
24-1-2	緑色	0	0	0.08	1.89	0	0.05	0.03	0.01	0	0	0.02	0	1.30	0	0.15	0.01	0.48
24-2-1	緑色	0	0	0.04	1.46	0	0.02	0.03	0.01	0	0	0.02	0	1.04	0	0	0.01	0.43
24-3-1	緑色	0	0	0.24	6.56	0	0.08	0.23	0.02	0	0	0.02	0	0.99	0	0.14	0.03	0.48
24-3-2	緑色	0	0.01	0.12	3.54	0	0.06	0.09	0.01	0	0	0.02	0	0.73	0	0.1	0.01	0.34
25-1Y1	黄色	0	0	0.03	0.57	0	0.05	0.02	0.03	0	0.01	0.39	0	0.01	0	0.14	0	0.46
25-1W1	白色	0	0	0.02	0.65	0	0.03	0.01	0.00	0	0	0.01	0	0.01	0	0.10	0	0.36
25-1P1	紫色	0	0	0.02	0.47	0	0.02	0.02	0.01	0	0.23	0.09	0	0.01	0	0.10	0	0.35
25-1G1	緑色	0	0	0.03	0.48	0	0.02	0.03	0.01	0	0	0.03	0	0.8	0	0	0	0.36
26-1-1	緑色	0	0	0.07	2.18	0	0.06	0.02	0	0.01	0	0.02	0	0	0	0.15	0.01	0.52
26-2-1	緑色	0.01	0	0.06	2.42	0	0.06	0.02	0	0.02	0	0.02	0	0	0	0.15	0.01	0.50
27-1-1	黄色	0	0.01	0.07	0.69	0	0.03	0.01	0.01	0	0	0.21	0	0	0	0	0	0.18
27-2-1	黄色	0.01	0.01	0.22	2.06	0	0.13	0.02	0.04	0	0	0.48	0	0	0	0.13	0.01	0.48
28-1-1	緑色	0	0	0.06	1.73	0	0.06	0.01	0	0	0	0.02	0	1.01	0	0	0.01	0.49
28-2-1	緑色	0	0	0.01	0.20	0	0.01	0	0	0	0	0.00	0	0.10	0	0	0	0.05
28-3-1	緑色	0	0	0.07	1.88	0	0.05	0.03	0.01	0	0	0.02	0	1.13	0	0	0.01	0.48
29-1G1	緑色	0	0	0.05	0.69	0	0.08	0.03	0.01	0	0	0.05	0	0.87	0	0.11	0	0.36
29-1Y1	黄色	0	0	0.03	0.57	0	0.05	0.02	0.03	0	0.01	0.4	0	0.01	0	0.15	0.01	0.48
29-1W1	白色	0	0	0.01	0.31	0	0.02	0.01	0	0	0	0.01	0	0	0	0.06	0	0.18
29-1P1	紫色	0	0	0.02	0.67	0	0.02	0.03	0.01	0	0.17	0	0	0.01	0	0.15	0	0.48
30-1-1	ﾚﾓﾝ色	0.01	0	0.07	2.42	0	0.06	0.03	0.01	0.02	0	0.45	0	0	0	0.15	0.01	0.49
30-2-1	ﾚﾓﾝ色	0	0	0.06	2.08	0	0.05	0.02	0	0.02	0	0.01	0	0.01	0	0.14	0.01	0.50
30-3-1	ﾚﾓﾝ色	0	0	0.06	2.50	0	0.06	0.02	0	0.02	0	0.01	0	0.01	0	0.14	0.01	0.50
31	素焼き	0	0	0	0.06	0	0	0.01	0	0	0	0.01	0	0	0	0	0	0.06
32	素焼き	0	0	0.02	0.31	0	0.13	0.02	0.01	0.01	0	0.01	0	0	0	0	0.05	0.16
33	素焼き	0	0	0.01	0.21	0	0.03	0.01	0	0	0	0.01	0	0	0	0	0	0.08

（第1次分析結果：検出強度cps/μA値）

第10表　釉薬および呈色材料の蛍光X線分析結果(A)　淡陶社タイル

No.	color	Na	Mg	Al	Si	S	K	Ca	Ti	Cr	Mn	Fe	Co	Cu	Zn	As	Sn	Pb
MT1-1	白	0	0	0.03	0.83	0	0.15	0.02	0	0	0	0.02	0	0.01	0	0.11	0.03	0.45
MT1-2	緑	0	0	0.02	0.59	0	0.08	0.09	0.01	0	0	0.03	0.01	0.47	0	0.07	0	0.28
MT1-3	橙	0	0	0.03	0.33	0	0.09	0.02	0.01	0	0	0.19	0	0.01	0	0.05	0.01	0.17
MT1-4	紺	0	0	0.03	0.94	0	0.15	0.06	0.01	0	0	0.02	0.35	0	0	0.12	0.03	0.46
MT2-1	黒	0	0	0.03	0.65	0	0.05	0.02	0.01	0	0.28	0	0.04	0	0	0.09	0	0.33
MT2-1	白	0	0	0.03	1.05	0	0.07	0.03	0.01	0	0	0.04	0	0	0	0.12	0	0.42
MT2-1	紺	0	0	0.04	0.81	0	0.07	0.02	0.02	0	0	0.05	0.16	0	0	0.08	0.01	0.28
MT2-1	緑	0	0	0.04	0.76	0	0.07	0.17	0.01	0	0	0.02	0.02	1.01	0	0.12	0	0.43
MT2-1	黄	0	0	0.02	1.02	0	0.17	0.02	0.01	0	0	0.02	0	0	0	0.13	0.02	0.45

MT3-1	紺	0	0	0.04	0.82	0	0.12	0.02	0.02	0	0	0.03	0.30	0	0	0	0.02	0.40
MT3-2	橙	0	0	0.06	0.72	0	0.10	0.02	0.03	0	0.01	0.38	0	0	0	0.10	0.01	0.33
MT3-3	白	0	0	0.03	0.92	0	0.14	0.02	0	0	0	0.02	0	0.01	0	0.13	0.03	0.47
MT3-4	緑	0	0	0.04	0.71	0	0.04	0.12	0.01	0	0	0.01	0.01	1.14	0	0.12	0	0.40
MT4-1	草色	0	0	0.02	0.58	0	0.09	0.03	0.01	0	0.01	0.18	0	0.32	0	0.13	0.01	0.44
MT5-1	白	0	0	0.05	0.81	0	0.10	0.06	0.01	0	0	0.03	0	0.01	0	0.13	0.01	0.45
MT5-2	ﾗｲﾑ	0	0	0.03	0.59	0	0.05	0.03	0.01	0	0	0.02	0	0.50	0	0.12	0	0.39
MT6-1	ﾗｲﾑ	0	0	0.04	0.96	0	0.07	0.08	0.01	0	0	0.02	0	0.26	0	0.13	0	0.46
MT6-2	こげ茶	0	0	0.02	0.78	0	0.07	0.03	0	0	0.40	0	0.02	0	0	0.14	0.01	0.45
MT6-3	白	0	0	0.03	0.74	0	0.06	0.03	0.01	0	0	0.01	0	0	0	0.13	0.01	0.47
MT6-4	緑	0	0	0.03	0.76	0	0.04	0.11	0.01	0	0	0.01	0	1.14	0.01	0	0	0.45
MT6-5	黄	0	0	0.02	0.77	0	0.06	0.03	0	0	0	0.01	0	0.01	0	0.13	0.01	0.48
MT8-1	藍	0	0	0.03	0.73	0	0.13	0.02	0	0	0	0.02	0.04	0.16	0	0.11	0.01	0.47
MT9-1	朱	0	0	0.05	1.37	0	0.30	0.90	0.01	0.01	0	0.03	0	0	0	0	0.40	0.38
MT9-2	白	0	0	0.04	0.95	0	0.17	0.03	0	0	0	0.01	0	0	0	0.12	0.05	0.46
MT9-3	緑	0	0	0.03	0.89	0	0.05	0.18	0.01	0	0	0.02	0.03	1.13	0	0.12	0	0.43
MT9-4	紫	0	0	0.04	0.92	0	0.17	0	0.01	0	0	0.02	0.01	0.02	0	0	0.57	0.25
MT10-1	白	0	0	0.09	1.34	0	0.21	0.07	0.01	0	0	0.03	0	0	0	0.11	0.05	0.42
MT10-2	緑	0	0	0.05	0.70	0	0.06	0.13	0.01	0	0	0.02	0.01	0.85	0	0.12	0	0.40
MT10-3	橙	0	0	0.03	0.31	0	0.04	0.01	0.01	0	0	0.20	0	0	0	0.06	0	0.17
MT10-4	紺	0	0	0.03	0.64	0	0.09	0.03	0.01	0	0	0.01	0.17	0	0	0.07	0.01	0.27
MT11-1	紺	0	0	0.03	0.67	0	0.08	0.03	0	0	0	0.02	0.24	0	0	0.11	0.01	0.36
MT11-2	白	0	0	0.03	0.67	0	0.09	0.02	0.01	0	0	0.01	0	0.01	0	0	0.02	0.34
MT11-3	橙	0	0	0.10	0.65	0	0.17	0.08	0.04	0	0	0.28	0	0	0	0	0.04	0.23
MT11-4	緑	0	0	0.03	0.50	0	0.05	0.10	0.01	0	0	0.02	0	0.45	0	0.07	0	0.28
MT12-1	草色	0	0	0.02	0.54	0	0.06	0.03	0.01	0	0	0.14	0	0.26	0	0.10	0.01	0.38
MT13-1	藍	0	0	0.03	1.07	0	0.17	0.01	0.01	0	0	0.02	0.06	0.12	0	0.10	0.04	0.40
MT14-1	桃	0	0	0.05	1.00	0	0.18	0.65	0.01	0	0	0.09	0	0.01	0	0	0.37	0.32
MT14-2	緑	0	0	0.04	0.62	0	0.03	0.16	0.01	0	0	0.02	0.01	1.00	0	0.11	0.05	0.39
MT14-3	白	0	0	0.03	0.55	0	0.09	0.03	0.01	0	0	0.01	0	0.02	0	0	0.01	0.27
MT14-4	藍	0	0	0.04	0.76	0	0.07	0.03	0	0	0	0.01	0.06	0.14	0	0.10	0	0.42
MT15-1	緑	0	0	0.03	0.79	0	0.07	0.14	0.01	0	0	0.02	0	0.57	0	0.11	0	0.40
MT15-2	白	0	0	0.05	0.84	0	0.18	0.02	0.01	0	0	0.03	0	0.01	0	0.09	0.04	0.37
MT15-3	紫	0	0	0.03	0.67	0	0.11	0.16	0.01	0	0	0.01	0.01	0	0	0	0.11	0.24
MT16-1	無地ﾗｲﾑ	0	0	0.04	1.16	0	0.27	0.35	0.01	0	0	0.02	0	0.70	0	0.07	0.04	0.33
MT17-1	青緑	0	0	0.05	0.94	0	0.19	0.24	0.01	0	0	0.04	0	0	0	0	0.03	0.24
MT17-2	緑	0	0	0.06	1.32	0	0.28	0.37	0.02	0	0.01	0.04	0	0.47	0	0	0.06	0.35
MT17-3	白	0	0	0.05	0.97	0	0.18	0.38	0.02	0	0	0.04	0	0.93	0.02	0	0.06	0.22
MT18-1	黄	0	0	0.05	1.02	0	0.31	0.24	0.01	0.01	0	0.02	0	0.01	0	0	0.07	0.40
MT18-2	青緑	0	0	0.03	0.66	0	0.18	0.43	0	0	0	0.01	0	0.49	0.01	0.07	0.03	0.24
MT18-3	白	0	0	0.05	1.16	0	0.37	0.55	0.02	0	0	0.01	0	0.01	0	0	0.06	0.35
MT18-4	緑	0	0	0.03	0.96	0	0.20	0.69	0.01	0	0	0.04	0	2.25	0.02	0.09	0.03	0.34
MT18-5	乳黄	0	0	0.05	1.40	0	0.40	0.66	0.01	0	0	0.44	0	0	0	0.09	0.06	0.40
MT19-1	青緑	0	0	0.05	1.32	0	0.34	0.62	0.02	0	0	0.03	0	0.62	0	0.09	0.05	0.36
MT19-2	浅黄	0	0	0.06	1.23	0	0.35	0.56	0.01	0	0	0.48	0	0.03	0	0	0.05	0.34
MT19-3	緑	0	0	0.05	1.26	0	0.30	0.89	0.01	0	0	0.02	0	0	0	0.1	0.37	0.36
MT19-4	桃	0	0	0.05	0.83	0	0.17	0.49	0.01	0	0.01	0.03	0	1.42	0	0.06	0.01	0.34
MT20-1	桃	0	0	0.05	0.97	0	0.22	0.79	0.02	0	0	0.01	0	0.01	0	0	0.41	0.30
MT20-2	青緑	0	0	0.05	1.15	0	0.04	0.61	0.01	0	0	0.02	0	0.06	0	0.10	0.07	0.37
MT20-3	緑	0	0	0.03	0.55	0	0.20	0.35	0.01	0	0	0.38	0	0.48	0	0.05	0.01	0.20
MT21-1	桃	0	0	0.04	1.20	0	0.05	0.81	0.01	0	0	0.03	0	0.01	0	0	0.30	0.35
MT21-2	緑	0	0	0.06	1.03	0	0.10	0.45	0.02	0	0	0.05	0	0.79	0.01	0.07	0	0.26
MT21-3	紺	0	0	0.08	1.67	0	0.23	0.57	0.01	0	0.02	0.04	0.47	0.03	0	0.08	0.03	0.35
MT21-4	白	0	0	0.05	1.01	0	0.08	0.69	0.01	0	0	0.10	0	0.01	0	0	0.18	0.34
MT22-1	無地青緑	0	0	0.04	1.00	0	0.13	0.66	0.01	0	0	0.01	0	0.52	1.43	0.08	0	0.33
MT23-1	ﾏｰﾌﾞﾙ黒	0	0	0.07	1.61	0	0.21	0.66	0.01	0.11	0	0.85	0.1	0.22	0	0	0.08	0.34
MT23-2	青緑	0	0	0.04	0.90	0	0.15	0.37	0.01	0.01	0	0.1	0.03	0.19	0	0	0.01	0.22
MT24-1	青緑？	0	0	0.03	0.90	0	0.16	0.32	0.01	0	0	0.02	0.06	1.15	0.01	0.11	0.02	0.39
MT25-1	桃	0	0	0.04	0.98	0	0.23	0.64	0.01	0	0	0.01	0	0	0	0	0.23	0.37
MT25-2	緑	0	0	0.05	0.76	0	0.17	0.39	0.01	0	0	0.02	0	1.1	0	0.07	0.01	0.25
MT25-3	浅黄	0	0	0.04	1.09	0	0.27	0.57	0.01	0	0	0.45	0	0.01	0	0	0.04	0.41
MT26-1	茶	0	0	0.03	0.65	0	0.07	0.03	0.01	0	0.13	0.02	0	0	0	0.09	0	0.33
MT26-2	黄	0	0	0.03	0.71	0	0.07	0.02	0.01	0	0	0	0	0	0	0.08	0	0.34
MT26-3	緑	0	0	0.02	0.46	0	0.04	0.02	0.01	0	0	0.02	0	0.83	0	0.09	0	0.33
MT26-4	白	0	0	0.03	1.25	0	0.10	0.01	0.01	0	0	0.01	0	0	0	0.12	0.02	0.45

（第1次分析結果：検出強度cps/μA値）

第11表　釉薬および呈色材料の蛍光X線分析結果(B)　陶器類

No.	color	Na/Si	Mg/Si	Al/Si	S/Si	K/Si	Ca/Si	Ti/Si	Cr/Si	Mn/Si	Fe/Si	Co/Si	Cu/Si	Zn/Si	As/Si	Sn/Si	Pb/Si
1-1-1	黄	0	0	0.12	0	0.07	0.24	0	0	0	0.04	0	0	0	0	0.07	0.14
1-1-2	黄	0	0	0.06	0	0.06	0.30	0	0	0	0.05	0	0	0	0	0.08	0.16
1-2-1	黄	0	0	0.10	0	0.08	0.01	0.01	0	0	0.27	0	0	0	0.07	0.01	0.23
1-3-1	黄	0	0	0.06	0	0.12	0.05	0.05	0	0	0.67	0	0	0	0.18	0.01	0.68
2-1-1	緑	0	0	0.06	0	0.03	0.06	0	0	0	0.01	0	0.74	0	0	0	0.29

2-2-1	緑	0	0	0.08	0	0.03	0.05	0	0	0	0.02	0	0.45	0.01	0	0	0.18
2-3-1	緑	0	0	0.05	0	0.04	0.02	0	0	0	0.00	0	0.79	0	0	0	0.32
3-1W1	白	0	0	0.04	0	0.15	0.03	0	0	0	0.03	0	0.01	0	0.18	0.02	0.62
3-1W2	白	0	0	0.04	0	0.14	0.05	0.01	0	0	0.01	0	0.01	0	0.19	0.01	0.64
3-1G1	緑	0	0	0.05	0	0.15	0.07	0.01	0	0	0.04	0	0.76	0	0.16	0.01	0.57
3-1G2	緑	0	0	0.05	0	0.17	0.08	0.01	0	0	0.04	0	1.50	0	0	0	0.59
3-1Y1	黄	0	0	0.09	0	0.24	0.01	0.04	0	0.01	0.27	0	0.01	0	0.12	0.04	0.48
3-1Y2	黄	0	0	0.07	0	0.15	0.04	0.03	0	0.01	0.51	0	0.01	0	0.22	0.01	0.75
3-1P1	紫	0	0	0.06	0	0.19	0.06	0.02	0	0.26	0.04	0	0.04	0	0.15	0.03	0.52
3-1P2	紫	0	0	0.05	0	0.17	0.07	0.02	0	0.20	0.04	0	0.03	0	0.16	0.04	0.54
4-1-1	白	0	0	0.05	0	0.09	0.08	0	0	0	0.01	0	0	0	0	0.03	0.05
4-1-2	白	0	0	0.05	0	0.08	0.07	0	0	0	0.01	0	0	0	0	0.03	0.04
4-2-1	白	0	0	0.08	0	0.09	0.10	0	0	0	0.01	0	0	0	0.02	0.03	0.06
4-2-2	白	0	0	0.08	0	0.10	0.10	0.01	0	0	0.01	0	0	0	0.02	0.02	0.06
4-3-1	白	0	0	0.06	0	0.09	0.11	0	0	0	0.01	0	0	0	0	0.03	0.06
4-3-2	白	0	0	0.05	0	0.10	0.09	0	0	0	0.01	0	0	0	0	0.03	0.05
5-1-1	ﾋﾟﾝｸ	0	0	0.07	0	0.06	0.19	0	0	0	0.01	0	0	0.01	0	0.09	0.13
5-1-2	ﾋﾟﾝｸ	0	0	0.07	0	0.07	0.21	0	0	0	0.01	0	0	0.01	0.03	0.10	0.12
5-2-1	ﾋﾟﾝｸ	0	0	0.04	0	0.08	0.21	0	0	0	0.01	0	0	0.01	0	0.12	0.14
5-2-2	ﾋﾟﾝｸ	0	0	0.04	0	0.07	0.21	0	0	0	0.01	0	0	0	0.03	0.11	0.14
5-3-1	ﾋﾟﾝｸ	0	0	0.04	0	0.08	2.30	0.01	0	0	0.01	0	0	0	0.06	0.01	0.21
6-1-1	青	0	0	0.05	0	0.10	0.05	0	0	0	0.01	0.03	0.12	0	0.07	0.01	0.25
6-1-2	青	0	0	0.05	0	0.08	0.05	0	0	0	0.01	0.03	0.09	0	0.07	0.01	0.24
6-1-3	青	0	0	0.06	0	0.08	0.04	0	0	0	0.01	0.02	0.07	0	0.06	0.01	0.24
6-2-1	青	0	0	0.08	0	0.07	0.11	0	0	0	0.01	0.02	0.07	0	0.03	0.01	0.08
6-3-1	青	0	0	0.04	0	0.07	0.04	0	0	0	0.01	0.02	0.09	0	0.06	0.01	0.24
7-1-1	紫	0	0	0.07	0	0.00	0.16	0.01	0	0	0.01	0	0	0	0.04	0.20	0.14
7-1-2	紫	0	0	0.07	0	0.02	0.17	0.01	0	0	0.01	0	0	0	0.04	0.21	0.14
7-1-3	紫	0	0	0.09	0	0.05	0.12	0.01	0	0	0.01	0	0	0	0	0.16	0.13
7-2-1	紫	0	0.01	0.08	0	0	0.22	0	0	0.01	0.02	0	0	0	0.03	0.18	0.09
7-3-1	紫	0	0	0.10	0	0.05	0.33	0	0	0	0	0	0	0	0	0.14	0.11
8-1-1	黄	0	0	0.10	0	0.04	0.01	0.01	0	0	0.24	0	0	0	0.07	0	0.22
8-1-2	黄	0	0	0.09	0	0.04	0.01	0.01	0	0.01	0.24	0	0	0	0.07	0	0.25
8-1-3	黄	0	0	0.09	0	0.05	0.01	0.02	0	0.01	0.28	0	0	0	0.07	0	0.25
8-2-1	黄	0	0	0.11	0	0.07	0.01	0.01	0	0	0.27	0	0	0	0.08	0.01	0.25
8-2-2	黄	0	0	0.11	0	0.08	0.02	0.02	0	0	0.26	0	0	0	0.07	0.01	0.23
8-3-1	黄	0	0	0.09	0	0.06	0.01	0.02	0	0.01	0.27	0	0.03	0	0.07	0.01	0.26
8-3-2	黄	0	0	0.10	0	0.07	0.01	0.02	0	0	0.28	0	0.02	0	0	0.01	0.29
8-3-3	黄	0	0	0.10	0	0.07	0.01	0.02	0	0	0.28	0	0.04	0	0.08	0	0.26
9-1-1	緑	0	0	0.05	0	0.04	0.04	0	0	0	0.01	0	0.23	0	0.07	0	0.11
9-1-2	緑	0	0	0.04	0	0.03	0.04	0	0	0	0.01	0	0.25	0	0	0	0.11
9-2-1	緑	0	0	0.07	0	0.06	0.03	0	0	0	0.01	0	0.81	0	0	0.01	0.31
9-3-1	緑	0	0	0.06	0	0.02	0.04	0	0	0	0.01	0	0.40	0	0	0	0.20
9-3-2	緑	0	0	0.08	0	0.03	0.07	0.01	0	0	0.01	0	0.28	0	0.04	0	0.14
10-1G1	緑	0	0	0.04	0	0.09	0.11	0.02	0	0	0.05	0	1.25	0	0.14	0	0.45
10-1G2	緑	0	0	0.04	0	0.16	0.10	0.02	0	0	0.06	0	1.40	0.01	0.14	0.01	0.53
10-1P1	紫	0	0.01	0.06	0	0.13	0.02	0.02	0	0.20	0.04	0	0.05	0	0.19	0.03	0.62
10-1P2	紫	0	0	0.04	0	0.15	0.05	0.02	0	0.23	0.03	0	0.04	0	0.17	0.02	0.60
10-1Y1	黄	0.01	0	0	0	0.13	0.03	0.03	0	0.02	0.74	0	0.01	0	0.24	0.01	0.79
10-1Y2	黄	0	0	0.10	0	0.11	0.04	0.04	0	0.01	0.51	0	0.03	0	0	0.01	0.60
11-1-1	ﾚﾓﾝ	0	0	0.03	0	0.03	0.01	0	0	0	0.01	0	0	0	0.07	0.00	0.23
11-2-1	ﾚﾓﾝ	0	0	0.10	0	0.06	0.01	0.01	0.01	0	0.01	0	0	0	0	0.01	0.23
11-3-1	ﾚﾓﾝ	0	0	0.05	0	0.07	0.00	0	0	0	0.01	0	0	0	0.06	0.02	0.24
12-1-1	黄	0	0	0.10	0	0.06	0.01	0.02	0	0	0.28	0	0	0	0	0	0.27
12-1-2	黄	0	0	0.09	0	0.06	0.01	0.01	0	0.01	0.31	0	0	0	0	0	0.27
12-2-1	黄	0	0	0.11	0	0.06	0.01	0.02	0	0.01	0.28	0	0	0	0.07	0	0.21
12-3-1	黄	0	0	0.11	0	0.05	0.02	0.02	0	0.01	0.26	0	0	0	0	0.01	0.25
13-1-1	緑	0	0	0.10	0	0.06	0.08	0	0	0	0	0	0.33	0	0	0.01	0.16
13-1-2	緑	0	0	0.14	0	0.05	0.05	0	0	0	0	0	0.50	0	0	0	0.20
13-2-1	緑	0	0	0.05	0	0.02	0.03	0	0	0	0	0	0.60	0	0.14	0	0.23
13-2-2	緑	0	0	0.06	0	0.02	0.04	0	0	0	0.01	0	0.47	0	0	0	0.20
13-3-1	緑	0	0	0.03	0	0.03	0.16	0	0	0	0.01	0	0.74	0	0	0	0.29
13-3-2	緑	0	0	0.02	0	0.01	0.42	0	0	0	0.01	0	0.73	0	0	0	0.34
14-1G1	緑	0	0	0.04	0	0.14	0.06	0.02	0	0	0.06	0	1.23	0	0	0.01	0.63
14-1P1	紫	0	0	0.05	0	0.06	0.02	0	0	0.12	0	0	0.01	0	0.06	0	0.26
14-1W1	白	0	0	0.02	0	0.05	0.02	0.01	0	0	0.02	0	0.01	0	0.11	0	0.41
14-1Y1	黄	0	0	0.05	0	0.11	0.04	0.06	0	0.03	0.67	0	0.02	0	0.21	0.01	0.82
15-1-1	ﾚﾓﾝ	0	0	0.02	0	0.03	0.01	0	0	0	0.01	0	0	0	0	0	0.22
15-2-1	ﾚﾓﾝ	0	0	0.03	0	0.03	0.01	0	0.01	0	0.01	0	0	0	0.06	0	0.19
15-2-2	ﾚﾓﾝ	0	0	0.04	0	0.04	0.01	0	0	0	0.02	0	0	0	0.05	0	0.19
15-3-1	ﾚﾓﾝ	0	0	0.03	0	0.02	0.01	0	0	0	0.01	0	0	0	0	0	0.22
15-3-2	ﾚﾓﾝ	0	0	0.07	0	0.04	0	0	0	0	0.02	0	0.01	0	0.06	0	0.11
16-1-1	黄	0	0	0.10	0	0.05	0.01	0.01	0	0.01	0.28	0	0	0	0.08	0	0.26
16-1-2	黄	0	0	0.10	0	0.05	0.01	0.02	0	0.01	0.28	0	0	0	0	0	0.28
16-1-3	黄	0	0	0.10	0	0.05	0.01	0.01	0	0.01	0.26	0	0	0	0	0	0.28

16-2-1	黄	0	0	0.12	0	0.07	0.02	0.02	0	0.01	0.29	0	0	0	0	0.01	0.23
16-2-2	黄	0	0	0.13	0	0.08	0.01	0.02	0	0	0.31	0	0.02	0	0.06	0.01	0.22
16-3-1	黄	0	0	0.10	0	0.05	0.01	0.02	0	0	0.28	0	0	0	0	0.01	0.29
17-1-1	緑	0	0	0.04	0	0.02	0.02	0	0	0	0.01	0	0.47	0	0	0	0.19
17-2-1	緑	0	0	0.09	0	0.06	0.07	0	0	0	0.01	0	0.31	0	0	0.01	0.14
17-3-1	緑	0	0	0.08	0	0.05	0.04	0.01	0	0	0.02	0	0.44	0	0	0	0.16
18-1G1	緑	0	0	0.03	0	0.08	0.05	0.01	0	0	0.02	0	0.90	0	0.12	0	0.41
18-1P1	紫	0	0	0.01	0	0.01	0.04	0.01	0	0.51	0	0	0.01	0	0.25	0	0.78
18-1W1	白	0	0	0.03	0	0.06	0.03	0.01	0	0	0.03	0	0.02	0	0.19	0.01	0.61
18-1Y1	黄	0	0	0.07	0	0.12	0.04	0.05	0	0.01	0.62	0	0.01	0	0.24	0.01	0.69
19-1-1	黄	0	0	0.09	0	0.04	0.02	0.01	0	0	0.16	0	0	0	0.04	0.01	0.14
19-1-2	黄	0	0	0.09	0	0.06	0.01	0.02	0	0.01	0.24	0	0	0	0.06	0.01	0.23
19-2-1	黄	0	0	0.10	0	0.04	0.01	0.02	0	0	0.25	0	0	0	0.08	0	0.27
19-3-1	黄	0	0	0.09	0	0.05	0.01	0.02	0	0.01	0.26	0	0	0	0.07	0	0.28
19-3-2	黄	0	0	0.10	0	0.05	0.01	0.02	0	0	0.26	0	0	0	0	0	0.30
20-1-1	緑	0	0	0.04	0	0.03	0.01	0.01	0	0	0.02	0	0.67	0	0	0	0.28
20-2-1	緑	0	0	0.03	0	0.01	0.02	0	0	0	0.01	0	0.40	0	0	0	0.21
20-3-1	緑	0	0	0.03	0	0.01	0.01	0	0	0	0.01	0	0.73	0	0	0	0.32
21-1Y1	黄	0	0	0.09	0	0.07	0.06	0.04	0	0.02	0.55	0	0.01	0	0.22	0.01	0.77
21-1W1	白	0	0	0.02	0	0.04	0.02	0.01	0	0	0.01	0	0.01	0	0.19	0.01	0.61
21-1P1	紫	0	0	0.03	0	0.06	0.03	0.03	0	0.14	0.19	0	0.02	0	0.23	0.01	0.80
21-1G1	緑	0	0	0.02	0	0.01	0.05	0.02	0	0	0.05	0	1.68	0	0	0.01	0.83
22-1-1	ﾚﾓﾝ	0	0	0.03	0	0.02	0.01	0	0	0	0.01	0	0	0	0.06	0	0.21
22-2-1	ﾚﾓﾝ	0	0	0.03	0	0.02	0.01	0	0	0	0.00	0	0	0	0.06	0	0.15
22-3-1	ﾚﾓﾝ	0	0	0.03	0	0.03	0.01	0	0	0	0.01	0	0	0	0	0	0.24
23-1-1	黄	0	0	0.10	0	0.06	0.01	0.02	0	0	0.27	0	0	0	0.06	0.01	0.23
23-2-1	黄	0	0	0.10	0	0.06	0.01	0.02	0	0	0.27	0	0	0	0.07	0	0.24
23-3-1	黄	0	0	0.11	0	0.06	0.01	0.02	0	0	0.27	0	0.01	0	0.08	0	0.24
24-1-1	緑	0	0	0.04	0	0.03	0.02	0	0	0	0.01	0	0.70	0	0	0	0.28
24-1-2	緑	0	0	0.04	0	0.02	0.02	0	0	0	0.01	0	0.69	0	0.08	0	0.26
24-2-1	緑	0	0	0.03	0	0.02	0.02	0	0	0	0.01	0	0.71	0	0	0	0.30
24-3-1	緑	0	0	0.04	0	0.01	0.04	0	0	0	0.00	0	0.15	0	0.02	0	0.07
24-3-2	緑	0	0	0.03	0	0.02	0.03	0	0	0	0.00	0	0.20	0	0.03	0	0.10
25-1Y1	黄	0	0	0.05	0	0.08	0.03	0.04	0	0.02	0.68	0	0.01	0	0.24	0.01	0.81
25-1W1	白	0	0	0.03	0	0.04	0.02	0.01	0.01	0	0.01	0	0.01	0	0.15	0	0.55
25-1P1	紫	0	0	0.05	0	0.04	0.04	0.02	0	0.49	0.19	0	0.01	0	0.21	0.01	0.75
25-1G1	緑	0	0	0.06	0	0.05	0.06	0.02	0	0	0.07	0	1.67	0	0	0.01	0.75
26-1-1	ﾚﾓﾝ	0	0	0.03	0	0.03	0.01	0	0	0	0.01	0	0	0	0	0	0.24
26-2-1	ﾚﾓﾝ	0	0	0.02	0	0.02	0.01	0	0.01	0	0.01	0	0	0	0.06	0	0.20
27-1-1	黄	0	0.01	0.10	0	0.05	0.01	0.02	0	0	0.30	0	0	0	0	0	0.26
27-2-1	黄	0	0	0.11	0	0.06	0.01	0.02	0	0	0.24	0	0	0	0.06	0.01	0.23
28-1-1	緑	0	0	0.03	0	0.03	0.01	0.00	0	0	0.01	0	0.58	0	0	0	0.28
28-2-1	緑	0	0	0.07	0	0.02	0.00	0	0	0	0.01	0	0.47	0	0	0	0.24
28-3-1	緑	0	0	0.04	0	0.02	0.01	0	0	0	0.01	0	0.60	0	0	0	0.26
29-1G1	緑	0	0	0.07	0	0.12	0.04	0.02	0	0	0.07	0	1.25	0	0.16	0	0.52
29-1Y1	黄	0	0	0.06	0	0.08	0.04	0.05	0	0.02	0.70	0	0.01	0	0.26	0.01	0.83
29-1W1	白	0	0	0.02	0	0.05	0.04	0.01	0	0	0.03	0	0.01	0	0.18	0.01	0.57
29-1P1	紫	0	0	0.03	0	0.03	0.04	0.01	0	0.25	0	0	0.02	0	0.23	0	0.72
30-1-1	ﾚﾓﾝ	0	0	0.03	0	0.03	0.01	0	0.01	0	0.18	0	0	0	0.06	0	0.20
30-2-1	ﾚﾓﾝ	0	0	0.03	0	0.02	0.01	0	0.01	0	0.01	0	0	0	0.07	0	0.24
30-3-1	ﾚﾓﾝ	0	0	0.02	0	0.02	0.01	0	0.01	0	0	0	0	0	0.06	0	0.20
31	素焼き	0	0	0.02	0	0.02	0.08	0.03	0.03	0.03	0.11	0	0	0	0	0.11	0.90
32	素焼き	0	0.01	0.07	0	0.36	0.05	0.02	0.02	0	0.02	0.01	0	0	0.11	0.15	0.38
33	素焼き	0	0	0.03	0	0.16	0.03	0.01	0.02	0	0.03	0	0	0	0.10	0.06	0.39

（修正値分析結果：元素/Si検出強度値）

第12表　釉薬および呈色材料の蛍光X線分析結果(B)　淡陶社タイル

No.	Na/Si	Mg/Si	Ai/Si	S/Si	K/Si	Ca/Si	Ti/Si	Cr/Si	Mn/Si	Fe/Si	Co/Si	Cu/Si	Zn/Si	As/Si	Sn/Si	Pb/SI
MT1-1	0	0	0.03	0	0.18	0.02	0	0	0	0.02	0	0.01	0	0.13	0.04	0.54
MT1-2	0	0	0.04	0	0.13	0.16	0.01	0	0	0.05	0.02	0.80	0	0.12	0.01	0.47
MT1-3	0	0	0.08	0	0.26	0.05	0.03	0	0.01	0.57	0	0.02	0	0.15	0.03	0.53
MT1-4	0	0	0.03	0	0.16	0.06	0.01	0	0	0.02	0.37	0	0	0.13	0.03	0.46
MT2-1	0	0	0.05	0	0.08	0.03	0.01	0	0.43	0	0.05	0.01	0	0.14	0	0.51
MT2-1	0	0	0.03	0	0.06	0.02	0.01	0	0	0.04	0	0	0	0.11	0	0.40
MT2-1	0	0	0.04	0	0.09	0.03	0.02	0	0	0.06	0.20	0	0	0.09	0.01	0.34
MT2-1	0	0	0.05	0	0.09	0.23	0.01	0	0.01	0.02	0.03	1.33	0	0.16	0.01	0.56
MT2-1	0	0	0.02	0	0.17	0.02	0.01	0	0	0.01	0	0	0	0.12	0.02	0.44
MT3-1	0	0	0.05	0	0.15	0.03	0.03	0	0	0.03	0.36	0	0	0	0.02	0.49
MT3-2	0	0	0.08	0	0.14	0.03	0.04	0	0.01	0.52	0	0	0	0.13	0.01	0.46
MT3-3	0	0	0.03	0	0.16	0.02	0	0	0	0.02	0	0.01	0	0.14	0.03	0.50
MT3-4	0	0	0.06	0	0.06	0.17	0.01	0	0	0.02	0.02	1.61	0	0.17	0.01	0.56
MT4-1	0	0	0.04	0	0.15	0.05	0.02	0	0.01	0.32	0	0.55	0	0.22	0.01	0.75
MT5-1	0	0	0.07	0	0.12	0.07	0.01	0	0	0.03	0	0.01	0	0.16	0.01	0.55
MT5-2	0	0	0.05	0	0.08	0.05	0.01	0	0	0.03	0	0.85	0	0.20	0.01	0.65

MT6-1	0	0	0.04	0	0.07	0.08	0.01	0	0	0.02	0	0.27	0	0.13	0	0.48
MT6-2	0	0	0.03	0	0.09	0.04	0.01	0	0.51	0	0.02	0	0	0.18	0.01	0.58
MT6-3	0.01	0	0.04	0	0.08	0.04	0.01	0	0	0.02	0	0	0	0.17	0.01	0.63
MT6-4	0	0	0.04	0	0.06	0.14	0.02	0	0	0.02	0	1.50	0.01	0	0.01	0.59
MT6-5	0	0	0.03	0	0.07	0.04	0	0	0	0.02	0	0.01	0	0.16	0.01	0.63
MT8-1	0	0	0.04	0	0.18	0.03	0	0	0	0.02	0.06	0.22	0	0.15	0.01	0.63
MT9-1	0	0	0.04	0	0.22	0.66	0.01	0.01	0	0.02	0	0	0	0	0.29	0.27
MT9-2	0	0	0.04	0	0.18	0.03	0	0	0	0.01	0	0	0	0.13	0.05	0.48
MT9-3	0	0	0.03	0	0.06	0.21	0.01	0	0	0.03	0.03	1.26	0	0.14	0	0.49
MT9-4	0	0	0.04	0	0.19	0	0.01	0	0	0.02	0.01	0.02	0	0	0.62	0.28
MT10-1	0	0	0.06	0	0.16	0.05	0.01	0	0	0.02	0	0	0	0.08	0.04	0.31
MT10-2	0	0	0.07	0	0.09	0.18	0.01	0	0	0.03	0.01	1.21	0	0.17	0.01	0.57
MT10-3	0	0	0.09	0	0.12	0.04	0.03	0	0.01	0.65	0	0.01	0	0.18	0.01	0.54
MT10-4	0	0	0.04	0	0.14	0.05	0.01	0	0	0.02	0.26	0	0	0.11	0.02	0.42
MT11-1	0	0	0.04	0	0.12	0.05	0.01	0	0	0.03	0.36	0	0	0.16	0.01	0.54
MT11-2	0	0	0.04	0	0.14	0.03	0.01	0	0.01	0.01	0	0.01	0	0	0.03	0.51
MT11-3	0	0	0.16	0	0.26	0.12	0.05	0	0	0.43	0	0	0	0	0.06	0.35
MT11-4	0	0	0.06	0	0.09	0.19	0.01	0	0	0.03	0	0.89	0	0.14	0.01	0.55
MT12-1	0	0	0.04	0	0.12	0.05	0.01	0	0	0.26	0	0.49	0	0.19	0.01	0.70
MT13-1	0	0	0.03	0	0.16	0.01	0.01	0	0	0.02	0.05	0.11	0	0.09	0.04	0.37
MT14-1	0	0	0.05	0	0.18	0.65	0.01	0	0	0.09	0	0.01	0	0	0.37	0.32
MT14-2	0	0	0.07	0	0.05	0.26	0.01	0	0	0.03	0.01	1.62	0	0.17	0.09	0.64
MT14-3	0	0	0.05	0	0.16	0.05	0.01	0	0	0.01	0	0.03	0	0	0.02	0.48
MT14-4	0	0	0.05	0	0.09	0.03	0	0	0	0.02	0.07	0.19	0	0.13	0.01	0.55
MT15-1	0	0	0.04	0	0.09	0.17	0.02	0	0	0.02	0	0.73	0	0.13	0.01	0.51
MT15-2	0	0	0.06	0	0.21	0.03	0.01	0	0	0.04	0	0.01	0	0.10	0.05	0.44
MT15-3	0	0	0.05	0	0.17	0.25	0.01	0	0	0.02	0.01	0	0	0	0.17	0.36
MT16-1	0	0	0.03	0	0.23	0.30	0.01	0	0	0.02	0	0.60	0	0.06	0.04	0.28
MT17-1	0	0	0.05	0	0.20	0.26	0.01	0	0	0.04	0	0	0	0	0.03	0.25
MT17-2	0	0	0.04	0	0.21	0.28	0.02	0	0	0.03	0	0.36	0	0	0.04	0.27
MT17-3	0	0	0.06	0	0.18	0.39	0.02	0	0	0.04	0	0.95	0.02	0	0.06	0.22
MT18-1	0	0	0.04	0	0.31	0.23	0.01	0	0	0.02	0	0	0	0	0.07	0.39
MT18-2	0	0	0.05	0	0.27	0.65	0.01	0	0	0.02	0	0.74	0.01	0.10	0.04	0.35
MT18-3	0	0	0.04	0	0.32	0.48	0.01	0	0	0.01	0	0	0	0	0.05	0.30
MT18-4	0	0	0.04	0	0.21	0.72	0.01	0	0	0.04	0	2.33	0.02	0.09	0.03	0.36
MT18-5	0	0	0.04	0	0.29	0.47	0.01	0	0	0.31	0	0	0	0.06	0.05	0.28
MT19-1	0	0	0.04	0	0.26	0.47	0.01	0	0	0.02	0	0.47	0	0.07	0.04	0.27
MT19-2	0	0	0.05	0	0.28	0.46	0.01	0	0	0.39	0	0.02	0	0	0.04	0.27
MT19-3	0	0	0.04	0	0.24	0.71	0.01	0	0	0.02	0	0	0	0.08	0.29	0.29
MT19-4	0	0	0.07	0	0.20	0.60	0.01	0	0.01	0.03	0	1.72	0	0.08	0.01	0.29
MT20-1	0	0	0.05	0	0.23	0.82	0.02	0	0	0.01	0	0.01	0	0	0.42	0.31
MT20-2	0	0	0.04	0	0.04	0.53	0.01	0	0	0.02	0	0.05	0	0.09	0.06	0.32
MT20-3	0	0	0.05	0	0.35	0.63	0.01	0	0	0.68	0	0.87	0	0.09	0.02	0.35
MT21-1	0	0	0.03	0	0.04	0.67	0.01	0	0	0.02	0	0	0	0	0.25	0.29
MT21-2	0	0	0.06	0	0.10	0.44	0.02	0	0	0.05	0	0.77	0.01	0.07	0	0.25
MT21-3	0	0	0.05	0	0.14	0.34	0	0	0.01	0.03	0.28	0.01	0	0.05	0.02	0.21
MT21-4	0	0	0.04	0	0.08	0.68	0.01	0	0	0.10	0	0.01	0	0	0.18	0.33
MT22-1	0	0	0.04	0	0.13	0.66	0.01	0	0	0.01	0	0.52	1.42	0.08	0	0.33
MT23-1	0	0	0.04	0	0.13	0.41	0.01	0.07	0	0.53	0.06	0.14	0	0	0.04	0.21
MT23-2	0	0	0.05	0	0.17	0.41	0.01	0.01	0	0.11	0.03	0.21	0	0	0.01	0.25
MT24-1	0	0	0.03	0	0.18	0.36	0.02	0	0	0.03	0.06	1.27	0.01	0.12	0.02	0.44
MT25-1	0	0	0.04	0	0.23	0.65	0.01	0	0	0.01	0	0	0	0	0.24	0.38
MT25-2	0	0	0.06	0	0.22	0.51	0.01	0	0	0.02	0	1.45	0	0.09	0.01	0.33
MT25-3	0	0	0.04	0	0.25	0.52	0.01	0	0	0.41	0	0.01	0	0	0.03	0.37
MT26-1	0	0	0.05	0	0.11	0.04	0.01	0	0.20	0.03	0	0	0	0.14	0	0.51
MT26-2	0	0	0.04	0	0.10	0.02	0.01	0.01	0	0.01	0	0	0	0.11	0	0.47
MT26-3	0	0	0.04	0	0.08	0.04	0.02	0	0	0.04	0	1.71	0	0.18	0.01	0.68
MT26-4	0	0	0.03	0	0.08	0.01	0.01	0	0	0.01	0	0	0	0.09	0.02	0.36

（修正値分析結果：元素/Si検出強度値）

第13表　釉薬および呈色材料の蛍光X線分析結果(C)　陶器類

No.	Na/Si	Mg/Si	Ai/Si	S/Si	K/Si	Ca/Si	Ti/Si	Cr/Si	Mn/Si	Fe/Si	Co/Si	Cu/Si	Zn/Si	As/Si	Sn/Si	Pb/SI
白	0	0	0.06	0	0.08	0.03	0	0	0	0.01	0	0	0	0.01	0.03	0.05
白三彩	0	0	0.03	0	0.09	0.09	0.01	0	0	0.02	0	0.01	0	0.17	0.01	0.57
黄1	0	0	0.09	0	0.07	0.27	0	0	0	0.05	0	0	0	0	0.08	0.15
黄2	0	0	0.10	0	0.06	0.01	0.02	0	0	0.28	0	0	0	0.05	0.01	0.26
黄三彩	0	0	0.05	0	0.03	0.05	0.04	0	0.02	0.60	0	0.01	0	0.19	0.01	0.73
緑	0	0	0.04	0	0.11	0.07	0	0	0	0.01	0	0.55	0	0.01	0	0.22
緑三彩	0	0	0.04	0	0.11	0.07	0.02	0	0	0.05	0	1.29	0	0.07	0.01	0.59
紫	0	0	0.08	0	0.02	0.22	0.01	0	0	0.01	0	0	0	0.02	0.18	0.12
紫三彩	0	0	0.04	0	0.09	0.04	0.02	0	0.27	0.06	0	0.03	0	0.18	0.02	0.62
青	0	0	0.06	0	0.08	0.06	0	0	0	0.01	0.02	0.09	0	0.06	0.01	0.21
ﾚﾓﾝ	0	0	0.04	0	0.03	0.01	0	0	0	0.02	0	0	0	0.04	0	0.21
ﾋﾟﾝｸ	0	0	0.05	0	0.07	0.21	0	0	0	0.01	0	0	0	0.02	0.10	0.15

（色調別分析結果：算出（修正）値の平均値）

第14表　釉薬および呈色材料の蛍光X線分析結果(C)　淡陶社タイル

No.	Na/Si	Mg/Si	Ai/Si	S/Si	K/Si	Ca/Si	Ti/Si	Cr/Si	Mn/Si	Fe/Si	Co/Si	Cu/Si	Zn/Si	As/Si	Sn/Si	Pb/SI
白	0	0	0.04	0	0.15	0.14	0.01	0	0	0.03	0	0.01	0	0.08	0.04	0.43
緑	0	0	0.05	0	0.13	0.32	0.01	0	0	0.07	0.01	1.15	0	0.11	0.02	0.47
青緑	0	0	0.04	0	0.18	0.48	0.01	0	0	0.04	0.01	0.47	0.06	0.07	0.03	0.32
草色	0	0	0.04	0	0.14	0.05	0.02	0	0.01	0.29	0	0.52	0	0.21	0.01	0.73
ﾗｲﾑ	0	0	0.04	0	0.13	0.14	0.01	0	0	0.02	0	0.57	0	0.13	0.02	0.47
橙	0	0	0.10	0	0.20	0.06	0.04	0	0.01	0.54	0	0.01	0	0.12	0.03	0.47
紺	0	0	0.04	0	0.13	0.09	0.01	0	0	0.03	0.31	0	0	0.09	0.02	0.41
紫	0	0	0.05	0	0.18	0.13	0.01	0	0	0.02	0.01	0.01	0	0	0.40	0.32
藍	0	0	0.04	0	0.14	0.02	0	0	0	0.02	0.06	0.17	0	0.12	0.02	0.52
黒	0	0	0.05	0	0.11	0.22	0.01	0.04	0.22	0.27	0.06	0.08	0	0.07	0.02	0.36
黄	0	0	0.03	0	0.16	0.08	0.01	0	0	0.02	0	0	0	0.10	0.03	0.48
乳黄　浅黄	0	0	0.04	0	0.27	0.48	0.01	0	0	0.37	0	0.01	0	0.02	0.04	0.31
茶	0	0	0.04	0	0.10	0.04	0.01	0	0.36	0.02	0.01	0	0	0.16	0.01	0.55
朱	0	0	0.04	0	0.22	0.66	0.01	0.01	0	0.02	0	0	0	0	0.29	0.27
桃	0	0	0.05	0	0.18	0.68	0.01	0	0	0.03	0	0.15	0	0.02	0.26	0.32

（色調別分析結果：算出（修正）値の平均値）

第15表　『釉薬沿革報告書』からみた釉薬および呈色材料一覧

	唐土	日ノ岡石	玉石（粉）	薬石	珪石	長石	石灰石	天草石	白弱掛加減	青天掛加減	白玉	三歩土	クレー	鉛母	鉛製硝子	焼貫コバルト	酸化コバルト	マンガン紫呉須	紫玉	クロム酸塩	重クロム酸カリ	酸化クロム	酸化錫	ハケ	舶来　第一号海碧	浅黄種	黄土	二十五号赤色種	三十五号赤色種	六十九号葦種	五十二号緑色	卜四号黒
水色釉	○	○	○																						○							
水色釉(改)	○	○	○													○								○								
水色ツヨ(強)	○	○	○													○								○								
瑠璃色	○	○	○													○	○															
掛ヶ紫色	○	○	○													○		○														
草色	○	○	○																	○				○								
淡薄青色		○	○						○	○																○						
青色(天天印)	○	○	○																					○								
紫色(強)	○	○	○								○							○	○													
亀甲用青色(天強印)	○				○	○	○					○												○								
極上用紫色天	○				○	○	○				○	○						※1														
黄南京弱薬	○				○	○																					○					
黄南京薬強	○				○	○																					○					
青弱薬	○				○	○																		○								
淡黄薬	○				○	○														○	○											
白薬(弱)	○				○	○																										
白薬(強)	○				○	○																										
九号白薬	○	○	○								○																					
生地画用白薬	○	○					※2	○			○																					
四十三号生地画白薬	○	○									○	○	○																			
四十三号	○	○									○	○																				
十号生地画白薬	○	○				○	○					○																				
八号別コ　無色釉	○	○				○					○	○																				
八号第三　無色釉	○	○				○	○				○	○																				
白艶消シ釉	○							○				○																				
焼き〆用白釉	○			○			○																									
焼き〆用白釉(強)	○			○			○																									
磁器用模造白釉			○	○			○					○																				
磁器用青磁釉			○	○			○					○										○										
磁器用瑠璃色			○	○			○					○					○															
焼き〆窯用朱辰砂釉	○			○			※3				○									○	○		○									
辰砂色釉(赤葡萄色)	○	○		○			○				○	○																○				
葦紫色(強)	○	○		○							○	○																		○		
葦紫色(弱)	○	○		○							○	○																		○		
三号藍緑色釉	○	○					○				○																				○	
五十四号藍緑色	○				○	○					○	○																			○	
五十二辰砂釉(強)	○	○		○			○					○																○				
ち一号赤色(色絵花用)	○			○	○		○				○	○																	○			
花淡黄色(生地画用)	○	○				○						○								○	○											
浅黄色釉			○								○													○								
黒色	○				○	○																										○
黒艶消銀砂色		○						○					○	○	○		○							※4								
流画用強紫	○	○									○	○						※5														

※1 能登呉須。　※2･3 炭酸石灰。　※4 ○(焼き返し)。　※5 ○+能登呉須。

釉下色料製法

	唐土	日ノ岡石	食塩	上白絵	珪石	長石	石灰石	天草石	瀬戸蛙目	硝石	白玉	三歩土	クレー	鉛丹	吐酒石	焼貫コバルト	酸化コバルト	マンガン（紫呉須）	硫黄花	クロム酸塩	重クロム酸カリ	酸化クロム	酸化錫	ハケ	酸化亜鉛	硼酸	結晶ソーダ	赤酸化鉄	蜜陀僧	酸化ニッケル	酸化鉛	水
赤褐色（生地画用）	○																					○			○	○		○				
倉印海碧色					○											○									○		○					
四十号褐色																	○								○	○		○	○			
鶯茶色													○				○						○					○				
廿一号褐色（生地画用）														○						○					○							
廿弐号褐色（生地画用）																						○			○			○				
二号黒色（生地画用）																	○			○			○				○	○		○		
四号黒色（生地画用）					○												○	※6					○			※7						
四号ノ第二黒色（生地画用）																	○	※8				○						○				
銅緑色（生地画用）												○										○										
八号緑色（生地画用）								○									○					○			○		※9					
五十一号緑色					○												○					○			○							
五十二号緑色		○															○					○			○	※10						
葦紫色（生地画用）																	○			○			○			○						
五号淡キ色種（無発）			○							○					○																○	
硬質陶器釉薬（白玉）						○	○							○											○	※11	※12					
釉薬						○			○		○																					
酸化銅										○														※13								
酸化クロム																			○		○											
辰砂色原料							※14														○		○									
八十一号白釉						○	○				○																					
焼貫コバルト				○													○															
クロム酸鉛	○																				○											○

※6･8 酸化ﾏﾝｶﾞﾝ。 ※7･10 無水硼酸。 ※9･12 炭酸ｿｰﾀﾞ。 ※11 結晶硼酸。 ※13 ○（上手）。 ※14 炭酸石灰。

第16表 『釉薬沿革報告書』からみた釉薬および呈色材料一覧（推定される元素）

No.	種　類	Pb 鉛	Si 珪酸	Al アルミニウム	K カリウム	Ca カルシウム	Co コバルト	Mn マンガン	Cr クロム	Sn 錫	Cu 銅	Zn 亜鉛	Fe 鉄	Na ソーダ	Ni ニッケル	白玉
1	硬質陶器釉薬（白玉）	○	○	○	○	○						○		○		
2	水色	○	○				○				○					○
3	瑠璃色	○	○			○	○									○
4	掛ヶ紫色	○	○				○	○					○			○
5	紫色	○	○		○	○	○	○					○	○		○
6	青色	○	○		○	○					○					○
7	草色	○	○						○		○					○
8	藍緑色	○	○		○	○					○					
9	黄色	○	○		○	○							○			
10	淡黄色	○	○		○	○			○							
11	白釉	○	○			○										○
12	磁器用青磁釉	○	○			○			○							○
13	辰砂色（赤葡萄色）	○	○		○	○			○	○						○
14	浅黄色		○								○					○
15	２号黒色	○					○		○	○			○		○	
16	４号黒色						○	○		○				○		
17	４号２黒色						○	○	○				○			
18	黒艶消銀砂色	○	○				○				○					
19	鶯茶色						○			○			○			
20	褐色	○							○			○	○	○		
21	赤褐色	○							○			○	○	○		
22	緑色		○				○		○			○				

第６章　遺構・遺物の検討

第１節　コウカシ窯（乾かし窯）について

(1)　文献からみたコウカシ窯

１．コウカシ窯に関する基本文献および資料

コウカシ窯とは薪の乾燥窯のことである。コウカシ窯の初見史料は文政13（1830）年に刊行された欽古堂亀祐の『陶器指南』である。『陶器指南』には窯図と簡単な説明が添えられており（文献１・写真11）、この窯図と説明書きは、雨森芳野が監修した『陶器薬草』にほぼそのまま引用されている（文献２）。また、『陶器指南』は昭和8年の小野賢一郎編集の『陶器全集』（文献３）や昭和59年の金田真一による『欽古堂亀祐著　陶器指南』解説（文献４　以下、『陶器指南　解説』）にも納められており、簡単な解説が加えられている。

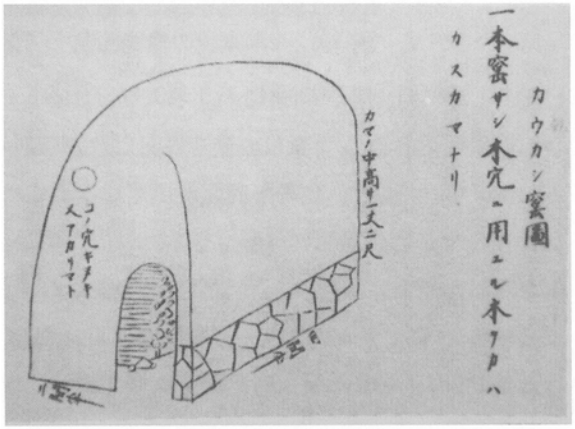


写真11　『陶器指南』のコウカシ窯解説図

『陶器指南』関係以外の文献としては、まず、大正11年に刊行された鹽田力蔵編『日本近世窯業史』（文献５）が挙げられる。但し、コウカシ窯そのものは明治時代に有田を除いて廃絶していたようで、『日本近世窯業史』では、「コーカシ窯（コウカシ窯）」について項を割いているものの、あまり深く言及していない。これ以外のコウカシ窯に関する文献（資料）としては、明治44年発行の『西肥日報』の記事（文献６）、昭和８年刊行の『陶器大辞典』の「コーカシ窯」の項（文献７）、昭和11年の中島浩気の『肥前陶磁器考』（文献８）がある。『西肥日報』と『肥前陶磁器考』は簡単な記述ではあるが、有田でのコウカシ窯の概要を知る上で数少ない貴重な文献（資料）である。近年では、昭和60年の『有田町史　陶業編Ⅰ』（文献９）、仲野泰裕「上絵付と軟質施釉陶器の焼成　尾張・江戸・京都の技術系譜」（文献10）でコウカシ窯の存在について紹介されている。

２．コウカシ窯の名称について

薪の乾燥窯の初見史料であり、京焼の指南書である『陶器指南』では「カウカシ窰」と表記している。これに対して、有田地方においては、『西肥日報』の有田焼関係の記事中に「乾（こう）かし窯」、また、中島浩気の『肥前陶磁器考』でも「乾（カウ）かし窯」とあり、「乾かし窯」の名称が用いられている。また、近江湖東焼の安政２（1855）年の『御陶器場所地面並諸建物御絵図』（写真12）には「木火仕（こかし）窯」、淡路の珉平焼に関する『陶器用諸機械調査記録』（明治12年）や『陶器製造用建物諸機械調査簿』（明治16年）では「焦竈（こがしがま）」の名称が用いられている[1]。

「カウカシ」は乾かしの転訛とされている。上記の通り、有田の「乾かし窯」は、こうかし[2]と発音されているが、表記そのものは本来的な意味を残している。これに対して『陶器指南』の「カウカシ窰」は表音的な表記であり、表意的表現は失われている。ただ、『陶器指南』の刊本では「カウカシ窰」の右に「乾」の文字が添えられており、「乾かし」の転訛を理解した上での「カウカシ」の名称が使用されて

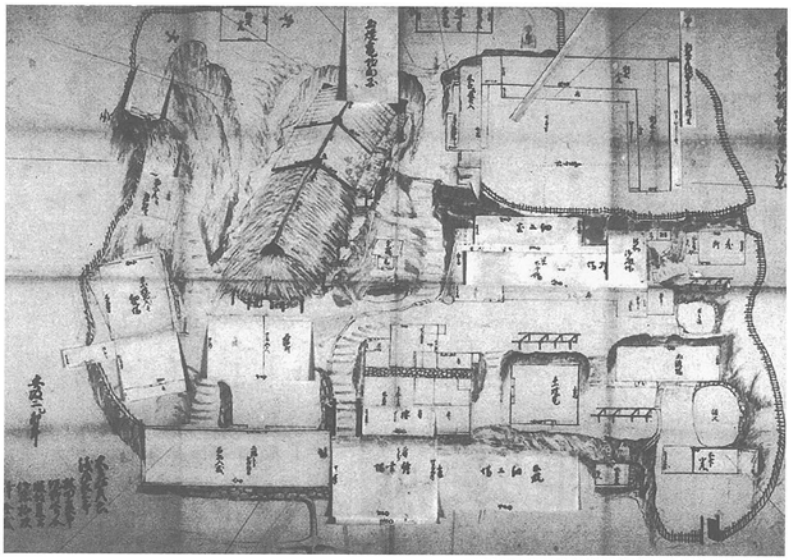


写真12　湖東焼の窯場絵図　『御陶器場所地面並諸建物御絵図』より

いる。しかしながら、湖東焼の「木火仕（こかし）窯」や珉平焼の「焦竈（こがしがま）」の名称は「乾かし」が転訛したこうかしの表音表記だけが伝わり、当該地で新たな解釈をもって当て字が行われている。例えば、「焦竈」は薪を表面が黒くなるまで松葉で燻すというところから「焦（こがし）」の文字が当てられたことは容易に理解できる。一方、明治中期から大正にかけて北村彌一郎（文献11）や鹽田力蔵が著した報文には「コーカシ窯」と表記されており、昭和８年発行の『陶器大辞典』もこの表記に従っている。「カウカシ」より一層転訛が進んだ表現である。

近年では、『有田町史　陶業編Ⅰ』で「乾（こう）かし窯」、仲野泰裕論文で「コーカシ窯」の名称をそれぞれ用いている。本来であれば表意表現である有田地方の「乾かし窯」の名称の方が語源的には妥当ではないかと思われるが、確実にルビを振らない限り、まず「こうかし」と読むことはできない。ひらがな表記も文章中では非常に紛らわしい表現となるので、本稿では「コウカシ窯」のカタカナ表記の名称を用いている。

３．コウカシ窯の起源と効果

鹽田力蔵は『日本近世窯業史』に、「明治三十年の加藤五助の談話中にも、十年前までは、松葉を焚きて薪材を燥かし、之を黒くしたる後、更に小割りて用いたりといふ。(但し窯より薪材を出して後に、陶器を入れたりと曰へば、是は本窯の窯詰前に火燥せるものと見ゆ。)」と記述している。この文の前段で、明治20年頃までは瀬戸地方でもコウカシが行なわれたことを述べ、後段の但し書きで、本窯内で薪を乾燥させた後に陶器の焼成を行なったということを補足している。すなわち、瀬戸でもコウカシを行なっていたが、それは本窯で行ない、乾燥用の窯を別に構築していないということになる。有田では登り窯の上に薪をおいて乾燥させる「つう枯らし」が比較的近年まで行なわれていたという（文献９）。

このように、薪の乾燥は窯焼きにおける一連の作業の１つであり、コウカシ窯もその延長線上で生まれたものと理解され、窯業技術の上での特に大きな意義を見出し難い。『陶器大辞典』では「水分の乾燥には有效であるが、之が爲めに松材に含む燃料として大切なテレピン(3)の逸散により、結局何の益なしとの説もある。」と記している。しかしながら、『西肥日報』の記事中にあるように、入り口が板戸であるということから、窯内部は蒸し風呂程度の温度域であり、松の油分が飛ぶほどの高温度域に達するものではないことが明らかである。金田真一が『陶器指南　解説』で述べているように、適度の乾燥をねら

ったものと思われ、乾燥の程度の調整をはかりやすいという利点があることは確かである。また、有田での「つう枯らし」の行為はしばしば火災を発生させたらしく、江戸時代の文書には「つう枯らし」による火災の記録が残されており、火災防止の点からもコウカシ窯の方がすぐれているといえる。なお、『西肥日報』や『肥前陶磁器考』には、有田ではコウカシ窯での乾燥させた薪は本焼用の薪に用いられると記されているが、『陶器指南』では差木口から投入する薪用としている。亀祐がどのような効果を狙って差木口用としたのかは不明である。

それでは、コウカシ窯の起源はいつごろに求められるのであろうか。前述の通り、初見史料は文政13年である。有田では大正の初め頃までどこの窯焼でもコウカシ窯を使用していたというが、その存在がどこまで遡り得るかは明らかではない。ただ、「安政六年松浦郡有田郷図」[(4)]の窯場にコウカシ窯と思しき図柄が数箇所描かれており[(5)]、これが確実にコウカシ窯と認定できるのであれば、有田においても江戸時代までその存在が遡る貴重な史料となる。鹽田力蔵は『日本近世窯業史』で「薪材の乾燥窯（コーカシ窯）は丸窯にのみ使用され、古窯にはえを用ひざる慣例なるより考ふれば、磁器の創製と共に、肥前の風を傳へしものと認めらる。」と述べ、コウカシ窯が肥前のものであると断定している。今のところ、コウカシ窯が有田を発祥とすることを裏付けるものはないが、有田での「乾かし窯」という表意的表記の残存や大正初期までの盛んな使用状況は、有田での発祥の可能性が高いことを示唆する。

4．窯の構造

窯の構造について知ることができる史料は、『陶器指南』と『日本近世窯業史』および『西肥日報』の明治44年の記事である。もとより、時代や地域によって規模や外観等は異なると思われるが、これらの史料からコウカシ窯の構造について概述しておきたい。

上記3史料のうち、窯の図が描かれているのが『陶器指南』（写真11）である。『陶器指南』に示されているコウカシ窯は、間口2間半、奥行き4間半、高さ1丈2尺の規模である。間口右に入口、左上に気抜きと明かり窓を兼ねた孔が穿たれている。入口の高さは記されていないが、図では天井までの高さの半分程度の大きさに描かれているから約2m位の高さであろう。この高さであると人はスムーズに出入りできる。窯の背面は描かれていないが、特に記述はないので排煙等の設備はないものと判断される。また、入口で松葉を焚くと記述されており、気抜き窓以外の排煙設備はないので、窯内を燻し、熱気を溜めることを主にしたものと思われる。窯内には奥と手前に2列に分けて薪を積んでいる。

『西肥日報』によると、「此の窯は本窯の約二倍以上の大さで、入口は板戸になつて居る」と記しており、有田のコウカシ窯は大きさが本窯（丸窯）の倍の大きさで、入り口に板戸が設けられていたことがわかる。鹽田力蔵は『日本近世窯業史』で「コウカシ窯の外形は、西國、東國ともに普通なる素焼窯の第二種に類し、其大體は普通登窯の一室を獨立せるものに似たるも、内部の委細はえを略す。」と記述している[(6)]。この記述から、外形は登り窯の一室を独立させた形状であることがわかり、『西肥日報』の記述とも合致する。なお、『西肥日報』の記事には「此窯に焚くのは少量の松葉で、えを焚くべき中央の間隔を置き、両壁に材料を高々と積込むのである」（傍点筆者）と記されている。傍点部分の解釈が難しいが、「両壁に分けて薪を積み、中央の空間部に松葉を置く」という意味に解すればよいのであろうか。そうすると、松葉を焚く位置が『陶器指南』の場合とは異なる。

(2) 珉平焼（淡路焼）のコウカシ窯

1．記録に残るコウカシ窯について

珉平焼に関する諸道具の取り調べ帳が3冊残されている。1つは明治3庚午年の『陶器竈建物諸道具取調帳』（以下、『取調帳』）で、残る2つは明治12年の『陶器用諸機械調査記録』（以下、『調査記録』）と明治16年の『陶器製造用建物諸機械調査簿』（以下、『調査簿』）である。これら3冊の作成の経過および内容については今回ふれる余裕はないが、要するに珉平焼に関する建物・諸道具の財産目録である。このうち、明治12年の『調査記録』に「焦竈　弐ツ」、明治16年の『調査簿』に「焦竈　弐門」とある[7]。「焦竈」は高津全雄が指摘している通りコウカシ窯のことである（文献12）。ところが、この「焦竈」は明治3年の『取調帳』には記載がない。明治3年の『取調帳』は、珉平が賀集三平と土井忠四郎に営業全般の受託せしめた時の関係書類の1冊であり、珉平の焼物関係の建物・諸道具一式である。ただ、珉平自身は賀集三平と土井忠四郎とは別に別製珉平焼を製作しており、珉平が使用していた諸道具が明治3年の『取調帳』に記載されていない可能性もあるので、「焦竈」の記載がないということをもって珉平の時代には「焦竈」が存在しなかったという結論に直ちに結びつけることはできない。

イギリス人のイトンによる明治11（1878）年付の淡路島訪問記に珉平焼の窯場の見学記事（文献13）があり、その一節に「（前略）高名なる伊賀野村陶器製造所に至る、此時予は其主翁より甚だ鄭丁なる應接を受け（中略）瓦製の大竈中に置き其口を覆い、只僅かに一小口を餘す、此小口より半焼の薪炭を入れ以て之を焼く」の記載がある。この中での「半焼の薪炭」とは「焦窯」による乾燥薪を指しているものと思われる。

鹽田力蔵は『日本近世窯業史』で「（編者鹽田力蔵は明治29年に当地を訪問せしが、茲に委細を叙するの余地を有せず。）（中略）当地に於ては、素焼の代りに締焼を要するが故に、所謂素焼窯を有せざるも、後年丸窯風を輸入するに及んで、乾燥窯(コーカシ窯)も伝来したり。」と記し、乾燥窯の存在を示している。また、北村彌一郎も明治45年の調査報告に「松薪は半ばコーカシを使用す」と記している（文献11）。北村は上記報文で、明治45年の調査時には淡陶株式会社（現ダントー株式会社）では登り窯2基と松村式石炭窯が2基稼働し、コウカシを使用していたことを述べている。今回発見されたコウカシ窯は大正期のものと推察されるが、外形的には石炭窯の単窯であり、火格子も石炭窯用のものである。

2．淡陶社（現ダントー株式会社）のコウカシ窯について

淡陶株式会社（当時）の旧社員であった金山重夫氏より、淡陶社では近年まで焦窯（コウカシ窯）が使用されていたことをうかがった。このことを知る人は現在では少なくなっており、貴重な証言であるのでその概要をここに記しておくことにする。金山氏は昭和7年の生まれで、昭和27年に淡陶社に入社され、平成4年に退職されている。以下その内容を記す。

① その当時、焦窯が1基あった。稼働していた窯は締め焼窯が3基、本焼窯が5基である。いずれも石炭窯であり、タイル・湯呑み・お多福の灰皿などを生産していた。そしてこれらの窯の稼働は昭和33年か34年頃までで、以降は重油使用のトンネル窯が導入され、廃絶された。

② 焦窯の構造　規模については覚えていないが、出入り口は1つで高さ6尺くらいあった。両サイドに2口ずつ計4つの焚口があった。焚口は出べそのように外側に飛び出していた。焚口の奥には火あて（障壁）が存在した。煙は床下を通って煙突から排出されており、壁はよく焼けていたとのことである。（以上の内外部の構造は石炭窯の特徴を示しており、石炭窯を転用したものと判断される。）

③ 焦窯の使用法　まず、焼成室に薪材（松材）を積む。次に出入り口を煉瓦と土で閉塞する。そして、

焚口に薪をくべて燻す。焚口の奥には火あて（障壁）が設けられているので、直接焼成室の薪に燃え移ることはないが、焚口に薪をたくさん入れすぎて火事を起こすことがあった。焼成室の薪は煤で真っ黒になるまで乾燥させた。乾燥時間はよくわからない。１昼夜以上はまちがいない。焚口の薪は松材である。

④　焦窯の使用目的　新人の頃であり、また、自分が直接携わったわけではないので、よくわからないが、当時、質の悪い石炭があり、製品の仕上がりの色合いが悪いことがあった。このときに薪を使っていた。薪は生木の状態で水分を多く含んでおり、窯焚きにそのまま使用すると温度が一定しないなど不具合を生じる。生木を早く乾燥させるためにコウカシ窯を使用したのではないか。コウカシ窯で燻した乾燥材が製品の色合いに関係するという話は特に聞いていない。

⑤　子供のころ（昭和10年代の初め）には、今回発見されたコウカシ窯付近はすでに陶磁器類で埋まっていた。また、これとは別に、谷の入り口付近に、煙突はなく入り口がひとつしかない大きな単室の窯があった。

(3)　まとめにかえて

コウカシ窯に関しては近年では、『有田町史　陶業編Ⅰ』と仲野泰裕が紹介している程度でほとんど忘れ去られた窯である。明治期にはほとんどの地方で消滅し、最も遅くまで残った有田地方においても大正初期には廃絶しており、窯は現在では１基も残っていない。わずかに残された断片的な資料からコウカシ窯の復元を試みたが、あまりにも資料が少なく、また、時間的な制約もあり、全容の解明にはとても至らなかった。ただ、今回こうした資料の提示によって新たな資料の掘り起こしや発掘調査においてこれまで見過ごされてきた遺構の見直しも行なわれる可能性があるものと思われる。将来の資料の増加を待ちたいと思う。（文中敬称略。人名及び引用文献については旧字体のまま使用した。）

文献１　欽古堂亀祐『陶器指南』　文政13（1830）年。全文は文献２・３・４のほか、『日本の美術』（至文堂）第227号に掲載。「一　本窰サシ木穴ニ用ユル木ヲカハカスカマナリ　松割木前後二通ニツムナリ奥ニツムヲウラダナト云コノ木ヲカハカスハ松葉ヲ窰の入口ニテ一日タキカハカシ翌日又上へ下ニカヘシテ一日タキカハカスナリ」

文献２　雨森芳野『陶器薬草』　『随筆文学選集』第11巻　昭和2年に所収。『陶器薬草』では、『陶器指南』の原文を漢字とひらがな混じり文に書き改められているが、若干の誤記・脱字がある。「一　本竈さし木穴に用ゆる木をカハカス窰也　松割木前後二た通に積也奥に積をウラダテト云此木を乾すには松葉を窰の口にて一日焚乾し翌日又上へ下に返して一日焚乾なり」

文献３　小野賢一郎編集『陶器全集　陶器指南』　昭和8年。「乾かし窯のことである、燃料の干燥不充分なるものを用ゆる時、特に乾燥せしめる爲に用ゆる窯であるが、現在この窯を使用して居る所は殆んど無いと言つてよい。」

文献４　金田真一『欽古堂亀祐著　陶器指南』解説　昭和59年。「「サシ木穴」（差木孔）というのは、本窯の側面にあって差木（松材を三cmくらいの太さに割ったもの）を投入する孔のことである。松が磁器などを焼くのに賞用されるのは、点火が容易（三百度前後）で焔が長く延び、煤煙や硫黄分もないからである。この項では亀祐は、松葉を使って松差木の乾かし方を述べている。松は伐採したとき、水分を三十～四十％含んでいる。乾かすといっても完全に乾燥すると、早く燃えすぎてしまう。適度（十五～二十％）に乾燥した方がよい。亀祐が松葉を燃やし乾かすというのは、自己体験の結果適度の乾燥をねらっているように思われる。乾燥用の窯は間口が二間半、奥行四間半、高さ一丈二尺のものを図示している。」

文献５　鹽田力蔵編『日本近世窯業史』　大正11年。（『日本窯業史総説』第5巻　復刻版　柏書房　平成３年）「丸窯用の薪材は、豫め之をコーカシ窯にて火燥せしめ、細割として用ひしが、明治時代にコーカシ窯は廃絶して、其木の割方も亦太くなりたり。（尚ほ古窯用の薪材は元來太割なりき。）」

（参照の一）明治三十年の加藤五助の談話中にも、「十年前までは、松葉を焚きて薪材を燥かし、之を黒くしたる後、更に小割りて用ひたりといふ。（但し窯より薪材を出して後に、陶器を入れたりと曰へば、是は本窯の窯詰前に火燥せるものと見ゆ。）」

（参照の二）「薪材の乾燥窯（コーカシ窯）は丸窯にのみ使用され、古窯には之を用ひざる慣例なるより考ふれば、磁器の創製と共に、肥前の風を傳へしものと認めらる。（但し天保三年の『陶器樂草』によれば、コーカシ窯は京都にもありき。）此コーカシ窯の廃止は明治時代に屬するも、有田其他の丸窯地方には猶ほ之が存續を見るべし。（コーカシ窯の外形は、西國、東國ともに普通なる素燒窯の第二種―前文其九のホ條參照―に類し、其大體は普通登窯の一室を獨立せるものに似たるも、内部の委細は之を略す。）」

文献6　『西肥日報』　明治44年発行。「乾かし窯といふのがある、此は陶磁器を燒くのではなく、本窯の焚料とするべき薪を乾燥せしむる窯である。此の窯は本窯の約二倍以上の大さで、入口は板戸になつて居る、勿論燒くのではなくて乾かすのであるから、此窯に焚くのは少量の松葉で、之を焚くべき中央の間隔を置き、兩壁に材料を高々と積込むのである、一體本窯の焚料は松の割木に限られて居る、俗にタ丶ラキと云つて、尺餘の投込むに手頃の大さに伐つてある、即ち本窯の口より内の火加減を計つて、絶えずボンボン投込むのである、此の投込む手腕が亦中々熟練を要するものだといふ、此等の割木は乾かし窯の後ろなる廣場に、小山の如く八方を塞いで居た、小屋の中にも隙間なくギッシリ詰つて居た」

文献7　『陶器大辞典』　昭和８年。「コーカシ窯　かわかしの轉訛で、乾燥の意ならん。磁器燒成用松薪に限り、その皮を去り割りて之をコーカシ窯の中に積みて、粗柔又は松葉などを焚きて、燻燒して乾燥して焚く、之をコーカシといふ。これは水分の乾燥には有效であるが、之が爲めに松材に含む燃料として大切なテレピンの逸散により、結局何の益なしとの説もある。コーカシは昔時大いに行はれたが、尾濃地方では現在は實行してゐない、但し平生薪を天雨露に曝さないようにしてゐる。しかし有田ではコーカシは今なほ行はれてゐる。（寺内信一）」

文献8　中島浩気『肥前陶磁器考』　昭和11年。「乾かし木　素燒窯を焚く燃料は、素燒木と稱して雜木なるも、本燒燃料の多々良木（松材）は、一度乾かし窯に入れて、枯松葉にて燻し、其鳶色に成つたのを用ひたのである。中には火入窯の通（連續せる窯と窯の間なる通路）に揚げて、通枯らしをなすことありしも、折々失火を起こす憂あるを以て、今は滅多に行はざること丶成つた。又多々良木は、皮を剥き置く方が火花が上がるとて、枯らす前に近所の女達が、銘々薄刄へ手拭を押當て、一々皮を剥取りては、薪にすべく持去らしめたのである。」

文献9　『有田町史　陶業編Ⅰ』　昭和60年。

文献10　仲野泰裕「上絵付と軟質施釉陶器の焼成　尾張・江戸・京都の技術系譜」『金沢大学考古学紀要』第26号　平成14年　金沢大学文学部考古学講座

文献11　『工學博士　北村彌一郎窯業全集』第三巻　社團法人大日本窯業協會　昭和４年

文献12　高津全雄「珉平焼に就いて考察」『あわじ』第11号　平成６年　同「珉平焼に就いて考察（続Ⅰ）」『あわじ』第12号　平成７年。

文献13　「淡路遊記」（1878年7月31日付け）　『片山滴園編纂　『淡路之誇』上巻　昭和４年より。

注(1)　昭和33年頃まで存在した淡陶社の乾燥窯も「こがしがま」と呼ばれていた。

注(2)　『有田町史陶業編Ⅰ』では「乾（こう）かし窯」は「こうかし」・「こうこし」とも発音したと記述している。

注(3)　テレピンとは、針葉樹、殊に種々のマツの材を蒸留して得られる揮発性の精油。

注(4)　佐賀県立図書館蔵。『有田町史　陶業編Ⅰ』に掲載。

注(5)　有田町歴史民俗資料館　尾崎葉子氏のご教示による。

注(6)　素燒窯の第二種について、鹽田力蔵は「（前略）素燒窯の第二種は、要するに普通登窯の一室を烟道に出づるものにて、其火路の進向を例示すれば、殆どn字線を逆行せるに似たる所あり。蓋し此様式は、磁器用の丸窯と共に、曾て肥前地方より傳來せるもの丶如く、而して維新前にありては、素燒窯として最も進歩せる型なりしに似たり。（中略）而して天保三年の『陶器樂草』にも、南京窯即ち丸窯と共に此種の素燒窯を記して、（後略）」と記している。『日本近世窯業史』には、この第二種の素焼き窯は掲載されていないが、『陶器樂草』、すなわちその原典の『陶器指南』の素焼き窯の指図を見れば、素燒窯の第二種の形状がわかる。

注(7)　『調査記録』（明治12年）、『調査簿』（明治16年）ともに「焦竈　弐ツ　但口戸前付」と記載されている。

第２節　出土遺物について

珉平焼窯跡の発掘調査で出土した大量の遺物は、第４章（第３節）において、土型・陶磁器類・タイル・窯道具・その他の遺物などに分類し、このうち土型・陶磁器類・タイルについては、実測図および観察表と併せ、その特徴を記載してきたが、本節では、これら３種の遺物について、現時点での考察を行い、出土遺物のまとめとしたい。

１．土型

今回の調査で出土した土型については、137点を実測・図化し、個々の特徴を観察表に記載しているが、ここでは、実測・図化しなかった多量の各種土型を含め、改めてそれらを概観し、(1)「珉平焼窯跡出土土型の特徴」として若干の考察を行いたい。また、出土点数の多い、龍文および幾何学文の２種の文様について、製品を含め製品型と元型を観察し、(2)「珉平焼窯跡出土土型の龍文および幾何学文の文様構成」として、さらに、土型にヘラ書きあるいは墨書された紀年銘を中心に、(3)「珉平焼窯跡出土土型からみる遺構および遺物の年代」の以上２点を併せ、土型についてのまとめとしたい。

(1)　珉平焼窯跡出土土型の特徴

出土した土型は、すでに製作される「もの」によって、７種類（製品型・元型・貼付型・高台型・タイル型・ピンハマ型・その他）に大別し、さらに全体の形状によって６類（Ⅰ～Ⅵ）に分類を行っている。このうち、土型の約４割を占める製品型のⅢ類を中心に観察することによって、珉平焼窯跡出土土型の特徴がみえてくるものと思われる。なお、タイル型については、タイルの項で触れるため、ここでは割愛する。

実測・図化した製品型のⅢ類48点（Ｋ８～K55）については、複数出土している同一文様のうち、出土地点や台部の紀年銘の有無に関わらず、全体あるいは文様面が完存しているものを基準にピックアップを行っている。文様は、陰刻あるいは陽刻で彫刻されているものと細い凸線で文様が描かれているものがあり、龍文・草花文・幾何学文など種類も多岐にわたり、８種30文様（無文および小破片は除く）を数える。また、実測・図化しなかったその他の多量の製品型Ⅲ類のうち、出土点数の多い主なものは右の通りである。しかし、土型については、現場で出来る限りの取り上げを行ったが、出土点数が実状を正確に現わしているわけではなく、数量の多少によって、当時の生産の傾向を示すひとつの参考資料と捉えている。

遺物No.	形状・文様構成	出土点数
K11	丸形龍文Ⅰ	約30点
K17	丸形牡丹文Ⅰ	約10点
K22	小判形龍文Ⅲ	約70点
K24	小判形龍文Ⅳ	約350点
K25	小判形龍文Ⅴ	約20点
K29	小判形鯛文	約30点
K30	小判形草花文Ⅰ	約20点
K39	隅入正方形龍文Ⅶ	約150点
K40	隅入正方形龍文Ⅷ	約100点
K46・K47	襞状菱形薔薇文Ⅱ-1・-2	約80点
K49	襞状丸形龍文Ⅸ	約30点
K51～K53	隅入多角形幾何学文Ⅲ-1～-3	約440点
K64・K65	蓮華　龍文XI・XII	約180点

それらの数値からは、小判形龍文Ⅳ（K24）の製品型の数量が突出して多く、さらに丸形・小判形・隅入正方形・襞状丸形の7種の龍文皿の製品型は合わせて約750点を数え、珉平焼の施釉陶器の主流が龍を線刻した各種の皿であったことが窺える。また、隅入多角形幾何学文Ⅲの製品型も3種（K51～K53）合わせて400点を超える点数が出土しており、小判形の龍文皿に次ぐ、主力製品であったと考えられる。この他、蓮華類の龍文ＸⅠ（K64）・ＸⅡ（K65）の製品型も2種合わせて約180点が出土しており、主力製品のひとつであったと考えられる。

第3章（珉平焼について）では、賀集家に伝わる古文書3冊（『陶器竈建物諸道具取調帳』（明治三庚午年　八月十二日）・『陶器用諸機械調査記録』（明治十二年酉旧七月　以下、『調査記録』）・『陶器製造用建物諸機械調査簿』（明治十六年八月　以下、『調査簿』）を紹介し、『調査記録』から「陶器形ノ部（前略）一　小判　百七十三　一　豆判　四十三（後略）」、「同種形ノ部　（前略）龍彫（中略）一　小判　弐ツ　一　豆判　三ツ　一　角中皿　貳ツ（後略）」を引用したが、『調査簿』にも「陶器形ノ部（前略）一　大判　百弐拾九　一　小判　弐百六十壱　一　豆判　三十三　一　匙中　百三十弐　一　同小　弐十〇（後略）」と同様の記載がみられる。2冊の形（型）についての部分を比較すると、4年間で形（型）の種類は微増、数量は大幅に増加している[1]。また、「大判・小判・豆判」の3種は、「龍彫」等の記載がみられないため、今回の調査で出土した龍が線刻された小判形の大・中・小の製品型（K22・K24・K25）と同種のものとは断定できないが、他の形（型）とは桁違いの数量が記載されており、同種のものである可能性が高いと思われる。これらのことから、珉平焼は、淡陶社として会社組織となる前後（明治10年代）、型作り製品の占める割合は増加し、小判形の龍文皿は珉平焼を代表する主力製品であったことが推定される。この他にも、淡路焼（珉平焼）および淡陶株式会社の製陶状況、特に土型について記載された文献を改めてみてみると、『日本近世窯業史』（大正12年）には、「（前略）淡路焼の成形は手轆轤を普通とせるも、明治時代には洋式蹴轆轤などを試用せるものあり。其小皿の内面に龍紋の沈線彫刻を現はす如きは、坏體の半乾の時に於て、之を凸型（明治時代には石膏製を用ふ。）の上に伏せ、其背面より木槌にて連打するものとす。（後略）」、『工學博士　北村彌一郎窯業全集　第三巻』（昭和4年）には、「（前略）成形　陶車は手車のみとし脚車は他地方より脚車工の来りし事ありし為幾分使用せし時ありしも今はなし　模型に素焼型・石膏型あり又金型にスクリュー、プレス或は水壓機を用ふるものあり　小皿・向附皿等は素焼型或は石膏型を用ふと雖も亦加壓機を用ふるあり（後略）」とそれぞれ記載されている。前者が明治29年、後者が明治45年の製陶状況を記録している[2]ことから、賀集家に伝わる古文書を含め、明治時代全般の時期を通じて、その状況の一端を窺い知ることができる。

次に、製品型皿類の形状は、型部裏面に取っ手あるいはつまみがつくもの（K21・K26・K28・K43）やなにもつかないもの（K19・K23・K36）が大量に出土した土型の中でわずか7点のみであり、型部裏面の中央に円筒形の台部が取りつく形状のものが大部分を占めている。この台部がとりつく形状の土型は、肥前でみられる土型に類似するといわれ[3]、兵庫県内の篠山藩窯王地山焼陶器所跡（篠山市）出土土型[4]や三田焼の三輪明神窯跡（三田市）出土土型[5]は、時代が江戸時代後期の文化・文政年間（1804～1829）と今回のものより古い時期のものであるが、台部がとりつく形状のものは点数が少なく、珉平焼の土型とはまったく逆の出土状況である。この生産の主流を占めていたと考えられる土型の形状は、窯道具と同様、この時期の珉平焼製陶の製作技術あるいは職人集団の特徴のひとつを示すものと考えられる。

(2) 珉平焼窯跡出土土型の龍文および幾何学文の文様構成

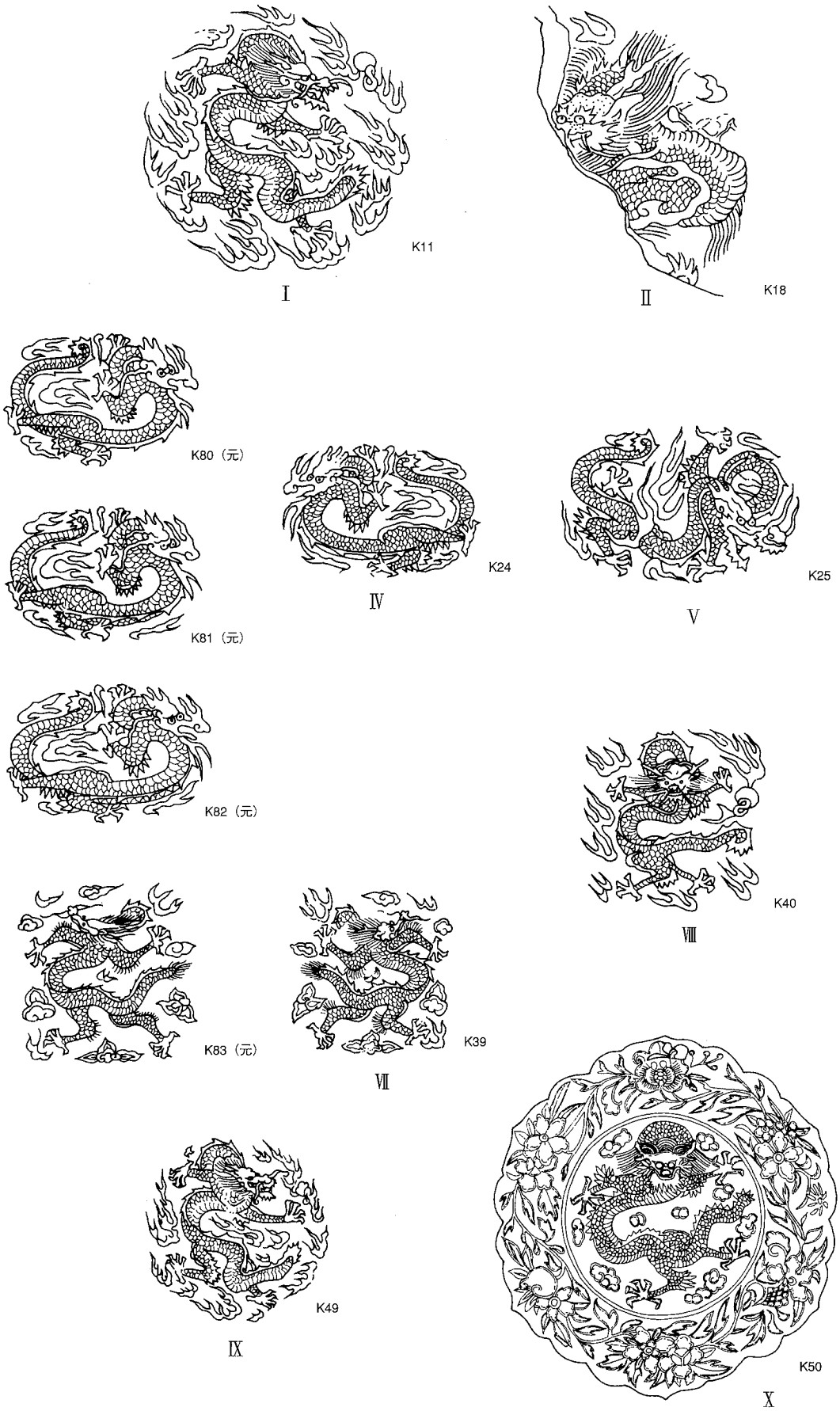
前述したように小判形龍文Ⅳの型（K24）約350点を始め、隅入正方形龍文Ⅶの型（K39）が約150点、2種の蓮華の龍文の型（K64・K65）が約180点、その他のものを合わせれば、龍が線刻された製品型は約1,000点が出土している。ここでは、3種合わせて約440点を数える隅入多角形幾何学文Ⅲの型（K51～K53）とともに、製品を含め製品型と元型を観察し、それぞれの文様構成をみていきたい。なお、龍文については特徴的な文様8種を、幾何学文Ⅲについては3種の文様をそれぞれ挿図（第87・88図）に掲載した。

龍文　確認された龍文は、製品型のⅢ類および蓮華類が13種（龍文Ⅰ～ⅩⅢ）、元型の蓮華類が3種（ⅩⅣ～ⅩⅥ）の併せて16種を数える。元型を除くこれら各種の型は、いずれもそれぞれ複数の個体が表層および石垣背後を中心に窯前面下層やコーカシ窯の解体中など、調査区内のほぼ全域から出土している。

最も多く出土している小判形龍文Ⅳの型（K24）には、3点の元型（K80～K82）が出土しており、それらを対照すると、同一の文様構成をもつものであるが、K24はいずれの元型からも型どりされておらず、いわゆる同笵ではないことが理解される。今回の整理作業では、K24と同一の文様構成をもつ製品型約350点について、元型と製品型、製品型と製品型の相互について詳細に対照していないため、それぞれの同笵関係などは言及できないのが現状である。また、唯一実測・図化した製品（245）を観察しても、製品型および元型との同笵関係は認められず、素焼きあるいは施釉された他の大量の製品についても、限られた整理作業の期間内では十分な対照は行えなかった。このため、製品・製品型・元型のわずか5点（245・K24・K80～K82）であるが、詳細に観察すると、龍の顔の表情や爪の形状、周囲に配された雲の有無や形状などはいずれも微妙に異なっている。しかし、龍の顔は左側を向き、爪は4本、胴はυ字状に曲がり尾は右上に、その周囲に雲が配された文様構成は製品・製品型・元型ともすべて同一である。これは、大量に出土した製品および製品型についても同じである。また、製品型（K24）には「明治兀八年」、元型のひとつ（K82）には「明治三八」の紀年銘があり、さらに小判形龍文Ⅳの最も新しい紀年銘は「42年」（明治）、最も古い紀年銘は「兀七年」（明治）が確認されている。これらのことから、27年以前については、今回の調査では明らかに出来ないが、明治27年から42年の約15年の期間、上記の文様構成が少しも変わることなく継続して使用され、珉平焼の小判形龍文Ⅲ（Ⅳ）が生産されていたことが判明した。

元型1点（K83）が出土している隅入正方形龍文Ⅶの型（K39）についても、大量の製品型と製品を含めた相互の対照を行っていないため、小判形龍文Ⅳと同様、同笵関係などは言及できないが、龍の顔は右上を向き、爪は4本、胴はυ字状に曲がり尾は左横に、その周囲に雲が配された文様構成は製品・製品型・元型ともすべて同一である。しかし、隅入正方形龍文Ⅶの最も新しい紀年銘はK39に記された「44」（明治）であるが、最も古いものは台部の外面にヘラおよび墨書で「明治廿七年新改製形㋐（ヘラ）　か戸（墨書）」、内面には墨書で「兀七新形㋐」と記されている。この「新改製形」および「新形」の文字からは、明治27年に「形（型）を改めてつくり直した」あるいは「新しい形（型）につくり変えた」と解釈でき、龍の文様（Ⅶ）も改変あるいは新作された可能性が考えられ、それが以後継続して使用されたとも推定される。

その他の龍文についてみてみると、龍文Ⅱ（K18）は1点のみが確認され、比較的大型の丸皿の製品型である。また、龍文Ⅹ（K50）を除く、すべての龍文（Ⅲ類および蓮華類の15種）は、細い凸線で線刻さ



第87図　土型　文様構成（龍文）

れており、龍の顔の表情や向きに違いがみられるが、胴の曲線や周囲の雲の形状などは類似する部分が数多く確認される。唯一K50の龍文は、龍が陰刻に彫刻されたもので、文様面から口縁部に至る部分にも草花の彫刻が施された特異な文様構成である。この他、龍の爪の本数は、蓮華の龍が3本、小判形および隅入正方形の龍が4本であるのに対し、丸形および襞状丸形の龍の爪は5本である。

幾何学文　幾何学文とした多様な線を組み合わせた文様は3種類（K28・K44・K51～K53）が確認されたが、このうち、幾何学文Ⅲとした3種（K51～K53）約440点の製品型と4点の元型（K85～K88）および大量に出土したその製品の文様構成についてみていきたい。

幾何学文Ⅲとした文様は、底部および口縁部への立ち上がりの器内全面が凹線で区画され、細い陰線で複雑な幾何学文が描かれている。しかし、方形に区画された中心部の四隅から広がる文様を除き、中心部の文様の向きや周囲に配された個々の陰線文様にはいずれも微妙な違いがみられる。この同じ隅入多角形を呈する製品型には、3種類の文様構成（幾何学文Ⅲ-1～-3）が確認され、文様の相違によって大きさも3種に分けられる。発掘現場および整理作業当初は、これら3種の文様の相違を明確に分類しておらず、各種データは3種を合わせたものであるが、いずれも表層および石垣背後を中心に窯前面下層など調査区のほぼ全域から出土している。但し、ここでも大量の製品型と製品を含めた相互の対照を行っていないため、同笵関係などは言及できないが、製品を含む幾何学文Ⅲの文様構成は上記の3種以外には確認されなかった[6]。また、製品型には「四一九造」（K51）および「四拾壱年拾壱月造」（K53）、元型には「44」（K85）、「明治元年八月」（K87）、「明治九年五月」（K88）の紀年銘があり、幾何学文Ⅲの最も新しい紀年銘は元型（K85）の「44」（明治）、最も古い紀年銘は「九八　十一」（明治）が確認されている。これらのことから、幾何学文Ⅲについても、小判形龍文Ⅳあるいは隅入正方形龍文Ⅶ、その他の製品型とほぼ同時期の明治20年代後半から明治時代40年代まで製作されており、この時期、隅入多角形幾何学文Ⅲの3種の皿は大量に生産されていたといえる。

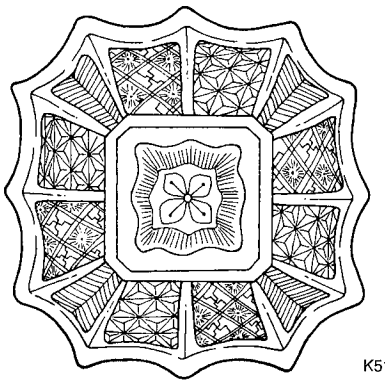
また、小判形龍文の皿が、黄土色（N-795　鬱金色）および緑色（C-184　鸚鵡緑）の2色であるのに対し、隅入多角形幾何学文Ⅲの皿は、2色の他にも内面の立ち上がりに三彩が施されたもの（274）や浅葱色（N-860　薄浅葱）、レモン色（N-806　ﾚﾓﾝ色）など多彩な色調に施釉され、柿土（N-740　蒲色）でも製作されている（写真図版47）。

(3)　珉平焼窯跡出土土型からみる遺構および遺物の年代

今回の調査で発見されたコウカシ窯を中心とした作業場跡や出土遺物の年代は、土型にヘラ書きあるいは墨書された紀年銘をひとつの根拠としており、それらについてみていきたい。

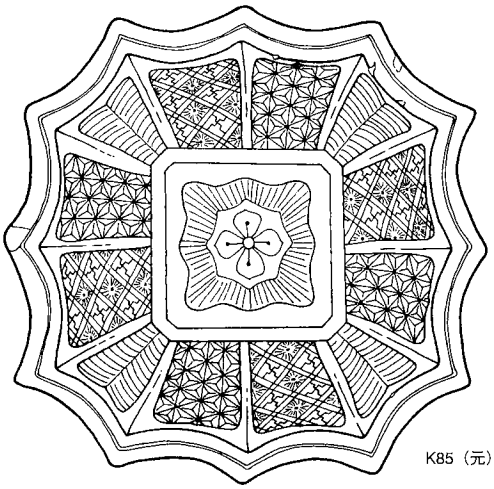
遺物の概要でも触れたが、これらの年号は、その土型を製造した年（月）であり、投棄された時期を示すものではないが、遺構あるいは出土層の時期を考える上で非常に重要な資料と考えられる。ヘラ書きあるいは墨書された土型の点数は約600点、このうち年号が判読出来るものは約130点を数える。銘は製品型の台部内外面を中心に、元型の裏面にもみられ、年（月）号および製作者名、屋号、器種名などが記されている。

最も新しい紀年銘は、「大三五」および「大正三」の2点に記された大正3年であり（いずれも実測・図化せず）、前者は龍文の蓮華型の台部外面にヘラ書きされ、後者は台部の破片にヘラ書きされていたものである。大正年間の紀年銘はこの他に、丸形無文皿の製品型に「大正二□（年か）八月」、丸形牡丹文Ⅰの製品型（K17）の台部外面にヘラ書きで「大正元年拾月㋐」、内面に墨書で「大正元年」など6点が確認された。また、最も古い紀年銘は、丸形無文皿の製品型（K20）の台部外面に「明治廿壱戊子一月」

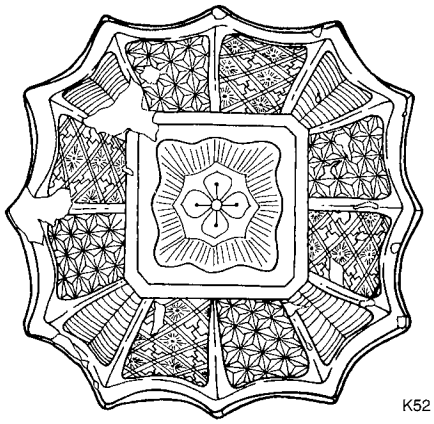


K51

Ⅰ

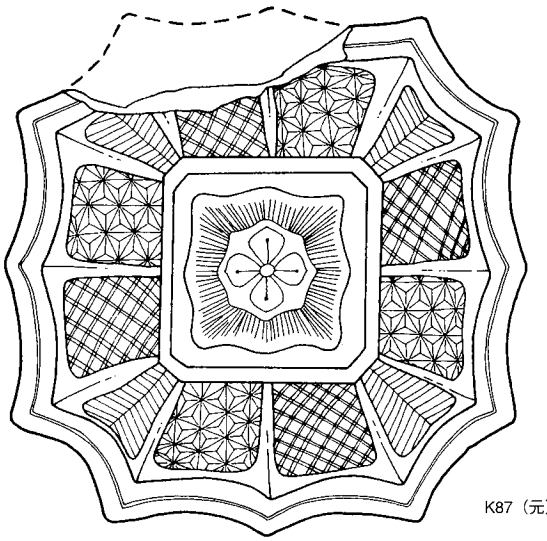


K85（元）

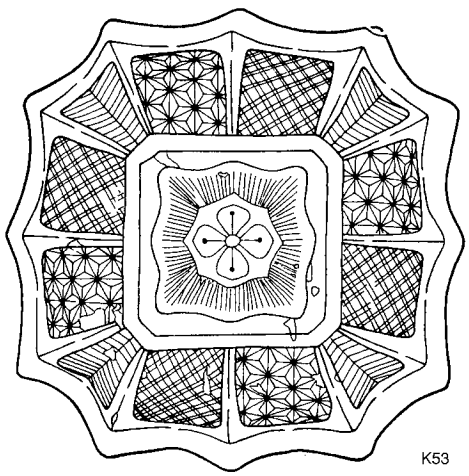


K52

Ⅱ



K87（元）

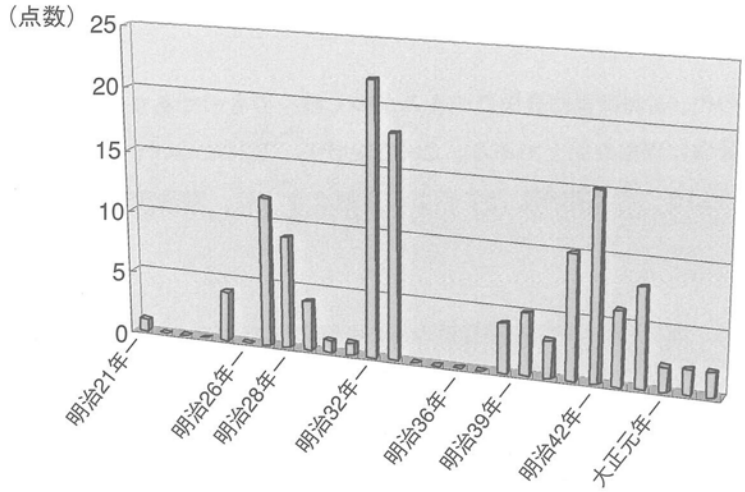


K53

Ⅲ

第88図　土型　文様構成（幾何学文）

とヘラ書きされた明治21年である。その他の紀年銘は、明治20年代は21年が１点のみで、25年以降に29点、明治30年代は51点、明治40年代は42点が確認された[7]。これらをさらに詳細にみてみると、明治20年



代では26年銘は確認されていないが、27・28年銘はそれぞれ10点近くが、明治30・40年代では32・33年の２年間で40点が確認され、その後、34年から37年の４年間の紀年銘は１点も確認されず、38年以降再び確認され、42年銘は15点を数える。また、明治32・33年銘の多くは、K40にみられる「元」（さんじゅう）の書体に特徴があり、同一人物による筆跡であり、明治40年代の銘には、「造陶山」（K16）や「造⑦陶山」（K51）と「陶山」が製造したことが明記されている。この「陶山」は南淡町にみられる「すやま」という名字であり、「スヤマ」（K53）あるいは「すやま」と記されたものも出土している。紀年銘の推移および製作者から、土型はある一定の時期に偏って製造されている状況が窺え、そこから土型の耐久年数は比較的長期（約３～５年）ではなかったかと推定される。しかし、ひとつの型から何十あるいは何百点もの製品が型どりされ、それが数年間使用されたかについては疑問があり、また、廃棄された土型は、文様の摩滅によって無文に転用したと考えられるものも１点（K14）確認されたが、それ以外の大量の製品型は、文様の凹凸が比較的良好に残っており、現在でも十分に使用できるものである[8]。さらに、元型10点（K79～K88）のうち、６点（K82・K83・K85～K88）は作業場跡検出時の石垣最上層（２区石垣背後上層1）からまとまって出土しており、同時期に一括廃棄されたものと考えられる。ここには、「明治三八守岡作」（K82）や「44田中ユ」（K85）、「明治元年八月ユ田中」（K87）、「明治廿九年五月田中□□（作之か）」（K88）など、製作者名とともに明治29・30・38・44年の銘が記されている。これらは元型のため、約15年近くの年代幅があると考えられるが、土型の耐久年数については、再考すべき問題といえる。

紀年銘の土型は、表層および石垣背後を中心に窯前面下層など調査区のほぼ全域から出土しており、その概要は、石垣背後の上層では明治20年代後半および40年代の年号を含む30年代が中心であり、中層より下位の層では20年代後半から30年代前半の年号が、窯前面下層では20年代後半を中心とした年号がそれぞれ確認されている[9]。

以上のことから、石垣背後の遺物堆積層は、明治30年前後から始まった投棄により、大正時代初期までの約20年間堆積し続け、窯前面下層は、石垣背後の堆積と前後する時期にはすでに埋まっていたと考えられる。これらの遺物が大量に堆積している場所に石垣を構築し、排水路および通路を施設するなど

して、コウカシ窯を中心とした作業場跡が造成されたものと考えられる。このため、今回の珉平焼窯跡の調査で発見された遺構は、明治40年代以降、大正時代を中心とした時期と考えられ、調査成果および前節で考察したコウカシ窯の操業時期とも大きな齟齬は認められない。そして、出土した大量の遺物は、淡陶株式会社が製作した海外向け輸出品を含む、明治30年前後から大正年間を通じた時期のものと考えられる。

この他、銘はないものの、K26は型部裏面につまみがつく唯一のものであり、さらに、他のすべての土型とはまったく異なる非常に硬緻な胎土である。このことから、K26については、出土層位（石垣背後の上層）からは判断できないが、今回出土したすべての土型より古い、明治20年代以前のものである可能性が高いと考えられる。

注(1)　『調査記録』には、陶器形の部および同種形の部をあわせ78種約840点が、『調査簿』にも79種約1,440点が記載されている。

注(2)　第３章参照。

注(3)　参考文献「伊万里市大川内山民窯樋口家土型について」より。

注(4)　参考文献『篠山藩窯王地山焼陶器所跡』より。

注(5)　参考文献『三田焼の研究』より。

注(6)　約１年間の慌ただしい整理作業を通じて、幾何学文Ⅲの文様構成は３種が確認されたが、改めて詳細に観察することによって、４種以降の新たな文様構成をもつものが確認されることが考えられる。しかし、元型のひとつに「中」（K86）とヘラ書きされたものがあり、大きさおよび文様構成も大・中・小の３種のみである可能性は高いと考えられる。

注(7)　記年銘の年代毎に確認された点数は以下の通りである。

年代	明治20年代									明治30年代										明治40年代					大正		
	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	元	2	3
出土点数	1	0	0	0	4	0	12	9	4	1	1	22	18	0	0	0	0	4	5	3	10	15	6	8	2	2	2

注(8)　出土点数の多かった小判形龍文Ⅳおよび隅入多角形幾何学文Ⅲの製品型から実際に粘土を使用して、型どりを行ったが、龍の線刻および幾何学文の複雑な細い文様は比較的凹凸も明確に現れた。

注(9)　いずれの層位からも、明治20年代後半あるいは40年代の年号を示す記年銘が数点出土しており、明確には区分できないが、おおよその状況は上記の通りである。また、表層からは、明治25年以降、大正時代までの記年銘が出土している。

参考文献

吉永陽三「伊万里市大川内山民窯樋口家土型について」『佐賀県九州陶磁文化館　研究紀要』第１号　佐賀県立九州陶磁文化館　昭和61年

『備前焼紀年銘土型調査報告書』　備前焼紀年銘土型調査委員会・備前市教育委員会　平成10年

『三田焼の研究』～三輪明神窯跡出土土型①～　三田市教育委員会　平成11年

『篠山藩窯王地山焼陶器所跡』　篠山市教育委員会　平成11年

2．陶磁器類

(1) 磁器

今回の発掘調査では、施釉陶器の碗・鉢・皿・蓋などのほかに、染付磁器を中心として、少量ではあるが磁器の出土が認められる。これらの磁器類は施釉陶器に比べて出土量がきわめて少なく、また、出土層位も表層の攪乱層中のものがほとんどを占めている。このため、これらの磁器類が珉平焼の窯跡で生産されたものか否かはその出土状況から即断はできない。しかし、これらの磁器類が、窯跡から出土していること、わずかではあるが未製品を含むこと、外面に「千鳥」印を押印するなど明らかに珉平焼の製品の特徴を示すものが含まれていることなどから、ここでは、珉平焼の製品として報告する。

磁器類はその特徴から、近世に属するものと近代以降の製品に分類できる。さらに近世に属するものは大きく明末～清初の景徳鎮窯あるいは漳州窯など中国製の青花磁器を写したと考えられるもの、肥前系あるいは瀬戸・美濃系など国内産の染付磁器を模倣したと考えられるものに分類される。また、近代以降の製品は、銅版転写で施文するもの、端正な形態を呈する京焼風の染付磁器、「千鳥」印を押印するなど明らかに淡陶社で生産された珉平焼の特徴を有するものに分類することができる。

近世の染付磁器

1．中国製青花磁器の模倣品

中国製青花磁器の模倣品と考えられる製品は、碗・鉢・皿・盤・壷などの製品がごく少量ではあるが出土している。これらの製品には薄手に成形され、外面に草花文などを描く景徳鎮窯産青花の模倣品と考えられるものと高台畳付あるいは底部内面に砂が多く附着する特徴をもつ漳州窯系青花磁器の模倣品と考えられるものとがある。いずれも明末～清初に生産された製品の模倣品である。

2．国内産染付磁器の模倣品

日本製の染付磁器の模倣品には肥前系の他、瀬戸・美濃系のものがある。肥前系染付磁器は碗・皿があり、碗には広東碗、端反碗・半球形碗などがある。いずれも大橋編年[1]のⅤ期、すなわち19世紀前半以降の製品を模倣したものと考えられる。皿も低い輪高台をもつものと蛇ノ目凹形高台をもつものとがあるが、いずれも碗同様、19世紀前半以降の肥前系染付磁器の模倣品と考えられる。また、瀬戸・美濃系染付磁器の模倣品と考えられるものあるいは清朝青花磁器の模倣品と考えられるものなどもある。

これらの製品は、珉平焼が開窯する時期よりやや前の時期の様相を示すものであり、初期の珉平焼が磁器生産を目指し、同時期あるいは若干先行して生産あるいは流行していた各産地の製品をさまざまに模倣し、模索を繰り返していたことを示す資料として注目される。

3．近代以降の染付磁器

明治以降、珉平焼では後述するように、龍文を線刻した小判形の皿に代表される型物の施釉陶器がその製品の主流を占めるようになるが、染付磁器の生産も依然としてある一定量は継続して行われていたと考えられ、藍色の濃い酸化コバルトで細かい文様をプリントする銅版転写の染付磁器の出土が多くみられる。銅版転写の製品には、蓋・湯呑み碗・碗・蓋付き碗・火鉢あるいは火桶・鍋などがあり、底部に「JAPAN」印を押印するものも確認され、その一部は陶器同様、海外輸出用に生産された可能性も認められる。その他、染付磁器には、陶胎染付あるいは酸化コバルトで文様を手描きあるいはプリントする京焼風の製品もみられ、明治以降もその生産の主力製品とはならないものの、大正期を含めて染付磁器の生産が継続して行われていたことが窺われる。

以上のことから、珉平焼の生産は19世紀前半に磁器生産をもって開始され、当時の磁器生産の中心地

であった肥前の技術を導入し、同時に京焼窯で当時流行していた明末～清初の景徳鎮窯、漳州窯系の中国製青花磁器の模倣をはじめ、各産地の製品を積極的に模倣することから開始されたことが分かる。また、京焼の強い影響の下、珉平焼では型物の陶器生産が行われており、明治以降、その主力は陶器生産に転換するものの、銅版転写、型紙摺り、手描きなどの染付磁器の生産が近代以降も少量ながらも継続されていたことがわかる。次に、珉平焼の主力製品である施釉陶器についてみてみたい。

(2) 施釉陶器

今回の調査で、最も多く出土しているものは施釉陶器である。施釉陶器は第4章で概観したように、器種別に大きく碗・鉢・皿・壷・蓋・その他の6種類に分類できる。しかし、それらの大部分は明治初頭から珉平焼での陶器生産が終焉を迎え、その主力製品をタイルへと移行する大正末期までの近代以降の製品によって占められていると考えられる。これら近代以降の陶器生産の実態については、考古学的には未解明の部分が多く、その変遷をたどることは、現在のところ、多くの困難をともない、時期尚早であると言わざるを得ない。

そこで、ここでは今回の調査で出土したこれらの製品を器種ごとに、形態・製作技法・文様・刻印などの特徴から、江戸時代以来の伝統的製品、輸出用製品、機械化導入期以降の日常食器などに分類し、また、それらの中である程度、製作時期の推定できるものを抽出して、近世後半から大正末期に至る珉平焼の陶器生産の変遷について若干の考察を行なうに留めたい。

碗類　碗類には様々なものがあるが、抹茶碗・湯呑み碗などの伝統的茶器・ティーカップなどの輸出用製品、飯碗・盃などの日常品などがある。

鉢類　鉢類の中で特徴的なものとしては、鉢AⅢ1類とした桶形の鉢がある。これには体部外面にタガをもつ鉢AⅢ1b類（154～162）とタガをもたない鉢AⅢ1a類（150～153）とがあり、AⅢ1b類は江戸・東京遺跡などでわずかに類例が認められ[2]、明治後半期に時期比定されている。この桶形の鉢とセットになるものとして、蓋があり、かえりの断面形状の違いから蓋AⅠ類と蓋AⅡ類に分類される。また、蓋の内面に大小の「千鳥」印を押印するものがあり、明治後半以降、大正時代に入っても、生産が続けられていたことが分かる資料である。これは地元では「サトツボ」と俗称されており、このことから用途としては、砂糖などの調味料を入れる日常品と考えられ、明治時代の後半期以降、機械化によって大量生産された日常食器のひとつと考えられる。

皿類　最も多く出土した皿類は、製作技法から小判形の皿に代表される型物の皿類と、型を用いない水挽き轆轤成形による皿A類とに大きく分類できる。型物の皿類は、皿B類（丸皿変形）としたものがその代表としてあげられるが、その他に皿C（角皿）Ⅱ・Ⅲ類、皿D類（角皿変形）、皿E類（変形皿）などがある。これらの製品のうち、小判形の龍文皿は徳島城下町、大阪天満本願寺跡、大阪麻田藩陣屋跡、姫路城跡、篠山城跡など西日本の都市遺跡を中心に出土しており幕末から明治前半に時期比定されている[3]。また、江戸・東京遺跡からも出土が認められており、ここでは幕末期にまで遡るものもあるが、多くは明治20～30年代とされている[4]。

今回の調査成果から、これら小判形の龍文皿を含む型物の皿類のうち、その製作時期が型の紀年銘から判明するものとして、牡丹文丸皿（219　皿AⅡ2類）・小判形龍文皿（245　皿BⅠ類　写真13）、隅入正方形龍文皿（260　皿CⅠ類）、多角形襞皿（274　皿DⅡ類　写真14）などがある。小判形龍文皿の型には、「明治廿八年」の紀年銘が書かれたもの（K24）があり、その出現時期は幕末から明治初頭にまで遡

るものと考えられるものの、少なくとも明治中期に至ってもその生産が継続されていたことが分かる。また、隅入正方形龍文皿については「元二年十月」の紀年銘（K40）が、多角形襞皿については、「四拾壱年拾壱月」の紀年銘（K53）があり、それぞれ明治32年、明治41年のものと考えられ、牡丹文丸皿については、「大正元年」の紀年銘（K17）が認められる。これらの型の紀年銘から、小判形龍文皿に代表される型物の皿類は、その出現時期は江戸時代後半に遡るものの、その生産は明治以降も継続して行なわれ、明治後半から大正初期にまでおよぶものと考えられる。

写真13　小判形の龍文皿（245）

写真14　多角形幾何学文襞皿（角皿変形　274）

一方、皿A類と分類した丸皿類は、基本的には水挽き轆轤成形によるものであり、赤・緑・黄・瑠璃釉などの単色釉のものや三彩・彩絵などのものがあり、底部に「JAPAN」印を押印するなど海外輸出用として生産されたと考えられる製品を多く含んでいる。また、皿AⅢ類・AⅣ類とした小型の丸皿類は「DANNTO－KAISHA　「千鳥小陰刻」　AWAJI」印を押印するものがあり、これらの製品は海外輸出用というよりはむしろ、機械化導入期以降の日常の食膳用製品と考えられる。これらの海外輸出用あるいは日常食器は伝統的な型物の皿に後出するものと考えられ、型物の皿から丸皿への主力製品の転換期は大正初期以降と考えられる。

壷類　壷類と分類したものの中で、特徴的なものとしては、壷B類と分類した注口をもつ注口陶器がある。これらの注口陶器は、その用途から煎茶用の急須と考えられる壺B類ⅠA類と、ミルクピッチャーと考えられる壺B類ⅠC類・ティーポットと考えられる壺B類ⅠD類および醤油差しである壺B類ⅡD類の3種に大きく分類される。

煎茶用の茶器（写真15）は、珉平焼より先行して生産を開始する三田焼（三田市）でも、19世紀前半以降、盛んに生産が行われており[5]、江戸時代後半の煎茶の流行とともに、多量に生産された器種である。珉平焼の製品は三田焼の製品に比べ、小型のものが多く、時期的には後出の製品と考えられるが、初期の珉平焼の製品の中では主力製品のひとつと考えられる製品である。

ミルクピッチャーやティーポット（写真16）などの洋食器は、明治時代前半以降の海外輸出を目的とした製品であり、底部に「JAPAN」印を押印したものが多く認められる。また、醤油差しには「實用新案　壱六七〇三」の刻印があり、ここから、これが明治43年に特許登録されたことが分かり、これらの機械化による日常品の生産が本格化する時期を示すものとして貴重な資料である。

花生　花生にも壷F類と分類した懸花生があり、和風の懸花生Ⅰ類と洋風のフラワーポットⅡ類に分類され、Ⅰ類は江戸時代以来の茶道にともなう伝統的製品、Ⅱ類は明治前半以降の海外輸出用製品と考え

写真15　煎茶用急須（337）

写真16　ミルクピッチャー（349）

られる。

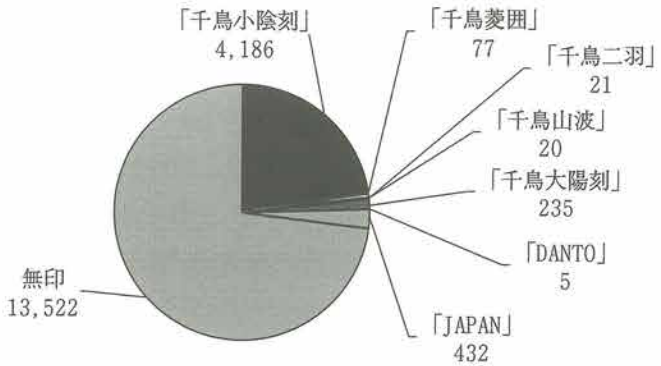
蓋物　蓋物と分類したものの中で特徴的なものは、蓋物Ⅲ類と分類した平面形状が桃実形（写真17）あるいはうさぎ形をした変形の蓋物である。桃やうさぎは中国では縁起の良いものの象徴とされ、これらの形態の多用は、海外輸出用とくに中国への輸出を目的としたものと想定される。これらのことから、蓋物Ⅲ類は対中国貿易の盛んになる明治後半期以降に生産が本格化したものと考えられる。

写真17　桃実形の蓋物（515）

蓮華　蓮華にも型作りで底部が平底で内面に龍文を線刻する伝統的形態のⅠ類と内面が無文で丸底の日常品であるⅡ類があり、Ⅰ類は江戸末期から明治後半、Ⅱ類は大正期以降の製品と考えられる。

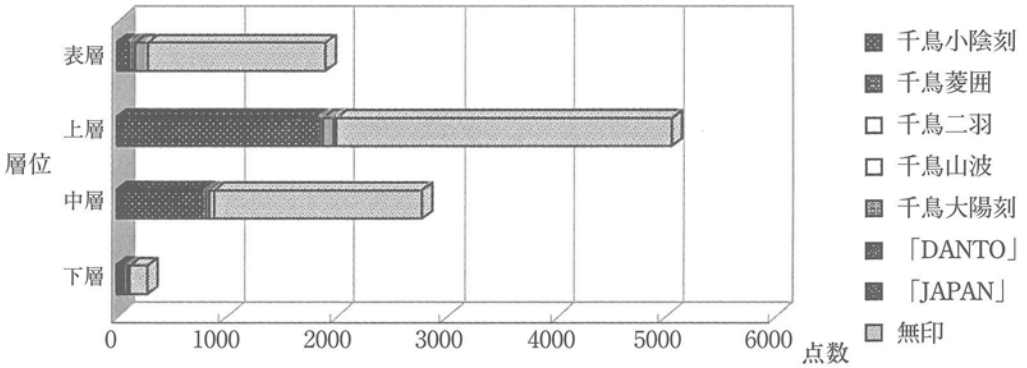
刻印資料　刻印資料のうち、出土遺物の大半を占める明治中頃から大正時代の製品に押印されているものは、淡陶社の商標である「千鳥」印５種の他、「DANTO」・「JAPAN」印など海外輸出を指向したと考えられる刻印も確認されている。これらの刻印は約5,000点を数える（第５表）が、同一地点あるいは同一層から出土しているものの中には、押印されていない無印のものも多量に確認されている。刻印の総点数から、それらの割合をグラフ化したものが第17表であり、石垣背後を６分割した層（表層を含む）ごとに占める刻印の割合をグラフ化したものが第18表である。これらからは、「DANTO」印は表層

第17表　出土刻印総点数の各種刻印の割合



および上層(1)・(2)の比較的上方からのみ確認されているが、「千鳥」印5種と「JAPAN」印については、下層での点数は減少しているものの、ほぼすべての層位から確認されている。また、それらの刻印が押印されているものと無印のものとを比較すると、上層(2)で「千鳥」小陰刻と無印とがほぼ同数に近いものの、表層では約5倍、上層(1)および中層(1)・(2)、下層では約2倍にもおよぶ数量の無印が確認されている。

第18表　石垣背後の各種刻印の割合（第5表(2)より）



これらの刻印の種類および出土状況からは、刻印の前後関係、さらには製作時期を特定するひとつの指標となりうるのではないかと考えられたが、明確にその状況を解明するには至らなかった。また、刻印の有無についても、国内向けあるいは海外輸出向けを区別するための可能性が考えられるが、ダントー株式会社にその当時の記録が残されていない[(6)]現時点では、不明といわざるを得ない状況である。

(3)　小結

以上、染付磁器および施釉陶器について、特徴的なものについてみてきたが、最後に、それらを踏まえて、珉平焼の変遷について概観してみたい。

珉平焼は、1830年代に京焼の影響のもとに生産を開始したと考えられている[(7)]が、その生産の初期段階ですでに磁器生産を行っており、そこでは当時の先進地域であった肥前地域の磁器生産の影響を強く受けていたと考えられる。そのことは、今回確認された染付磁器の中に肥前系磁器に酷似した広東碗や端反碗が含まれていることからも窺われる。一方、明末～清初の景徳鎮窯あるいは漳州窯系の青花磁器の写しを生産していることは、肥前系磁器には見られない傾向であり、同じく19世紀以降に成立する摂津の三田焼、丹波の王地山焼（篠山市）あるいは播磨の東山焼（姫路市）など県内の京焼系諸窯の生産動向と共通している。このことは、珉平焼がすでにその開窯段階で、江戸時代後半の復古趣味によって生産されている古い時期の中国製青花磁器にいち早く着目し、その模倣を可能にした高度な生産技術あるいは中国製磁器に関する知識を尾形周平に代表される京焼の文人陶工から直接獲得していたことを表しているものといえる。また、磁器生産とほぼ同時期あるいはやや遅れて三田焼・東山焼などでは生産されていない施釉陶器のいわゆる交址写しの型物の皿類の生産も始めていたと考えられ、それらは大阪・江戸・姫路・篠山・徳島などの城下町から出土する小判形の龍文皿から、その状況を窺がうことができる。小判形の龍文皿に代表される型物の皿類は明治以降、珉平焼の主力製品となり、明治後半から大正初期まで継続して生産されていたことは、今回出土した土型に明治20年代から大正初期にかけての紀年銘が記されていることからも裏付けられる。これらの製品は明治以降も型作りという規格品の生産に適したその特徴から、同一規格の製品が大量に生産され、その成形・施釉・施文などに表れた高度な技術

をもって、全国的に流通し、珉平焼の代表的な製品として受容されていたものと考えられる。

さらに、珉平焼ではこれら伝統的製品のほかに、明治16年の淡陶社の設立以降、海外輸出用製品の生産にも着手し、伝統的製品の生産が衰退する明治後期から大正の初期以降、その主力をこれら海外輸出用製品に向けることになる。海外輸出用製品の他にも、明治後半から大正初期には、鉢類、醤油差し、小型の丸皿など機械化による日常品の生産も本格化させ、型物の皿に代表される伝統的製品にかわって、海外輸出用の製品、大量生産の日常品へと主力製品を転換することによって新たな販路を開拓していったものと考えられる。

このように、珉平焼では、開窯当初は磁器生産を指向し、肥前系の磁器生産の技術を導入して、染付磁器の生産をはじめ、その中でも江戸時代後期の文人趣味の流行にしたがって、肥前磁器にはみられない明末～清初の中国製磁器の模倣品の生産を開始する。これは、ほぼ同時期に県内で磁器生産を開始する三田焼・王地山焼・東山焼と同様の傾向である。しかし、他の生産地ではその後も、三田焼では青磁、東山焼では染付磁器など磁器生産に主力おいて生産を継続して行くのに対して、珉平焼では、京焼からの技術移入によって、他の県内諸窯にはほとんどみられない交址写しの小判形の龍文皿に代表される型物陶器の生産にその生産の主力を移し、明治以降、大正時代に至るまで、型物の皿、煎茶器などの江戸時代以来の伝統的製品を中心に生産を続け、これらの製品が遠くは関東地方にまで広く流通することになったと考えられる。以上のような生産形態は大正期以降、珉平焼の主力製品は海外への輸出に主眼を置いた洋皿・ティーポット・ミルクピッチャーなどの洋食器、醤油差し・小形の丸皿などの日常品等へと変化していく。また、大正末期から昭和初期にかけて、第一次世界大戦後の昭和恐慌が起こり、陶磁器の輸出が不振に陥ると、その生産の主力をタイルに移行し、今日に至ることになる。

珉平焼の陶磁器生産衰退の一因としては、明治後半以降、機械化によって日常品の生産にも着手するものの、廉価で大量に生産される瀬戸・美濃製品には最終的には対抗しきれず、また、煎茶器などの高級陶器では京焼などとの競合に敗れ、あくまでも、海外輸出製品に主力を置いたことがあげられる。この点が県内の生産地では、中世以来の焼締陶器の伝統を墨守し、伝統的な壺や甕、徳利などを個人経営の小規模生産の形態をとって生産を継続し、戦後、柳宗悦などの民芸復興の波に乗って復活する丹波焼とは好対照をなすものといえる。しかし、珉平焼はその開窯当初からさまざまなやきものを生産し、県内の他の中小生産地が明治前期・明治後半～大正期・昭和初期に次々に姿を消していく中で、当初からみられた高度な生産技術のみならず製品の多様性、新しい製品をいち早く取り入れる進取の気性といったその特徴を生かして、次々にその主力製品を変換させることによって、肥前、瀬戸・美濃、京焼などの大生産地との競合の中で、今日まで存続しえたものと考えられる。

注(1)　大橋康二『肥前陶磁』　ニューサイエンス社　平成５年より。

注(2)～注(4)　堀内秀樹「江戸・東京出土の珉平焼」・日下正剛「西日本消費地出土の珉平焼」　『四国・淡路の陶磁器Ⅲ―珉平焼の生産と流通―』　四国城下町研究会　平成16年より。

注(5)　細川由紀「三田焼と三輪明神窯」『やきものフォーラム』資料　三田市教育委員会　平成15年より。

注(6)　ダントー株式会社の技術研究所には、陶器類やタイルなど一部が保管されているが、明治・大正期の文献資料や当時の記録などは残されていないということである。

注(7)　青木重雄「珉平焼と淡路のやきもの」『日本やきもの集成　7　近畿Ⅱ』　平凡社　昭和57年より。

3．タイルについて

(1)　タイルの系譜

写真18　手描き淡路焼敷瓦
『日本のタイル文化』より

現在どの建物でもどこかに使用されている「タイル」。建物の外壁や内壁、トイレ洗面などの水回りには必ずといっていいほど見かける。このタイルは西洋文化が流入した幕末～明治初期から本格的に使用されはじめたものである。外壁タイルは建物を温度や湿度などから防ぎ、内装タイルは装飾や防湿効果のために製作された「近代工業製品」である他、風呂場の絵や単品での「装飾品」でもある。

我が国におけるタイルの系譜については山本正之氏の研究に詳しい[1]。タイルと同様にレンガ製作も海外から導入された。煉瓦の起こりは古墳や飛鳥時代以来の寺院に使用された「磚」にはじまり、中近世の寺院の床材として敷瓦が使われる。また近世には建物外壁保護を目的として「なまこ壁」が使用される。なまこ壁は土壁の表面に瓦を敷き詰め目地に漆喰を盛り上げるもので、それ以降、伝統的な建物外壁に使用される。

珉平焼は江戸時代後期から敷瓦の生産が始まったとされるが、現存する資料には江戸時代や明治時代初期（淡陶社設立以前）に湿式タイル（陶板や本業敷瓦など）は例がない。しかし、賀集三平は明治19（1886）年、「淡路陶器彩色薬法」[2]において、ドイツ人陶器学博士“ワグネル”氏に釉薬について賞賛されたとの記述がある。この文面からみると少なくとも三平とワグネルとは存命期間が重なることなどから、面識があり、陶磁器の釉薬技法のみ論じたのではなく、海外でのタイル事情などを入手しており、型作り成形を得意とする珉平焼はタイル製作に近かったことが考えられる。

明治時代、陶器生産本格地の瀬戸・常滑・淡路において敷瓦の生産がはじまる。

そして、明治18（1885）年、欅田幸吉等地元有力者が淡陶社設立し、珉平時代以来熱望していた輸出が本格化し、タイル生産への意識が高まったと考えられる。

明治26（1893）年、淡陶社が淡陶株式会社となった。いつごろどのようなタイルが生産されたかは現段階では一切の文献はない。明確な資料としては後述する昭和初期のカタログ５種類の存在が確認されているのみである。現存する初期の淡陶タイルの資料としてはダントー技術研究所（三原郡南淡町福良甲）や東京工業大学所蔵品に草花文手描き金彩タイルがあり、その裏面には明治20年代の製造を示唆する墨書が残る。この頃から陶板（本業敷瓦・湿式タイル）を製作し始めたと考えられる

明治37（1904）年、田中萬米（当時の淡陶社長）邸が建築され、浴室や焚き口附近に湿式レリーフタイルや色無地タイルが使用されており、この頃本格的にタイル大量生産を開始したものと考えられる。
その後、湿式タイルは明治末の乾式タイル本格生産にとってかわるまで、大量生産された。

明治41（1908）年、不二見焼の村瀬二郎麿、淡陶の能勢敬三（共に東京職工学校　現：東京工業大学卒）が相次ぎ乾式タイル製法を開発した。ダントー技術研究所には明治41年頃製作と墨書された乾式タイルが存在する。

大正時代になると世界の建築需要や関東大震災の復興景気などあり、大正末期には陶器部門を縮小しタイル生産を主力とした。また、これまで伊賀野工場のみの生産であったが、大正７年に福良にタイル専門工場を建設した。

昭和9（1934）年には月産104万枚（全国一位・総生産の1/6）、輸出先は中国・インド・インドネシア・フィリピン・オーストラリア・中近東・アフリカ等に及んだ。

第二次世界大戦中はタイル生産が中止されていたが、戦後にタイル生産が再開され、昭和22（1947）年の輸出先にはアメリカ・カナダ・オーストラリア・中南米・東南アジア等がある。この頃の陶磁器は記念品の湯呑みや壺など依頼された陶磁器が少量製作されたにとどまり、タイルを専門に生産した。

(2)　型式

タイルの種類は成形法の違いにより「湿式タイル」「乾式タイル」に大別される。これらの中でもさらに形状（規格・形態）、表面文様（文様表現法・文様種類）、裏面形態に細分される。これらの要素を細分した結果、湿式タイルは67種、乾式タイルは150種、形象タイル9種に分かれる。

湿式タイルと乾式タイルの基本的な型式を写真19に示した。湿式タイルの規格は多くは6インチであり、文様部には浮き彫りにより表現する「レリーフタイル」が主体である。裏面は手書きよるクシガキ調整がされている。断面をみると上面が白い胎土、下面はやや褐色の胎土の二種土で構成されているものが多い。ただし一種土のものもある。

乾式タイルの規格は6インチが多く、役物タイルも多数存在する。文様表現法は釉薬の混合を防ぐために細かく仕切られる「チューブライニングタイル」が多くなる。これはより均一な色を出し工業製品として精度を高めるためである。表面・裏面とも金型成形されるためより均一化する。裏型はメーカー名を記した格子や横線など多種の文様がうかがえる。胎土は杯土と呼ばれる各種岩石等の粉末を配合し僅かに水分を含ませ、機械による高圧縮にて成形するものである。そのため断面は1種のみである。

乾式タイルでも文様種類が同じでもその表現方法が違うものがある。写真20に示したものの内、左は凹凸による「レリーフタイル」でつぼみと茎の表現である。つぼみの先端や茎は凸部にあたり釉薬がのりにくく、周囲に落ちて混ざり合っている。これに対して右は細い凸線により文様を区画する「チューブライニングタイル」である。釉薬は凸線に囲まれた中で忠実に発色しており、他の色との混ざりは少

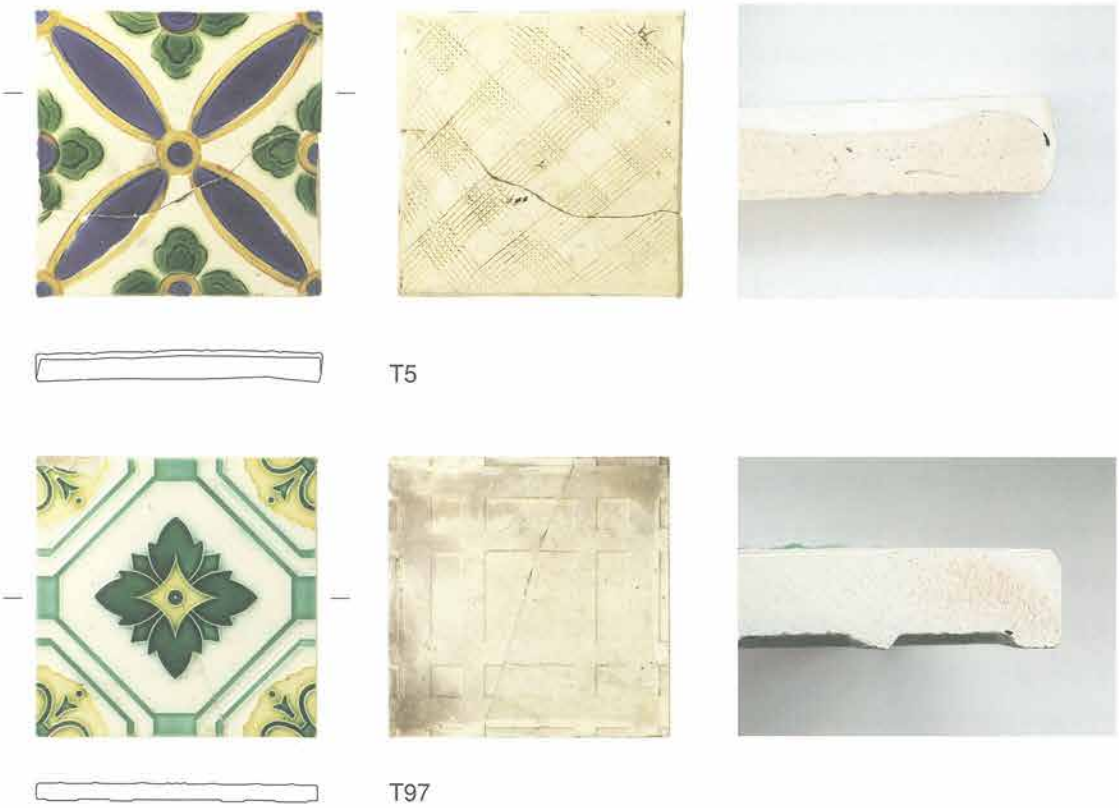


写真19　湿式製法と乾式製法によるタイルの違い

ない。これらを比較するとレリーフ手法のタイルからチューブライニング手法への変化が窺える。このように乾式タイルの中で「レリーフタイル」「チューブライニングタイル」と表現方法が異なるタイプはT73・T86とT99・T91とT91-2に見られる。また文様表現が同じであっても若干の表現が違う物がある。T76-2はレリーフタイルでも凹凸が著しいもので、T76は凹凸が僅かなものとなっている。これらは裏型の違いも読みとれる。湿式タイルの裏のクシガキ調整や乾式タイルの裏の金型の痕跡である。これらの型式変化を読みとることで変遷を把握できる。

写真20　レリーフタイルとチューブライニングタイルの違い

(3)　残存例

淡陶のタイルが生産され、資料として残存する例としては研究所や博物館など数が限られる。

ダントー（株）では技術研究所と広島営業所に保存されている。技術研究所ではタイルのほか、江戸時代以来の陶磁器の製作に関連した「土型・石膏型」をはじめ明治時代以降の陶磁器、金型、型録等が保存されている。これらはもともと発掘調査地点に隣接する南淡町伊賀野所在の工場に保管されていたものと考えられる。

技術研究所には湿式および乾式タイルは明治20年代から昭和20年前後までの資料があり、湿式は９種９点、乾式は57種257点を数える。この中で代表的なものを提示した（写真図版132参照）。

湿式タイルの形状は四角形や三角形の６インチが基本である。DT5が９インチと大型のもので、DT3・DT4は３インチ四角形の小型タイルである。文様表現法ではDT1のみ平坦面に金彩がある。その他は花柄基調のレリーフタイルである。文様は草花文が基本であるが、DT5は瓔珞文である。裏面調整ではDT3がナデ調整、DT1が不規則な格子がある。その他は６～７本単位のクシガキが見られる。裏面の文字が多くみられ、年号を示すものはDT5・DT6を除くものに「26.7年頃」～「四十二年」の墨書がある。いずれも明治時代中頃以降の年代を示す資料であるが、製作時期以降に記されたものと考えられる。

乾式タイルのDT10・DT11は草花文のレリーフタイルで、裏型は格子基調で中央に千鳥がある。またこれら裏面文字には「三歩土乾式成形　明治四一年以降」等の墨書がある。DT12は「38年頃」の墨書があるが、乾式成形完成３年前を示す年号であり、墨書の内容に疑問が残る。DT13は裏面に『MADE IN OCCUPIED JAPAN』スタンプがあり、昭和22年～27年までの米国統制時の輸出品資料である。

世界のタイル博物館は淡路島出身の山本正之氏がコレクションした世界のタイルと日本のタイルが多数を占める。同館所蔵の淡陶タイル湿式タイルは３種、乾式タイルは20種程度存在する。

東京工業大学百年記念館に淡陶タイルが９点所蔵されている[3]（写真図版133参照）。この内６点は東京工業大学教授を務めた平野耕輔氏が陶磁器工業の科学的発達を実物によって証明するため蒐集したものである[4]。これらは昭和初期に淡陶社から寄贈され、淡陶社製品を含む窯業製品を昭和10年に東京工業大学に寄贈したものである。７～９はそれ以降の寄贈品と考えられる。

１は湿式タイルで平坦面に金彩等で花柄を手書きしたものである。裏面は７本単位の斜格子クシガキ調整があり、『明治三十年以前　本社製品　大阪欅田栄次郎氏ノ注文にヨル（淡玉土）』の墨書がある。このタイルは淡陶社として製作したタイルの草創期のもので、欅田栄次郎は大阪支店の主要人物である。

２は湿式タイルで型づくりのレリーフタイルである。表面文様は草花文で出土タイルではT31と同型で

ある。裏面は7本単位の斜格子クシガキ調整があり、『第拾八号　改正　見本　四十一年十一月　葉形』の墨書がある。墨書を詳細に観察すると年代を示す四十一の内「一」が後で書き足されたように見受けられる。

3は湿式タイルの三角形で表面は瓔珞文によるレリーフタイルである。裏面は7本単位の斜格子クシガキ調整があり、『手押成形　明治四十年以前ノ本社製品　五歩土ニ三歩土被覆』の墨書がある。これは二種類の胎土を示す資料であり、出土資料にも二種の胎土を示す資料があることから表面は三歩土、充填している胎土は五歩土を示す資料である。

4～6は乾式タイルである。4は乾式製法初期の製品であり、出土タイルではT68と同型のレリーフタイル。裏面は格子基調のA1タイプで墨書『三歩土乾式成形　明治四十一年以后ノ品』がある。5はスペシャルエンボスタイルで型録では№1600として掲載されている。6はタイル型録に掲載されているものでNo.1648である。

7～9は表面が白無地タイルで、裏面は出土裏型型式の横細線タイプで上段に『DK菱形』、中段に『090515』や『515027』の数字、下段に『L.W.T.』のアルファベットがあり文字等は三段構成である。G1タイプは2段構成であり異なる。なおこの資料の入手時期は不明である[5]。

東京工業大学に所蔵されている1～6は淡陶タイルの昭和10年までの資料として位置づけられ、特に裏面に墨書のあるタイルはダントー技術研究所所蔵タイルの墨書タイルと三種の字体とも一致する。これらの資料は資料の胎土や製作年代を示す重要な資料である。またこれらのタイルは昭和初期に寄贈されるまでは淡陶の伊賀野或いは福良工場に所蔵されていたもので、平野耕輔氏に呼びかけにより寄贈したものであることが判明した。

野口早苗氏所蔵品に淡陶や淡路製陶のタイルもあり、淡陶タイルは乾式タイル15種がある。この中には出土タイルT66-2と同型式やその色違いのものがある。その他のマジョリカタイルの裏型にはA5、C1、C4、F1が見られる。

(4)　出土例

タイルのみを目的とした発掘調査はないが、通常の遺跡を発掘調査する過程でタイルが出土する例がある。洲本市山下町居屋敷遺跡は平成4年、洲本市交通安全協会の建設において洲本市教育委員会が発掘調査した。この際にタイル1点が出土した。この資料は一辺152mm正方形の乾式タイルで、表面は白色の平タイルである。裏面は横細線のもので、上段にDK菱形、中段に数字『□52202』、下段は破片により欠損しているものの枠が認められ3段構成である。これはG1タイプで上段と下段に2箇所に平坦な枠が存在することから、これらは明らかにタイプは異なる。またこの裏面には『淡陶製品　昭和二十二年□月柏寄贈』との墨書がある。この墨書はこの資料が淡陶の製品で、昭和22年までに生産されたことが判る資料である。なお裏型にある枠が上中下段に存在するのは東京工業大学所蔵のタイルにあり、『L.W.T.』のアルファベット記載がある。

三原郡南淡町流遺跡は平成16年、経営体育成基盤整備事業において南淡町教育委員会が発掘調査した。この際に攪乱壙からタイルや窯道具の「サヤ」、サヤへの収納棚としてセットする「階段状仕切り道具」が出土した。タイルは一辺153mmの六インチ正方形の平タイルが2点、110mm正方形の三六タイルの平が8点その他の平タイルが4点ある。この内100mm正方形のタイル5点に『MADE　IN　OCCUPIED JAPAN』の浮き彫りがあり、金型に彫られたことが判る。この他、竹割りなどの役物タイルが3点ある。平タイルは白および緑色の無地で、階段状仕切り道具は幅45mm、長さ92mm、厚さ15mmのものである。

これらは一括品であることから『MADE IN OCCUPIED JAPAN』が彫られていることから昭和22年～27年頃に生産されたものであり、当時はタイル焼成時に匣鉢の中に階段状仕切り道具を仕込んでいたことが判る資料である。

東京都の外神田四丁目遺跡[6]では瀬戸の本業敷瓦が出土し、中央部穿孔のあるタイルには登録商標2144がある。この商標は今回の出土品の中央穿孔品であるT6に刻印されている資料と同様である。また日影町遺跡[7]では銅版転写タイルや墨田区大平4丁目遺跡[8]では本業敷瓦が出土している。

(5) 土型・金型

タイルは敷瓦としての置物台や装飾物、内装装飾、床材、外壁材として使用されることから統一した規格性が求められる。製作にあたっては型が必要となる。今回のタイル関係の出土品型を見ると土製素焼型があり、これは文様から湿式タイル製作時の型であることは疑う余地はない。一方乾式タイルの製作にあたっては金型による圧縮技法が使用されたが出土品として金型はなかった。

湿式タイル製作に必要な土型は第4章　第3節（2．土型）に記したように11種が出土した。これらは日本におけるタイル生産の初期段階にあって、海外をも意識した意匠を有する製品も多数存在する。これらはレリーフタイルの繊細な文様付けがされている一方、T56型式のような三角形の専用タイルを2枚同時に製作する型など合理的な製作法も伺える。型はこれら規格性が求められる製品にあって重要な要素を占める。タイルを本格的に生産する以前の珉平焼や淡陶社の陶器づくりの時代から「型づくり」は得意としていた。なお湿式タイルの土型の保存例や出土例はなく、タイル生産初期の様相を解明する上で重要な資料となる。

乾式タイルの製作では金型による圧縮技法が必要となる。乾式製法は東京高等工業学校（現：東京工業大学）で窯業を学んだ村瀬二郎麿（名古屋：不二見焼）と能勢敬三（淡路：淡陶(株)）が明治41年に相次いで乾式製法の開発に成功する。出土資料の関連調査においてダントー技術研究所に金型118点、素材やその可能性があるもの4点が所蔵されていることが判明した。

金型の材質は黄銅・鉛・鉄があり、その割合は黄銅（86%）、鉛（8%）、鉄（6%）である。黄銅は真鍮とも呼ばれ、融点は1084℃と鋳込みが困難な材質であり、金型裏面に文様線が付けられたものや僅かに彫り込まれた状態のものがあるため、鋳込みではなく手彫りされたものと考えられる。鉄も同様に融点が高く、手彫りの金型と考えられる。これに対し鉛は融点が327℃で鋳込みが可能な素材である。

大きさは6″×6″の正方形が（53%）、6″×3″長方形が（24%）、6″×1.6″以下の長方形（ボーダー）が（7%）、4.3″×4.3″正方形が（3%）、曲がりが（3%）、その他（10%）である。

文様種類は草花文やマット調の細かな文様が多く、文様表現法は主としてのレリーフタイルは42点（34%）、チューブライニングは31点（25%）となる。その他は役物タイルの曲がりタイルの金型もある。カタログナンバーと同型の金型は65点（53%）、カタログには掲載されていない文様をもつものが30点（24%）その他27点（23%）である。カタログ掲載と同型の金型は、昭和初期前後のもので、カタログ未掲載の金型は昭和初期を含むカタログ未掲載の店頭用の特別な金型、明治～大正時代および昭和22年以降の資料と考えられる。

カタログに掲載されていない文様をもつものにカタログ掲載時以前に製作されていたと考えられる型番号104がある。この資料は出土品番号T71である。この資料は乾式製法古い段階の文様と裏型A5を有している。つまりこの金型は乾式製法初期段階の資料であり、日本のタイル工業史を明らかにする上で特に重要な資料と言える。なお、第二次世界大戦前までの金型の現存例は淡陶の保存例以外は知られてい

ない。

(6)　カタログ

タイルの時期を決定するうえで重要なものはカタログである。しかし、現存する資料は僅かであり、淡陶のカタログのナンバーで確認できるものではNo.13が存在しNo.7は枝番が存在することから、13種類以上存在したことになる。しかしタイルメーカー全体で確認しているものは6社11種類にすぎない。

淡陶のカタログは5種類確認できた。これらはいずれも「CATALOGUE　OF　TILES」のタイトルで、No.7、No.7-C、No.12、No.13、ナンバーなしがある。ナンバーなしは岐阜県多治見市の（株）丸英が所蔵し、その他はダントー（株）が所蔵している。

No.7は英語と中国語により我が国で最も古くからタイル生産会社であることやタイル生産の状況が表記されている。口絵のモノクロ写真は福良工場の全景写真が掲載されている。この写真は「昭和二年九月二十八日由良防塞司令部承諾済」とある。この掲載許可年から昭和2年以降に制作されたことが明かである。タイルは25頁全てがカラーで掲載され、総点数は291点で当時としては一般的なビクトリアンタイルの6インチ正方形のマジョリカタイルが掲載され、中程に色無地・艶消し（マットやマーブル系）四枚組の中国風の柄が続く。一方日本的な6枚一組のタイルの後6インチ×3インチやそれ以下のボーダータイル、3インチ正方形や形象タイルがある。このカタログは淡陶タイルカタログの中でも最も多くのマジョリカタイルが掲載されている。

No.7-Cは英語により品質や耐久性が説明されている。タイルは9頁全てがカラーで掲載され、総点数は141点で中国風やビクトリアンタイルの6インチ正方形マジョリカタイルが掲載され、最後に6インチ×3インチタイルが掲載されている。特にマジョリカタイルのみ掲載されていることが特徴的である。なおこのカタログも海外専用に作製されたカタログであろう。

No.12は日本語により「受賞概記（明治22年スペイン萬國博覧會～昭和3年國産化學工業博覧會）」、「弊社ノ沿革」が表記されている。タイルは19頁がカラー、11頁がモノクロで掲載され、総点数は367点である。カラー頁の前葉は色見本や6インチ正方形の色無地タイル・マット系タイルが並ぶ。中程にマジョリカタイルがあるものNo.7に比べるとはるかに少ない。後葉には結晶タイルやクッションタイルや文字タイルが目立つ。20頁以降は白無地の役物タイルが多数掲載されている。なおこのカタログでは各頁の裏側にカタログ「御入用ノ方ハ住所氏名ヲお書きください」とあり、神戸方面を中心とした数十人の名前や住所が書き込まれている。その中に「兵庫県立工業学校建築科4年と氏名の記載があり、これを調べた結果、このカタログに氏名を記載したのは昭和5年であることが判明した。

写真21　淡陶タイルカタログ

No.13は日本語表記でNo.12と同様である。タイルは14頁がカラー、10頁がモノクロで掲載され、総点数は260点である。カラー頁は先頭頁に色見本があり、後半に色無地タイルからマジョリカタイルが掲載されている。前半部に白無地の役物タイルが掲載されているのがNo.12との違いである。

ナンバー不明のカタログは日本語表記で口絵のモノクロ写真は福良工場の正面が写し出され、その後の4頁は作業場写真が3枚続く。作業場写真1はボールミル、2は左にメンブランポンプ、右にフィルタープレス、3は

フリクションプレス機がある。タイルは15頁がカラー、５頁がモノクロで掲載され、総点数はカラー132、モノクロ78点である。カラー頁は前半に見られマジョリカタイルの組み合わせ文様を例示している。後半に白無地の役物タイルが名称入りで掲載されている。日本語表記でありながらマジョリカタイルを最初に掲載することや、白無地の役物タイルが少ないことなどから、少なくとも№12に先行するものと考えられる。なお、作業場写真の一部は淡陶が出版した「日本のタイル文化」に掲載され、これには大正時代の仕事風景として紹介されている。

これらのカタログは制作年代表記がないことから、タイルの内容等により考察してみた。日本語表記の№12から№13へ時代が下ると考えられるが、その理由としてカタログナンバー数字が増すこと、マジョリカタイルの減少、白無地タイルの多用されていることでほぼ間違いないと考えられる。ナンバー記載の無いカタログは前述のようにマジョリカタイルの文様構成を紹介するなど№12に先行するものと考えられる。また本社住所が大阪市西区阿波座下通りとあり、これ以外のカタログの阿波座中通りと異にする。外国語表記の№7と№7-Cは海外向けということで文様構成だけでは国内向けとの対比は困難と考えられる。海外では華僑を中心にマジョリカタイルが多用されていたことは、台湾南部を始め澎湖群島や金門島に現存する家屋等で見受けられる(9)。日本では大正時代に一部建物に使用されたが、そのころから白無地タイルが主体となり、国内のマジョリカタイル需用は激減する。カタログ内のタイルナンバーも数字の若いものが多いこと、口絵の昭和２年の陸軍許可があること、№12に先行することから、昭和２年以降、５年までの間に位置づけられよう。

(7)　流通・使用例

タイルは敷瓦として使用される場合もあるが多くは内外壁の装飾等として使用される。また年代が確定される建物に使用されたタイルは時期決定に重要な資料となる。そこで国内外における建造物等への使用例を見てみたい。

明治時代に製造された淡陶の湿式タイルは「淡路焼敷瓦」として知られている。このタイルの使用例は僅かである。南淡町賀集立川瀬の田中邸では明治37年に建築された風呂場に使用されている（写真図版134　１～３）。浴室洗い場付近の腰タイルとして、出土タイルのT2とT49と同型の黒基調の瓔珞文タイル（６インチ正方形・三角形）を組み合わせ横方向に文様を連続させ、その上下に白・緑・茶・黄・黒色の８インチ正方形の色無地タイルが平行する。湯船付近には出土タイルのT12（６インチ正方形）とT54（６インチ三角形）と同型タイルを横方向に配している。その下に平行しては８インチの色無地タイルがある。また焚き口付近には出土タイルのT1やT48の８インチタイルとT2やT4に見られる６インチの瓔珞文タイルの同型タイルが使用されている。これら二種類のタイルは素焼きである。これは淡陶の歴代の主要メンバーであった田中萬米邸であるからこそ再利用できたものである。

南淡町北阿万伊賀野の欅田邸では中庭への通路床面に湿式タイルが使用されている（写真図版134　８）。出土タイルT2黒基調の瓔珞文タイルとT7の草花文タイルと同型のものである。欅田邸は明治末年ごろのものとされている(10)。T2は多数出土資料があるが、T7は１点のみの出土であり少量生産されたものと考えられる。なおこの建物は淡陶の社長など幹部を継いだ欅田善九郎邸である。

乾式タイル使用例としても年代が確定できる資料は少なく、前述の田中邸で大正７年建造の風呂場の白無地タイルがある（写真図版134　６・７）。この風呂場は室内がオンドル的な暖房機能を備えた風呂場である。タイルの剥離箇所から裏型の圧痕から裏型の型式が読みとれ、６インチ正方形Ｃタイプにあたることが判明した。ただし中央部にDKマークがないもので出土品には例はないがこの裏型が大正時代

写真22　「臺湾與荷蘭老磁磚展」図録

中頃には存在したことを証明する資料である。また田中邸には大正11年当時の皇太子が淡陶を視察された際に献上品として製作されたタイルの複製品を所蔵している（写真図版134 4・5）。この裏型型式も時期決定に重要な決め手になるが、接着剤により板に貼り付けられており裏型を詳細に観察することができなかったが、側辺の凹凸の数などから6インチ正方形Cタイプであることが推定される。

前述の欅田邸にも乾式タイルが使用されている[11]。風呂場壁面に飾られた絵つけタイルは大正7年に建造された。この他、愛知県瀬戸市の玉の湯に使用されているタイルは淡陶の絵つけタイルで裏型はB1である。

台湾では「臺湾與荷蘭老磁磚展」と題する台湾のオランダタイルと伝統的タイルを建築、美術等の分野から研究した展覧会が開催された[12]。この展覧会図録には大正時代や昭和初期の日本製乾式タイルが多数掲載されている。当時の民家の外壁にマジョリカタイルが多数使用される他、墓地前面の塀、家具の装飾にも使用されている。これら多数存在する日本メーカー製タイルの約半数が淡陶の製品である[13]。

その他の国内使用については昭和32年頃の淡陶経歴書によると東京大学安田講堂のほか57箇所の官公庁や企業の主要建物に使用されている。ただしほとんどが外壁やトイレなどの水回りに使用された色無地タイルと考えられ、発掘調査で出土したマジョリカタイルの使用は少数と考えられる[14]。

(8)　編年

タイルはその分類を成形・形態・厚さ・文様・色調（釉薬）・胎土に分けられるが、すべてがその編年要素になる。大きくは湿式タイルが明治時代20年代～明治時代末頃まで。乾式タイルが明治41年以降に分けられる。さらに各タイルの詳細な編年案については出土層位やカタログ掲載の有無、文様などから考えていきたい。今回の出土タイルの内、データ入力したのは湿式タイル2,500点、乾式タイル1,175点合計3,575点である。

出土層位は下層、中層、上層、表層に大別される。堆積状況が把握しやすい1区の出土状況を整理すると下層では湿式3点、乾式0点、中層では湿式180点、乾式4点、上層では湿式1056点、乾式33点、表層では湿式261点、乾式453点となる。全体的傾向は湿式が乾式より下部から出土していることは明白である。これらから湿式の中でもT2・T4・T5・T9・T11・T12・T14・T36は下部から、それ以外が上部から出土しており、古→新の傾向が読みとれる。また乾式タイルは中層iからあり、表層まで見られる。この中でもT83・T143などが湿式タイルと同層で出土しており、古い様相を示す物である。

湿式タイルの裏面調整と胎土種類の関係について考える。クシガキ条線のない物はT21～T23・T25など（47点2％）で1種土（8点17％）2種土（38点80.8％）、クシガキ6条はT2やT4の系統など（280点12.2％）で1種土（30点10.7％）2種土（244点87.1％）不明（6点2.2％）、クシガキ7条はT9・T36など（1793点78.4％）で1種土（272点15.2％）2種土（1489点83.0％）、クシガキ8条はT1・T11・T12など（137点5.8％）で1種土（55点40.1％）2種土（80点58.4％）不明（2点1.5％）、クシガキ9条はT5・T37など（14点0.6％）で1種土（15点100％）2種土（0点0％）、クシガキ10条はT43-2など（2点0.1％）で1種土（2点100％）2種土（0点0％）、クシガキ11条はT2・T4・T5など（18点0.8％）で1種土（1点5.5％）2種土（16点88.8％）である。これら1種土で、クシガキ7条が205点78.5％で、7条以外のものが56点21.4％である。2種土は7条が1078点87.6％を占め、それ以外は152点12.3％と減少す

第19表　表層および石垣背後（1区）のタイル分析表

湿式タイル文様分布

表文様型式	表層	石垣背後(1区)							計
		上層0	上層i	上層ii	上層iii	中層i	中層ii	下層	
T001	1					1			2
T001系		1	2		1				4
T002		3	1	4	9	1			18
T002系	2	3	3	1	21	6			36
T002か004	33	13	35	16	31	8	1		137
T002か004系	26	11	48	19	31	22	1		158
T003			1						1
T004	8	5	23	11	36	12			95
T004系	15	3	32	32	48	28	2	1	161
T002か4系									
T005	9	3	29	2	14	4			61
T005系	29		23	21	46	6		1	126
T005か52	11	2	39	26	37	11	2		128
T006			3	3	7	2			15
T007									
T008									
T009	5	4	7	11	16	18	2		63
T009か53	9	2	11	9	38	13	1		83
T010			2		3	1			6
T011									
T011系				2	3	2			7
T011か12	3	1	1		1	4	1		11
T011か12か54			2		1	2	1		6
T012									
T013	1								1
T014	1						1		2
T015	6	1	4		2				13
T016	1	1	17	6	4	3			32
T017	1		1	1		1			4
T017か55			1		1	1			3
T018	1		4		2				7
T019					1				1
T020	1		1						2
T021									
T021系	3	1	1						5
T021か22	3	3	1	1	1				9
T021か22か56	1		2	1					4
T022	1								1
T022か56			1						1
T023									
T023系									
T023～24-2	2	1	5	2					10
T023か23-2	6		5	2					13
T023-2					1				1
T024	4		1	2	1	1			9
T024-2			2						2
T025	5	1	4	1	1	1			13
T025か58	1	1	2						4
T026	3		1						4
T027									
T027～28-2					1				1
T028									
T028-2									
T029	2				1				3
T030	1		1						2
T031	5		2						7
T032									
T033									
T034									
T035									
T036	6		2	2	3	4			17
T036か59か60	18	2	10	1	22	6	2		61
T037	1								1
T038					3				3
T039			2						2
T040						1			1
T041						1			1
T042									
T043					1				1
T043-2	1								1
T044			3						3
T045			1		1				2
T046									
T047									
T047か48	1		5						6
T048			1						1
T049				1	2				3
T049～51	20	9	8	10	10	3		1	61
T050					1				1
T050か51			3		5				8
T051				1					1
T052	6	3	13	1	2				25
T053	1		3		3	2	1		10
T054									
T055	1								1
T056		1			1				2
T057	2	1	1						4
T058	1								1
T059					1				1
T059か60			4	1					5
T060	1								1
T061	1				1				2
T062									
T063			1						1
T064	1								1
T065									
計	261	76	375	190	415	165	15	3	1500

乾式タイル裏型分布

裏型型式	表層	石垣背後(1区)							計
		上層0	上層i	上層ii	上層iii	中層i	中層ii	下層	
A01	9								9
A02	4		1			1			6
A03	31	4	7	1	7	1			51
A04	33								33
A05	75	1							76
A06	12								12
A07	4								4
A08	3								3
A09	1								1
A10	1								1
A11	6								6
A12	13				1				14
A13	4								4
A14	4								4
B01	4								4
B02	2								2
B03	2			1					3
B04									
B05	1								1
B06	1								1
B07	1								1
B08	1								1
B09	1		1						2
B10	2								2
B11	1								1
B12	1								1
B13	5			1					6
B14	1								1
B15	1					2			3
B16	3								3
B17									
B18	9		1						10
B19	2								2
B20	1								1
B21	3		1						4
B22	1								1
B23									
B24									
B25	1								1
B26									
C1									
C2	1								1
C3	1								1
C4	6								6
D1	1								1
D2	12								12
D3	4								4
D4	34			2					36
D5	8								8
D5-2	1								1
D6	68		1		1				70
E1									
E2	35		1						36
E3	15								15
E4	11								11
F1	5								5
F2	1			1					2
G1	1								1
H1									
I1									
I2	1								1
J1									
J2									
役物無紋	4								4
計	453	5	13	6	9	4			490

湿式タイル　クシガキ条線分布

クシガキ本数	表層	石垣背後(1区)							計
		上層0	上層i	上層ii	上層iii	中層i	中層ii	下層	
クシガキ0条	7	1	6	2	3	2			21
クシガキ6条	30	11	16	15	21	13	1		107
クシガキ7条	216	59	341	171	369	143	11	3	1313
クシガキ8条	7	4	16	2	11	3	3		46
クシガキ9条				1	2	1			4
クシガキ10条	1	1							2
クシガキ11条					3	1			4
計	261	76	379	191	409	163	15	3	1497

湿式タイルの胎土（1種・2種）分布

	表層	石垣背後(1区)							計
		上層0	上層i	上層ii	上層iii	中層i	中層ii	下層	
1種	24	15	45	43	99	31	4		261
2種	231	61	337	148	310	129	11	3	1230
計	255	76	382	191	409	160	15	3	1491

第20表　タイル消長表(1)

時代	明治20年代	明治30年代	明治40年～明治末
画期	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
特徴	〔湿式〕 ・文様等（手描き・金彩） ・裏調整（ナデ・クシガキ斜格子主体）	〔湿式〕 ・文様等（手描き・レリーフ） ・裏調整（ナデ・クシガキ本数不揃い） ・胎土（1種→2種へ）	〔湿式〕 ・文様等（レリーフ・チューブライニング・三角形タイル減少） ・裏調整（クシガキ本数7本） ・胎土（2種） 〔乾式タイル生産開始〕 ・文様等（レリーフ主体）
表文様	湿式 湿式	湿式 湿式	乾式 湿式・乾式 湿式・乾式 湿式・乾式 乾式 乾式 湿式・乾式
裏調整	 クシガキ斜格子	 クシガキ	 クシガキ7本 A3

タイル消長表(2)

大　　正	昭和初期～昭和（戦前）	昭和（戦後）以降	時代
Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	画期
〔乾式〕 ・文様等（チューブライニング主体、レリーフ減少・スペシャルエンボスタイル及び銅版転写タイル・色無地タイル生産）	〔乾式〕 ・文様等（国内向は色無地タイル、海外向はマジョリカタイル） ・第二次世界大戦時はタイル生産中止	〔乾式〕 ・文様等（国内向は色無地タイル、海外向はマジョリカタイル） ・昭和22～27輸出品にMADE IN OCCUPIED JAPAN印	特徴
乾式（銅板転写） 乾式 乾式（スペシャルエンボス） 乾式 乾式（マーブル） 乾式 乾式	乾式 乾式	乾式 乾式	表文様
A4 B1 C1	E4 D4 F1	G1 G系	裏調整

る。これらの時期を推測できる紀年銘資料との関係を考えるとクシガキ７条が主体をなすが、それ以外のものも多く含むものが明治20～40年ごろまでの資料と考えられる。特に東工大資料の（写真図版133１）やダントー技術研究所（写真図版132　DT１）は１期として明治20～30年頃の金彩手描き資料と位置づけできる。また田中邸や欅田邸に使用されているT１～T３・T12は１種土の割合が多く、クシガキ７条以外の割合が他に比べて多い。これらは２期として明治30～40年頃の資料といえる。その他の湿式タイルの資料はクシガキが７条で２種土の割合が高く、乾式製法が本格化するまでの期間で３期として明治40年代の資料として位置づけられよう。

乾式タイルでは表文様の変化もあるが、特に裏型文様は編年に有効と考えている。その理由として金型は圧力をかけられるため破損しやすく、使用期間が限られることなどから、自社の金型部で絶えず鋳造されていた。このことは短期間の使用から時代の変化を写しやすいと言える。編年の指標となるのは紀年銘のあるタイルと年代が推定できるタイルカタログの掲載・未掲載および建築年代の明確な使用例からである。

乾式タイルの表文様表現のうち「レリーフタイル」と「チューブライニング」を１区の出土層位で比較すると中層ｉではレリーフ２点100%でチューブライニングが０点０%、上層iiiではレリーフ11点85%でチューブが2点15%、表層ではレリーフ172点46%でチューブライニングが198点54%となり、レリーフからチューブライニングへの移行が窺える。また裏型の変遷を出土層位と紀年銘および使用例で考えてみた（第57表参照）。この結果、概ねA→B・C→D・E→F・G・Hの変遷が考えられる。ただし６インチ×３インチタイルではB3が古く、B4～B6およびA6・A7が新しい。これら乾式タイルの編年も紀年名や使用例からも裏付けることができる。またこの中でもA1～A3とA3とA4には出土層位や胎土分析においても古い一群は湿式タイルの胎土と似るとことがあり、新しい一群はよりきめの細かい高品質なものになっている。

(9)　まとめ

近代初頭に生産されたタイルは淡路のほか瀬戸などで見受けられるがいずれも考古学的な発掘調査は実施されたことがなかった。珉平焼窯跡では地域において特に重要な歴史をもつ遺跡として発掘調査された。珉平焼から引き継いだ型づくり技法・奇抜な釉薬・精良な胎土などすべてを淡陶が引継ぎ、いち早く敷瓦（タイル）生産をはじめた"さきがけ"メーカーであった。

今回の資料は窯業跡から発掘された唯一のタイル資料であり、タイル生産の初期から現在にいたるまで我が国のタイル生産をリードしてきた資料の全貌が明らかになったことになる。

これら出土したタイルの編年は世界各国の近代遺跡や建築物の時期決定等に有効である。また我が国のタイルの基準資料であり、今後のタイル研究に欠くことの出来ない資料となる。

注(1)　山本正之氏は大正９（1920）年、兵庫県淡路島生まれ。旧制洲本中学校を卒業し東京の丸西タイルに勤務する。後に社長となり日本をはじめ世界各国のタイルの研究を行い、氏のコレクションは愛知県常滑市の世界のタイル博物館の主要館蔵品として公開されている。

注(2)　淡路陶器彩色薬法は賀集三平が明治19（1886）年に賀集珉平から受け継いだ釉薬技法をもとに独自の技法等をあわせて研究したものを淡陶社に譲渡したものである。具体的な内容は今後紹介したいと考えている。なお実見にあたっては能勢敏樹氏のご協力を得た。

注(3)　東京工業大学百年資料館の道家達将名誉教授、阿児雅之氏にご協力いただいた。

注(4)　東京工業大学　昭和10（1935）年　『平野陶磁器コレクション解説書』　18P。
平野耕輔　昭和15（1940）年　『布袋荘小誌』

注(5)　裏面には上段にDKの菱形マーク、中段に090515、下段にL.W.T.の文字がある。L.W.L文字は昭和50年～57年スリランカのランカウォール淡陶工場にて製作されたものであり、その関連資料の可能性もあるとのこと。

注(6)　『外神田四丁目遺跡』　平成16（2004）年　Ⅶ近世の遺物に敷瓦11点が報告されている。

注(7)　『日影町遺跡』　平成12年　日影町遺跡では銅版染付タイルが一点報告されている。

注(8)　『墨田区大平4丁目遺跡』

注(9)　台湾中原大学建築学科の堀込憲二先生のご教示による。

注(10)　『日本のタイル文化』では口絵カラー写真7頁には淡路・欅田邸便所の呉須の淡路焼敷瓦が紹介されている。今回の発掘調査では湿式タイルの呉須のものは未検出であり、瀬戸方面の製品の可能性が考えられる。

注(11)　『日本のタイル文化』口絵モノクロ写真3頁に「絵つけタイル貼りの風呂」として紹介されている。

注(12)　平成15（2003）年、台湾臺北縣鶯歌陶瓷博物館にて「臺湾與荷蘭老磁磚展」が開催され、1930～1940年代の日本製タイルの裏型やメーカー、文様などを多方面から研究している。

注(13)　台湾の中原大学建築学科堀込憲二先生のご教示による。

注(14)　我が国の戦前建物における淡陶タイル使用例は建築史などの各分野との共同調査が必要である。

参考文献

『日本のタイル文化』　日本のタイル文化編集委員会編　淡陶株式会社　昭和51（1976）年

菊川兼男ほか『三原郡史』　兵庫県三原郡町村会　昭和54（1979）年

山本正之ほか　『日本のタイル』　INAX出版　昭和58（1983）年

柿田富蔵ほか『日本のタイル工業史』　株式会社INAX　平成3（1991）年

阿木　香・新見　隆・日野永一・山本正之『日本タイル博物誌』　株式会社INAX　平成3（1991）年

『世界のタイル・日本のタイル』　世界のタイル博物館編　INAX出版　平成12（2000）年

リチャード・L・ウイルソンほか『日影町遺跡』　都立学校遺跡調査会　平成12（2000）年

堀込憲二「日治時期使用於臺灣建築上彩磁的研究」『臺灣史研究』第八巻第二期　中央研究院臺灣研究所籌備處　民國90（2001）年

糸蓼弘琪ほか『流光凝煉方寸間』　臺湾與荷蘭老磁磚展　臺北縣鶯歌陶瓷博物館　平成15（2003）年

佐藤一信ほか『ゴッドフリート・ワグネルと万国博覧会』　愛知県陶磁資料館　平成16（2004）年

『外神田四丁目遺跡』　東京都埋蔵文化財センター　平成16（2004）年

協力機関

ダントー株式会社・世界のタイル博物館・株式会社丸英・兵庫県立兵庫工業高等学校

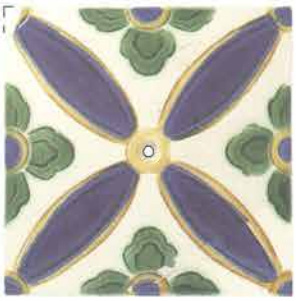
T1

T3

T2

T4

T5



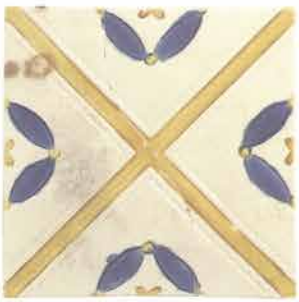
T6

T7

T8

T9

T10



T11

T12

T13

T14

0 20cm

第89図　出土タイルカタログ(1)

T15

T16

T19

T20

T21

T22

T23

T24

T25

T26

T29

T30

T28

T27

T28-2

T31

第90図　出土タイルカタログ(2)

T32

T33

T34

T35

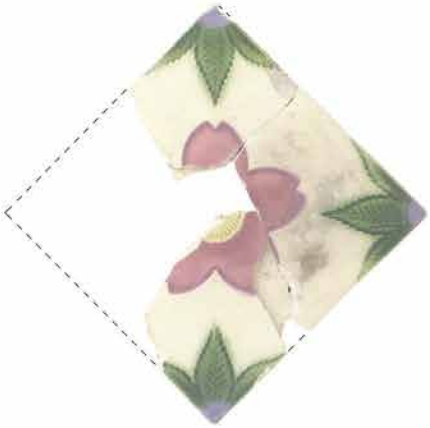
T36

T37

T38

T39

T17



T18

T41

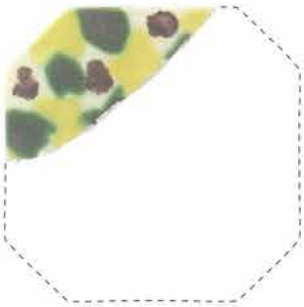
T42

第91図　出土タイルカタログ(3)

T44

T43

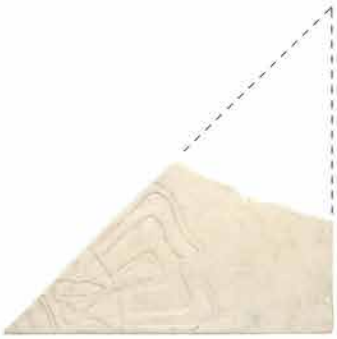
T43-2



T46

T40

T45



T47

T48

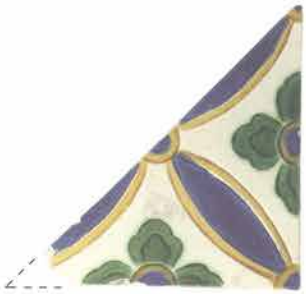
T49

T50

T51

0 20cm

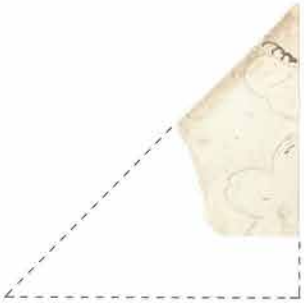
第92図　出土タイルカタログ(4)



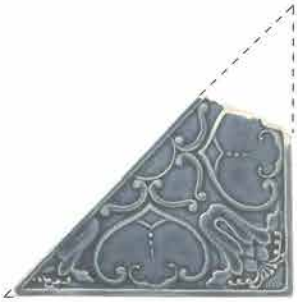
T52

T53

T54

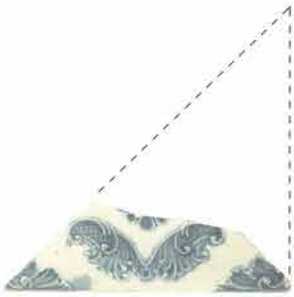


T55



T56

T57



T58

T59

T60

T63

T62

T61

T64

T65

第93図　出土タイルカタログ(5)

T66

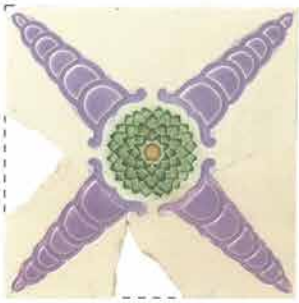
T66-2

T67

T68

T69

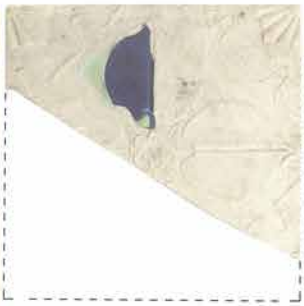
T70



T71

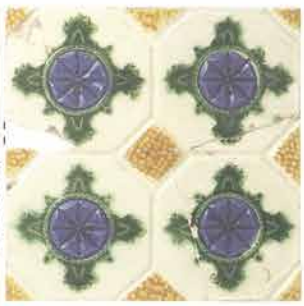
T72

T73



T73-2

T75



T79

第94図　出土タイルカタログ(6)

T76-2

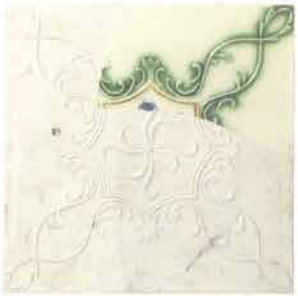
T76

T77

T78

T80

T80-2



T81

T83

T82

T82-2

T84

T85

T92

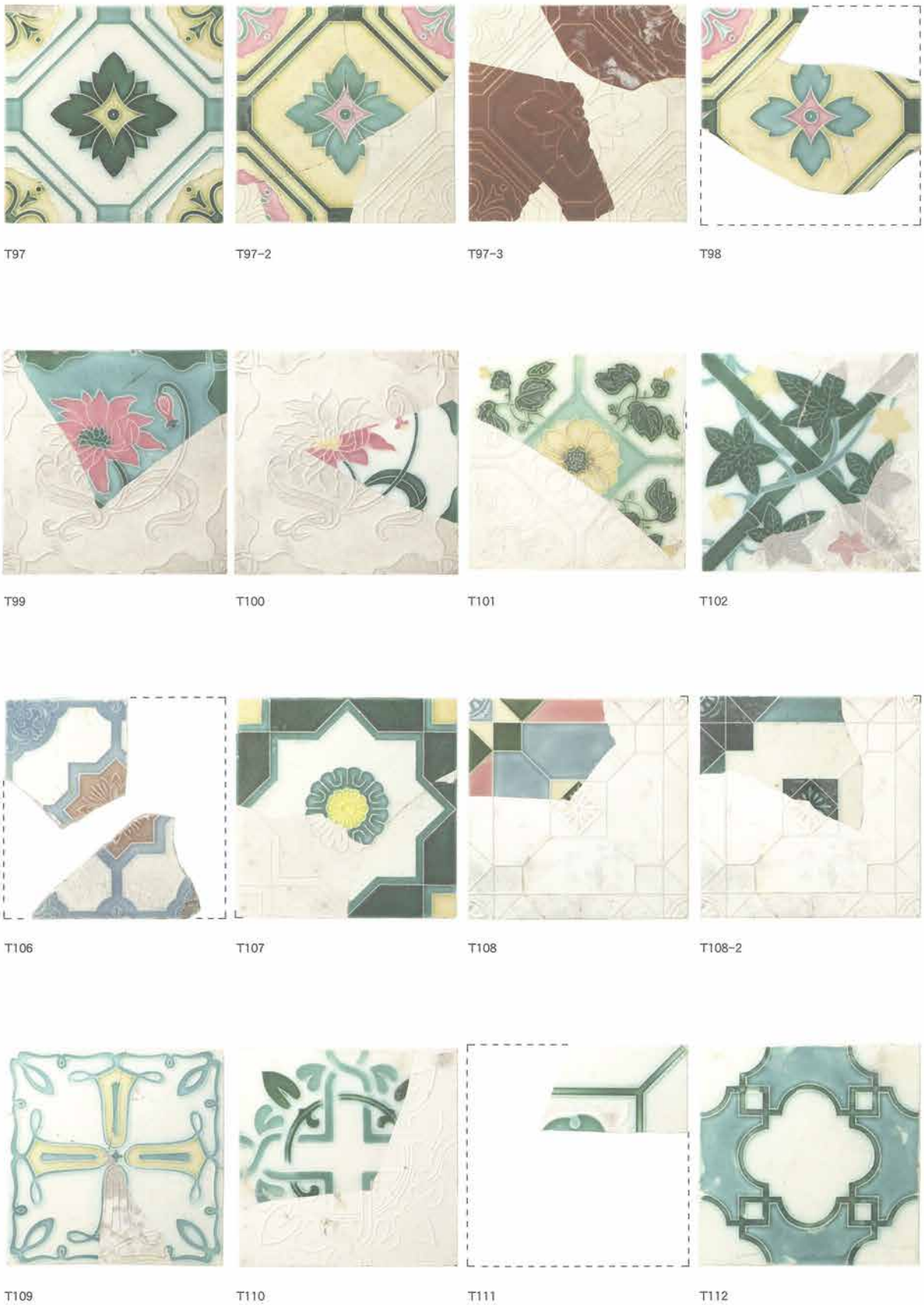
T93

T87

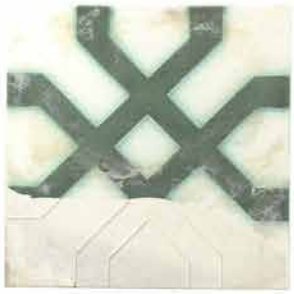
T96

第95図　出土タイルカタログ(7)

第96図　出土タイルカタログ(8)

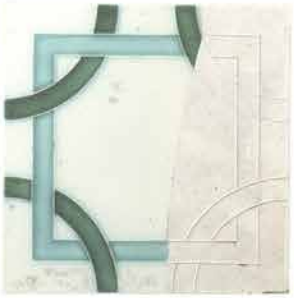


第97図　出土タイルカタログ(9)



T113

T113-2



T114

T117

T115

T116

T95

T118

T120

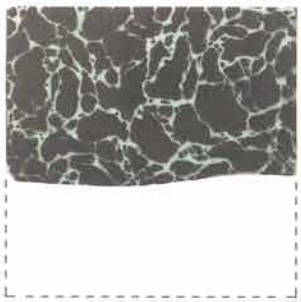
T121

T122

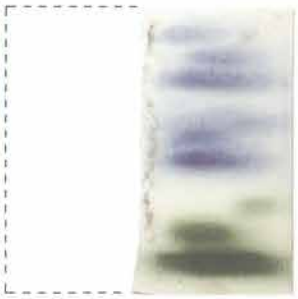
T119

T119-2

第98図　出土タイルカタログ(10)



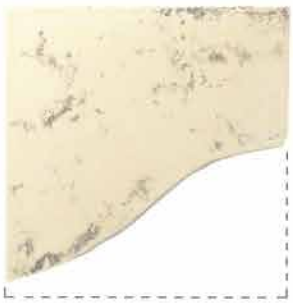
T139



T140

T192

T192-2

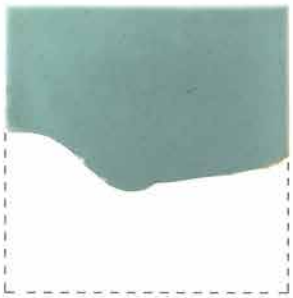


T192-3

T192-4

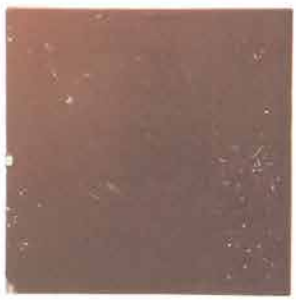
T192-5

T192-6



T192-7

T192-8



T192-9

T193

0 20cm

第99図　出土タイルカタログ(11)

T123

T124

T125

T126

T127

T128

T129

T130

T131

T132

T133

T134

T135

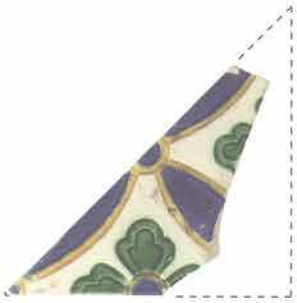
T136

T137

T138

0 20cm

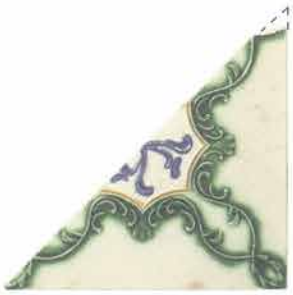
第100図　出土タイルカタログ(12)



T141

T142

T143



T144

T145

T146

T147

T148

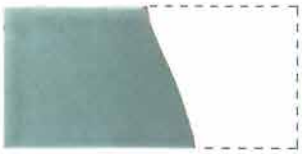
T148-2

T150

T149

T151

T152



T194

T194-2

T153

T195

T195-2

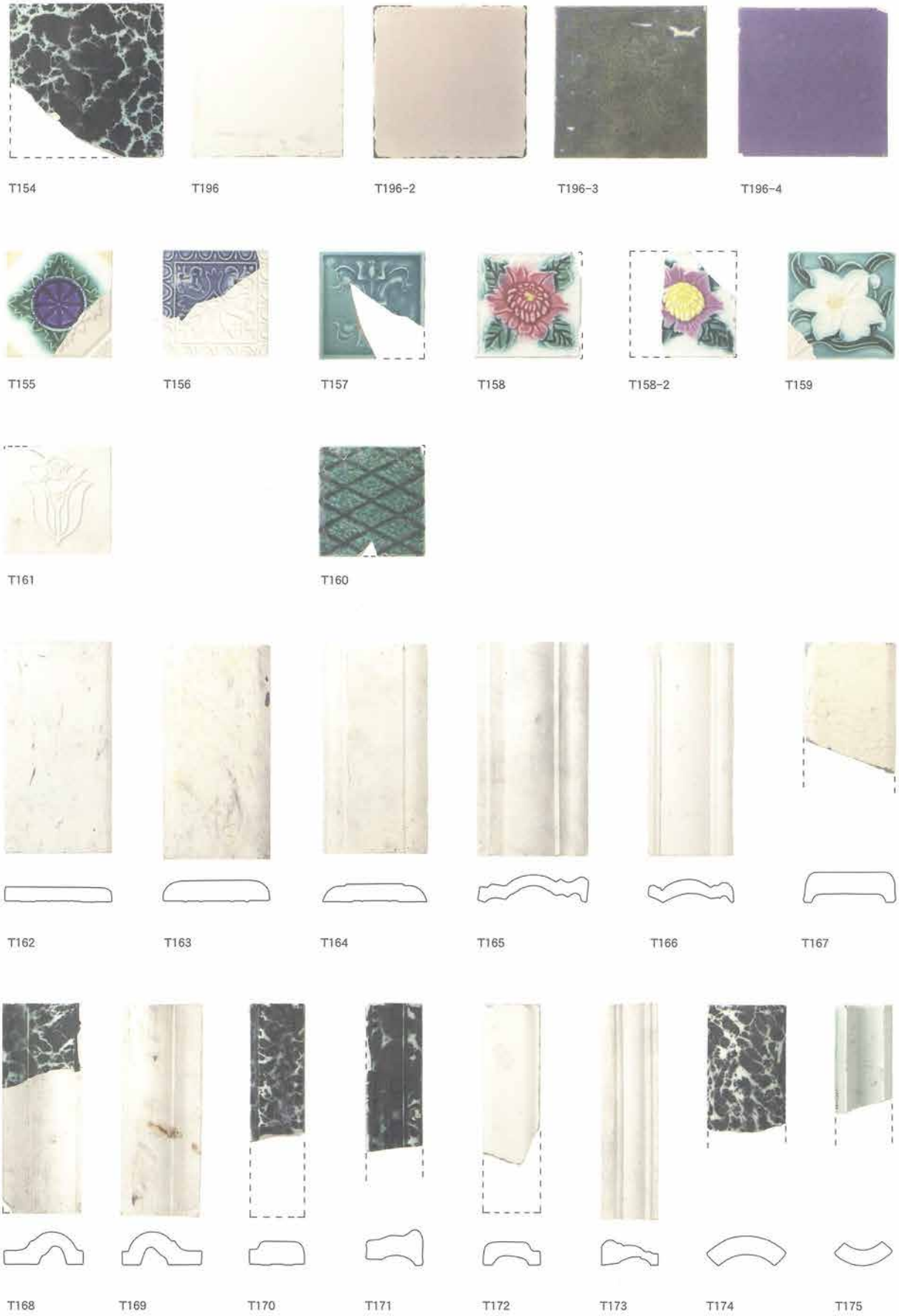
T195-3

T195-4

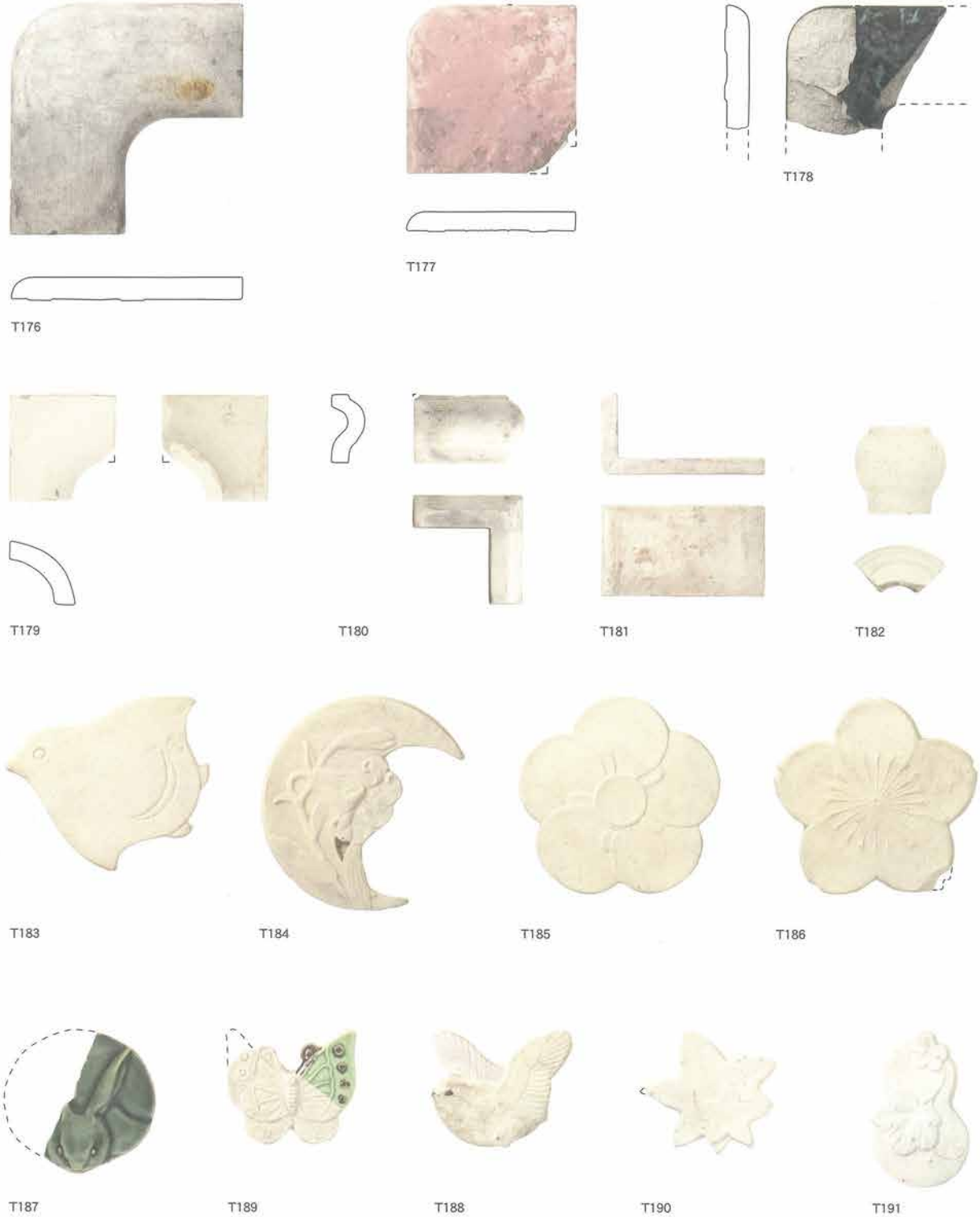
T195-5

0 20cm

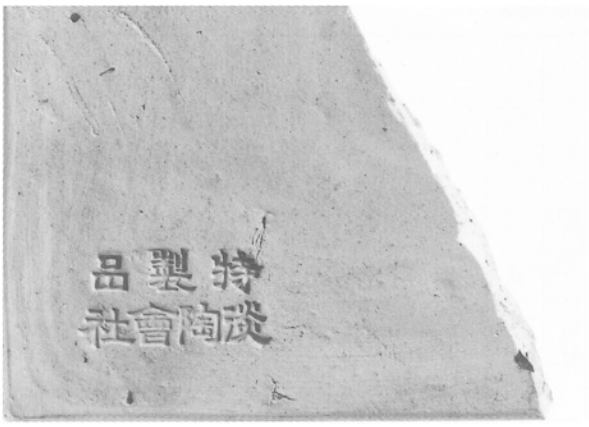
第101図　出土タイルカタログ(13)



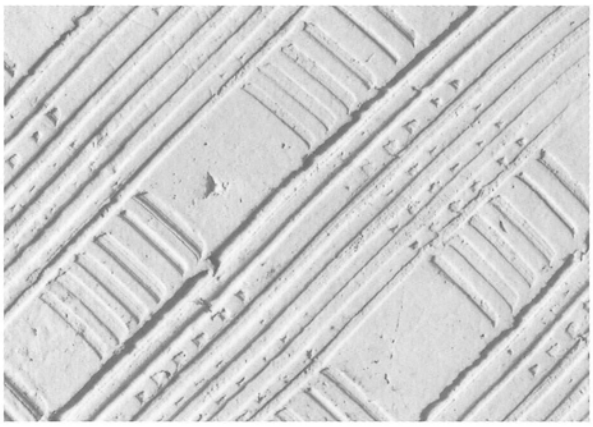
第102図　出土タイルカタログ(14)



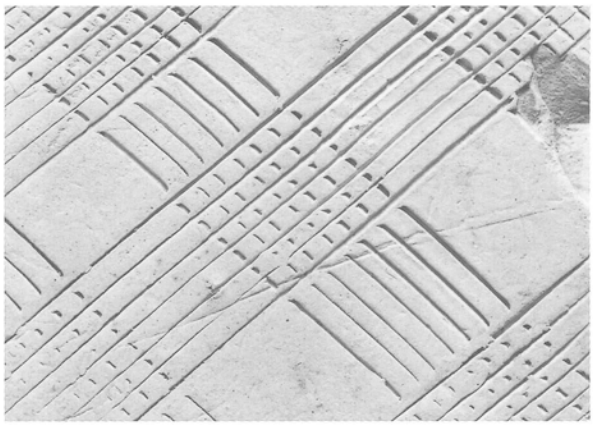
第103図　出土タイルカタログ(15)



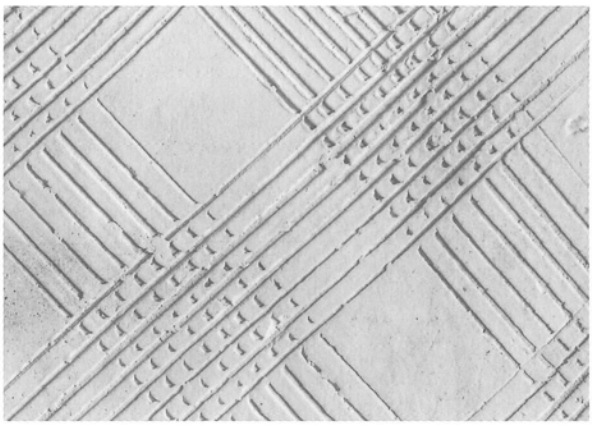
ナデ調整



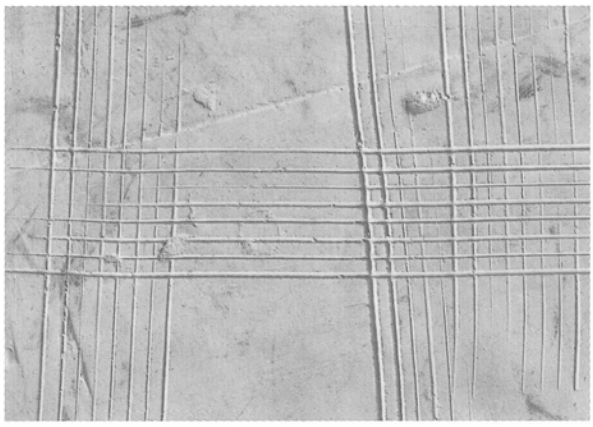
クシガキ６条



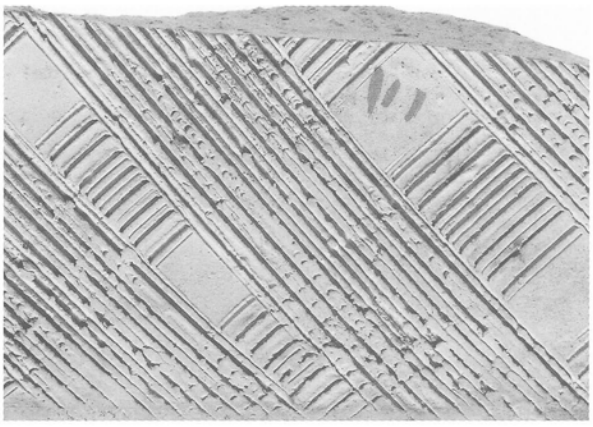
クシガキ７条



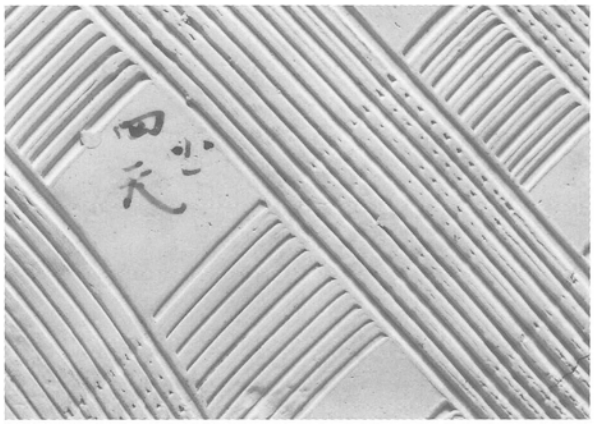
クシガキ８条



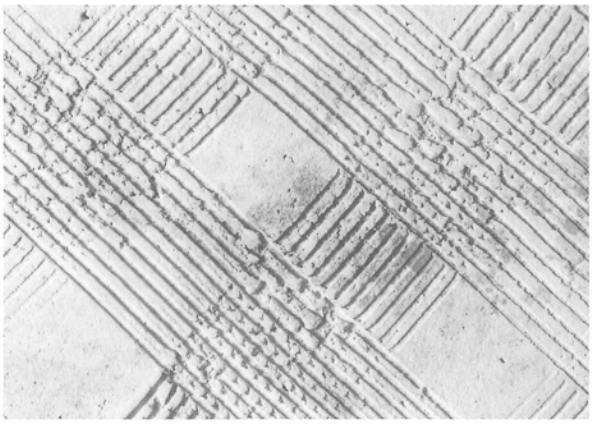
クシガキ８条（十字方向）



クシガキ９条



クシガキ10条



クシガキ11条

第104図　出土湿式タイル　裏面調整

形態	規格	型式	細　分	規格	型式	細　分
平面	8″×8″正方形	A〔格子〕	A1	6″ 1/2 三角形	A	A2
	6″×6″正方形	A〔格子〕	A3（中央千鳥マーク） A4（中央DKマーク） A5（中央マークなし）			
		B〔横帯〕	B1（中央DKマークあり） B2（中央DKマークなし）			
		C〔横帯に縦長方形凹み〕	C1（両端に文字あり） C2（下方に DANTOKAISHA JAPAN） C3（DKに対向する文字あり） C4（両端に文字なし）			

第105図　出土乾式タイル　裏型分類(1)

形態	規格	型式	細　分
平面	6″×6″正方形	D〔横帯に縦長方形凹み〕	D1（縦台形短い） D2（四隅部に小さな薄片部あり） D3（DI中央のDKマークをナデ消し） D4（四隅に大きな隅切薄片あり） D5（D3下方に文字） D6（D3の中央にマークなし）
		E〔縦横区画〕	E1（中央マークあり） E2（中央マークなし） E3（E2中央円形凸部あり） E4（E3の四隅に正方形の薄部）
		F〔正方形凸部〕	F1 F2（下部にJAPANあり）
		G〔横細線〕	G1
		H〔横細線＋縦横区画〕	H1

第106図　出土乾式タイル　裏型分類(2)

形態	規格	型式	細　分
平面	6″×3″長方形	A	A6（格子小さい）　A7（格子大きい）
		B	B3（千鳥＋社名あり）　B4（DKマーク横方向）　B5（DKマーク縦方向）　B6（DKマークあり）　6″×2″長方形 B　B7　6″×1.5″長方形 B　B8
		D	D6（D4の縦圧縮し、文字なし）
曲面	6″×3″長方形	A	A8（千鳥＋社名あり）　6″×2.3″長方形 A　A9（マークなどなし）
	6″×1.5″長方形	A	A10（千鳥マークあり）　A11（マークなし）
	6″×2″長方形	B	B9
		I（区画なし）	I1　6″×1.5″長方形 I　I2

第107図　出土乾式タイル　裏型分類(3)

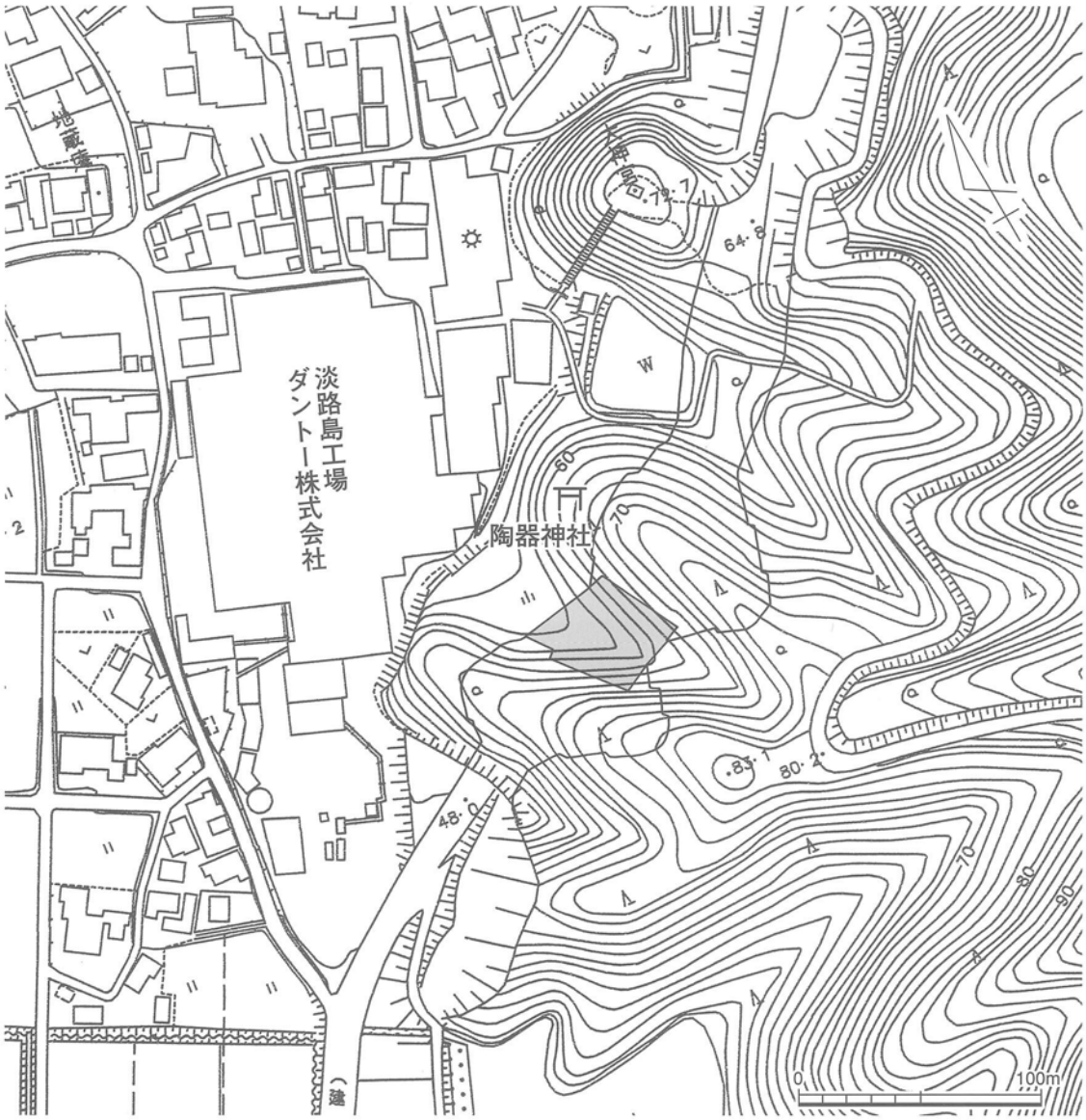
形態	規格	型式	細　分
平面	4.3″×4.3″ 正方形	B	B10（DKマーク大） B11（DKマーク中） B12（横帯途切れ　DKマーク小）
	4.3″×2.3″ 長方形	B	B13（DKマークあり） B14（円形台部あり DKマークなし） B15（B13に中央円形凸部なし） B16（横帯断面台状） B17（横帯両端傾斜） B18（B17のDKマークなし）
	3″×3″ 正方形	A	A12（千鳥マーク） A13（DKマーク） A14（マークなし）
		B	B19（DKマークあり） B20（DKマークなし） B21（縦帯） B22（縦帯上下途切れ） B23（D22のDKマーク小）
	四隅	B	B24 B25 B26
曲面	笠木	J	J1　丸隅 J2　角隅

第108図　出土乾式タイル　裏型分類(4)

第3節　さいごに

これまで、発掘調査の成果に加え、胎土および釉薬の分析、遺構・遺物の検討をそれぞれ行ってきたが、最後にそれらを総括して、珉平焼窯跡の調査報告を終わることとする。

まず、現場での調査から、珉平焼が創業されて以降、明治・大正年間を通じた調査地周辺の景観についてであるが、今回の調査区は現在のダントー株式会社淡路島工場（以下、ダントー工場）の南東方向の谷部に位置している（第109図）。調査では、大正時代に操業していたコウカシ窯を中心とした近代窯業の作業場跡が発見されたが、賀集珉平が製陶に携わった江戸時代後期から幕末期の珉平焼の窯場については、ダントー工場の敷地内に所在していたものと考えられる。これは、淡陶株式会社（当時）の元社員や地元の方の「昔の登窯はダントー工場に近い、尾根の先端から谷の口部にあった」という証言[1]や、天保12（1841）年、珉平が窯業守護を目的に藩の許可を得て白石山に造営した陶器神社[2]がダントー工場に向いていることなどが挙げられる。また、前節でも紹介した珉平晩年の明治3年の窯場記録である『陶器竈建物諸道具取調帳』には、「窯拭建物之分　一　御役所　一巻　二階付（中略）一　新御竈一巻



第109図　調査地周辺の地形図

屋根大破ニ相及居申候　一　同處御蔵　一巻　二階付　一　同處細工場　一巻　二階付　屋根大破ニ相及居候申候（後略）」と記載され、高津全雄も「役所長屋を備え、自分の屋敷のうちに二階付の前蔵後蔵を持ち借家が四棟あり製作関係の建物として、合計十六棟の建物を備えて当時としては非常に大規模な構造の陶器製作所を作り大々的におこなわれていたのが良く分かります」と私見を述べている。これらの建物群の記載からは、同地には広大な敷地が存在しており、それを引き継ぐ形で淡陶（ダントー）工場が建設されたと考えられる。これは、現在も近接した地点に珉平の子孫の邸宅があることからも、その可能性は高いと考えられる。

続いて、江戸時代後期から幕末期の珉平焼の窯場が、その後どのようにして、今回の調査で確認された大正時代の作業場跡へと変遷していったのかについて少し考えていきたい。珉平焼窯跡の本発掘調査にあたり、事前の確認調査（平成14年12月）では、周辺を改めて踏査し、陶磁器類の散布は調査区が立地する谷部のみであることがほぼ間違いないとされている。珉平の没後から大正時代までは、明治期の約40年の時間が経過しており、その期間は出土遺物が語るように陶磁器類に加え、タイルが大量に生産されていた時期である。作業場跡の谷（東）側に高さ約４ｍを測る石垣が構築されており、その背後の土層断面（第10図）や窯前面下層の土層断面（第８・９図）を観察すると、人為的な堆積と考えるよりもむしろ、谷奥からの自然堆積であると判断される。このため、それらの大量の遺物群が今回の調査区のさらに谷奥から投棄されているとすれば、出土遺物の時期である明治20年代後半から大正時代初頭までの窯場が、その周辺に所在していたということが考えられる。調査区東壁の高さ約７ｍの遺物堆積層（写真図版13）は、安全管理のため、約１割の勾配を設け掘り下げを進めたが、その堆積層の下部には、焼土塊や被熱を受けた複数の煉瓦などが散見され、調査区壁際の近接する地点にも、さらに古い時期の窯あるいはそれにともなう施設があった可能性が想定される。また、遺物堆積層の最上層から谷奥へは約40～50ｍにわたって遺物の散布が認められ、数ヵ所に谷に直交する石垣の痕跡も確認される。これらのことから、珉平没後、おそらく淡陶社が設立された前後から、窯場（連房式登窯）は谷の最奥部へと移動し、そこから谷の口部に向けて、失敗品を投棄していたと考えられる。そして、投棄され続けた堆積層の崩落を防ぐために、石垣を構築し、それを繰り返して谷の口部へと降りてきたのではないかと想像される。今回の調査で発見された窯は大正時代のコウカシ窯であり、それにともなって作業場跡が造成されているが、この時期には陶磁器類およびタイル生産による機械化の導入と谷部での窯場スペースの確保が困難なことなどが重なり、ダントー工場に近接した地点に創業時以来、再び窯場が移動したと考えられる。しかし、これらの景観の変遷については、珉平焼の製陶期間（江戸時代後期～昭和初頭）を通じて、やきものを焼いた窯はまったく発見されておらず、周辺の状況からの推測であり、確定的な根拠がないのが現状である。今後、ダントー工場の敷地内周辺あるいは谷奥での発掘調査が行われる機会があれば、より詳細に復元されるものと思われる。

次に、出土遺物については、前節で土型・陶磁器類・タイルの各遺物について、現時点で出来る限りの考察を行っているため、ここでは明治・大正期の近代窯業の発掘ではあったが、珉平焼の生産地を調査した側から、珉平焼の特徴などを補足的に説明し、加えて、整理作業中、各方面の方々からご教示をうけたことについて若干、触れておきたい。

これまで、兵庫県内あるいは大阪・江戸・徳島など各地の城下町や武家屋敷跡などから出土する黄・緑・レモン色などに施釉され、型押し成形によって龍などが線刻された皿や蓮華などの陶器片は、その特徴的な色合いや成形法、裏面にみられる三角形のハリ支え（ピンハマ）痕などの技法上の特徴も併せ、

珉平焼として報告されている。これらの施釉陶器は、色調や成形技法を指標として、比較的容易に珉平焼と理解されており、事実、それらの遺物を実見したところ、珉平焼にほぼ間違いのないように思われる[3]。出土遺物の約6割を占める600箱近くの出土陶器を観察した中で、上記の釉薬の色調と土型によって画一化された皿の規格・文様構成、三角形のピンハマ痕などに加え、分析では調査区全域あるいは出土層によって大きな差異がみられなかった使用胎土も指標のひとつとして考えられる。これに対し、共伴する染付などの磁器製品については、肥前、瀬戸・美濃とは異なる、京・信楽を始めとする関西系と呼称される一群に分類されており、珉平焼が関西系染付の生産地のひとつとして認識されつつ、器形・技法・絵柄など比較検討すべき生産地側の考古学的な資料がないため、珉平焼として比定されていないのが現状である。今回の調査によって、磁器製品の特徴あるいは産地比定に繋がる考古学的な成果が注目されたが、前節でも触れたように、創業時から施釉陶器と併行して生産されていたことは確実であるものの、その出土量が極めて少数であったことや、遺物の大半が明治・大正期を中心とした近代のものであったことなどから、消費地側が期待する資料の提示には至らなかった。これらのことから、出土遺物についてもダントー工場の敷地内周辺での調査機会を待望しつつ、限られた時間内での整理作業であったため、遺物全般について、改めて多角的に詳細な検討を行い、珉平焼の様相を明らかにする必要があると考えられる。これは、賀集家に伝わる古文書類や『釉薬沿革報告書』に代表される淡陶関連の資料、鹽田力藏や北村彌一郎による調査記録など、今回の調査対象となった明治～大正時代を中心とした文献等の再検討も併せて重要であり、今後に残された課題である。

なお、整理作業中、「MADJA □EIT」および「 □A PAEIT」の判読不明であった英字刻印（写真図版119）について、その意味するところが解明されたため、紹介しておきたい。インドネシアの旧東インド会社の倉庫に眠っていた陶製品の一群の中に、唐三彩風の大皿と水指があり、その大皿の裏面に「MADJA PAEIT」の英字刻印が押印されているのが確認された。そして、「MADJA PAEIT」は現地で「マジャパヤ」と語られるインドネシアの旧ジャワ王朝名ではないかと考えられた。出土遺物の「MADJA □EIT」印は碗状の鉢に押印されているが、「 □A PAEIT」印は上記の大皿に類似する大型の丸皿の裏面に押印されている。英字刻印の出土は2点のみであるが、刻印の書体や大皿の三彩釉が出土遺物の三彩釉と酷似していることなどから、淡陶で生産された可能性が極めて高く、当時の東南アジア地域への輸出およびその流通の一端を垣間見る資料のひとつと考えられ、思いがけない発見となった[4]。

さいごに、今回の発掘調査および整理作業では、現場での調査・魚住分館での遺物整理・神戸での実測から編集作業まで、関係された方々には無理なお願いをし、多大な協力をいただきました。また、それら一連の作業を了承していただいた兵庫県淡路県民局地域振興部洲本土地改良事務所にも併せてお礼を申し上げます。

注(1) 発掘調査の期間中、元淡陶社員の方や地元の複数の方から同様のことをお聞きした。

注(2) 野口早苗「淡路焼・賀集珉平とその流れ」『兵庫県の歴史』第21号 昭和60年より。

注(3) 平成16年9月12・13両日、淡路島の淡路文化史料館（洲本市）において、第6回 四国城下町研究会が「四国・淡路の陶磁器Ⅲ―珉平焼の生産と流通―」と題して開催され、各地（徳島・香川・大阪・京都・江戸など）の遺跡から出土した珉平焼と報告されている遺物を実見する機会に恵まれた。

注(4) 『The Tile Front 2005』Vol.5 ダントー株式会社 平成17年に「珉平焼窯跡発掘調査レポート第2回 解明された流通軌跡」に経緯を含め、詳細が記載されている。

珉平焼（淡路焼）に関する文献等一覧

明治～大正年間

『日本地誌略　三』　文部省　明治７年

「九區　石細工　硝子　陶磁器　目録」（ウィーン万国博覧会出品目録）[1]

『澳國博覧会賞状及賞牌頒與表』　元澳國博覧会事務局編　明治８年

『米國博覧会報告書　日本出品部　第三』　米國博覧会事務局編　明治９年

『米國博覧会報告書　日本出品目録　第二』　米國博覧会事務局編　明治10年

黒川真頼『工芸志料』　博物局　明治11年[2]

英國イトン著・日本匹田友三郎譯『淡路遊記』　明治14年[3]

『洲本博覧会列品目録』　洲本博覧会編　明治17年[4]

『府県陶器沿革陶工伝統誌』　農商務省編　明治19年

賀集三平『淡路陶器彩色薬法記』　明治19年

従二位侯爵蜂須賀茂韶篆額『賀集珉平翁墓碣碑』　明治19年

バジル・ホール・チェンバレン『日本事物誌』　明治23年[5]

『農事調査』　三原郡役所　明治23年

『淡路国名所図絵』　暁　鐘成（木村明啓）編　松川半山・浦川公佐画　明治27年

エドワード・モース　『日本陶器目録』　明治33年

賀集輝吉『淡路焼創業者賀集珉平傳　附陶窯沿革之梗概』　明治39年

能勢敏雄『釉薬沿革報告書』　明治39年

「習業」『高等小學修身書』巻二　児童用　文部省　大正２年

大西林五郎編纂『日本陶器全書』　松山堂　大正２年

『名品集　陶磁器百選』第七輯　辻本寫眞工藝社　大正６年

大西林五郎・藤井理伯編纂『陶器全書續編　日本陶工傳』　松山堂　大正９年

高山甚太郎・鹽田力藏他『日本近世窯業史』　大日本窯業協会　大正12年[6]

妹背尚古『淡陶畫工沿革』　大正13年

今泉雄作・小森彦次『増補訂正　日本陶瓷史』　雄山閣　大正14年

昭和年間

『工學博士　北村彌一郎窯業全集』第三巻（非賣品）　社團法人大日本窯業協會　昭和４年

鹽田力藏『近代の陶磁器と窯業』　大阪屋號書店　昭和４年

小野賢一郎編『陶器講座』　賓雲舎　昭和10年

『三原郡教育會創立五十周年記念　郷土誌料展覧會出陳目録』　三原郡教育會　昭和12年

稲葉信之『陶器講座　淡路焼』　雄山閣　昭和13年

「業務」『高等小學修身書』巻二　児童用　文部省　昭和15年

『日本古陶銘款集』近畿編　平安堂書店　昭和15年

いちゐのや「淡路の珉平」『汎究美術』通巻第53号　昭和17年

『淡路焼珉平の名品特別陳列目録』　京都国立博物館　昭和31年
島田　清『賀集珉平』　兵庫県教育委員会・南淡町教育委員会・淡路公民館連盟・神戸新聞社　昭和36年
『賀集珉平遺作・遺墨展示会　目録』　兵庫県教育委員会・南淡町教育委員会・淡路公民館連盟・神戸新聞社　昭和36年
新見貫次「淡路焼の創始者賀集珉平伝」『兵庫県社会科研究会誌』第9号　昭和37年
島田　清「賀集珉平の人と事業」
欅田俊六「珉平焼の特徴」
藤井幸子「珉平焼について」
菊川兼男「賀集珉平の研究について」
以上『三原文化』19　兵庫県立三原高等学校文化部　昭和37年
『郷土百人の先覚者』　兵庫県教育委員会　昭和42年
巌淵紹安・広井　衛・渡辺茂之「賀集珉平」『三原文化』26　創立50周年記念　兵庫県立三原高等学校　昭和44年
豊田　進『阿波の陶磁』　雄山閣　昭和49年
『日本のタイル文化』　淡陶株式会社　昭和51年
『三原郡史』　三原郡史編纂委員会　昭和54年
豊田　進『阿波の茶道具図録』　昭和55年
堂角田隆治・筒井幸雄編『珉平名品目録』　藤原宗鉄　昭和55年
田中　弘『タイルの話』建築技術選書20　学芸出版　昭和55年
田中　弘『日本の焼物と珉平焼』　田中陶苑　昭和56年
『日本やきもの集成』7　近畿Ⅱ　平凡社　昭和56年
青木重雄『珉平焼と淡路のやきもの』　昭和58年
野口早苗「珉平が異国向陶器にかけた夢」『淡友会誌』1983　昭和58年
野口早苗「淡路焼・賀集珉平とその流れ」『兵庫の歴史』第21号　昭和60年
野口早苗「海を渡った淡路のやきもの」『歴史と神戸』第24巻5号　昭和60年
高津全雄「お福香合についての考察」『あわじ』第2号（淡路地方史研究会会誌第18号）　淡路地方史研究会　昭和60年
高津全雄「珉平焼製作について」『あわじ』第4号（淡路地方史研究会会誌第20号）　淡路地方史研究会　昭和62年

平成年間

青木重雄「珉平焼のすべて」『陶説』第441号　社団法人日本陶磁協会　平成元年
野口早苗「陶工「賀集三平」の生涯」『淡友会誌』1989　平成元年
『珉平焼』珉平焼展―珉平焼とその系譜　賀集珉平から忘吾園窯まで―図録　洲本市立淡路文化史料館　平成元年

『珉平焼［補遺］』―珉平焼とその系譜　賀集珉平から忘吾園窯まで―図録　洲本市立淡路文化史料館　平成２年
野口早苗「上方への夢」『淡友会誌』1991　平成３年
『日本のタイル工業史』　日本のタイル工業史編集委員会　株式会社INAX　平成３年
青木重雄『兵庫のやきもの』　神戸新聞総合出版センター　平成５年
野口早苗「博覧会の時代と珉平焼」『淡友会誌』1994　平成６年
高津全雄「珉平焼に就いて考察」『あわじ』第11号（淡路地方史研究会会誌第27号）　淡路地方史研究会　平成６年
高津全雄「珉平焼に就いて考察（続Ｉ）」『あわじ』第12号（淡路地方史研究会会誌第28号）　淡路地方史研究会　平成７年
日下正剛「考古学からみた四国のやきもの―珉平焼と源内焼―」『陶説』第566号　社団法人日本陶磁協会　平成12年
野口早苗「珉平焼の盛衰興亡」
北條ゆうこ「珉平焼出土資料について」
堀内秀樹「江戸の四国産陶磁器出土の様相」
以上『四国・淡路の陶磁器―生産と流通Ｉ―』第２回徳島城下町研究会　平成12年
『The　Tile　Front　2001』Vol.1　ダントー株式会社　平成13年

以上の文献等は、発掘調査が行われる以前のものであり、この他、兵庫県下あるいは徳島・東京など各地域の近世・近代の遺跡から出土遺物として珉平焼の報告がみられるが、発掘調査報告書に関しては、明記しなかった。

注(1)　「九區　石細工　硝子　陶磁器　目録」（ウィーン万国博覧会出品目録）および『澳國博覧会賞状及賞牌頒與表』・『米國博覧会報告書　日本出品目録　第二』については、『明治期万国博覧会美術品出品目録』東京国立文化財研究所編　中央公論美術出版　平成９年　より。
注(2)　前田泰次校注『増訂　工芸志料』　東洋文庫254　平凡社　昭和49年　より。
注(3)　片山滴園編纂　『淡路之誇』上巻　實業之淡路社　昭和４年　より。
注(4)　『洲本市史』　洲本市史編さん委員会　昭和49年　より。
注(5)　高梨健吉訳『日本事物誌（第６版所収）』　東洋文庫131・147　平凡社　昭和44年　より。
注(6)　『日本窯業史総説』第五巻（『日本近世窯業史』復刻版）　柏書房　平成３年　より。

報告書抄録

よみがな	みんぺいやきかまあと
書　　名	珉平焼窯跡
副書名	広域営農団地農道整備事業南淡路地区に伴う発掘調査報告書
巻　　次	Ⅰ
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第284冊
編著者名	仁尾一人・森内秀造・岡田章一・深井明比古 池田　健（ダントー株式会社）・北野信彦（くらしき作陽大学）
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒652－0032　神戸市兵庫区荒田町2－1－5　TEL　078－531－7011
発行年月日	西暦2005（平成17）年3月18日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
珉平焼窯跡	南あわじ市 北阿万 伊賀野	2895156	2002201 2003053	34度 14分 14秒	134度 45分 1秒	確認調査 021205～ 021210 本発掘調査 030516～ 030815	111㎡ 756㎡	広域営農団地農道整備事業南淡路地区

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
珉平焼窯跡	窯跡	江戸時代後期 明治時代 大正時代	コウカシ窯 作業場跡 物原	珉平焼創業時（江戸時代後期）の陶磁器類 明治～大正時代の土型・陶磁器類・タイル・窯道具	日本で唯一現存するコウカシ窯の調査 近代の輸出生産時の窯業遺跡（作業場跡・物原）の調査